

戸^と神^{がみ}諏^す訪^わ遺^い跡^{せき}

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第30集—

《奈良・平安時代編》

1990

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

寄贈

群馬県教育委員会

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第98集

関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第30集 戸神諏訪遺跡

正誤表

【奈良・平安時代編】

	誤	正
20頁 本文 7行目	須恵器坏と土師器坏	須恵器坏(No. 2、4、6)
146頁 本文 11行目	漆	油煙
273頁 図3	 <p>図3 新井集</p>	 <p>図3 新井集</p>
277頁 図7 右下	同一文字	同一文字?
写真図版151・152		トーン部は周辺の水田面

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-320
	調査事業団保管	
98-	平成10年5月13日	2(9)
NO.5002		

戸^と神^{がみ}諏^す訪^わ遺^い跡^{せき}

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第30集—

《奈良・平安時代編》

1990

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

目 次

第3章 検出遺構・遺物

第4節 奈良・平安時代

第1項 竪穴住居跡	1
第2項 掘立柱建物跡	203
第3項 寺院跡	224
第4項 井戸跡	229
第5項 土坑・溝	234
第6項 遺構外出土遺物	238

第4章 調査成果

第1節 遺構

第1項 縄文時代の陥し穴について	241
第2項 平安時代の遺構	243

第2節 遺物

第1項 弥生時代後期～古墳時代前期の土器について	245
第2項 奈良・平安時代の土器	259
第3項 戸神諏訪遺跡出土の文字資料について	272
第4項 鉄製遺物	288
第5項 砥石	295
第6項 陶・磁器	303

第3節 化学分析

第1項 平安時代の出土土器胎土分析	304
第2項 出土土器の黒色・赤色付着物について	321

第4節 まとめ	327
---------	-----

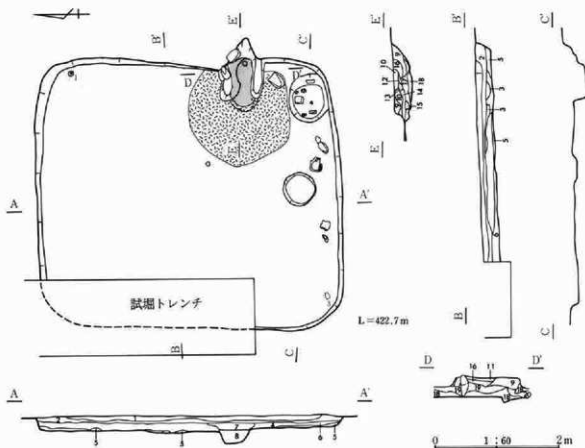
付図 戸神諏訪遺跡全体図

第4節 奈良・平安時代

第1項 竪穴住居跡

1号住居跡 (写真図版1~2頁、102頁)

位置 5B-16グリッド 方位 N-89.0°-W 形状 493×422cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁は直線的に巡る。北西コーナー部、及び西壁3分の2を試掘トレンチにて削られる。壁高は耕作による擾乱のため24cmを残すのみである。床面 地山を叩き地床とするが、遺存状態も悪く硬度は弱い。壁溝はなく、壁は床よりやや湾曲し立ち上がる。柱穴 北壁側に2穴確認され、径69~71cm、深度10~49cmを測る。この2穴の柱穴に対応する柱穴は検出されていない。貯蔵穴 住居南東コーナー部にある土坑が



- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1 明黒褐色土 強粘性、F P少量、所々にローム粒、焼土粒。 | 11 黄褐色土 10に類似。10よりロームブロック少量。 |
| 2 黒褐色土 強粘性、F P少量、所々にローム粒、焼土粒。 | 12 黄色土 ロームブロック層。 |
| 3 明黒褐色土 弱粘性、F P少量、所々にローム帯状、粘床面。 | 13 赤褐色土 10に類似。焼土粒・焼土ブロック。 |
| 4 明黒褐色土 強粘性、F P少量、所々にローム粒、焼土粒。 | 14 黒褐色土 強粘性、9に類似。炭化物少量、焼土粒子少量。 |
| 5 明黄褐色土 弱粘性、ローム粒多量、細粒子。 | 15 黒褐色土 14に類似。炭化物少量。 |
| 6 暗褐色土 強粘性、細粒子、所々にローム粒。 | 16 黄褐色土 ロームブロック・焼土ブロック多量、炭化物少量。 |
| 7 暗褐色土 弱粘性、F P少量、所々にローム粒、焼土粒。 | 17 暗褐色土 弱粘性、焼土粒・炭化物少量。 |
| 8 暗褐色土 強粘性、F P・焼土粒少量、ローム粒多量、カマド | 18 濁黄褐色土 強粘性、ローム+暗褐色土の混土、所々に焼土。 |
| 9 黒褐色土 F P・ローム粒子少量、焼土粒子。 | 19 明黒褐色土 焼土粒・焼土ブロック、所々にローム粒。 |
| 10 黄褐色土 9の土に多量のロームブロック、焼土粒子。 | 20 暗褐色土 弱粘性、所々にローム粒。 |

貯蔵穴と考えられ、径77cm、深度14cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は悪いが円礫を主とする自然石の石組みに粘土貼りを施す。燃烧部は壁のラインより内側にあり、煙道部は短い。掘り方 地床のため貼り床はないが、土坑が6基検出され、径42～108cm、深度46.5～21cmを測る。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居南東コーナー部、及び貯蔵穴付近に集中し、出土する。



遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須形器 皿	5.0cm	9.0・2.2・5.6 完形	白～灰色細・粗砂粒・細礫 酸化 によい黄褐色	体部はほぼ直線的に開く。底部は左回転 糸切り未調整。	
2	須形器 環	カマド埋土	9.6・2.2・5.0 小片	白色細・粗細粒、赤褐色円粗 砂粒 酸化 明赤褐色	体部は丸みをもって開き、口唇部が外反 する。	
③	須形器 椀	床直	一・一・8.8 小片	白色細・粗砂粒・小礫・中礫、 赤褐色粗砂粒 酸化 褐色	高台は高く、端部は丸みをもち、外反す る。底部は回転無で。	胎土分析

2号住居跡 (写真図版2頁)

位置 8B-16グリッド 方位 N-75.0°W 形状 594×544cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は38cmを測る。下記の重複遺構のため、東壁はカマドを除き明瞭に検出し得なかった。床面 床は地床であるが重複部のみ硬度がやや弱く平坦で壁溝はない。柱穴 床面にピットは2穴検出されたが、柱穴とは断定できず、柱穴をもたない可能性が高い。貯蔵穴 住居南西コーナー付近に設けられ、径88cm、深度21cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、円礫を主とする自然石の石組みに粘土を貼る。燃烧部は壁のラインより内側に位置し、煙道部も短く急峻な立ち上がりを見せ、壁外に突出しない。しかし、前述のようにカマドを持つ東壁が湾曲し張り出しており、床面積は確保されている。掘り方 掘り方はない。重複 33号住居(弥生時代)と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居全体に散乱し、出土する。出土遺物中、床面直上よりの出土は見られない。特筆される出土遺物として、墨書土器2点(文字判読不可)がある。

1 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々にローム粒。

2 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々にローム粒。

3 暗黒褐色土 強粘性、細粒子。

カマド

4 暗褐色土 強粘性、FP少量、ローム粒、焼土粒少量。

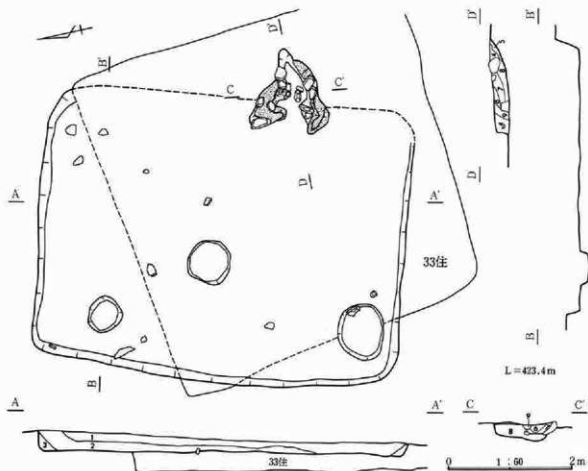
5 明黒褐色土 強粘性、FP少量、細粒子、所々に焼土粒。

6 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々に濁乳白色粘土粒多量。

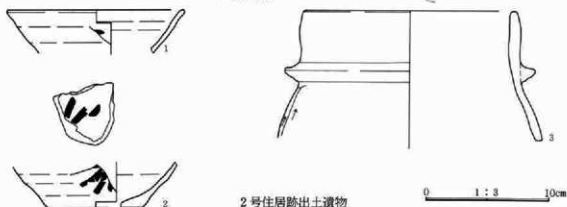
7 暗褐色土 強粘性、濁乳白色粘土多量、所々に焼土粒多量。

8 暗褐色土 強粘性、FP少量、焼土ブロック、所々に焼土粒。

9 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々にローム粒多量。



2号住居跡

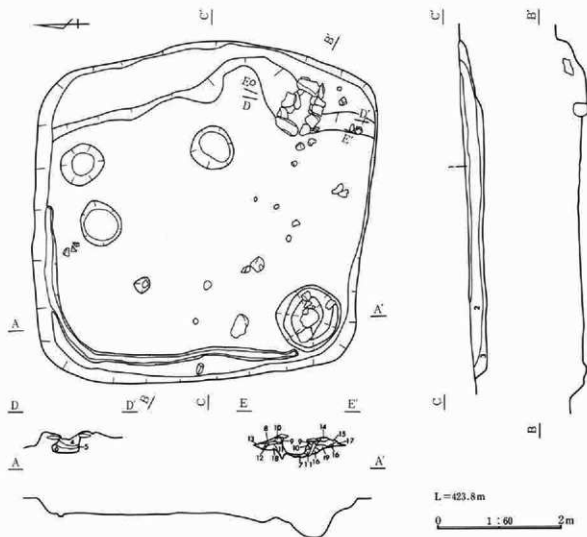


2号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口徑・器高・底徑	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 坏	埋土	14.2・-・- 口縁部小片	白色細・粗砂粒 還元（酸化 気味） により黄褐色	ロクロ整形。体部に墨書が僅かにみられる。	墨書
2	須恵器 坏	埋土	-・-・- 7.4 底部へ体部小片	僅かな長石粗砂粒、白色岩片 還元（酸化気味）	底部は回転未切り未調整。体部内外面に 墨書有り。淡黄色。	墨書
3	須恵器 羽釜	掘り方 埋土	17.0・-・- 小片	白色細・粗砂粒・細礫・中礫、 石英粗砂粒・細礫 還元 灰白色	胴部から肩の貼付部分に向って窄まり、 口縁部は外側に丸みをもって直立する。 胴部は上方への寛がり。	

3号住居跡 (写真図版3頁)

位置 10B-15グリッド 方位 N-87.7°W 形状 550×536cmを測る隅丸方形のプランを呈し、東壁側には床面より約15cm程の高さに地山を掘り残したテラス状の段を有する。他の部分の壁高は30cmを測る。床面 地山を叩き地床とし、平坦である。壁溝は西壁と北壁西側に検出され、幅11cm、深度5cmを測り、西壁側は壁からやや離れ蛇行する。柱穴 中央やや北西寄りの1穴が柱穴と考えられ、径24cm、深度50cmを測る。貯蔵穴 南西コーナー部に設けられ、径104cm、深度43cmを測り、断面形状は段を有する掘り鉢状を呈する。カマド 東壁の中央南寄りのコーナー部近くに設けられ、前述のテラス状部分を掘り込んで構築する。袖部はテラス状部分のカマド間脇をえぐることで造り出し、そこへ礫を組み粘土を貼る。



- | | |
|-------------------------------|----------------------------|
| 1 浅間B輝石、純層。 | 10 焼土 所々に褐色土混じる。 |
| 2 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々にローム粒、焼土粒。 | 11 明褐色土 弱粘性、焼土粒、ローム粒少量。 |
| 3 暗黒褐色土 強粘性、FP少量、所々にローム粒。 | 12 褐色土 強粘性、所々に黄乳灰色粘質土ブロック。 |
| カマド | 13 褐色土 ロームブロック少量、ローム粒。 |
| 4 暗褐色土 乳白色の粘土、焼土粒子少量。 | 14 明黒褐色土 弱粘性、ローム粒少量。 |
| 5 暗褐色土 4に多量の焼土ブロック。 | 15 暗褐色土 弱粘性、焼土粒少量、所々にローム粒。 |
| 6 暗褐色土 5に類似。ロームブロック・炭化物。 | 16 褐色土 弱粘性、ローム粒少量。 |
| 7 暗褐色土 弱粘性、所々に焼土粒・炭化物、ローム粒少量。 | 17 暗褐色土 弱粘性、ローム粒少量、焼土粒少量。 |
| 8 褐色土 弱粘性、焼土粒、ローム粒少量。 | 18 黄褐色土 弱粘性、ローム粒少量。 |
| 9 明褐色土 弱粘性、焼土粒、炭化物少量。 | 19 暗褐色土 ローム、所々に焼土粒。 |

遺存状態は良好で、天井部の礫の一部が残り、カマド手前に残る礫も天井部の落石と考えられる。カマドの粘土の残り具合から察して、粘土は礫の固定のみに止まり、使用時には礫が露出していた可能性が高い。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、床面より10cm程低い。煙道部は短く、壁の手前で立ち上がる。掘り方 カマド袖部に袖石の設置用ピットが、その手前には深度35cmのピットが検出された。

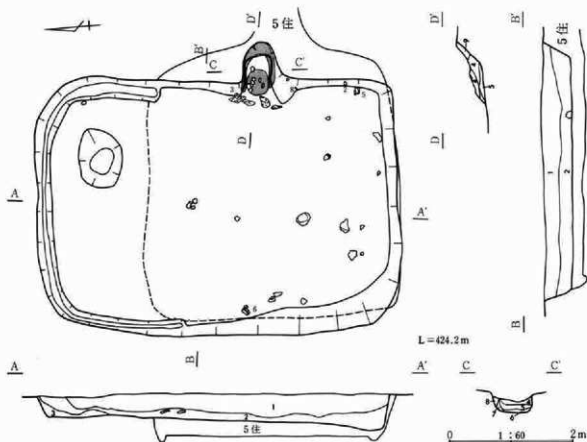
重複 重複する遺構はない。 埋土 住居埋没の最終段階を極めて純層に近い浅間B軽石で覆われている。 遺物 出土する遺物の量は極めて少なく、住居中央部からカマド前面にかけて、散乱し出土する。



番号	量目 (cm)	胎土・構成・色調	器形・整形の特徴
1	口徑・器高・底径	少量の白～灰色の細・粗砂粒 酸化 におい微色 埋土	体部は丸みをもつ。高台は細く、端部は丸みをもつ。底部内面は一方方向の寛削磨、体部は横方向の窪削磨。

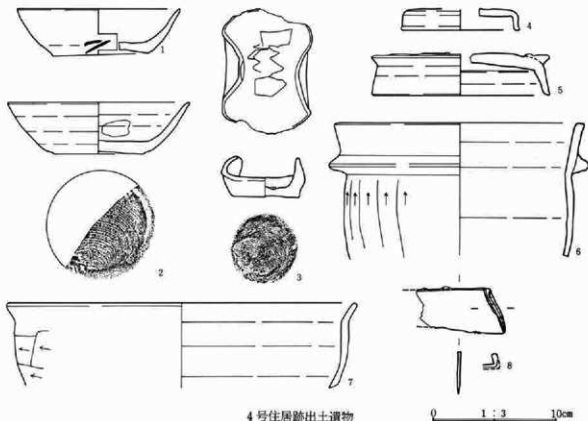
4号住居跡 (写真図版4～5頁、102頁)

位置 15B-16グリッド 方位 N-87.5°-W 形状 550×536cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は35cmを測る。 床面 床は地床であるが、南壁2/3は重複のため明瞭ではなく、壁溝も北側1/3では、



- 1 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々にローム粒。
- 2 暗褐色土 弱粘性、FP少量、一部濁乳白色粘土、所々にローム粒。
- 3 明褐色土 強粘性、FP少量、所々にローム粒多量。
- カマド
- 4 暗褐色土 少量の粘土ブロック、FP。
- 5 黄白色土 粘性強、黄味がかった乳白色の粘土ブロック層。
- 6 黄白色土 粘性強、5に類似。粘土の焼土化が多量。
- 7 褐色土 5に類似。粘土ブロックの層。
- 8 黄白色土 黄味がかった乳白色の粘土層 (かまど壁)。
- 9 暗褐色土 黄色ローム粒子多量。

幅18cm、深度16cmを測る溝を検出するが、両側では検出されていない。 柱穴 検出されていない。
 貯蔵穴 住居北東コーナー部付近に検出され、径98×70cm、深度20cmを測る。 カマド 東壁中央やや南寄りに設けられ、礫を使わず粘土のみで構築する。この粘土は、本遺跡のローム層下の粘土を利用しての
 とみられ、採取は容易であったと判断される。燃焼部は壁外にあるが、煙道は短く、燃焼部から120cm程の所
 で立ち上がる。 掘り方 なし。 重複 5号住居（平安時代）と重複し、埋土断面、及びカマドが遺
 存することから、新旧関係は本遺構の方が新しいと判断される。 遺物 出土する遺物の量は比較的少な
 く、その大半が破片である。遺物は住居中央部南壁際、及びカマド内部等に散乱し、出土する。出土遺物中、
 耳皿（No.3）は床面直上よりの出土であり、内面底部に細いへら書きで焼成前に文様らしきものを刻む。ま
 た、出土遺物中、坏（No.1、2）・蓋（No.4、5）は重複遺構に伴う遺物である可能性が高い。



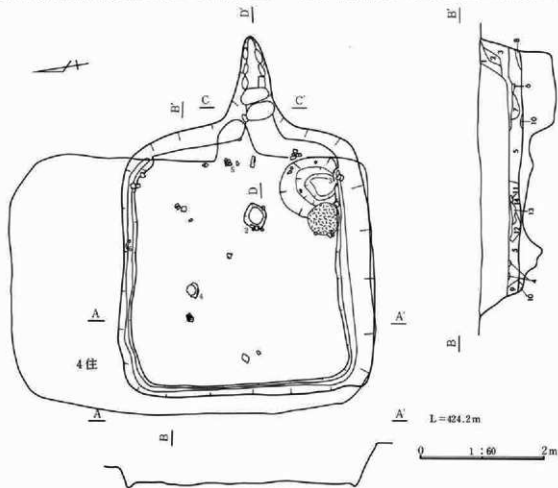
4号住居跡出土遺物

遺物 番号	類別 器種	出土位置	量目 (cm)		胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径・高さ・底径	口縁部			
①	須恵器 坏	埋土	13.0・3.8・7.6	底部~口縁部1/3	白色細・粗砂粒 還元 灰白色	底部は回転糸切り未調整。外面体部に墨書と底部に焼成前の刻書あり。	産書
②	須恵器 坏	20.5cm	14.4・4.1・7.0	1/3	白~灰色細・粗砂粒、少量の 黒色細粒 還元 灰白色	体部は丸みをもって開き、器内は口唇部 に向って薄くなる。底部は左回転糸切り 未調整	
③	須恵器 耳皿	床直	9.8・3.2・5.2	完形	白~灰色細・粗砂粒・細礫 還元（酸化気味）灰白色	底部は左回転糸切り未調整。底部内面に 意味不明の線刻あり（焼成後）。	線刻面
4	須恵器 蓋	埋土	9.4・ - - -	1/3	白色細・粗砂粒 還元 灰色	天井部は平坦。口縁部は屈曲部は丸く、 垂直に折れ、口唇部が外側に広がって平ら 面をもつ。	
⑤	須恵器 蓋	3.0cm	14.2・ - - -	1/2	白色細・粗砂粒 還元 褐色	天井部は回転糸切り。	

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
6	須恵器 羽蓋	15.5cm	20.0・ 小片	白色粗砂粒・細礫 還元(酸化気味)に 黄褐色	胴部は僅かに丸みをもち、口縁部は外傾する。口唇部は平直面をもち僅かに外反する。	
7	土師器 鉢	埋土	28.0・ 小片	白～灰色の細・粗砂粒・細礫、 赤褐色粗砂粒 普通	口縁部は短く開く。体部外面積方向の区別あり。褐色	
⑧	鉄製品 釧	34.0cm			耳部側を残し、刃先側を欠失する。身巾のある大型釧片。釧は全体に板目状に錆化が進んでいるが、錆れが少なく精緻造を思わせる。残存長6.7+cm、重量26.4g。	

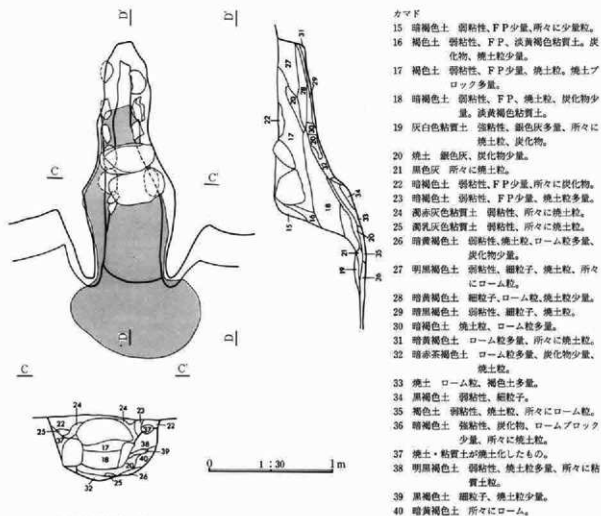
5号住居跡 (写真図版4～5頁、102頁)

位置 15B-16グリッド 方位 N-88.0°-W 形状 430×410cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は67cmを測る。床面 床はローム混じり暗褐色土を叩き、貼り床とする。壁溝は、カマドを持つ東壁を除き、幅11cm、深度14cmの溝がコの字状に巡る。柱穴 住居中央やや東寄りに径37cm、深度20cmの

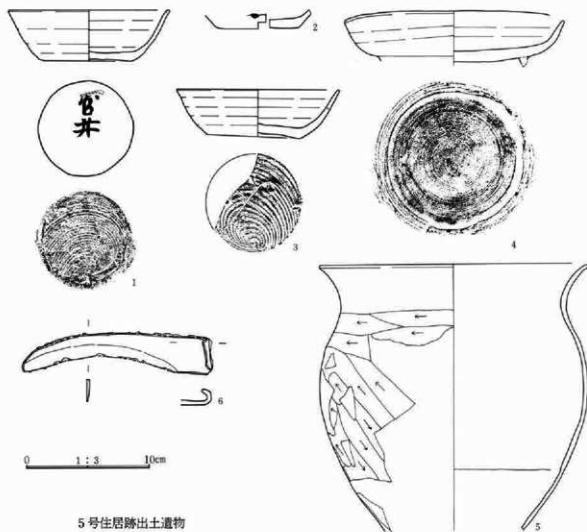


- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1 濁乳白色粘土。 | 8 暗黄褐色土 弱粘性、ローム粒、焼土粒少量。 |
| 2 暗褐色土 弱粘性、F P、焼土粒少量。 | 9 暗褐色土 弱粘性、ローム粒少量。 |
| 3 暗褐色土 弱粘性、F P少量、所々に焼土粒少量。 | 10 ローム |
| 4 暗黄褐色土 強粘性、ローム粒、帯状に多量のロームブロック。 | 11 濁乳灰色粘土。 |
| 5 暗褐色土 弱粘性、F P少量、ローム粒、焼土粒。 | 12 明黄褐色土 弱粘性、F P少量、黒灰色灰、焼土粒少量。 |
| 6 黒灰色土 灰結層、下面焼土粒、F P少量。 | 13 暗黄褐色土 強粘性、F P・ローム粒少量。 |
| 7 暗褐色土 弱粘性、焼土粒、黒灰色土少量。 | 14 暗褐色土。 |

ビットが1穴検出されたが、規模より主柱穴とは考えられず、掘り方調査において住居中央付近に径55cm、深度46cmを測るビットと、住居北西コーナー付近に径30cm、深度35cmを測るビットの2穴が検出され、位置的にはやや不適合ではあるが、この2穴がその規模より主柱穴になると考えられる。貯蔵穴 床面の調査では確認することができず、掘り方調査の結果、後述の10基の床下土坑が検出され、うち南東コーナー部に検出された1基が貯蔵穴と考えられる。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、遺存状態は極めて良好であった。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部の両側には、礫を並べ、それを基礎に大形の礫を橋状に架け天井部とする。煙道部両側の礫は、隙間に粘土を詰め固定されているが、その表面は焼けており、使用時より露出していたものと察する。掘り方 住居中央部、及びカマド前面を残し「コの字状」に掘りくぼめ、北東、及び南西コーナー部と中央部に径約90~170cmの大型の円形土坑が3基、他に小型のものを含め10基検出された。また、住居西壁付近には明らかに掘削工具の痕跡と思われる跡が検出され、痕跡より使用工具を推定すると、幅18cm程で、先端の丸い鎌状の工具であろうと思われる。重複 4号住居跡(平安時代)と重複し、新旧関係は、埋土断面より本遺構の方が古いと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居全体に散乱し、出土する。出土遺物中、坏(No.3)・皿(No.4)・鉄鎌(No.6)は床面直上付近よりの出土である。特筆すべき出土遺物として、「官井」?の墨書土器と墨書土器片がある。



5号住居跡カマド

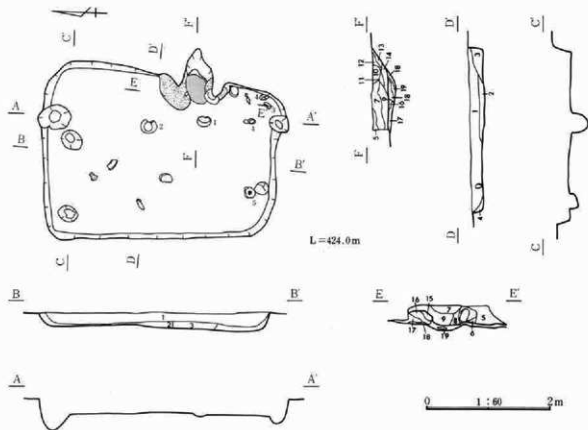


5号住居跡出土遺物

遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径・器高・底径 口径部1/3穴径			
①	須恵器 環	床直	12.6・4.0・6.6 口径部1/3穴径	白色細・粗砂粒 還元 外一灰色、内一灰白色	底部内面は螺旋状に凹凸をもつ。底部は左回転未切り未調整。底部外面に「官井」の墨書	墨書
2	須恵器 環	2.0cm	—・—・6.4 底部小片	僅かな白色細砂粒 還元 (酸化気味) 黒色・黄褐色	底部は回転未切り未調整。体部外面に僅かに墨痕がみられる。	墨書
③	須恵器 環	床直	13.0・3.8・7.5 底部→口径部2/3	少量の白色細・粗砂粒 還元 灰色	底部は右回転未切り未調整。底部外面に「十」か「×」の焼成前刻書あり。	へう記号
④	須恵器 高台付 皿	2.0cm	17.5・4.4・11.3 口径部・高台の大半を欠く。	少量の白色細砂粒 還元 灰色	体部は緩やかに丸みをもち、口径部に向かって器肉を減じ、開く。高台は底径の内側に貼付され、貼付部分には二条の沈線が巡る。底部は回転調整あり。	
⑤	土師器 葉	4.0cm	21.4・—・— 胴部下位→口径部1/4	白～灰色の細・粗砂粒普通 外一にぶい褐色 内一褐色	胴部は上位に丸みをもち、胴部は緩やかに折れて外反する。口径部内外面横無で、胴部上位横方向寬削り、中位斜め上方寬削り、下位下方向への寬削り。	
⑥	鉄製品 鏝	15.0cm	当遺跡より出土した鏝8点中、唯一の完存品である。先から元の耳まで良く保存し、旧態を止どめる。表側(図平面)に研出した浅い溝があり、耳から研出し位置まで3.5cm(柄径か)を開る。鉄鏝様の刺鏝。重37.7g			

6号住居跡 (写真図版6頁、102~103頁)

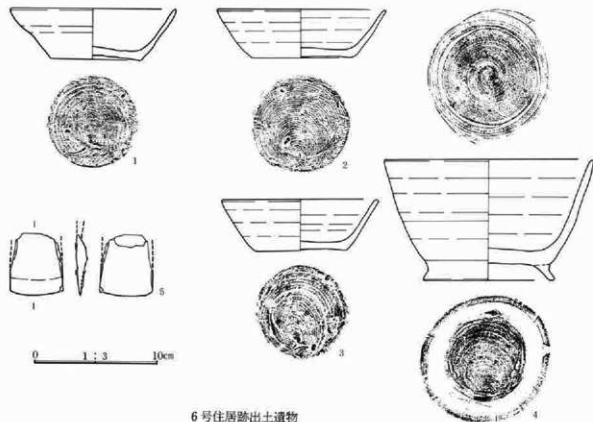
位置 16B-19グリッド 方位 N-86.5°-W 形状 388×284cmを測る隅丸形状を呈し、壁高は31.5cmを測り、壁は直線的に巡るが、南壁に比べ北壁がやや長い。床面 ローム混じりの暗褐色土を叩いて張り床とし、若干凹凸がある。壁溝は検出されていない。柱穴 壁に接して設けられた壁柱穴が北壁の東コーナー付近と南壁の東コーナー付近に2穴のみ検出され、径28~35cm、深度25~54cmを測る。他に小ピットが2穴検出されるが、主柱穴とは考えられない。貯蔵穴 検出されていない。カマド 東壁中央やや南寄りに設けられ、竈を使わず粘土のみで構築されている。焼部は壁のライン上よりやや内側に位置し、袖部はやや張り出す。煙道部は短く、急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部に径85cm、深度90cmを測る円形の土坑を1基検出する。この土坑の底面付近の地山土は、濁白色の粘質土であり、この土とカマドに使用されている粘土とが類似していることから、粘土採取はここより行われたものと考えられる。この土坑以外の部分は各所に小さな凹凸をもち、カマド手前にピットが1穴検出される。重複 重複す



- 1 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々にローム粒。
- 2 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々に多量のローム粒。
- 3 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々に濁乳白色粘土ブロック。
- 4 暗黒褐色土 弱粘性、FP少量、ローム粒多量。
- カマド
- 5 暗褐色土 FP多量、ローム粒子少量。
- 6 暗褐色土 5に類似。FP・焼土粒子少量。
- 7 黄褐色土 FP・ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子。
- 8 黄褐色土 7に類似。FP・焼土ブロック少量。
- 9 黒褐色土 ローム層移層に黒色土が多く混入。

- 10 黄褐色土 7に類似。7より混入物が多い。
- 11 黄褐色土 7に類似。焼土ブロック量が多い。
- 12 黒褐色土 9に類似。9よりFP多量。
- 13 黒褐色土 ローム層移層に黒色土が多量。
- 14 暗褐色土 12+13。
- 15 灰白色土 強粘性、灰白色の粘土層。FP小粒子少量。
- 16 灰白色土 15に類似。焼土粒子少量。
- 17 灰白色土 15+18の混土。
- 18 黄白土 ロームブロック、灰、炭化物多量。
- 19 焼土。

る遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居中央部、及び、貯蔵穴付近に散乱し出土する。出土遺物中、坏（No 2）は住居中央やや東寄りの床面直上、及び、坏（No 3）は南東コーナー付近の床面直上付近よりの出土である。特筆すべき出土遺物として、坏（No 1）の外周底部に「×」のヘラ記号と鉄弁（No 5）の出土があり、鉄弁は、その出土状態は床面よりやや離れるもの、南西コーナー付近の円礫上に置いた様な状態で出土している。



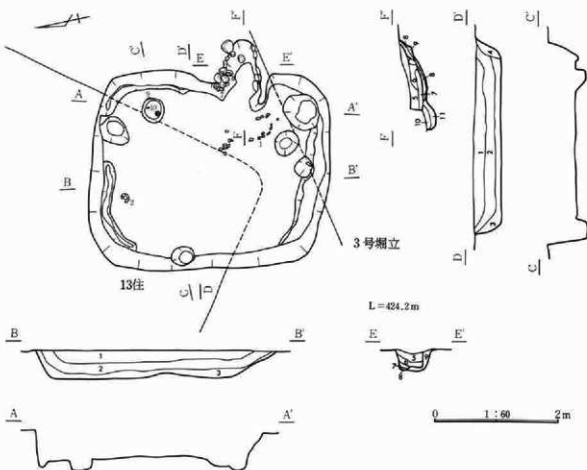
6号住居跡出土遺物

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・彫形の特徴	備考
①	須恵器 坏	20.0cm	13.0・4.0・6.8 口径部1/3欠損	灰色細砂粒 還元、堅緻 灰白色	体部は直線的に開くが挽きひずみがある。比較的薄手。底部右回転糸切り、「×」の刻書	ヘラ記号
②	須恵器 坏	床直	13.6・3.8・8.0 口径部一部欠損	白色細砂粒、灰色円細礫 還元 灰白色	体部は直線的に開く。底部は右回転糸切り未調整。	
③	須恵器 坏	5.5cm	12.8・4.0・7.2 口径部一部欠損	少量の白色細砂粒・細礫 還元 灰白色	体部は直線的に開く。底部は右回転糸切り未調整。	
④	須恵器 碗	7.5cm 10cm	16.7・9.6・10.5 1/3	少量の灰色円細礫 還元 灰白色	体部は僅かにふくらみをもって開く。高台は外反する。体部下半は右回転糸切り、底部は右回転糸切り、高台貼付時に周辺部回転施で。	
⑤	鉄製品 手弁	2.0cm			上半の袋部を欠損し下半部のみを止どめる。表面側（図左）に研出しの稜部を残し、片刃となるので手弁と考えられる。裏面には袋部末端が僅かに残っており、一般的な袋型体と思わせる。錆化は全体に顕著で層状剥離のため鉄鉄を思わせる。重量64.9g。	

7号住居跡 (写真図版7頁、103頁)

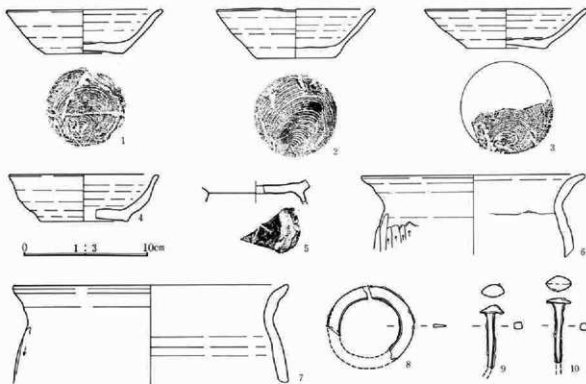
位置 19B-17グリッド 方位 N-76.5°-W 形状 366×313cmを測る隅丸方形を呈し、壁高は43.5cmを測る。床面 全体の5/6程をローム混りの暗褐色土を叩き、貼り床とする。壁溝は、カマド前面と壁柱穴部を残し幅18cm、深度22cmの溝が巡る。柱穴 北壁、及び南壁の中央やや東寄りに2穴、西壁の中央やや北寄りに1穴、計3穴の壁柱穴が検出され、径30~50cm、深度15~25cmを測る。

貯蔵穴 南東コーナー付近に設けられ、径60cm、深度12cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、礫を使った石組みのカマドである。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、煙道部は短く急峻に立ち上がる。掘り方 大形の土坑が3基検出され、径93~120cm、深度24~35cmを測る。重複 13号住居跡(弥生時代)、3号掘立柱建物跡と重複する。3号掘立柱跡との新旧関係は不明である。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居北壁際、及び北東コーナー部付近のビット内等に散乱し、出土する。出土遺物中、坏(No2)は床面直上付近よりの出土である。特筆すべき出土遺物として、リング状鉄製品(No8)と鉄釘(No9、10)がある。



- 1 暗褐色土 強粘性、FP少量、所々にローム粒。
 - 2 暗褐色土 弱粘性、FP少量、ローム粒、スコリア少量。
 - 3 暗褐色土 強粘性、FP少量、橙色スコリア多量。
 - 4 暗黄褐色土 弱粘性、FP、ローム粒。
- カマド
- 5 暗褐色土 FP、ローム粒子、ロームブロック少量。

- 6 褐色土 5と7。
- 7 黄白色土 黄味がかった乳白粘土ブロック、ロームブロック、焼土粒子・焼土ブロック多量。
- 8 明黒褐色土 弱粘性、ローム粒、焼土粒少量。
- 9 暗褐色土
- 10 暗褐色土 強粘性、ローム粒、焼土粒多量、黄白色粘土ブロック。
- 11 明黒褐色土 弱粘性、ローム粒。

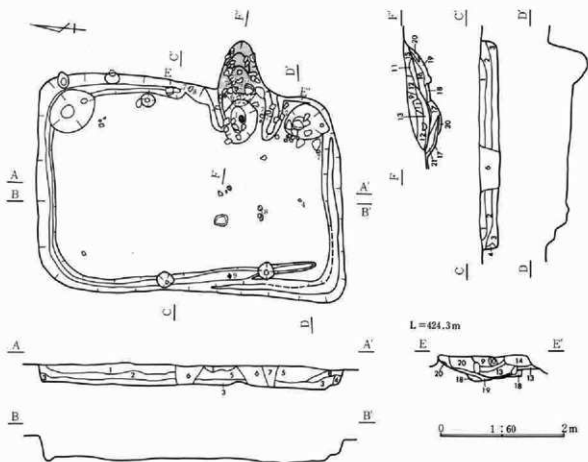


7号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	6.0cm	12.5・3.5・6.0 3/4	少量の白〜灰色粗砂粒 還元、やや軟質 灰白色	体部は直線的に開くが、体部中位が若干ふくらみ器内が厚い。内面底部は同心円状に凹凸がある。底部は左回転糸切り未調整。	
②	須恵器 坏	床直	12.8・4.0・6.4 口縁部一部欠損	白色細砂粒、微量の石英の粗砂粒 還元（酸化気味） にぶい褐色	体部は直線的に開くが、中位の器内が肥厚し外側にふくらむ。内面底部は同心円状の凹凸がみられる。底部は左回転糸切り未調整。	
③	須恵器 坏	埋土	13.0・3.1・6.4 1/4	白色細砂粒 還元（酸化気味） 外一にぶい褐色 内一灰色	体部は直線的だが、中位の器内が肥厚し、外側にふくらみをもつ。底部は左回転糸切り未調整。	
④	須恵器 坏	埋土	12.0・3.7・7.0 1/4	白色粗・粗砂粒 還元、やや軟質 灰色	体部は中位が狭って、下位は底部に向かって窄まる。口縁部は器内が薄くなる。	
5	須恵器 椀	埋土	- - - - 小片	少量の白色細砂粒 還元 灰黄褐色	底部は回転糸切り、周辺部は高台粘付時の撫で。底部外面に焼成前の刻字あり。「十」?	へう記号
6	須恵器 壺	掘り方	18.0・ - - - 小片	白色・石英細砂粒 還元（酸化気味） 灰褐色	口縁部から頸部はクロコ壺形、胴部上位は上方向への見張で、撫での端部に粘土が寄って盛り上げている。	
7	須恵器 壺	- 4cm	22.0・ - - - 小片	白色細砂粒、石英細・粗砂粒 酸化 褐色	口縁部から頸部はクロコ壺形、胴部内面は横撫で。外面は下方向への見張り。	
⑧	輪状鉄 製品	埋土	全体の2/3をとどめ、欠損は調査時。輪状の外周側は刃部のように鋭利となる。錆化は錆ぶくれが僅かにある。剥落があるため製造、推定直径6.8cm、重量8.0g。			
⑨	鉄釘	- 7cm	10と同様で鉄釘。釘部は断面方形である。残存長4.3cm、重7.6g。釘部は径目割れ少なく精緻造。			
⑩	鉄釘	3.5cm	頭部を楕円状にし、鉋釘である。釘部は断面方形を呈す。残存長5.1cm、重6.8g。釘部は径目割れ少で精緻造。			

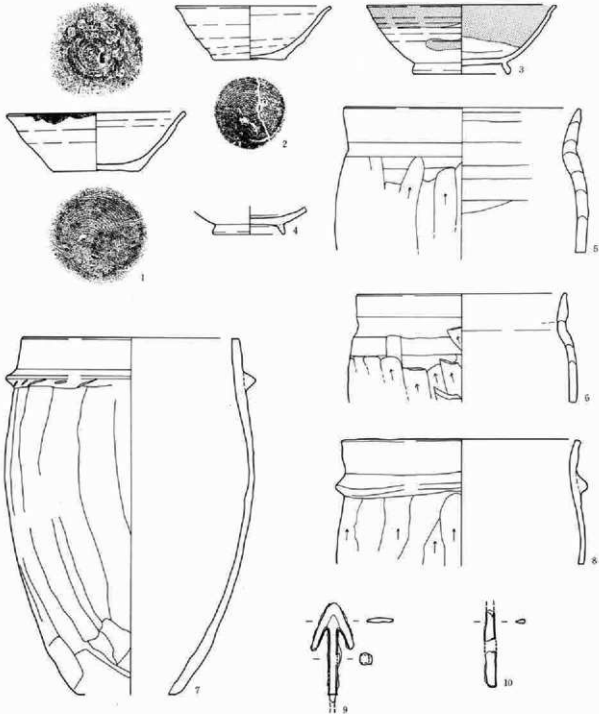
8号住居跡 (写真図版8頁、103頁)

位置 21B-17グリッド 方位 N-81.0°-W 形状 484×329cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は41.5cmを測る。壁は直線的に巡り、東壁に比べて西壁がやや長い。床面 ローム地床を基として一部を貼り床とする。床面はほぼ平坦。壁溝は幅15cm、深度25cmを測り、カマド前面を除きほぼ全周するが、西壁の南側から南西コーナーにかけての部分のみ分岐し、壁からやや離れるもう1条の壁溝を検出する。柱穴 東壁のカマド北側に1穴、西壁に2穴、計3穴の壁柱穴を検出し、径20~28cm、深度14~47cmを測る。柱穴は全体にやや南寄りに位置し、カマドを基準としているものと考えられる。貯蔵穴 南東コーナー部に設けられ、径56cm、深度27cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、燃焼部はほぼ壁のライン上に位置し、両袖部、及び煙道部同様に礫を配置する。礫は深く埋め込まれ、礫の表面は赤く焼けており、使用時より露出していた可能性が高い。カマド前面に粘土ブロックを検出し、カマド天



- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1 暗褐色土 弱粘性、FP、ローム粒少量。 | 11 暗褐色土 9に類似、FP少量、粘土ブロック多量。 |
| 2 暗褐色土 弱粘性、FP、ローム粒、薄乳白色粘土ブロック。 | 12 暗褐色土 11に類似、粘土ブロック、焼土粒子多量。焼土ブロック。 |
| 3 暗褐色土 強粘性、FP少量、所々に茂岡山B軽石。 | 13 暗褐色土 9に類似、FP、粘土ブロック少量。 |
| 4 暗黄褐色土 面粘性。壁が崩れたもの。 | 14 暗褐色土 FP少量、ロームブロック、ローム断移層の混ざり。 |
| 5 暗褐色土 強粘性、FP少量、焼土粒及びブロック、所々に薄乳白色粘土ブロック | 15 暗褐色土 9に類似、粘土粒子。色調明るい。 |
| 6 暗褐色土 現代の畑の耕作土、FP。 | 16 褐色土 FP、焼土粒子少量、灰、炭化物多量。 |
| 7 明黒褐色土 現代のもの。 | 17 暗褐色土 細粒の暗褐色土に焼土粒。 |
| 8 明黒褐色土 面粘性、FP少量、所々にローム粒。 | 18 黄褐色土 弱粘性、ローム層に灰色の粘土の混土。上部焼土化。 |
| カマド | 19 褐色土 16に類似。 |
| 9 暗褐色土 FP、黄色味があった乳白色の粘土ブロック。 | 20 灰白色土 粘土ブロック層。強粘性。 |
| 10 黄色味があった乳白色の粘土ブロック。 | 21 明褐色土 17に多量のロームブロック、灰、焼土粒子。 |

井部の崩落と考えられる。掘り方 住居中央付近を残し、各壁寄りの部分を掘りくぼめる。土坑としてはカマド前面に径24~138cm、深度24~25cmを測る土坑を2基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、大半が貯蔵穴付近・カマド内部・カマド前面等に集中し出土する。このうち、カマド内部より出土する羽釜破片等は、カマド構築材の一部として使用されていた可能性がある。出土遺物中、坏(No.2)は床面直上よりの出土である。特筆すべき出土遺物として、西壁際より鉄鏃(No.9)の出土がある。



8号住居跡出土遺物

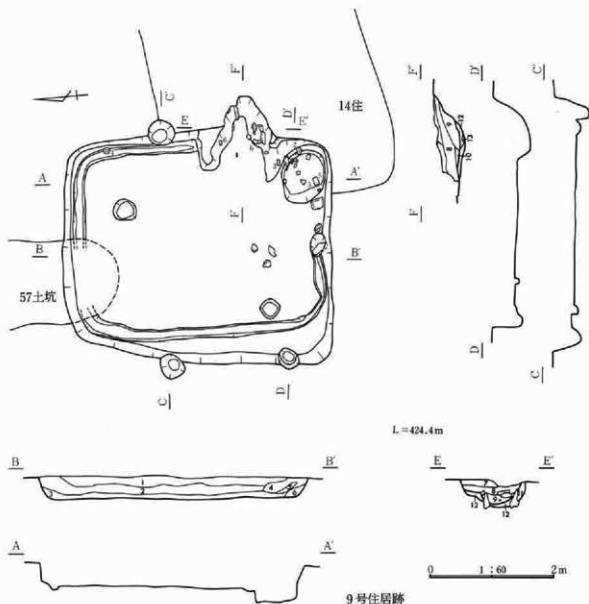
0 1 : 3 10cm

遺物番号	種類	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	カマド火床 面より4.5 cm	14.3・4.6・6.9 3/4	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 淡黄褐色	体部立ち上がり部分が丸みをもち、口縁部 が若干外反する。内面底部は螺線状の調 整痕、底部は右回転糸切り未調整。	
②	須恵器 坏	カマド 火床面直上	12.5・4.4・5.8 3/4	多量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	体部はクロロ目があるが、ほぼ直線的に 開き口縁部は外反する。底径は口径の1/ 2以下と小さく、内面は底部と体部の境は なだらかで不明瞭である。底部は右回転 糸切り未調整。	
③	灰輪陶 器 椀	埋土	15.0・5.5・7.8 1/5	僅かな白色細砂粒、黒色鉱物 粒、緻密 還元、堅緻 灰白色	体部下位、底部は回転篋削り。高台足付 時回転篋で。内面底部はコナを当ててお らず、サッと丸く撫でている。軸は透明。	65住-2と 連合 胎土B
4	灰輪陶 器 椀	床直	- - - 5.8 高台部～体部下位 5/6	少量の黒色鉱物粒、緻密 還元、堅緻 灰白色	内面底部は中心部を3cm程度いてコナが 当てられる。体部回転篋削り、底部回転 篋で。内面に重ね焼痕あり。	
5	須恵器 小形壺	埋土	18.6・ - - - 小片	多量の白色細砂粒、少量の石 英細砂粒 還元、軟質	口縁部回転篋で。胴部外面は、上方向へ の篋削りに近い篋削り。内面は横撫で黄 灰色。	
6	須恵器 小形壺	火床面より - 3cm	16.6・ - - - 小片	多量の白～灰色・石英細・粗 砂粒 還元、軟質 黄 灰色	口縁部は回転篋で、胴部外面上方向への 篋削り。内面は横撫で。	
⑦	須恵器 羽釜	カマド内- 4～9cm	17.3・22.7・8.6 底部～口縁部1/4	白色細砂粒、石英細砂、赤褐 色円粗砂粒 還元(酸化気味) 褐色	胴は小さいが上面は比較的確に削られ ている。胴部は上方向への篋削り。下 位は斜めの篋削り、篋で割んだような痕 跡がある。内面は横方向の撫で。	
⑧	須恵器 羽釜	22、9.5 12cm	19.0・ - - - 胴上位～口縁部 1/4	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	胴は下向きで、底部は丸く、歪みがある。 口縁部も不正円形である。胴部外面上 方向への篋削り、内面横方向撫で。	
⑨	鉄製品 鏝	溝底より 19.5cm		平根のやや大身の鉄鏝で茎を調査時に欠損する。錆化は板目状で、精鍛造である。鏝の表面には平肉があり、給刃となる。茎と鏝部との間は区となる。残存長7.8+acm、重15.6g。		
⑩	鉄製品 利器	埋土		欠損は調査時である。図下方には刃は設けられておらず、上方に向かって刃部があり、鏝は錆ぶくれが少なく精鍛造であるため、刃物であろう。残存長5.1+acm、重2.8g。		

9号住居跡 (写真図版9頁、103頁)

位置 22B-17グリッド 方位 N-86.0°-W 形状 427×365cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は56cmを測る。南壁は対する北壁に比べ長く、やや台形に近い形状となる。床面 一部を貼り床とし、ほぼ平坦である。壁溝は幅18cm、深度8cmを測り、カマド前面、及び貯蔵穴部を除きほぼ全周すると思われるが、北壁の土坑重複部分は検出不可能であった。また、南西コーナー部のみ壁からやや離れ、全体の形状はプランとは異なり、きれいな長方形を呈する。柱穴 東壁のカマド北側に1穴、西壁に2穴、南壁中央付近に1穴の計4穴の壁柱穴を検出する。径は35～42cm、深度は21～37cmを測る。貯蔵穴 南東コーナーに設けられ、楕円形を呈し、径84cm、深度20cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、竈を用いた石組みのカマドである。用いられる礫には板状のものが多く見られる。燃焼部は壁より内側に位置し、袖部はやや張り出す。遺存状態は悪く袖石は残っていないが、掘り方調査にて袖石の設置穴を検出する。煙道部は短く、急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央に土坑を1基検出し、楕

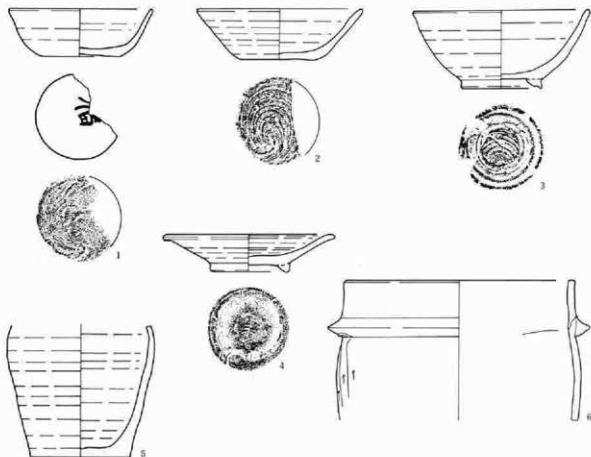
円形を呈し、径53~88cm、深度58cmを測る。重複 57号土坑(縄文時代)、及び14号住居跡と重複し、新旧関係は、遺構確認時の埋土より、本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、カマド内部、及び貯蔵穴内部に集中し、出土する。出土遺物中、坏(No 2)・椀(No 3)・小形甕(No 5)は貯蔵穴内部よりの出土である。また、皿(No 4)は北東コーナー付近壁際よりの出土である。坏(No 1)の「福」と記した墨書土器は他の土器と時期的に異なる。



- 1 暗褐色土 弱粘性、FP、焼土粒少量、ローム粒。
- 2 暗褐色土 弱粘性、FP少量、所々にローム粒。
- 3 暗褐色土 強粘性、FP少量、所々にローム粒。
- 4 暗褐色土 強粘性、FP、ローム粒、ロームブロック少量。
- 5 暗黒褐色土 弱粘性、FP、ローム粒少量。
- 6 暗褐色土 弱粘性、FP、ローム粒、濃乳白色粘土粒少量。

カマド

- 7 暗褐色土 弱粘性、FP少量、濃乳白色、所々にローム粒。
- 8 明黒褐色土 弱粘性、FP少量、所々にロームブロック。
- 9 濃乳白色粘質土 カマドの一部、下面焼土化著しい。
- 10 暗褐色土 FP少量、所々に濃乳白色粘質土粒。
- 11 灰色土 粘性強、灰色(乳白色)の粘土層。
- 12 灰色土 11に類似。ローム粒多量、一部焼土化。
- 13 黒灰色土 灰色粘土に黒色土を混入、炭化物少量。



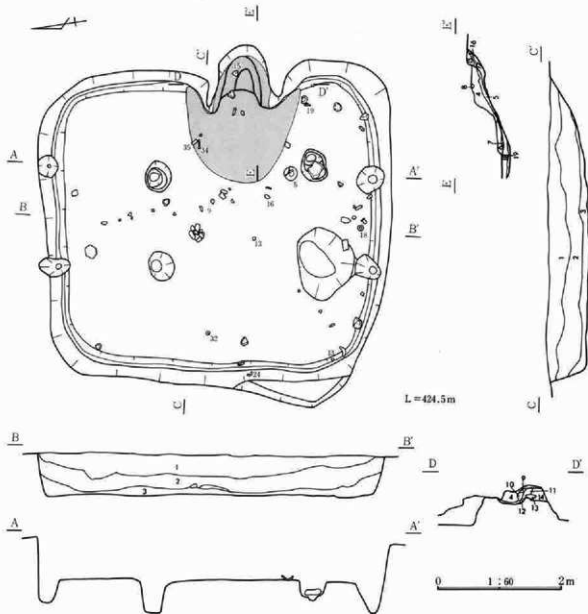
9号住居跡出土遺物

0 1:3 10cm

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	掘り方	11.4・3.8・6.0 1/3	多量の黒色円粗砂粒・細礫 少量の白色粗砂粒 還元	底部は右回転糸切り未調整。底部外面に 黒書あり。灰白色	黒書
②	須恵器 坏	貯蔵穴内	13.4・4.1・6.2 1/2	多量の白色細・粗砂粒、石英 の円細礫 還元 灰色、にぶ い黄褐色	体部から口縁部まで直線的に開く。底部 は右回転糸切り未調整。	
③	須恵器 椀	0.5cm 2.0cm 7.0cm	14.2・6.2・6.8 2/3	多量の石英粗砂粒・円細礫 白～灰色細礫 還元 灰白色	体部から口縁部まで丸みをもって開く。 底部は右回転糸切り未調整。高台は内側 に段をもつ。	
④	須恵器 皿	周溝内 壁寄着	13.8・3.0・6.4 突形	多量の白色細・粗砂粒・細礫、 石英の粗砂粒・細礫 還元（酸化気味）暗灰黄色	体部は直線的、口縁部が水平に開く。器 内は厚手。底部は回転糸で。	
⑤	須恵器 小形甕 ？	底面から 7.0cm	- - - 8.0 小片	白色細・粗砂粒・石英の粗砂 粒 酸化 褐色	平底、器部と胴部の境はシャープで、胴 部は直線的に立ち上る。ロクロ整形、底 部は整形痕は不明瞭だが無でか。	
⑥	須恵器 羽釜	2.0cm ～5.0cm	18.2・ - - - 口縁部1/3	多量の白色細砂粒、少量の石 英、長石の粗砂粒・細礫 還元（酸化気味）灰黄色	胴部はほとんどふくらみをもたず、口縁 部は直立し、口縁部は水平な平面をも つ。胴部は単位の大きな上方向への復判 り。内面横撫で。	

10号住居跡 (写真図版10~11頁, 104~105頁)

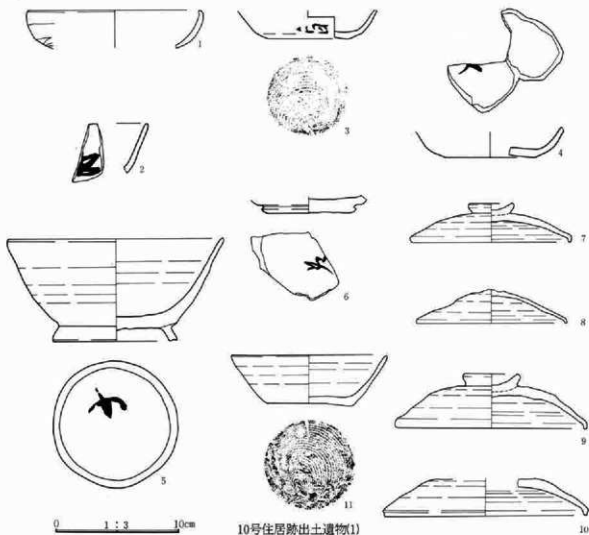
位置 24B-13グリッド 方位 N-86.0°-W 形状 567×491cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は72.5cmを測る。床面 ローム地床を基とし、一部ローム混じりの暗褐色土を叩き、貼り床とする。壁溝は幅12cm、深度15cmを測る溝が、カマド前面を除き全周する。また、住居中央やや北寄りの床面上に、径30cm程の範囲で5~13cm大程の楕円形で扁平な礫を11ヶ集め敷いた状態が検出された。柱穴 北壁・南壁に壁柱穴4穴と住居内に4穴の計8穴の柱穴が検出された。壁柱穴は、径35~50cm、深度36~49cmを測り、壁に半分かかる形でほぼ垂直に穿たれ、住居内の柱穴と比べてもその規模は劣らず、補助的な柱穴という感はない。住居内の4本の柱穴の平面プランは、カマドを中心に組まれており、住居プランに対してやや南寄りとなり、径47~115cm、深度38~59cmを測る。この住居内柱穴と壁柱穴とは、ほぼ住居南北軸上に並び、その新旧関係は明らかではないものの、住居プラン等に拡張の痕跡もなく、同時存在の可能性が高い。貯蔵穴 床面上からは検出されなかった。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、燃焼部は壁のラ

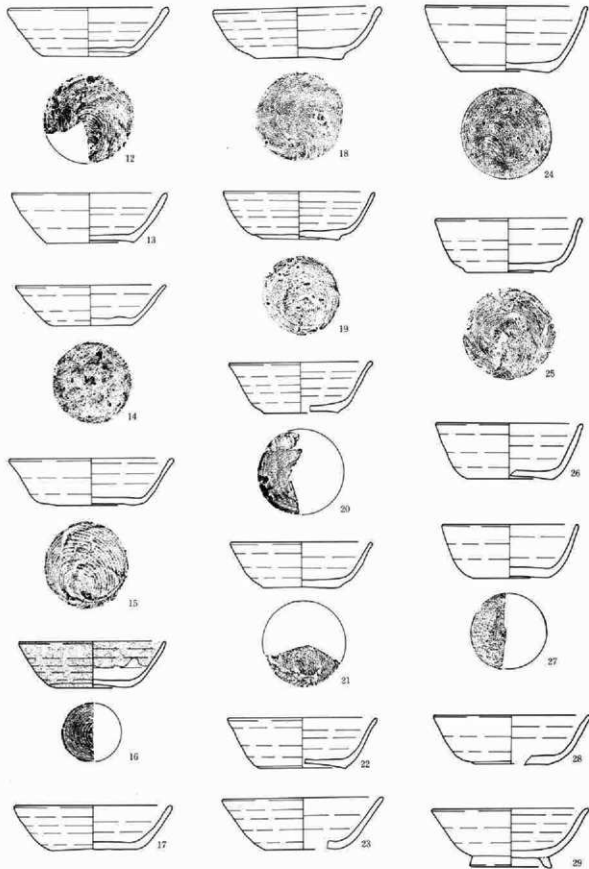


第3章 検出遺構・遺物

- | | |
|--|----------------------------------|
| 1 暗褐色土 弱粘性、F P、ローム粒少量。 | 10 ローム 9より焼土化。 |
| 2 暗褐色土 弱粘性、F P少量、ロームブロック多量、所々にロームブロック。 | 11 暗黄褐色土 弱粘性、ローム粒多量、所々に焼土粒。 |
| 3 暗褐色土 弱粘性、F P、ローム粒、ロームブロック少量、カマド | 12 焼土 壁体であり粘質土の焼土化。 |
| 4 明黒褐色土 弱粘性、F P少量、ローム粒、焼土粒多量。 | 13 黄灰褐色粘質土 強粘性。所々に焼土粒。 |
| 5 暗黄褐色土 弱粘性、ローム粒、焼土粒・灰多量。 | 14 暗黄褐色土 弱粘性。黄灰褐色粘質土。 |
| 6 暗黄褐色土 弱粘性、F P、黒色灰少量、焼土粒、ローム粒。 | 15 暗褐色土 弱粘性。F P、ローム粒少量。 |
| 7 黒色灰層。 | 16 褐色土 焼土粒多量。 |
| 8 焼土 壁体一部。 | 17 暗褐色土 ローム粒多量。所々に焼土粒。 |
| 9 ローム 所々に焼土化。壁体の一部、稍堅く締まる。 | 18 暗黄褐色土 弱粘性、ロームと焼土の混土。掘り方埋土は本層。 |
| | 19 明黒褐色土 弱粘性、F P少量、ローム粒多量。 |

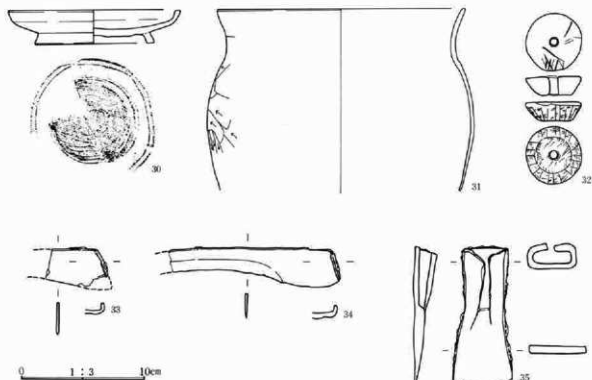
イン上より内側に位置し、袖は地山ロームを掘り残し、粘土を貼る。煙道部は短く、壁高も高いため、かなり急峻に立ち上がる。煙道部にも礫を用いた痕跡はない。掘り方 住居中央部を残し、周囲を掘りくぼめる。円形土坑としてとらえられるものもある。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多く、完形品の遺存度が高い。遺物は、住居全体に散乱し、出土する。出土遺物中、坏 (No13、18、19、23)・椀 (No 5) は床面直上よりの出土である。また、遺物の胎土・器形も類似しているものが多く、一括性が高いものと考えられる。特筆すべき出土遺物として、石製紡錘車 (No.32)・鉄斧 (No.35) 及び、墨書土器として須恵器坏と土師器坏に同一文字「名」の墨書が見られる他、墨書土器 3 点の出土がある。





0 1 : 3 10cm

10号住居跡出土遺物(2)



10号住居跡出土遺物(3)

遺物番号	類別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・高さ・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	土師器 環	埋土	14.0 × - × - 小片	少量の白色細砂粒 普通 におい褐色	体部から口唇部まで内彎する。口縁部は横溝で、体部は成形時の態で、底部は寛削り。	
②	須恵器 環	埋土	- × - × - 体部～口縁部小片	僅かな白色細砂粒、赤褐色粗砂粒 還元 におい黄褐色	体部内部に正位で墨書あり。6の墨書と類似しており、「名」と思われる。	墨書
3	須恵器 環	埋土	- × - × 6.4 底部～体部下位	白色細砂粒 還元 灰白色	内面底部は平直で体部との境は明瞭である。外面体部下位は態で、左回転糸切り未調整。	体部外面横位の墨書
④	須恵器 環	埋土	- × - × 7.0 底部～体部下位	僅かな白色細砂粒、赤褐色粗砂粒 還元 におい黄褐色・灰色	体部立ち上りは丸みをもつ。底部は回転糸切り未調整。底部内部に墨書あり、筆跡は6の墨書に類似している。	墨書
⑤	須恵器 椀	床直	17.2 × 8.1 × 9.8 完形	少量の石英粗砂粒、黒色中礫 還元 灰白色	体部中程に僅かに丸みをもつ大形の椀である。高台は端部に凹線が巡る。底部外面は凹しており整形不明、墨痕があるが判読不可。	墨書
⑥	須恵器 環	埋土	- × - × 4.4 底部1/3	僅かな白色細砂粒、赤褐色粗砂粒 還元 におい黄褐色、灰色	底部は切り離しの失敗か、非常に厚手で、側面には数本のすじが入る。底部外面は雑に撫でられ切り離し度はない。「名」の墨書	墨書
⑦	須恵器 蓋	埋土	13.0 × 3.1 × 3.6 1/3	多量の白色細砂粒、少量の白色角礫 還元 (酸化気味) におい褐色	天井部から口縁部まで緩やかに丸みもち、口縁部は内彎気味に折れ曲る。紐は扁平で中が窪む。	
⑧	須恵器 蓋	埋土	12.0 × - × - 1/3	少量の白色細・粗砂粒、黒色円粗砂粒 還元 灰色	天井部は高めで、口縁部まで直線的に開く。口縁部は直線的に折れる。器内は薄手、紐は欠けている。	
⑨	須恵器 蓋	3.5cm 29.5cm	15.3 × 4.3 × 4.3 1/2	白色細・粗砂粒・細礫 黒色円粗砂粒 還元 灰色	天井部はやや丸みもち、口縁部は垂直に折れ曲がる。	胎土分析

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・器形の特徴	備考
㉔	須恵器 蓋	埋土	16.2・ 1/2	多量の白色細・粗砂粒・細礫、 少量の黒色円形細礫 還元 灰色	天井部は水平、口縁部はやや内傾気味に折れる。天井部は筒削りの後削で。	
㉕	須恵器 杯	埋土	12.5・4.0・7.3 2/3	白色細・粗砂粒・中礫、1～ 3mmの赤褐色円粒 還元（酸 化気味） 内ふい黄色	体部はほぼ直線的に開く、右回転糸切り未調整。	
㉖	須恵器 杯	埋土	13.0・3.9・6.8	白色細・粗砂粒、黒色円形粗砂 粒 還元 灰白色	底径より内底径が大きく、体部立ち上りは丸みをもち、口縁部まで直線的に開く。底部は円板状に割がれ、両面に糸切り痕を持つ。	
㉗	須恵器 杯	床直	12.4・4.0・7.0 1/3	白色細・粗砂粒、黒色円形粗砂 粒 還元 灰白色	体部は直線的に開き、口縁部は若干立ち気味になる。底部は回転糸切り未調整。	胎土分析
㉘	須恵器 杯	埋土	12.0・3.2・6.2 2/3	少量の白色細・粗砂粒 還元 灰色	体部立ち上りがやや丸みをもち、口縁部まで直線的に開く。器内は薄手。底部は回転糸切り後回転削で。	
㉙	須恵器 杯	カマド内火 床直	13.1・3.7・6.8 3/4	白色細砂粒、少量の黒色円形粗 砂粒 還元 灰白色	底径より内底径が大きく、体部立ち上りが丸みをもち、口縁部まで直線的に開く。右回転糸切り未調整。	
㉚	須恵器 杯	21.0cm	11.6・3.7・6.2 1/3	種かな白色細砂粒 焼し焼成 外-黒色 内-黄褐色	体部立ち上りは、やや丸みをもち、体部から口縁部まで直線的に開く。回転糸切り未調整。	胎土分析
㉛	須恵器 杯	削り方	12.6・3.6・6.7 2/3	白色細・粗砂粒、黒色円形粗砂 粒 還元 灰色	体部下位から口縁部まで僅かに丸みをもって開く。底部は右回転糸切り未調整。	胎土分析
㉜	須恵器 杯	床直	13.5・4.1・7.0 口縁部一部欠損	多量の白色細砂粒、石英・長 石の粗砂粒・角細礫 僅かに 7mm前後の岩片 還元 灰色	底径より内底径が大きく、体部下位が底部に向って窄まる。体部中位から口縁部は直線的。	胎土分析
㉝	須恵器 杯	床直	12.2・3.8・6.2 口縁部～体部一部 欠損	白色細・粗砂粒 還元 灰色	右回転糸切り未調整。底径は小さいが内底径が大きく、体部下位は横に張り、上位から口縁部まで直線的に開く。	
㉞	須恵器 杯	埋土	11.6・4.0・6.0 1/4	少量の白色細砂粒 還元（酸 化気味） 淡黄色	底径より内底径が大きく、体部下位は底部に向って窄まる。底部は回転糸切り未調整。	
㉟	須恵器 杯	埋土	11.4・3.6・6.0	白色細砂粒、種かな灰色の細 礫 還元 灰色	底径より内底径が大きく、体部下位は底部に向って窄まる。口縁部は僅かに外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
㊱	須恵器 杯	埋土	12.0・4.0・7.0 1/4	少量白色細砂粒、種かな灰色 角細礫 還元 暗灰色	体部下位はやや丸みを持って開き、口縁部は僅かに外側に肥厚する。底部は回転糸切り未調整。	
㊲	須恵器 杯	削り方	13.0・4.1・6.0 小片	少量の白色細砂粒、灰色角細 礫 還元 内面-灰黄褐色、 外面-灰色	体部下位に僅かに丸みをもって、体部から口縁部まで大きく開く。底部は回転糸切り未調整。	
㊳	須恵器 杯	33.5cm	13.0・5.2・7.0 2/3	白色細・粗砂粒 還元 灰色	体部はやや内傾気味で深い。底部は右回転糸切り後、周辺部、体部下位は回転削削り。	胎土分析
㊴	須恵器 杯	埋土	12.3・4.3・7.2 1/2	白・黒色細・粗砂粒・細礫 還元 灰色	底径より内底径が大きく、体部下位は丸みをもつ。右回転糸切り未調整。	胎土分析

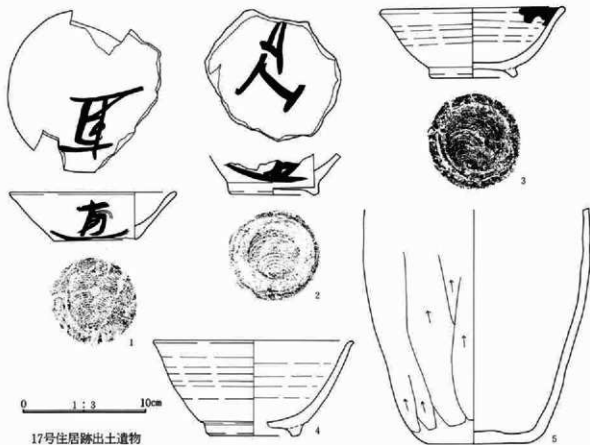
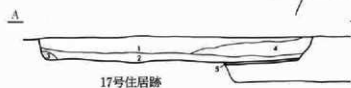
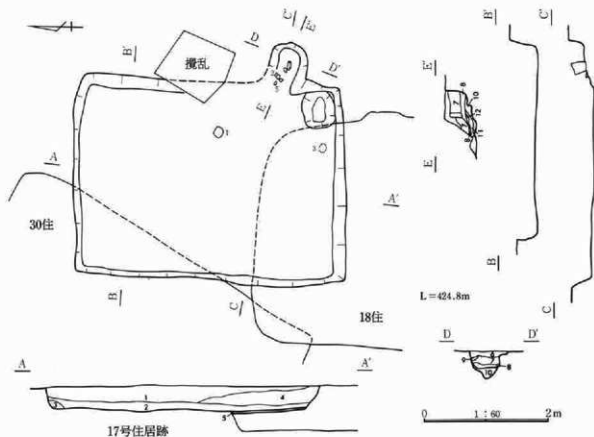
第3章 検出遺構・遺物

遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm)		胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径・器高・底径				
㊸	須恵器 環	埋土	11.8・4.4・7.0 1/5		少量の白色細・粗砂粒 還元 外-灰白色 内-灰色	体部下位がやや丸みをもち、体部から口縁部まで直線的に開く。底部は回転未切り未調整	
㊹	須恵器 環	埋土	10.8・4.3・6.0 1/3		少量の白色細砂粒・小礫 還元 灰白色	体部下位に丸みを持ち、体部から口縁部は直線的にやや開く。回転未切り後、底部周辺部、体部下位は回転削り。	
㊺	須恵器 環	埋土	12.4・3.9・6.0 小片		白色細・粗砂粒、僅かな黒色 円粗砂粒 還元 灰色	体部下位は丸みをもち、体部から口縁部は直線的に開く。底部は回転削り後難な態で。	
㊻	須恵器 椀	埋土	12.4・4.8・6.4 口縁部一部欠損		白色細・粗砂粒、僅かな灰色 角細礫、石英角細礫 還元 灰白色	体部は丸みをもって大きく開く。高台は低く外縁部が接地し、内側はやや丸みをもつ。底部は回転削り。	
㊼	須恵器 高台付 皿	埋土	13.8・2.8・9.6 3/4		白色細・粗砂粒・細礫僅かな 黒色円粗砂粒 還元 灰色	体部は直線的に開き、縁をなして口縁部は立つ。口唇部は水平な平坦面をもつ。高台は角形で外に開き、接地面は平坦である。中心に未切り痕を残し、周辺部は回転削り。	胎土分析
㊽	土師器 壺	掘り方 小片	20.0・ - - - 小片		細・粗砂粒、角閃石の細砂粒 普通 によい橙色	胴部は緩やかにふくらみを持ち、頸部の括れは少なく、口縁部は外面にふくらみ気味に開く。口縁部腫脹で、胴部上位は左横方向への膨らみ、中位下方向への膨らみ。	
㊾	紡錘車	床直	上径・下径・穴径・厚さ・重量 4.48・3.05・0.72・1.58、49.1g			完形。蛇紋岩（かんらん岩）磨減。上面の縁を面取り。	
㊿	鏝	埋土			鏝の耳部で片側は調査時欠損。欠損部での巾は、狭く底耗りか、全長5.0+acm、重11.9g。		
①	鏝	5cm			先端は調査時欠損。表面側に砥磨の浅い痕跡あり。全長13.4+acm、重25.0g。錆化剥落は顕微鏡か。やや粗作		
②	斧	26.5cm			袋部をもち長い身部が特徴的。刃先は両刃。全長11.0cm、重155.4g。錆化剥落は顕微鏡作をおもわせる。		

17号住居跡（写真図版12頁、105頁）

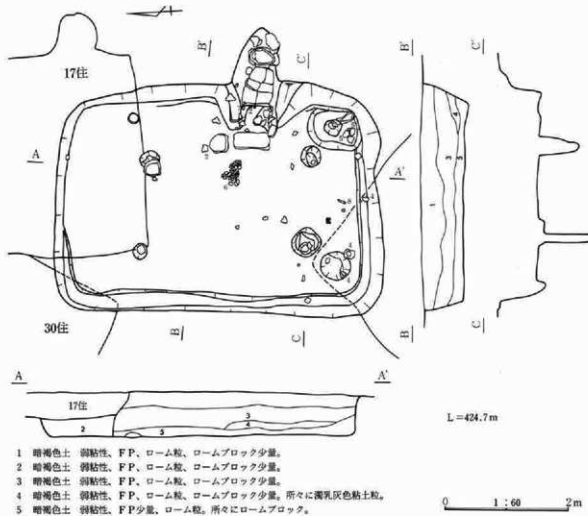
位置 4C-13グリッド 方位 N-88.0°-W 形状 432×312cmを測る長方形のプランを呈し、壁高は33cmを測る。床面 地床を基とするが、重複遺構を埋めた部分のみ貼り床とする。壁溝は認められない。柱穴 検出されていない。貯蔵穴 床面では検出しにくく、床下調査時に北東コーナー付近より径50～60cm、深度31cmを測る土坑を検出する。カマド 遺存状態が悪く、袖部壁の焼土化と中央付近に焼溝を検出するのみである。焼焼部は壁のライン上に位置し、煙道は短いものと思われるが、形状は明らかでない。掘り方 なし。重複 18号住居跡・30号住居跡と重複し、埋没土層断面、及び床面の状態より新旧関係は本遺構の方が新しい。遺物 出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居カマド前面等に散乱し、出土する。特筆すべき出土遺物として、「直」の文字を記した墨書土器の出土が2点あり、記された4文字は類似した筆跡を呈する。

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1 暗褐色土 弱粘性、FP、ローム粒、ロームブロック少量。 | 7 明黒褐色土 弱粘性、細砂子、ローム粒。薄乳灰色粘質土粒多量。 |
| 2 暗褐色土 弱粘性、FP、ローム粒少量。 | 8 暗黄褐色土 強粘性、ローム粒、薄乳灰色粘質土粒多量。 |
| 3 暗褐色土 弱粘性、FP、ローム粒少量。 | 9 暗褐色土 弱粘性、薄乳灰色粘質土粒多量。 |
| 4 暗褐色土 弱粘性、FP、ローム粒、ロームブロック少量。 | 10 暗黄褐色土 弱粘性、ローム層に漸移層暗褐色土を混入。 |
| 5 ローム 所々に暗褐色土、貼り床。 | 11 黒褐色土 ローム粒、塊土粒子少量。 |
| カマド | 12 灰茶褐色土 多量の灰、焼土粒子。乳白色の粘土ブロック少量。 |
| 6 暗褐色土 弱粘性、FP少量。所々にローム粒、焼土粒。 | |



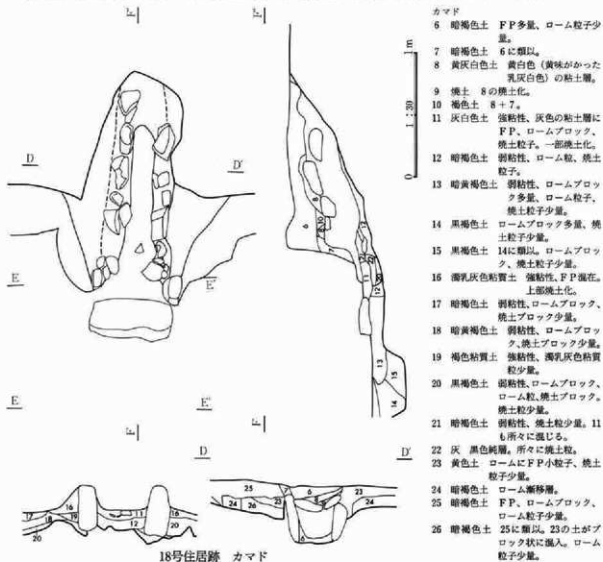
遺物番号	類別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	1.0cm	13.3・3.8・6.6 口径部1/2次頂	白色・石英粗砂粒、僅かな赤褐色粗砂粒 酸化気味	底部は回転糸切り。内面器一内部、外面体部正位に「直」の墨書。浅黄色	墨書
②	須恵器 椀	2.0cm	—・—・6.6 高台～体部下位	白色粗砂粒、石英粗砂粒 還元（酸化気味）に濃い黄褐色	内面体部の立ち上りは緩やかで、底部との境は不明瞭。螺旋状の無で、外面は右回転糸切り。内面底部、外面体部正位に墨書あり。不明瞭だが、1の墨書と筆跡が良く似ている。	2字とも「直」と思われる。
③	須恵器 椀	床直	14.5・5.6・7.0 口径部一部欠損	少量の石英細・中粒、凝灰岩質の胎・中粒 酸化褐色	体部はやや丸みをもち、口唇部は僅かに外反する。右回転糸切り後周辺部高台貼付時に無で、口径部一部に煤が付着する。	
4	須恵器 椀	埋土	16.0・7.5・7.4 1/5	少量の白色粗砂粒・細粒、長石粗砂粒・細粒 還元 灰白色	体部は深く、やや丸みをもち、口唇部が僅かに外反する。	
⑤	須恵器 羽釜	3.0cm	—・—・8.0 底部～胴部中位 1/2	白色粗砂粒、石英・長石の粗砂粒・細粒 酸化 明黄褐色	平底、胴部の立ち上りは丸みをもつ。蓋部は無で、胴部下位は横撫での後、大きな単位で上方への覆削り。内面胴部下半は縦方向の撫で上位は横撫で。	

18号住居跡 (写真図版12頁、106頁)

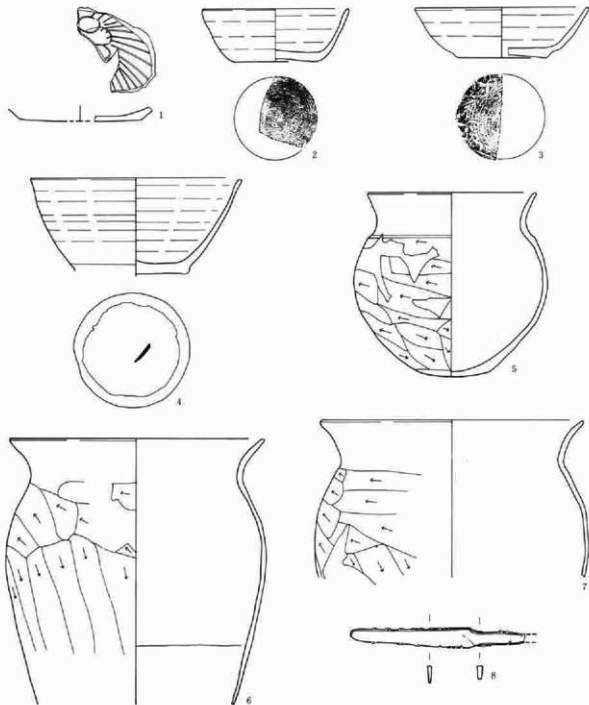


位置 3C-14グリッド 方位 N-91.1°-E 形状 524×370cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は66cmを測りほぼ垂直に立ち上がる。床面 ローム地床を基に一部貼り床とする。平坦で硬度は高い。壁溝は幅15cm、深度6.4cmを測り、カマド前面を除きほぼ全周する。柱穴 住居内に4穴検出され、径25~46cm、深度53~79cmを測る。各柱穴間の平面プランは、住居に対しやや南寄りとなる。

貯蔵穴 住居南東コーナー部に設けられ、径69~84cm、深度31cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられた石組みのカマドである。使用される礫は自然石のほか、凝灰岩を板状に加工したものもみられる。極めて遺存状態は良く、天井部の一部が落ち込んでいるものの、ほぼ使用時の状態を保っているものと思われる。燃焼部は壁のライン上より内側に位置し、煙道部は緩やかに立ち上がる。燃焼部と煙道部の先端までの距離は168cm、比高差は70cmを測る。袖部は地山ロームを掘り残し、袖石を設置後に粘土を貼る。また、煙道部、及び天井部の礫の隙間も粘土が貼られている。掘り方 径75~130cm、深度23~43cmの円形、又は楕円形の土坑が7基検出された。重複 17号住居跡(平安時代)、及び30・41号住居跡(弥生時代)と重複し、新旧関係は埋没土層断面等より「旧30・41号→18号→17号新」となる。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居中央南半に散乱し、出土する。特筆すべき出土遺物として、暗文土器(No1)・鉄製刀子(No8)がある。



第3章 検出遺構・遺物



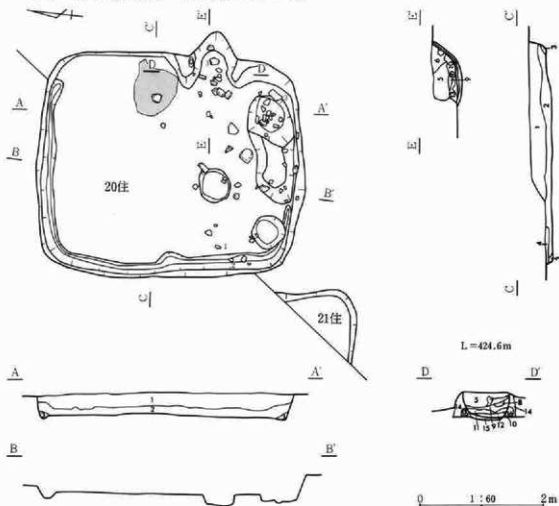
18号住居跡出土遺物

0 1:3 10cm

遺物番号	種別・器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	土師器 杯	埋土	- - - 10.0 小片	少量の白色細砂粒、黒色粗砂粒 普通 におい赤褐色	平底、体部下位は直線的に開く。体部下位は左横方向篋削り、底部篋削り。内面体部は間隔の粗い放射状暗文、底部は縦線状暗文。	
②	須恵器 杯	18.0cm	11.7・4.1・6.0 1/4	白色細砂粒 還元 灰白色	体部下位は丸みを持ち、口縁部が若干肥厚する。底部右回転糸切り後、周辺部回転篋削り。	

遺物番号	類別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
③	須恵器 坏	埋土	14.0・3.9・7.0 1/4	白色細砂粒 還元 灰色	体部下位は窄まり気味で、体部は丸みをもって開く。底部は回転糸切り未調整。	
④	須恵器 高台付 碗	15.0cm → 1cm、カ マド埋土	16.8・ - ・ - 高台部欠損	少量の白色細砂粒、褐色円細 礫 焼成 外-黒色 内-黄褐色	体部は深く、やや丸みをもって開く。器 内は薄手である。底部は回転糸切り後、 回転糸で体部下位は右回転旋削り。	黒書
⑤	土師器 壺	床直	13.4・14.6・5.6 3/4	白色細砂粒、褐色円粗砂粒 細礫 普通 赤褐色	底部は小さく、胴部は球形を呈し、胴部 と頸部の境は段をなし、緩やかに折れて 開く。底部は一定方向旋削り。	
⑥	土師器 壺	床直埋土	20.4・ - ・ - 胴部下位〜口縁部	多量の白〜灰色細・粗砂粒 普通 赤褐色	胴部下位から上位は直線的で、上位によ くらみを持ち、口縁部は大きく外反する。	
⑦	土師器 壺	3.0cm 埋土	21.0・ - ・ - 胴上位〜口縁部 1/3	多量の白〜灰色の細・粗砂粒 普通 明赤褐色	胴部上位は丸みを持ち、口縁部は外反す る。胴部下位は左方向への旋削り。	
⑧	鉄製品 刀子	2.0cm	某区は調査時の欠損。切先は旧態。平造。刃区上に底出の浅い横溝あり。棟区・刃区で作込は甘く雑用(工具) 刀子を思わせる。錆化はやや発達し粗造造を思わせる。重18.0g。			

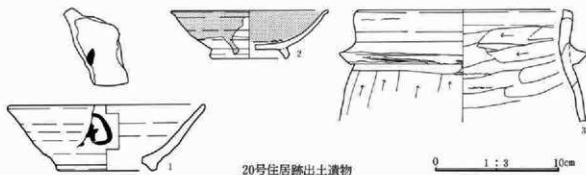
20・21号住居跡 (写真図版13頁、106頁)



第3章 検出遺構・遺物

- 1 暗褐色土 弱粘性、F P少量、所々に焼土粒、ローム粒。
- 2 暗褐色土 弱粘性、F P少量、所々にローム粒、濃乳灰色粘質土粒。
- 3 暗黒褐色土 弱粘性、ローム粒多量。
- 4 暗褐色土 弱粘性、ローム粒多量。掘り方埋土。
- カマド
- 5 暗褐色土 弱粘性、F P少量、所々に焼土粒、濃乳灰色粘質土粒、ローム粒。
- 6 暗褐色土 弱粘性、F P、濃乳灰色粘質土粒少量、所々に焼土粒、ローム粒。
- 7 暗褐色土 弱粘性、F P少量、濃乳灰色粘質土粒多量。若干焼土化。
- 8 濃乳灰色粘質土 弱粘性、稍黄色粘土。若干焼土化。
- 9 暗褐色土 弱粘性、F P、ローム粒少量、所々に焼土粒。
- 10 濃乳灰色粘質土 F P、焼土粒多く暗褐色と粘質土の混土。
- 11 明黒褐色土 弱粘性、細粒子、焼土粒、ローム粒。
- 12 褐色土 焼土粒、灰多量。
- 13 暗褐色土 弱粘性、F P、焼土粒少量、ローム粒。
- 14 暗褐色土 F P、ローム粒少量、細粒子。
- 15 濃乳色土 弱粘性、焼土粒、灰、濃乳灰色粘質土粒少量。
- 16 濃乳灰色粘質土 所々に褐色土。表面は焼土化。

位置 2C-17グリッド 方位 N-86.0°-W 形状 410cm×354cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は48cmを測る。床面 床はローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマドをもつ東壁を除き、幅20cm、深度8cmの溝がコの字状に巡る。柱穴 なし。掘り方調査においても検出されず。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径76~80cm、深度18cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は悪く、袖部・煙道部には隙を用いた痕跡はなく、粘土のみで構築されていたと考えられる。燃焼部は、壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より41cmと短い。掘り方 住居中央部を浅く掘りくぼめる程度で、床下土坑は検出されていない。重複 重複する遺構はないが、北西部において市道による攪乱を受ける。21号住居跡は、確認時において本遺構とは重複していないが、近接した位置にある。21号住居跡も、市道により削平されており、南東コーナー部を一部残すのみであり、埋土より20号住居と近い時期の遺構であろうと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居中央南半、及びカマド内部等に散乱し、出土する。出土遺物中、床面直上より出土は見られない。特筆すべき出土遺物として、墨書土器 (No 1) がある。

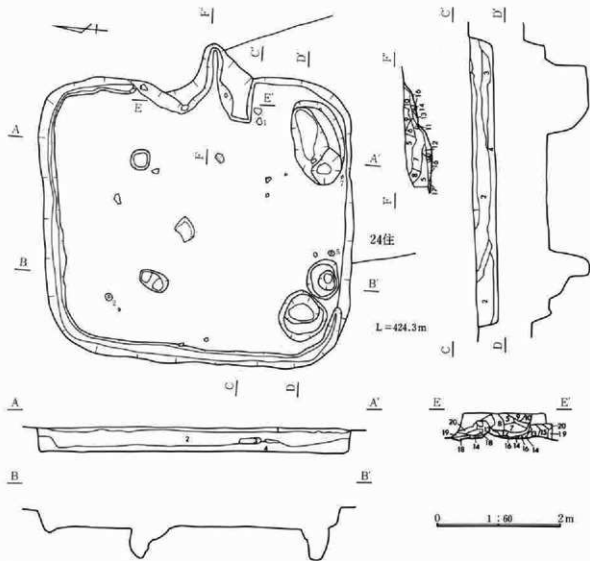


20号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵系 碗	埋土	15.8・5.2・7.4 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) におい	器内は全体的に厚手。体部外面はクロク目が強く残る。体部外面正位に墨書あり。	墨書
②	灰輪陶 器 碗	6.0cm	12.6・3.8・6.0 1/4	少量の黒色鉱物粒、細密 還元、灰白色、軸は透明	口縁部は薄く外反する。高台外面の種は弱い。底部内部の胎でが種である。重ね焼痕あり。	胎土B
3	須恵系 羽釜	18.0cm カマド内	17.2・ - - - 胸部上位~口縁部 1/3	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) におい黄 褐色	脚は比較的大きめだが、端部が凸出している。口縁部内外面回転撫で、胴部外面上方向の風削り後、脚直下を部分的に横に撫でている。内面横撫で。	

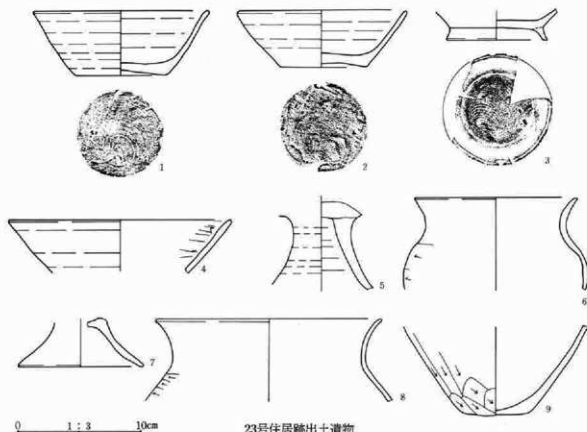
2 3号住居跡 (写真図版14頁、106頁)

位置 24B-20グリッド 方位 N-86.0°W 形状 500×460cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は40cmを測る。床面 床はローム地床を基とし、一部貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅10cm、深度14cmの溝が全周する。柱穴 4穴検出され、平面のプランは柱穴間300cm×185cmを測り、住居に対し南側に寄り、深度は46~68cmを測る。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径80~140cm、深度65cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、袖部・煙道部には礫を用いず粘土のみで構築されている。北側の袖は残っていない。燃焼部は、壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは多く、煙道部は壁より63cmと短い。掘り方 住居中央部北西に径96~120cm、深度32~50cmの円形の床下土坑を2基検出する。重複 24号住居跡(弥生・古墳時代)と重複し、新旧関係は遺構検出段階における埋土より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居全体に散乱し、出土する。出土遺物中、坏(No.1、2)は床面直上よりの出土である。



第3章 検出遺構・遺物

- 1 暗褐色土 弱粘性、F P少量。所々にローム粒及びロームブロック。
 2 暗褐色土 弱粘性、F P、ロームブロック、ローム粒少量。濁乳灰色粘質土粒、一部焼土粒。
 3 濁乳灰色粘質土 ローム粒。焼土粒入り粘質土も焼土化。
 4 暗褐色土 弱粘性、F P少量、ローム粒、所々にロームブロック。一部焼土粒。
 カマド
 5 暗褐色土 F P、ローム粒。
 6 暗褐色土 Sに類似。ロームブロック。
 7 暗褐色土 F P、ロームブロック、焼土粒子少量、ローム粒子、乳白色粘土ブロック。
 8 暗褐色土 7に類似。混入物の量が多い。
 9 暗褐色土 6に類似。6よりロームブロック少量。
 10 暗褐色土 ローム粒少量。
 11 暗褐色土 10に類似。焼土粒子、焼土ブロック。
 12 灰色土 乳白色・灰色の粘土層で所々焼土化。焼土ブロック少量。
 13 黄白色土 粘性強。ロームブロック及び12のブロック層。
 14 暗褐色土 ローム粒、焼土粒子少量。
 15 黄白色土 13に類似。
 16 黄色土 ローム層。一部焼土化。
 17 黒褐色土 黒色土に13の土が若干混入。
 18 灰色土 12の土に少量のF Pと黒色土。
 19 暗褐色土 14に類似。F P少量。
 20 暗褐色土 19に類似。ローム粒。

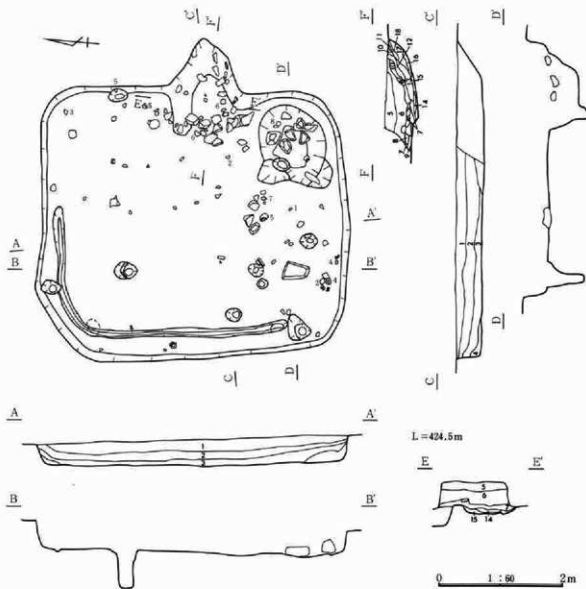


23号住居跡出土遺物

遺物番号	類別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 杯	床直	14.0・5.1・7.2 1/2	白色粗砂粒、少量の長石角礫、黒色円形砂粒 還元 灰色、灰白色	右回転糸切り未調整。体部は直線的に開くが、焼きひずみが著しい。	
②	須恵器 杯	床直	13.6・4.5・7.0 完形	白色細砂粒、少量の2〜3mmの岩片 還元 灰色	右回転糸切り未調整。体部は直線的に開く。	
③	須恵器 椀	ピット内	- - - 8.0 高台〜体部下位 2/3	白色細・粗砂粒 還元焼成、灰色	右回転糸切り未調整。体部は高台との接合部より直線的に開く。高台は細く角形を呈し、接地面は平坦である。	胎土分析
④	ロ便 酸 杯	埋土	18.0・- - - 小片	少量の細砂粒、角閃石の黒色細砂粒、僅かな赤褐色円粒酸化 濃い赤褐色	体部から口縁部まで大きく開く器形と思われる。内面は横方向のヘラ研磨、ロクロ整形。	胎土分析

遺物番号	類別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑤	須恵器 高坏	2.0cm	- - - - 脚部	白色細砂粒。少量の白色粗砂粒・細礫 黒色円粗砂粒 還元 灰赤色	ロクロ整形。	
⑥	土師器 小形壺	埋土	13.0・- - -	白・灰色細砂粒。角閃石と思 われる黒色細砂粒 普通 明赤褐色・黒褐色	胴部は上位にふくらみをもり、頸部は緩やかに括れて外反する。	
⑦	土師器 台付壺	17.0cm	- - - ・10.0 台部1/2	白・灰色細砂粒 普通 赤褐色	台部は「八の字」状に開く。	
8	土師器 壺	ヒット内 埋土	18.0・- - - 小片	白・灰色細・粗砂粒 普通 赤褐色	頸部は緩やかに括れ、口縁部は外反する。 器内は薄い。胴部上位横方向の寛削り。	
9	土師器 壺	埋土	- - - ・5.0 小片	多量の白・灰・黒色細砂粒 普通 にぶい橙色	胴部は斜め下方向への寛削り、底部は一方向の寛削り。	

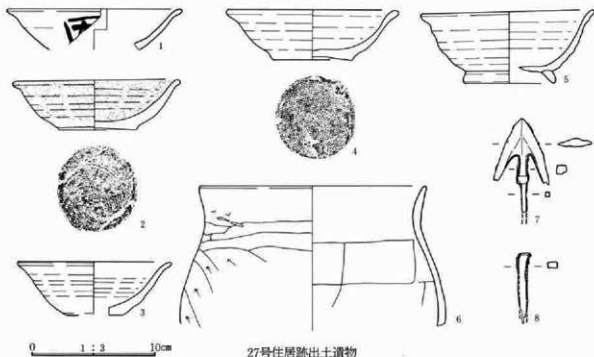
27号住居跡 (写真図版15～16頁、106頁)



位置 5C-21グリッド 方位 N-88.0°-W 形状 496×435cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は49cmを測る。床面 床はローム地床。カマドをもつ東壁を除き、幅10cm、深度5cmの溝がL字状に巡る。柱穴 4穴が検出され、うち北側の1穴のみ東壁側に大きく寄る。深度は4~62cmを測る。

貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径106~118cm、深度48cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、袖部・煙道部には磔を置いた石組みのカマドであると思われる、カマド前面及び住居南半、貯蔵穴上に磔が散乱し出土する。燃焼部は壁のラインより内に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より80cmと短い。掘り方 住居中央部付近及び中央北側に径84~164cm、深度20~47cmの円形の床下土坑を3基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居南半及びカマド前面等に散乱し、出土する。出土遺物中、床面直上よりの出土は見られないが、遺物の胎土・器形も類似しているものが多く、一括性が高いものと考えられる。特筆すべき出土遺物として、鉄鎌 (№7)・墨書土器の出土がある。

- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| 1 黒褐色土 FP多量、ローム粒子。 | 10 暗褐色土 弱粘性。FP少量、焼土粒、8の粘質土粒少量。 |
| 2 暗褐色土 1に類似。所々にロームブロック、ローム微粒子。 | 11 暗赤茶褐色土 強粘性。FP少量、焼土粒、焼土化した粘土粒。 |
| 3 黒色土 FP、乳白色の粘土少量。 | 12 褐色灰色粘質土 8が焼土化している。FP少量、壁体。 |
| 4 暗褐色土 ローム層移層の暗褐色に多量のロームブロック。 | 13 焼土 所々に褐色土。炭化物、鉄色灰。 |
| カマド | 14 明褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子。 |
| 5 暗褐色土 弱粘性。FP少量、所々にローム粒。 | 15 黄褐色土 14に類似するがロームブロック多量。 |
| 6 暗褐色土 強粘性。FP少量、ローム粒全体に薄く入る。 | 16 明褐色土 14に類似するが若干のロームブロック。 |
| 7 暗褐色土 強粘性。FP少量、所々にローム粒。 | 17 暗褐色土 ローム層移層に若干のローム粒子。 |
| 8 薄乳灰色粘質土 所々に暗褐色土、一部焼土化。 | 18 暗褐色土 17に類似するが多量の焼土粒子。 |
| 9 暗褐色土 弱粘性。ローム粒、焼土粒少量。6と7の中間。 | |



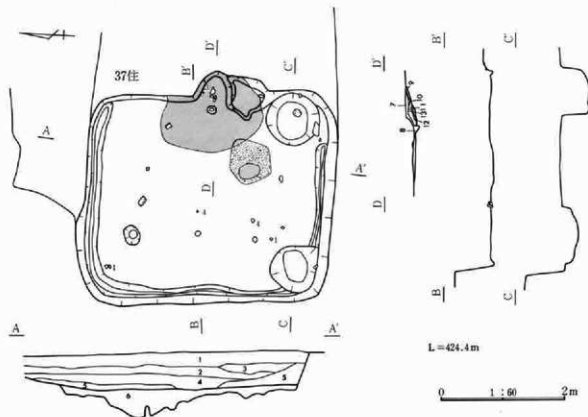
27号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 坏	21.0cm	14.0・ - ・ - 体部~口縁部1/4	白色細砂粒・石英粗砂粒 還元 灰白色	口縁部は外反する。体部外面正位に墨書あり。 判断不可。	墨書

遺物番号	種別・器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
②	須恵器 杯	10cm 18.5cm	13.8・4.0・6.2 口縁部の大半欠損	白色・石英砂・粗砂粒 還元 軟質 ぶい黄褐色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。 底部は右回転糸切り未調整。	
3	須恵器 杯	20.5cm	13.4・4.2・6.4 口縁部1/4欠損	白色細砂粒、石英粗砂粒・細 礫 焼し焼成 黒色	体部は丸みをもち口縁部は外反、器内は 厚手。底部は右回転糸切り未調整。	
④	須恵器 杯	9.5cm 27cm	12.2・一・4.8 底部〜口縁部1/4	僅かな黒色円粗砂粒 還元 灰白色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。 底部の切り離しは不明。	
⑤	須恵器 椀	床直、39.0 cm 埋土	14.0・5.8・7.2 高台部〜口縁部 2/3	白色・石英粗砂粒 還元 軟質 ぶい黄褐色	体部は丸みをもち、ロクロ目が強い、口 縁部は大きく外反する。底部は右回転糸 切り。	
6	土師器 壺	カマド内	18.0・一・一 肩上位〜口縁部 4/1	白色・角閃石、赤褐色細砂粒 普通 ぶい褐色	頸部はしまりがなく、口縁部はほぼ直線 的に僅かに開くが、内面は「コの字」の 形跡を留めている。胴部外面にはススが 付着している。	
⑦	鉄製品 鏝	貯蔵穴内 床直			基尻は調査時の欠損。大根の平明線である。茎と肩被間に線を設ける。鏝は板目状に錆割れがあり精緻。研磨による浅い溝がある。残存長7.5+acm、重14.1g。	
⑧	棒状鉄 製品	14.0cm			先端は、旧時の欠損。機能は不明であるが、平面形状だけを見れば釘の様にも見える。鏝は柱目割が少しあるが、割溝の目はつんでおり精緻。残存長5.8+acm、重7.1g。	

28号住居跡 (写真図版17頁、107頁)

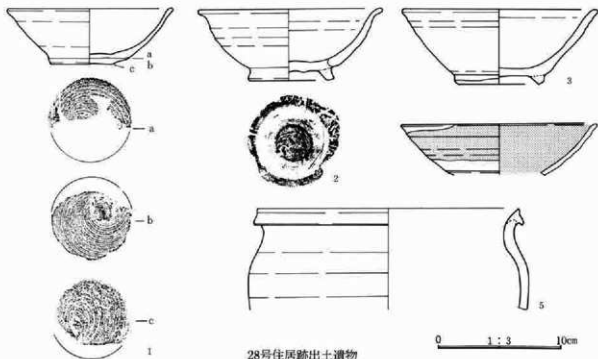
位置 8C-20グリッド 方位 N-91.0°-E 形状 349×333cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は57cmを測る。床面 床はローム地床を基とし、床下土坑上のみ貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅18cm、深度10cmの溝がほぼ全周する。柱穴 住居中央北側寄りに1穴を検出するのみで、深



度30cmを測る。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径84~85cm、深度45cmを測る。
 カマド 東壁のほぼ中央に設けられているが、遺存状態は不良で袖部・煙道部の粘土と焼土を一部残すのみで、その形状は不明である。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置すると思われ、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より36cmと短いと思われる。掘り方 なし。重複 37号住居跡(平安時代)と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しいと判断されるが、37号住との関係については北壁と南壁の一部を共有する形となり、遺構は37号住の規模縮小とも考えられるが明らかでない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居中央部、及びカマド周辺に散乱し、出土する。出土遺物中、床面直上よりの出土は見られない。

- 1 暗褐色土 弱粘性。FP多量、黄褐色スコリア少量。所々にロームブロック。
- 2 暗褐色土 弱粘性。FP、炭化物少量、ロームブロック多量。
- 3 暗褐色土 強粘性。FP、黄褐色スコリア少量。所々にロームブロック。
- 4 暗褐色土 弱粘性。FP、ロームブロック少量。所々に黄色砂質土ブロック。
- 5 暗褐色土 弱粘性。FP、ロームブロック少量。ローム粒。
- 6 暗黄褐色土 強粘性。ロームブロック、黒褐色土ブロック多量。所々に黄乳灰色粘質土。

- カマド
- 7 赤色土 ロームの焼土化。
 - 8 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量。
 - 9 黄白色土 強粘性。ローム+ローム下粘土層。
 - 10 黄白色土 9に類似。焼土ブロック、焼土粒子多量。
 - 11 赤色土 10の土の焼土化。
 - 12 黒色土 弱粘性。ローム粒少量。
 - 13 暗褐色土 弱粘性。12に多量のロームブロック。



28号住居跡出土遺物

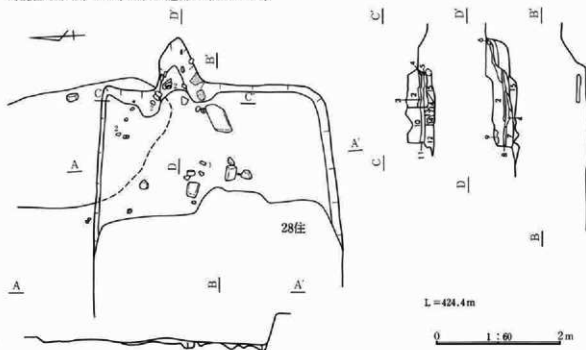
遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	26.0cm 39.5cm 埋土	13.2・4.4・6.1 3/4	白色・石英の細・粗砂粒 還元、軟質 におい黄褐色	体部はやや丸みをもち、口縁部は僅かに外反する。器内は比較的薄す。底部は割離しており、割離部の双方に回転余切り痕がみられる。Aの未切り痕はBのうったものである。	
②	須恵器 椀	カマド内	14.7・5.7・6.9 体部~口縁部3/4	白色・石英の細・粗砂粒 還元(酸化気味) 黄灰色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。高台は断面台形で厚手。高台縁部は瓦を当てたきざぎざの痕跡がある。	

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm)		胎土・焼成・色調	器形・変形の特徴	備考
			口径・器高・底径	体部～口縁部3/4 欠損			
③	須恵器 椀	カマド内	15.5・5.9・6.3	体部～口縁部3/4 欠損	白色細砂粒、多量の石英粗砂粒・細礫 還元 灰白色	器壁は石英の細粒によるハゼで全面にヒビが入っている。底部は右回転糸切り後、周辺は高台貼付時の軽い痕で。	胎土分析
4	灰釉陶 部 椀	24.0cm 36.0cm 埋土	15.0・一・一	体部～口縁部1/4	微量の黒色鉱物粒、緻密 還元 灰白色、軸は緑灰色	口縁部は若干肥厚し、口唇部が平坦気味、丁寧な作り、体部外面は陶粒置削り、外面の釉は透明化している。	胎土B
5	須恵器 広口壺	埋土	20.8・一・一	胴上位～口縁部 1/8	白色粗砂粒・石英粗砂粒 還元、軟質 黄灰色	口縁部は若干肥厚し、口唇部が平坦気味、丁寧な作り、体部外面は陶粒置削り、外面の釉は透明化している。	口縁部は若干肥厚し、口唇部が平坦気味、丁寧な作り、体部外面は陶粒置削り、外面の釉は透明化している。

37号住居跡 (写真図版17頁、107頁)

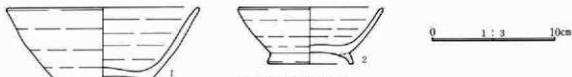
位置 8C-20グリッド 方位 N-91.0°E 形状 378×不明cmを測る。西壁側については28号住居との重複のため明らかではない。壁高は44cmを測る。床面 床はルーム地床。壁溝はなし。

柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや北寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を用いず粘土のみで構築されている。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは非常に少なく、煙道部も壁より75cmと短い。掘り方 なし。重複 28号住居跡(平安時代)と重複し、新旧関係は28号住居のカマドが遺存することから本遺構の方が古いと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物はカマド前面に散乱し出土する。出土遺物中、椀(№2)はカマド内部、及び付近よりの出土である。坏(№1)は出土位置が高く、28住のカマド範囲内の可能性もあり、また、28住の遺物と考えられる。



- 1 暗黄褐色土 ローム多量。
- 2 暗褐色土 弱粘性。所々にB軽石少量と濁乳灰色粘質土粒。
- 3 暗褐色土 弱粘性。黒色灰多量。
- 4 暗黄褐色土 弱粘性。ローム粒多量。
- 5 暗黄褐色土 細粒子。所々にローム粒、黒色灰。
- 6 濁乳灰色粘質土ブロック。
- 7 暗褐色土 弱粘性。FP、ローム粒少量。

- 8 暗褐色土 弱粘性。ローム粒、ロームブロック少量。
- 9 暗褐色土 FP少量。濁乳灰色粘質土多量。
- 10 暗褐色土 灰白色の粘土ブロック、FP少量。
- 11 暗褐色土 ローム粒子多量、FP少量。
- 12 暗褐色土 ローム微粒子多量、ローム粒子、ロームブロック少量。
- 13 暗褐色土 12に類似。ローム粒子少量。
- 14 暗褐色土 12+ローム粒子少量、1cm次のロームブロック少量。
- 15 暗黄褐色土 ローム微粒子、ローム粒子多量。

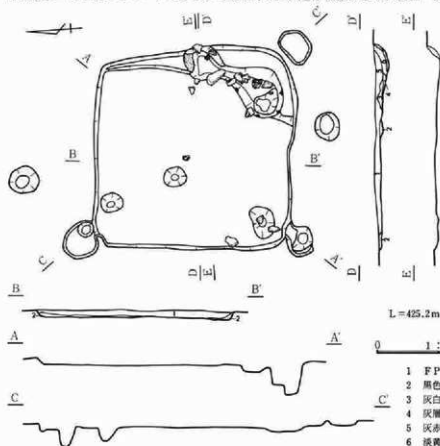


37号住居跡出土遺物

遺物番号	種類	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	口使・ 酸 坏	42.0cm	15.6・5.7・7.8 1/4	僅かな白～灰色細・粗砂粒 赤褐色円粗砂粒 酸化 にょい・褐色	体部は深く、直線的に開く。ロクロ整形 である。底部は方向不明な回転糸切り未 調整。	胎土分析
②	須恵器 椀	28.5cm 32.0cm	11.6・4.5・7.0 1/3	白色細・粗砂粒、黒色円粗砂 粒 還元 灰色	体部は直線的に開き、器内は比較的薄手。 高台は角形、細く開く。底部は右回転糸 切り、周辺部は高台貼付時に横撫で。	

43号住居跡 (写真図版18頁)

位置 2H-2グリッド 方位 N-85.0°-W 形状 322×290cmを測る隅丸方形のプランを呈し、東壁側にテラス状の段を有し、壁高は14cmを測る。床面 床は地床。本遺構の占地位置の関係上、地山は黒色土で軟質。壁溝はなし。柱穴 南西・北西の各コーナーに接し住居プラン外に2穴検出し、深度8.5～21cmを測る。その他遺構周辺に屋外柱穴と思われるピットを3穴検出するが遺構に伴うか否かは不明。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され楕円形を呈し、径69～90cm、深度19cmを測る浅い貯蔵穴である。カマド 東壁のほぼ中央に前記のテラスを切る形で設けられ、カマド内部には礫が散乱し、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであったと思われるが、遺存状態が悪く、焼土・灰の残りも少ない。



燃焼部は内側壁のライン上に位置するが、テラス部分を含めると内側に位置することになる。袖部の張り出しは少なく、煙道部も短い。掘り方なし。重複 重複する遺構はない。遺物 出土する遺物の量は少なく、遺物は貯蔵穴周辺に散乱し、出土する。

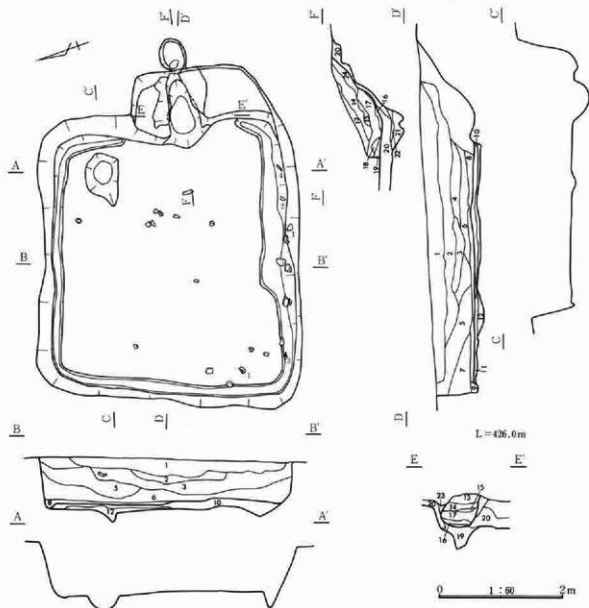
L=425.2m

0 1:60 2m

- 1 F P含む黒色土。
- 2 黒色土。
- 3 灰白色粘土。
- 4 灰層 黒色粘性質。
- 5 灰赤褐色土 粘土・焼土ブロック。
- 6 淡黄褐色土 焼土化したソフトルーム。

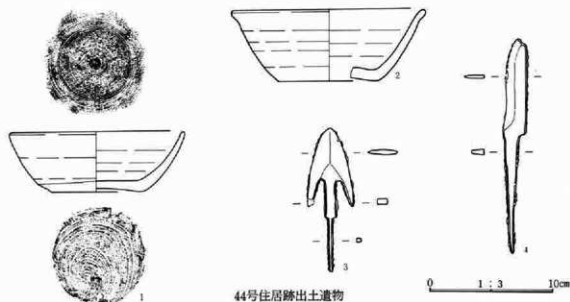
4 4号住居跡 (写真図版19頁、107頁)

位置 4H-1グリッド 方位 N-20.0°-E 形状 538×400cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は89cmを測る。床面 床はローム混じりの黒色土を叩き貼り床とする。壁溝は、カマド前面を除き、幅25cm、深度25cmの溝が全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径105～175cm、深度25cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、遺存状態は良好で煙道部



- | | | |
|------------------------|--------------------|------------------------|
| 1 黒色土 FP。 | 10 暗褐色土 ロームブロック多量。 | 17 黄褐色土 粘土、ローム。 |
| 2 黒褐色土 FP、ローム。 | 11 暗褐色土 10に類似。 | 18 黄灰色土 粘土、ローム粒、炭化物、灰。 |
| 3 ロームブロック FP。 | 12 暗褐色土 ロームブロック多量。 | 19 暗褐色土 ローム粒、灰、焼土、炭化物。 |
| 4 灰褐色土 FP、ローム、焼土ブロック。 | カマド | 20 粘土 一部焼土化。 |
| 5 黄褐色土 FP、ロームブロック。 | 13 暗茶褐色土 ローム粒、炭化物、 | 21 黒色土 ロームブロック、灰。 |
| 6 黒褐色土 FP、ロームブロック、炭化物。 | 焼土粒多量。 | 22 焼土 粘土の焼土ブロック。 |
| 7 黒褐色土 FP、ローム粒子。 | 14 黄褐色土 粘土、ローム粒。 | 23 粘土 ローム混じり。 |
| 8 黒色土 FP。 | 15 褐色土 炭化物、灰。 | 24 粘土 灰、炭化物。 |
| 9 黒色土 ロームブロック、炭化物。 | 16 黒褐色土 炭化物、灰、焼土層。 | |

先端近くには天井部を残す。袖部・煙道部には礎を用いた痕跡はなく、粘土のみで構築されており壁体の焼土化が著しい。燃焼部は壁のラインよりやや外側に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より122cmと長く、燃焼部先端より急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部付近を残し、全体を床より17cm程掘りくぼめその中に径120～360cm、深度16～29cmの床下土坑を3基検出する。また、カマド燃焼部下には、径118cm、深度18cmの土坑を有する。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は南壁際、及びカマド前面に散乱し、出土する。出土遺物中、環(№1・2)は南壁寄り、周溝際出土である。特筆すべき出土遺物として、鉄鏃(№3)・鉄製刀子(№4)の出土がある。



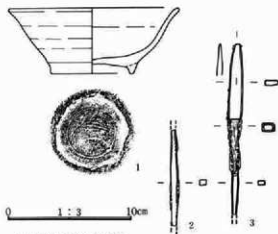
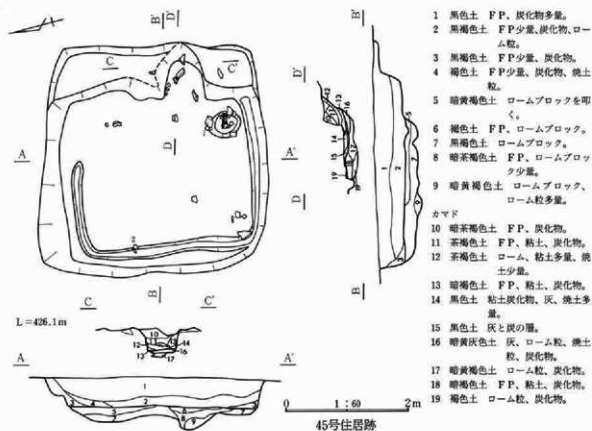
44号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	2.0cm 15cm	14.0・4.8・7.6 口縁部一部欠損	白色細・粗砂粒・細網 表面に周辺が黒色の気泡が多くみられる。還元 灰色	体部から口縁部はやや丸みをもって開く。底部は右回転糸切り未調整。	
②	須恵器 環	5.0cm 壁際	15.5・5.7・8.0 1/3	少量の石英の粗砂粒 還元 外-灰色、内-灰白色	体部は中位に丸みをもり、口縁部は外反する。器高は深く、器内は厚い。底部は回転糸切り未調整。	
③	鉄製品 鏃	42.0cm		彌生時代の片側を調査時に欠損する。茎尻は旧時の欠損。大根鏃で筒被元は区となる。鏃頭の平には洗ひ筋が付く。平肉が付いた側面刃部は給刃となる。残存長11.3cm、重21.7g。		
④	刀子 鉄製	21.0cm		当遺跡出土の中で唯一全形体をとどめる。切先部は剣状に棟側から棟落がある。棟・刃区ともに甘く磨用(工具) 刀子か。錆化は少なく精緻造を思わせる。全長17.1cm、重25.8g。		

45号住居跡 (写真図版20頁、107頁)

位置 6H-1グリッド 方位 N-71.0°-W 形状 362.5×311.5cmを測る隅丸形状のプランを呈し、東壁側のみ幅50cm程のテラス状の段を有し、壁高は46cmを測る。床面 床はローム地床で硬くしまる。壁溝はカマドをもつ東壁を除き、幅13cm、深度9.5cmの溝がコの字状に巡るが、西壁側においてはやや蛇行し、北壁側においては壁よりやや離れる。柱穴 遺構内には柱穴を検出していないが、遺構周辺に

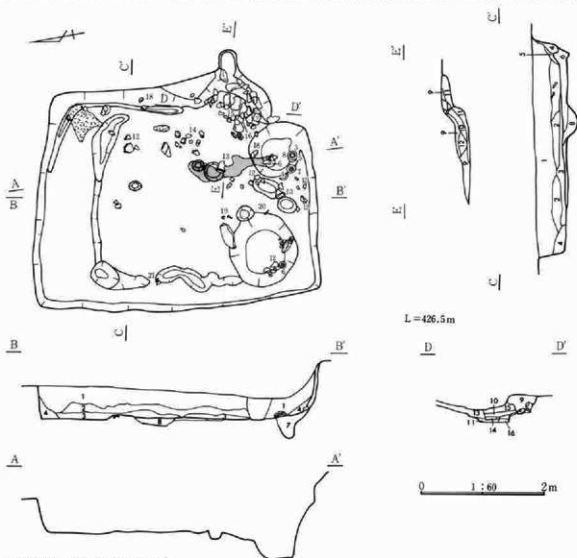
5穴程のピットを確認し、屋外柱穴の可能性もある。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径44~58cm、深度14cmを測る浅い貯蔵穴である。カマド 東壁の中央やや南寄りに前記のテラスを切る形で設けられ、袖部・煙道部には礫を用いた痕跡はなく粘土のみで構築されている。燃焼部は、壁のラインより外側に位置し、袖部の張り出しはほとんどない。煙道部は壁より65cmと長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 なし。住居中央部付近に径34~54cm、深度6~21cmの円形の浅い床下土坑を2基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居東壁寄り貯蔵穴内部等に散乱し、出土する。出土遺物中碗(No 1)は貯蔵穴埋土内よりの出土である。特筆すべき遺物として、鉄製盤(No 3)の出土がある。



番号 器種	量目(cm) 出土位置	胎土・焼成・色調 器形・口形の特徴
① 須恵器 碗	13.6・5.2・ 6.8 貯蔵穴	石英、長石、白色顔・粗砂粒 酸化 にふい褐色 体部は僅かに丸みをもち、口縁部は外反 する。底部は右回転糸切り後周辺部は高 台貼付時に施す。
②	棒状鉄製品 46.0cm	鍛は釘ほどの径目割が見られず、利器の 一部の。両端部は調査時欠損。断面形は 方形を呈する。残存長7.7+αcm、重6.3g
③	鉄製品 盤 埋土	基灰をわずかに欠損するがほぼ旧態をと どめ、柄部の一部も遺存する。鍛は径目 割がわずかにあるが全体に精緻。残存長 13.7+αcm、重18.0g。

46号住居跡 (写真図版21~22頁、107~108頁)

位置 6H-3グリッド 方位 N-79.0°W 形状 458×352cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は53cmを測る。床面 ローム湿じりの黒色土を叩き貼り床とする。壁溝は、北東コーナー部に幅10cm、深度5cmの溝がL字状に巡り、住居中央北西寄り(北壁より80cm・西壁より30cm)の所にもう一本L字状に巡る溝を検出し、これより本遺構が拡張されたものと考えられる。柱穴 住居内にピットを検出するも、その規模・深度より柱穴とは断定できない。貯蔵穴 南東コーナー付近、及び南西コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径80~132cm、深度30cm強を測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は比較的良好で、一部残る礎、及びカマド周辺に散布する礫より、煙道部には礫を並べた石組みのカマドであったと考えられ、礫の隙間には粘土を詰め固定する。燃焼部は、ほぼ壁のライン上に位置し、

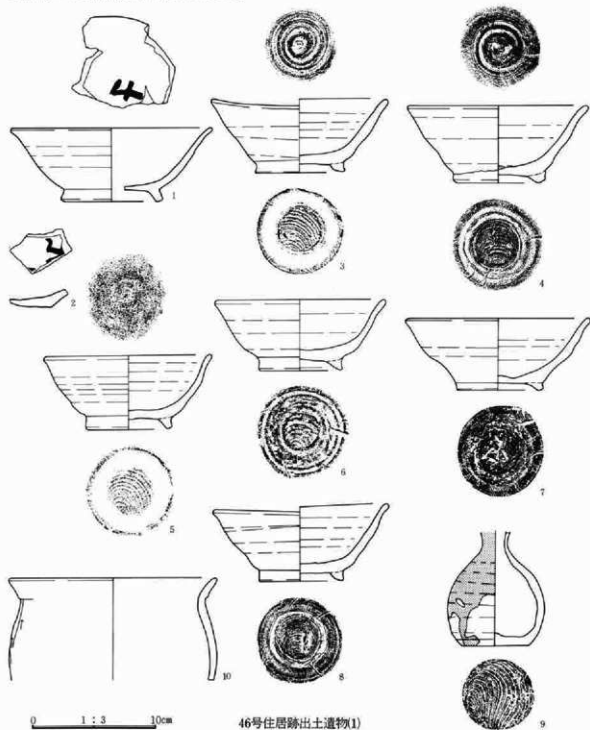


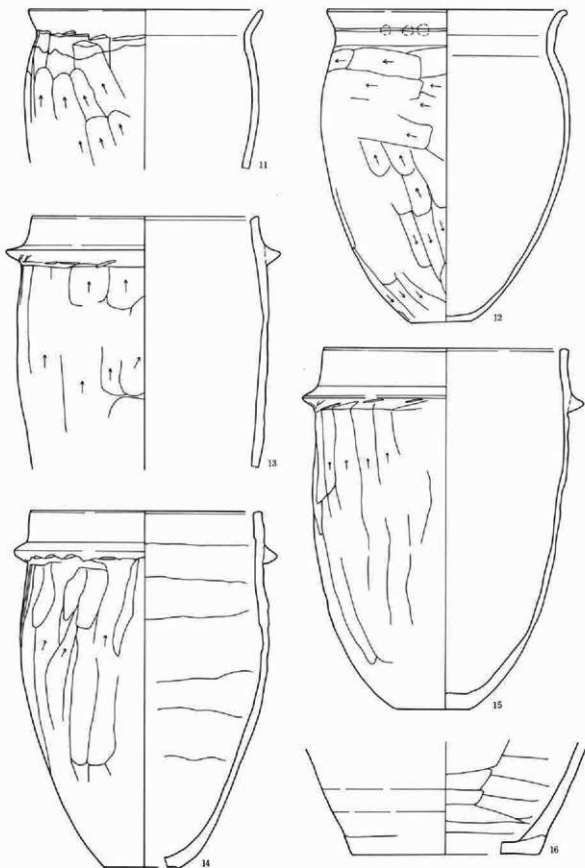
- 1 黒褐色土 F P、炭化物、ローム粒。
- 2 黒褐色土 F P、炭化物、焼土粒、ローム粒。
- 3 暗黄褐色土 F P、ローム粒、炭化物、焼土粒、粘土。
- 4 黒褐色土 F P、ローム粒、炭化物少量。
- 5 黄褐色土 F P少量、ロームブロック多量。
- 6 黒褐色土 ロームと黒色の土を叩いて固めたもの。貼り床。
- 7 F P 黒色土混土。
- 8 ロームブロック 黒色土混土。
- 9 地山

カマド

- 10 茶褐色土 F P少量、炭化物。
- 11 粘土 焼土、炭化物の混土。
- 12 黒色土 炭化物、灰。
- 13 灰のブロック。
- 14 地山ローム。
- 15 赤灰色焼土 灰、炭化物多量。
- 16 暗茶褐色土 F P、ローム粒、炭化物多量。

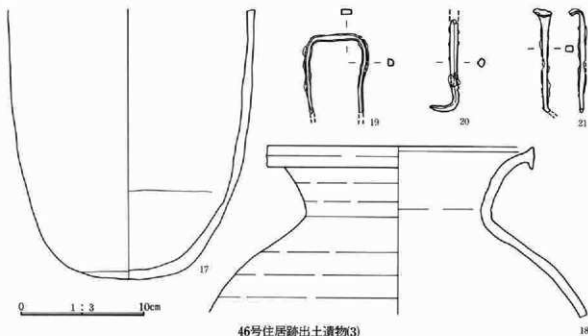
袖部の張り出しはほとんどない。煙道部は壁より89cmと長く、燃焼部端より急峻に一段上り、煙道部は緩やかに立ち上がる。掘り方なし。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多く、完形品の遺存度が高い。遺物は、貯蔵穴周辺・カマド内部・カマド前面に集中し、出土する。出土遺物中、椀(No 3、4、5、7、8)は上方から転落したような状態の出土であり、特に(No 8)と(No 5)は重なり合う状態で出土する。遺物の胎土・器形も類似しているものが多く、一括性が高いものと考えられる。また、煮沸土器の出土量が多い。特筆すべき出土遺物として、羽釜と土師器製の出土、墨書土器片、コの字状鉄製品、鉄釘などがある。





46号住居跡出土遺物(2)

0 1 : 3 10cm



46号住居跡出土遺物(3)

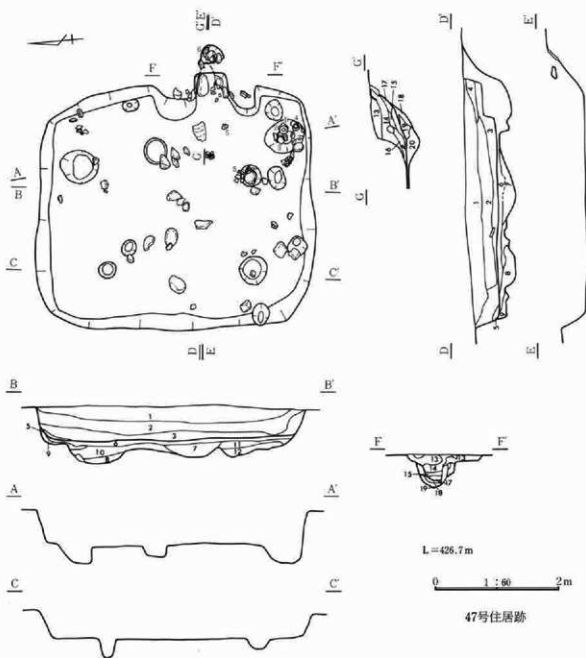
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 碗	埋土	16.0・5.8・7.2 高台部～口縁部 1/4	多量の白～灰色・石英細 粗砂粒・細礫 還元・軟質 灰白色	体部は僅かに丸みをもって開き、口縁部 はやや外反する。底部は回転糸切り、周 辺部は高台貼付時に施す。内面底部に墨 書、判読不可。	墨書
②	須恵器 坏	埋土	- - - - 小片	少量の石英細砂粒、赤褐色 円粒 還元・軟質 灰黄色	底部は回転糸切り未調整、内面体部に墨 書があるが、判読不可。	墨書
③	須恵器 碗	～3.0cm 貯蔵穴内	14.3・5.9・7.0 完形	少量の白色粗砂粒、中礫 還元 (酸化焙気味) にぶい黄褐色	体部は直線的に開くが、外面は凹凸があ る。器内は厚手。内底面には整形時の条 痕が縦線状に残る。底部は回転糸切り後、 高台貼付時に周辺部は施す。	2、4、5 と器形、整 形、胎土と も同一
④	須恵器 碗	床直 貯穴際	14.5・6.1・7.2 完形	少量の白色細砂粒、僅かな細 礫 酸化 にぶい黄褐色	1とまったく同じ器形、整形、胎土であ る。底部は右回転糸切り未調整。	胎土分析
⑤	須恵器 碗	貯蔵穴内	13.8・5.9・7.0 完形	多量の石英の粗砂粒・細礫 酸化 明黄褐色	体部はやや丸みをもち、ロクロ目が顕著 である。底部は右回転糸切り未調整。	
⑥	須恵器 碗	1.0cm	13.8・5.7・6.8 1/2	少量の白色細砂粒 還元 (酸 化焙気味) 浅黄色	体部下位が丸みをもち、口縁部が僅かに 外反する。底部は回転糸切り、高台貼付 時に周辺部回転施す。	
⑦	須恵器 碗	床直 貯蔵穴周辺	14.8・5.7・6.6 完形	白色細・粗砂粒、少量の細礫 還元 (酸化気味) にぶい黄褐色	体部中位は器内が厚く、外側に張り、凹 凸をもつ。底部は補修したらしく切り離 し痕はなく凹凸している。	
⑧	須恵器 碗	貯蔵穴内	14.0・6.0・6.7 完形	少量の白色細砂粒、中礫 酸化 にぶい黄褐色	1の碗とまったく同じ、器形、整形、胎 土である。底部は右回転糸切り未調整。	胎土分析
⑨	灰釉陶 器小瓶	周溝の立ち 上り際	- - - - 5.6 口縁部欠損	夾雑物なし 還元 灰白色 釉はオリーブ灰色	体部は丁寧なロクロ整形、下位に回転施 磨り底部は右回転糸切り未調整。	胎土C
⑩	須恵器 小形壺	21.5cm	16.5・ - - - 小片	多量の白色細・粗砂粒、石英 の粗砂粒・細礫 還元 (酸化 焙焼成) にぶい褐色	胴部は緩やかな丸みをもち、口縁部は短 く開く。口縁部内外面横割で、胴部外面 上方向への溝あり。	

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
④	須恵器 壺	カマド	18.8・ - ・ - 胴中位へ口縁部	白色・石英細・粗砂粒 還元(酸化気味) にぶい黄褐色	胴部はやや丸みをもち、口縁部は短く「く」状に開く。胴部は上方への蹴削り。内面は横撫で。	
⑤	土師器 壺	14~27cm	19.1・24.6・4.9 底部へ口縁部1/3	細・粗砂粒 普通 明赤褐色	崩れた「コ」字を呈す。器内は厚手である。	
⑥	須恵器 羽釜	1.5cm 24.5cm	17.8・ - ・ - 胴下位へ口縁部2/3	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 黄灰色	踵は比較的大きく、端正につくられる。胴部は上方への蹴削り。内面は横撫で。	胎土分析
⑦	須恵器 羽釜	15cm 36cm	18.4・28.0・6.0 底部へ口縁部1/4	白〜灰色細・粗砂粒・細礫 石英粗砂粒 還元、軟質 福灰色	踵は上面は丁寧に撫でられるが、下面は指頭による押圧のみで、接合痕が明瞭である。胴部下位は撫で、下位から踵下まで蹴削り。	
⑧	須恵器 羽釜	1.5cm 44cm	19.5・28.3・6.0 底部へ口縁部4/5	白色・石英細・粗砂粒・細礫 還元、軟質 灰白色	踵は比較的大きく、丁寧に撫でつけられる。底部整形不明、胴部下位は削りの痕跡で、胴部下位から踵下まで蹴削り、内面は横撫で。	
⑨	須恵器 壺	14.0cm	- ・ - ・ 15.0 小片	多量の白色細・粗砂粒 還元 灰色	平底、胴部は直線的に立ち上る。ロクロ整形。胴部内面は約幅1.5cm単位の整撫で。	
17	須恵器 羽釜	埋土	- ・ - ・ 8.0 底部へ胴部中位1/2	多量の白色細・粗砂粒、長石・石英の角細礫 還元(酸化気味) 灰黄褐色	底部はやや丸底気味、胴部立ち上りは丸みをもつ。外面の整形は土が固着して部分的な観察だが下方への蹴削り、底部は撫で、内面は横撫で。	
⑩	須恵器 壺	14.5~30.0 cm	21.0・ - ・ - 胴上位へ口縁部1/6	白色・石英細・粗砂粒 還元 灰白色	口唇部は幅広く垂直な面をもつ。ロクロ整形。	
⑪	引手状 鉄製品			角張ったU字状を呈する。欠損は調査時である。鍛目は径目割があり、粗鍛造。用途は門金具・引手金具などに用いたと考えられるが明瞭でない。胴の最大長4.8cm、重21.4g。		
⑫	鉄製品 釘か			欠損は調査時である。先端部が釣針状に曲る。断面は方形を呈し、釘のように見えるが鍛目に径目の箇所が少なく、精鍛造を思わせるので別種か。残存長7.2+acm、重7.5g。		
⑬	鉄製品 釘			全体に径目が顯著で粗鍛造。断面は方形を呈す。頭部は素延しの折曲り。先端部は調査時の欠損である。残存長8.3+acm、重9.6g。		

4 7号住居跡 (写真図版23頁、109頁)

位置 3H-0グリッド 方位 N-84.0°-W 形状 445×385cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は40cmを測る。床面 床はローム地床を基に床下土坑部分のみ貼り床とする。全体に軟質で凹凸がある。壁溝はなし。柱穴 4穴検出され、うち1穴は住居中央北西寄りに、残り3穴はいずれも壁柱穴で、東壁に2穴、西壁南寄りに1穴設けられ、深度は29~75cmを測る。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径50~61cm、深度30cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は比較的良好で、天井部の一部が残る。袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであり、礫の間には粘土を詰め固定する。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部も壁より63cmと短く、急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部付近に径80~140cm、深度21~30cmの楕円形の床下土坑を3基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少ないが、完形品の遺存度が高い。遺物は、住居中央部に散乱し出土する。出土遺物中、坏(No2、3)・椀(No1)は貯蔵穴内よりの出土であり、特に(No1)と(No2)は重なり合う状態で出土し、遺物の胎土・器形も類

似しているものが多く、一括性が高いものと考えられる。特筆すべき出土遺物として、貯蔵穴東の壁にかかった状態で表裏面に「宮田寺」と記した墨書土器碗（No 4）の出土がある。



1 赤褐色土 浅間山B輝石少量、FP。

2 暗茶褐色土 FP、ローム粒。

3 明茶褐色土 FP、ローム粒少量。

4 黄褐色土 FP少量、粘土、ローム粒、焼土。

5 暗黄褐色土 ローム粒多量。

6 粘り床 ロームブロック、黒色土を囲める。

7 黄灰色土 ロームブロック、灰、炭化物。

8 黒褐色土 ローム粒多量。

9 赤褐色土 FP少量、ロームブロック。

10 褐色土 FP少量、ロームブロック多量。

11 黄褐色土 FP少量、ロームブロック。

12 明黄褐色土 FP少量、ローム粒多量。

カマド

13 白色粘土 FP、焼土の混土。カマド用材の崩壊したもの。

14 黒色土 FP。

15 赤褐色土の焼土。

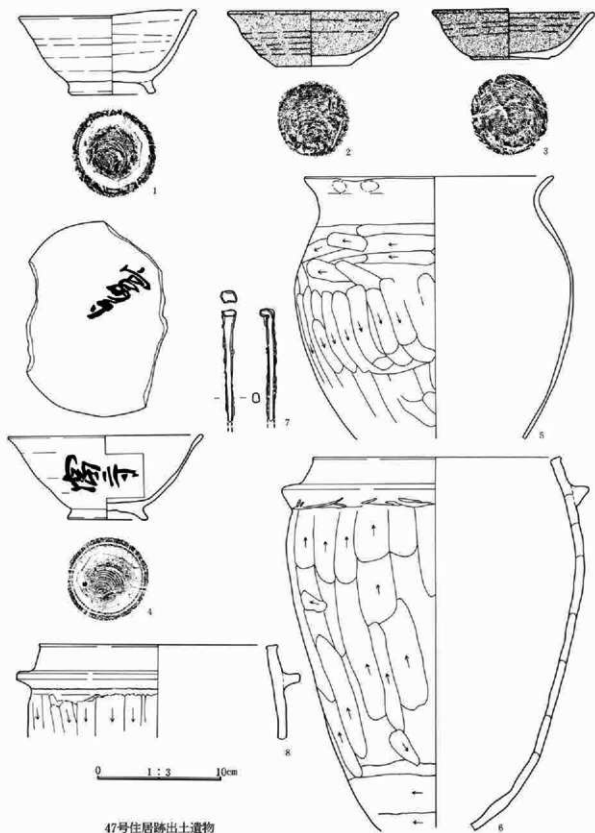
16 焼土を含む粘性土。

17 焼土を含む粘性土。

18 黒色灰層。

19 焼土 ローム粒混じりのブロック。

20 黒色土 炭化物、灰、焼土粒。



47号住居跡出土遺物

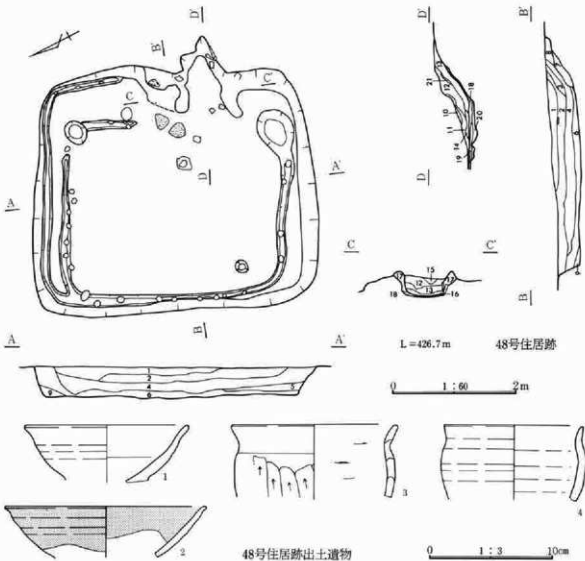
遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm)	粘土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	貯蔵穴 底面より18 cm	14.4・6.7・6.8 口縁部一部欠損	多量の石英・長石・白色の細・粗砂粒・細礫 酸化 にぶい黄褐色	体部は立ち上りに丸みをもち、口唇部まで直線的に開く。器内は口唇部まで均一。底部は回転糸切り後周辺部は高台貼付時に撫で。	
②	須恵器 杯	貯蔵穴底より18cm	13.6・4.5・5.8 宛形	多量の石英・白色細・粗砂粒 焼成 黒褐色	体部は丸みをもって開き、口唇部が強い。口縁部は外反。底部は右回転糸切り未調整。	
③	須恵器 杯	貯蔵穴 底面より16 cm	13.2・4.0・6.5 口縁部一部欠損	多量の石英・白色細・粗砂粒 焼成気味 にぶい黄褐色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
④	須恵器 椀	11cm 貯穴際 壁密着	15.4・6.8・6.3 体部へ口縁部の 1/2を欠く。	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) 灰黄色 暗褐色	器内が薄手である。体部下から1/3程のところに輪積の痕跡がみられる。底部は右回転糸切り、周辺部は高台貼付時の撫で。内面底部、外面体部横位に「富田寺」の墨書あり。	墨書
⑤	土師器 壺	床直	19.8・一・一 胸中位へ口縁部 2/3	白色細砂粒、赤褐色粗砂粒 普通 褐色	口縁部は揃れた「コ」字状を呈し、歪みがみられる。	
⑥	須恵器 羽釜	床直 煙道上 3.5cm カマド袖上	19.8・一・一 底面、胴下半1/3を 欠く。	白色・石英細・粗砂粒・細礫 還元、軟質 黄灰色	胴は大きく、上向きで、丁寧に付けられる。底部から胴部立ち上りは丸みをもち、底部は欠くが丸底気味のもとと思われる。胴下位は横方向の撫で。胴部は上方向寛形りの後撫で。内面は回転撫で。	胎土分析
⑦	釘	掘り方	和釘である。破線は調査時の欠損。柱目割があり粗鍛造。全長14.9cm、重8.6g。			
8	須恵器 羽釜	床下 -16cm	19.0・一・一 口縁部1/3	白色細砂・石英粗砂・細礫 還元、軟質 灰色	胴は大きく、丁寧に撫でられ、底部は平ら面を持つ。胴部は下方向への削り。	脚付羽釜か

4 8号住居跡 (写真図版24頁)

位置 10H-2グリッド 方位 N-64.0°-W 形状 473×366cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は50cmを測る。床面 床はローム地床。平坦で締まりあり。壁溝は、カマド前面を除き、幅10cm、深度5cmの溝がほぼ全周するが、北壁、及び東壁側にはこれより14~59cm内側にもう一条の溝がL字状に深さ。このL字状の溝内には径5~10cm程のピットが点々と穿たれ、坑の痕跡と考えられる。また、壁溝の南壁側はやや壁から離れ蛇行する。柱穴 住居北東部壁溝のコーナー、及び住居中央南西側に2穴を検出し、深度13~20cmを測る。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径55~70cm、深度28cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部の一部には礎が残り、石組みのカマドであったと考えられ、礎の間隙には粘土を詰め固定するが、礎の使用は僅かであり粘土主体であったと考えられる。燃焼部は、壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは多く、礎を核に粘土を貼り構築する。煙道部は壁より57cmと短く、あまり突出せず急峻に立ち上がる。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。備考 本遺構は、前記の壁溝のあり方に加え、埋土断面においても内側壁溝のライ

- | | | |
|---------------------------------|----------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 大粒のFP少量、ローム粒子、ローム層移層土少量。 | 色シルト層ブロック、ローム粒子多量。 | 12 褐色土 FP、炭化物。 |
| 2 暗褐色土 1に類似。炭化物、焼土粒子少量。 | 7 ローム層移層土(地山)。 | 13 灰白色土 灰、粘土、炭化物、焼土粒多量。 |
| 3 暗褐色土 2に類似。乳白色シルトブロック少量。 | 8 暗褐色土 2に類似。ローム粒子少量。 | 14 褐色土 FP少量、炭化物、焼土粒。 |
| 4 暗褐色土 混入物は2と同じだが黒色土混入。 | 9 暗褐色土 5に類似。黒色土少量、ローム粒子多量。 | 15 茶褐色土 炭化物、粘土。 |
| 5 暗褐色土 黒色土混入量4より多量。 | 10 黒色土 FP少量、炭化物。 | 16 赤灰色 焼土、灰多量。 |
| 6 暗褐色土 5に類似。FP少量、乳白 | 11 灰白色土 灰、粘土炭化物。 | 17 白色粘土層。 |
| | カマド | 18 黒灰層。 |
| | | 19 ローム粘土 炭化物。 |
| | | 20 ロームブロック多量。 |
| | | 21 暗茶褐色土 FP少量、炭化物、焼土粒。 |

ン上に立ち上がりが確認されるが、カマドの状態、及び西壁の共有から考えて重複とは考えられず、遺構の規模縮小と考えられる。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、カマド前面に散乱し、出土する。出土遺物中、床面直上よりの出土はない。



L=426.7m 48号住居跡

0 1:60 2m

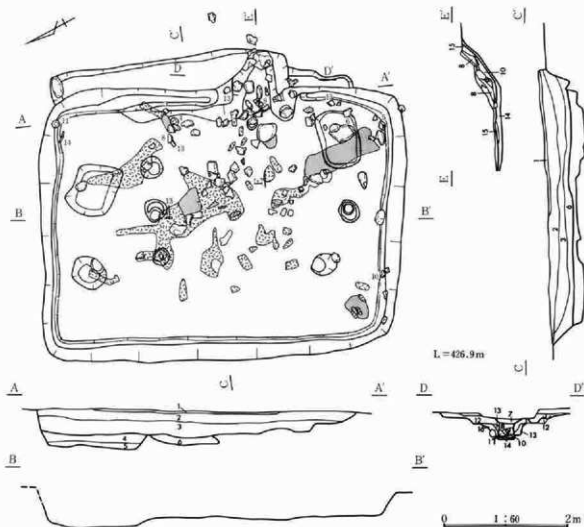
48号住居跡出土遺物

0 1:3 10cm

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 罎	埋土	13.0・ - - - 小片	白色・石英細砂粒 還元 (酸化気味) 橙色	体部はやや丸みを持ち、口縁部は外反する。底部は糸切り痕がみられるが、剥落しており、円柱作りと思われる。	
2	灰釉陶器 椀	埋土	16.0・ - - - 体部~口縁部1/4	微量の白色細砂粒 還元 (酸化気味) におい橙色、釉は明オリブ灰色	口唇部が僅かに外反する。体部外面は回転置削り。整形は丁寧である。釉は塗り掛けによる施釉。	胎土E
3	須恵器 小形罎	カマド埋土	13.2・ - - - 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元。軟質 外-灰黄色、内-黒褐色	口縁部は回転置削り、胴部外面は上方への置削り、内面は横方向への置削り。	
4	須恵器 小形罎	埋土	11.0・ - - - 小片	白色細砂粒、石英粗砂粒 還元、軟質 灰白色	胴部は丸みを持ち、口縁部は短く直立する。	

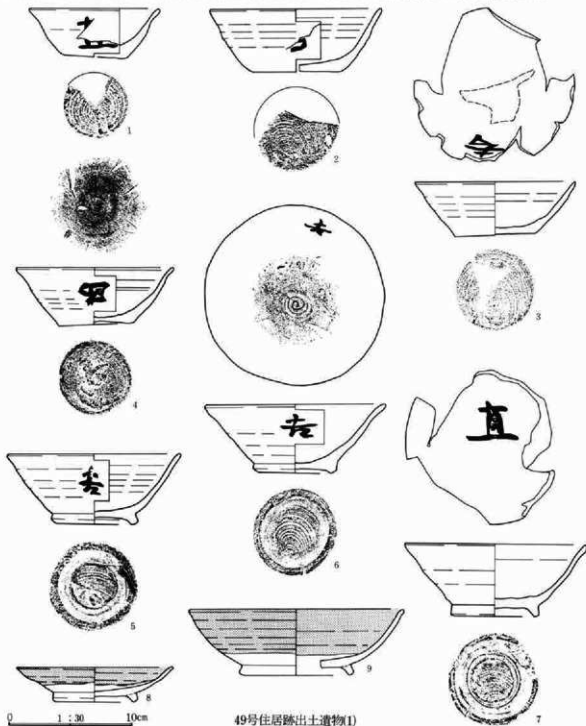
49号住居跡 (写真図版25頁、109~110頁)

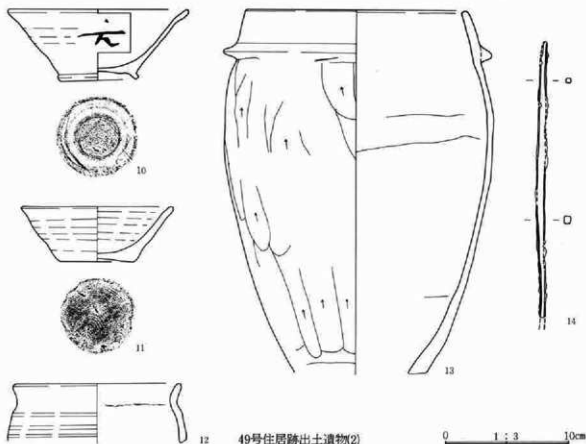
位置 11H-2 グリッド 方位 N-63.0°-W 形状 581×432cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、東壁側にテラス状の段を有する。壁高は57.5cmを測る。床面 床はローム混じり黒色土を叩き貼り床とし、堅くしまる。壁溝は、カマド前面を除き、幅9cm、深度10cmの溝がほぼ全周する。柱穴 4穴検出され、平面プランはカマドを中心に展開し、住居に対し南寄りとなる。貯蔵穴 南東コーナー付近カマド寄りに検出され、楕円形を呈し、径63~93cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は良好で天井部の一部を残す。袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであり、礫の隙間には粘土を詰め固定する。天井部は礫を用いず粘土のみで構築されている。燃焼部は、壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは比較的多い。煙道部は壁より60cmと短く、やや急峻に立ち上がる。また、煙道部先端には大形の礫を用いた天井としている。掘り方 北東コーナー付近と南東コーナー付近を残し、全体に浅く掘



- | | | |
|-----------------------|-----------------------|------------------------|
| 1 浅間山B軽石層。 | カマド | 12 白色粘土層。 |
| 2 黒色土 F P。 | 7 暗茶褐色土 F P、ローム粒、炭化物。 | 13 粘土と地山の焼土化。 |
| 3 黒色土 2に類似、F P少量。 | 8 暗黄灰色土 粘土、炭化物、焼土。 | 14 黒色灰と地山の混土。 |
| 4 黒色土 F P少量、焼土、炭化物少量。 | 9 赤褐色土 粘土が焼土化したもの。 | 15 貼り床 焼土粒、ロームブロック、粘土。 |
| 5 黒色土 F P少量、炭化物。 | 10 黒灰層。 | 16 地山の土とローム粘土の混じり、焼土化。 |
| 6 粘土。 | 11 暗灰色土 粘土、灰、炭化物、焼土。 | |

りくぼめる。 重複 重複する遺構はない。 備考 床面上に炭化物が多量に残ることから、本遺構は焼失家屋である可能性が高いが壁の焼土化は見られなかった。また、本遺構の埋没最終段階の埋土に浅間山B軽石の降下が見られる。 遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多く、完形品の遺存度が高い。遺物は、貯蔵穴付近・カマド前面から住居中央にかけて散乱し、出土する。出土層位は大半が前記の炭化材より上面からの出土である。出土遺物中、椀 (No. 6) は貯蔵穴内に落ちた状態の出土であり、他の遺物も含め遺物の胎土・器形も類似しているものが多い。特筆すべき出土遺物として、墨書土器が8点出土し、「直」の文字と「吉」の文字が判読できる。また、棒状鉄製品 (No14) は鉄製紡錘車の一部と考えられる。





49号住居跡出土遺物(2)

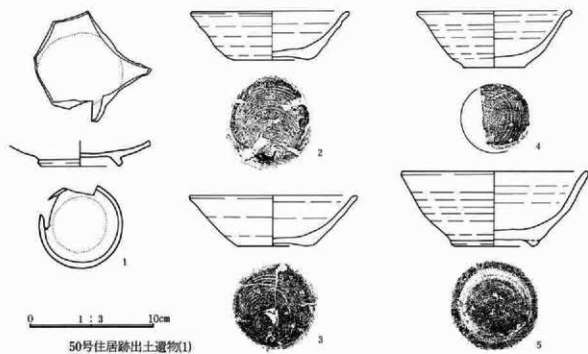
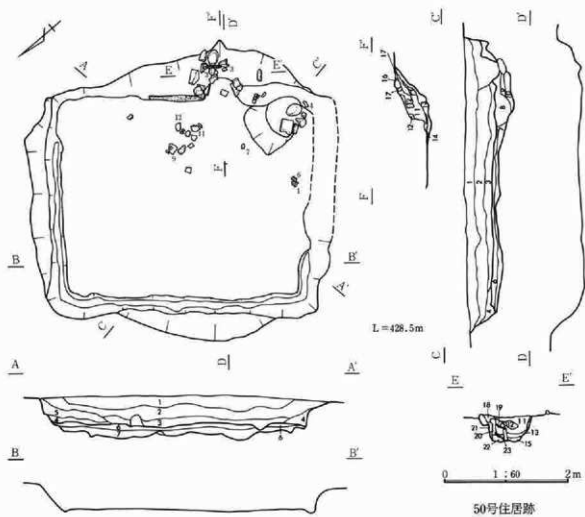
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・構成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 杯	埋土	10.4・3.9・5.0	白色・石英粗砂粒 還元(酸化窒素) 淡黄褐色	底部は右回転糸切り未調整。外面体部に正位で「直」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 杯	埋土	13.8・5.0・7.0	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。外面体部に墨書あり。判読不可。	墨書
③	須恵器 杯	26.0cm	12.8・4.3・6.4 3/4	多量の石英粗砂粒 還元、軟質 浅黄色、内側灰色	右回転糸切り未調整。内面体部正位で「吉」の墨書あり。	墨書
④	須恵器 杯	6.0cm	12.4・4.7・5.8 口縁部一部欠損	多量の白色・石英の細・粗砂粒 還元、軟質 灰黄色	底部は右回転糸切り未調整。外面体部に墨書があるが、判読不可。	墨書
⑤	須恵器 碗	18.0cm 24.0cm	13.8・5.5・6.8 口縁部一部欠損	多量の白色細・粗砂粒、石英少量 還元、軟質 灰色	底部は右回転糸切り後、周辺部は高台貼付時跡で。外面体部に正位で「吉」の墨書あり。	墨書
⑥	須恵器 碗	貯穴底面	15.4・5.5・5.8 尖形	多量の石英粗砂粒・細織 還元、軟質 浅黄、灰白色	内底径が不明瞭。中心に蝶線状の調整痕をもつ。内外面体部に正位に「吉」の墨書あり。	墨書
⑦	須恵器 碗	埋土	14.5・5.7・7.0 2/3	白色細砂粒、少量の石英粗砂粒 還元、軟質 浅黄色	底部は右回転糸切り後、周辺部は高台貼付時に跡で。内面体部に「吉」の墨書あり。	墨書
⑧	灰輪陶 器皿	21.5cm	12.6・2.8・6.2 口縁部一部欠損	白色細砂粒、微量の黒色紅物粒 還元、堅緻 灰白色 釉は明オリブ灰色	口縁部は撫で調整の痕がみられる。体部内面は中心部まで丁字にコテがあてられ、外面もぬた痕はない。底部は回転置削りの後、高台貼付時に跡でいる。高台は正円形をなし、外側の縁は比較的シャープである。覆け掛けによる施釉、内面に同底径の重ね焼痕あり。	胎土B

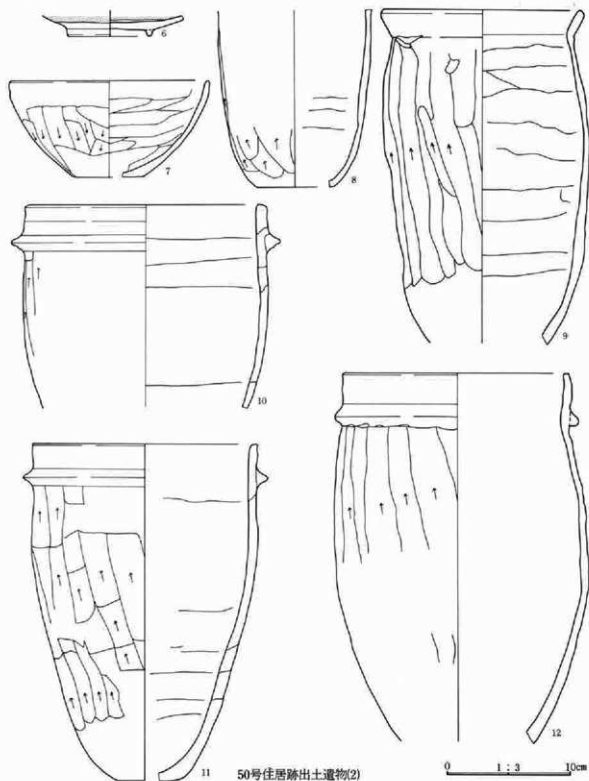
遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・高さ・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑩	灰釉陶器 碗	3.0cm	17.2・5.3・9.0 1/5	微量の白色細砂粒 還元 暗灰黄色、釉はオリブ灰色	体部は丸みをもち、口唇部が僅かに外反する。外面は丁寧な釉で、内面底部は砥として使用されたため、調整砥はみられない。外面底部は回転削削りの後、釉で覆い掛け。	覆砥 転用砥 胎土A
⑪	須恵器 椀	床直	14.0・5.6・5.8 体～口径部1/2欠損	多量の白色細砂粒、石英粗砂粒 還元、軟質 灰白色	内底径は不明瞭。右回転糸切り、底部周辺は高台貼付時跡で、外面体部に不明瞭な重書。	重書
⑫	須恵器 杯	10.5cm 壁密着	12.0・4.6・6.0 完形	多量の白色細・粗砂粒・細礫、石英・長石の粗砂粒 還元、軟質 灰黄色	体部は直線的に開き、口縁部が僅かに外反する。内面は暖やかに立ち上り、底部と体部の境は不明瞭。底部は右回転糸切り未調整。	
12	小形甕	埋土	13.6・ - ・ -	白色細砂粒 還元 灰白色	須恵器ロクロ甕の小片。	
⑬	須恵器 羽釜	13.0cm 29.0cm	17.8・ - ・ - 胴部下位～口径部 1/4	白色細・粗砂粒、石英細礫、赤褐色円形砂粒 還元(酸化気味) 灰白色、浅黄褐色	胴部上位に最大幅をもち、口径部に向って窄まる。口径部内外面横溝で、外面は上方への荒削り、下位は横溝で、内面は横溝で。	
⑭	棒状鉄製品	7.0cm		断面は隅丸方形を呈す。片端は調査時の欠損。縦は径目割れが少しあり、やや粗な鍛造である。機軸は中央部分が太く何かの軸を思わせる。残存長22.0+acm、重18.9g。		

50号住居跡 (写真図版26頁、110～111頁)

位置 23H-0グリッド 方位 N-53.0°W 形状 525×450cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は40cmを測る。床面 床はロームブロック混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝は、カマド前面を除き、幅10cm、深度5cmの溝が全周すると思われるが、南東部は攪乱にかかり、明らかではない。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近には攪乱があり、明確に検出し得なかった。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には隙を並べた石組みのカマドである。隙の隙間には粘土を詰め固定する。燃燒部は壁のラインより外側に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部は壁より78cmと比較的長い。煙道部中程に土器器壁胴部破片が出土し、カマド材の一部として使用された可能性がある。掘り方 住居中央部付近を残し、コの字状に浅く掘りくぼめる。重複 重複する遺構はないが、住居南東コーナー付近を土坑状の攪乱にて切られる。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、カマド内部及びカマド前面に集中し、出土する。出土遺物は床面直上よりの出土は見られない。特筆すべき出土遺物として、甕(No 8、9)・鉢(No 7)があり、両者共に羽釜の胎土・技法に共通するところが多い。

- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 茶褐色土 F.P.、ロームブロック多量。 | 12 灰白色粘土 灰少量。 |
| 2 暗茶褐色土 F.P.、ローム粒、炭化物。 | 13 灰褐色土 粘土、F.P.、灰、炭化物。 |
| 3 褐色土 F.P.、炭化物少量、ローム粒、焼土。 | 14 黒色灰層。 |
| 4 暗褐色土 F.P.、炭化物。 | 15 地山のローム 無移層。 |
| 5 暗灰褐色土 F.P.少量、灰、炭化物、焼土粒。 | 16 粘土ブロック。 |
| 6 貼り灰 F.P.、ロームブロック。 | 17 茶褐色土 F.P.少量。 |
| 7 茶褐色土 ロームブロック。 | 18 茶褐色土 F.P.少量。 |
| 8 暗褐色土 炭化物、灰、焼土。 | 19 粘土層。 |
| 9 暗灰色 灰、焼土。 | 20 炭化物を含む粘土。 |
| 10 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒。 | 21 焼土 粘土の焼土化。 |
| カマド | 22 地山にローム粒 焼土層。 |
| 11 黒色土 F.P.、砂利層、焼土、灰少量。 | 23 炭化物等少量含む。 |





50号住居跡出土遺物(2)

遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	灰釉陶 器皿	攪乱内?	- - - 6.2 高台一体部下位	微量の黒色粒、緻密 還元 灰白色、釉は白色味を帯びる	底部は回転撫で。内面底部は転用碗として使われたものか、研磨されている。	摺痕

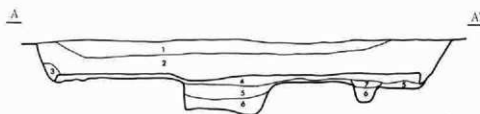
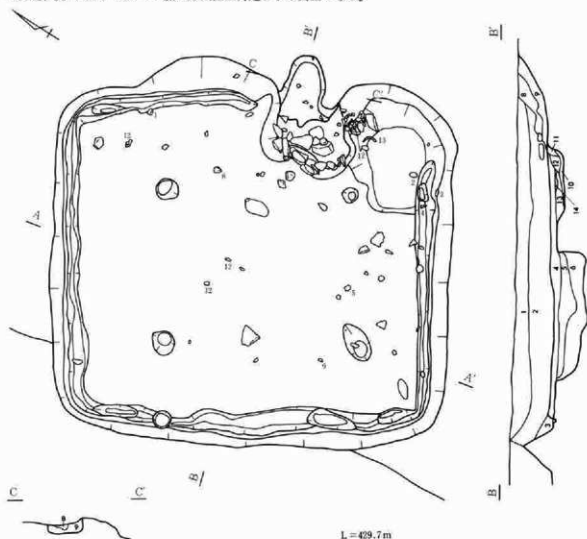
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・高さ・底径	胎土・構成・色調	器形・整形の特徴	備考
②	須恵器 坏	床直	12.6・3.9・6.0 1/2	白色細・粗砂粒、石英・長石の粗砂粒・細礫 酸化褐色	体部は直線的に開くが、口縁部が顕著である。底部は右回転赤切り未調整。	
③	須恵器 坏	35.0 cm ~ 38.0cm	13.6・4.0・6.0 3/4	多量の長石・石英・白色粗砂粒・細礫 酸化 におい褐色	体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外反する。右回転赤切り未調整。	
4	須恵器 坏	10.0cm	12.3・4.5・4.9 1/3	僅かな白色細砂粒、黒色細礫 還元 灰白色	底径が小さく、体部はやや深め、丸みをもって開き、口縁部が外反する。底部は右回転赤切り未調整。	
⑤	須恵器 椀	埋土	15.0・6.0・7.0 1/2	白色細・粗砂粒、石英・粗砂粒・細礫 酸化 におい黄褐色	体部はやや丸みをもち、唇部は口唇部まで均一である。底部は右回転赤切り後、周辺部は高台貼付時に撫で。	
6	灰釉陶器 皿	攪乱内?	-・-・6.8 口縁部欠損	僅かな黒色円形粗砂粒、緻密 還元 灰白色	高台は低く、端部は丸みをもつ。軸はオリーブ灰色。	胎土C
⑦	土師器 鉢	7.5cm	16.0・7.7・5.5 1/4	白色細・粗砂粒、少量の石英細礫 酸化焰 におい褐色、部分的に黒色	平底。体部はやや丸みをもって開き、口縁部は直立する。口縁部横撫で、体部は下方への寛削り、内面は刷毛目様の粗い横撫で。	
8	須恵器 壺	床直	-・-・6.0	黄白色粗砂粒・細礫、赤褐色粗砂粒 酸化焰 におい赤褐色	平底。下半部の破片なので器種は羽釜か壺か不明。整形は胴部下位は撫で、胴部は上方への寛削り。内面横撫で。	
⑨	須恵器 壺	16cm 18cm 23.8cm	15.6・-・- 底部、胴下位2/3欠損	白～灰色・石英細・粗砂粒・細礫 還元 (酸化気味) におい褐色	胴部はやや丸みをもち、長胴、口縁部は短く開く。胴下位は撫で、下位から胴部まで上方向寛削り。内面は横撫で、口縁部回転撫で。	胎土分析
10	須恵器 羽釜	埋土	19.4・-・- 小片	白色細・粗砂粒、石英粗砂粒、8mm前後の岩片 還元 (酸化気味) におい黄褐色	胴部はほとんどふくらみをもたず、口縁部は直立する。	
11	須恵器 羽釜	18.0 cm ~ 23.6cm	18.0・26.8・6.0 1/4	白色細・粗砂粒、石英粗砂粒・細礫、赤褐色円形細礫 還元 (酸化気味) におい黄褐色	平底。胴部は丸みをもって立ち上り、中に僅かなふくらみをもって、口縁部は直立する。胴部は上方への寛削り、下位は撫で。底部は撫で。	
⑫	須恵器 羽釜	3.0cm 23.8cm 38cm	18.0・-・- 胴上位～口縁部 3/4 胴下位～中位1/3	白色細砂粒、石英粗砂粒 還元 (酸化気味) 浅黄褐色	筒は下向きで、端部が厚く丸みをもつ。胴部下位は削りの後、撫で、下位から筒下まで寛削り、内面は横撫で、胎土分析。	胎土・整形とも9の壺と類似

5 1号住居跡 (写真図版27頁、111頁)

位置 16 I-4 グリッド 方位 N-67.0°-E 形状 634×574cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は51cmを測る。床面 床はローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とし、堅く締まりがある。壁溝は、カマド前面を除き、幅20cm、深度19cmの溝がほぼ全周する。柱穴 住居プランに沿って床面に4穴検出され、径24～65cm、深度50～72cmを測り、西壁に壁柱穴2穴を検出し、径26～79cm、深度25～60cmを測る。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径136～156cm、深度44cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、残存状態はあまり良くないが、カマド周辺に散乱する礫より、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より37cmと極めて短く、急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部付近に径25

～134cm、深度10～68cmを測る楕円形の床下土坑を15基検出する。重複 重複する遺構はない。

遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居中央部・カマド周辺等に散乱し、出土する。出土遺物中、坏 (No 2、4、5)・蓋 (No 9) は床面直上付近、壺 (No 12) はカマド脇の床面直上付近よりの出土である。



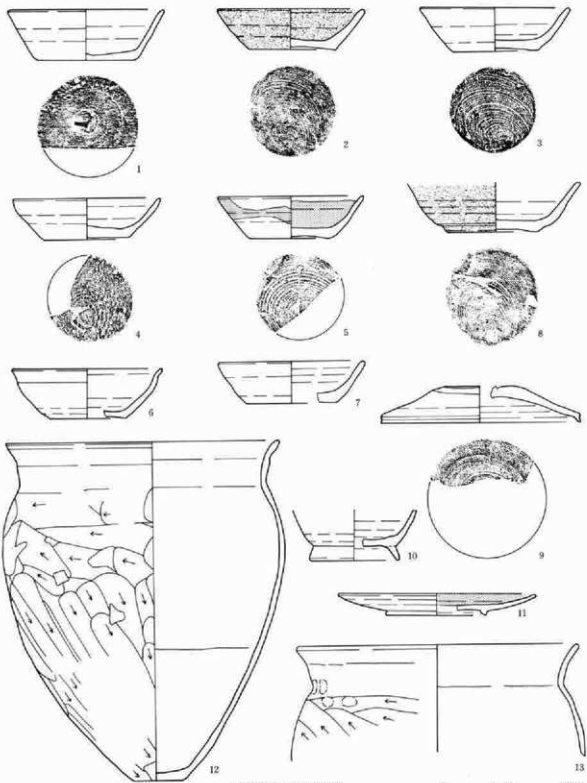
- 1 FP含む砂礫土層。
- 2 FP含む砂礫土層 炭化物、ローム粒少量。
- 3 黄色褐色土 FP、ロームブロック。
- 4 FP ロームブロック、茶褐色土を叩く貼り肌。
- 5 茶褐色土 FP、ロームブロック。
- 6 ロームブロックが主体で少量の茶褐色土。
- 7 褐色土 ロームブロック、FP。

カマド

- 8 焼土 粘土・FPの混土層。
- 9 焼土・灰の混土層。
- 10 白色粘土。
- 11 ローム、FP・粘土粒。
- 12 11より粘土多量。
- 13 粘土にFP。
- 14 ローム 焼土ブロック多量。

51号住居跡

0 1:60 2m



51号住居跡出土遺物

遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口徑・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・器形の特徴	備考
①	須恵器 坏	6.0cm	12.6・4.0・8.0 1/3	少量の白色細砂粒 還元 灰色	体部は直線的に開く。底部は回転削り 後、回転磨で。	

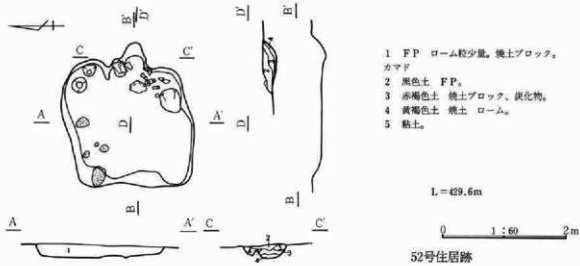
第3章 検出遺構・遺物

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
㉔	須恵器 杯	6.0cm	11.6・3.2・7.2 完形	白色細・粗砂粒・細礫 焼し 焼成 灰色	体部は直線的に開き、口縁部内側に弱い 稜をもつ。底部は右回転糸切り未調整。	
㉕	須恵器 杯	15.0cm	12.0・3.6・6.8 口縁部一部欠損	少量の白色細・粗砂粒、石英 の細礫、黒色円形礫 還元 灰色、灰白色	体部から口縁部まで直線的に開く。底部 は右回転糸切り未調整。	胎土分析
㉖	須恵器 杯	床直	11.9・3.3・7.0 1/2	少量の長石・石英の細礫 還元 灰白色	体部は直線的に開き、上位から口縁部は 内彎する。底部は右回転糸切り未調整。	
㉗	須恵器 杯	5.0cm	11.8・3.3・7.0 1/2	白色細・粗砂粒・細礫 焼し 外一浅黄色、内一黒色	体部は直線的に開く。底部は右回転糸切り 未調整。	
㉘	須恵器 杯	埋土	12.0・3.9・6.0 小片	少量の白色細砂粒、石英の細 礫、赤褐色粗砂粒 還元 灰色、黄褐色	体部は僅かに丸みをもち、口縁部の器内 は薄く、僅かに括れて外反する。底部は 回転糸切り未調整。	
㉙	須恵器 杯	埋土	11.8・3.3・7.4 1/4	少量白色粗砂粒・細礫 還元 外一灰色、内一灰白色	体部は直線的に開く。器高は低く、器内 はやや厚手、底部は右回転糸切り未調整。	
㊀	須恵器 杯	17.0cm	- - - 7.6 1/2	白色細・粗砂粒、灰色細礫 焼し焼成 外一黒色、内一暗 灰黄色	体部下位は稜をなして、底部に向って窄 まる。底部は右回転糸切り未調整。	
9	須恵器 蓋	1.0cm	16.0・- - - 小片	白色細・粗砂粒、石英・長石 の粗砂粒 還元 黄灰色	天井部は水平面をもち、器内が厚く、口 縁部に向って薄くなる。口縁部は屈曲し、 口唇は外反。	
㊁	須恵器 椀	埋土	- - - 7.4 高台～体部下位 1/2	僅かな白色粗砂粒 還元 灰白色	高台は底径の内側に貼付され、「八の字」 状に開き、端部は丸い。	
11	灰釉陶 器 皿	1.5cm	16.0・1.8・8.0 1/5	僅かな茶色鉱物粒 還元 灰白色	体部は僅かな丸みをもち、口唇部は僅か な平坦面をもつ。高台は角形を呈し、外 端部が接地する。底部は回転稜削り。軸 は内面のみ薄く塗られているが、ほとん ど剥落している。	胎土A
㊂	土師器 壺	0.5 4～7 39cm	21.8・27.0・4.5 2/3	白～灰色細・粗砂粒、僅かな 赤褐色円粗砂粒 普通 橙色	口縁部はやや開き気味に立ち上り、上位 は外反。口唇部外側に弱い沈線が通る。 底部は一方の隅削り。内面胴部は横方 向の寛帯で。	
㊃	土師器 壺	床直	22.6・- - - 口縁部～胴部上位 1/2	白～灰色細・粗砂粒、角閃石 粗砂粒 普通 におい橙色	口縁部は外反気味に立ち上り、上位がさ らに外反する。胴部から口縁部は指頭 による成形の凹凸が目立つ。	

5 2号住居跡 (写真図版28頁)

位置 21I-5グリッド 方位 N-85.0°-E 形状 208×200cmを測る隅丸形状のプランを呈する小形の住居跡であり、壁高は18.5cmを測る。床面 床は地床であるが、占地上の理由により黒色土でやや硬質であり壁溝はない。柱穴 北東コーナー付近に2穴のピットが検出されたが比較的浅く、柱穴か否か明らかでない。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央に設けられ、両袖部には礫を置く。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より34cmと極端に短い。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。備考 本遺構は検出整穴住居跡中、最小規模の住居跡であり、住居内での居住を考えると、その規模よりかなり困難と思われ、その用途は作業小屋的なものか、カマドを持

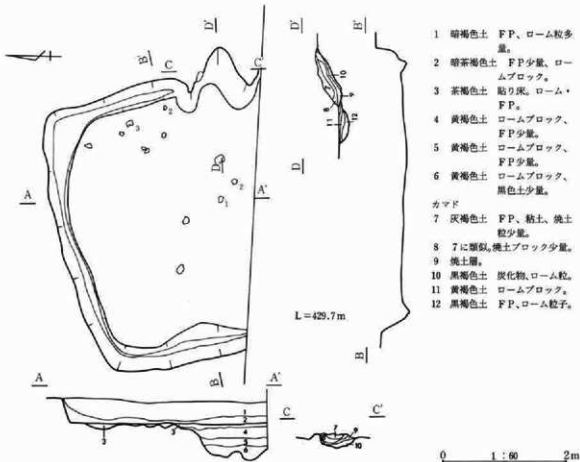
つことから炊事専用住居かと推察される。遺物 遺構内より遺物の出土は見られなかった。



- 1 FP ローム粒少量、焼土ブロック、カマド
- 2 黒色土 FP、
- 3 赤褐色土 焼土ブロック、炭化物、
- 4 黄褐色土 焼土 ローム、
- 5 粘土。

53号住居跡 (写真図版28頁、111頁)

位置 17I-16グリッド 方位 N-80.5°-E 形状 住居南側が調査区域外にかかり、全体の形状、及び規模は不明であるが、東西方向には449cmを測り、壁高は40cmを測る。床面 床はローム混じりの黒褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅20cm、深度8cmの溝がほぼ全周すると思われるが南側は不明である。柱穴 調査部分においては検出されていない。貯蔵穴 調査部分においては検



- 1 暗褐色土 FP、ローム粒多量、
 - 2 暗茶褐色土 FP少量、ロームブロック、
 - 3 茶褐色土 貼り床、ローム・FP、
 - 4 黄褐色土 ロームブロック、FP少量、
 - 5 黄褐色土 ロームブロック、FP少量、
 - 6 黄褐色土 ロームブロック、黒色土少量、
- カマド
- 7 灰褐色土 FP、粘土、焼土粒少量、
 - 8 7に類似、焼土ブロック少量、
 - 9 焼土層、
 - 10 黒褐色土 炭化物、ローム粒、
 - 11 黄褐色土 ロームブロック、
 - 12 黒褐色土 FP、ローム粒子、

出されていない。カマド 東壁に設けられ、袖部には掘り方調査の結果、礎設置の痕跡が認められることから、礎を並べた石組みのカマドであると考えられる。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より44cmと短い。掘り方 住居中央部、及び北側に径120~160cm、深度20~49cmの円形の床下土坑を2基検出する。うち、深度20cmの浅い土坑内には白濁色の粘土ブロックが散乱し出土し、カマド使用の粘土に酷似する。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居全体に散乱し、出土する。出土遺物中、坏 (No.1、2) は床面直上付近よりの出土である。



53号住居跡出土遺物

0 1:3 10cm

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・器径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	2.0cm	11.8・3.4・6.8 口径部一次損	白色細・粗砂粒、長石角細燐 還元(酸化気味) 洗黄色、 黒色	体部下位は底部に向って窄まり、口径部 までは直線的に開く。底部は右回転糸切り 未調整。	
②	須恵器 坏	3.5cm	11.6・3.5・6.3 1/2	少量の白色細砂粒 還元 灰色	底部は右回転糸切り未調整。内面は、整形 に使う工具痕が、比較的深い条痕が残 っている。	
③	須恵器 坏	10cm	11.4・3.9・5.5 2/3	少量の白~灰色細砂粒 還元 灰白色	体部は丸みをもって開き、口径部は外側 にふくらみをもつ。底部は右回転糸切り 未調整。	

54号住居跡 (写真図版29頁、112頁)

位置 23I-6グリッド 方位 N-74.5°-E 形状 424×354cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は48cmを測る。床面 床はローム混じりの黒褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅8cm、深度7cmの溝がほぼ全周する。後記のとおり本遺構西壁側が重複のため明らかではなかったが、この壁溝により住居範囲が確定された。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、71~92cm、深度36cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄り設けられ、袖部には礎を置く。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは比較的多く、煙道部は壁より59cmと短い。掘り方 住居中央部付近とカマド前面を残し、コの字状に浅く掘りくぼめる。重複 61号住居跡と重複するが、新旧関係は明らかではなく、耕作による溝状の攪乱を受ける。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、カマド内部及びカマド前面に散乱し、出土する。出土遺物中、碗 (No.9) は床面直上よりの出土である。特筆すべき出土遺物として、「有午」と記した黒書土器 (No.2) があり、「有」と「午」の文字には若干間隔がある。

1 浅間山B軽石層。

2 黒色土 FP。

3 黒色土 FP。2より粘性有り。

カマド

4 灰白色粘土 カマド用材。

5 灰白色粘土と焼土の混土 FP。

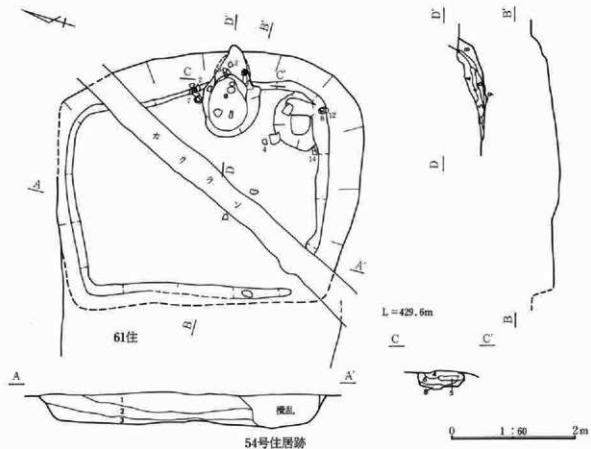
炭化物少量。

6 赤褐色粘土 灰少量。

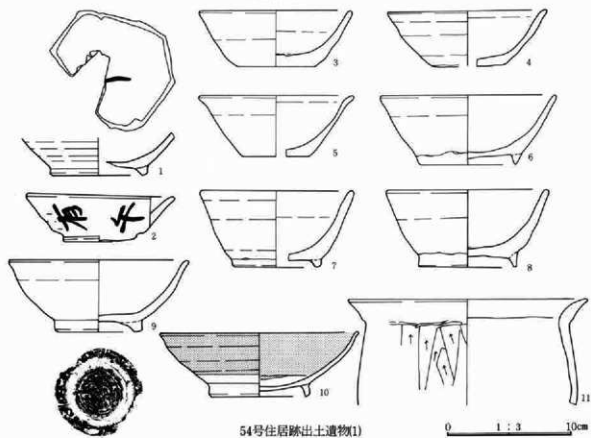
7 暗赤褐色土 灰、焼土ブロック、焼土粒。

8 茶褐色土 焼土、ローム粒。

9 ロームの焼土化。

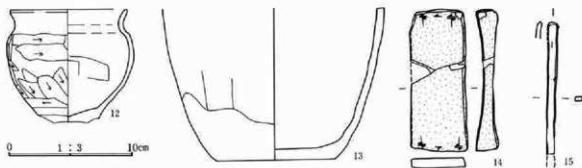


54号住居跡



54号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出遺構・遺物



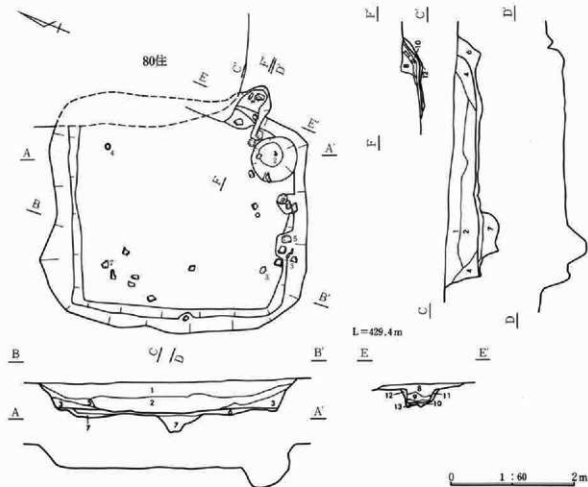
54号住居跡出土遺物②)

遺物番号	種類	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	埋土	-・-・7.0 高台～体下位2/3	灰色粗砂粒、石英粗砂粒 還元、軟質 灰白色	内面底部に薄く墨書があるが、欠けているため判読不可。	墨書
②	須恵器 環	埋土 20.0cm	11.8・3.8・5.6 体～口縁部1/3欠損	多量の石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) 灰黄褐色	底部は右回転糸切り未調整。外面体部横位に「有午」の墨書がある。	墨書
③	須恵器 環	14.5cm	12.2・4.4・6.3 1/4	白色細砂粒、少量の石英細粗砂粒・細礫 還元(酸化気味) に黄褐色	器内は厚く、体部はほぼ直線的に開く。内面底部は螺旋状の調整痕有り。底部は右回転糸切りだが、断でか厚減のためか不鮮明。	
④	須恵器 環	13.0cm	12.6・4.5・5.8 1/2	多量の赤褐色円粗砂粒 酸化 橙色	口縁部回転断で、体部外面は回転を使っていない横方向の撫でて、所々にぬた痕がみられる。内面は水で撫でたような感じで整形の方向がみえない。底部は静止糸切り。	60住と接合
⑤	須恵器 環	埋土	12.4・4.8・5.3 1/5	僅かな褐色の細礫、夾雑物は少ない。 還元 軟質 灰黄色	底部は体部の1/2以下と小さく、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
⑥	須恵器 椀	29.5cm	14.0・5.5・7.5 1/3	白色細・粗砂粒、赤褐色円粗砂粒 還元(酸化気味) に黄褐色	体部は僅かに丸みをもち、ほぼ直線的に開く。高台は指押えの凹凸が残る。底部は回転断で。	60住と接合 胎土分析
⑦	須恵器 椀	20.0cm	13.8・6.0・8.7 1/3	白色粗砂粒・細礫、赤褐色円粗砂粒 還元(酸化気味) 黄灰色	器内は厚く、体部は僅かに丸みをもつ。高台はやや歪んでおり、端部は裏の当たった痕がある。内面ワコロ整形、外面体部は指痕による撫で痕がみられる。底部回転断で。	
⑧	須恵器 椀	7.5cm	12.9・6.1・7.7 1/3	白色細・粗砂粒・細礫 赤褐色円粗砂粒 還元(酸化気味) に黄褐色	器内は厚く、体部は僅かに丸みがあるが、ほぼ直線的。高台は貼付時に指で押えた凹凸がある。底部はボロボロに剥落したものの、底辺部は高台貼付時の回転断で。	胎土分析
⑨	須恵器 椀	床直	14.4・5.7・7.0 1/2	白色細・粗砂粒、赤褐色円粗砂粒、少量の石英粗砂粒 還元(酸化気味) に黄褐色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。高台厚く外縁部は指を持つが、内面は丸みをもつ。内面底部は螺旋状の調整痕をもち、底部は右回転糸切り後周辺部は高台貼付時の断で。	60住と接合
⑩	灰釉陶器 椀	埋土	15.9・5.1・8.1 1/3	僅かな白色細砂粒、黒色鉱物粒 還元、堅礫 灰黄色 釉は灰白色	口唇部は外反、高台外面に明瞭な積をもつ。内面に同高台径の重ね焼き痕をもつ。底部は回転磨削り、高台貼付時に回転断で。釉は刷毛塗り。	胎土A
11	須恵器 壺	埋土	19.0・-・- 小片	白色細砂粒、石英粗砂粒・細礫 還元 灰白色	口縁部は短く外反する。口縁部は回転断で。胴部は上方向への寛削り。内面は横撫で。胎土は羽釜と同様である。	

遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑫	土師器 台付壺	3.5cm	9.3・・・・ 口径部一部、台部欠損	白色・石英・角閃石の細砂粒 良好 によい褐色	口縁部は緩やかに括れて外反する。胴部は最上位にふくらみをもり、右部に向って窄まる。口縁部は横断で、胴部上位は横方向風削り、胴部下位は下方向への風削り、指頭による無。	
⑬	須恵器 羽釜	床直 16.5cm	・・・9.4 底部～胴部下位	白～灰緑・粗砂粒、少量の石英粗砂粒 還元（酸化気味） 外一にふい褐色、内一黒色	平底、底径が大きい。胴部外部、上方向への風削り。下位は横方向の撫で。内面は横方向の風削り。	60住と接合
⑭	石製品 砥石	13.0cm			使用の当初は自然産利用砥石、手前小口に原石面あり。使用は表裏、両側部である。表裏は使用耗により中央が薄くなる。使用面は左上りとなり、右利用。質は軟か目の名倉級。石材は流紋岩（砥沢か）。	
⑮	鉄製品 判器	埋土			両端部は凹部をとどめる。全体に偏平であり、両端部は鉄料ではないが片刃状に突るため工具とも思われる。鍔は極目割が少なく精緻。全長10.5cm、重6.8g。	

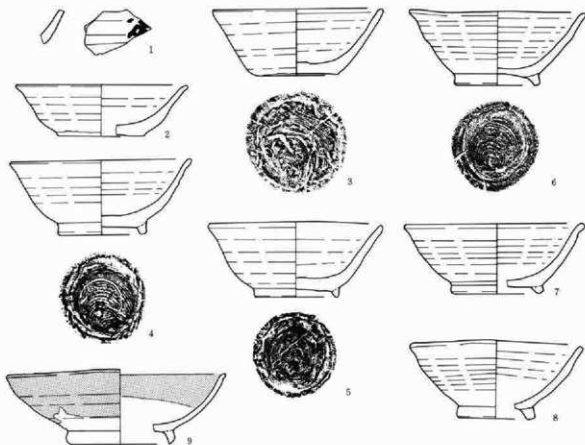
5 5号住居跡 (写真図版30頁、112頁)

位置 24 I - 2 グリッド 方位 N-72.0°-E 形状 438×423cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は55cmを測る。床面 ローム地床。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径69～75cm、深度30cmを測る。カマド 東壁の中央南寄りの南東コーナー部に近い位置に設けられ、両袖部と煙道部の一部に礫を置くが大半は粘土で構築されている。燃焼部は壁のラ



イン上に位置し、袖部の張り出しは多く、煙道部は壁より33cmと短く急峻に立ち上がる。掘り方 西壁中央付近に径90~116cm、深度36cmの円形の床下土坑を1基検出する。重複 80号住居跡(平安時代)と重複し、新旧関係は埋土断面、及び本遺構のカマド遺存より本遺構の方が新しいと判断される。

- | | | |
|------------------------|-------------------------|-------------------|
| 1 暗茶褐色土 F.P.、ローム粒少量。 | 6 粘り灰 ロームブロックで固く締まる。 | 10 暗灰色 黒灰、炭化物、焼土。 |
| 2 暗黄褐色土 F.P.少量、ローム粒多量。 | 7 暗赤褐色土 ローム粒、極少量のF.P. | 11 粘土ブロック。 |
| 3 明茶褐色土 F.P.、ローム粒。 | カマド | 12 地山の焼土化。 |
| 4 茶褐色土 極少量のF.P.、ローム粒。 | 8 茶褐色土 F.P.少量、ローム粒、炭化物。 | 13 炭化物 焼土、ローム粒。 |
| 5 茶褐色土 ロームブロック。 | 9 灰白色土 粘土灰、焼土粒、炭化物。 | |



55号住居跡出土遺物

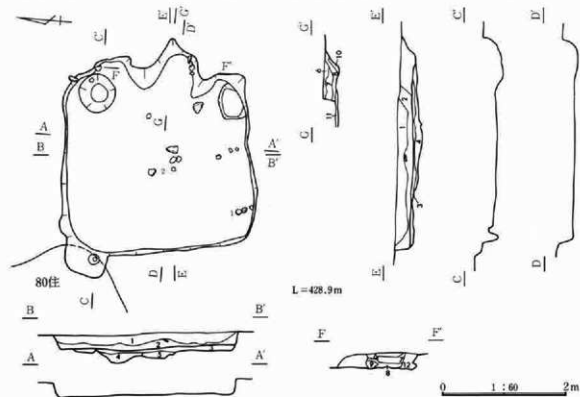
0 1:3 10cm

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 環	埋土	- - - - 体部小片	少量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に薄く墨書あり、判読不可。	墨書
②	須恵器 環	16.0cmバマ F埋土	13.6・4.1・6.8 底部〜口縁部1/4	白色・石英粗砂粒 還元(酸化気味) にぶい褐色	体部は丸みをもち、器内が厚く、外反する口縁部に向って薄くなる。底部は右回転糸切り。	
③	須恵器 環	16.5cm 床から29cm 埋土	13.4・5.3・6.6 口縁部2/5欠損	白色・石英粗砂粒、6mm程度の白色塵を含む 還元(酸化気味) にぶい黄褐色	体部は立ち上りに丸みをもつが、ほぼ直線的に開き、底部が非常に厚い。底部は右回転糸切り未調整。内面は中心部を残してコテが当てられている。	
④	須恵器 椀	4.5cm 埋土	14.4・5.9・7.0 高台部〜口縁部1/2	白色顔・粗砂粒、石英粗砂粒 還元(酸化気味) にぶい黄褐色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り後、周辺部は高台粘付時の態で。	

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑤	須恵器 椀	10.5cm 埋土	14.0・6.0・6.5 高台部～口縁部 3/4	白色細・粗砂粒・細礫 石英 細砂粒、赤褐色円形砂粒 酸化 褐色	体部は立ち上がりに丸みをもち、器内は 厚手。高台は厚さが不均等で、歪みがあ る。高台の内側は回転力のない態で、	
⑥	須恵器 椀	埋土	14.0・6.0・7.0 体部～口縁部1/3 欠損	白色細砂粒・中礫、僅かな石 英細砂粒 還元（酸化気味） に多い黄褐色	体部は僅かな丸みをもち、クロロ目が強 く残る。口縁部は若干外反する。内面は 中心部がやや凸出する他はなだらかであ る。底部は右回転糸切り後、周辺部は高 台貼付時の態で、	
⑦	須恵器 椀	12.0cm 埋土	14.2・5.5・7.4 高台部～口縁部2/ 1	少量の白色・石英細砂粒 還元、軟質 に多い黄褐色	体部はやや丸味をもち、口縁部は僅かに 外反する。底部は回転糸切り。	
⑧	須恵器 椀	埋土	14.0・6.2・6.0 高台部～口縁部 1/5	白色・石英細砂粒～細礫 還元、軟質 灰黄色	体部はやや丸みをもち、口縁部が僅かに 外反する。	
⑨	灰釉陶 器 椀	埋土	18.0・5.9・8.0 高台～口縁部1/5	微量の黑色鉛物粒 還元 灰白色、軸は白色	全体的に歪みが著しいが、180°の回転実 験ではなく、断面は本来の器形を留めて いるところを測った。口唇部は僅かに外 反、高台は外面に丸味のある三ヶ月高台。 軸は横け掛け。	

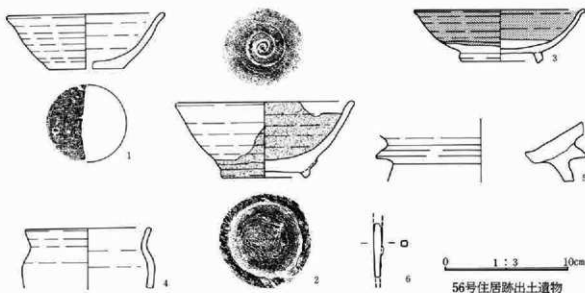
56号住居跡 (写真図版30～31頁、112～113頁)

位置 1J-2グリッド 方位 N-82.0°-E 形状 313×310cmを測る隅丸方形のプランを呈し、
壁高は25cmを測る。床面 床は少量のローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はなし。柱
穴 なし。西壁外北側にピットを1基検出するが本遺構に伴うものか否かは明らかではない。
貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径32～55cm、深度10cmを測る。カマド 東壁の
中央やや南寄りに設けられる。遺存状態が悪く、形状は明らかではないが、袖部周辺に礫を数個出土するた



め、石組みのカマドであった可能性がある。燃焼部は壁のライン上に位置し、煙道部も壁より40cmと短い。掘り方 住居中央部付近に径114cm、深度119cmの円形の床下土坑を1基検出する。重複 80号住居跡(平安時代)と重複し、新旧関係は住居プラン確認時の埋土より本遺構の方が新しいと判断される。

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1 暗茶褐色土 F P、ローム粒、B軽石少量。 | 7 粘土 焼土ブロック、灰、赤黒褐色土。 |
| 2 暗茶褐色土 F P少量、ローム粒、炭化物。 | 8 7に類似。黒色灰を含。 |
| 3 粘り床 F P少量、ローム粒で固めている。 | 9 粘土とローム粒の固まり カマド地。 |
| 4 暗黄褐色土 ロームブロック多量。 | 10 焼土・灰の混土層。 |
| 5 暗茶褐色土 F P、ロームブロック。 | 11 粘り床 ロームを固めたもの。 |
| カマド | 12 暗茶褐色土 粘土、炭化物、ローム粒。 |
| 6 淡褐色土 粘土。 | |

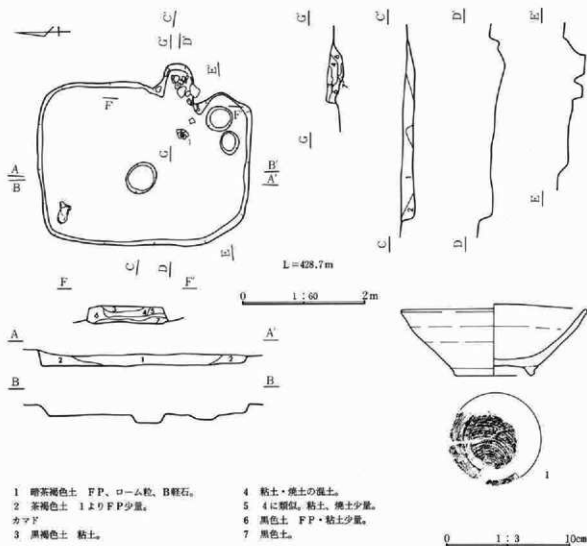


56号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 杯	9.5cm	12.6・4.3・6.0 1/3	白色細・粗砂粒、石英粗砂粒 還元(酸化気味) 外一灰色、内一灰黄色	体部は中位にやや丸みをもち、口縁部は外反する。	
②	須恵器 椀	2.0cm 5.5cm	14.4・6.0・7.2 2/3	白色細・粗砂粒、石英の粗砂粒・細礫 焼し焼成 灰黄色・黒色	体部は僅かに丸みをもって開き、口唇部まで器内は均一である。底部は回転未切り後周辺部は高台貼付時に削で。	
③	灰釉陶器 椀	貯蔵穴内 -3cm	13.6・4.1・6.7 3/4	微量の黒色紅土粒 還元 灰白色、軸はオリーブ灰色	体部は丸みをもって開き、口唇部が外反する。横け掛けによる加軸だが、内面は降灰により全周軸がかかっている。	胎土C
4	須恵器 小形壺	埋土	10.0・-・- 小片	少量の白色粗砂粒 還元(酸化気味) 灰黄褐色	胴部は丸みをもって、口縁部は短く外反する。ロクロ整形。	
④	須恵器 器種不明	埋土	-・-・- 小片	多量の白色細・粗砂粒 石英の粗砂粒・細礫を含みガサガサしている 還元 灰黄色	底部周辺部から台部にかけての破片。底部と台部の境に凸帯をもつ。	
⑤	鉄製品 基か	-5.0cm	上方は旧時の欠損。断面形は方形を呈する。図下方につれ薄くなるため刀子などの基か。鍔は縦目割が発達していないため精鍛造を思わせる。残存長4.2+αcm、重3.8g。			

57号住居跡 (写真図版31頁、113頁)

位置 2J-3グリッド 方位 N-89.0°W 形状 342×258cmを測る隅丸方形状のプランを呈し、壁高は25cmを測る。床面 ローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径44~30cm、深度20cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、右側袖部のみ残を残すことから、石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より35cmと極めて短い。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少ない。遺物は、椀(No.1)がカマド前面に集中し、出土するが、床面よりやや高い位置での出土である。



1 暗茶褐色土 FP、ローム粒、B軽石。

2 茶褐色土 1よりFP少量。

カマド

3 黒褐色土 粘土。

4 粘土・焼土の混土。

5 4に類似, 粘土・焼土少量。

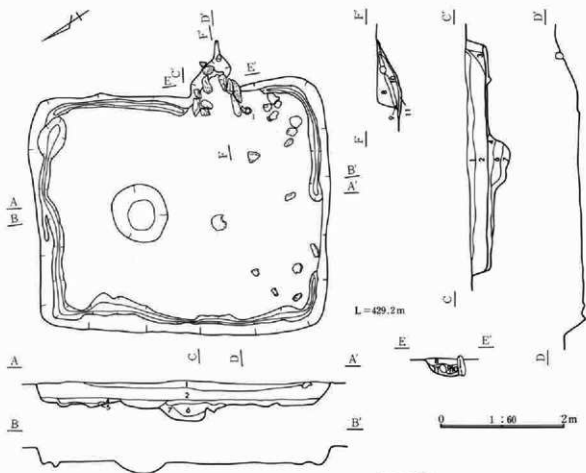
6 黒色土 FP・粘土少量。

7 黒色土。

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	13.5cm カマド内	15.0・5.8・6.4 口縁部一部欠損	少量の石英・白色の粗砂粒 総體 酸化 灰黄褐色	体部は上位で僅かにふくらみをもつが、ほぼ直線的に開く。底部は右回転未切り未調整。	

58号住居跡 (写真図版32頁、113頁)

位置 71-4グリッド 方位 N-59.0°-W 形状 470×400cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は30cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅15cm、深度10cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の間には粘土を詰め固定する。燃燒部は壁のより内側に位置し、袖部の張り出しは比較的多く、煙道部も壁より75cmと長い。掘り方 住居中央部付近に径140~120cm、深度32cmの円形の床下土坑を1基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少ない。出土遺物中の紡錘車 (No.2) には「×」か「十」の刻字が見られる。



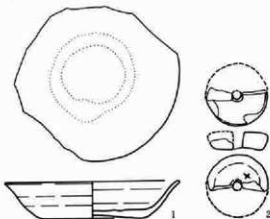
- 1 黒色土 FP、ロームブロック少量。
- 2 1に類似。
- 3 黒褐色土 ロームブロック、粘土ブロック。
- 4 貼り床 ロームブロック等で固めてある。
- 5 ローム層移層 ロームブロック多量。
- 6 茶褐色土 ロームブロック多量。
- 7 暗茶褐色土 ロームブロック少量。

カマド

- 8 暗茶褐色土 FP、ローム粒。
住居の埋土。
- 9 黄灰色土 粘土、ローム粒。
- 10 焼土・炭化物の混土層。
- 11 赤褐色土 灰・焼土混土層。

0 1:3 10cm

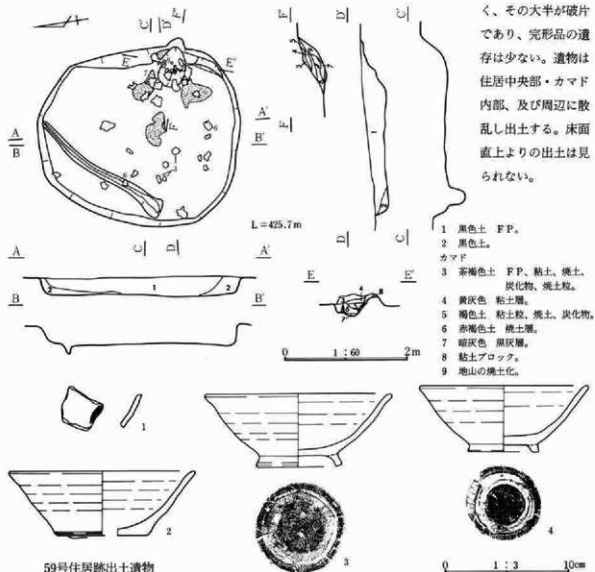
58号住居跡出土遺物

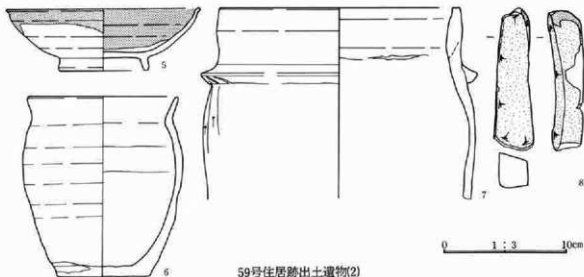


遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	5.0cm	14.0・2.9・8.0 4/5	白色細砂粒 還元 灰色	体部は浅く、やや丸みをもって開き、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	転用混 澄痕
②	石製 紡錘車	埋土	上径4.80・下径4.08・穴径0.69・厚さ1.40 重量(30.4)・石材 蛇紋岩(かんらん岩)		1/2程欠損、下面に「十」刻字、磨滅甚大。	

59号住居跡 (写真図版33頁、113頁)

位置 3H-2グリッド 方位 N-72.0°-W 形状 323×285cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は28cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を核として並べた石組みのカマドである。礫の間隙には粘土を詰め固定するが、礫の使用は少なく粘土を主体に構築する。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは多く、煙道部は壁より13cmと短く、急峻に立ち上がる。掘り方 なし。重複 重複する遺構はないが、耕作による溝状の攪乱を受ける。遺物 出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居中央部・カマド内部、及び周辺に散乱し出土する。床面直上よりの出土は見られない。





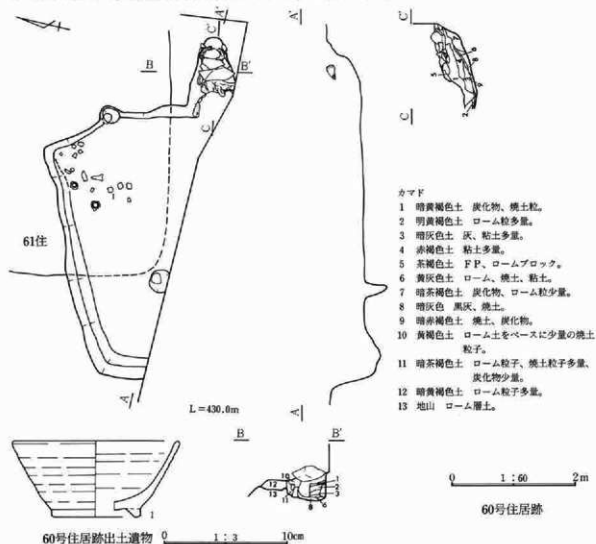
59号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 坏	埋土	- - - - 体部小片	白色・石英細・粗砂粒 還元・軟質 灰白色	内面体部に墨書あり。一部なので判読不可。	墨書
②	須恵器 坏	埋土	15.0・5.1・7.5 1/3	石英・白色細・粗砂粒 酸化 ぶい黄褐色	体部は直線的に開く。体部下端の沈線は糸の当たった痕か。体部の一部に補修痕あり。	
③	須恵器 椀	3.5cm 5.0cm	15.0・5.8・6.8 2/3	白色細・粗砂粒・細礫、石英 細・粗砂粒 還元(酸化気味) 灰白色	体部は僅かに丸みをもって開く。口縁部は外反。底部は右回転糸切り後周辺部は高台貼付時に整で。	
④	須恵器 椀	埋土	13.6・5.2・5.6 2/3	石英・白色細・粗砂粒 焼し 焼成 黒褐色	体部はやや丸みをもって開く。底部は右回転糸切り後周辺部は高台貼付時に整で。	
⑤	灰釉陶器 椀	埋土	15.6・4.9・7.3 1/2	少量の白色粗砂粒 還元 灰黄褐色	体部は僅かに丸みをもって開く。口縁部は薄く外反する。軸は剛毛塗り。	粘土A
⑥	須恵器 小型壺	4.0cm 8.0cm カマド内	12.0・14.3・7.4 底部へ割中位、口 縁部の一部欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元(酸化気味) ぶい橙 色	底部は切り離しや調整の痕跡がない。ロクロ整形。砂の付着もない。	粘土分析
7	須恵器 羽釜	4.5cm	19.4・ - - - 小片	石英粗砂粒、白色粗砂粒・細 礫 還元(酸化気味) 灰黄色	胴部はややふくらみをもり、口縁部は中位が突出し直立する。胴部外面上方向への尻削り口縁部横撫で、胴部内部横撫で。	
⑧	石製品 砥石	1.5cm			使用の当初は自然石利用紙か、奥側小口に原石面あり。使用は表裏、両側面である。表面は使用により中央が薄くなる。使用面は左上りととなり右利用。質は軟か目の名倉敷。石材は浪紋岩(砥沢)。	

60号住居跡 (写真図版34頁、113頁)

位置 21I-7グリッド 方位 不明。形状 東西方向へ405cmを測るものの、南側が調査区域外にかけ、全体の形状は不明である。床面 床はローム地床でやや軟質である。壁溝は、カマド前面を除き、幅15cm、深度5cmの溝がほぼ全周するものと思われる。柱穴 調査範囲内において2穴検出。全体では4穴になるものと思われる。貯蔵穴 不明。カマド 東壁に設けられ、遺存状態は極めて良好で、ほぼ使用時の状態を保つと考えられ、袖部・煙道部、及び天井部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の隙間には粘土を詰め固定する。天井部の礫は左右の礫に架け橋状に設置する。燃焼部は壁のラインより外

側に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より46cmと長い。掘り方不明。重複 61号住居跡と重複するが、新旧関係は不明。遺物 遺構内より出土する遺物の量は少ない。遺物は北東コーナー部に散乱し出土する。出土遺物中、床面直上よりの出土は見られない。



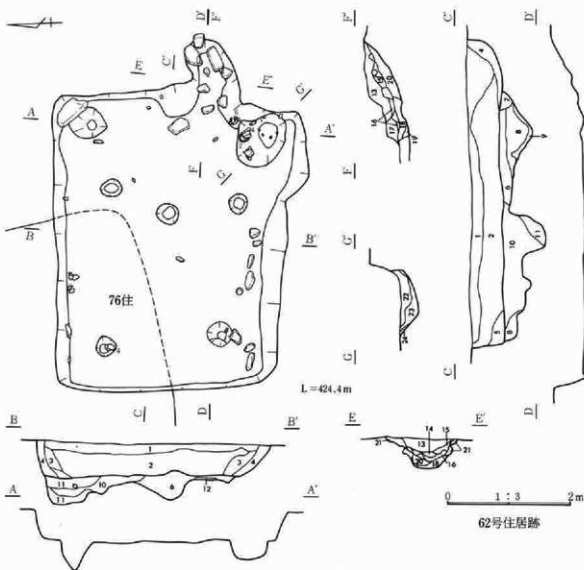
6 2号住居跡 (写真図版35頁、113頁)

位置 19G-12グリッド 方位 N-90.0°-E 形状 485×402cmを測る方形のプランを呈し、壁高は60cmを測る。床面 床はローム地床を基とし、一部床下土坑部を貼り床とする。壁溝はなし。

柱穴 住居内に4穴検出され、各柱穴は比較的住居のコーナーに寄った位置に設けられている。

貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径75～95cm、深度37cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、煙道部には礎を置く。袖部は崩落し明らかではない。燃焼部は壁のラインより外側に位置し、煙道部も壁より74cmを測り、急峻に立ち上がる。掘り方 全体に径64～252cm、深度28～

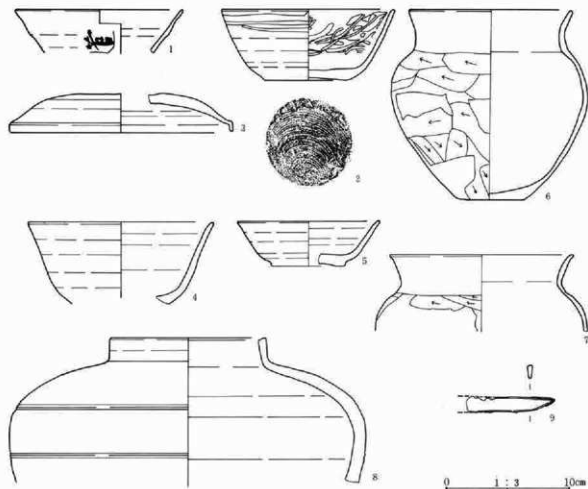
64cmの円形・楕円形の床下土坑を5基検出する。重複 北西コーナー部において76号住居跡(弥生時代)と重複し、新旧関係は埋土より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土する。特筆すべき出土遺物として、「管」の墨書文字(№1)の出土と、坏(№2)は、ロクロ整形酸化炭焼成の土器で内外面にヘラ磨きを施すもの出土がある。



- 1 暗褐色土 FP、ロームブロック少量。
- 2 1よりFP少量 ローム粒、ロームブロック多量。
- 3 黒褐色土 FP、ローム粒子少量、ローム漸移層黒褐色土。
- 4 暗茶褐色土 FP、ローム粒子少量、ローム漸移層土。
- 5 黒褐色土 FP多量。
- 6 暗褐色土 FP、多量のローム粒子、ロームブロック。
- 7 暗褐色土 6に類似。
- 8 暗褐色土 ローム漸移層をベース。極少量のFP。
- 9 黄褐色土 8+多量のロームブロック。
- 10 暗褐色土 6に類似。大粒のロームブロック多量。
- 11 暗褐色土 10よりブロック多量。
- 12 暗褐色土 6+焼土。

カマド

- 13 暗褐色土 FP、ローム粒子、炭化物少量。
- 14 黄褐色土 13+多量のローム粒子。
- 15 黒褐色土 ローム漸移層土をベース。ローム粒子少量。
- 16 黄褐色土 ロームブロック多量、焼土、炭化物。
- 17 暗褐色土 1に類似。1よりロームブロック多量。
- 18 褐色土 ローム、焼土、炭化物。
- 19 黒褐色土 バミズ少量。
- 20 赤褐色土 ロームの焼土化。
- 21 暗黄褐色土 ローム、粘土、炭化物、焼土。
- 22 暗黄褐色土 ロームブロック、乳白色粘土ブロック、ローム粒子、焼土粒子多量、炭化物少量。
- 23 暗黄褐色土 18の類似。焼土ブロック、炭化物少量。
- 24 暗褐色土 ローム漸移層土。



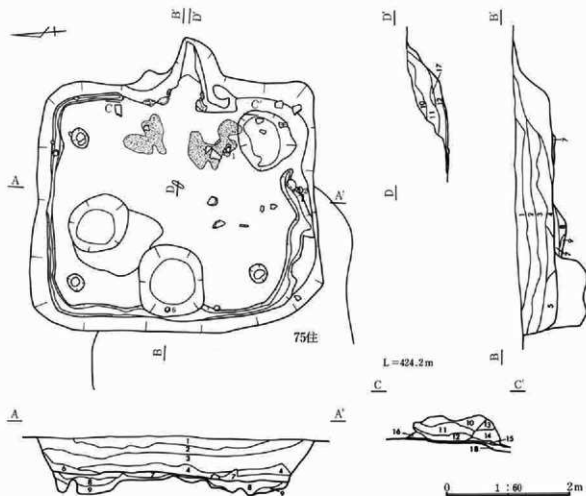
62号住居跡出土遺物

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	カマド 埋土	13.4・ 口径部小片	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) 浅黄色	外面体部横位に「管」の墨書あり。	墨書
②	口使・ 敷 環	床直	14.0・5.6・7.0 4/5	黄白色砂粒、赤褐色の繊維 酸化 明赤褐色	底部は右回転糸切り未調整。ロク口型形。 外面口縁部に横方向の粗い砥磨。内面 体部に横方向と斜めに粗い砥磨が施さ れる。	胎土分析
③	須恵器 蓋	カマド・掘 り方	17.8・ 天井部～口縁部 1/2	白色～灰色の粗砂粒を多量 黒色円細摩 還元 灰白色	天井部の器内は厚く、口縁部に向って薄 くなる。天井部は回転錠削りの後、撫で。	
④	須恵器 環	42.0cm	15.0・ 体部～口縁部1/3	少量の白色粗砂粒 還元 灰色	体部下位は丸みをもち、口縁部まで直線 的に開く。器高が高い。	胎土分析
⑤	須恵器 環	埋土	11.6・3.6・6.0 小片	少量の白～灰色細砂粒 還元 灰色	体部は底部に向って窄まる。口縁部まで 直線的に開く。底部整形は荒撫で。	
⑥	土師器 小型壺	26.0cm	13.0・15.0・5.1 2/3	白～灰色細砂粒 普通 にふい赤褐色	小さな平底から丸みをもって立ち上り、 胴上部に最大幅をもつ。口縁部は直立気 味に立ち上り、上位が開く。	
⑦	土師器 小型壺	掘り方 埋土	14.8・ 口縁部3/4	白～灰色細砂粒 普通 にふい赤褐色	胴部上位に最大幅をもち、口縁部は緩や かに外反する。	

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口徑・器高・底徑	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑨	須恵器 短頸壺	カマド内	12.4 小片	白色細・粗砂粒・細礫・長石・ 石英角礫、黒色円細礫 還元 灰白色	肩部は緩やかに盛り上り、口縁部は短く 直立し、口唇部はやや内傾し、中央が凹 む。	
⑩	鉄製品 刀子?	2.0cm	欠損は調査時、欠損部が多く磨損を 明言することができないが、遺存部 だけから見れば刀子茎のように見え る。錆化はふくれがあり粗な鍛造に 見える。残存長7.0cm、重さ9.7g。			

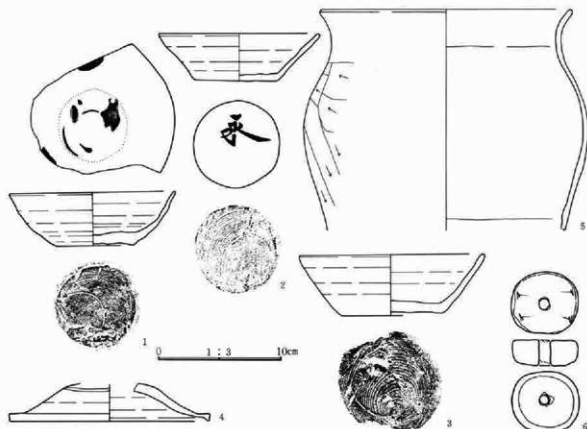
63号住居跡 (写真図版36頁、114頁)

位置 16B-9グリッド 方位 N-87.0°-W 形状 470×390cmを測る。床面 床はローム土を叩き貼り床とする。壁溝は、カマド前面を除き、幅21cm、深度14.5cmの溝がほぼ全周する。柱穴 南東方向を除き3穴検出される。各柱穴は極めてコーナー部に近い位置に設けられており、この位置関係から見て、南東方向の柱穴は貯蔵穴と重複するものと思われる。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径86~94cm、深度32cmを測る。また、住居西壁中央付近に径113cm、深度13.5cmの円形の土坑が検出され床面上より明瞭に確認されることから、これも貯蔵穴である可能性がある。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、両袖部には礫を置き粘土を詰め固定し煙道部は粘土で構築される。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より62cmと長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 カマド



- | | | |
|----------------------|----------------------------|--------------------------------|
| 1 暗茶褐色土 F P、洗関B軽石、 | 7 防り床 ローム等で叩いたもの。 | 12 黒褐色土 F P、ローム粒子。 |
| 2 暗黒褐色土 F P、洗関B軽石、 | 8 黒色土 F P、ロームブロック。 | 13 暗褐色土 10に類似。 |
| ローム粒。 | 9 黒色土 ロームブロック。 | 14 黒褐色土 12に類似。 |
| 3 明茶褐色土 F P、ローム粒、ローム | カマド | 15 黄白色土 ロームブロック、乳白色ブロック、焼土の混土。 |
| ブロック。 | 10 暗褐色土 F P、ローム粒子少量、ローム | 16 乳白色粘土ブロック。 |
| 4 茶褐色土 F P、ローム粒。 | ブロック、乳白色粘土ブロック。 | 17 焼土ブロック (天井のくずれ?)。 |
| 5 褐色土 F P少量、ローム粒。 | 11 暗褐色土 10に類似、焼土粒子、焼土ブロック。 | 18 黄褐色土 ローム 灰化物。 |
| 6 黒色土 F P少量、炭化物。 | | |

前面を残し、各壁寄りに径24~112cm、深度20~44cmの円形の床下土坑を7基検出する。重複 75号住居跡(弥生時代)と重複し、新旧関係は埋土より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、坏(№1)は床面直上よりの出土である。特筆すべき出土遺物として、紡錘車(№6)があり、砥石の再生利用品と考えられる。



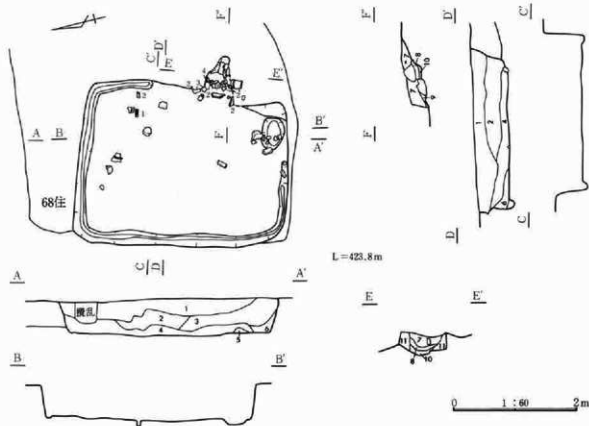
63号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	床直	13.1・4.2・6.2 底部→口縁部2/3	少量の白色・石英細・粗砂粒 類し焼成 黒色、内面一部明 黄褐色	器内は比較的薄手で、体部内外面にロク ロ目が残る。底部は右回転糸切り未調整。 内面底部に墨痕がみられる。転用破片。	墨痕
②	須恵器 坏	30.0cm	12.7・3.7・6.5 口縁部一部欠損	白色・石英細・粗砂粒 類し 焼成 黒色、浅黄色	器内は比較的薄手。体部は直線的に開い て、口縁部が若干内彎気味となる。底部 は左回転糸切り未調整。外面底部に「水」 の墨書あり。	墨書

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・直径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
③	須恵系 環	埋土	14.8・4.8・8.0 1/3	白色細砂粒・細礫・中礫 還元 黒褐色	体部は直線状に開く。底部は左回転糸切り未調整。	
④	須恵系 蓋	47.0cm	16.0・ - - - 1/4	白色細砂粒 還元 灰白色	天井部は丸みをもって、なだらかに広がり、口縁部半部が折れて口縁部は垂直に折れる。	
⑤	土師系 甕	カマド 埋土	20.2・ - - - 胴下位～口縁部 1/4	白色細砂粒、赤褐色円粗砂粒 普通 濃い赤褐色	口縁部は「コ」字状を呈するが、屈曲部は緩やかである。	
⑥	石製 紡錘車	18.5cm	上径5.35・下径4.62・穴径0.69・厚さ2.12 重量79.2 石材 流紋岩(磁沢)		118号住居-12と同石材、上面に磨き・凹有。磁石よりの転用。	

64号住居跡 (写真図版37頁、114頁)

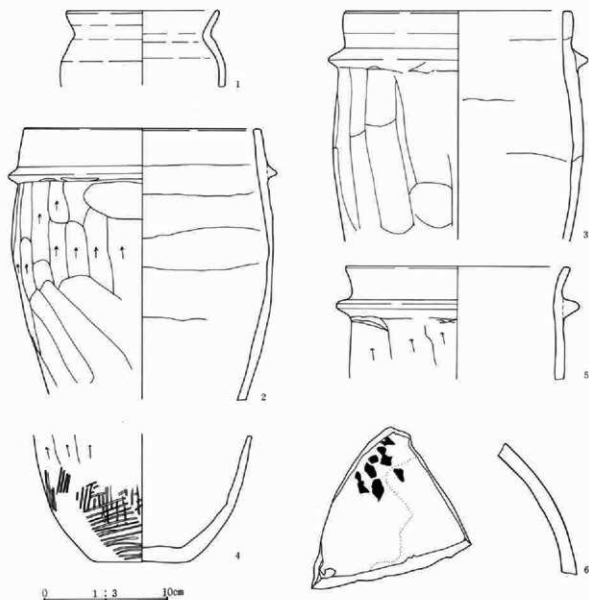
位置 11B-14グリッド 方位 N-70.5°-W 形状 330×264cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は50cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝は、カマド前面を除き幅16cm、深度8cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され楕円形を呈し、径35～50cm、深度14cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には隙を並べた石組みのカマドである。礫の隙間には粘土を詰め固定する。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部



- 1 黒色土 FP。
- 2 黒色土 FP。
- 3 黒褐色土 FP、ローム粒、ブロック。
- 4 黒色土 FP、ロームブロック。
- 5 黒色土 FP。
- 6 黒褐色土 FP、ローム粒子。

- カマド
- 7 暗褐色土 FP、焼土粒子少量、ローム粒子、ロームブロック多量。
- 8 暗褐色土 7に類似。乳白色の粘土ブロック、炭化物、焼土粒子多量。
- 9 黒褐色土 7より黒味およびロームブロック、ローム粒子、焼土粒子。
- 10 茶褐色土 ローム粒、灰、粘土。
- 11 暗褐色土 FP、ローム粒子多量。

は壁より130cmと比較的長い。 掘り方 なし。 重複 68号住居跡(平安時代)と重複し、新旧関係は埋土断面より本遺構の方が新しいと判断される。 遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物はカマド内部、及び周辺に集中して出土する。カマド内部より出土する羽釜片は、カマド構築材の一部として使用されていた可能性も高い。出土遺物中、羽釜(No 2)、変転用碗(No 6)は床面直上よりの出土である。



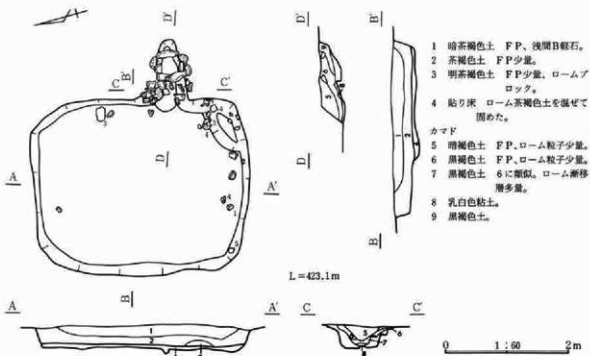
64号住居跡出土遺物

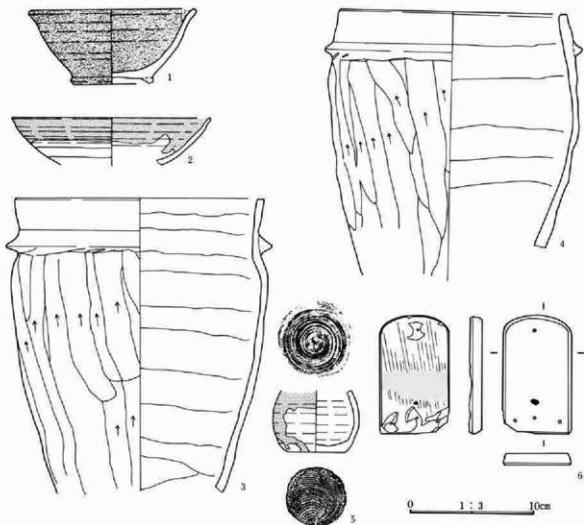
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 小型壁 小片	36.5cm	12.2・ - ・ -	白色細砂粒 還元 灰色	胴部は丸みをもち、口縁部が短く開く。	
②	須恵器 羽釜	床直 カマド	19.0・ - ・ - 胴中位～口縁部 5.7cm 3/4	白色・石英細・粗砂粒 還元(酸化気味) において 色	胴は小さいが比較的丁寧に撫でられる。 胴部は上方内への窪削り、内面は横撫で、 口縁部は回転撫で。	

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
③	須恵器 羽釜	4.0・10.5 12.5 -6.8cm -44.5cm	18.2・ - - - 上半部1/3	石英・長石・白色細・粗砂粒・ 細・中礫 還元 (酸化気味) 灰黄色	胴部はほとんどふくらみをもたず、口縁部は下位が塔れて直立する。口縁部・肩横断で。胴部外面は上方向への篋削り、内面は縦方向の軽い削で。	
4	須恵器 羽釜	18.5cm -49cm	- - - 8.0 底部～胴部下位 1/2	白色細・粗砂粒・細礫、石英・ 長石の細礫 酸化 にぶい赤褐色	平底、胴部は丸みをもって立ち上る。胴部は上方向への篋削り、下位は平行叩きのように弱い条痕がみられる。内面は横断で、器壁は凹凸している。	
⑤	須恵器 羽釜	カマド 埋土	18.0・ - - - 口縁部1/2	石英・長石・白～灰色細・粗 砂粒・細礫 還元 (酸化気味) 淡黄色	胴部はあまりふくらみをもたず、口縁部が外反する。	
⑥	須恵器 釜	床直 胴部破片	- - - -	白色細砂粒・細礫 還元 堅緻 灰色	内面に僅かな横痕、損った痕跡がある。	墨痕

6 5号住居跡 (写真図版38頁、115頁)

位置 7B-13グリッド 方位 N-79.0°-W 形状 353×270cmを測る隅丸方形形状のプランを呈し、壁溝は27cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はない。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径55～96cm、深度20cmを測る。カマド 東壁の中央や南寄りに設けられ、遺存状態は良好で、天井部の一部を残す。袖部・煙道部には礫を並べ礫は粘土で被う。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より94cmと比較的長い。燃焼部における灰・炭化物の遺存は少ない。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居壁際、及び貯蔵穴・カマド周辺等に散乱し出土する。特筆すべき遺物として、一部止め金具の残る石製鉈尾 (No 6) があり、床面直上よりの出土である。



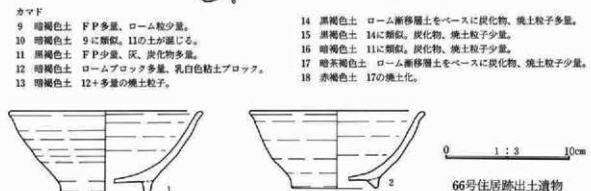
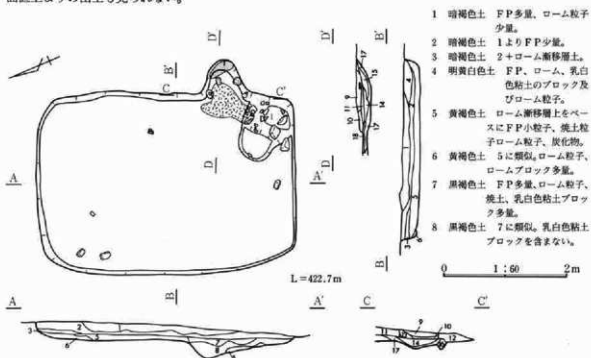


65号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	23.5cm	13.4・5.9・6.6 1/3	白色細砂粒・細糠 焼し肌成 褐色	体部は僅かに丸みをもち、口縁部が外反する。底部は高台貼付時に撫で。	
2	灰釉陶器 椀	埋土	16.0・ - - - 小片	少量の白色細砂粒 還元 灰白色。釉は薄く透明	体部下半は回転彫削り。	8住-3と 接合
③	須恵器 羽釜	床直 29.0cm	20.6・ - - - 胴下位～口縁部 1/4	白色・石英細・粗砂粒 還元 灰白色	胴は比較的小さいが、丁寧に撫でられる。胴部は上方向への寛削り、内面は横方向の撫で。	
④	須恵器 羽釜	29cm床直 カマド内	18.2・ - - - 胴中位～口縁部 1/2	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) ぶい橙色	胴は小さいが、比較的丁寧に撫でられる。胴部は上方向への寛削り、内面は横撫で。	
⑤	灰釉陶器 小瓶	26.0cm	- - - - 4.8	ほとんど夾雑物を含まない 還元 灰白色	底部は左回転糸切り未調整。	胎土B
⑥	石帯 蛇尾	床直				磁質頁岩製で色調は黒色である。表面には先端に一次、帯元側に四次の孔が設けられそのうち一次に小鉄釘が埋め込まれて携る。穿孔は表面側から裏面に向けかなりの圧力(鎌でなくドリルか)をかけ、一方から穿孔している。裏面には荒砥の太い条痕、表面・側部は油研磨のような光沢あり。長さ6.2cm、幅3.6cm。

66号住居跡 (写真版39頁、115頁)

位置 3B-12グリッド 方位 N-69.0°-W 形状 415×290cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は15cmを測る。床面 ローム土を叩き貼り床とするが、やや凹凸が残る。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径85～112cm、深度17cmを測る。カマド 東壁の中央南寄りに設けられ、遺存状態は悪い。袖部には襷を並べた痕跡(小ピット)が残る。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より50cmと短い。掘り方 住居中央部南寄りに径106～130cm、深度29cmの円形の床下土坑を1基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。また、床面直上よりの出土も見られない。

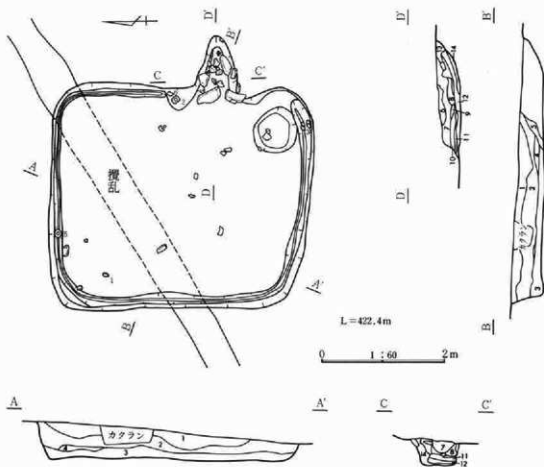


66号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm)		粘土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径・器高・底径	高さ～口縁部1/4			
①	須恵器 椀	-9.0cm 貯蔵穴	15.4・6.5・7.0	高台～口縁部1/4	白色・石英細・粗砂粒 還元(酸化気味) 赤褐色・黒色	体部は僅かにふくらみをもち、口縁部は若干外反する。底部は回転糸切り後、高台貼付時に周辺部回転整で。	
2	須恵器 椀	埋土 2cm	16.0・6.1・8.6	高台部～口縁部1/6	白色・石英、赤褐色細砂粒 還元(酸化気味) 褐灰色	体部は若干丸みをもち、口縁部は僅かに外反する。	

67号住居跡 (写真図版40頁、115頁)

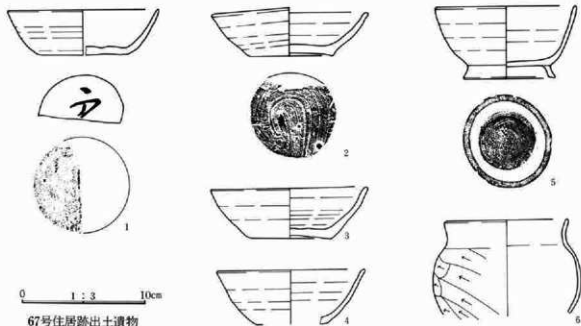
位置 1B-12グリッド 方位 N-87.5°-W 形状 420×360cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は60cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝は、カマド前面を除き、幅8cm、深度8cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径73~70cm、深度26cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の隙間には粘土を詰め固定する。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、煙道部は壁より100cmと長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 なし。重複 重複する遺構はないが、耕作による溝状の攪乱を受ける。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、坏(No.1)は床面直上付近、坏(No.2)はカマド袖部上よりの出土である。



- 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒子少量。
 - 2 暗茶褐色土 F P、ロームブロック少量、ローム粒、炭化物。
 - 3 暗褐色土 1に類似。少し黒味おびる。
 - 4 黒褐色土 F P少量。
 - 5 暗茶褐色土 ローム粒子、焼土粒子、乳白色粘土ブロック。
- カマド
- 6 暗褐色土 F P少量、ロームブロック多量。

- 7 灰茶褐色土 6+ローム粒子、粘土ブロック、焼土粒子。
- 8 灰黄褐色土 ロームブロック、粘土ブロック、焼土ブロック。
- 9 黒色土 炭化物多量、ローム粒子少量。
- 10 暗褐色土 F P多量、ローム粒子、焼土粒子。
- 11 黄白色土 粘土ブロック、焼土ブロック、ロームブロック。
- 12 暗褐色土 11に類似。炭、炭化物多量。
- 13 黒褐色土 F P、焼土粒子、ローム粒子。
- 14 灰黒褐色土 炭化物、焼土、粘土粒。

第3章 検出遺構・遺物

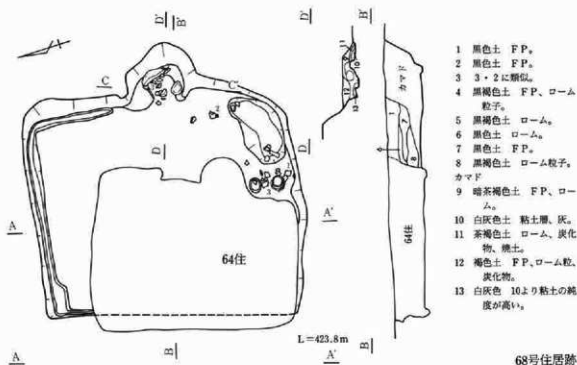


遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm)		胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径	器高・底径			
①	須恵器 杯	2.5cm	12.0	3.6・7.0 底部～口縁部1/4	石英層・粗砂粒、赤褐色円粒 還元 灰白色	底部は右回転未切り未調整。外側底部に薄く黒炭あり。判断不可。	遺書
②	須恵器 杯	15.5cm	12.6	3.9・6.8 口縁部一部欠損	白色層・粗砂粒、赤褐色細砂粒 還元 褐色	体部中位にふくらみをもち、口縁部が僅かに外反する。	
③	須恵器 杯	21.5cm	12.6	4.0・6.8 1/4欠	白色層・粗砂粒、僅かな石英角細粒 還元 外-黒色灰白色、内-灰色	体部は底部に向って窄まる。体部上位で屈曲して口縁部はやや立ち上り気味になる。底部は黒化が著しい。	
④	須恵器 杯	埋土	12.0	-・-・6.0 小片	白色層・粗砂粒 還元 灰白色	体部は僅かに丸みをもって開く。	
⑤	須恵器 椀	18.0cm	11.4	5.7・7.5 口縁部一部欠損	白色層・粗砂粒、黒色円粗砂粒 還元 灰色	体部はやや深めて、緩やかな丸みをもって口縁部に至る。高台はやや高い台形を呈し、端部は平坦で外端部が接地する。	
⑥	土師器 壺	29.0cm	10.0	-・-・- 小片	白～灰色細粗砂粒、角閃石面砂粒 普通 内-いよ赤褐色、外-灰黄褐色	胴部は丸みをもち、肩部は緩やかに括れ、口縁部上位は外側にふくらみをもち、ほとんど開かない。	

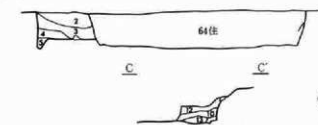
68号住居跡 (写真図版41頁、115頁)

位置 11B-14グリッド 方位 N-84.0°-W 形状 437×342cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は40cmを測る。床面 床はローム地床で硬く平坦である。壁溝は、カマド前面を除き幅20cm、深度18cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径60～124cm、深度6cmを測る。カマド 東壁の中央寄りに設けられ、崩落してはいるものの遺存状態は良好。壁を幅80cm、奥行40cm程掘り込み、袖部・煙道部に磔を設置する。天井石はカマド左寄りに崩落した形で出土するが、両袖上に橋状に架かっていたものと考えられる。磔と磔の間には粘土を詰め固定する。燃焼部は壁のラインより外側に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より67cmと短く、急峻に立ち上

がる。また、中心部手前より支脚と思われる礎の設置を検出する。 掘り方 住居中央部付近に径35~147 cm、深度6~18cmの円形の床下土坑を4基検出する。 重複 64号住居跡（平安時代）と重複し、新旧関係は埋土断面より本遺構の方が古いと判断され、住居南西側大半を64号住に切られる。 遺物 重複遺構に切られるため、遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。出土遺物中、羽釜（No 3）は床面直上、及びカマド内部よりの出土である。

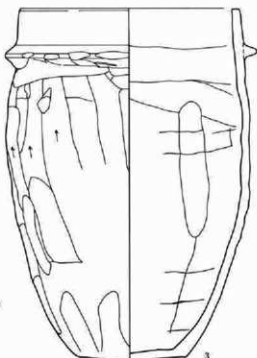


68号住居跡



0 1:3 10cm

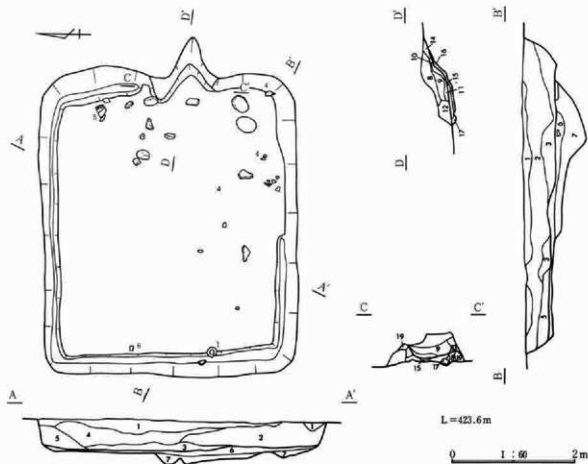
68号住居跡出土遺物



遺物 番号	類別 器種	出土位置	量目 (cm)		胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考	
			口径・器高・底径					
①	須恵器 椀	4.0cm	- - -	8.0 1/4	少量の白色細砂粒、8mm前後の礫を少量 酸化 にぶい黄褐色	器内が厚く、高台は窪みのある窪みつくり。底部は回転糸切り後周辺部は高台粘付時に削で。	胎土B	
②	灰釉陶器 椀	床直	14.2・4.3・6.6 1/2		少量の白色細砂粒、緻密 還元 灰白色 軸はオリーブ 灰色	体部は僅かな丸みをもって大きく開き、口唇部は外反する。軸は潰け掛けによる施釉。		
③	須恵器 羽釜	カマド内	17.2・27.6・8.5 底部~口縁部2/3		白色・石英細・粗砂粒 還元 (僅し気味) 黒色、に ぶい褐色	底部の大きい平底。肩は比較的大きいが、端部は指の押圧で設うっている。胴部外面は上方向への露筋り。下位は撫で、底部は単位不明の撫で、内面は上方向の露撫で、上位は横撫で、口縁部内外面は回転撫で。		
④	鉄製品 刀子	カマド内 床直	重厚は調査時の欠損、棟区は甘く、刃区は区不明瞭。研ぎ出しの浅い稜部あり。鍛えは錆ぶくれがありやや粗な鍛造を思わせる。残存長8.1+αcm、重さ7g。					

69号住居跡 (写真図版42頁、115~116頁)

位置 6B-8グリッド 方位 N-88.0°-E 形状 489×413cmを測る方形のプランを呈し、各コーナーは直角に近い角度を呈す。壁高は50cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅16cm、深度8cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、袖部には礫を設置した痕跡がみられるが、煙道部は礫を用いず粘土のみで構築されていた

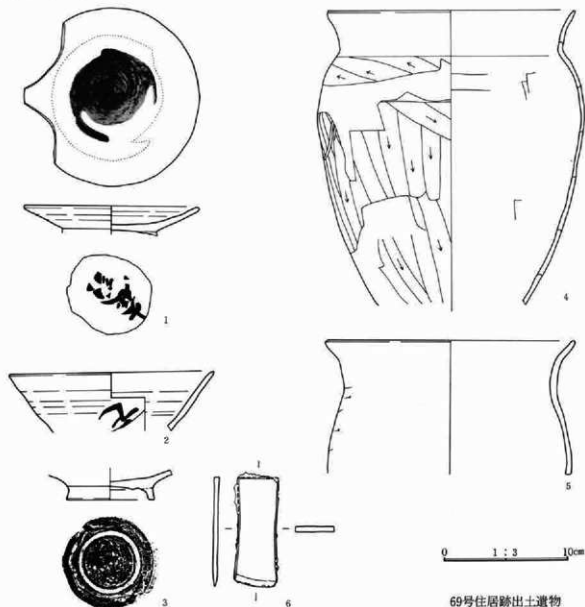


- 1 暗茶褐色土 FP。
 2 黄褐色土 FP、ロームブロック。
 3 暗褐色土 FP、ロームブロック、炭化物。
 4 茶褐色土 FP、ロームブロック。
 5 明茶褐色土 FP、ロームブロック。
 6 貼り床 ロームブロック、小粒のバミス。
 7 暗黄褐色土 ロームブロック、茶褐色土混土。

- カマド
 8 暗褐色土 FP、ロームブロック少量、ローム粒少量。
 9 暗褐色土 8+多量のロームブロック。
 10 暗黄褐色土 9に類似。炭入量が多量。
 11 暗褐色土 FP、ローム粒少量。
 12 暗褐色土 8に類似。
 13 黄白色 乳白色の粘土とロームの混土。

- 14 暗褐色土 ローム漸移層土をベースに少量のローム粒子、FP。
 15 黒灰色土 灰、炭化物。
 16 黒褐色土 炭化物多量。
 17 暗茶褐色土 炭化物、ローム。
 18 黄灰色土 ローム、粘土。
 19 白灰色土 粘土、ローム少量。

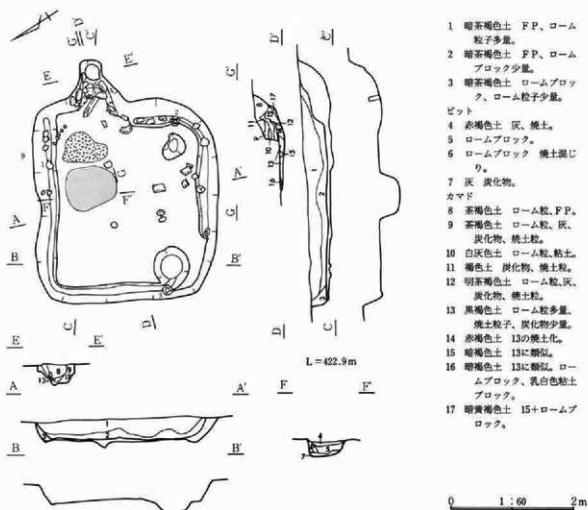
ものと考えられる。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より64cmと比較的長く、緩やかに立ち上がる。 掘り方 住居中央部付近及び南西・北西コーナー部近くに径70~238cm、深度8~21cmの楕円形の床下土坑を3基検出する。 重複 重複する遺構はない。 遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土するが、大半が床面から離れての出土である。床面直上付近よりの出土としては、坏(No 2)、皿(No 1)、甕(No 4)がある。



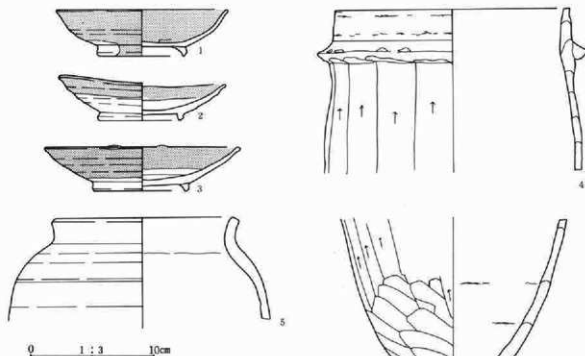
69号住居跡出土遺物

遺物番号	類別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 皿	床直	14.0・ - ・ 7.5 高台部、口縁部の一部欠損	少量の石英細砂粒 還元 灰色、重ね焼きのため底部内外面のみ灰白色	内面底部は転用痕として使われている。外面墨書あり「大口皿」と三字だが判読し得ない。底部は右回転糸切り未調整。	墨痕 墨書
②	須恵器 坏	-7.0cm	16.2・ - ・ - 体部へ口縁部1/4	白色・石英細・粗砂粒 還元 灰白色	体部は深め、坏み輪が不明。外面体部に墨書あり。判読不可。	墨書
③	須恵器 皿	カマド 埋土	- ・ - ・ 7.0 小片	少量の白色粗砂粒、長石の細塵、褐色円形粗砂粒 酸化焙気味 に濃い褐色	体部は外反気味に開く。高台は角形で接地面は平坦。底部は右回転糸切り、高台貼付時に周辺部融で。	
④	土師器 壺	床直	19.8・ - ・ - 胴下位へ口縁部1/4	白色・赤褐色細・粗砂粒 普通 赤褐色	口縁部は外反するが、上位がさるに屈曲気味で指痕のみられる「コ」字筋段階のもの。	
⑤	土師器 壺	32cm	20.0・ - ・ - 小片	白〜黒色の細砂粒 普通 棕色	口縁部は一担開き気味に立ち上り、上部は外側によく丸んで開く。	
⑥	鉄製品 短冊形			小型の短冊形で極めて薄作りである。錆化は錆ぶくれがあり精緻造とは言いがたい。刃先は研ぎ出しの浅い稜があり、始刃の両方。全長8.8cm、重さ62.6g。		

70号住居跡 (写真図版43頁、116頁)



位置 24A-8グリッド 方位 N-59.5°-W 形状 326×290cmを測る隅九方形のプランを呈し、長軸を東西方向に取る。壁高は35cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝は、カマド前面、及び南西コーナー部分を除き、幅18cm、深度3cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南西コーナー付近に径60cm、深度20cmを測る円形の土坑1基と、住居中央北壁寄りに径62cm、深度31cmを測る方形の土坑1基を検出する。カマド 東壁の北コーナー寄りの位置に設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の隙間には粘土を詰め固定する。燃焼部は壁のラインより外側に位置し、中央に支脚として礫を設置する。袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より80cmと比較的長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱した状態で出土する。出土遺物中、灰釉陶器椀 (No.1)、及び灰釉陶器皿 (No.2) は床面直上、及び直上付近よりの出土である。

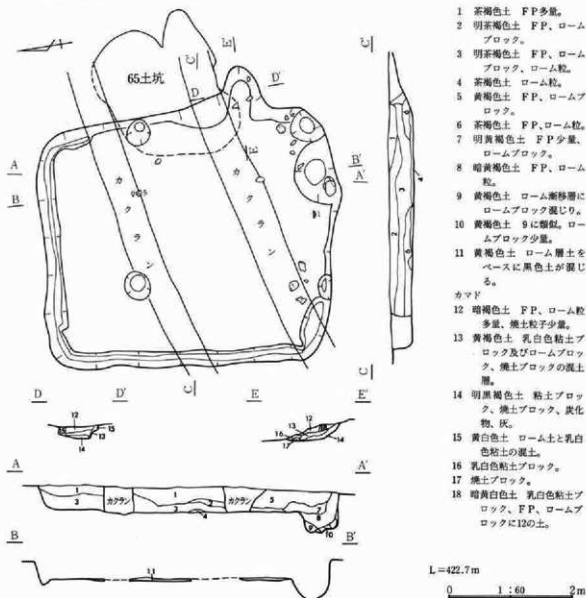


70号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	灰釉陶器 椀	2.0cm	13.8・3.7・7.2 1/5	少量の白色細砂粒。還元、堅緻。灰白色。軸はオリーブ灰色。	口唇部は僅かに外反する。高台は比較的峻の明瞭な三ヶ月高台。内面底部は中心部を残してコテが当てられ、中心部は撫で。	胎土A
②	灰釉陶器 皿	床直壁際	13.4・3.6・7.0 口縁部一部欠損	僅かな白色細砂粒、黒色鉱物粒。還元、堅緻。灰白色。	口縁部は僅かに外反する。高台の峻は比較的シャープだが、やや歪んでいる。体部は回転旋削り、軸は所々白色に残るが、ほとんど透明化している。	胎土C
③	灰釉陶器 輪花皿	10cm 壁際	15.6・3.5・7.8 口縁部一部欠損	僅かな白色細砂粒、黒色鉱物粒。還元、堅緻。灰白色。軸はオリーブ灰色。	高台は端部が丸みをもち台形状を呈す。内面は中心を4cm程度残してコテが当てられ、同高台径の重お焼成をもつ。外面体部はぬた痕が残る。軸は刷毛塗り。	胎土C

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
④	須恵器 羽釜	6.5cm 8.0cm	18.8・一・一・一 胴部上位へ口縁部 1/3	白色・石英燧・粗砂粒・細燧 還元 (酸化気味) に黄褐色	胴は比較的しっかり付けられているが、 底部は凹凸している。口縁部内外面横 撫で。胴部外面は上方への瓦雨り。内面 横撫で、中位に縦方向の撫でがみられる。	
⑤	須恵器 壺	カマド 11.0cm	14.8・一・一・一 胴上位へ口縁部 1/2	白色・石英燧・粗砂粒 還元 (酸化気味) に黄褐色	胴部は丸みをもち、口縁部は短く、口唇 部まで厚みは均一で、やや外反する。	
6	須恵器 羽釜	17.5cm	一・一・一・7.0 底部へ胴部下位 1/2	白色・石英燧・粗砂粒・細燧 還元、軟質 黄灰色	底部平底、整形痕はみられない。底部内 面は横撫で、胴部外側下位は横方向の撫 で、中位は上方への瓦雨り。内面は凹 凸があり、縦もしくは横の撫で。	

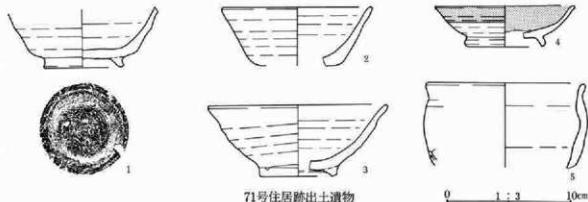
7 1号住居跡 (写真図版44頁、116頁)



位置 24A-11グリッド 方位 N-88.0°-W 形状 474×400cmを測る隅丸形状のプランを呈し、壁高は33cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマドをもつ東壁を除き、幅28cm、深度6cmの溝がコの字状に巡る。柱穴 床面上よりは検出できず、掘り方調査にて検出されたビットのうち、東壁に2穴、住居内に1穴、南壁に1穴の壁柱穴3穴を含む計4穴が柱穴と考えられる。貯蔵穴 なし。

カマド 東壁の中央南寄りに設けられ、小形のカマドである。袖部・煙道部には礫を用いず粘土のみで構築されている。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より50cmと極端に短く急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部付近及び各コーナー寄りに径40~120cm、深度8~39cmの円形・楕円形の床下土坑を6基検出する。重複 65号土坑（縄文時代）と重複し、新旧関係は埋土より本遺構の方が新しいと判断される。また、住居に対し東西方向に2本、近世以降の耕作による擾乱溝が走る。

遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少ない、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居南壁際に散乱し出土する。出土遺物中、坏（No 2）・碗（No 3）は床面直上よりの出土である。

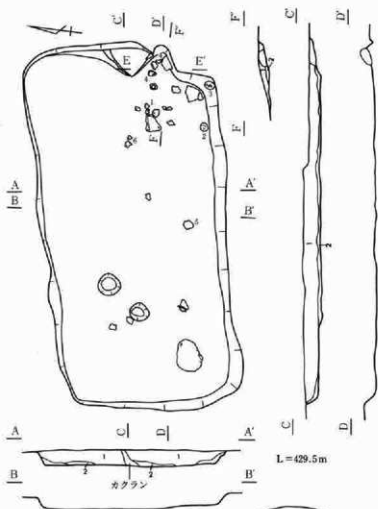


71号住居跡出土遺物

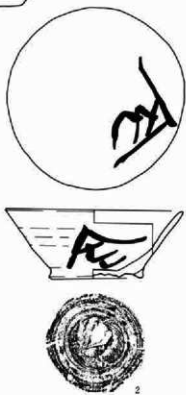
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径 口縁部欠損	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 碗	-6.5cm 貯蔵穴内底	- - - 6.8 口縁部欠損	白色細・粗砂粒、石英粗砂粒 酸化 暗灰黄色・黒色	体部はロクロ目が顕著である。高台は底径の内側に貼付される。底部は土が硬化して付着しており、切り離し不明。	
②	須恵器 坏	床直	12.6・ - - 7.0 小片	白色細・粗砂粒・細礫、赤褐色粗砂粒 酸化 にぶい褐色	体部はほぼ直線的に開く。器内はやや厚手。	
③	須恵器 碗	床直	14.5・ 5.7・ 6.2 1/3	白色の細・粗砂粒・細礫・中礫 酸化 にぶい黄褐色	体部はやや丸みをもって開き、ロクロ目が顕著である。	
4	灰釉陶器 碗	埋土	11.0・ 3.3・ 6.0 小片	白色細砂粒、緻密 普通 灰白色	体部は緩やかな丸みをもって立ち上り、口縁部は外反する。高台は厚手の三ヶ月状である。	胎土B
5	須恵器 小型甕	3.5cm	12.6・ - - - 小片	白色細・粗砂粒、石英粗砂粒 細礫 還元 灰褐色	胴部は上位が丸みをもち、口縁部は短く開く。ロクロ整形、胴部下方は上方への厚所り。	

79号住居跡 (写真図版45頁、116頁)

位置 20I-2グリッド 方位 N-81.5°-E 形状 580×306cmを測る隅丸長形状のプランを呈し、壁高は20cmを測る。床面 床は、ローム混りの茶褐色土を叩く貼り床。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、南袖部のみには礫が残る。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖の張り出しは少なく、煙道部は緩やかに立ち上がる。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少ないが、完形品の遺存度が



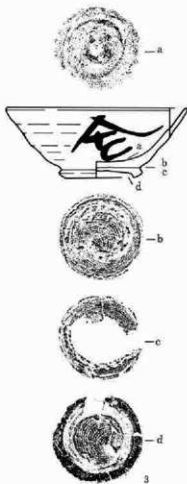
79号住居跡出土遺物(1)

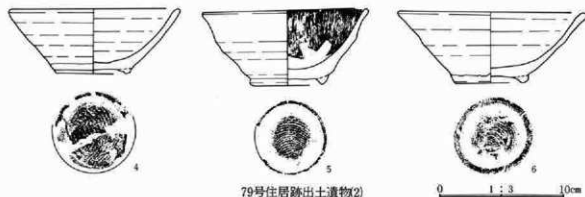


高い。遺物は、カマド内部、及び前面に散乱し出土する。出土遺物中、椀(№2、3、4)は、カマド内、及び床面直上よりの出土であり、遺物の胎土・器形も類似しており、一括性が高いものと思われる。また、このうち(№2、3)には「全」?の墨書があり、書体も酷似する。

- 1 黒色砂礫土 FP。
- 2 茶褐色土 FP、ローム混土。
カマド
- 3 暗茶褐色土 FP、ローム粒。
- 4 茶褐色土 焼土、炭化物。

79号住居跡



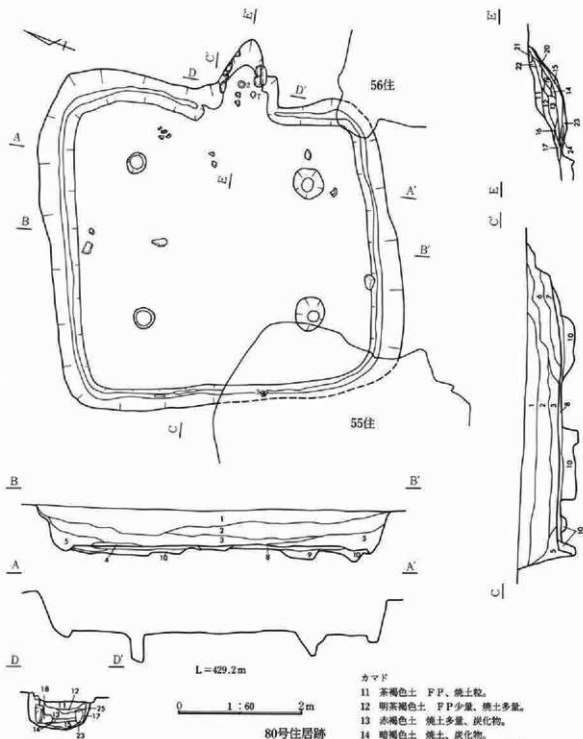


79号住居跡出土遺物②

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	9.0cm	13.6・5.9・6.3 3/4	白色細・粗砂粒・細礫、石英 の粗砂粒・細礫 還元(焼し 焼成) 黒褐色	器内は厚く均一で、体部は直線的に開く。 底部は右回転未調整。	
②	須恵器 椀	床直 壁際	14.0・5.5・7.0 完形	白色・石英細・粗砂粒 還元(酸化気味) 黄灰色	底部は右回転糸切り未調整だが、轆を取り 除いたものか、径3cm程の粘土塊をつ め補修している。内外面体部正位「全」 の墨書。	墨書
③	須恵器 椀	壁密着	14.4・5.6・6.5 完形	多量の白色・石英の細・粗砂 粒 還元、軟質 灰黄色	体部は外面にクロロ目を残す。内面底部 から体部は緩やかに立ち上る。底部は2 枚に割離しており、両面に回転糸切り痕 が残る。外面体部正位に「全」の墨書あり。	墨書
④	須恵器 椀	床直 カマド内	13.8・5.2・6.0 高台部1/2欠損	多量の白色細・粗砂粒・細礫、 石英粗砂粒・細礫 酸化 ぶい黄橙色	体部は高台に向って窄まり気味、器内は 厚手で、口唇部まで均一。高台は低く難 な作り。底部は右回転糸切り、高台付時 に無で。	
⑤	須恵器 椀	2.0cm	13.3・6.0・6.3 口縁部1/2欠損	白色細・粗砂粒 酸化 ぶい黄橙色	体部上位に稜をなし、口縁部は外反する。 底部は右回転糸切り未調整。口縁部の一 部に煤が付着している。	
⑥	須恵器 椀	床直 9.0cm	15.0・5.8・6.0	白色細・粗砂粒・細礫、石英 粗砂粒 還元(酸化気味) 暗 灰黄色	体部は直線的に大きく開き、口縁部は肥 厚して外反する。底部は右回転糸切り未 調整。	

80号住居跡 (写真図版46頁、116～117頁)

位置 24I-2グリッド 方位 N-71.0°-E 形状 553×540cmを測る隅丸形状のプランを呈し、壁高は66cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝は、カマド前面を除き、幅17cm、深度10cmの溝がほぼ全周する。柱穴 4穴検出され、径30～53cm、深度39～63cmを測る。4穴の平面上のプランはカマドを中心に展開し、柱穴間24.5～26.5cmを測り、ほぼ正方形を呈する。貯蔵穴 なし。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の隙間には粘土を詰め固定する。袖部の礫(袖石)は欠損するが、設置の痕跡を確認する。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より93cmと長く、急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部付近に径28～154cm、深度10～19cmの円形・楕円形の床下土坑を2基検出する。重複 55号住居跡(平安時代)及び、56号住居跡(平安時代)と重複し、55号住との新旧関係は埋土断面、及び、55号住のカマドの遺存状態より本遺構の方が古いと判断され、56号住との新旧関係はプラン確認時の埋土より本遺構の方が古いと判断されるが、

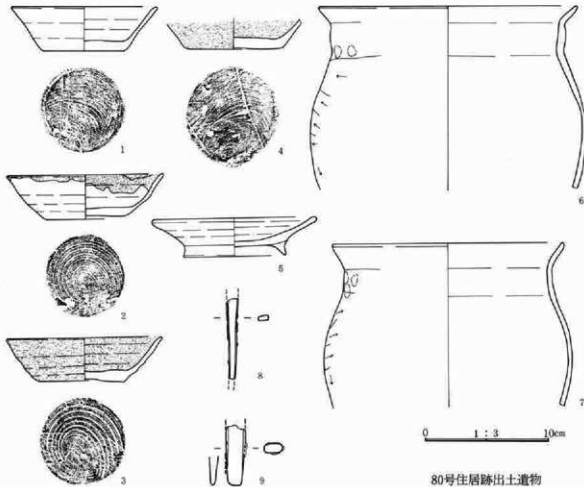


- 1 暗茶褐色土 F P 多量。
- 2 明茶褐色土 F P、ローム粒、炭化物。
- 3 茶褐色土 F P 少量、ローム粒、ロームブロック。
- 4 明褐色土 炭化物、焼土、ローム粒。
- 5 茶褐色土 F P 少量、ロームブロック多量。
- 6 明茶褐色土 F P 少量、焼土粒、ローム粒。
- 7 暗黄褐色土 F P、ローム粒、粘土、焼土。
- 8 F P ロームブロック。床面。
- 9 赤褐色土 ロームブロック、焼土ブロック、炭化物。
- 10 黄褐色土 ロームブロック、粘土ブロック。

カマド

- 11 茶褐色土 F P、焼土粒。
- 12 明茶褐色土 F P 少量、焼土多量。
- 13 赤褐色土 焼土多量、炭化物。
- 14 暗褐色土 焼土、炭化物。
- 15 褐色土 焼土粒、炭化物、ローム粒。
- 16 暗黄褐色土 ローム漸移層に焼土粒。
- 17 黄褐色土 ローム漸移層に若干の焼土。
- 18 焼土ブロック。
- 19 暗赤褐色土 焼土多量、焼土ブロック。
- 20 焼土層。
- 21 明赤褐色土 ローム漸移層の焼土化。
- 22 明茶褐色土 ローム漸移層に焼土が混じる。
- 23 明褐色土 灰、焼土粒。
- 24 黒褐色土 炭化物、灰、焼土。
- 25 暗褐色土 茶褐色土の焼土化。

55号住と56号住の新旧関係については不明である。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居全面より散乱して出土する。甕 (No.7) は床面直上、坏 (No.4)・皿 (No.5)・甕 (No.6) は床下よりの出土である。



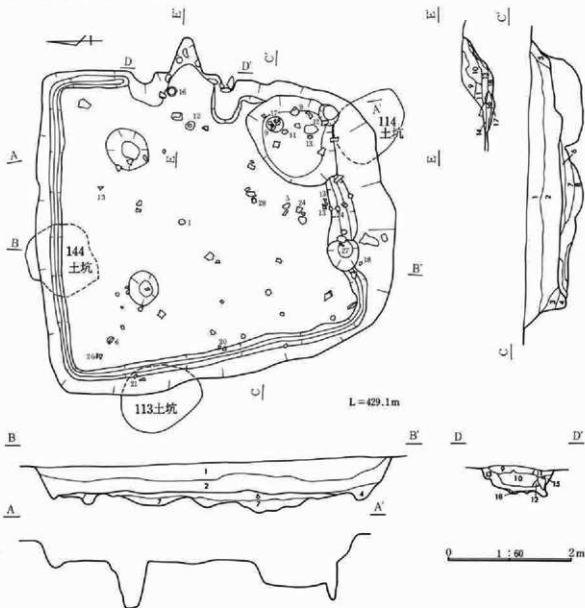
80号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	カマド 掘り方	11.8・3.5・6.8 1/2	少量の白～灰色細・粗砂粒 還元 灰色、灰白色	底部は左回転糸切り未調整。底部と体部の境は角張り、体部は直線的に開く。	
②	須恵器 坏	27.5cm	12.6・3.5・6.4 宧形	少量の白色細砂粒 横し焼成 黒色、内底面はふい黄褐色	底部は右回転糸切り未調整。体部は若干丸みを持ち、口縁部は僅かに外反する。口縁部にうろし様のものが付着。	敷田の胎土と類似
③	須恵器 坏	6.5cm	12.4・3.4・6.8 4/5	白色細・粗砂粒 横し焼成 黒色、灰色	底部は右回転糸切り未調整。体部は直線的に開くが、ロクロ目が顕著である。	敷田の胎土と類似
4	須恵器 坏	床下 埋土	- - - 7.6 底部のみ	少量の白色細砂粒、黒色内粒 による3～6mmの孔が多い 横し焼成 黒色	底部は左回転糸切り未調整。底部と体部の境は角張り、体部は直線的に開くと思われる。	
⑤	須恵器 皿	掘り方	13.2・3.0・8.2 1/3	少量の黒色粗砂粒 還元 灰白色	底部は回転糸切り未調整。体部は外反し、細く端部の丸い高台が貼付される。	
⑥	土師器 甕	床下	20.8・- - - 胴中位～口縁部 1/4	黄白色細・粗砂粒 普通 ふい赤褐色	口縁部は内外面とも明瞭な「コ」状を呈す。口縁横無で、胴上位は左横方向彫削り。	

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
㉗	土師器 壺	カマド内 床直	18.6・ 小片	白～灰色細砂粒、僅かな赤褐色細砂粒 普通	口縁部は弱い「コ」字状を見ず。口縁の直立部には指痕を多く残す。内ぶい橙色。	
㉘	鉄製品	埋土	刀子の茎と考えられ、片側が厚く片側が薄い。錆ぶくれが少なく精鍛造。残存長6.4+acm、重さ4.7g。			
㉙	鉄製品	埋土	茎と考えられる。上方は旧時欠損。錆ぶくれが顯著で粗鍛造。残存長4.7cm、重さ10.6g。			

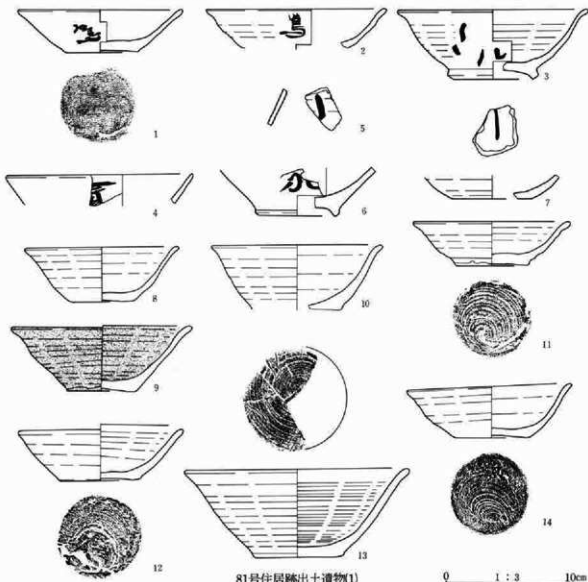
81号住居跡 (写真図版47頁、117～118頁)

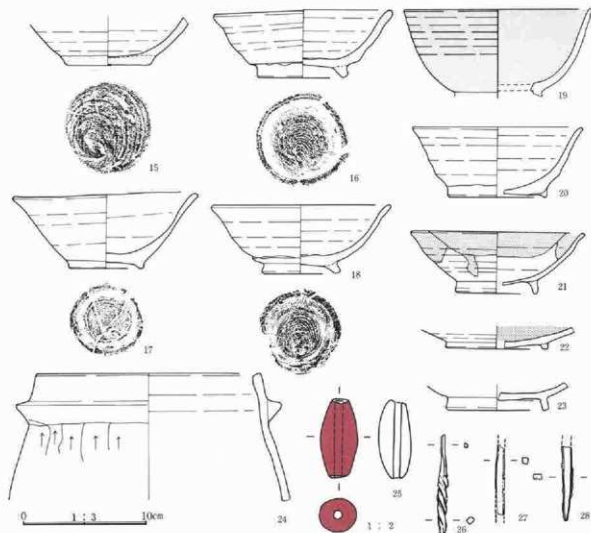
位置 0J-0グリッド 方位 N-87.0°-W 形状 570×515cmを測る隅丸台形状のプランを呈し、北壁に比べ相対する南壁が極端に短い。壁高は50cmを測る。床面 床はローム混じりの褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅10cm、深度8cmの溝がほぼ全周する。柱穴 4穴検出され、うち2穴は南壁に接する壁柱穴であり、径30～75cm、深度66～76cmを測る。貯蔵穴 南東コーナー付近



- | | | |
|---------------------------|------------------------|----------------------------|
| 1 F P含む黒色土。 | 8 茶褐色土 ロームブロック、炭化物、カマド | 14 黒色灰層。 |
| 2 F P ローム粒子若干含む黒褐色土。 | 9 黒褐色土 F P、焼土粒子。 | 15 暗茶褐色土 11・12に類似。ローム粒子多量。 |
| 3 F P ローム少量含む黒褐色土。 | 10 灰褐色土 粘土主体。 | 16 黒色灰層+焼土ブロック。 |
| 4 F P ローム粒子、炭化物少量含む黄黒褐色土。 | 11 10に似るが黒っぽい。 | 17 黒褐色土 ロームブロック。 |
| 5 4に粘土ブロック。 | 12 粘土 灰の強土。 | 18 暗茶褐色土 ローム粒子多量、焼土粒子。 |
| 6 貼り床 ローム・粘土。 | 13 粘土 焼土のローム分の混土。 | |
| 7 明茶褐色土 ローム粒 F P 炭化物。 | | |

に検出され、円形を呈し、径130~140cm、深度37cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、袖部核には隙を用い、粘土を貼り構築されている。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは比較的多く、煙道部は壁より55cmと短い。掘り方 住居中央部付近に径65~145cm、深度23~25cmの円形の床下土坑を4基検出し、全体にはカマド前面を残し、コの字状に浅く掘りくぼめる。重複 113号・114号・144号土坑と重複し、新旧関係は埋土より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 出土する遺物の量は比較的多いが、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱して出土する。出土遺物中、坏(No10)・椀(No16)は床面直上よりの出土であり、他の遺物も胎土、器形共に類似しているものが多い。特筆すべき遺物として、通常の和鐘とは異なり螺旋状を呈する仮称ドリル状鉄製品(No26)の出土がある。





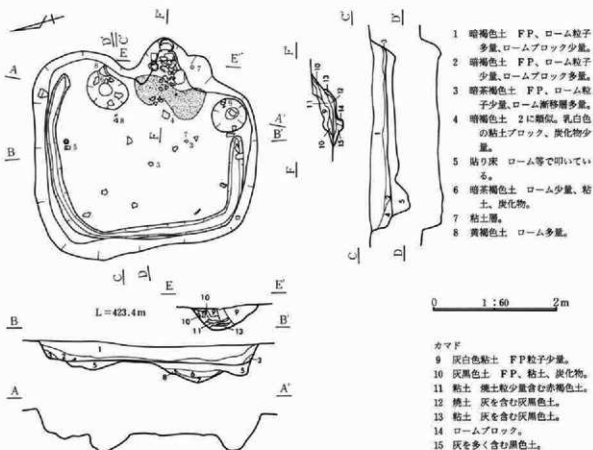
81号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 鉢	4.0cm	13.0・3.4・5.6 1/3	多量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 浅黄色	右回転糸切り未調整。外面体部正位に「罫」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 鉢	埋土	- - - - 口縁部小片	多量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部正位に「罫」の墨書あり。	墨書
③	須恵器 鉢	15.0cm 埋土		多量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	体部に丸みを持ち、口縁部は外反する。 底部は右回転糸切り。外面体部に薄く墨書あり。	墨書
4	須恵器 鉢	埋土	- - - - 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に薄く墨書があるが、判読不可。	墨書
5	須恵器 鉢	埋土	- - - - 体部小片	少量の白色・石英細砂粒、赤 褐色粒 酸化気味	外面体部に墨書あり、判読不可。におい 褐色。	墨書
⑥	須恵器 鉢	38.0cm	- - - - 高台～体下位1/4	少量の白色細砂粒 還元、軟 質 灰白色	体部は直線的に開く。外面体部正位に墨 書があるが、判読不可。	墨書
7	須恵器 鉢	埋土	- - - - 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元、 軟質 灰白色、暗褐色	内面底部～体部にかけて墨書があるが、 判読不可。	墨書

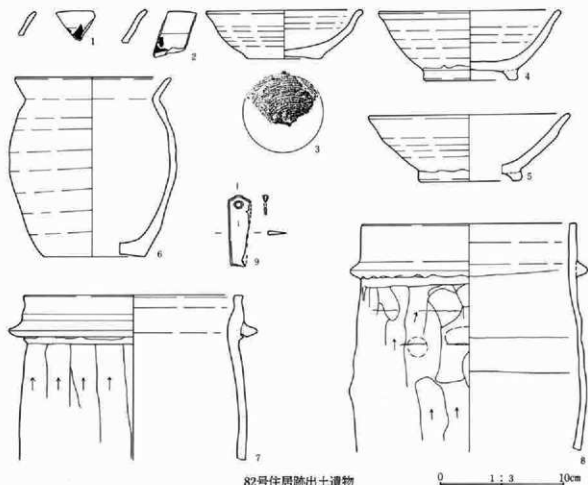
遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑧	須恵器 環	埋土	12.2・4.3・5.0 小片	白色細・粗砂粒・細礫、石英 粗砂粒 還元 灰色	体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	9と胎土は類似
⑨	須恵器 椀	42cm	14.4・ - ・ 5.6 体部の一部、高台 部欠損	少量の白色細砂粒 焼し焼成 黒色	体部は器内が比較的薄く、直線的に大きく開き、口縁部は外反する。底部は回転糸切り、方向は不明。	胎土分析
⑩	須恵器 環	床直	14.0・5.2・7.0 1/4	白色細砂粒～中礫、少量の赤 褐色円粗砂粒 還元(酸化気味) にぶい黄褐色	体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。底部は剝離している。	
⑪	須恵器 環	床直	12.6・3.5・6.0 1/3	白色細砂粒、石英粗砂粒 還元、軟質 灰色	体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
⑫	須恵器 環	6.0cm	13.2・4.4・6.5 完形	白色細・粗砂粒・細礫、赤褐色 細礫 還元(酸化気味) に ぶい黄褐色	体部は僅かに丸みをもつ。底部は右回転糸切り未調整。	
⑬	須恵器 椀	8.0cm 8.5cm 11.5cm 19.0cm	18.0・ - ・ 7.0 1/2、高台部欠損	少量の白色細砂粒 還元、軟 質 外-灰色、内-灰白色	内面はコテを当てて整形したような条痕が散みられるが、欠損部があるので同心円状か螺旋状か不明。底部は右回転糸切り後、高台貼付時の回転痕で。	形態・胎土とも14・15に類似
⑭	須恵器 環	ピット	13.5・4.4・6.0 口縁部一部欠損	白色細砂粒 還元、軟質 浅黄色、黒色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	胎土分析
⑮	須恵器 椀	ピット	- ・ - ・ 7.0 底部～体部下位 2/3	白色細砂粒・中礫、赤褐色細 砂粒・中礫 還元(酸化気味) 灰黄褐色	底部は割口の状況からみて円板作りの可能性あり。底部は右回転糸切り未調整。	
⑯	須恵器 椀	床直	13.9・5.5・7.2 口縁部一部欠損	白色細砂粒・細礫、石英粗砂 粒 還元、軟質 浅黄色	体部は直線的に開き、口縁部は外反する。器内は厚く、高台は底径の内側につけられる。底部は右回転糸切り後、周辺は高台貼付時の痕で。	
⑰	須恵器 椀	4.2cm 36cm	14.8・6.0・5.8 体部の一部欠損	少量の白色細砂粒 還元、軟 質 灰白色、一部黒色	底部は右回転糸切り後、周辺は高台貼付時に回転痕で。整形は内外面とも化粧掛けしたような状態にきれいに整い、部分的に回転痕での跡がみえる。14も同様。	形態・胎土とも14とよく類似する胎土分析
⑱	須恵器 椀	12.0cm	14.4・5.4・6.2 1/3	白色細・粗砂粒、石英粗砂粒 還元、軟質 灰黄褐色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り後、周辺部は高台貼付時の回転痕で。	
19	緑釉陶 器 椀	床直	15.0・ - ・ - 小片	夾雑物はほとんどなし 還元 灰色	体部は深く丸みをもつ。口縁部外面はロクロ目が残る。釉はオリブ灰色	
⑳	須恵器 椀	29.5cm 34.0cm	13.6・5.6・8.0 1/4	少量の白色細砂粒、石英・兵 石の粗砂粒 酸化	体部は下位が底部に向かって窄まり、口縁部が僅かに外反する。にぶい藍色	
㉑	灰釉陶 器 皿	8.5cm	14.0・4.9・6.4 1/3	少量の白色細・粗砂粒 還元、 緊緻 灰白色、釉はほとんど 剥げ、白色に肌跡が残るのみ	外面体部下半は回転痕削り後、回転痕で調整 内面底部は残存部分は丁寧にコテが当てられている。底部は回転痕での後、一方 向に削りた跡が僅かにみられる。釉は薄 け掛け。	胎土D
22	灰釉陶 器 皿	埋土	- ・ - ・ 8.0 小片	微量の黒色鉱物 還元、緊緻 灰白色、釉はオリブ灰色	高台は角形だが、發は丸みをもつ。底部は回転痕削り、周辺部は回転痕で。内面は全面に施釉。	胎土A

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
23	灰釉陶器 碗	柱穴内	— — — 8.2 小片	夾雑物はほとんどなく緻密還元、堅緻 灰白色	内面は丁寧にコテが当てられている。底部は凹転態で、内面には阿高台座の重ね焼痕がみられる。	粘土B
㊸	須恵器 羽釜	15.5cm 19.0cm	18.0 — — — 胴部上位〜口縁部 1/3	白色・石英結・粗砂粒、赤褐色円形粗砂粒 還元(酸化気味) 内側一灰色、外側一により黄褐色	胴部は口縁部に向って窄まる。踵は比較的大きく整っている。口縁部内外面回転撫で、胴部外面は上方への篋形リ。内面は横方向の撫で。	
㊹	土師器 土罐	埋土		土師器質の土罐で胎土は夾雑物粒が少なくやや重みがある。色調は淡褐色を呈し全面に赤色顔料が施される。焼成はやや硬い。穿孔は焼成前での細棒のような工具で通している。長さ4.0cm。		
㊺	鉄製品 鏃	10.0cm		調査時の割れなし。先端は螺旋状にねじれ、ドリル刃状を呈す。茎は断面方形。螺旋は4〜5条。鏃は螺旋成の箇所と柱目状の箇所とがあるが精鍛造。全長8.1cm、重8.4g。		
㊻	鉄製品 釘か	29.5cm		全体に柱目割が顕著で粗鍛造のため釘か。柱目割は外面から芯の部分まで達し深い。両端部の割口は新鮮で調査時の欠損である。残存長5.5+αcm、重5.5g。		
㊼	鉄製品 釘か	34.0cm		先端部、図上方ともに旧時の欠損である。図上方側は薄く中央部分で厚くなるため刀子の茎かも知れない。鋸目は砥礫で鈍割が芯まで達し粗鍛造を思わせる。そのため刀子であつたら雑用(工具)刀子と思われる。残存長5.9+αcm、重5.1g。		

8 2号住居跡 (写真図版48頁、118頁)



位置 4B-6グリッド 方位 N-75.5°-W 形状 360×300cmを測る隅丸方形形状のプランを呈し、両壁は短く、やや張り出す。壁高は33cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマドをもつ東壁を除き、幅10cm、深度5cmの溝がコの字状に巡る。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近及びカマド前面北寄りに2穴検出され、円形を呈し、径53~70cm、深度23~29cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであると考えられる。礫の隙間には粘土を詰め固定する。煙道部先端には土器片を数片伏せた状況がみられる。燃烧部は壁のライン上より内側に位置し、煙道部は壁より56cmと短い。掘り方 住居中央部付近に径100~110cmの不定円形の床下土坑を1基検出し、土坑内には粘土ブロック層が多量に入る。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、小形甕 (No.6)・羽釜 (No.8)・鉄製品 (No.9) は貯蔵穴・ピット内、及び床面直上よりの出土である。



82号住居跡出土遺物

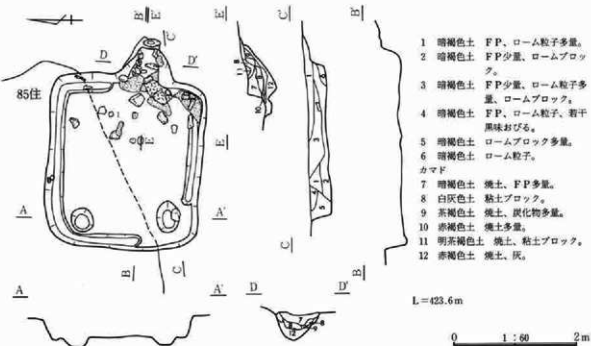
0 1:3 10cm

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 坏	埋土	- - - - 口径部小片	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に墨書があるが、判読不可。	墨書
2	須恵器 坏	埋土	- - - - 口径部小片	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に墨書があるが判読不可。	墨書

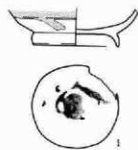
遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・彫形の特徴	備考
③	須恵器 杯	2.0cm 26.0cm	12.5・3.8・5.8 1/4	白色細・粗砂粒、石英の円細礫 還元 (酸化焙気味) 浅黄褐色	体部は上位がやや丸みをもち、口唇部が僅かに外反する。底部は回転糸切り未調整。	
④	須恵器 杯	4.0cm	14.6・5.5・7.4 1/3	白～灰色細・粗砂粒・細礫 赤褐色細礫 還元 (酸化焙気味) 浅黄褐色	体部は丸みをもって開き、口唇部が僅かに外反する。器内は厚手。高台は厚く断面角形。底部は回転糸切り未調整。	
⑤	須恵器 椀	2.0cm	16.0・5.3・8.0 1/4	灰色粗砂粒・細礫 還元 浅黄褐色	体部はやや丸みをもって開き、口唇部が僅かに外反する。	
⑥	須恵器 小皿	貯藏穴内 -8cm -19cm	12.0・14.2・8.1 底部～口縁部1/3	白色・石英細砂粒 還元 (酸化焙気味) におい赤褐色	胴部は凹凸が若干あり、口縁部は短く開き、口唇部内面に若干稜をもつ。底部は距離で、胴部～口縁部はロクロ整形。	胎土分析
⑦	須恵器 羽釜	カマド内	17.2・ - ・ - 胴上位～口縁部1/3	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 明黄褐色	胴の上面は丁寧に撫でられているが、下面は隙間があいている。胴部は上方への寛用り。	
8	須恵器 羽釜	カマド ビット 床直	16.8・ - ・ - 胴中位～口縁部	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化焙気味) におい褐色	胴は小さめだが、比較的丁寧に付けられる。胴中位は上方への寛用り、上位は輪積瓦がやや残り、上方への段無で、内面は横撫での後、所々上方への撫で、口縁部は回転整。	
⑨	鉄製品 利器	ビット内 -15.0cm	用途不明の利器で片刃となる。図右側に目釘穴様の小穴あり。全体に薄手であるため錆化の進行はやむを得ないが全体に錆ぶくれが少なく精緻を思わせる。全長5.7cm、重3.8g。			

8 3号住居跡 (写真図版49頁、118頁)

位置 6B-5グリッド 方位 N-82.5°-W 形状 275×245cmを測る隅丸方形のプランを呈し、長軸を東西方向に取る。壁高は32cmを測る。床面 床はローム地床であるが、北半部(重複住居部分)はローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝は、カマド前面を除き幅15cm、深度8cmの溝がほぼ全



周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南西コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径35~50cm、深度12cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の間には粘土を詰め固定する。燃焼部は壁のラインより外側に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より50cmと短い。掘り方 カマド前面を残し、コの字状に浅く掘りくぼめる。重複 85号住居跡(弥生時代)と重複し、新旧関係は遺構確認時の埋土状態より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 出土する遺物の量は比較的少なく、遺物は南東コーナー部、カマド内部、及び周辺に散乱し出土する。



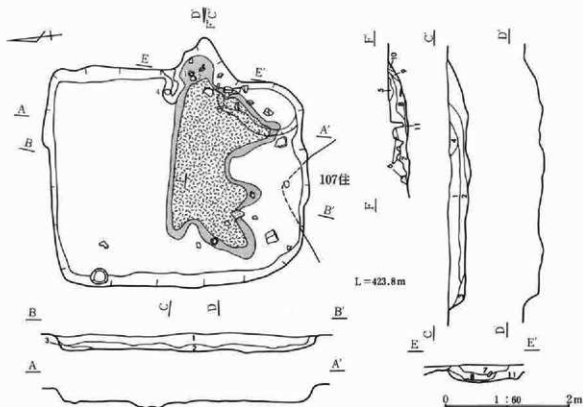
0 1 : 3 10cm

番号 器種	出土位置	量目(cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴
① 灰釉陶器 碗	16.0cm	----- 高台~体部下位	微量の白色細砂粒、緻密 還元 灰白色 釉 は透明 胎土B	高台外面は丸みをもつ。底部は回転盤で。外面底部は転用視として使用か、墨書がみられる。

83号住居跡出土遺物

84号住居跡 (写真図版50頁、118頁)

位置 9B-5グリッド 方位 N-83.0°-W 形状 415×345cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は25cmを測る。床面 床はローム混じりの褐色土を叩き貼り床とし、壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径85~125cm、深度20cmを測る。カマド 東壁の



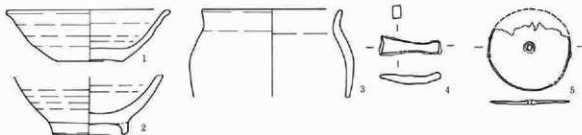
第3章 検出遺構・遺物

- 1 暗茶褐色土 F.P.、ローム粒、炭化物。
 2 褐色土 F.P.、ローム粒、炭化物多量。
 3 茶褐色土 F.P.少量、炭化物。
 4 明茶褐色土 F.P.、炭化物、ローム、粘土。

- カマド
 5 暗茶褐色土 F.P.多量。
 6 粘土ブロック。
 7 茶褐色土 F.P.少量、炭化物。
 8 白灰色土 粘土と焼土。

- 9 明黄褐色土 8より粘土少量。
 10 暗褐色土 ローム層移層をベースに少量のF.P.、粘土。
 11 暗茶褐色土 炭化物、焼土。

中央やや南寄りに設けられ、袖部には礫を用いるが、他は礫を用いず粘土のみで構築される。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部は若干張り出し、煙道部は壁より60cmと短い。掘り方 径70~150cm、深度17~26cmの楕円形の床下土坑を5基検出する。重複 107号住居跡(弥生時代)と重複し、新旧関係は埋土断面より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく遺物は、住居中央南側等に散乱し出土する。掲載の出土遺物はすべて床面直上よりの出土である。



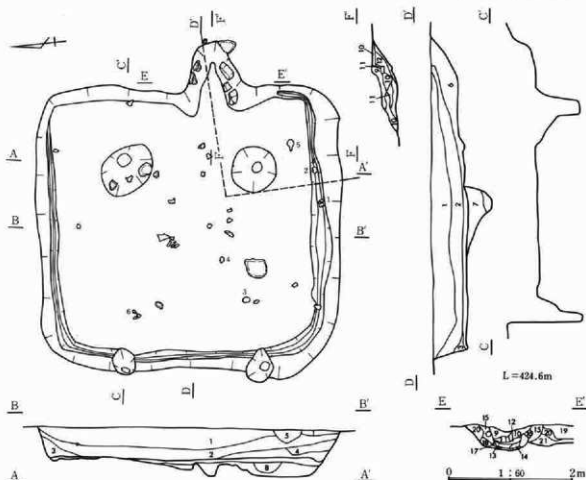
84号住居跡出土遺物

0 1:3 10cm

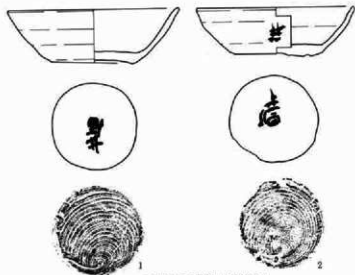
遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・器形の特徴	備考
①	須恵器 杯	床直	13.0・4.1・5.5 1/2	白色細・粗砂粒 気味 洗黄色	胎土は僅かに丸みをもち、口縁部が外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
②	須恵器 椀	床直	—・—・6.0 1/2	白色細・粗砂粒・細礫 酸化 橙色	器内は厚く、高台は端部の整形が雑である。底部回転糸切り後周辺部は高台粘付時に覆で。	
3	須恵器 小形壺	埋土	11.4・—・— 小片	白~灰色細・粗砂粒・細礫 少量 酸化 白~黄褐色	胴部はやや丸みをもち、口縁部は短く、僅かに外反する。クロコ型。	
④	鉄製品 利鏝	カマド壁跡		用途不明の鉄製品で田鏝をどめる。片刃が薄くなり断面は方形を呈する。鏝は柱目筋が少しあり精緻さを思わせる。全長5.0cm、重16.5g。		
⑤	鉄製品 紡錘車	カマド壁跡		紡錘車の円鏝で、軸はない。鏝は板目割れがあり精緻を思わせる。欠損は調査時、軸穴の周辺はわずかに塵上がる。最大径6.5cm、重23.4g。		

86号住居跡 (写真図版51頁、118頁)

位置 22B-9グリッド 方位 N-83.0°-W 形状 490×450cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は53cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅10cm、深度10cmの溝がほぼ全周する。柱穴 4穴検出され、うち2穴は住居中央やや東寄りに、残り2穴は西壁にかかる壁柱穴である。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は良好で天井部の一部が残る。袖部・煙道部には礫を核として用いているが、主体的には粘土で構築されていると考えられ、天井部も粘土であった。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より65cmと短い。掘り方 住居中央部付近に径48~120cm、深度32~46cmの円形の床下土坑を4基検出する。重複 16号掘立と重複し、本遺構の方が古い。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土するが、床面より離れての出土である。特筆すべき遺物として、杯 (No. 1、2) は「野井」と記された墨書があり2点の書体は酷似する。



86号住居跡



86号住居跡出土遺物(1)

- 1 黒色土 FP。
- 2 黄褐色土 FP、ロームブロック。
- 3 2に類似。FP少量。
- 4 黄褐色土 ロームブロック、焼土粒。
- 5 黒色土 FP。
- 6 黒色土 ロームブロックの張土。
- 7 黒褐色土 ロームブロック。
- 8 7に類似。ブロック大きい。

カマド

- 9 ローム 粘土ブロックの黄褐色張土。
- 10 灰白色粘土。
- 11 ロームと粘土の張土 1より灰色。
- 12 粘土 焼土、灰との張土。
- 13 赤褐色土 焼土、炭化物。
- 14 暗赤褐色土 焼土、炭化物、粘土。
- 15 暗黄褐色土 ローム粒多量、焼土粒少量。
- 16 15の焼土化。
- 17 15+多量の粘土ブロック。
- 18 暗黄褐色土 ロームブロック多量、焼土ブロック少量。
- 19 暗黄褐色土 ロームブロック多量、FP小粒子、粘土ブロック。
- 20 暗黒褐色土 ローム漸移層土。
- 21 暗褐色土 ローム漸移層土。

0 1:3 10cm

第3章 検出遺構・遺物



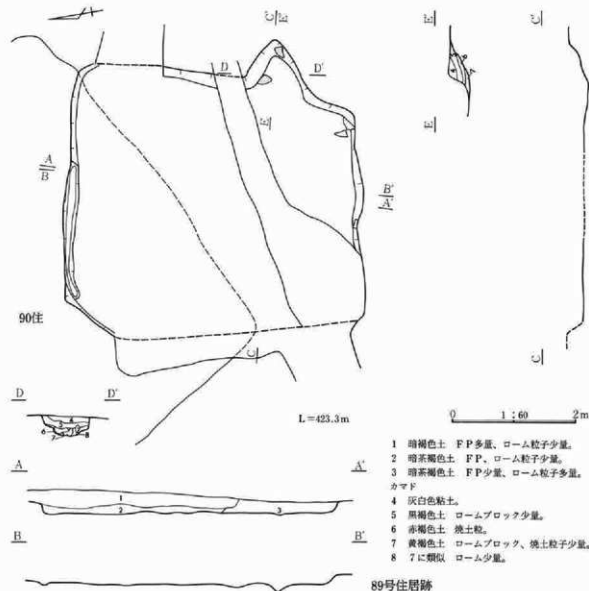
86号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	壁際 14.0cm	13.6・4.3・6.3 底部へ口縁部2/3	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。体部には粘土紐をよく接合しなかったとみられ、隙間が所々にある。外面底部に「野井」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 坏	壁際 2.5cm	12.6・3.8・6.8 体部へ口縁部一部 を欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) 灰白色。にぶ い黄褐色、黒色	外面底部に「野井」、外面体部側位「口井」 の墨書あり。1と形態、切り離しは同じ。 壁際に落ちた出土状態で一括性は高い。	墨書
③	須恵器 坏	床直 埋土	12.8・3.5・6.4 1/3	少量の白色細・粗砂粒。僅か な赤褐色巧粗砂粒 還元 (酸 化気味) 外一灰色、内一 ぶい褐色	体部は、やや丸みをもって開き、口唇部 の器内は薄い。底部は右回転糸切り未調 整。	
④	須恵器 蓋	38.0cm	10.8・ - ・ - 小片	少量の白色細砂粒 還元 灰黄褐色	内面と口縁部外面の一部に自然釉がかか る。	
⑤	須恵器 長頸壺	床直	4.8・15.9・7.5 口縁部一部欠損	少量の白色細砂粒 還元 灰色	底部は中心に回転糸切り痕を残し、周辺 は回転撫で。ワクロ整形。	
⑥	石製品 砥石	6.5cm			使用の当初は自然石であったと考えられるが、未使用面は陶小口面にある。平面上方に小穴があり手持りの下底。質はやや軟らかで名倉産の軟か目に相当。材質は流紋岩。	

89号住居跡 (写真図版52頁)

位置 4B-9グリッド 方位 N-76.5°-W 形状 490×450cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は20cmを測る。床面 床はローム地床を基とするが、重複遺構部分はローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝は北壁下の一部に、幅15cm、深度5cmの溝が検出されたのみである。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を用いず粘土のみで構築されている。燃燒部は壁のラインより内側に位置し、袖部張り出しは少なく、煙道部も壁より65cmと短い。掘り方 なし。重複 90号住居跡(古墳時代)と重複し、新旧関係は埋土断面より本遺構の方が新しい

と判断される。また、埋土にF Pを含む土坑や近世以降の耕作溝により攪乱を受ける。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。



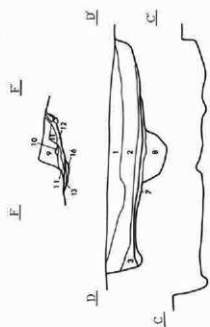
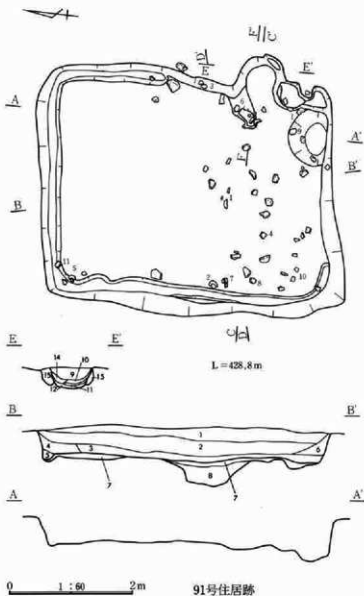
91号住居跡 (写真図版53頁、119頁)

位置 2F-24グリッド 方位 N-84.0°-E 形状 470×380cmを測る隅丸形状のプランを呈し、壁高は43cmを測る。床面 床はローム混じりの褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅15cm、深度11cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、70~100cm、深度13cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態が悪く、袖部・煙道部には若干の礫が残るだけではあるが、石組みのカマドであったものと考えられる。礫の隙間には粘土を詰め固定する。燃燒部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より46cmと短い。

掘り方 住居中央部付近に径130cm、深度40cmの円形の床下土坑を1基検出する。

重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居南半部に散乱して出土し、床面直上よりの出土はみられない。特

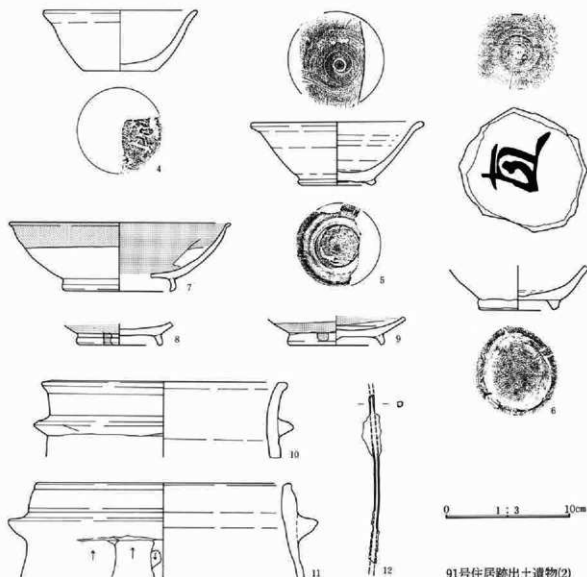
筆すべき出土遺物として、椀 (No 6) に墨書で「直」と記されており、17号・49号・97号住居より出土の文字と書体が酷似する。



- 1 暗茶褐色土 F P多量、若干耕作による擾乱。
 - 2 茶褐色土 F P、ローム粒、炭化物、粘土。
 - 3 明褐色土 F P少量、ローム粒。
 - 4 黒色土 炭化物、ローム粒。
 - 5 明茶褐色土 F P少量、ローム粒。
 - 6 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム粒。
 - 7 貼り床 ローム、若干パミス。
 - 8 茶褐色土 ローム、パミス。
- カマド
- 9 暗茶褐色土 F P少量、粘土粒、炭化物。
 - 10 白色粘土層。
 - 11 赤褐色土 炭化物、粘土、灰、焼土。
 - 12 暗赤褐色土 焼土が11より多量。
 - 13 黒灰層。
 - 14 赤褐色土 焼土炭化物多量。
 - 15 粘土層。
 - 16 埴山と黒灰が混じったもの。



91号住居跡出土遺物(1)

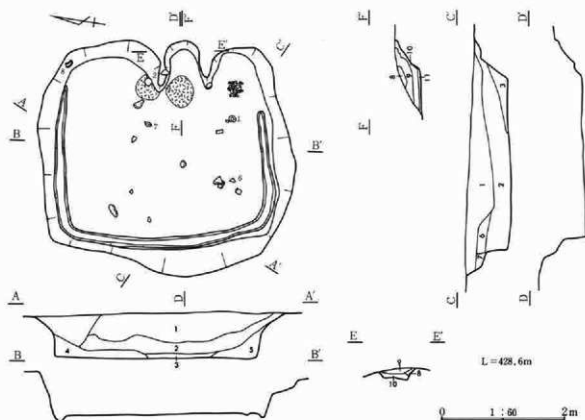


91号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	～3、 26cm 袖上埋土	12.1・4.1・6.6 底部～口径部1/2	白色・石英細・粗砂粒 還元（酸化気味）に ぶい・黄 褐色	体部は直線的に開く。底部は右回転 未調整。	
②	須恵器 坏	6.5cm	12.6・4.4・5.7 口径部1/3穴損	少量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 暗灰黄色	体部は丸みをもち、口径部は外反する。 底部は回転未調整。	
③	須恵器 坏	4.0cm	14.4・5.1・7.0 埋土 体部～口径部1/2 を欠く	白色・石英細・粗砂粒、灰色 顔料 還元（酸化気味） 灰黄褐色	体部から口径部まで直線的に開き、外面 はロクロ目が顯著である。底部は右回転 未調整。	
4	須恵器 坏	9.0cm	12.1・4.8・5.5 底部～口径部1/4	夾雑物はほとんどない 還元、軟質 灰白色	体部は丸みをもち、口径部は外反する。 底部は右回転未調整。	
⑤	須恵器 碗	34cm	13.4・5.0・5.6 高台～口径部1/3	夾雑物はほとんどない 還元、軟質 灰白色	体部は僅かな丸みをもち、口径部は大き く外反する。内面底部は螺旋状の調整痕、 底部は回転未切り後、周辺部は高台貼付 時の態で。	

遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑥	須恵器 鉢	31.0cm カマド袖上 埋土	- - - 6.3 高台～体部下位のみ	白色・石英細・粗砂粒 還元(酸化気味) ぶい橙 色	内面底部側縁は縦線状の高痕をもつ。底部は右回転糸切り後、周辺部は高台貼付時の回転軸で内面底部に「直」の磨書有り。	磨書
7	灰釉陶器 鉢	4.5、7cm	17.5・5.5・8.8 高台部～口縁部 1/4	僅かな白色粗砂粒、黒色鉱物粒 還元 灰黄色、軸は灰白色、オリーブ灰色	口唇部は尖り気味に外反、高台は横の弱い三ヶ月高台、体部外面は釉で、若干ぬた痕が残る。軸は刷毛塗り、内面は残存部は体部の一部を残して全面施釉、内面底部に重ね焼痕。	粘土D
8	灰釉陶器 皿	9.5cm	- - - 6.4 高台～底部の残存	僅かな白色粗砂粒、黒色鉱物粒 還元 灰白色	内面底部は中心部まで丁寧にコテが当てられている。底部回転軸で、軸は残存部にはかけられていない。	
9	灰釉陶器 皿	3.0cm	- - - 7.8 高台～体部下位のみ残存	白～灰色細砂粒、石英細礫 素地は粗い 還元 灰白色 軸は灰白色	体部下位は荒削り、軸は刷毛塗り、内面底部に重ね焼痕。底部中央と他一ヶ所に突出部があるが中と軸を含むものと思われる。底部回転軸で。	
10	須恵器 羽釜	24cm、カマ ド埋土	19.6・ - - - 口縁部1/4	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) ぶい橙 色	鉾は比較的大きめ、口縁部は外反し、口唇部は平坦面をもつ。	
11	須恵器 羽釜	31.0cm カマド	29.3・ - - - 口縁部1/5	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰黄褐色	鉾は大型で、丁寧につけられているが、口縁部はやや歪みがある。胴部は上方方向削り。	
⑫	鉄製品 棒状	埋土	断面形は方形を呈している。鉾は鉾目割れが見られるが、突達していないためやや磨損を思わせる。両端は調査時の欠損である。残存長13.5cm。重4.4g。			

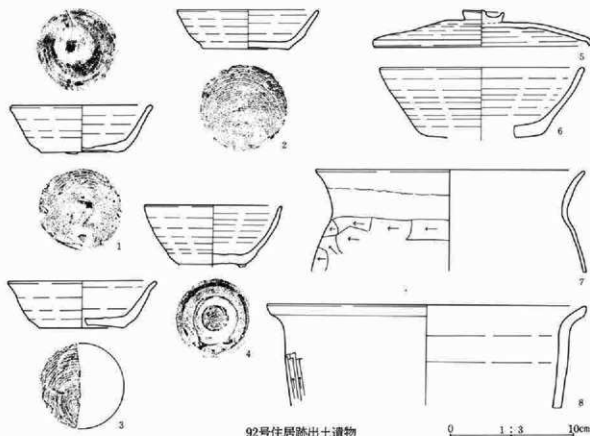
92号住居跡 (写真図版54頁、119頁)



- 1 暗茶褐色土 F P、ローム粒、焼土少量、浅間B軽石。
 2 明茶褐色土 F P、ローム粒、炭化物多量。
 3 黒褐色土 F P少量、炭化物。
 4 暗黄褐色土 F P、炭化物少量、ローム粒多量。
 5 茶褐色土 F P、ロームブロック、炭化物。
 6 褐色土 F P少量、ローム粒。

- 7 暗黄褐色土 F P少量、ロームブロック。
 カマド
 8 ロームブロック。
 9 黄褐色土 F P粒子、黒色土少量。
 10 黒褐色土 10に類似。灰おびる焼土少量。
 11 赤褐色土 焼土、炭化物多量。

位置 3 F-23グリッド 方位 N-77.5°-E 形状 400×370cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は60cmを測る。 床面 床はローム地床。壁溝はカマドをもつ東壁を除き、幅15cm、深度8cmの溝がコの字状に巡る。 柱穴 なし。 貯蔵穴 なし。 カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部の上に礫を置く。煙道部は礫を用いず粘土のみで構築されている。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、両袖石の中心に炭化物・灰が集中して出土する。 掘り方 住居中央部付近、及びやや南壁寄りに径110～160cm、深度10～15cmの円形の床下土坑を2基検出する。 重複 重複する遺構はない。 遺物 出土する遺物の量は比較的少ない。出土遺物中、坏 (No 2) は床面直上よりの出土である。



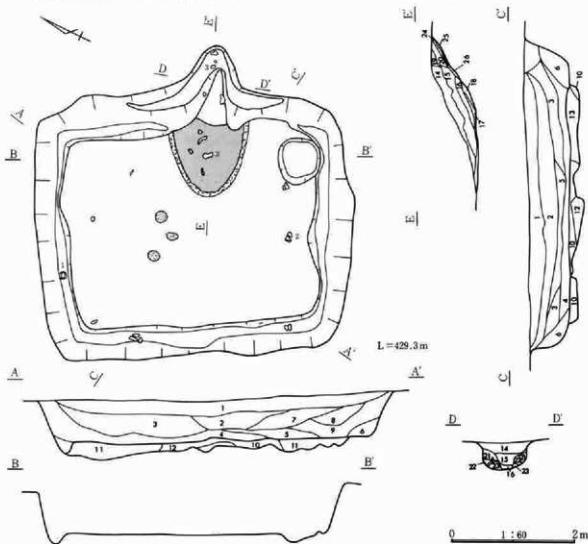
92号住居跡出土遺物

0 1:3 10cm

遺物番号	類別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	11.5cm	11.4・3.8・6.5 先形	白色細砂粒・角細礫、2cm大の礫1 還元 灰白色	右回転永切り未調整。底部に礫を取り除いた跡、粘土をつめたと思われる補修痕あり。	
②	須恵器 坏	床直	11.6・3.1・7.0 口縁部一部欠損	少量白色細粒、石英・長石粗砂粒・細礫 還元 灰白	右回転永切り未調整。体部下位は窄まる。	
③	須恵器 坏	カマド埋土	12.0・3.7・6.8 1/4	少量の白色細砂粒、僅かな黒色円粒 酸化気味 におい黄褐色・黒色	右回転永切り未調整。体部はややふくらみをもち、口縁部は外反する。	

遺物番号	類別 器種	出土位置	量目 (cm)		胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径・器高・底径	口縁部一部欠損			
④	須恵器 椀	-7cm 掘り方	11.0・4.9・5.3		白色細砂粒、灰色粗砂粒・細礫 還元 灰白色	体部はやや深めで丸みをもつ。底部は高台貼付時に横撫で。高台を欠く。	
⑤	須恵器 蓋	埋土	17.2・2.9・3.3	小片	白色細砂粒、黒色の軟質な円粒を少量 還元 灰色	鉦は周辺部が輪状になり中央部が突出する。体部は圓平で端部は折り曲げられる。	
⑥	須恵器 杯	25.0cm	16.2・ - ・ 9.0	小片	白色細砂粒、赤褐色円粗砂粒 僅かな石英の角礫 還元 相酸化気味 灰色、内側黄褐色	底部は丸底、体部上位から口縁部は内彎気味。体部は口縁部が直立つ。底部整形は凍ハゼ状の剥離が著しく不明。	
⑦	土師器 壺	26.5cm	21.5・ - ・ -	胴上位〜口縁部 2/3	白・灰色細砂粒、赤褐色円粗砂粒 におい赤褐色	口縁部は緩やかに外反する。口縁部横撫で、胴部上位は横方向の直削り。	
⑧	口使・ 酸 罍	36.0cm	25.6・ - ・ -	小片	白色細・粗砂粒、0.5~5mmの赤褐色円粒、僅かに石英の角礫 酸化 におい褐色	口縁部は緩やかに外反し、口唇部は平坦面をもち直立つ。胴部は上方向への直削り。口縁部は横撫で。	胎土分析

9 3号住居跡 (写真図版55頁、119頁)



- 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒少量。
- 2 茶褐色土 F P多量、炭化物少量、ロームブロック。
- 3 暗黄褐色土 F P、ローム粒多量、炭化物少量。
- 4 暗茶褐色土 F P、ローム粒、炭化物。
- 5 黒褐色土 F P、極少量のローム粒。
- 6 明茶褐色土 F P、ローム粒。
- 7 明褐色土 F P、ローム粒、炭化物。
- 8 黄褐色土 F P、ローム粒、炭化物少量。
- 9 明黄褐色土 F P少量、ロームブロック多量。
- 10 暗茶褐色土 F P少量、ロームブロック。
- 11 暗茶褐色土 10よりロームブロック少量。
- 12 黄褐色土 ローム粒、パミス多量。
- 13 赤褐色土 焼土粒、炭化物、パミス多量。

カマド

- 14 茶褐色土 F P、ローム粒、炭化物、焼土少量。
- 15 黄灰色土 粘土、炭化物、焼土。
- 16 暗黄灰色土 灰、粘土、炭化物。
- 17 明灰色土 黒炭層。
- 18 暗赤褐色土 焼土、灰層、炭化物層。
- 19 暗黄褐色土 F P少量。
- 20 黄褐色土 ローム粒、パミス。
- 21 暗黄褐色土 ローム粒、焼土粒。
- 22 茶褐色土 ローム粒、焼土粒。
- 23 赤褐色土 ローム粒、焼土炭化物。
- 24 粘土の焼土化。
- 25 暗茶褐色土 F P、ローム、灰。
- 26 焼土 炭化物。

位置 18E-22グリッド 方位 N-67.0°-E 形状 510×420cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は73cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅20cm、深度12cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径70cm、深度13cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央南寄りに設けられ、袖部・煙道部には襖を用いず粘土のみで構築されている。煙道部において粘土のオーバーハングを検出するため天井部も粘土のみの構築と考えられる。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部も壁より65cmと短く、燃焼部より急激に窄まり急峻に立ち上がる。掘り方 カマド前面、北東コーナー付近、西壁沿いの各部分を浅く掘りくぼめる。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少ない。遺物は、住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、椀(No.1)・坏(No.2)は床面直上よりの出土である。特筆すべき出土遺物として、椀破片(No.1)は、破片化の後に転用硯として内外面使用されている。



93号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	床直	- - - 8.5 高台～底部	白色細砂粒、僅かな石英粗砂 還元 灰白色	底部右側転糸切り。体部に欠いて、転用硯に使用、欠け口にも墨の摩跡が残る。 底部内面は全面に墨痕が残る。	墨痕

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・高さ	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
②	須恵系 坏	床底	11.7・3.6・6.8 口縁部一部欠損	少量の白色細砂粒、黒色円粗砂粒、石英角粗砂粒、還元 灰黄色	右側部糸切り未調整、体部立ち上りから口縁部までほぼ直線的に開く。器内は厚手である。	
③	土師 罍	11.5cm カマド内 埋土	20.2・ - ・ - 胴部下位～口縁部 1/2	白・灰色粗・粗砂粒、赤褐色円粗砂粒 酸化 におい橙色	胴部上位に最大幅をもち、口縁部は直立気味に立ち上り、上位が聞き強い「コの字」状を呈する。口縁部横溝で、胴部上位横方向の埋削り、中位～下位は下方への発削り。	
④	鉄製品 釘か	カマド上	先端部は調査時欠損、錆割は硬であるので素延しのように見え粗鍛造。上半には木質が付着している。曲がっていないければ5.5cmが現存長。重8.3g。			

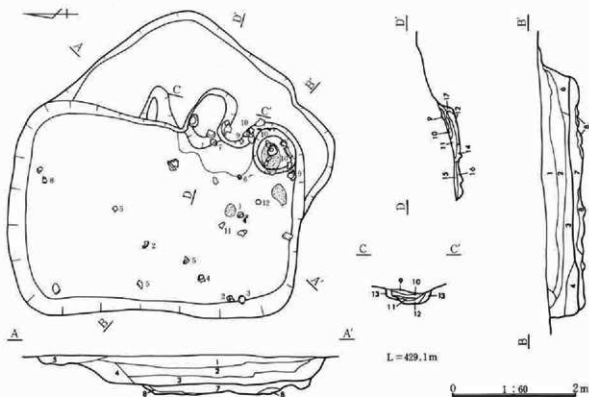
9 4号住居跡 (写真図版56頁、119～120頁)

位置 13E-20グリッド 方位 N-77.0°-W 形状 470×320cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は46cmを測る。床面 床はローム混じりの褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はなし。

柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径66～75cm、深度28cmを測る。

カマド 東壁のほぼ中央及び東壁の中央やや南寄りの2ヶ所に設けられ、南側のカマドは袖部の左右に竈を設置した痕跡がみられ、規模も北側のカマドに比べ大きい。北側のカマドは壁の焼土化が少なく、灰・炭化物の遺存も少ない。燃焼部は両カマド共にほぼ壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より54～74cmと短い。2ヶ所のカマドは直接的に重複しておらず、その新旧は明らかではない。

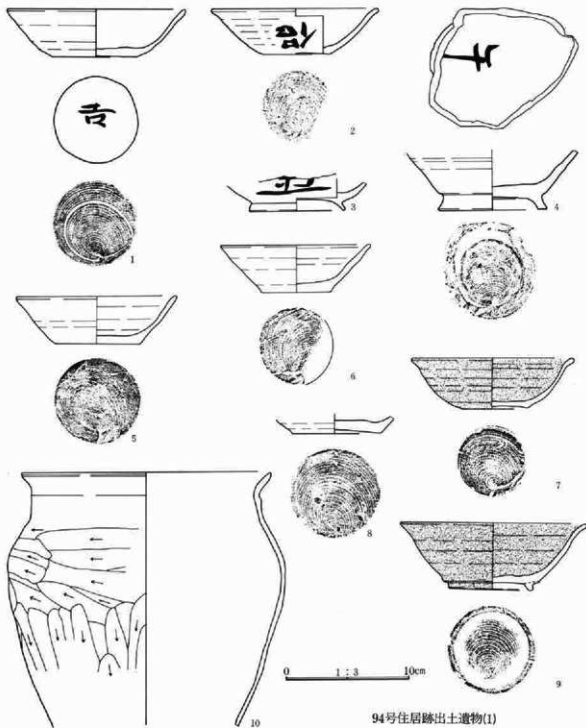
掘り方 床下土坑はもたないが住居中央部付近を浅く掘りくぼめる。重複 なし。遺物 出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、床面よりやや離れ、住居中央南半部に多く散乱し出土する。特筆すべき遺物として、脚付き羽釜(No12)と、「吉」・「侶」・「午」の墨書土器の出土がある。



- 1 暗茶褐色土 浅間B軽石、FP、ローム少量。
- 2 赤褐色土 FP、ロームブロック、炭化物少量。
- 3 明茶褐色土 FP、ロームブロック、ローム粒子2より多量。
- 4 褐色土 FP少量、ローム粒。
- 5 明褐色土 浅間B軽石少量、FP。
- 6 暗灰色土 黒灰、炭化物、粘土。
- 7 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒多量。
- 8 黄褐色土 ロームブロック。

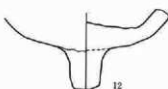
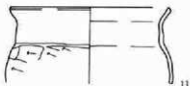
カマド

- 9 灰褐色土粘質土 粘土、灰、焼土。
- 10 暗褐色土 灰、焼土多量。
- 11 橙褐色土 焼土、灰、ロームブロック。
- 12 黒褐色土 焼土、ロームブロック多量。
- 13 灰褐色土 一部焼土化。
- 14 暗褐色土 ロームブロック、炭化物。
- 15 6+多量のFP。
- 16 6+少量のFP。
- 17 暗褐色土 ローム漸移層、焼土粒子、ローム粒子少量。



94号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出遺構・遺物



0 1 : 3 10cm

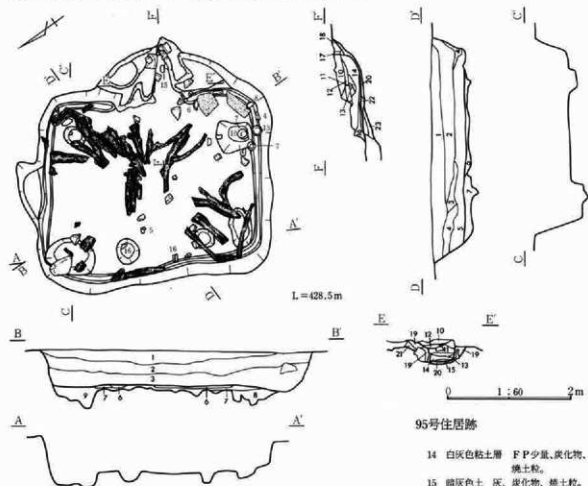
94号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別	出土地	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	床直 カマ ド埋土	14.0・3.8・6.7	少量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟黄 黒、灰色	底部は右回転糸切り未調整。外部底部に「百」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 環	20.5cm 25.0cm	13.2・3.6・5.0 2/3	石英・赤褐色粗砂粒 還元(酸化気味) 浅黄色	外面体部はロクロ目が顕著、内面は滑らか。外側体部側位で「保」の墨書あり。	墨書
③	須恵器 椀	14.0cm	・ ・ ・ ・ 7.6 高台～体部下位	白色粗砂粒・細礫、石英粗砂粒 還元 灰白色	底部は右回転糸切り。外面体部正位に墨書があるが、判読不可。内面底部一面に、赤色顔料が不着している。	墨書
④	須恵器 椀	20.0cm	・ ・ ・ ・ 8.6 高台～体部中位 1/4	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) 灰黄色	体部は深いと思われる。底部は右回転糸切り未調整。内面底部に「午」の墨書あり。	墨書
⑤	須恵器 環	5.0 cm ~ 31.5cm	13.0・3.8・7.0 口径部一部欠損	白色細砂粒・細礫 還元 灰白色	体部はほぼ直線的に開く。底部は右回転糸切り未調整。	
⑥	須恵器 環	10.5cm	12.2・3.8・5.6 2/5	白色細砂粒、黒色円粗砂粒 還元 灰白色	体部はほぼ直線的に開き、体部中位が内側に肥厚する。底部は右回転糸切り未調整。	
⑦	須恵器 環	6.0cm	13.0・4.0・5.4 4/5	多量の白色細・粗砂粒。石英の角粗砂粒 還元(燻し) 黒色、にぶい黄色	底径が小さく、体部は丸みをもって開き、口径部は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
⑧	須恵器 環	12.0cm	・ ・ ・ ・ 7.2	少量の白色細砂粒 還元、堅軟 灰色	右回転糸切り未調整。	
⑨	須恵器 椀	22.0cm 7.0cm	15.2・5.3・6.8 3/4	少量の白色細・粗砂粒・細礫 燻し(酸化気味) 黒色、にぶい黄色	体部はほぼ直線的に開き、体部から口径部は括れ気味に外反する。	
⑩	土師器 甕	床直 - 5.5 ~ 29.0cm	20.0・ - ・ - 胴部下位～口径部 2/3	少量の白色～黒色細砂粒、赤褐色円粗砂粒 普通 にぶい褐色	口径部は一相直立し、上位が開き、口唇部に一糸の枕縁が返る。「コ」の字状口縁のやや崩れた形態を呈す。口径部横無で、胴部上位は横方向寛削り、中位～下位は下方向寛削り。	
⑪	土師器 甕	14.0cm	13.0・ - ・ - 口径部1/2	少量の白色細砂粒 普通 にぶい赤褐色	口径部は一相直立し、上位が外反し、口唇部には枕縁が一糸返る。	
⑫	須恵器 羽釜脚付	27.0cm	・ ・ ・ ・ -	多量の白色細・粗砂粒 還元 灰白色	底部は平底を呈すが、底部と胴部の境は丸みを持つ。円柱状の短い脚が付く。底部から胴部下位、脚部は横無で。	

95号住居跡 (写真図版57～58頁、120頁)

位置 3E-20グリッド 方位 N-51.0°-W 形状 375×320cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は56cmを測る。床面 床はローム混じりの黒褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅12cm、深度8cmの溝がほぼ全周する。柱穴 西壁に接し2穴検出され、柱穴間は125cmを測る。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径44～58cm、深度29cmを測る。カマド 東壁の中央に設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の間隙には粘土を詰め固定し、礫を

核として粘土を貼り構築する。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より80cmと長く、緩やかに立ち上がる。掘り方なし。重複 重複する遺構はない。備考 本遺構は床面上より多量の炭化材を出土する。炭化材は径5～10cm程度の棒状のものがカマド手前を中心に放射状に残り、南西コーナー付近よりは板状の炭化材の出土をみる。この炭化材の出土状況は上屋の崩落を物語るものと思われ、本遺構は火災により焼失したものと考えられる。壁及び床面の焼土化はみられなかった。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、大半が炭化材の上面よりの出土であるが、環 (No 1、4、7) 及び、椀 (No 10) は南東コーナー付近にまとまった形で出土する。



95号住居跡

- 1 黒色土 F.P.
- 2 黒色土 F.P.、黄色バミス。
- 3 黒色土 炭化材主体。
- 4 灰黒色土 炭化材、ロームブロック、粘土ブロック。
- 5 黄黒褐色土 ローム、炭化材。
- 6 黒褐色土 粘土ブロック、ロームブロック、焼土。

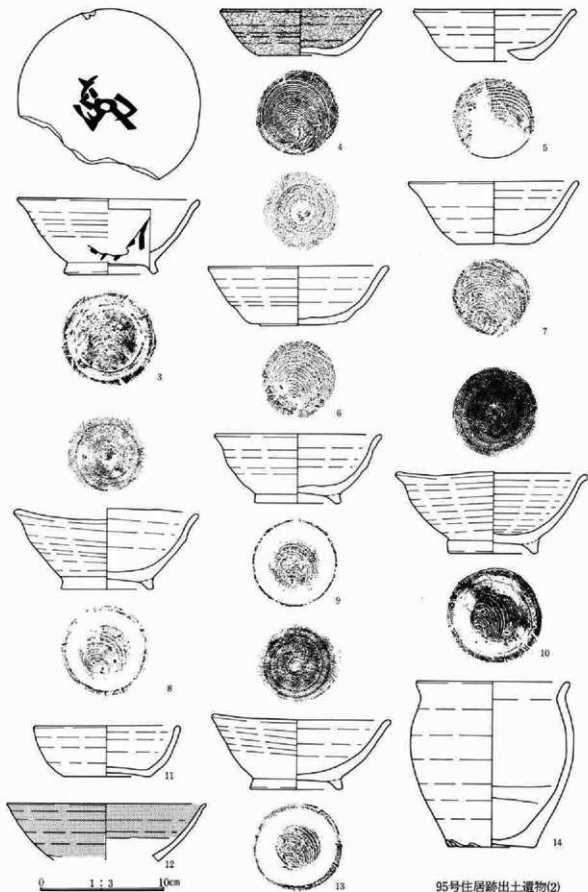
- 7 黒褐色土 ロームブロック。
- 8 7に類似。大粒のロームブロック。
- 9 黄褐色土 ロームブロック主体、カマド
- 10 白色粒土層。
- 11 白色粘土 炭化物少量。
- 12 暗茶褐色土 小粒のF.P.、炭化物、焼土。
- 13 茶褐色土 焼土ブロック、粘土粒。

- 14 白灰色粘土層 F.P.少量、炭化物、焼土粒。
- 15 暗灰色土 灰、炭化物、焼土粒。
- 16 黒褐色土 灰、炭化物等。
- 17 焼土ブロック。
- 18 茶褐色土 焼土粒少量。
- 19 粘土層。
- 20 ロームの焼土化。
- 21 ローム断移層。
- 22 暗茶褐色土 F.P.少量、炭化物、焼土ブロック。
- 23 ロームブロック。

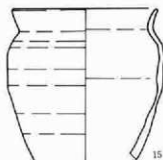


0 1:3 10cm

95号住居跡出土遺物(1)

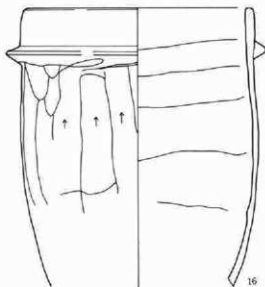


95号住居跡出土遺物(2)



0 1:3 10cm

95号住居跡出土遺物(3)

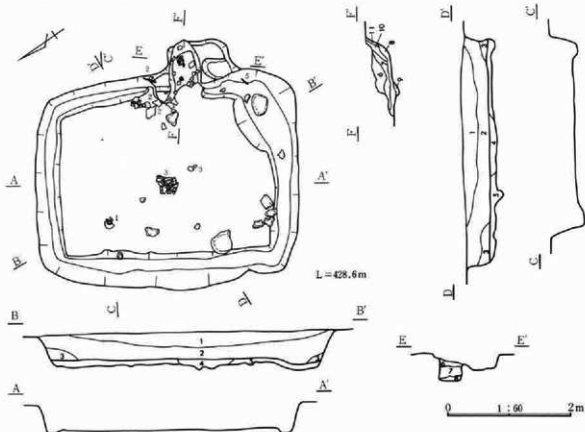


遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 坏	埋土	- - - - 小片	白色細砂粒、赤褐色粗砂粒 燻し気味 褐灰色	外面体部に墨書が残るが、欠けており、 判読不可。	墨書
②	須恵器 坏	埋土	- - - - 体部-口縁部小片	白色細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	体部内外面に薄く墨書があるが判読不 可。	墨書
③	須恵器 碗	18.0cm	14.4・6.0・6.6 体-口縁一部欠損	白色・石英粗砂粒・細礫 還元(酸化気味) 浅黄色	内面底部は同心円状の整形痕。外面体部、 内面底部に墨書があるが、薄く判読不可。	墨書
④	須恵器 坏	21.0cm 壁密着	13.0・3.7・6.5 完形	白色細砂粒、石英の粗砂粒 還元(燻し気味) 浅黄褐色・ 黒色	体部は僅かに丸みをもって開き、口縁部 は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
⑤	須恵器 坏	50.0cm	13.0・4.1・6.0 1/3	少量の白色粗砂粒 還元 灰白色	体部は丸みをもって開き、口縁部は外反 する。底部は左回転糸切り未調整。	
⑥	須恵器 坏	2.0cm	14.5・4.7・6.0 完形	白色細・粗砂粒・細礫・中礫、 石英粗砂粒 還元(酸化焙気 味) 灰褐色	体部中位にややふくらみをもって開く。 底部周辺につけたしたような平坦面をも つ。	
⑦	須恵器 坏	3.0cm 18.0cm 壁直下	13.8・4.9・6.0 口縁部一部欠損	多量の白色細・粗砂粒、石英 の粗砂粒・細礫 還元(酸化 焙気味) 灰黄色	体部はやや深目で、僅かに丸みをもって 開き口縁部が外反する。底部は右回転糸 切り未調整。	
⑧	須恵器 碗	12.0cm	14.8・6.4・7.3 完形	少量の白-灰色粗砂粒・細礫 還元 灰白色	体部は僅かに丸みをもち、口縁部が外反 する。器内は口唇部まで均一で、口縁部 の一部内外面に煤が付着。底部は右回転 糸切り未調整。	形態・胎土 とも2に類 似する。
⑨	須恵器 碗	埋土	13.4・5.5・7.0 1/4	白色・呉石・石英の細粗砂粒 酸化 濃い黄褐色	体部は丸みをもって開き、口縁部は外反 する。底部は右回転糸切り未調整。	
⑩	須恵器 碗	3.0cm	15.0・6.5・7.2 口縁部一部欠損	少量の白-灰色粗砂粒・細礫 還元 浅黄色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。 ロクロ目が強く残る。底部は右回転糸切 り未調整。形態・胎土とも2、3と類似 する。	胎土分析
11	須恵器 坏	埋土	11.8・4.0・7.0 小片	白色細・粗砂粒、少量赤褐色 粗砂粒 酸化 橙、黒色	体部は丸みをもつ。底部は右回転糸切り 未調整。	

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
12	灰軸陶器 甕	埋土	16.0・ - - -	僅かな白色細砂粒 還元 灰白色、物はオリーブ灰色	体部は若干丸みをもって開き、口唇部が僅かに外側につまみ出される。軸は剛毛張り。	胎土D
⑬	須恵器 甕	5.0cm 壁密着	14.8・ 5.9・ 7.2 完形	少量の灰色粗砂粒・細礫、長石の細礫 還元 灰白色	体部は僅かに丸みをもって開く。ロクロ目が強く残り、器内は口唇部まで均一である。底部は右回転未切り未調整。	
⑭	須恵器 小型甕	埋土	12.2・ 13.1・ 7.0 1/4	少量の白色細砂粒、石英の細礫 還元 灰白色	胴部は上位にふくらみを持ち、口縁部は短く外反する。ロクロ整形、底部は寛濺で。	
⑮	須恵器 小型甕	カマド内 埋土	11.4・ - - - 胴下位～口縁部 2/3	白色・石英細砂粒 還元、軟質 におい褐色、黒褐色	器内は比較的厚手、胴部上位が張り、口縁部は短く外反する。ロクロ整形	
⑯	須恵器 羽釜	5.0cm 床直 埋土	18.2・ - - - 胴中位～口縁部 1/2	白～灰色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 黄灰色	胴は比較的大きく、丁寧に削られる。胴部は上方向への寛周り、内面横溝で、所々上方向の溝で。	胎土分析

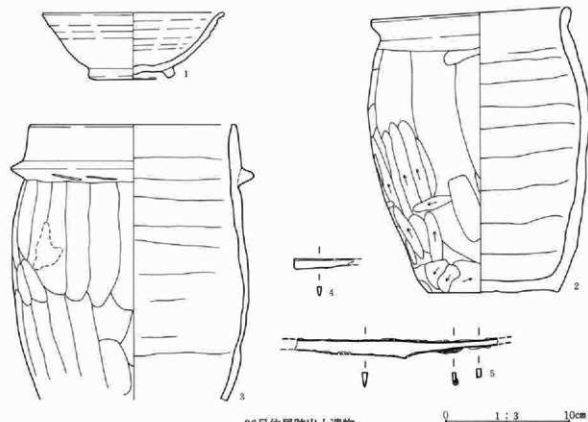
96号住居跡 (写真図版59頁、121頁)

位置 2E-24グリッド 方位 N-50.0°-W 形状 420×325cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は48cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅15cm、深度8cmの溝がほ



- | | | |
|-----------------------|--------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 FP多量。 | 5 暗茶褐色土 ローム層移層、カマド | 8 黒灰層 炭化物、灰、焼土。 |
| 2 褐色土 FP、ローム粒、炭化物。 | 6 暗茶褐色土 FP、炭化物、焼土。 | 9 茶褐色土 焼土、ローム粒、粘土、炭化物。 |
| 3 暗褐色土 FP少量、ローム粒、炭化物。 | 7 白色粘土層。 | 10 黒灰と焼土の混土。 |
| 4 茶褐色土 ローム粒、ブロック。 | | 11 茶褐色土 焼土の張り。 |

は全周する。柱穴なし。貯藏穴なし。カマド東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を用いず粘土のみで構築されている。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部張り出しは少なく、煙道部も壁より62cmと短い。掘り方 住居中央付近に径126～150cm、深度36cmの楕円形の床下土坑を1基検出する。重複 17号掘立と重複し、新旧不明。遺物 椀 (No.1)・羽釜 (No.3) は床面直上よりの出土であり、羽釜 (No.3) と甕 (No.2) は胎土・整形・器形共に類似している。



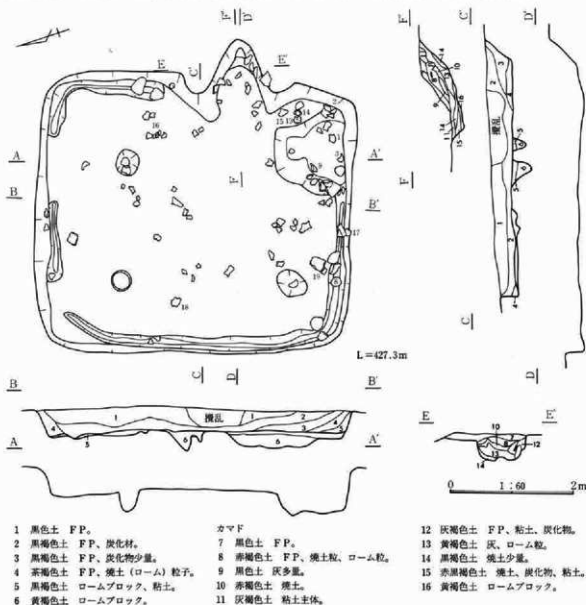
96号住居跡出土遺物

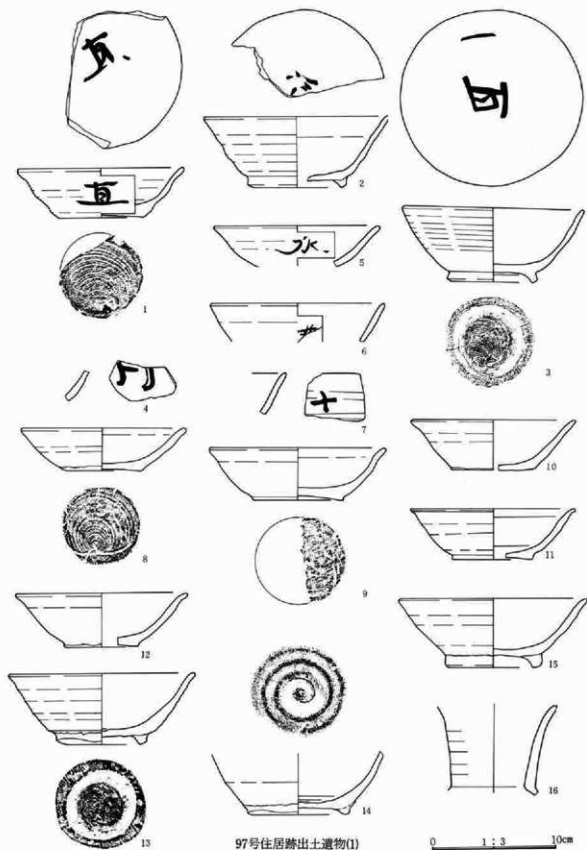
0 1:3 10cm

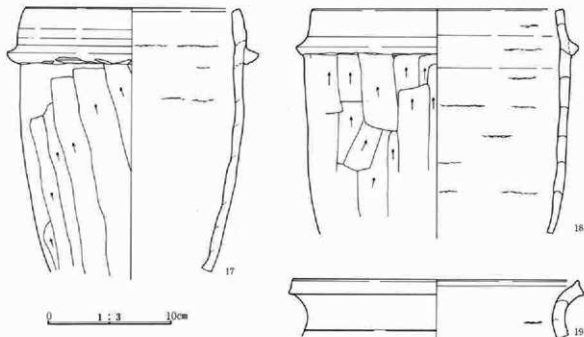
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	床直 埋土	14.5・5.3・6.9 体部～口縁部一部 欠損	少量の白色・石英細・粗砂粒、 5mm前後の礫 還元、軟質 灰黄色	体部はやや丸みをもち、口縁部は僅かに 外反する。高台は厚手の角形。底部は右 回転糸切り後、周辺部は高台貼付時の撫 で。	
②	須恵器 甕	10.5cm～ 34.0cm	15.4・22.5・10.4 口縁部1/4欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化鉄味) 黒褐色	胴部はやや丸みをもち、口縁部は短く開く。 器内は厚手で均一である。胴部外面 は鏡削りというより寛撫でに近く、所々に 砂粒の動きがみられる程度、上位は横 撫での上に縦方向の撫でが重なっている。 内面は横方向の撫で。	胎土分析 2の甕に胎 土、整形が よく類似し ている。
③	須恵器 羽釜	床直	16.5・ - ・ - 胴部下位～口縁部	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	脚は丁寧につけられ、正円形をなす。胴 部外面は上方向への大きな単位の鏡削り。 内面は横撫で。	胎土分析
④	鉄製品 刀子か	埋土				片側は調査時の欠損。片側は旧時。断面形は片方が薄く片方が厚い。そのため刀子などの茎片と考えられる。鍔は板目割が少しあり精緻造を思わせる。残存長4.8cm、重3.6g。
⑤	鉄製品 刀子か	3.0cm				両端部は調査時の欠損である。棒区は不明瞭。茎に朽の木質が残存する。鍔は板目であるが錆ぶくれが多く精緻造とはいえない。残存長16.3+cm、重19.3g。

97号住居跡 (写真図版60~61頁、121頁)

位置 14D-23グリッド 方位 N-63.5°-W 形状 500×440cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は41cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅13cm、深度8cmの溝がほぼ全周する。柱穴 4穴検出され、うち1穴は貯蔵穴と重複する。径18~55cm、深度34~51cmを測る。柱穴の平面プランはカマドを中心に展開し、住居に対しやや南へ寄る。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径113~115cm、深度31cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の隙間には粘土を詰め固定する。燃焼部は壁のラインより内側に位置し平坦。袖部の張り出しは多く、煙道部は壁より83cmと急峻な立ち上がりを見せる。掘り方住居中央部付近に径80cm、深度32cmの床下土坑を1基検出し、この土坑の西寄りに径74×150cm、深度60cmを測る楕円形の土坑1基を検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 出土する遺物の量は比較的多いが大半が破片である。出土遺物中、坏 (No. 1、9)・椀 (No. 2、3、13、14、15) は床面直上、及び、貯蔵穴内部よりの出土であり、遺物の胎土・器形も類似しており、一括性が高いものと考えられる。







97号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 杯	-15.5cm	13.0・3.9・6.8 底部～口縁部1/2	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 淡黄色	底部は右回転糸切り未調整。体部は中位が取らみをもち、口縁部外反。外面体部正位、内面底部に「直」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 椀 (貯蔵穴内)	-9.5cm	14.6・5.6・7.0 高台～口縁部1/4	石英細・粗砂粒 還元、軟質 淡黄色	内面底部に墨書があるが、薄く、欠けているため判読し得ないが、1・3の墨書に筆致が似ているので「直」の可能性あり。	墨書
③	須恵器 椀 (貯蔵穴内)	22.5cm	14.4・6.1・6.4 口縁部一部欠損	白色細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部はロクロ目が顕著、底部は右回転糸切り、周辺は高台貼付時の態で、内面底部に「直」の墨書あり。	墨書
④	須恵器 杯	埋土	- - - - 体部小片	白色細砂粒、赤褐色粗砂粒 酸化気味 ぶい橙色	外面体部に墨書があるが、欠けているため判読し得ない。	墨書
⑤	須恵器 杯	埋土	- - - - 小片	白色細砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部正位で墨書あり。「水」?か。	墨書
⑥	須恵器 杯	埋土	- - - - 小片	白色細砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に墨書があるが、欠けているため判読不可。	墨書
⑦	須恵器 杯	埋土	- - - - 口縁部小片	白～灰色細・粗砂粒 還元 軟質 灰白色	体部外面に「十」の墨書があるが、薄く文字の向きは不明。	墨書
⑧	須恵器 杯	7.6cm	13.1・3.4・6.0 完形	灰色細礫・石英粗砂粒 還元(酸化気味) 黄灰色 黒色、褐色	体部は僅かに丸みをもち、口縁部が若干外反する。器内はほぼ均一に厚手。内面は中心部まで丁寧にコナが当てられる。底部は右回転糸切り未調整。	
⑨	須恵器 杯	-12 (貯蔵穴内)	14.0・4.2・7.2 1/2	白色細・粗砂粒・細礫、少量 の石英・長石の粗砂粒 還元、軟質 灰白色	体部は僅かに丸みをもち、口縁部は若干外反する。器内は均一に厚手。底部は右回転糸切り未調整。	8と胎土・形類が類似している。

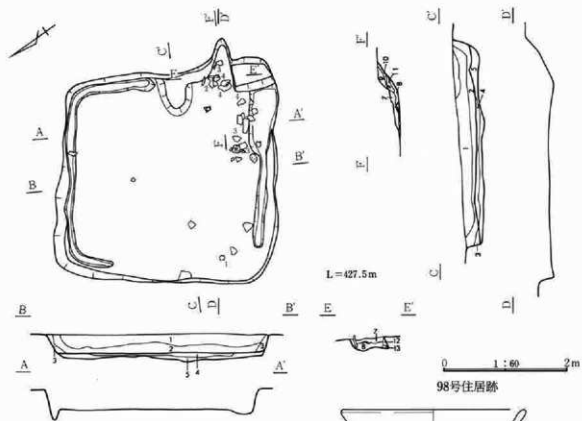
遺物番号	類別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑨	須恵器 環	埋土	13.0・4.0・6.0 1/3	石英粗砂粒、赤褐色鉱物粒 還元 (酸化気味) 褐色、内 側灰白色	体部はほぼ直線的に開き、口縁部は僅かに 外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
⑩	須恵器 環	埋土	13.0・4.0・6.5 1/3	白色細・粗砂粒 還元 灰色	体部はやや丸みをもち、口唇部が外反す る。底部は回転糸切り未調整。	
12	須恵器 環	埋土	13.6・4.3・5.8 1/4	白色細・粗砂粒 還元 灰色	体部は僅かに丸みをもち、口縁部は外反 する。底部は回転糸切り未調整。	
⑬	須恵器 碗	床直	14.8・5.6・7.3 3/4	白色細・粗砂粒・細礫、少量 の粗砂粒 還元 灰黄色	体部は立ち上りに丸みをもち、口縁部は 僅かに外反。内面底部は中心に同心円状 の凸部を持つが、他はコナを当てている のかフラットである。底部は右回転糸切 り、周辺回転態で。	
⑭	須恵器 碗	床直 埋土	-・-・-・8.0 底部～体部の一部	白色・石英細砂粒 還元 (酸 化気味) 黄灰色	内面底部は螺旋状の調整。底部は周辺部 は高台貼付時の回転態で中央部は無いか 磨滅しているのか調整痕が不明。	
⑮	須恵器 碗	床直	14.8・5.3・7.6 体部～口縁部の大 平を欠く	白色細・粗砂粒・細礫、僅か な石英粗砂粒 還元、軟質 浅黄色	体部はほぼ直線的に開く。内面底部は中 央部を3.7cm程残してコナが当てられる。 底部は右回転糸切り後、高台貼付時に回 転態で。	
16	須恵器 長頸瓶	6.5cm 32.5cm	-・-・-・- 頸部～口縁部残存	多量の白色・石英細・粗砂粒 還元 灰白色	ロク整形。口唇部を欠く。	
17	須恵器 羽釜	10.0cm 埋土	17.2・-・-・- 胴部下位～口縁部 1/5	白色細・粗砂粒、僅かな石 質の粗砂粒 還元 灰白色	胴は上面は丁寧な回転態でだが、下位の 鎌合部は隙間が空いており、胴部の最削 り当っている。胴部内面は横方向の磨 滅で。	
18	須恵器 羽釜	4.5cm 埋土	19.8・-・-・- 胴部中位～口縁部 1/5	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰黄色	胴は小さいが、比較的丁寧な回転態で。 胴部内面は輪磨成が残る。上位は回転態 で、以下は横磨成で。	
19	須恵器 壺	16.0cm	22.4・-・-・- 口縁部1/4	多量の白色・石英細粗砂粒 赤褐色円粗砂粒 褐色	ロク整形。焼成は還元だが酸化気味。	

9 8号住居跡 (写真図版61頁、121～122頁)

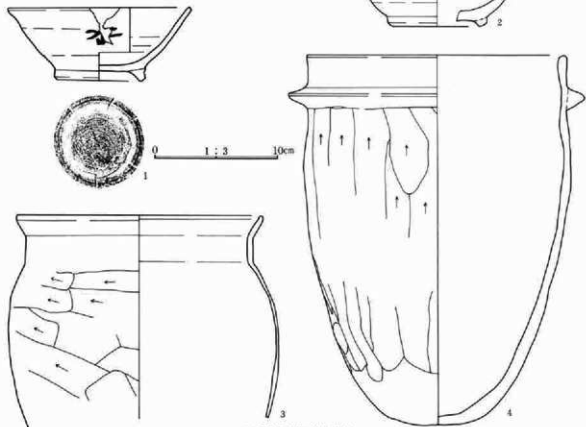
位置 17D-18グリッド 方位 N-47.0°-W 形状 350×330cmを測る隅丸方形のプランを呈し、
壁高は30cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅15cm、深度7cmの溝がほぼ全
周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、隅丸長方形を呈し、45×105cm、深度
18cmを測る。カマド 東壁の中央南寄りに設けられ、南東コーナー部より70cmの位置にある。袖部には
礎を置くが、煙道部には礎を用いず粘土のみで構築されている。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、煙
道部は壁より70cmと長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。
遺物 出土する遺物の量は少なく、出土遺物中、壺 (№3)・羽釜 (№4) は床面直上よりの出土である。

- 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒子、焼土粒子少量。
- 2 暗赤褐色土 1より茶色味おびる。F P、ローム粒子多量。
- 3 暗赤褐色土 ローム層移層土をベースに少量のF P、ロームブロック。
- 4 暗黄褐色土 ローム層移層土をベースにローム粒子、ロームブロック少量。
- 5 明黄褐色土 ローム層をベースに暗褐色土少量。

- | | | |
|--------------|-------------|---------------|
| カマド | 10 焼土 | ローム層の
焼土化。 |
| 6 埋土と焼土粒の混土。 | 7 灰・焼土粒の混土。 | 11 黒灰 焼土層。 |
| 8 灰主体の黒色層。 | 12 焼土層。 | |
| 9 焼土・灰の混土。 | 13 炭化物・灰。 | |



98号住居跡

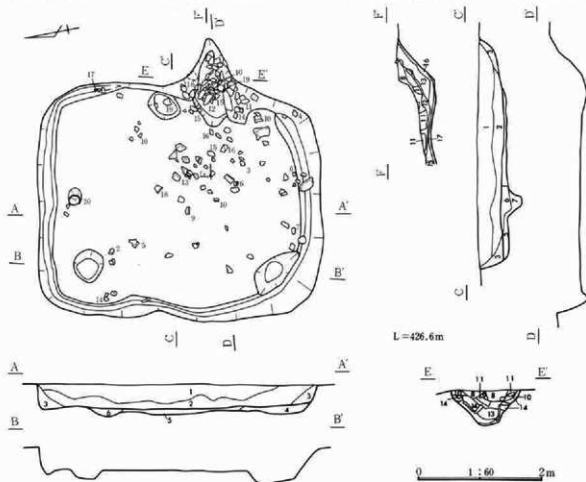


98号住居跡出土遺物

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 碗	5.6cm 埋土	14.6・5.7・6.6 体～口縁部1/3次損	多量の白色・石英の細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	底部は右回転糸切り。外面体部正位で「水」?の墨書あり。	墨書
②	須恵器 碗	4cm 火床面	15.0・5.3・8.0 1/4	多量の石英・白色細・粗砂粒・ 細礫 酸化 橙色	体部はやや丸みをもって開く。器内は厚手で口唇部までほぼ均一である。	
③	土師器 壺	床直 埋土	19.5・ 胴中位～口縁部 1/2	白色・石英細砂粒 普通 暗褐色土	「コ」字状口縁を呈する。胴部上位は横方向段削り、内面は腹削り。	
④	須恵器 羽釜	床直 埋土	20.8・24.0・4.0 底部～口縁部1/2	白色・石英細・粗砂粒・細礫 還元、軟質 灰白色	底部は小さな平底、胴部立ち上りは丸みをもつ。唇は大きく端正。底部～胴部下位は無で。胴部は、胴下まで腹削り。内面横削り。	胎土分析

99号住居跡 (写真図版62頁、122頁)

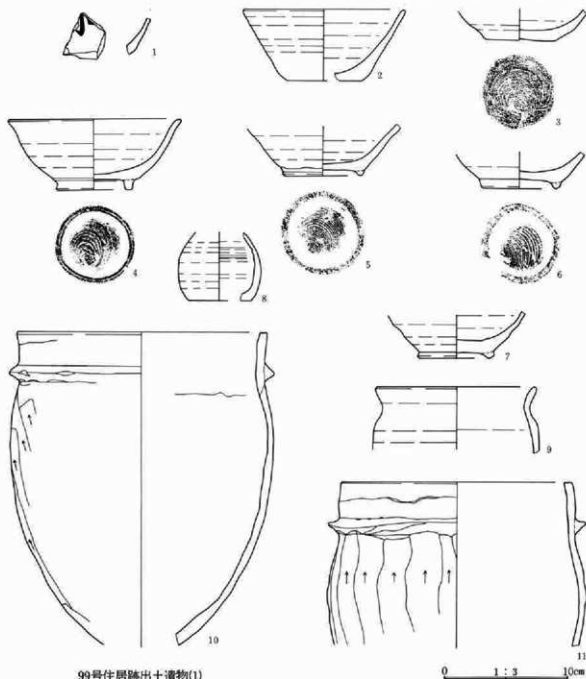
位置 11D-18グリッド 方位 N-77.5°-W 形状 450×370cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は42cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅15cm、深度10cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 カマド左脇に径40～53cm、深度29cmを測る土坑を1基検出する。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は良好で、天井部の一部も残る。袖部・煙道部には隙を並べた石組みのカマドであり、礫の隙間には粘土を詰め固定する。天井部は粘土で構築されている。燃焼



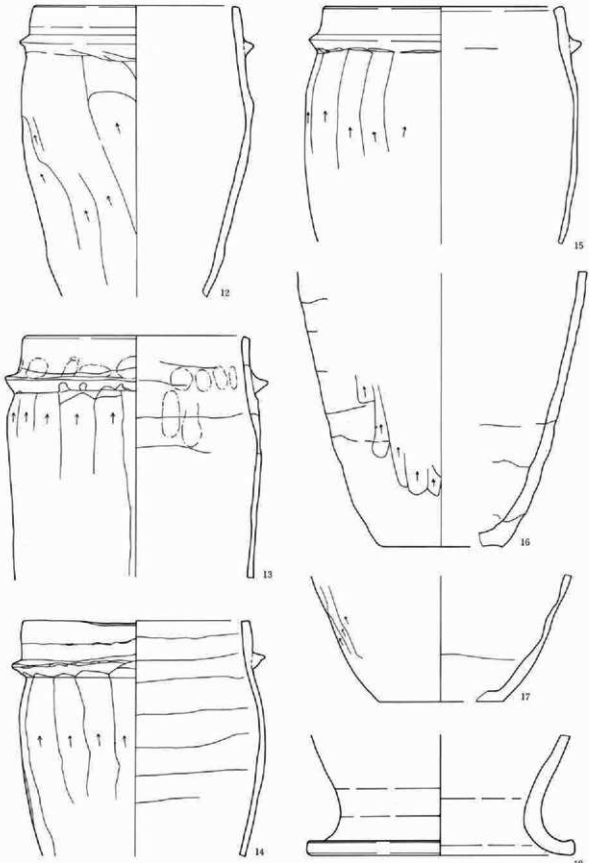
部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは比較的多く、煙道部も壁より87cmと長い。

掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居全面に散乱して出土し、特にカマド内部より羽釜片が大量に出土する。羽釜 (No12、13) は、床面直上よりの出土である。

- | | | |
|---------------------|----------------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色土 FP多量。 | 7 ローム漸移層。 | 11 粘土ブロック 炭化物、焼土等少量。 |
| 2 褐色土 FP少量、炭化物。 | カマド | 12 茶褐色土 極少量のFP、炭化物。 |
| 3 明褐色土 ローム粒、炭化物少量。 | 8 茶褐色土 焼土粒。 | 13 明茶褐色土 12に類似。ローム粒子多量。 |
| 4 暗茶褐色土 ローム粒少量、炭化物。 | 9 茶褐色土 8に類似。ローム粒子、焼土ブロック等。 | 14 暗乳白色土 粘土、焼土粒子少量。 |
| 5 粘り床 ロームブロック。 | 10 11に類似。粘土少量。 | 15 暗茶褐色土 ロームブロック多量。 |
| 6 暗茶褐色土 本住居以前のおちこみ。 | | 16 暗褐色土 弱粘性。ローム粒子少量。 |
| | | 17 暗褐色土 ローム層をベースに黒色土を含む。 |



99号住居跡出土遺物(1)



99号住居跡出土遺物(2)

0 1:3 10cm



99号住居跡出土遺物(3)

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 坏	埋土	- - - - 小片	白色細砂粒 還元、軟質 灰白色	内面体部に墨書あり、欠けているため判読不可。	墨書
2	須恵器 坏	19.0cm	13.0・5.7・6.0 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元、 軟質 におい黄褐色	ロクロ整形。底部は回転糸切り未調整。	
3	須恵器 坏	11.5cm	- - - - 5.6 底部～体部下位	多量の白色・石英細粗砂粒 細塵 還元、軟質 灰色	底部に向って窄まる。内面は底部と体部の境が不明瞭。底部は右回転糸切り未調整。	
4	須恵器 椀	42.0cm	13.7・5.6・6.0 体部～口径3/4欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元 暗灰黄色	体部は丸みをもち、口縁部は僅かに外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
5	須恵器 椀	16.0cm	- - - - 6.0 高台～体部中位	白～灰・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) 外一明赤褐色、内一におい黄褐色	体部は直線的に開く。高台は端部が丸みを持ち小さい。底部は右回転糸切り未調整。	
6	須恵器 椀	12.5cm 33.0cm	- - - - 6.0 高台～体部下位	白色・石英・長石の細粗砂粒 還元 (酸化気味) におい橙褐色	体部はやや丸みをもつ。底部は右回転糸切り未調整。内面に重ね痕あり。	
7	須恵器 椀	26.5cm	- - - - 6.3 高台部～体部	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) におい黄褐色	体部はロクロ目が顕著。底部は回転糸切り後高台貼付時の回転痕で。	
8	灰釉陶器 小瓶	埋土	- - - - 5.0 1/5	微量の黒色鉱物粒、緻密 還元 灰白色	胴部は丸みをもつ。胴部上位内面には、藍の当たった染傷が数處みられる。底部は回転糸切り未調整。	胎土B
9	須恵器 小型壺	25.5cm	12.8・- - - 胴上位～口径部 1/3	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味)	唇状のものか内面口縁部。外面口縁の一部に付着している。ロクロ整形。におい黄褐色。	
10	須恵器 羽釜	3～20cm カマド内 埋土	20.0・- - - 胴部下位～口径部 1/5	白～灰色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 褐灰色	唇は小さく、凹凸のみみられる。胴部は緩やかな丸みをもつ。胴部外面は寛削りの後軽く撫でているため、単位が不明瞭。内面は横撫で。	
11	須恵器 羽釜	カマド内 床直	18.0・- - - 胴部上位～口径部 1/3	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰褐色	唇は小さく、全体的に指押えによって凹凸している。口縁部～唇は回転撫で、胴部内面は回転撫での上方向に撫でている。	
⑫	須恵器 羽釜	床直 埋土	16.0・- - - 胴部下位～口径部 1/2	白色・石英細・粗砂粒 細塵 還元 (酸化気味) 橙褐色、灰黄色	唇は小さく、断面は三角形を呈す。端部は指押えの凹凸のみみられ、上面は口径部と併に回転撫で、下面は接合時の隙間がある。	胎土分析

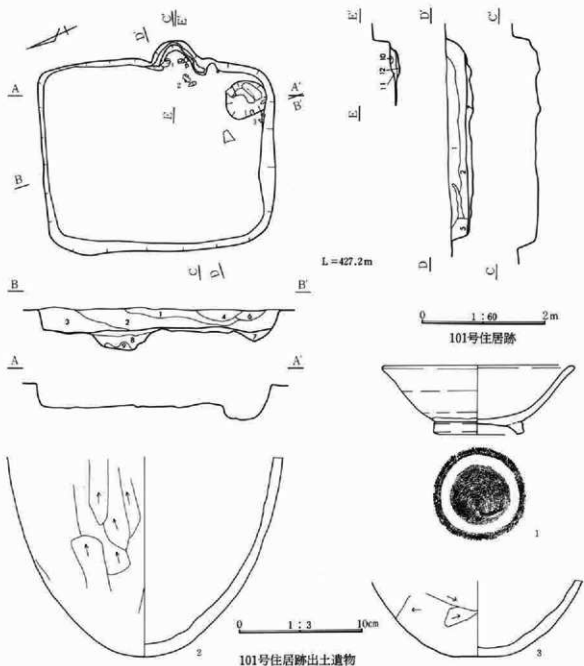
遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・高さ・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑬	須恵器 羽釜	床直 カマド内	18.0・一・一 胴部上位へ口縁部 1/4	白色・石英・赤褐色細・粗砂 粒 還元 (酸化気味) 褐色	唇は小さく、凹凸が著しい。胴の上面、 内面側の貼付部分は指頭痕が顕著である。 胴内面は指頭による上方向への無 でみられる。	
⑭	須恵器 羽釜	12.0cm カマド内 カマド袖 埋土	17.9・一・一 胴部中位へ口縁部 1/3	白色・石英細・粗砂粒・細礫 還元 (酸化気味) にぶい褐色	唇は小さく、指先でつまんで断面三角形 状にしており、凹凸が著しい。口縁部は 回転横撫で、胴内面は横撫での後、上 方向へ軽く撫でている。	胎土分析
⑮	須恵器 羽釜	7.0cm カマド内 埋土	19.0・一・一 胴部中位へ口縁部	白色細・粗砂粒、石英・長石 粗砂粒・細礫 還元 (酸化気 味) にぶい黄褐色、明黄褐 色	唇は小さいが比較的丁寧に撫でられている。 胴部外面は上方向への荒削り。胴部 内面は横撫で。	
⑯	須恵器 羽釜	7.0cm カマド内 埋土	一・一・10.0 底部へ胴部上位 1/3	白色細砂粒、少量の石英・長石 の細礫 還元 にぶい黄褐 色	平底。胴部外面に輪横痕がみられる。一 部に削りがあるが、底部、胴部とも外面 は方向・単位の不明瞭な撫で。内面中位 から上は回転撫で、下位は横方向の荒撫 で。	
17	須恵器 羽釜	床直 カマド内	一・一・10.0 底部へ胴部下位 1/4	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	平底。胴部下位は斜め上か横方向への荒 撫で、胴部は上方向への荒削り。内面は 横方向への荒撫で。	
⑰	須恵器 甕	3.0cm	一・一・21.2 小片 (脚縁)	石英・長石細・粗砂粒 還元 (酸化気味) にぶい橙 色	底部は筒抜け、脚部は大きく外反し、端 部が垂直な平ら面をなす。脚部は回転撫 で、胴内面は横方向の荒撫で。	
19	須恵器 甕	カマド内	26.0・一・一 口縁部小片	白色・石英細・粗砂粒 還元 灰白色、灰色	口縁部はロクロ整形。胴部以下は内外面 とも横方向の荒撫でがみられる。	
⑱	須恵器 甕	23.0cm	一・一・13.4 高台へ胴部中位	白～灰色・石英細・粗砂粒 赤褐色円粗砂粒 還元 (酸化 気味) 外一暗灰黄色、内一 にぶい褐色	高台は断面角形だが、端部は丸みをもつ。 ロクロ整形。底部は中央部一方向の荒撫 で、周囲は右回りの荒撫で。全体的に風 化が著しく内面は特に剝離が顕著である。	

101号住居跡 (写真図版64頁、123頁)

位置 14D-24グリッド 方位 N-70.5°-W 形状 370×300cmを測る隅丸方形のプランを呈し、
壁高は40cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー
付近に検出され、円形を呈し、径57cm、深度21cmを測る。カマド 東壁の中央や南寄り
に設けられているが、遺存状態が悪く壁体の焼土化が顕著にはみられない。袖部・煙道部は礫
を用いず粘土のみで構築されていると考えられる。燃燒部は壁のライン上に位置し、袖部
の張り出しは少なく、煙道部も壁より35cmと短く、急峻に立ち上がる。掘り方 住居
中央部付近に径45～103cm、深度12～22cmの円形の床下土坑を2基検出する。重複
重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、完形品の
遺存は少ない。遺物は、カマド周辺に散乱し出土する。出土遺物中、椀 (No.1) は床面直上
よりの出土である。

- 1 茶褐色土 FP、ロームブロック。
- 2 暗褐色土 FP、ローム粒、炭化物。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロック。
- 4 茶褐色土 FP多量、ロームブロック少量。
- 5 暗茶褐色土 FP、ローム粒。
- 6 明茶褐色土 FP、ロームブロック、ローム粒少量。

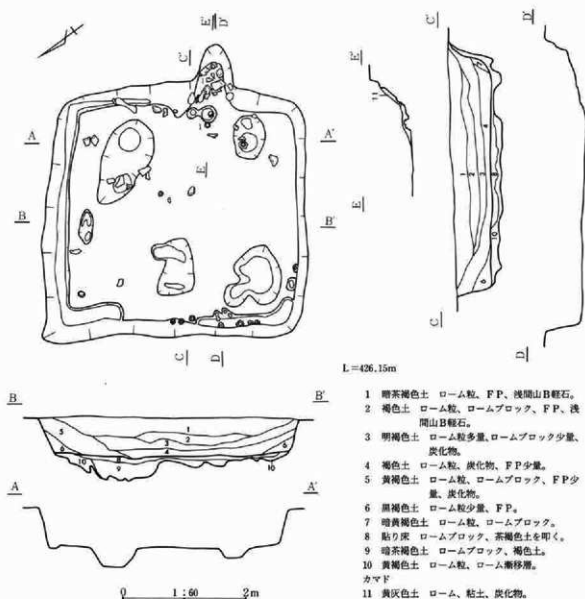
- 7 貼り床 ロームブロック、茶褐色土を叩く。
- 8 茶褐色土 ロームブロック多量。
- 9 黄褐色土 ローム多量。
- カマド
- 10 粘土ブロック。
- 11 赤黒褐色土 焼土、灰、ロームブロックの混土。
- 12 11に類似。灰多量。



遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	床直	15.2・5.5・7.1 体部～口縁部1/2 欠損	白色・石英細・粗砂粒 細礫 還元 (酸化気味) により黄褐色	体部はやや丸みをもって開き、口縁部は若干外反する。底部は右回転未切り後、周辺部は回転跡で。	
2	須恵器 羽釜	床直	- - - - 底部～胴中位1/5	白色・石英細・粗砂粒 細礫 還元 灰白色	底部は丸底、横無で。胴部は上方向への寛無で。内部は横無で。	
3	須恵器 羽釜	-3.5cm 貯蔵穴内	5.0・- - - 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) により褐 色	底部は僅かな平坦面をもち、一方の寛無で。胴部下位は横方向の寛切りと無で。	

102号住居跡 (写真図版65頁、123頁)

位置 7D-19グリッド 方位 N-52.5°-W 形状 420×400cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は60cmを測る。床面 床はローム混じりの黄褐色土を叩き貼り床とし、壁溝はカマド前面、及び南壁側を除き幅15cm、深度6cmの溝がL字状に巡る。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径50~67cm、深度20cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであったと考えられる。カマド内より多量の礫が出土するが、すべて崩落によるもので原位置を留めない。袖部には礫設置の痕跡がみられる。燃焼部は壁のラインより外側に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より62cmと比較的長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 住居中央部北寄り、及び南西コーナー付近に径80~135cm、深度21~23.5cmの円形の床下土坑を3基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 出土する遺物の量は比較的少ない。遺物は住居中央北側、及びカマド内部等に散乱し出土する。出土遺物中、椀 (No.1) はカマド内部よりの出土である。



L=426.15m

- 1 暗茶褐色土 ローム粒、FP、浅間山B軽石。
 - 2 褐色土 ローム粒、ロームブロック、FP、浅間山B軽石。
 - 3 明褐色土 ローム粒少量、ロームブロック少量、炭化物。
 - 4 褐色土 ローム粒、炭化物、FP少量。
 - 5 黄褐色土 ローム粒、ロームブロック、FP少量、炭化物。
 - 6 黒褐色土 ローム粒少量、FP。
 - 7 暗黄褐色土 ローム粒、ロームブロック。
 - 8 貼り床 ロームブロック、茶褐色土を叩く。
 - 9 暗茶褐色土 ロームブロック、褐色土。
 - 10 黄褐色土 ローム粒、ローム堆積層。
- カマド
- 11 黄灰色土 ローム、粘土、炭化物。

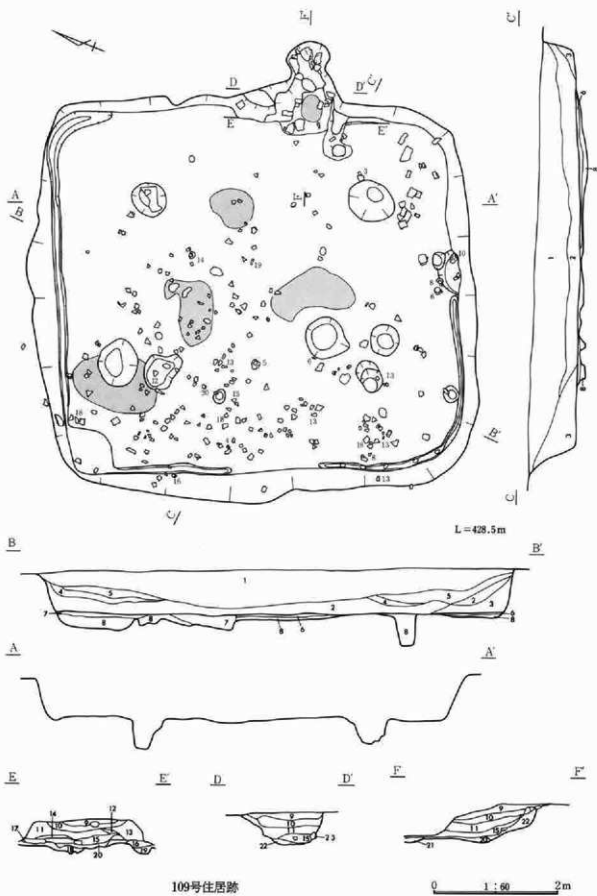


102号住居跡出土遺物

遺物番号	種別・器種	出土位置	量目 (cm)		胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径・器高・底径	口径・器高・底径			
①	須形器 椀	カマド内	14.7・5.8・7.1	体部～口径1/2欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 淡黄色	体部から口径部まで直線的に開く。内面底部と体部の境は比較的明瞭である。外面体部に墨書があるが判読不可。	墨書
2	須形器 環	貯蔵穴底面 密着	—・—・5.4	底部のみ残存	白色・石英細砂粒 還元 (酸化気味) 暗灰黄色	底部は左回転糸切り未調整。内面底部に墨書があるが、薄く判読不可。	墨書
③	須形器 環	貯蔵穴底面 密着	—・—・5.8	底部～体部下位1/2	多量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。内外面体部正位で墨書があるが判読不可。	墨書
④	須形器 椀	カマド 埋土	—・—・—	小片	多量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	内外面体部正位に墨書があるが、双方とも欠けているため判読不可。	墨書
⑤	須形器 椀	カマド内 埋土	—・—・6.8	体部～口径部2/3	多量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 淡黄色	体部は丸みをもつ。器内は薄手。口径部を欠く。底部は整形痕がみえない。	

109号住居跡 (写真図版66頁、123頁)

位置 24E-18グリッド 方位 N-66.0°-E 形状 710×640cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は80cmを測る。本遺構は検出住居中最大規模を測る住居跡である。床面 床はローム地床。壁溝はカマドをもつ東壁を除き、幅15cm、深度4cmの溝がコの字状に巡る。柱穴 4穴検出され、径48～76cm、深度10～66cmを測り、柱穴間は27×37cmを測る。また、この他に住居中央西寄りに1穴、南壁に接し2穴のビットを検出する。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであったと考えられ、礫の隙間には粘土を詰め固定する。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは多く、煙道部も壁より90cmと長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土するが、出土位置は床面からやや離れ、大半が埋没の最終段階において廃棄されたものと考えられる。床面直上付近出土の遺物としては、環(No10)・椀(No14)がある。



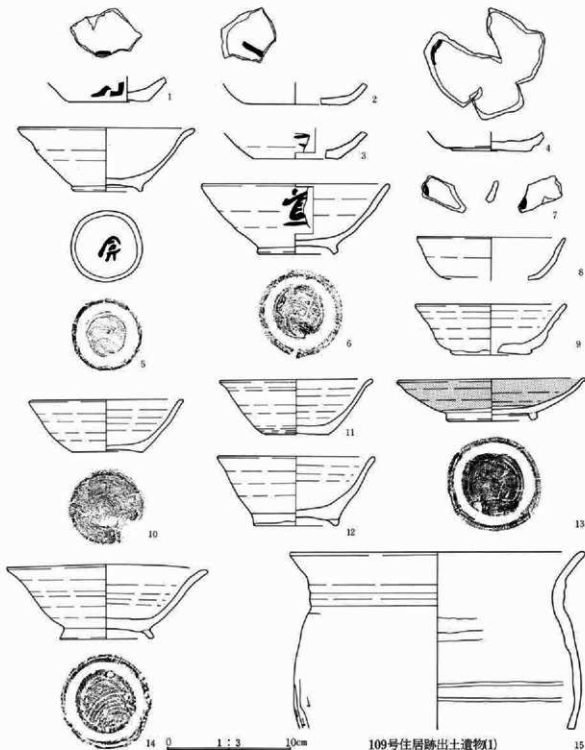
第3章 検出遺構・遺物

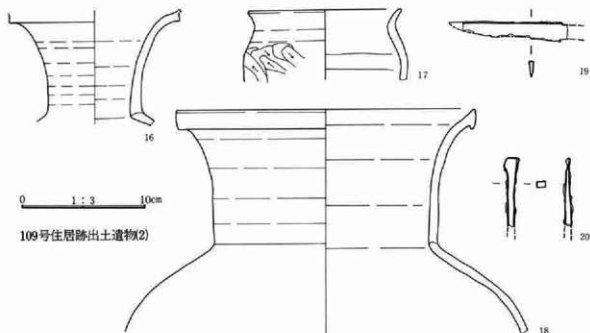
- 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒炭化物少量、浅間山B軽石。
- 2 茶褐色土 F P、炭化物、ローム粒。
- 3 明茶褐色土 F P、ローム粒、炭化物。
- 4 黒色土 F P少量、炭化物多量。
- 5 暗褐色土 ローム粒、炭化物、F P。
- 6 灰褐色土 F P、粘土、灰。
- 7 赤茶褐色土 焼土、灰を主体とする。
- 8 灰黒褐色土 ロームブロック、炭化物。

カマド

- 9 茶褐色土 F P少量、ローム粒。
- 10 黄灰色土 ローム・粘土の混土。
- 11 黒褐色土 黒灰、炭化物、焼土粒、ローム粒。
- 12 明茶褐色土 ローム粒。
- 13 暗褐色土 F P、ローム粒、炭化物少量。
- 14 赤褐色土 ローム粒、焼土粒、粘土。
- 15 赤褐色土 焼土、炭化物、ローム粒、粘土。
- 16 粘土・ロームの混土 袖部の割れ。

- 17 黄灰色土 粘土、ローム、炭化物。
- 18 黒褐色土 ローム粒、炭化物。
- 19 赤褐色土 焼土、炭化物。
- 20 褐色土 焼土、炭化物、ローム粒。
- 21 黒色土 ロームブロック。
- 22 焼土層 地山の焼土化。
- 23 焼土 粘土ブロックの焼土化。





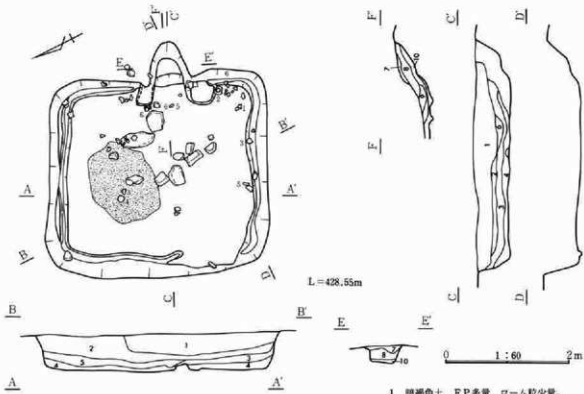
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須恵器 坏	埋土	- - - - - 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元、 軟質 灰白色	内外面体部に墨書があるが、判読不可。	墨書
2	須恵器 坏	埋土	- - - - - 小片	少量の白色細砂粒、角閃石 還元 (酸化気味) 浅黄色	底部は回転余切り未調整。内面底部に墨書があるが、判読不可。	墨書
3	須恵器 坏	9.0cm	- - - - - 小片	少量の白色・黒色の細砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に僅かに墨書が残る。	墨書
4	須恵器 坏	67.5cm 埋土	- - - - - 6.0 底部～体部下位 2/3	白色・石英細・粗砂粒 還元、 軟質 灰白色	内面体部に僅かに墨書が残る。	墨書
⑤	須恵器 椀	66.0cm 埋土	14.0 × 5.0 × 5.2 体～口縁部1/3欠損	少量の粗砂粒 還元、軟質 褐灰色	内面は同心円状の調整痕をもち滑らか。底部は右回転余切り。外面底部に判読不可な墨書。	墨書
⑥	須恵器 椀	48.6cm 埋土	14.8 × 5.6 × 5.8 高台～口縁部1/3	多量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	底部は右回転余切り。外面体部に墨書あり。薄く判読不可。	墨書 「寛」又は 「宜」
7	須恵器 坏	埋土	- - - - - 小片	白色・石英粗砂粒 還元、軟 質 灰白色	内外面体部に僅かに墨書が残る。	墨書 動土A
8	土師器 坏	9.0・15.0cm 埋土	12.0 × - - 8.0 小片	白色細砂粒、僅かな角閃石の 細砂粒 酸化 橙色	口縁部は横撫で、体部は指痕による不定方向の撫で。底部は寛削り。	

第3章 検出遺構・遺物

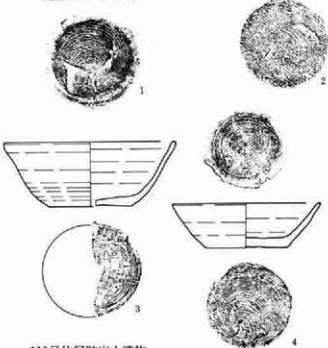
遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・地成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑨	須恵器 杯	埋土	12.2・4.0・6.0 1/3	多量の白色細・粗砂粒、石英の粗砂粒 還元、軟質 灰黄色、黒色	体部立ち上りはかなり底部よりも張り出し、体部はロクロ目を強く挟く外反気味である。底部は右回転糸切り未調整。	
⑩	須恵器 杯	-29.0cm 埋土	12.4・4.1・5.6 1/2	白色細砂粒、僅かな角閃石石英の細砂粒 焼し 黒色	体部は僅かに丸みをもって開く。器内は比較的薄手。底部は右回転糸切り未調整。	
⑪	須恵器 杯	埋土	12.4・4.3・5.2 1/4	夾雑物はほとんどみられない 還元、軟質 灰白色	底部は口径の1/2以下と小さく、体部は僅かな丸みをもって開き、口縁部は外反し、器内は薄手。底部は右回転糸切り未調整。	
⑫	須恵器 椀	65.0cm 埋土	12.6・5.5・6.8 1/3	白色細・粗砂粒、赤褐色粗砂粒 酸化 にぶい黄褐色	体部は中位がやや張り出し、僅かに外反気味である。底部は右回転糸切り後、周辺部は高台貼付時に回転態で。	
⑬	灰釉陶 器 皿	61・62・ 63.5・76・ 83.5cm	15.2・3.3・7.2 2/3	夾雑物はほとんどないが素地はやや粗い。還元、堅緻 灰色、釉は緑灰色	口縁部は外反し、口唇部が若干引き出される。高台は断面台形で、内側接合部が若干凹む。底部は回転態で、釉は糊塗り。	
⑭	須恵器 椀	3.0cm	16.0・5.9・7.5 1/2	石英粗砂粒、黒色円粗砂粒 還元、軟質 灰白色	体部は下位にやや丸みを持ち、中位から口縁部にかけて外反する。内面底部は同心円状に凹凸がみられるが、体部と底部の境は明瞭である。底部は回転糸切り、回転方向不明。	
⑮	須恵器 壺	71.0cm	24.0・ - ・ - 小片	白〜灰色・石英粗砂粒、赤褐色円粗砂粒 還元、軟質 洗黄褐色	頸部は幅広く、外面に数本の凹凸をもつ。口縁部は外反する。口縁部内外面回転態で。胴部外面は下方方向鋭削り、内面は横方向鈍態で。	
⑯	灰釉陶 器 長細壺	77.0cm	- ・ - ・ - 口縁部1/3、口唇部を欠く	夾雑物ほとんどなし 還元、堅緻 灰白色、釉はオリーブ灰色	ロクロ整形	
17	須恵器 小型壺	カマド埋土	12.2・ - ・ - 胴上位〜口縁部1/3	白色細砂粒 還元、軟質 灰黄色	口縁部、内面胴部回転態で、胴部外面は雑な態でにより器面には粘土の凹凸がある。	
⑰	須恵器 壺	67.5cm〜 74.0cm	24.0・ - ・ - 胴上位〜口縁部1/5	白色細・粗砂粒・細礫 還元、堅緻 灰色	器内は全体的にほぼ均一、内外面とも丁寧な回転態で調整。	
⑱	鉄製品 刀子	21cm		頸部を欠損し、調査時欠損。全体に錆化が顕著で粗鍛造を思わせる。雑用(工具)刀子か。錆はやや板気味であるが研摩跡の痕はない。残存長8.5+acm、重10.6g。		
⑳	鉄製品 棒状	56.5cm		頸部は黄鉄の押しつぶしのままの状態となっている。両端部は旧態をとどめる。錆化は径目状部分は少なく精鍛造を思わせる。そのため釘ではない。全長5.5cm、重7.8g。		

110号住居跡 (写真図版67頁、123頁)

位置 10E-17グリッド 方位 N-69.4°W 形状 350×310cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は60cmを測る。床面 床はローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅15cm、深度14cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、検出時にはカマド内に礫の遺存はみられなかったが、袖部に礫を置いた痕跡が残り、住居床面より大形の礫が多く出土していることから、石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは多い。煙道部は壁より60cmと比較的短く、急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部付近に径80×95cm、深度36cmの方形の床下土坑を1基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 出土遺物中、杯(No.1、2、3)は床上直面よりの出土である。

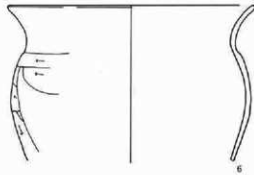
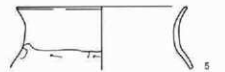


110号住居跡



110号住居跡出土遺物

- 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒少量。
 - 2 茶褐色土 F P、ローム粒少量、炭化物。
 - 3 褐色土 F P、ローム粒、炭化物。
 - 4 明褐色土 ローム粒、炭化物。
 - 5 暗茶褐色土 ローム粒少量。
 - 6 黄灰色土 灰、炭化物。
- カマド
- 7 黄褐色土 F P、ローム粒子、焼土粒子。
 - 8 淡黄褐色土 ローム主体。
 - 9 暗褐色土 ローム・灰の混土。
 - 10 黒褐色土 焼土、灰、ローム粒子。

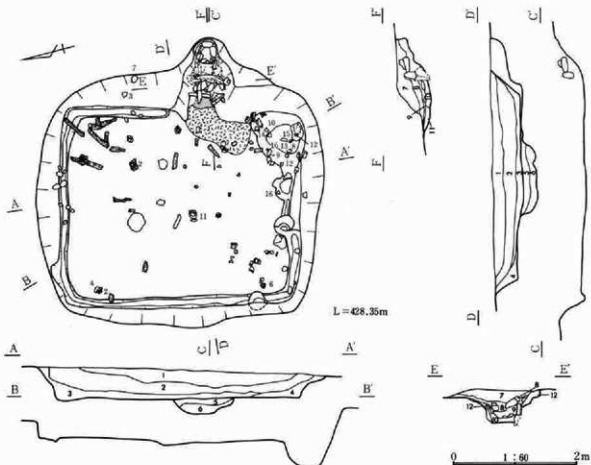


0 1:3 10cm

遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・器形の特徴	備考
①	須恵器 環	床直	13.0・4.4・6.4 2/3	少量の白色細砂粒・細礫、長石の細礫 還元 灰白色	体部の立ち上りは丸みをも開く。底部は左回転未切り未調整。	
②	須恵器 環	床直	11.8・3.2・7.0 口縁部1/4欠損	白色細・粗砂粒・細礫 焼し焼成 灰色	器高は低く、体部から口縁部は直線的に開く。右回転未切り未調整。	
③	須恵器 環	床直 3.0cm	13.7・5.1・6.6 1/2	白色細砂粒・灰色細礫 還元 灰白色	体部は下位に丸みをもり、口縁部は外側にふくらみをもつ。底部は回転未切り未調整。	
④	須恵器 環	23.5cm	12.0・3.5・6.6 2/3	白色細・粗砂粒～中礫 酸化(燻し気味) 黄灰色	体部はほぼ直線的に開く。器内は口唇部に向って薄くなる。底部は右回転未切り未調整。	
⑤	土師器 小形埴 4.0cm	2.0cm 4.0cm	13.6・ - - - 小片	白色から灰色の細・粗砂粒 普通 褐色	口縁部はやや内傾気味に立ち上り、上位は開く。	
⑥	土師器 罍	床直 6.5cm 11.5cm	19.6・ - - - 小片	白色から灰色の細・粗砂粒 少量の赤褐色円粗砂粒 普通 濃い褐色	細部は胴部との境が段をなし、緩やかに括れて外反する。胴部の最大幅の部分から下はかなり収狭している。	

111号住居跡 (写真図版68頁、123～124頁)

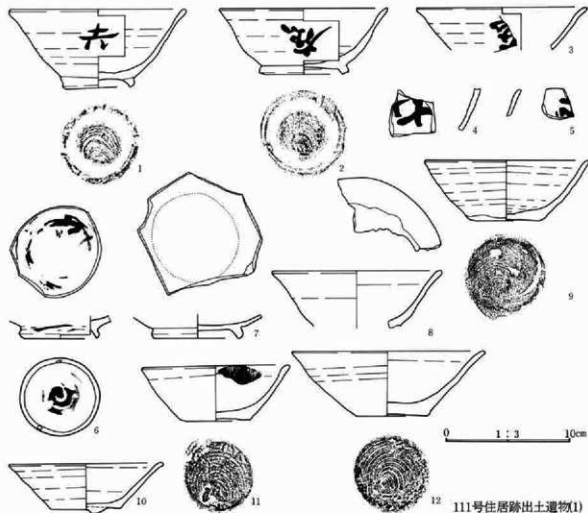
位置 4E-17グリッド 方位 N-72.0°-W 形状 450×400cmを測る隅丸形状のプランを呈し、壁高は32cmを測る。床面 床はローム混じりの黒色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅18cm、深度10cmの溝がほぼ全周する。柱穴 3穴検出されるがいずれも壁に接した壁柱穴であり、し



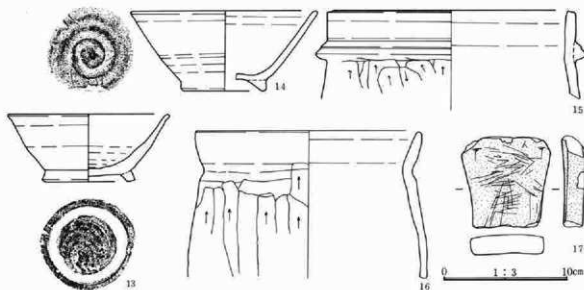
かも住居南半のみに検出されている。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径78～80cm、深度42cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は良好で天井部の一部が残る。袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであると考えられ、礫の隙間には粘土を詰め固定する。袖石は抜かれ、設置痕のみを検出する。天井部は長く大形の礫を両煙道部の上に架け橋状に置き、周辺に粘土を貼り構築されている。燃焼部は壁のラインより若干外側に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より49cmと短く、緩やかに立ち上がり、先端（煙出口）には小礫を円形に配石する。掘り方 住居中央部付近に径116～150cm、深度23cmの円形の床下土坑を1基検出する。重複 重複する遺構はない。

備考 本遺構の北東コーナーからカマドの付近にかけて、炭化材を出土する。炭化材は棒状で床上に倒れた形のものと同壁に立つ形のものが見られるが、量的に少なく、壁の焼土化もみられない。焼失家屋の可能性もあるが断定はできない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は、住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、坏(No 8、9、10、11)・羽釜(No15)・砥石(No17)は床面直上、及び土坑内よりの出土である。墨書土器として「吉」・「在」の文字がある。

- | | | |
|------------------|---------------------|-------------------|
| 1 黒色砂利層 FP。 | 6 茶褐色土 ロームブロック、粘土。 | 9 明褐色土 炭化物少量、焼土粒。 |
| 2 1に類似。FP少量。 | カマド | 10 茶褐色土 焼土、灰、炭化物。 |
| 3 黒色土 炭化物、粘土。 | 7 暗褐色土 FP、ローム粒、浅栗山 | 11 黒灰層。 |
| 4 黄褐色土 FP、ローム。 | B軽石少量。 | 12 白色粘土とFPの混土。 |
| 5 貼り床 粘土、ロームを可く。 | 8 褐色土 FP少量、炭化物、焼土粒。 | |



111号住居跡出土遺物(1)



111号住居跡出土遺物②

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 碗	貯蔵穴 4.0cm	14.0・6.3・5.0 完形	多量の白色・石英粗砂粒～粗礫 還元、軟質 灰黄色	内面底部は螺旋状の調整痕。底部は右回転 転糸切り後、周辺は高台貼付時の損で、 外面体部正位で「書」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 碗	21.5cm	13.4・5.2・6.2 口縁部1/3欠損	多量の白色・石英粗砂粒～粗礫 還元(酸化気味) にぶい黄色、暗灰黄色	内面底部は螺旋状の調整痕、外面底部は 右回転糸切り後、周辺は高台貼付時損で、 外面体部倒位で「在」の墨書あり。	墨書
③	須恵器 環	36.0cm	- - - - 小片	少量の白色・石英粗・粗砂粒 還元、軟質 浅黄色	外面体部に倒位?で墨書あり、欠けている が2と類似しているので「在」と考え られる。	墨書
④	須恵器 環	21.5cm	- - - - 小片	白色・石英粗砂粒 還元、軟 質 灰白色	外面体部に墨書があり、一部分だが、2 と同じ「在」と考えられる。	墨書
5	須恵器 環	埋土	- - - - 口縁部小片	白色粗砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に墨書があるが、欠けているた め判読不可。	墨書
⑥	灰釉陶 器 碗	8.0cm	- - - - 5.8 高台～底部	夾雑物はほとんどない、緻密 還元 灰白色	高台は三ヶ月高台、底部は回転態で、内 外面底部に墨痕があり、内面底部はなめ らか。	転用眼 墨痕
⑦	灰釉陶 器 碗	36.0cm	- - - - 6.8 高台～体部下位	夾雑物はほとんどないが、素 地はやや粗い 還元	胎土は灰白色、釉は白色でつやがない。 濃け掛け、内面底部を転用眼としている。 滑らか。	墨痕
8	須恵器 環	床直 貯蔵穴	- - - - 小片	白色粗・粗砂粒・大礫 還元、 軟質 灰白色	内面体部に赤色顔料が付着している。	
⑨	須恵器 環	床直	13.1・4.7・6.5 1/2	白色粗砂粒、石英粗砂粒 酸化 褐色	体部は僅かに丸みをもって開く。底部は 右回転糸切り後、周辺部を縦に撫でて いる。	
⑩	須恵器 環	床直	12.3・3.5・5.5 1/4	白色粗・粗砂粒、少量の石英 の粗砂粒 還元 灰白色	底径は1/2以下と小さく、体部は直線的に 大きく開き、唇内は底部から口唇部まで ほぼ均一である。底部は回転糸切り未調 整だが、粘土の團りが付着している方向 は不明。	
⑪	須恵器 環	床直	11.8・4.4・5.5 口縁部一部欠損	白色粗・粗砂粒、石英粗砂粒・ 粗礫 還元、軟質 灰白色	体部は直線的に開く。内面底部は螺旋状 の凹凸をもつ。底部は右回転糸切り未調整。 口縁部の一部内外面に煤が付着してい る。	

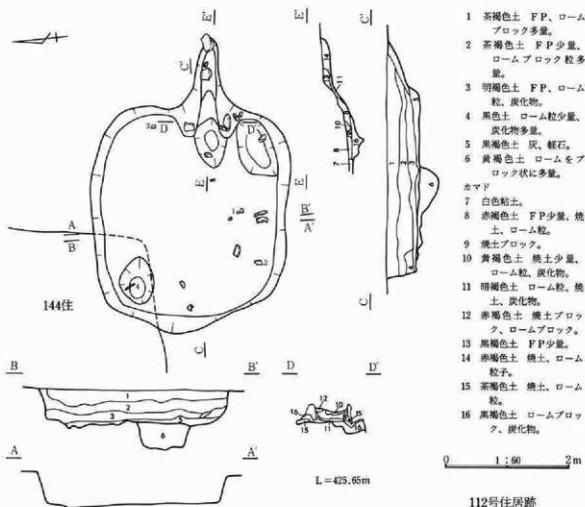
遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑬	須恵器 杯	床直	15.4・5.1・5.6 3/4	白色細・粗砂粒・細礫 石英・長石粗砂粒 還元、軟質 灰白色	体部はほぼ直線的に開き、体部の器内は比較的薄手。内面底部は螺旋状の凹凸あり。底部は右回転未切り未調整。	
⑭	須恵器 椀	20.5cm	13.0・5.3・7.3 1/2	多量の白～灰色細・粗砂粒 細礫、石英細礫 還元、軟質 浅黄色	体部は僅かな丸みをもって、口唇部はやや外反する。器内は口唇部に向って薄くなる。内面は底部と体部の境がない。底部は右回転未切り後、高台貼付時に回転無で。	胎土分析
⑮	須恵器 椀	29.0cm	16.1・6.3・8.0 1/4	白色細・粗砂粒、少量の石英の粗砂粒 還元、軟質 黄灰色	体部は直線的に開き、器内は口唇部まで均一である。底部は高台貼付時に回転無で。	
15	須恵器 羽釜	床直	19.8・ 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 黄灰色	跨は下向き断面三角形を呈し、上面に弱い段が走る。口縁部は直立し、口唇部は僅かに外傾気味で一帯の沈線が走る。口縁部はクロコ整形、胴部は上方向への寛削り。	
16	土師器 壺	23.0cm	18.0・ 胴部上位～口縁部 1/3	白色細砂粒、石英粗砂粒・細礫 還元、軟質 黄灰色	胴部はややふくらみをもち、胴部は僅かに縮り、口縁部はふくらみもち、内傾気味である。口縁部はクロコ整形、胴部外面は上方向への寛削り、内面は横方向の寛削り。	
⑯	石製品 砥石	床下			美小口に原石面が残るため自然利用砥である。手前小口は旧時の割れ口。使用は表裏両側面。表面に刀傷あり。割れた後も使用したらしくわずか磨痕。質は軟か目の名倉説。石材は流紋岩（砥沢）。	

1 1 2 号住居跡 (写真図版69～70頁、124頁)

位置 23C-13グリッド 方位 N-81.0°-E 形状 350×310cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は52cmを測る。床面 床はローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径60～90cm、深度10cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、袖部には礫を設置し、煙道部にも礫を置いた痕跡が残ることから石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より112cmと長く、階段状に立ち上がる。掘り方 住居中央南西寄りに径100cm、深度40cmの円形の床下土坑を1基検出し、土坑の底面は平坦である。重複 144号住と重複し、新旧関係は埋土断面より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 出土する遺物の量は少ない。床面直上より砥石 (No 2) が出土し、特筆すべき出土遺物として、鉄斧 (No 3)・刀子 (No 4) があり、刀子は柄の木質部が残る。



112号住居跡出土遺物

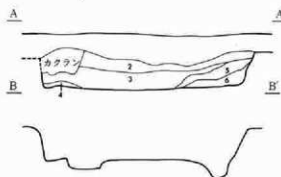
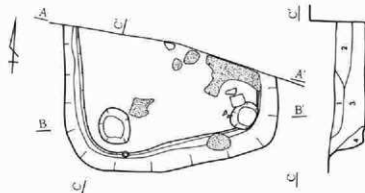


遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 埴	7.0cm 埋土	12.5・4.0・7.2 3/4	白色細・粗砂粒・細粒 還元 灰色	体部はやや丸みをもって開く。底部は右 回転糸切り未調整。	
②	石器 砥石	床直		自然石(河原石)利用砥で小口を除き使用されているが、金属・石材等の硬質の研磨主体が用いられたのは因右側部のみで刃物部がある。質は極めて硬い。材質は流紋岩(砥岩か)。		
③	鉄製品 斧	8.0cm		刃先は偏平片方で手柄の刃先となる。全長に比べ袋部が長い使用耗の顯著な手柄と考えられる。袋部は折り返しが狭く(10・119住と比べ)元々斧として製作されたものではなく手柄として製作されたものかも知れない。刃部の研耗は顯著でなく雑用(工具)刀子とした場合、使用の始まりの段階と考えられる。量目は錆ぶくれが多く鑄造土と言えない。残存長15.8cm、重27.6g。		
④	鉄製品 刀子	5.0cm		切先部は調査時の欠損。基部に拵の木質遺存。X線写真・肉眼観察によると至元 様の金具が柄内に食込む。柄は至元で銅削形跡を示し実測断面の様な形を呈する。至元の 様金具は不可解で柄内に食込っており の機能は果たされていない。残存長15.8cm、重29.8g。やや粗な鑄造。		

113号住居跡 (写真図版70頁)

位置 20E-16グリッド 方位 N-77.5°-W 形状 遺構の北側大半が調査区域外に存在するため、全体の規模や形状は明らかではないが、東西方向には340cmを測り、壁高は50cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝は、幅15cm、深度14cmの溝が巡る。柱穴 調査範囲内においては検出されていない。貯蔵穴 調査範囲内においては検出されていない。カマド 調査区域外に存在するものと考えられるが、

規模・形状共に不明である。掘り方 南壁中央部寄りの所に径90~105cm、深度24cmの円形の床下土坑を1基検出する。重複 調査範囲内における遺構の重複はない。遺物 調査面積が少ないこともあり、



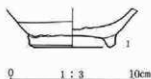
L=429.00m

113号住居跡

遺構内より出土する遺物の量は極めて少ない。床面直上よりの出土は椀 (No1) がある。

- 1 暗褐色土 F P多量。
- 2 暗褐色土 F P多量、ローム粒子少量。
- 3 暗褐色土 2に類似、F P少量。
- 4 暗褐色土 3に類似、ローム粒子。
- 5 灰褐色土 F P、粘土ブロック。
- 6 灰白色粘土。

0 1:60 2m

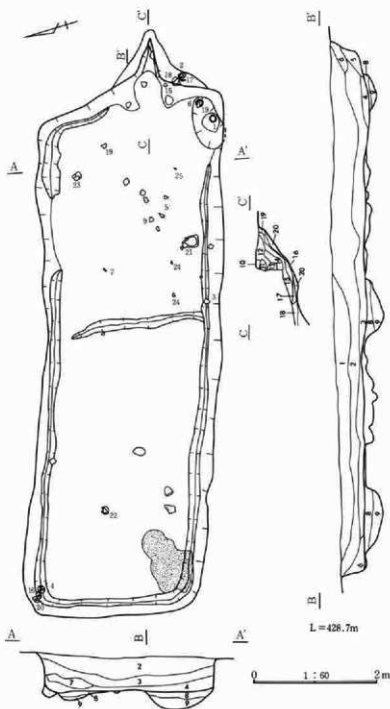


113号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・器形の特徴	備考
1	茶碗類 椀	床直	・ ・ ・ 6.8 高台～体部下位 L/3	多量の白色・石英類・粗砂粒 混入、軟質 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。内面底部は、螺旋状の深い沈線が見られる。	

114号住居跡 (写真図版71~72頁、124~125頁)

位置 12E-17グリッド 方位 N-69.5°-W 形状 820×280cmを測る隅丸形状のプランを呈し、壁高は60cmを測る。床面 床はローム混じりの黒褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面、及び北壁の一部を除き、幅15cm、深度4cmの溝がほぼ全周する。また、住居中央や東寄りに壁溝と同規模の溝が南北方向に走り、排水溝もしくは間仕切りの跡と考えられる。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径45~85cm、深度22cmを測る。カマド 東壁の中央や南寄りに設けられ、袖部には障を置き、それを核に粘土を貼る。燃焼部は壁のラインより外側に位置し、支脚と思われる礫が残る。袖部の張り出しは少ない。煙道部も壁より58cmと短く、急峻に立ち上がる。掘り方 内部より径68~178cm、深度12~30cmの楕円形の床下土坑を6基検出する。重複 重複する遺構はない。備考 本遺構の形状は他の住居と比べ極端に長いため、数軒の重複ではないかとも考えられたが、埋土断面に重複の痕跡が無いこと、床面のレベルが一定であること、壁溝が全周することなどから考えて、重複によるものではないと判断した。また、後記の出土遺物の特性から考えて、寺院(宮田寺)造営に深く係わりを持つ住居と考えられる。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多く、完形品の遺存率が高い。遺物は住居中央より東側に多く散乱し出土する。特に坏・椀類が重なった状態での出土が目立つ。出土遺物中、坏 (No21、22)・椀



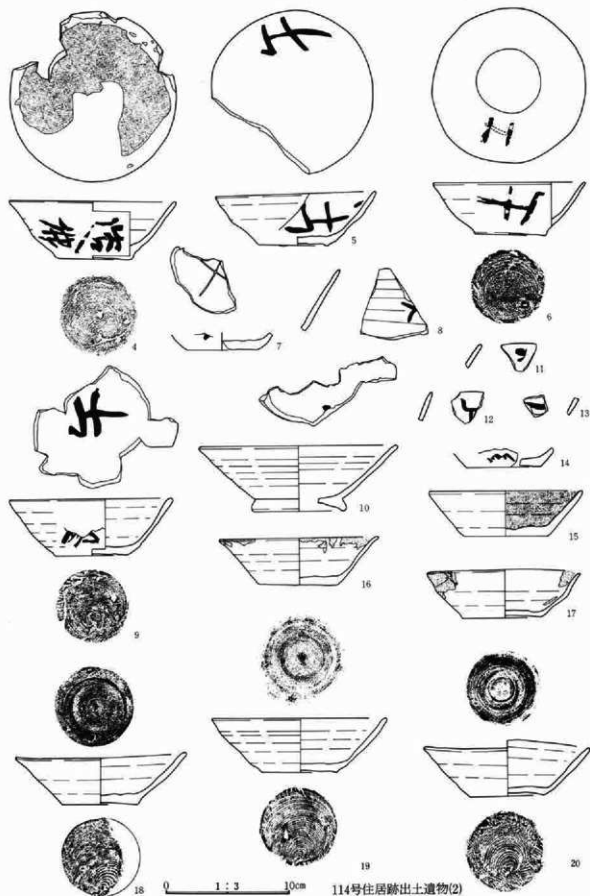
(No23) は床面直上、坏 (No 2、18) はカマド袖上よりの出土である。坏 (No 4、16、20) は、上から落ちたような状態で壁に密着して出土した。出土する坏・碗類は、胎土・器形に類似しているものが多く、一括性が高いものと考えられる。特筆すべき出土遺物として、墨書土器の「造佛」(No 4) 以外にも、「午」の墨書が多く出土すると共に、内面に漆が付着した坏 (No 4、15、16、17) が出土する。

- 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒少量。
 - 2 褐色土 F P、ローム粒、炭化物。
 - 3 茶褐色土 F P少量、ローム粒、炭化物、焼土粒。
 - 4 明茶褐色土 極少量のF P、ローム粒、炭化物、焼土粒。
 - 5 黄灰色土 粘土、灰、焼土、炭化物。
 - 6 茶褐色土 F P、ローム粒。
 - 7 黒灰色土 F P少量、黒灰、炭化物。
 - 8 黄褐色土 ロームブロック・黒褐色土を叩く貼り床。
 - 9 黒褐色土 ロームブロック。
- カマド
- 10 赤褐色土 F P、焼土、炭化物。
 - 11 暗茶褐色土 F P、粘土、焼土、炭化物。
 - 12 黄灰色土 粘土、ローム、焼土。
 - 13 暗茶褐色土 焼土、ローム粒。
 - 14 茶褐色土 焼土、ロームブロック、炭化物。
 - 15 白色粘土 ローム粒、焼土粒。
 - 16 焼土ローム粒 炭化物。
 - 17 焼土ブロック。
 - 18 炭化物 焼土、灰。
 - 19 暗赤褐色土 灰、焼土。
 - 20 赤褐色土 焼土、ローム粒。



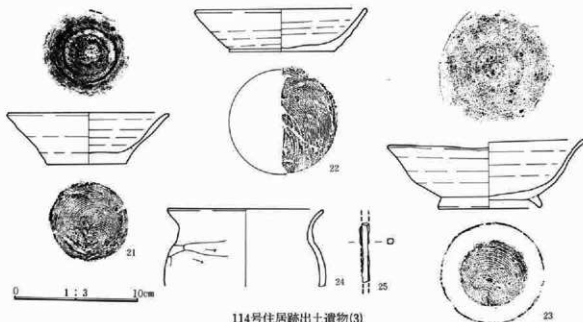
114号住居跡出土遺物(1)

114号住居跡



114号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出遺構・遺物



114号住居跡出土遺物(3)

遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	貯蔵穴底面 2cm -16cm	12.8・3.8・5.5 完形	白色・石英細・粗砂粒 還元。 焼し気味。灰白色、黒色	底部は左回転糸切り未調整。体部は上位 に若干ふくらみをもち、比較的器内は薄 手。外面体部横位に「午」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 坏	カマド 袖上	12.5・3.7・6.2 体～口縁1/2欠損	多量の白色細砂粒～細礫、石 英細砂粒 焼し焼成 黒色	底部は左回転糸切り未調整。比較的薄手。 体部上位が若干ふくらむ。外面体部側位 もしくは斜めに「水」か「水」の墨書あり。	墨書
③	須恵器 坏	10.5cm	12.3・3.5・6.0 口縁部2/3 欠損	白色細砂粒 還元 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。外面体部に 墨書判読不可。内面底部は墨痕が残り、 滑らか。	転用履 墨痕
④	須恵器 坏	5.6cm	13.4・4.6・6.0 口縁部一部欠損	少量の白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	底部は左回転糸切り未調整。外面体部側 位に「造線」の墨書あり。内面には漆が 掻き取られたような状態で付着、赤色顔 料も点在する。	墨書
⑤	須恵器 坏	5.5cm～ 19.5cm 埋土	12.6・4.1・5.5 口縁部一部欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元、 軟質 灰白色	底部は左回転糸切り未調整。体部上位に 若干ふくらみをもつ。比較的薄手。内外 面体部横位に「午」の墨書あり。	墨書
⑥	須恵器 坏	貯蔵穴底か ら16.5cm	12.0・4.2・5.6 完形	多量の白色細砂粒 還元、軟 質 灰白色、黒色	底部は右回転糸切り未調整。内外面体部 横位に「午」の墨書あり。	墨書
⑦	須恵器 坏	6.6cm	- - - - 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に墨書。内面底部に焼成後の 「十」の刻字あり。	墨書 刻字
⑧	須恵器 坏	埋土	- - - - 小片	少量の白～灰色細砂粒 還元 灰白色	外面体部に墨書があるが、欠けているた め判読不可。	墨書
⑨	須恵器 坏	8.5cm 埋土	13.0・4.5・5.6 底部～口縁部1/3	白色細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。外面体部側 位に「寺」。内面底部に「午」の墨書あり。	墨書
10	須恵器 碗	埋土	- - - - 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	内面底部に墨書の痕跡あり。	墨書
11	須恵器 坏	埋土	- - - - 小片	僅かな白色細砂粒 還元、軟 質 灰白色	外面体部に墨痕あり。	墨書

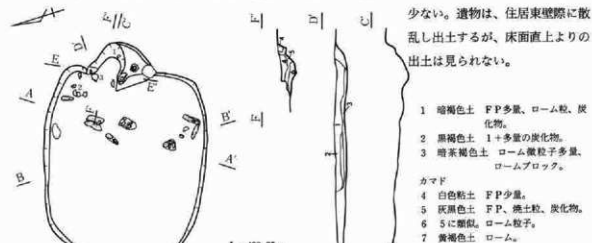
遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・総高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
12	須恵器 坏	埋土	—・—・— 小片	白色・石英細砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に墨書があるが薄く、欠けているため判読不可。	墨書
13	須恵器 坏	埋土	—・—・— 小片	少量の白色細砂粒 還元、軟質 灰白色	内面体部に墨書、薄く、欠けており判読不可。	墨書
14	須恵器 坏	埋土	—・—・— 小片	僅かな白色細砂粒 還元、軟質 灰白色	外面体部に墨書があるが薄く、欠けているため判読不可。	墨書
⑬	須恵器 坏	56.0cm	12.2・3.6・6.5 2/5	少量の白色細砂粒 還元 灰白色	体部から口縁部まで直線的に開く。底部は左回転糸切り未調整。残存している口縁部から体部の内面には全面にうるし様のものが付着している。	
⑭	須恵器 坏	11.0cm	12.8・3.8・6.5 完形	少量の白色細砂粒、僅かな細礫 還元(焼し気味)黄白色・黒色	体部は直線的に大きく開き、口縁部が外反する。底部は左回転糸切り未調整。口縁部内外面にうるし様のものが付着している。	
⑮	須恵器 坏	カマド 軸上	12.2・3.8・6.4 4/5	少量の白色細砂粒、黒色円粗砂粒 還元 灰白色	胎土は緻密で器内は薄手である。体部は中位に横をもって外反する。底部は左回転糸切り未調整。口縁部から体部内面に黒色のうるし様の物と赤色顔料の様なものが付着する。	
⑯	須恵器 坏	カマド 軸上	13.4・4.0・6.4	白色細・粗砂粒・細礫 焼し焼成 黒色	体部はやや中位によく丸みをもち、口縁部は外反する。底部は左回転糸切り未調整。	胎土分析
⑰	須恵器 坏	19.5cm 31.5cm	14.2・4.3・6.2 5/6	白色細・粗砂粒、少量の赤褐色円粗砂粒 焼し焼成 黒色・淡黄色	体部はやや丸みをもつて開く。器内は体部中位から口縁部で肥厚する。底部は左回転糸切り未調整。	胎土分析
⑱	須恵器 坏	10.5cm 20.0cm	12.8・4.4・6.0	少量の白色細砂粒 焼し焼成 におい褐色 黒色	体部から口縁部は直線的に大きく開く。やや焼きずみがある。底部左回転糸切り未調整。	
⑲	須恵器 坏	床直 カマ D軸上	13.0・4.0・6.3	白色細・粗砂粒 焼し焼成 暗灰黄色・黒色	体部は中位に弱い横をもって外反する。器内は体部上位から口縁部は肥厚する。	胎土分析
⑳	須恵器 坏	床直 埋土	13.8・3.3・8.4	多量の黒色円粗砂粒 還元 灰白色	器高が低く、底・口径が大きい。体部から口縁部は直線的に開く。底部は右回転糸切り未調整。	
㉑	須恵器 碗	床直	15.8・5.4・8.3 3/4	少量の白色細砂粒 還元 灰色・灰白色	体部は大きく丸みをもち、口縁部は外反する。器内は薄手。高台は低く開く。底部は右回転糸切り後、高台貼付時周辺部擦で。	
24	土師器 小型壺	23.0cm 26.5cm	12.6・—・— 小片	白色細砂粒、赤褐色円粗砂粒 普通 におい赤褐色	口縁部は傾いた「コ」字を呈す。口縁部内外面横溝で、胴部上位横方向削り、胴部内面横方向擦で。	
㉒	鉄製品	3.0cm	割口は旧時欠損である。鉋の錆割、錆ぶくれが少ないため鉄などの精緻造小型製品の蓋片と考えられる。残存長4.7+cm、厚3.1cm。			

115号住居跡 (写真図版73頁、125頁)

位置 2E-17グリッド 方位 N-66.0°-W 形状 305×260cmを測る隅丸方形のプランを呈し、西壁は大きく外側へ張り出す。壁高は20cmを測る。床面 床はローム混じりの暗茶褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや北寄りに設けられ、遺存状態は悪く、袖部に袖石が残るのみで粘土もあまりみられない。燃焼部は壁のライン上に位置するが、

燃焼面はしっかりしていない。袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より50cmと短い。

掘り方なし。重複なし。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、完形品の遺存は



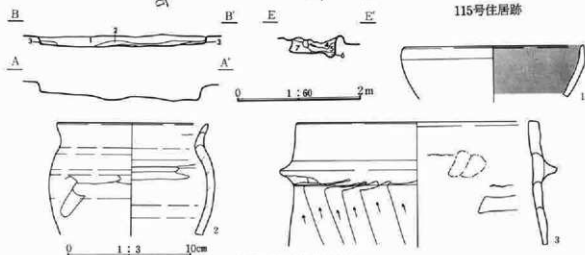
少ない。遺物は、住居東壁際に散乱し出土するが、床面直上よりの出土は見られない。

- 1 暗褐色土 FP多量、ローム粒、炭化物。
- 2 黒褐色土 1+多量の炭化物。
- 3 暗茶褐色土 ローム微粒子多量、ロームブロック。

カマド

- 4 白色粘土 FP少量。
- 5 灰黒色土 FP、焼土粒、炭化物。
- 6 5に類似。ローム粒子。
- 7 黄褐色土 ローム。

115号住居跡



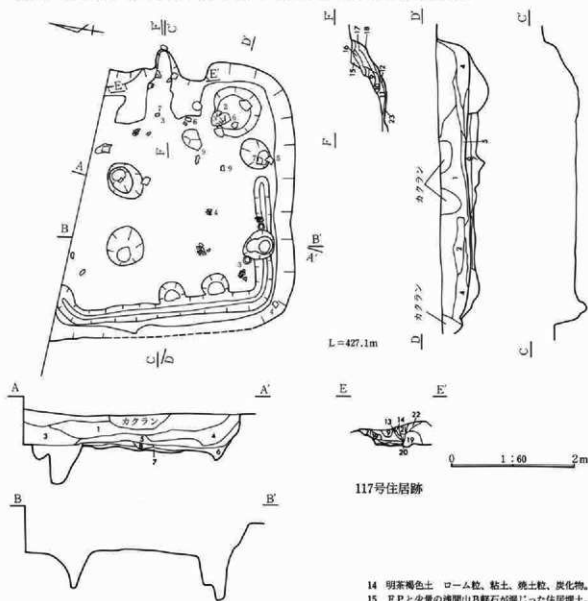
115号住居跡出土遺物

遺物番号	類別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	土師器 杯	31.0 (カマ F上)	14.2・ - ・ - 小片	白色細砂粒 普通 外-灰黄色	口縁部横撫で、体部外面横方向箇所の後縁に撫でている。内面は横方向縦研磨、黒色処理。	
②	須恵器 小茶葉	カマド内 16~22cm	12.0・ - ・ - 胴中位~口縁部1/3	白色細砂粒 還元(酸化気味) にぶい褐色	胴部はロクロ整形だが、所々指先で撫でた痕跡がある。	
3	須恵器 羽釜	17.5cm カマド袖	19.0・ - ・ - 胴上位~口縁部1/5	白色・石英細・粗砂粒 還元 灰白色	袴は比較的大型で、丁寧な回転撫で。胴部外面は上方向への磨削あり。	

117号住居跡 (写真図版74頁、125~126頁)

位置 16D-15グリッド 方位 N-80.0°-E 形状 本遺構北側は調査区域外にかかるため、全体の形状・規模については明らかではないが、調査範囲より440×410cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は50cmを測るものと考えられる。床面 床はローム混じりの褐色土を叩き貼り床とする。壁溝は全容は明らかではないが、調査範囲内の検出状況から、カマド前面を除き、幅20cm、深度15cmの溝がほぼ全周する

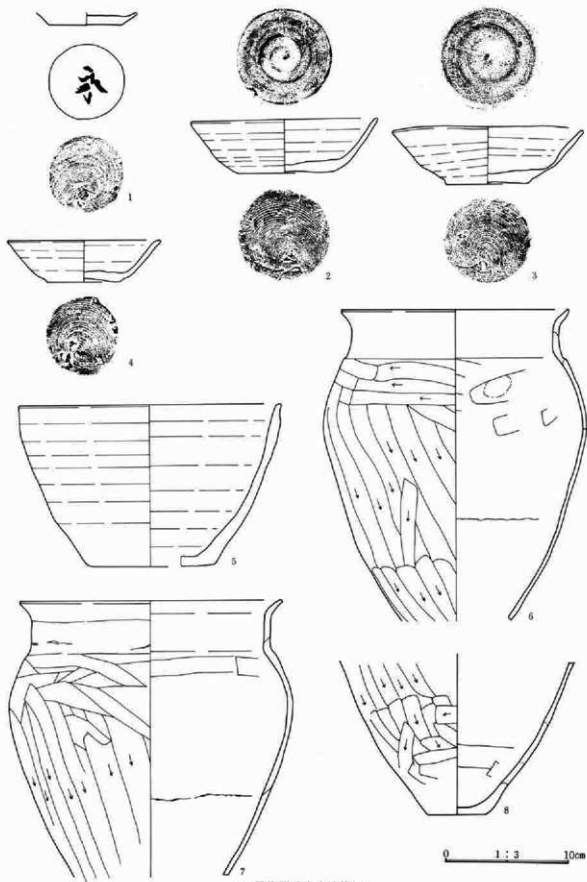
と考えられる。 柱穴 調査範囲内に4穴検出され、うち2穴は南壁に壁柱穴がある。
貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径70~78cm、深度30cmを測る。 カマド 東壁のほぼ中央に設けられていると考えられ、袖部・煙道部には礫が残ることから石組みのカマドであると考えられ、この礫を核に粘土を貼り構築する。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは多い。煙道部は壁より38cmと突出せず、緩やかに立ち上がる。 掘り方 カマド前面北側に径131cm、深度39cmの円形の床下土坑を1基検出するほか、壁周辺を浅く掘りくぼめる。 重複 なし。 遺物 床面直上より環(No.2)・壺(No.6、9)が出土する。また、環(No.1)に「永」の墨書が見られる。



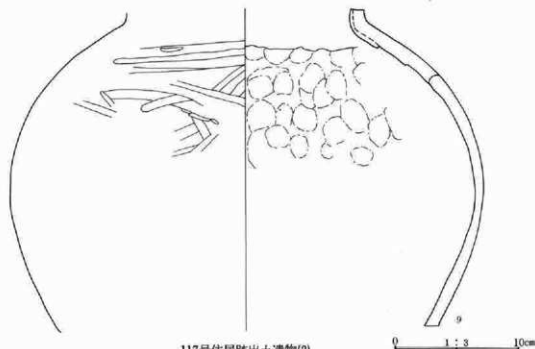
- 14 明茶褐色土 ローム粒、粘土、焼土粒、炭化物。
15 FPと少量の浅間山B群石が混じった住居埋土。
16 黄褐色土 ローム、粘土、焼土。
17 Sより硬土・炭化物多量。
18 赤褐色土 焼土、炭化物。
19 地山ローム(袖・壁体)。
20 FP 焼土、炭化物。
21 白色粘土。
22 茶褐色土 ローム少量。
23 赤褐色土 ローム少量、焼土、炭化物。

- 1 黄褐色土 FP、ローム。
2 黄黒褐色土 FP、ロームブロック。
3 黒褐色土 FP、ローム少量。
4 黒褐色土 ロームブロック主体。
5 黄褐色土 FP、ロームブロック。
6 ローム FP。
7 茶褐色土 ローム。
8 黒褐色土 FP。

- カマド
9 ローム 粘土、焼土のブロック混土層。
10 暗灰褐色土 FP、焼土ブロック、灰層。
11 暗黒褐色土 灰、炭化物、焼土粒少量。
12 黄褐色土 ローム主体。
13 ロームと粘土の固めたもの。



117号住居跡出土遺物(1)

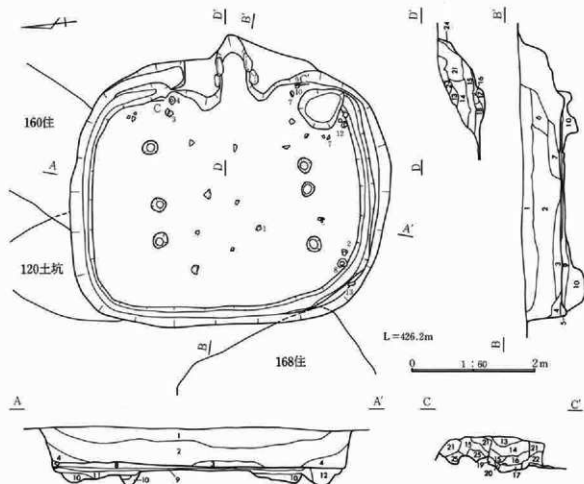


117号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	埋土	-・-・5.9 底部のみ残存	少量の白色細砂粒 還元、軟質 外-黒色、内-灰白色	底部は左回転糸切り未調整。外面底部「水」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 坏	床直	15.0・4.2・7.6 口縁部一部欠損	白色細砂粒、少量の石英・長石粗砂粒・褐色円粒 酸化 濃い黄褐色	右回転糸切り未調整。体部は直線的に開くが下位は窄まり気味で底径が小さい。	
③	須恵器 坏	6.0cm 12.0cm 15.0cm	15.0・4.6・6.8 1/2	白色細・粗砂粒・赤褐色円粒 酸化 濃い黄褐色、黒色	右回転糸切り未調整。外底径より内底径の方が大きく、体部下位は窄まる感じ、上位から口縁部は直線的に開く。	
④	須恵器 坏	17.5cm 20.0cm	12.3・3.3・6.0	白色細砂粒・灰色角粗砂粒 還元 灰白色	右回転糸切り未調整。体部は直線的に開く。	
⑤	須恵器 鉢	18.0cm	21.0・12.8・10.2 1/5	白色細砂粒、少量の石英・長石角粗砂粒、黒色円粗砂粒 酸化気味 黒・浅黄色	平底。体部は輪楕の凹凸はあるが、直線的に開き、口縁部は直立、口唇部は平坦面をもち水平、口縁部は直線的に開く。	
⑥	土師器 壺	床直	18.2・-・- 胴下位〜口縁部 2/3	白〜灰・赤褐色細・粗砂粒 普通 濃い赤褐色	口縁部は明確に「コ」字状を呈するが、屈曲部の押えはそれほど強くない。	
⑦	土師器 壺 (カマド) ピット	27.6cm	21.0・-・- 胴下位〜口縁部 1/2	白色・赤褐色細・粗砂粒 普通 濃い赤褐色	口縁部は明確な「コ」字状を呈するが、上の屈曲部の押えは弱い。	
⑧	土師器 壺	カマド	-・-・-・4.6 底部〜胴中位1/2	白色・赤褐色細・粗砂粒 普通 明赤褐色	外面下方向への寛削り、内面寛削り。	
⑨	須恵器 壺	床直 2.5cm	-・-・- 胴部〜頸部	白色細砂粒、5mm前後の赤褐色円粒 還元、軟質	外面無で、内面胴部上位には、当て具と思われる痕跡がある。磨で、浅黄色、灰色。	

118号住居跡 (写真図版75~76頁、126頁)

位置 8D-15グリッド 方位 N-83.5°-W 形状 510×420cmを測る隅丸方形のプランを呈し、各壁はやや外湾する。壁高は60cmを測る。床面 床はローム粘土混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅20cm、深度10cmの溝がほぼ全周する。柱穴 6穴検出され、4本を主柱穴とし、間に2本の補助柱穴をおく。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径65~70cm、深度36cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、遺存状態は比較的良好で天井部の一部を残す。袖部・煙道部には礫を並べ、それを核とし粘土を貼り構築するが、天井部及び煙道部先端は礫を用いず粘土

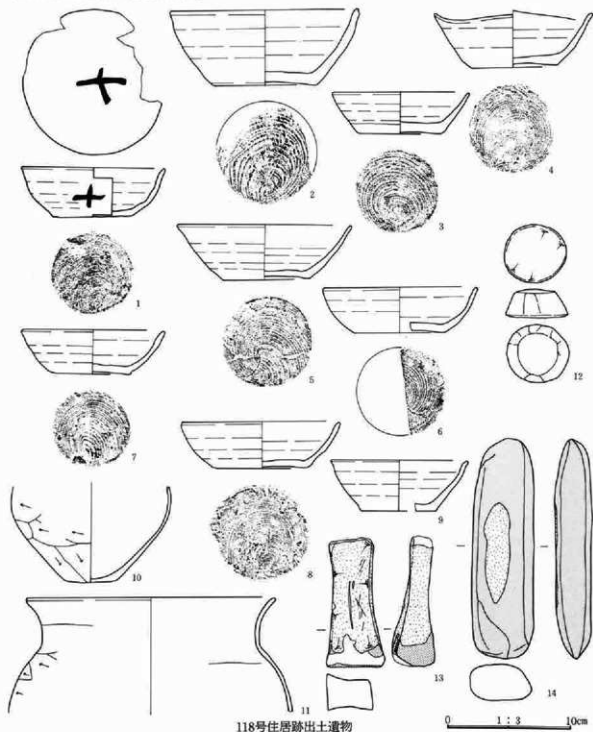


- 1 暗褐色土 大粒のFP多量、ローム粒子少量。
- 2 暗褐色土 FP少量、ローム粒子、ロームブロック多量。
- 3 黒褐色土 FP、ローム粒子、ロームブロック、粘土ブロック。
- 4 明茶褐色土 ローム粒子多量、小粒のロームブロック。
- 5 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量。
- 6 暗茶褐色土 FP、ローム粒子、粘土ブロック多量、焼土粒子。
- 7 暗茶褐色土 6に類似するが混入物は少なく粘土が多い。
- 8 暗褐色土 ローム粒、焼土粒。
- 9 褐色土 FPローム粒、ロームブロック、貼り床。
- 10 暗茶褐色土 ロームブロック。
- 11 暗黄褐色土 ロームブロック多量。
- 12 黄褐色土 ロームブロック、ローム粒。

カマド

- 13 明茶褐色土 FP、白色、粘土。
- 14 白色粘土 FP。
- 15 茶褐色土 白色粘土ブロック、FP。
- 16 茶褐色土 FP、白色粘土ブロック、ロームブロック。
- 17 明茶褐色土 FP、白色粘土ブロック、ロームブロック。
- 18 茶褐色土 FP、ローム粒。
- 19 黄褐色土 FP、ローム粒。
- 20 黒褐色土 ローム粒。
- 21 白色粘土層。
- 22 21に類似。ローム。
- 23 暗褐色土 FP、ローム粒、粘土多量。
- 24 暗茶褐色土 焼土少量。
- 25 淡褐色土 ローム主体で粘土粒少量。

のみで構築されている。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部張り出しはローム地山を残し粘土を貼る。煙道部は壁より37cmと短く、急峻に立ち上がる。掘り方 北東コーナー付近、及び西壁中央北寄りに径116～180cm、深度29～37cmの楕円形の床下土坑を2基検出する。重複 160号・168号住居（弥生・古墳時代）、120号土坑（縄文時代）と重複し、新旧関係は遺構確認時の埋土より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片である。遺物は、住居中央部、カマド前面に集中して出土する。特筆すべき出土遺物として、坏（No1）には2カ所に墨書で「十」を記し、底部には鋭利な刃物で「十」を刻む。

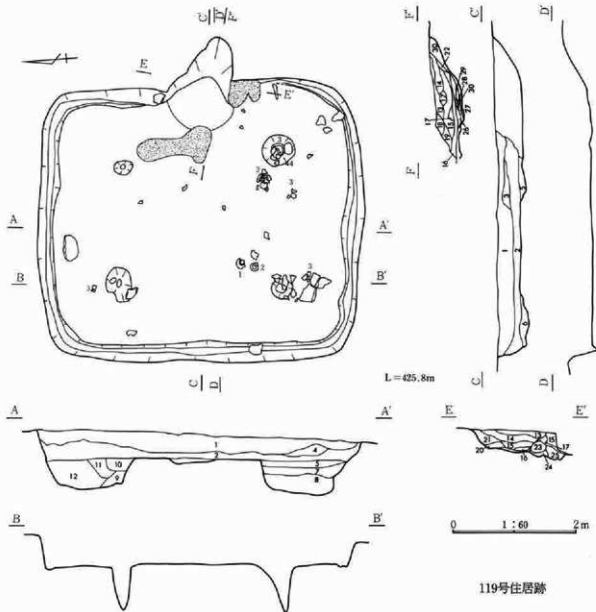


遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	27.0cm 埋土	11.4・4.0・6.3 体部～口縁部1/4 欠損	白色・赤褐色細・粗砂粒、石英 細砂粒 還元(酸化気味) 外一黒色、内一褐色	体部は丸みをも、口縁部が直立気味。 底部は左回転糸切り未調整。外面底部に 焼成後の「十」の刻書、外面体部正位で 「十」の墨書。	刻書 墨書
②	須恵器 環	12.0cm	15.2・6.0・8.2 1/3	少量の白色細砂粒、灰石の細 塵 還元 灰色	体部は深く、やや丸みをもって開く、口 縁部は直立気味となり、口唇部が上につ まみ上げられる。底部は左回転糸切り未 調整。	
③	須恵器 環	9.5cm	11.0・3.3・6.8 1/2	白色細・粗砂粒 還元 灰白色	右回転糸切り未調整。体部下位が窄まり、 上位にやや丸みをもって開く。	
④	須恵器 環	14.0cm	12.7・4.5・7.0	黄褐色細・粗砂粒 還元 灰黄色・黒色	左回転糸切り未調整。体部は直線的に開 く。焼き歪みが著しく、口径は平均値と した。	
⑤	須恵器 環	埋土	14.0・4.4・7.0 3/4	白色細・粗砂粒、僅かな小礫・ 中塵 還元 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。体部は僅かに 丸みをもって開く。	
⑥	須恵器 環	12.0cm	12.8・3.6・7.4 1/4	白色細砂粒・黒色粗砂粒 還元 ぶい黄色	体部は丸みをもつ。底部は回転糸切り未 調整。	
⑦	須恵器 環	4.0cm 7.0cm	11.5・3.5・6.2 底部～口縁部1/4	少量の白色細砂粒・細塵 還元 灰白色	右回転糸切り未調整。体部は丸みをもつ。 口縁部内側に弱い稜をもつ。	
⑧	須恵器 環	10.0cm	12.8・3.7・7.5	少量の白色細砂粒、僅かな赤 褐色細塵 還元 外面一淡黄色、内面一灰色	左回転糸切り未調整。体部は丸みをもつ て開く。	
⑨	須恵器 環	10.0cm 14.0cm	12.0・4.0・7.0 1/3	少量の白色細砂粒 還元 外一灰白色、内一灰色	体部は底部に向かって窄まる。口縁部は内 側に稜をもって外反する。	
⑩	土師器 小壺	14.0cm	一・一・4.0 小片	白～黒色細・粗砂粒、赤褐色 粗砂粒 普通 ぶい褐色	胴部はほぼ直線的に開き、上半部が丸み をもつ。底部は一方方向型削り、胴部下 位は下方向への風筒上り、上位は左横方 向への風筒上り。	
⑪	土師器 壺	埋土	20.0・一・一 小片	白～灰色の細・粗砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は一相直立気味に立ち上り、上位 が外反する。	
⑫	石製 紡錘車	36.0cm	上径4.91・下径3.36・穴径一・厚さ2.43 重量63.2g 石材 流紋岩(砥沢)		未製品、未穿孔、上面に磨き有。 砥石の転用	
⑬	石器 砥石	埋土			使用の当初は自然石利用砥であったと思 われる。両小口には刃傷が、表面側には 使用面がある。表面は輪に沿って刃傷が ある。質は数か目の名倉産である。材質 は流紋岩(砥沢)。	
⑭	石器 砥石	埋土			自然石(川原石)利用砥である。使用面 は表面側のみである。研磨主体は原石 面の凸凹をなめるように擦 痕があるため、金属・石等ではないと考 えられる。材質は粗粒安山岩。	

119号住居跡 (写真図版77頁、126～127頁)

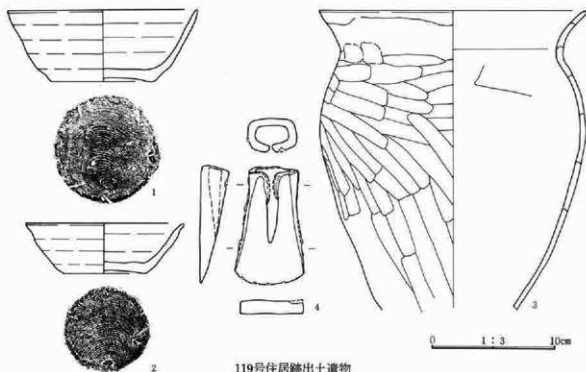
位置 24C-13グリッド 方位 N-83.0°-W 形状 525×440cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は50cmを測る。床面 床はルーム湿じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅11cm、深度9cmの溝が全周する。柱穴 4穴検出され、その平面プランはカマドを中軸として展開し、径23～50cm、深度39～76cmを測る。貯蔵穴 なし。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、煙道部・天井部には礫を用いず粘土のみで構築されている。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは床下調査の結果、壁より70cm程の所で袖石を設置したと考えられる。小ビット列が検出されたことより、張り出しは長く礫を核に用いていたと考えられる。煙道部は壁より70cmと短く、急峻に立ち上がる。

掘り方 南東及び北西コーナー付近に径130~200cm、深度45.5~58cmの不定形の床下土坑を2基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、壺 (No 3) は柱穴内よりの出土である。



119号住居跡

- | | | |
|---------------------------|-------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 F P、B 軽石、ローム粒。 | 11 暗黄褐色土 10に類似。 | 21 黒褐色土 地山ローム、ローム層移層土。 |
| 2 暗褐色土 F P、B 軽石、ローム粒、炭化物。 | 12 暗褐色土 ローム粒子少量。 | 22 黄褐色土 焼土、ローム粒、炭化物。 |
| 3 黄灰色土 粘土、焼土、炭化物。 | カマド | 23 白色粘土のかたまり。 |
| 4 茶褐色土 F P 多量、ローム粒。 | 13 茶褐色土 F P、浅間山B 軽石。 | 24 黄褐色土 ローム粒、焼土。 |
| 5 暗茶褐色土 ロームブロック、ローム粒子。 | 14 黄褐色土 F P、ローム。 | 25 暗褐色土 F P、ローム粒、粘土。 |
| 6 暗茶褐色土 5より若干黒味おびる。 | 15 黒褐色土 F P、炭化物、ローム、焼土。 | 26 褐色土 ローム粒、焼土。 |
| 7 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック。 | 16 白灰色土 焼土、粘土、炭化物。 | 27 赤褐色土 焼土ブロック。 |
| 8 黄色土 ロームブロック+黒色土の混土。 | 17 白色粘土ブロック。 | 28 茶褐色土 ローム粒、焼土。 |
| 9 黄色土 ローム、若干の黒色土の混土。 | 18 黄色土 F P、ローム。 | 29 黄色土 ローム土に若干の暗褐色土、粘土の混土。 |
| 10 黄色土 9より若干黒味おびる。 | 19 茶褐色土 F P、ローム、炭化物。 | 30 赤褐色土 焼土、ローム粒子。 |
| | 20 黄色土 ロームブロック、粘土ブロック層。 | |

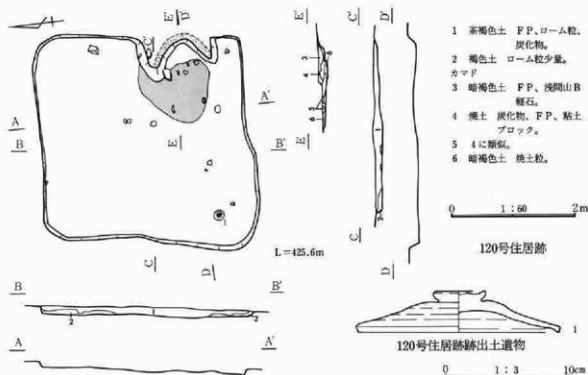


119号住居跡出土遺物

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	25.5cm	15.2・5.6・8.2 3/4	少量の白色細砂粒、灰色の円中環 還元 黄灰色	体部は下位にやや丸みをもち、口縁部まで直線的に開く。器内は口唇部に向かって薄くなる。底部は右回転糸切り未調整。	
②	須恵器 環	23.0cm	12.6・4.0・6.6 口縁部一部欠損	多量の白色細・粗砂粒 還元 灰白色	体部は直線的に開き、口唇部は器内が薄く、僅かに外反する。底部は左回転糸切り未調整。	胎土分析
③	土師器 甕	柱穴内 4~37cm	21.2・(23.7)・ 底面欠損	白色細砂粒、赤褐色円粗砂粒 にふい赤褐色	頸部から口縁部は緩やかに外反する。頸部には成形時の指頭による凹凸があるが横撫で。	
④	鉄製品 弁	18.5cm			先端部は表裏ともに平肉の少ない平造の刃部であるので弁と考えられる。全体重量は335.7gで極めて重く金属質を多く残している。X線結果も同様である。錆ぶくれ少なく精緻造を思わせる。遺存は良好で標準的資料。全長10.9cm、最大幅4.8cm、袋部厚2.0cm。	

120号住居跡 (写真図版78頁、127頁)

位置 24C-15グリッド他 方位 N-87.0°-W 形状 345×327cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁はやや蛇行して巡り、北壁に比べて南壁がやや長い。遺構は上面を削平され、壁高は13cmのみを測る。床面 床はローム地床。壁溝はなし。柱穴 検出されていない。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は悪く燃焼部の焼土、及び壁体の一部が残るのみで形状等は明らかではない。燃焼部は僅かに残る焼土範囲より、壁のライン内側に位置すると考えられ、煙道部も壁より突出しておらず、袖部は地山を掘り残すことで築かれている。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、掲載の蓋以外には環・腕類の小片を出土するのみである。

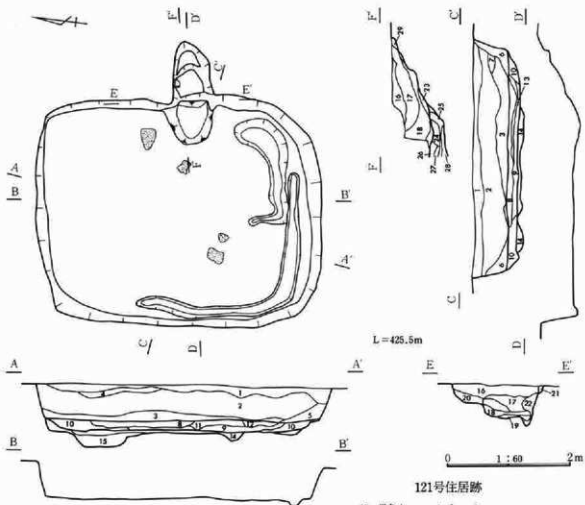


遺物番号	種類別種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・直径	胎土・焼成・色調	器形・形状の特徴	備考
①	須恵器蓋	9.0cm	16.2 × 3.2 × 4.2	白色細・粗砂粒、僅かな石英・長石の細粒、白色中礫 赤褐色閃細礫 還元 灰白色	天井部が盛り上げる形で、体部は扁平気味に開き、口縁部は折り曲げて内傾する。	

121号住居跡 (写真図版79頁、127頁)

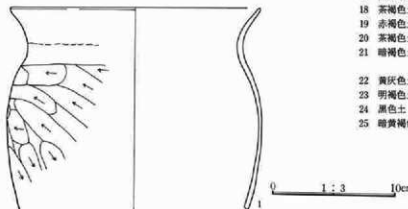
位置 20C-14グリッド 方位 N-83.5°-W 形状 456×345cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は51cmを測る。床面 床は2面検出され、両面共にローム混じりの黒褐色土を叩き貼り床とするが、下面第1次床面の床の方が硬くしまる。上面(第2次床面)と下面(第1次床面)の高低差は約15cmを測る。上面の壁溝はカマドをもつ東壁及び北壁を除き、幅15cm、深度6cmの溝がL字状に巡る。柱穴 上面よりピットの検出はなく、下面において2穴のピットを検出するも柱穴とは断定できない。貯蔵穴 上・下両床面からも検出されていない。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、検出時には煙はみられなかったが、掘り方調査において礫を設置した痕跡が認められることから、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、床面に伴い燃焼面も2面検出された。袖部の張り出しは前記の袖石設置痕よりみて比較的長く、煙道部も壁より85cmと長い。煙道部の立ち上がりは緩やかである。掘り方 第1次床面(下面)より15cm程全体に掘り下げ径33~146cm、深度4~18cmの円形・不定形の床下土坑を北東・南東コーナー・西壁付近に3基検出する。重葺 重葺する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、掲載の壺以外は小片を出土するのみである。

- | | | |
|----------------------------------|------------------------|-------------------|
| 1 暗褐色土 F.P.、ローム粒、ロームブロック少量。 | 4 暗灰色 粘土ブロック。 | 9 ロームブロック。 |
| 2 茶褐色土 F.P.、ローム粒、ロームブロック。 | 5 褐色土 F.P.少量、ロームブロック。 | 10 暗褐色土 ローム粒少量。 |
| 3 明茶褐色土 F.P.、ロームブロック、ローム粒、炭化物、白色 | 6 黄灰色土 ローム粒、粘土、炭化物、焼土。 | 11 黒褐色土 F.P.少量。 |
| | 7 ロームブロックに灰が混じったもの。 | 12 暗褐色土 ローム粒、炭化物。 |
| | 8 貼り床 F.P.少量、ロームブロック。 | 13 白色粘土 炭化物、灰。 |
| | | 14 黒色土 貼り床。 |



121号住居跡

- 15 黒色土 ロームブロック。
カマド
- 16 暗褐色土 F P、浅間山B輝石、住居埋土。
- 17 黄灰色土 ローム粒、焼土粒、炭化物。
- 18 赤褐色土 F P、ローム、焼土、炭化物。
- 19 赤褐色土 F P少量、焼土、灰、炭化物。
- 20 赤褐色土 F P、ローム粒、焼土、炭化物。
- 21 暗褐色土 F P、ローム粒子、ロームブロック、粘土粒子。
- 22 黄灰色土 粘土ブロック、ロームブロック多量。
- 23 明褐色土 ローム粒子、焼土粒子多量。
- 24 黒色土 ローム粒子、焼土粒子少量。
- 25 暗黄褐色土 ローム粒子、焼土粒子、ロームブロック。
- 26 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子。
- 27 黄灰色土 粘土ブロック、ローム粒子、焼土粒子。
- 28 暗褐色土 黒色ロームブロック、焼土粒子。
- 29 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子少量。



121号住居跡出土遺物

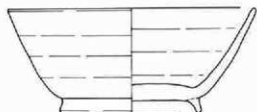
遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	土胎器 罎	3.7cm	20.0・ - ・ - 胴中位～口縁部 1/4	白色細砂粒、少量の角閃石の 細砂粒、赤褐色円粗砂粒 普通 橙色	頸部から口縁部は大きく緩やかに外反する。 頸部には成形時の指痕による凹凸があるが、横無で。	

122号住居跡 (写真図版80頁、127頁)

位置 20C-13グリッド 方位 N-85.0°-E 形状 495×400cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は51cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 北東コーナー西寄り付近に検出され、円形を呈し、径98~119cm、深度67cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の間隙には粘土を詰め固定し、それを核に

粘土を貼り構築される。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部張り出しは多い。煙道部は壁より45cmを測り緩やかに立ち上がる。掘り方 なし。

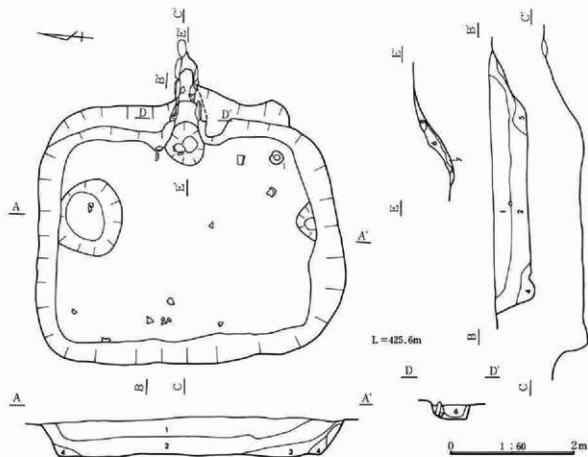
重複 重複する遺構はない。遺物 出土する遺物の量は極めて少ない。遺物は、住居全面に散乱して出土し、出土遺物中、椀 (No.1) は床面直上付近よりの出土である。



122号住居跡出土遺物

0 1:3 10cm

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒少量。 | カマド |
| 2 暗茶褐色土 F P少量、ローム粒多量。 | 6 黄色土 ローム、炭化物、焼土。 |
| 3 黒褐色土 F P、ローム粒子少量。 | 7 赤褐色土 焼土、灰。 |
| 4 黒褐色土 ローム粒子多量。 | 8 茶褐色土 ローム粒、炭化物、焼土粒。 |
| 5 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック | |
| 粘土、焼土粒子、炭化物。 | |

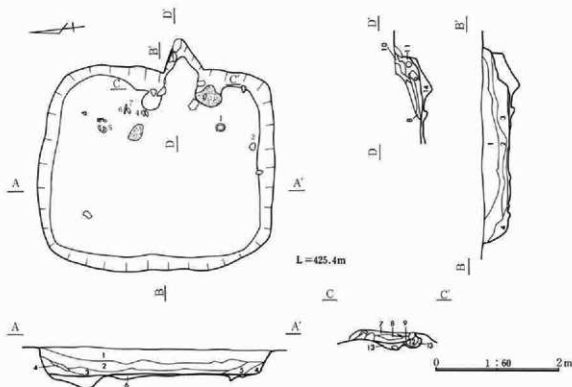


遺物番号	種別・器種	出土位置	量目 (cm) 口徑・器高・底徑	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	床直	20.0・8.3・11.3	白～灰色細・粗砂粒・細礫 少量の黒色円形礫 還元 灰白色	体部立ち上りは丸みをもち、体部から口縁部は直線的に開く。底部は回転箇所あり、周辺部は回転痕で。	

1 2 3号住居跡 (写真図版81頁、127頁)

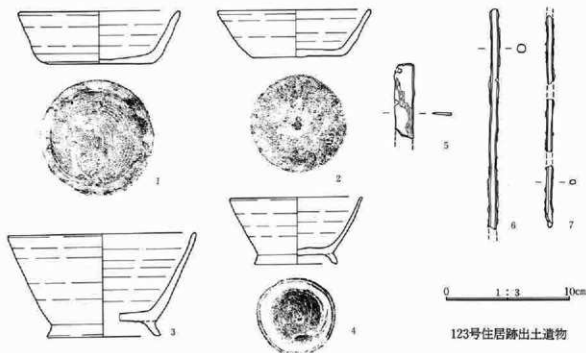
位置 20C-15グリッド 方位 N-82.0°-W 形状 376×309cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は50cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。

カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は悪く壁体の左側のみ袖部から煙道に礫の設置がみられるが、壁体右側に残る礫設置の痕跡、及びカマド周辺に散乱する礫よりみて石組みのカマドであると考えられ、礫の間隙には粘土を詰め固定している。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは多く、煙道部は壁より45cmと短く急峻に立ち上がる。掘り方 北東コーナー付近に径103～181cm、深度11cmの楕円形の床下土坑を1基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり完形品の遺存は少ない。遺物は住居東壁際に散乱し出土する。出土遺物中、坏 (No 1) は床面直上よりの出土である。又、鉄製紡錘車の軸 (No 6、7) は同一箇所よりの出土である。



- 1 暗褐色土 F P、浅間山B軽石少量。
- 2 黄褐色土 F P少量、ローム粒、焼土粒、炭化物。
- 3 茶褐色土 F P少量、ローム粒、ロームブロック、炭化物。
- 4 黒色土 ローム粒少量、炭化物。
- 5 明茶褐色土 焼土、ローム粒、炭化物。
- 6 黒褐色土 極少量のF P、ローム粒、炭化物。
- カマド
- 7 黒褐色土 ローム粒子、粘土粒子、部分的にF P小粒子。

- 8 暗乳白色土 粘土ブロック多量、焼土ブロック。
- 9 暗褐色土 7に類似、焼土ブロック、ローム粒子。
- 10 黒褐色土 焼土ブロック、ロームブロック多量。
- 11 黒褐色土 ローム粒子、焼土粒子、ロームブロック。
- 12 黄褐色土 ローム粒、焼土粒、炭化物。
- 13 黒褐色土 炭化物、焼土粒。
- 14 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック。



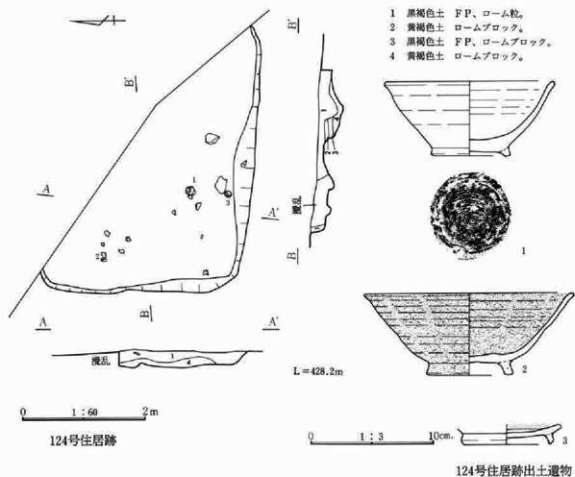
123号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	床直	13.0・4.1・9.0 宛形	僅かな白色粗砂粒・小礫 還元 灰色	底径は大きく、体部下位は回転製削りによって僅かに壁をなし、体部から口縁部は直線的。底部は回転永切り（永切りの中心が2つある）後、周辺部は回転削り。	
②	須恵器 環	30.0cm	12.4・3.8・7.6 宛形	多量の白色粗・粗砂粒・僅かな細礫 還元 灰色	体部から口縁部まで直線的に開く。底部は回転削り後、回転製で。	
③	須恵器 椀	埋土	15.0・8.1・9.0 1/3	白色細砂粒、黒色円粗砂粒 還元 灰色	体部は深く直線的に開く。高台は角形で外反する。底部残存部は回転製で。	胎土分析
④	須恵器 椀	5.0cm	10.7・5.3・6.5	少量の白色粗砂粒・細礫、黒色円粗砂粒 還元 灰色	体部は深く薄手で直線的に開く。高台は端部中央が僅かに窪む。底部は回転永切り後、周辺部は回転製で。	
⑤	板状鉄製品	3.0cm			図右側は調査時点の欠損。片側に刃が付き平造りとなり工具を思わせる。それは82住-9に似る。錆化は少なく遺存良。図上平のとおり木質付着。重3.9g。	
⑥	棒状鉄製品	8.0cm			図左側は調査時点の欠損で右側は旧時欠損。全体の錆化に発達した縦割りは精鍛造を思わせる。錆化は顕著でない。機能は不明。重18.7g。	
⑦	棒状鉄製品	8.0cm			全体が3つに割れている。そのため1個体であったとすれば15+αcmとなる。重7.9g。片側は旧時の欠損で図右側は調査時点での欠損。錆化は一定方向化せず精鍛造を思わせる。	

124号住居跡（写真図版82頁、127頁）

位置 3F-20グリッド 方位 N-89.0°-W 形状 400+α×300+αcmを測る隅丸形状のプランを呈すると思われるが、住居東半分を遺跡内を横切る農道に切られるため明らかでない。床面 床はローム混じりの黄褐色土を叩き貼り床とするが、凹凸が著しい。壁溝はなし。柱穴 検出されていない。貯蔵穴 検出されていない。カマド 検出されていない。掘り方 なし。重複 重複する

遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は、遺構の残存状態の悪さにより極めて少ない。掲載の遺物のほかは土師器製の破片を数点出土するのみである。



124号住居跡

124号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・構成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	12.0cm	13.6・5.9・6.4 1/2	白色細砂粒 酸化 灰黄褐色	体部は僅かにふくらみをもって、口縁部は外反する。底部回転糸切り後、高台貼付時製で。	
②	須恵器 椀	7.5cm	16.8・6.5・7.0 1/3	白色細砂粒、石英粗砂粒 燻し焼成 黒色	体部はほぼ直線的に開き、器内は薄手である。高台は底径より内側に貼付される。	
3	灰釉陶 器残	7.0cm	- - - 7.0 高台・底部のみ残	少量の白色細砂粒 還元 灰白色	三ヶ月高台だが、外面の襷はやや丸をもつ。底部は回転製削り。軸は刷毛塗り。	胎土A

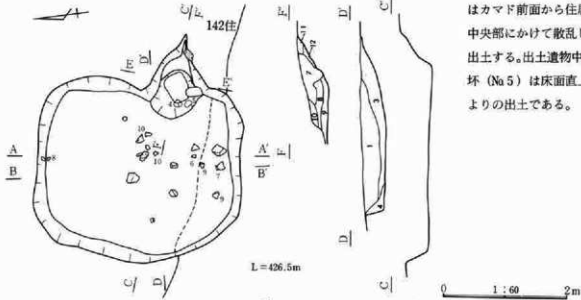
1 2 5 号住居跡 (写真図版83頁、127～128頁)

位置 11D-16グリッド 方位 N-79.5°-W 形状 330×275cmを測る隅丸方形のプランを呈するが、南壁及び西壁は相対する壁に比べ短く、南西コーナー部は緩やかな弧を描く。壁高は46cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄り to 設けられ、検出時には右側袖部に礎を残すのみではあるが、住居床面上に散乱し出土する礎の存在よ

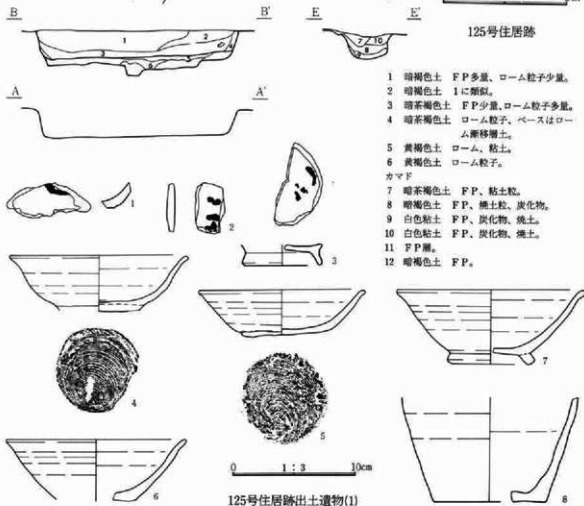
り、袖部・煙道部には障を並べた石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より79cmと長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 なし。

重複 142号住居(弥生・古墳時代)と重複し、新旧関係は埋土断面より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物

はカマド前面から住居中央部にかけて散乱し出土する。出土遺物中、坏(No5)は床面直上よりの出土である。

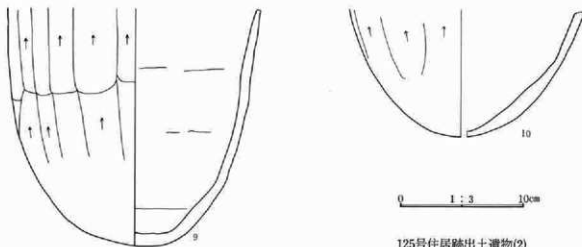


125号住居跡



- 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒子少量。
 - 2 暗褐色土 1に類似。
 - 3 暗茶褐色土 F P少量、ローム粒子多量。
 - 4 暗茶褐色土 ローム粒子、ベースはローム層移層土。
 - 5 黄褐色土 ローム、粘土。
 - 6 黄褐色土 ローム粒子。
- カマド
- 7 暗茶褐色土 F P、粘土粒。
 - 8 暗褐色土 F P、横土粒、炭化物。
 - 9 白色粘土 F P、炭化物、焼土。
 - 10 白色粘土 F P、炭化物、焼土。
 - 11 F P層。
 - 12 暗褐色土 F P。

125号住居跡出土遺物(1)



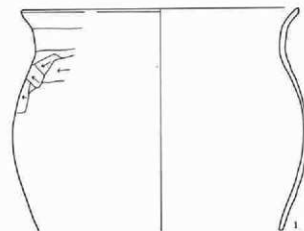
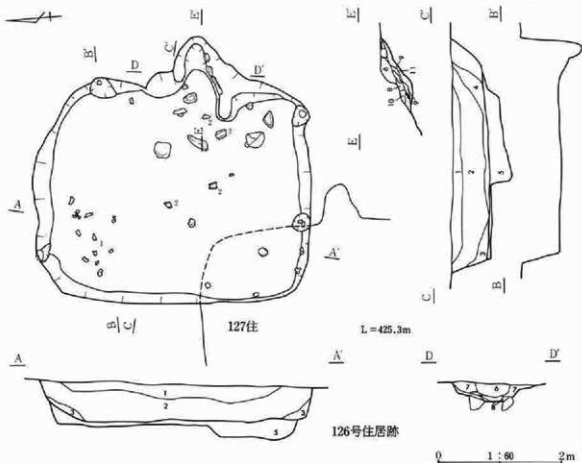
125号住居跡出土遺物(2)

遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm)		胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径・器高・底径	底～胴部小片			
1	須恵器 坏	埋土	-	-	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) 灰黄褐色	内面底部に墨書があるが、欠けているため判読不可。	墨書
2	須恵器 羽釜	埋土	-	-	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 淡黄色	胴部外面に墨痕か？	墨書
3	須恵器 椀	埋土	-	6.0	僅かな白色粗砂粒 内側還元 -灰色、外側酸化-褐色	内面底部に墨書、薄く判読不可。	墨書
④	須恵器 椀	カマド前 床直	14.1・4.4・6.0	底部～口縁部1/2 高台部欠損	多量の白色・石英の細粗砂粒 還元 外～内ぶい 内-黒色	底部は丸みをもち、口縁部は外反する。 底部は円板作りの可能性が高い。右部転 糸切り未調整。内面中央には同心円状に 凸部あり。	
⑤	須恵器 坏	カマド前 床直	13.4・3.7・6.6	実形	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 淡黄褐色	底部はほぼ直線的に開き、口縁部は僅かに 外反する。	
⑥	須恵器 坏	15.0cm 埋土	14.2・4.9・6.0	底部～口縁部1/6	多量の白色・石英細・粗砂粒・ 細礫 還元 灰色	底部はほぼ直線的に開き、口縁部が僅かに 外反する。底部は回転糸切り。	
⑦	須恵器 椀	29.5cm	15.0・5.9・6.0	高台部～口縁部 1/2	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 淡黄色	底部はやや丸みをもち、口縁部は若干外 反する。回転糸切り後周辺部は高台貼付 時の跡で。	
⑧	須恵器 小型壺	38.5cm 埋土	-	9.0 底～胴部中位 1/3	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) ぶい赤褐色	底部は無く、単位不明。胴部はクロロ整 形。巻き上げの痕跡が所々に残る。	
⑨	須恵器 羽釜	カマド 4.6cm 16.0cm	-	6.0 底～胴部中位 2/3	多量の白色・石英の細粗砂 粒・細礫 還元、軟質 ぶい黄褐色	底部はほとんど平面面を持たず、胴部下 位まで丸みをもち、胴部下位の胴部は平 滑で、単位の不明な壺で、胴部中位は上 方向への削りの要素をもつ壺で、内面は 横撫で。	
⑩	須恵器 羽釜	10～14cm カマド埋	-	6.0 底～胴部下位	白色・石英細・粗砂粒 還元、 軟質 ぶい赤褐色	底部は丸底。器形・整形は5と同じである。 る。	

126号住居跡 (写真図版84頁、128頁)

位置 17C-17グリッド 方位 N-84.0°-W 形状 446×345cmを測る隅丸方形のプランを呈し、北側壁のみやや湾曲し張り出す。壁高は78cmを測る。床面 床はローム地床を基とし、床下土坑上のみローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝は、北壁東半に浅くみられる他は検出されていない。柱穴 4穴検出され、いずれも壁にかかる壁柱穴である。位置は南東・北東・北西の各コーナー付近に3穴、

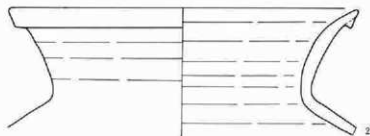
残り1穴は南西コーナーよりやや東に離れ検出される。径25~41cm、深度26~44cmを測る。貯蔵穴なし。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、検出時にはわずかに礫が残るのみであるが、掘り方調査において袖、及び煙道側面には礫を設置した痕跡が残ることから、礫を並べた石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のラインより外側に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より55cmと短く急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部から両壁にかけて67~119cm、深度9~35cmの円形・不定形の床下土坑を4基検出する。重複 127号住居(平安時代)と重複し、新旧関係は遺構検出時の埋土より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、その大半が破片であり、完成品の遺存は少ない。遺物は、住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、床面直上よりの出土はない。



- 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒子少量。
 - 2 暗茶褐色土 F P少量、ローム粒子、ロームブロック多量。
 - 3 黒褐色土 ローム粒子。
 - 4 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量。
 - 5 暗黄褐色土 大粒のロームブロック多量。
- カマド
- 6 暗褐色土 F P、ローム粒子多量。
 - 7 暗褐色土 F P、ローム粒子少量。
 - 8 暗黄褐色土 ローム粒子、焼土粒子多量。
 - 9 黄色土 ロームブロック、粘土ブロック、焼土ブロック多量。
 - 10 灰褐色土 ローム粒子少量。
 - 11 暗褐色土 ローム粒子、焼土粒子、炭化物、灰。

0 1:3 10cm

126号住居跡出土遺物(1)



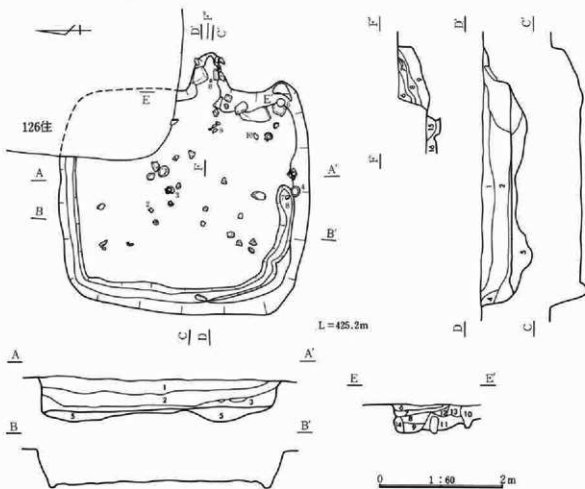
0 1:3 10cm

126号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	土師器 甕	不明	22.0・ - ・ - 小片	白〜灰色細砂粒 普通 褐色	口縁部は横かに開き気味に立ち上り、上位で開く。口唇部外面に一条の沈線が巡る。特い「コの字」状を呈す。	
②	須恵器 短頸甕	不明	28.0・ - ・ - 頸部〜口縁部3/4	白〜黒色細砂粒 還元 灰色	口縁部は外反し、口唇部直下に突帯が付けられる。	

127号住居跡 (写真図版85頁、128頁)

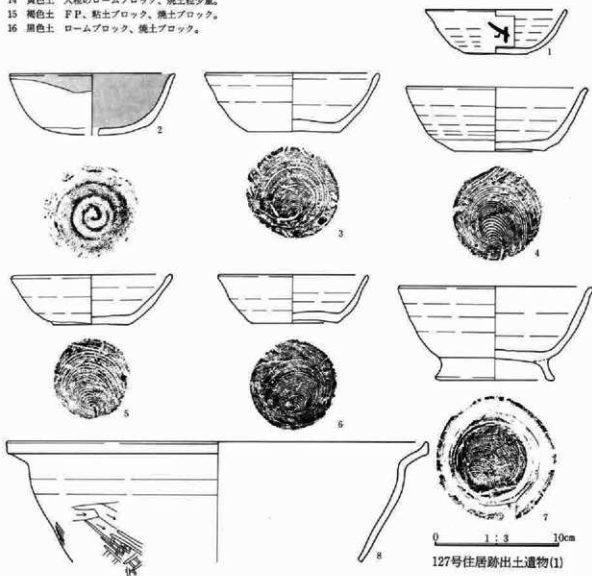
位置 18C-17グリッド 方位 N-86.5°-W 形状 402×340cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は60cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝は、幅15cm、深度6cmの溝が西・北・南壁下をコの字状に巡るが、東壁は大半が重複遺構に切られ明らかではない。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。

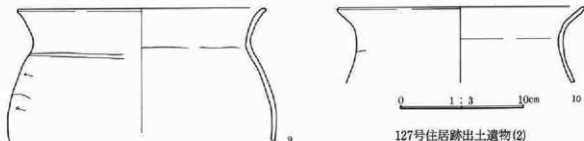


カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の隙間には粘土を詰め固定する。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道端部までは壁より59cmを測り、緩やかに立ち上がる。 掘り方 住居北西コーナー付近に径80~100cm、深度29.5cmの楕円形の床下土坑を1基検出する。 重複 126号住居（平安時代）と重複し、新旧関係は遺構確認時の埋土より

本遺構の方が古いと判断される。 遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少ないが、坏・椀類の完形品の遺存度が高い。遺物は南壁際に散乱し出土する。出土遺物中、椀（No7）・甕（No9、10）は床面直上付近、及びカマド内部よりの出土である。特筆すべき遺物として、体部に叩き目をもつ酸化焙焼成の鉢の出土がある。

- 1 暗褐色土 F P、ローム粒、炭化物少量。
 - 2 褐色土 F P、ローム粒、粘土ブロック。
 - 3 茶褐色土 F P、ローム粒、炭化物。
 - 4 黒色土 ローム粒少量。
 - 5 黒褐色土 ロームブロック多量。
- カマド
- 6 暗茶褐色土 F P、ローム粒、粘土粒。
 - 7 暗灰色土 F P少量、ローム粒、炭化物。
 - 8 茶褐色土 F P少量、ローム粒、粘土粒。
 - 9 灰色土 粘土、焼土、炭化物。
 - 10 暗茶褐色土 F P小粒子多量、ローム粒子。
 - 11 暗茶褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック、粘土。
 - 12 暗黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック、粘土ブロック。
 - 13 乳白色土 F P、乳白色粘土ブロック、ローム粒子。
 - 14 黄色土 大粒のロームブロック、焼土粒少量。
 - 15 褐色土 F P、粘土ブロック、焼土ブロック。
 - 16 黒色土 ロームブロック、焼土ブロック。





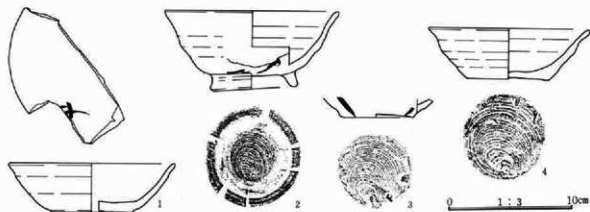
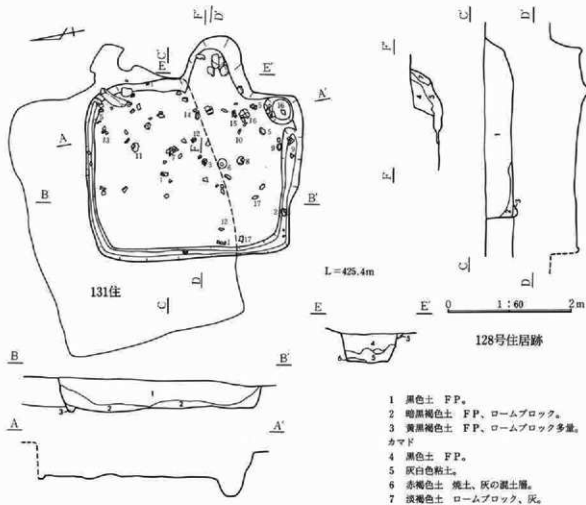
127号住居跡出土遺物(2)

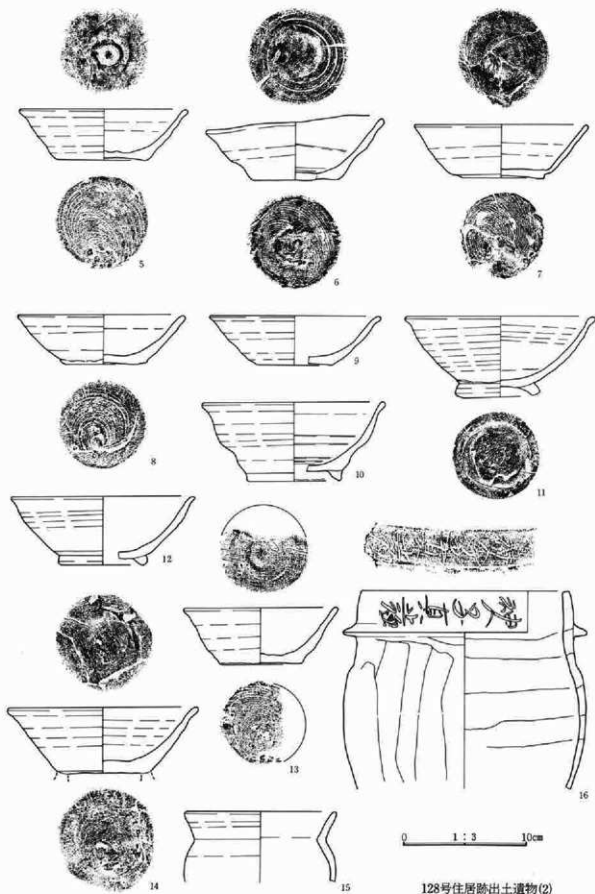
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	9.5cm	11.0・3.5・4.8 宛形	少量の白色細・粗砂粒。大磯 還元・軟質 灰白色	底部は右回転未切り未調整。外面体部噴 位で墨書あり。「有」か？。	墨書
②	土師器 坏	44.5cm	13.2・4.9・8.0 2/3	僅かな赤褐色円粗砂粒 良好 外-淺黄褐色 内-黒色	底部は丸底気味。体部から口縁部は僅か に丸みをもってやや開く。全面的に単位 の分らない位、丁寧に磨削され、内面 と口縁部外面一部のみ黒色気味。	胎土分析
③	須恵器 坏	10.0cm	14.0・4.7・7.4 1/2	少量の白色細砂粒・細砂、石英・ 長石の角粗砂粒。黒色円粗 砂粒 還元 灰白色	体部は深く、やや丸みをもって開く。 底部は左回転未切り未調整。	
④	須恵器 坏	21.0cm 壁際	14.5・5.1・7.2 口縁部一部欠損	白色細砂粒・細礫・中礫 還元 灰白色	体部は深く、下に丸みをもち、口縁部 まで直線的にやや開く。底部右回転未切 り未調整。	
⑤	須恵器 坏	床直	13.0・4.0・6.4 4/5	少粒の白色細砂粒、石英・長 石の角粗砂粒。僅かな小礫・ 中礫 還元 灰白色	体部下に丸みをもって開く。底部は右回 転未切り未調整。	
⑥	須恵器 坏	32.0cm 壁際	12.3・3.8・7.0 宛形	少量の白色細砂粒。僅かな長 石角粗砂粒 還元 灰色	体部は僅かに丸みをもって開き、上位が 少し括れる。底部は左回転未切り未調整。	
⑦	須恵器 椀	床直	15.6・7.4・9.6 1/4	少量の白色細砂粒・僅かな石 英の細礫 還元 外-灰色、内-灰白色	体部は深く、丸みもち、口縁部が僅か に外反する。高台は高目で、外反し、端 部は丸い。底部右回転未切り後周辺部は 高台貼付時難で。	
⑧	ロ便・ 酸鉢	カマド内 床直	34.0・ - ・ - 小片	少量の長石角粗砂粒、赤褐色 円粗砂粒 酸化 褐色	体部は大きく開き、口縁部は短く外反し、 口唇部は垂直な平坦面をもち、上につま み上げられる。口縁部は横断で、体部は 寛削り、裏で上に粗い並行の取き目がつく。	胎土分析
⑨	土師器 壺	カマド 9.5・21.5	20.0・ - ・ - 小片	白色から黒色の粗砂粒 普通 ぶい・褐色	口縁部は短く外反する。	
⑩	土師器 壺	床直 -4.5cm	20.0・ - ・ - 小片	細砂粒、角閃石細砂粒、赤褐 色円粗砂粒 普通 褐色	口縁部は、一辺立ち上り気味に外反し、 口縁部上位は外側にふくらみをもって開く。	

128号住居跡 (写真図版86~87頁、129頁)

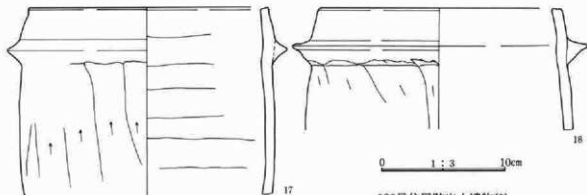
位置 17C-14グリッド 方位 N-87.5°-W 形状 350×255cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は42cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径40cm、深度27.5cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態は悪く、中央部に崩落した礫が出土し、住居内にも焼礫が散乱する。この出土した礫、及び掘り方調査において検出された礫設置痕より、袖部・柳道部には礫を並べた石組みのカマドであったと考え

られる。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道も壁より75cmを測り、急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部付近を浅く楕円形に掘りくぼめる。重複 131号住居(平安時代)と重複し、新旧関係は埋土断面より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多く、関係品の遺存度が高い。遺物は住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、坏(No.4、8、13)・小形甕(No.15)・羽釜(No.16)は床面直上付近、及び床下よりの出土である。特筆すべき遺物として、口縁部に「神人子真丘神人□」と刻書された羽釜(No.16)の出土がある。





128号住居跡出土遺物(2)

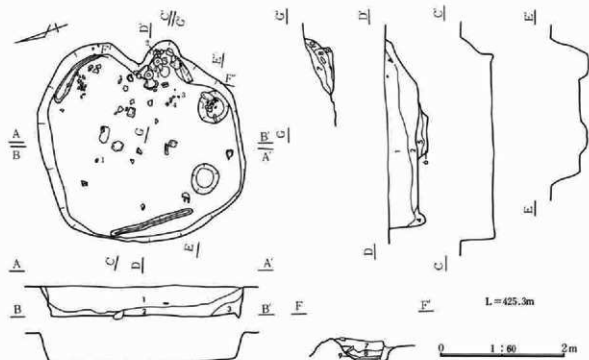


128号住居跡出土遺物(3)

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 杯	31.0cm 21.5cm	13.0・3.9・6.4 1/2	白色・石英細砂粒 還元(酸化気味) 外一黒色、内一に よい黄褐色	内面体部に墨書あり。10住の6と胎土・ 刷形が類似しており、墨書の筆跡も似て いるので「名」の可能性が高い。	重複131住 の遺物の可 能性有
②	須恵器 碗	17.0cm	13.8・6.3・6.0 体～口縁部2/3欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元、 軟質 黄灰色	底部は右回転余切り後、周辺部は高台粘 付時の態で、外面体部に墨書があるが、 判読不可。	墨書
③	須恵器 杯	31.5cm	- - - 5.6 底部～体部下位	多量の白色・石英粗砂粒 還元(酸化気味) 淡黄色	右回転余切り未調整、外面体部2ヶ所に 正位で墨書があるが、欠けているため判 読不可。	墨書
④	須恵器 杯	40.0cm	12.9・4.0・6.5 口縁部一部欠損	白色細砂粒、石英・長石の粗 砂粒・細礫 酸化焼成気味 灰黄色	体部にはクロロ目が顕著で、口縁部は外 反する。器内は厚手で、内面体部の立ち 上りは緩やか。右回転余切り未調整。	
⑤	須恵器 杯	床直～ 31.5cm	13.5・4.0・7.0 口縁部一部欠損	白色細・粗砂粒、石英粗砂粒 還元(酸化気味) 灰黄褐色	体部は直線的に開くが、クロロ目が強く 残る。右回転余切り未調整。	
⑥	須恵器 杯	-11.5cm 廻り方	14.3・4.6・7.0 完形	少量の白色細砂粒 還元(酸化気味) 黄灰色、内側は灰白色	全体的に歪んでいる。内面は回転態で だが、工具の先端で抉られたものか縞線状 に沈線が数カ所通る。外面体部下位は 所々指痕による態で、右回転余切り未調 整。底部中央には粘土をつめて軽く撫で た補修痕がある。	
⑦	須恵器 杯	-3.5cm 廻り方	13.9・4.0・6.4 口縁部・底部の一 部を欠損	白色細砂粒、赤褐色円粗砂粒 還元 灰白色	底部が円板状にやや突出する形に体部は つけられ、内面底部と体部の境は明瞭で、 底径よりも内底径が広い。右回転余切り 未調整。	131住の遺 物と思われ る。
⑧	須恵器 杯	12.0cm	13.4・3.9・6.9 2/3	白色細・粗砂粒、少量の石英・ 長石の細礫 還元 灰白色	体部はほぼ直線的に開き、器内は薄手。 体部立ち上り部分は指痕による態で、内 面は同心円状の態で、底部は右回転余切 り未調整。	
⑨	須恵器 杯	床直 3.0cm	13.2・3.9・6.0 1/2	白色細・粗砂粒、石英粗砂粒 還元、軟質 黒色、灰白色	底径は口径の1/2以下と小さく、体部はほ ぼ直線的に開き、口縁部は僅かに外反す る。内面は底部から緩やかに立ち上る。 底部は右回転余切り未調整。	
10	須恵器 碗	2.0-16.5・ 22.0cm	14.6・6.3・7.4 1/4	白色細・粗砂粒 還元(酸化 気味) により褐色	体部は凹凸が著しく、口縁部は外反する。 体部から底部内面には数条の沈線がみら れる。	
⑪	須恵器 碗	20.5cm	15.3・6.4・6.8 口縁部の大半を欠 く	白色細砂粒、多量の石英の粗 砂粒・細礫 還元、軟質 灰白色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。 高台厚手。回転余切り、方向不明。底部 内面とは同高台径の重ね焼痕あり。	胎土分析

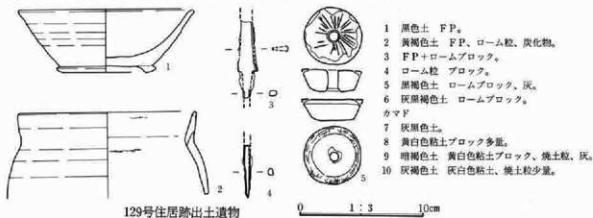
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
12	須恵器 椀	7.0cm 7.5cm	14.6・5.4・7.1 1/5	白色・石英の細・粗砂粒 酸化 におい橙色	体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。	
⑬	須恵器 杯	カマド 床直	12.2・4.5・6.5 1/3	白色・石英細・粗砂粒 少量 の8mm前後の塊 還元(酸化 気味) 灰黄褐色	体部はやや凹凸があり、体部立ち上り部分は強く磨かれている。底部は右回転糸切り未調整。	
⑭	須恵器 椀	床直 11.5cm	15.3・5.2・7.6 口縁部一部・高台 部欠損	白色細・粗砂粒・細・中粒 石英細・粗砂粒細塊 還元(酸 化気味) 明赤褐色・明黄褐 色	体部は直線的と聞くと、内面は底部から緩やかに立ち上る。口縁部は僅かに外反、器内は厚く、口縁部に向かってやや薄くなる。右回転糸切り後周辺部は高台貼付時の態で。	
⑮	須恵器 小型壺	2.5cm	12.1・ - ・ - 胴上位〜口縁部 1/3	白色・石英粗砂粒 酸化 橙色	胴部は上位に丸みをもち、頸部は「く」の字状に括れて、口縁部は直線的である。ロクロ整形。	
⑯	須恵器 羽釜	床直 1.5cm 16.0cm	16.6・ - ・ - 胴中位〜口縁部 1/2	多量の白色・石英細・粗砂粒、 細粒 還元、軟質 灰黄色	胴部上位にややふくらみをもち、胴の部分から口縁部は直立する。胴は比較的小さく、指面痕が残る。外面胴部は上方への寛削り。外面口縁部横位で焼成前の刻書あり。「神人子真氏神人口」	刻書
⑰	須恵器 羽釜	7.0cm 15.0cm 31.5cm	18.4・ - ・ - 胴部中位〜口縁部 1/10	白〜灰色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 黄灰色	胴はやや小さいが丁寧に付けられている。胴部外面は上方への寛削りだが、上位は削りの上を縦方向に磨でている。口縁部内外面、胴部内面は横磨で。	
18	須恵器 羽釜	8.0cm 9.0cm	19.3・ - ・ - 胴部上位〜口縁部 1/4	白色・石英細・粗砂粒 酸化気味 におい褐色	胴は比較的大きく、口縁部と共に回転磨でにより正円形に近い。胴部外面は大きな単位の寛削りで胴下当たっている。内面は横磨で。	

129号住居跡 (写真図版87頁、129頁)



位置 16C-15グリッド 方位 N-83.0°-W 形状 321×254cmを測る隅丸方形のプランを呈するが、西壁はやや湾曲して張り出し、北東コーナーの一部も大きく外へ張り出すため、プランは不定形に近いものとなる。壁高は50cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝は、幅15cm、深度9cmの溝が北東コーナーの一部、及び西壁の一部に検出されるが、西壁下の溝はやや壁から離れ走る。柱穴 なし。

貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径50cm、深度13cmを測る。カマド 東壁の中央南寄りに設けられ、右側袖部には礫が残るが左側袖は設置の痕跡を残すに留まる。煙道部には礫はなく設置の痕跡もないことから、礫の使用は袖部のみであったと考えられる。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部は壁より40cmと極端に短く、急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部付近に径60~64cm、深度13cmの床下土坑を1基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片である。遺物は住居全面に散乱し出土する。



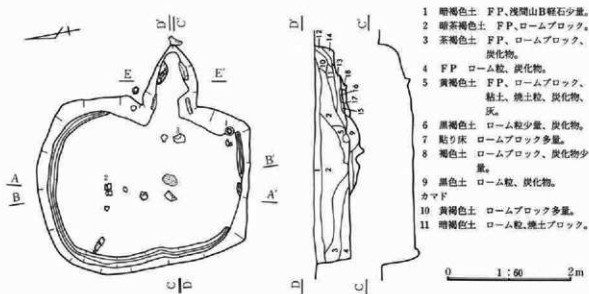
129号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・縁高・底径 口縁・縁高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	4.5~27.5 29.5 (カ)	14.0・5.0・7.8 高台~口縁部1/2	白色・石英細砂粒~細礫 還元(酸化気味) 灰黄色	体部はほぼ直線的に開く。底部は右回転 糸切り後、周辺部は高台粘付時の回転面 で。	
2	須恵器 小型壺	カマド	12.2・ - ・ - 小片	白色・石英細砂粒 還元(酸 化気味) ぶい黄褐色	コルク彫形と思われるが、回転力が弱い のかやや波がある。胴部内面は横方向瓦 腹で。	
③	鉄製品 刀子	19.0cm	茎元と先端を調査時欠損する。X線によると棘区・刃区が錆ぶくれの中に見える。刃は錆ぶくれがあり精 鍛造には見えない。残存長6.1+αcm。重9.7g。			
④	棒状鉄 製品	20.5cm	上方は調査時の欠損。断面形は方形をしており、鍛は板目割と錆ぶくれがあるため精鍛造には見えない。 そのため利器の茎が考えられる。残存長3.8+αcm。重2.1g。			
⑤	石製 紡車	床直付近	上径4.76・下径3.45・穴径0.74・厚さ1.68 重量59.1 石材 蛇紋岩(かんらん岩)		上面に放射状刻線、側面に刻字あれど判 読不可。	刻字

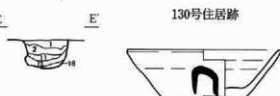
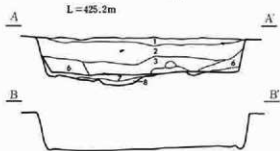
130号住居跡 (写真図版88頁、130頁)

位置 17C-17グリッド 方位 N-75.0°-W 形状 341×233cmを測る隅丸方形のプランを呈するが、北壁が相対する南壁に比べ長く、大きく湾曲し外へ張り出す。壁高は56cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面、及び南西コーナー付近を除き、幅17cm、深度6cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、遺存状態が悪く、壘体等原形を留めないが、袖部から煙道部にかけて礫を設置した痕跡が残ることから、石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道部も壁より90cmと長い。

掘り方 住居中央部を残し浅く掘りくぼめるが、床下土坑としてとらえられるものはない。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、遺物は住居中央部に散乱し出土する。出土遺物中、土師器碗(No.2)・壺(No.3)は床面直上よりの出土である。特筆すべき遺物として、坏(No.1)に「入」の墨書が2カ所見られる。



130号住居跡



- 12 暗褐色土 ローム粒子、焼土ブロック。
- 13 赤褐色土 焼土粒、ローム粒。
- 14 赤褐色土 13に類似。ロームブロック、ローム粒子。
- 15 灰黒色土 灰層。
- 16 灰白色粘土ブロック。
- 17 赤褐色土 焼土、灰。
- 18 黄褐色土 焼土、ロームブロック。

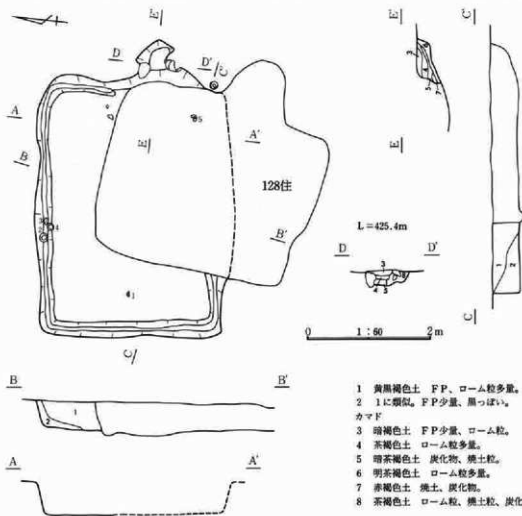


130号住居跡出土遺物

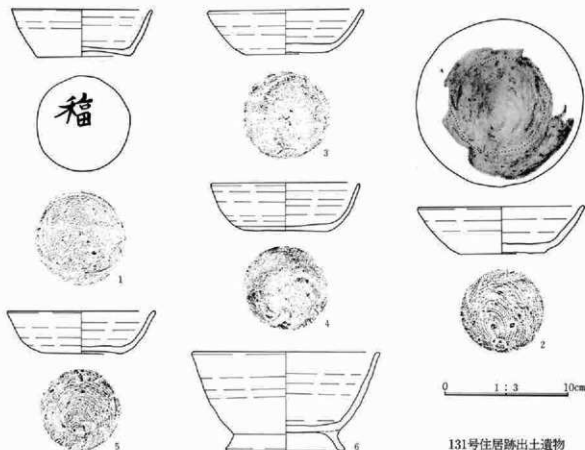
遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm)	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	12.5cm 壁密着	12.0・3.9・6.4 口縁部一部僅かに 欠損	白色細・粗砂粒、少量の石英 細砂粒 還元、焼し気味 外-黒色、内-黄灰色	底部は左回転未切り未調整。内面底部は 同心円状の凹凸がある。外面体部正位と 底部に墨書あり。「入」か？。	墨書
②	土師器 椀	床直	21.0・-・- 1/5	少量の白色粗砂粒 普通 褐色	体部は内彎気味に立ち上り、口縁部が反り 気味に直立する。口縁部横溝で、内面 は横溝で。	
③	須恵器 壺	床直	-・-・11.0 底部~胴部下位	白色・黒色・石英細・粗砂粒 還元 灰色	外面底部は無で、内面胴部段脚で、底部 は礎として使用、墨痕が付き、滑らか。	墨痕 転用礎

131号住居跡 (写真図版89頁、130頁)

位置 17C-14グリッド 方位 N-86.0°-E 形状 411×291cmを測る隅丸長形状のプランを呈し、壁高は51cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅15cm、深度5cmの溝がほぼ全周すると思われるが、南東コーナー付近は重複遺構に切られるため明らかではない。柱穴 なし。貯蔵穴 床面の残る範囲よりは検出されていない。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、南半を重複遺構に切られるため全体の形状は明らかではないが、残る部分に竈の設置がみられることから石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のライン上に位置すると思われ、煙道部も壁より48cmと短く、急



峻に立ち上がる。掘り方なし。重複 128号住居（平安時代）と重複し、新旧関係は埋土断面より本遺構の方が古いと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少ないが、完形品の遺存度は高い。遺物は住居北壁際に集中し出土する。出土遺物中、坏（No4）は灰面直上よりの出土であり、坏（No2・3）も同一箇所から出土しており、一括性が高いものと考えられる。特筆すべき遺物として、上記の坏（No2）は内面を転用碗としている。

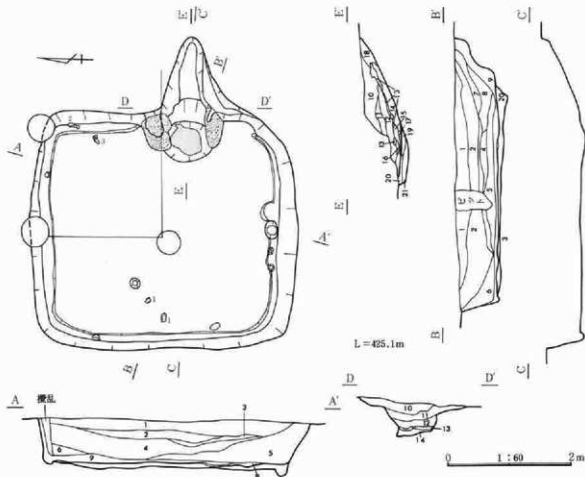


131号住居跡出土遺物

遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm)		断土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径	器高・底径			
①	須恵器 坏	38.0cm	11.0	3.8・7.3	少量の白色細・粗砂粒、僅かな石英 還元 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。外面底部に墨書あり。「福」か？。	墨書
②	須恵器 坏	12.5cm 壁際	13.0	3.7・6.8	白色・黒色の粗砂粒・細礫 還元（酸化気味） 灰黄褐色	底部は右回転糸切り未調整。内面底部は螺旋状の調整痕があり、その凸部に墨が残っており滑らか。体部は筆を整えたような墨痕。	墨痕 転用碗
③	須恵器 坏	8.0cm 壁際	12.4	3.5・6.6	白色細砂粒・細礫、灰色角細礫 還元 灰白色	体部は下位にやや丸みをもって開く。底部は右回転糸切り未調整。	
④	須恵器 坏	床直	12.0	3.8・6.6	白色細砂粒・細礫 還元 灰色	体部下位は大きく丸みをもち、あまり開かず口縁部に至る。底部は右回転糸切り未調整。	
⑤	須恵器 坏	22.0cm	12.0	3.4・6.4	多量の白色細砂粒 還元 灰色	体部の立ち上りは丸みをもって、やや開く。底部は右回転糸切り未調整。	粘土分析
⑥	須恵器 碗	12.5cm 21.5cm	15.0	7.8・9.5 1/3	白色細砂粒 還元、堅緻 灰色	体部は僅かにふくらみをもつが、口縁部は直線的である。底部は右回転糸切り後、周辺部は高台貼付時の回転痕。	

132号住居跡 (写真図版90頁、130頁)

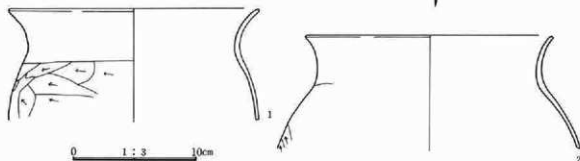
位置 13C-13グリッド 方位 N-87.0°-E 形状 427×378cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は62cmを測る。床面 床は2面検出され、第1次床面(下面)はローム地床。第2次床面(上面)はローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅16cm、深度8cmの溝がほぼ全周するが、床の上下面の差異は、深度の他ないものと考えられる。柱穴 なし。貯蔵穴 床面よりは検出し得ず、掘り方調査において南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径63~105cm、深度22cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられる。礫の出土はないが袖部において礫設置の痕跡(ピット)を検出するため、袖部においては礫を使用していたと考えられるが、煙道部は明らかではない。燃焼部は壁のラインより若干内側に位置し、袖部の張り出しは少ない。煙道も壁より117cmと長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 北東コーナー付近に径84cm、深度21cmの円形の床下土坑を1基検出する。重複 20号掘立柱建物跡(平安時代)と重複し、新旧関係は埋土断面より本遺構の方が古いと判断される。



- | | | |
|-----------------------------|-------------------------|--------------------|
| 1 暗褐色土 F P、浅間山B軽石、ローム粒。 | 9 黒褐色土 ロームブロック。 | 15 灰褐色土 焼土、粘土。 |
| 2 暗黄褐色土 F P、ローム粒、炭化物。 | カマド | 16 灰黒色土 灰多量。 |
| 3 黒褐色土 F P、ローム粒、炭化物。 | 10 黄褐色土 F P、ローム粒。 | 17 赤褐色土 焼土。 |
| 4 黄褐色土 F P、ローム粒多量。 | 11 黒褐色土 F P、ローム粒。 | 18 茶褐色土 灰、炭化物、ローム。 |
| 5 明黄褐色土 F P少量、ローム粒、ロームブロック。 | 12 黒褐色土 F P、ローム粒、粘土粒少量。 | 19 焼土。 |
| 6 黒褐色土 F P少量、炭化物。 | 13 黄色ローム。 | 20 貼り床 ロームブロック多量。 |
| 7 暗黄褐色土 F P少量、ロームブロック粒。 | 14 茶褐色土 ローム焼土、灰。 | 21 黒色土 ロームブロック。 |
| 8 黄褐色土 ローム、焼土、粘土、灰、炭化物。 | | |

遺物 遺構内より出土する遺物の量は極めて少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居壁際に散乱し出土する。出土遺物中、床面直上よりの出土はない。

132号住居跡出土遺物

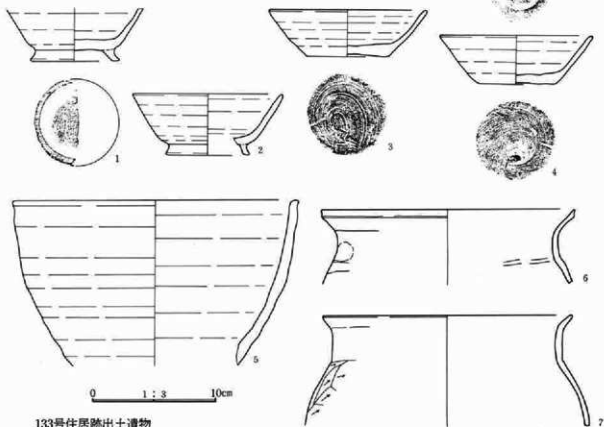
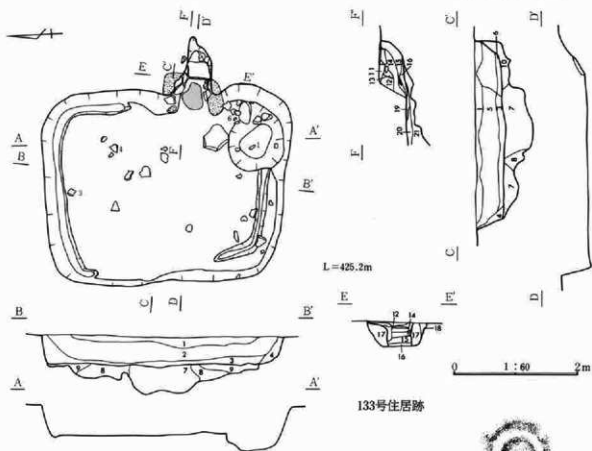


遺物 番号	類別 器種	出土位置	量目 (cm)		胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径	器高・底径			
①	土師器 壺	16.0cm	20.0	・ ・ ・ ・	白色細砂粒、角閃石細砂粒	口縁部は緩やかに外反する。口縁部は横 撫で。胴部上位は横方向寛明り。	
		18.5cm	口縁～胴上位3/4		普通 におい赤褐色		
②	土師器 壺	47.5cm	20.0	・ ・ ・ ・	白色細砂粒、少量の赤褐色円	口縁部は立ち気味に緩やかに外反する。 口縁部横撫で。胴部上位横方向寛明りの 後一部撫で。	
					粗砂粒 普通 におい赤褐色		
③	鉄製品 鏝	13.5cm	当遺跡出土の鏝の中では最も身巾のある大型鏝である。刃部に研出鈍は少なく使用の始まり段階と見られる。刃側に区があり柄の直径は3.1cmを思わせる。錆ぶくれ少なく精緻。残存長14.6cm、重43.8g。				

133号住居跡 (写真図版91頁、130頁)

位置 13C-15グリッド 方位 N-87.0°W 形状 400×310cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は52cmを測る。床面 床はローム混じりの暗褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、幅15cm、深度5cmの溝がほぼ全周するが、南壁から南西コーナー部にかけて壁よりやや離れて巡る。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径84～89cm、深度29cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄り to 設けられ、遺存状態は比較的良好で天井部の一部を残す。袖部・煙道部には礫を並べ、礫の隙間には粘土を詰め固定する。天井部は大形の礫を煙道部左右の礫に架け、橋状に設置する。燃焼部は壁のライン上に位置し、煙道部も壁より78cmと長く緩やかに立ち上がる。掘り方 住居中央部付近に径120×130cm、深度29cmの円形の床下土坑を1基検出する。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、坏 (No.4)・壺 (No.6) は床面直上付近よりの出土である。

- | | | |
|-----------------------|----------------------|----------------------|
| 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒子少量。 | 9 黒褐色土 黒色土にローム粒子多量。 | 15 暗褐色土 白色粘土、焼土、灰。 |
| 2 暗褐色土 1に類似、ローム粒子多量。 | 10 暗黄褐色土 ロームブロック、ローム | 16 灰黒色土 灰、炭化物。 |
| 3 暗褐色土 ローム粒子多量。 | 粒子、粘土ブロック。 | 17 明茶褐色土 ローム粒子、粘土粒子、 |
| 4 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック | カマド | 焼土粒子少量。 |
| 5 暗褐色土 粘土粒子、粘土ブロック。 | 11 黒色土 F P。 | 18 暗黄色土 ローム土に若干黒色土が混 |
| 6 暗褐色土 粘土粒子、粘土ブロック。 | 12 淡褐色土 F P、ローム粒。 | じる。 |
| 7 黒褐色土 ロームブロック少量。 | 13 黄白色 粘土ブロック。 | 19 暗茶褐色土 ローム粒、灰、焼土粒。 |
| 8 暗黄褐色土 ロームブロック多量。 | 14 黒色土 F P、灰少量。 | 20 暗黄褐色土 ロームブロック、粘土。 |
| | | 21 黒色土 F P少量、ローム粒。 |

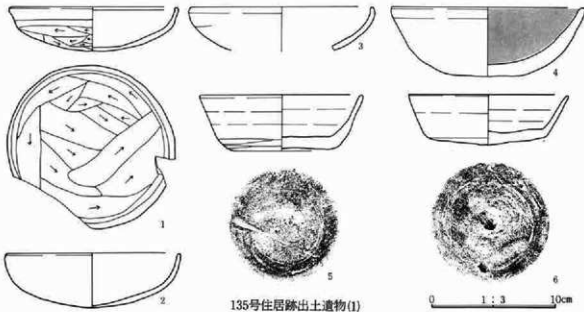
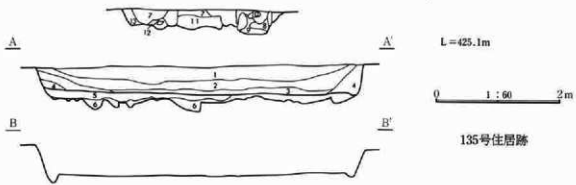
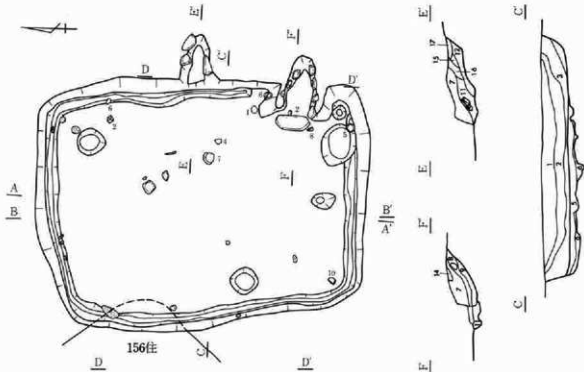


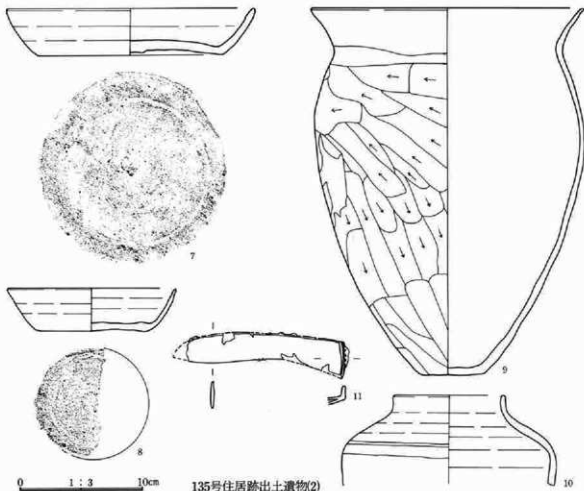
遺物番号	種別	出土地	量目 (cm) 口徑・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・器形の特徴	備考
①	須恵器 椀	-8cm 貯蔵穴	- - - 7.0 高台～体部下位 1/2	白色岩片(基質)中織・僅か 石英の細粒 還元 灰白色	体部は直線的、高台は底径の少し内側に 貼付される。断面は角形を呈し、接地面 は平坦である。底部は回転糸切り、周辺 部は高台貼付時に回転擦で。	
2	須恵器 椀	埋土	12.0・4.9・6.6 小片	少量の白色細砂粒、石英の細 粒 還元 灰色	体部は直線的に開く。高台は底径の内側 に付き、外反し、端部は丸みをもつ。	
③	須恵器 坏	13.0cm	12.6・3.7・6.5 2/3	白色胎・粗砂粒、赤褐色円粗 砂粒 還元(酸化気味)に ぶい・褐色	体部から口縁部まで直線的に開く。底部 は右回転糸切り未調整。	
④	須恵器 坏	2.0cm	12.2・3.9・6.0 2/3	白色胎・粗砂粒 還元(酸化 気味) ぶい・黄褐色	体部から口縁部まで直線的に開く。底部 は左回転糸切り未調整。	
5	須恵器 鉢	-9.5cm	23.0・- - - 小片	白色胎・粗砂粒・細粒、赤褐 色粗砂粒 還元 灰黄色	体部は口縁部が顕著で、やや丸みをも つ。口唇部は平坦面をもち、やや内傾す る。	
⑥	土師器 壺	床直	20.2・- - - 小片	白色細砂粒、石英・角閃石粗 砂粒 普通 明赤褐色	口縁部はやや内傾して立ち上り、上位が 開いて口唇部が上につまみ上げられ、外 面に弱い稜をもつ。	
7	土師器 壺	21.5cm	20.0・- - - 小片	白～灰色胎・粗砂粒、角閃石 の細砂粒 普通 褐色	口縁部は一垣直立し、上位が開く。「コ の字」状口縁を呈する。	

135号住居跡 (写真図版92頁、131頁)

位置 12C-17グリッド 方位 N-87.0°W 形状 535×400cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は55cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅15cm、深度14cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し、径55～61cm、深度14cmを測る。カマド 東壁のほぼ中央部、及び南東コーナー付近の2ヶ所に設けられ、この2つのカマドの新旧関係に関しては、南東コーナー付近のカマドが袖部を残しているのに対し、東壁中央部に設けられたカマドは壁溝により袖部が削平されている。このことにより、住居東壁中央部に設けられたカマドは古く(第1次カマド)、南東コーナー付近へ造り変えが行われたと考えられ、住居埋没前に使用されていたカマド(第2次カマド)は南東コーナー付近に設けられているものと考えられる。中央部の第1次カマドは煙道部の先端が残るのみで、全体の形状等は明らかではないが、煙道部には礫が残ることから、石組みのカマドであったと考えられる。焼部位置は明らかではないが、煙道は第2次カマドより長く延びる。南東寄りの第2次カマドは袖部・煙道部に礫を置く石組みのカマドで、礫を核に粘土を貼り構築されている。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部はやや張り出し、煙道部は壁より49cmと短く急峻に立ち上がる。掘り方 なし。重複 156号住居(弥生・古墳時代)と重複し、新旧関係は遺構確認段階の埋土より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的小さいが、完形品の遺存率は高い。遺物は住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、坏(No.5、7、8)・土師器坏(No.2)・甕(No.9)・鉄鉢(No.11)は床面直上、及びカマド内部、カマド袖上よりの出土である。

- | | | |
|--------------------------|-----------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 F.P.、浅間山B軽石、ローム粒。 | カマド | 12 茶褐色土 F.P.少量、ローム粒。 |
| 2 黄褐色土 F.P.少量、ローム粒。 | 7 暗茶褐色土 F.P.、ローム、炭化物。 | 13 明茶褐色土 F.P.少量、焼土、炭化物。 |
| 3 暗茶褐色土 F.P.、ローム粒、炭化物。 | 8 白色土 白色粘土、炭化物、焼土。 | 14 茶褐色土 粘土。 |
| 4 黒褐色土 F.P.、ローム粒。 | 9 茶褐色土 黒灰、焼土。 | 15 赤褐色土 焼土ブロック。 |
| 5 黄褐色土 ロームブロック。 | 10 白色粘土ブロック。 | 16 白灰褐色土 白色粘土ブロック、焼土。 |
| 6 黄褐色土 ローム主体。 | 11 黒褐色土 黒灰、ローム粒、炭化物。 | 17 暗灰色土 焼土、ローム粒、炭化物。 |





135号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	土師器 杯	カマド脇 床直	13.4・3.5・3.6 口縁部一部欠損	僅かな白色細砂粒、石英角粗砂粒 普通 におい褐色	丸底。口縁部は立ち上り、中位がやや平括れて口唇部は内彎する。口縁部は横無で、僅かに無調整な部分を残し、底部は不定方向寛削り。	
②	土師器 杯	カマド 床直	14.0・4.3・5.0 1/4	少量の白色細砂粒 普通 褐色	外面の大部分は釉が付着し黒色を呈す。丸底体部は丸みをもって立ち上り、やや内彎する。口縁部横無で、体部は無調整、底部は不定方向寛削り。	胎土分析
③	土師器 杯	埋土	14.6・ - - - 小片	少量の赤褐色粗砂粒、角閃石小片 普通 黒色がかったにおい褐色	丸底、口縁部は内彎する。口縁部は横無で、無調整帯をもち、底部は不定方向寛削り。	
④	土師器 杯	15.1cm	15.4・5.5・5.0 1/2	多量の白色細・粗砂粒・結核、少量の赤褐色粗砂粒 普通 外におい褐色、内黒色	半球形状を呈し、器内は非常に厚い。口縁部が僅かに直立する。口縁部内外面横無で、体部内面は単位3cm程の無でのような磨きで黒色処理される。体部外面は削りの後大雑把な磨き、挟れた部分は削りが残っている。	
⑤	須恵器 杯	1.5cm	13.2・4.4・8.2 完形	白色細砂粒、多量の黒色粗砂粒 還元 灰色	底部と体部の境は丸みをもち、体部から口縁部は直線的で、あまり開かない。底部は器内が厚く、口唇部に向って薄くなる。底部から体部下位は滑転無で。	

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑥	須恵器 坏	30.0cm	12.8・4.0・9.6 完形	白色粗砂粒・細礫・中礫 還元(酸化気味) ぶい橙色	底部はやや突出気味で、体部は直線的で、口唇部に向って器内は薄くなる。底部中心に回転切り後の痕跡を残し、回転軸で整形される。	
⑦	須恵器 坏	4.0cm	20.0・3.7・15.0 3/4	多量の白色細砂粒・僅かな細礫 還元 灰白色	底部は回転切り。底径の1.5cm程内側に、粘土紐を足した痕跡がある。全面回転軸で。	
⑧	須恵器 坏	2.0cm	13.6・3.4・8.6 1/2	白色細砂粒・黒色粗砂粒 還元 灰白色	体部はやや丸みをもって開く。器高は低い。底部は回転切り後、回転軸で。	
⑨	土師器 甕	1.5cm	21.7・30.1・5.3 胴部部分的に欠損	多量の白～灰色細砂粒 普通褐色、口縁部を除く外面は極暗赤褐色	底部は小さな平底。胴部は僅かな丸みをもって開き、上位が大きく丸みをもつ。口縁部は大きく開く。	
⑩	須恵器 短頸甕	9.0cm	9.0・ - ・ - 小片	僅かな白色細砂粒、黒色円粗砂粒 還元 灰白色	胴部は丸みをもって緩やかに窄まり、口縁部は直立する。ロク口器形。	
⑪	鉄製品 鏝	床面	先端部をわずかに欠損。全長13.8cm。全体に錆化が顕著で6点に割れる。鏝目の錆化に斜線し鋭角を思わせる。重31±0g。			

136号住居跡 (写真図版93頁、131～132頁)

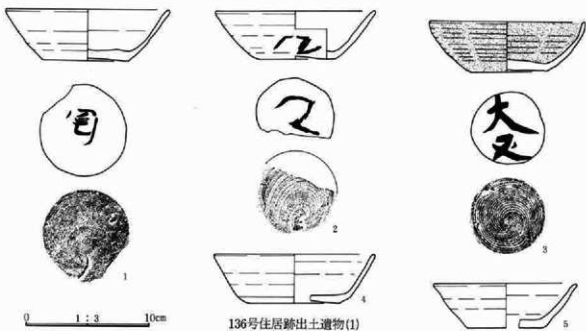
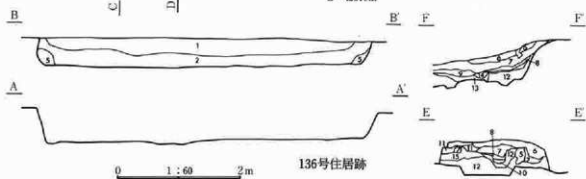
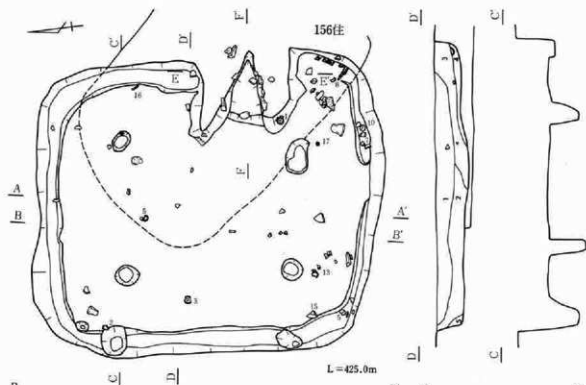
位置 12C-15グリッド 方位 N-85.5°-W 形状 528×461cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は57.5cmを測る。床面 床はローム地床で平坦である。壁溝はカマド前面を除き、幅23cm、深度7cmの溝がほぼ全周する。柱穴 床面に4穴、西壁に接し壁柱穴2穴の計6穴を検出し、径34～56cm、深度34～61cmを測る。床面上の柱穴は住居各コーナーを結ぶ対角線上に位置し、壁柱穴はこの床面上の柱穴の延長軸上に位置する。壁柱穴を含む6穴の柱穴の平面上のプランは、東西方向に290×320cmを測る長方形を呈し、柱穴間は東西方向に110～215cm、南北方向に265～280cmを測る。貯蔵穴 なし。カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、遺存状態は比較的良好であり、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の隙間には粘土を詰め固定する。袖部自体は地山を掘り残すことで造り出す。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、袖部の張り出しは多く、煙道部は壁より突出しない。掘り方 径86～162cm、深度19～49cmの楕円形を呈する床下土坑を6基検出する。重複 156号住居跡と重複し、新旧関係は遺構確認時の埋土状況より本遺構の方が新しいと判断される。備考 前記の柱穴を含めた住居の形態は、51号住居跡に類似する。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土する。出土遺物中、坏 (No 7、11)・石製紡錘車 (No 17) は床面直上、及び付近よりの出土である。特筆すべき遺物として、「大又」と黒色の土器 (No 3) の底部に墨書され、一目目立たない墨書であり、所有・所在を明示するために記されたものとなれば、無意味に思われる。その他、「乙」・「四」と墨書された坏の出土がある。

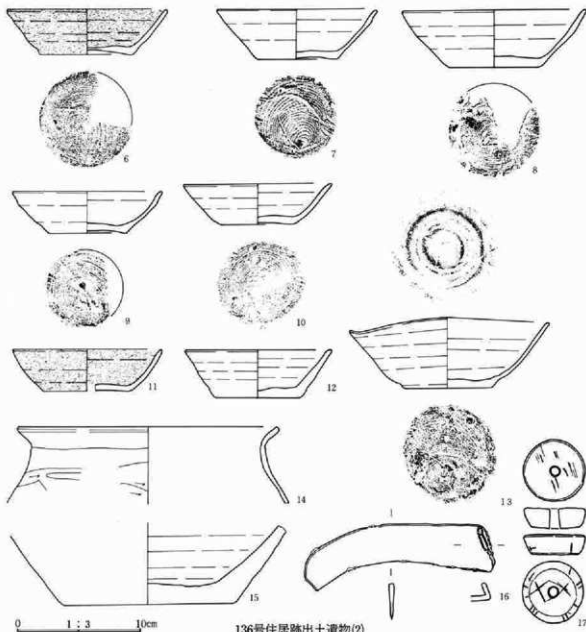
- 1 暗褐色土 大粒のF P多量、ローム粒子少量。
- 2 暗茶褐色土 F P少量、ローム粒子多量。
- 3 暗茶褐色土 焼土粒、炭化物多量。
- 4 暗茶褐色土 3+多量の粘土ブロック。
- 5 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子。

カマド

- 6 灰褐色土 F P、焼土、灰。
- 7 白色粘土 強粘性、焼土の混入。
- 8 焼土 灰の混入。
- 9 黒色灰層 粘土、焼土。
- 10 黒灰層。
- 11 暗褐色土 ローム粒少量、炭化物。

- 12 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量。
- 13 12に類似。ロームブロック少量。
- 14 赤色土 焼土ブロック、粘土ブロック層。
- 15 淡黄褐色土 ローム層、粘土ブロック少量。





136号住居跡出土遺物(2)

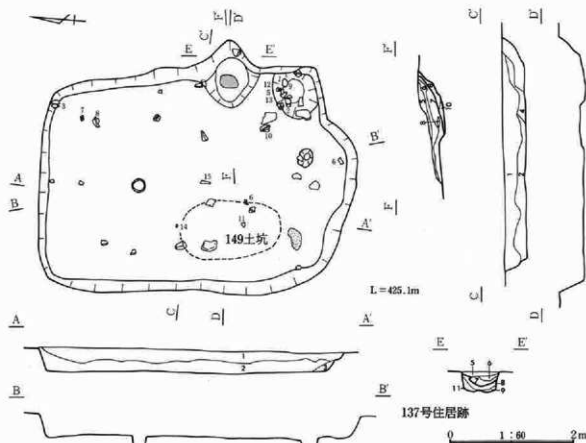
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	-8.0cm	12.9・4.0・6.7 体～口径3/4欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元、 軟質 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。外面底部に 墨書あり「四」と読める。	墨書
②	須恵器 坏	14.5cm	12.6・3.8・6.0 底部～口径部1/3 残存	白～灰色・石英細・粗砂粒還元 (酸化気味) におい黄褐色	底部は左回転糸切り未調整。外面体部側 位、底部に墨書あり。「乙」か？。	墨書
③	須恵器 坏	6.0cm	12.2・4.0・6.0 口径部の3/4を欠 損	白色細砂粒、僅かな石英細砂 粒 還元、焼し焼成 黒色	底部、回転糸切りの中心が中央部にある。 体部は内彎気味。外面底部に墨書、「大又」 と読める。	墨書
4	須恵器 坏	埋土	13.0・3.9・7.0 小片	少量の白色細・粗砂粒 還元 灰色	体部下位は回転製用りによって段をもち、 口径部まで直線的に開く。底部は回 転糸切り後周辺部回転製用り。	

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
㉕	須恵器 杯	5.5cm	11.6・3.5・6.0 1/4	少量の白色細砂粒・細礫 還元 灰白色	体部は直線的に開き、口唇部が僅かに外反する。底部は回転未切り未調整。	
㉖	須恵器 杯	5.5cm	12.4・3.5・7.6 1/3	少量の白色細砂粒、赤褐色円 粗砂粒 焼し焼成 黒色 外底部にはよい黄褐色	体部はクロロ目が目立つが、直線的に開く。底部は右回転未切り未調整。	
㉗	須恵器 杯	3.0cm 床直	13.0・4.0・6.8 完形	白色細・粗砂粒・細礫 還元 (酸化焰気味) 灰褐色	体部は直線的に開くが、上位がややふくらみをもつ。底部は左回転未切り未調整。	
㉘	須恵器 杯	12.0cm	14.7・4.5・7.0 1/3	少量の白色細・粗砂粒・僅かな 石英の粗砂粒、赤褐色粗砂 粒 還元 (酸化焰気味) 黄 褐色	体部上位の器内が肥厚し、外側にふくらむ他は直線的で、大きく開く。器内は薄手。底部は未切り痕が乱れているが、回転方向は左である。	
㉙	須恵器 杯	埋土	12.0・3.3・6.0 1/4	白色細砂粒 還元 外一灰色、内一灰白色	体部は上位が屈折して、口縁部が僅かに外反する。底部は右回転未切り未調整。	
㉚	須恵器 杯	3.0cm	12.0・3.2・5.8 1/3	白色細砂粒、灰色細礫 還元 灰白色	体部から口縁部まで直線的に開く。底部は右回転未切り未調整。	
㉛	須恵器 杯	床直	12.0・3.3・7.0 1/4	白色細砂粒 焼し焼成 黒色	体部は僅かに丸みをもって開く。底部は右回転未切り未調整。	
㉜	須恵器 杯	掘り方 埋土	11.9・3.8・7.0 1/4	少量の白色細砂粒、僅かな黒 色細礫 還元 灰色	体部は直線的に開き、器内は厚手。	
㉝	須恵器 杯	4.0cm 20cm	16.0・5.6・7.2 体部の一部欠損	少量の白～灰色粗砂粒・長石 の角細礫 還元(酸化焰気味) 浅黄色	体部は下位に僅かに丸みをもち、口縁部まで直線的に開く。器内は薄手で歪みが著しい。底部は未切り痕が乱れているが、回転方向は左である。	
㉞	土師器 壺	掘り方	21.0・ - ・ - 口縁部1/3	白色細砂粒、赤褐色円粗砂粒 普通 明赤褐色	口縁部は内傾し、上部で外反する。口唇部は少し幅をもち、中央が凹む。	
15	須恵器 鉢	14.5cm	- ・ - ・ 14.0 底部～胴部下位 1/3	白色細・粗砂粒、僅かな黒色 粗砂粒 還元 灰白色	平底、胴部は直線的に開く。底部は一定方向の寛縁で。	
㉟	鉄製品 鏝	10.0cm		全形態を知りうる数少ない例である。全体に錆ぶくれがなく精緻造を思わせる。使用が浅く、顕著な研出し面は見られない。全長15.4cm、重60.8g。		
㊱	石製 紡錘車	床直付近		上径4.88・下径3.85・穴径0.68・厚さ1.56 重量67.0g。 石材 蛇紋岩(かんらん岩)	下・側面に「十」の刻字。58号住居-2に類似。曹滅大。	

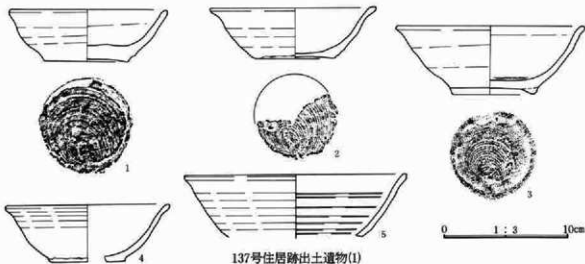
137号住居跡 (写真図版95頁、132頁)

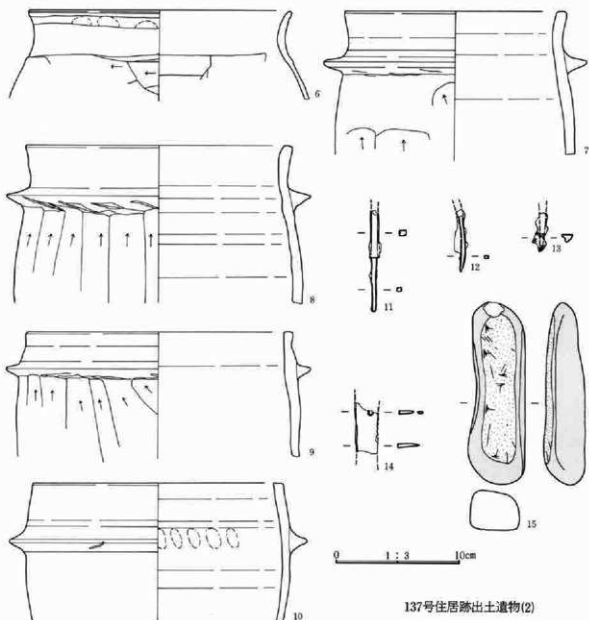
位置 9C-15グリッド 方位 N-87.0°-E 形状 505×338cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、南壁の西側3分の1程大きく外側へ張り出す。壁高は28cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はなし。柱穴 2穴検出され、径20～29cm、深度27～51cmを測る。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、楕円形を呈し、径66～85cm、深度12.5cmを測る。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を用いず粘土のみで構築されていると考えられる。燃焼部は壁のライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく、煙道部も壁より40cmと短く急峻に立ち上がる。掘り方 なし。重複 149号土坑(縄文時代)と重複し、新旧関係は検出状態、及び埋土より本遺構の方が新しいと判断される。

遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居中央部、及び貯蔵穴周辺に散乱し出土する。出土遺物中、坏 (No.1、2)・椀 (No.5)・羽釜 (No.8)・砥石 (No.15) は床面直上付近よりの出土である。



- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒子少量。 | 6 黒褐色土 灰白色粘土。 |
| 2 暗茶褐色土 F P少量、ローム粒子、ロームブロック。 | 7 暗褐色土 灰白色粘土ブロック、粘土少量。 |
| 3 暗茶褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量。 | 8 橙褐色土 粘土、焼土の混土。 |
| 4 淡黄褐色土 F P少量、粘土、ローム粒子。
カマド | 9 黄褐色土 ローム。 |
| 5 黒褐色土 F P少量。 | 10 灰白色粘土 強粘性。 |
| | 11 暗灰褐色土 ローム粒、灰、粘土、炭化物。 |





137号住居跡出土遺物(2)

遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	4.0cm	12.5・4.6・6.7 体部→口縁部1/4 欠損	僅かな灰色・角閃石の粗砂粒 還元、軟質 灰黄色	体部は丸みをもち、器肉は厚手。底部は右回転糸切り未調整。一部分糸を一担入れた部分が欠けている所がある。	
②	須恵器 環	3.0cm	13.4・4.0・6.4 1/3	白色・石英細砂粒 還元(酸化気味) 暗灰黄色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
③	須恵器 碗	25.0cm	15.0・5.4・6.3 2/3	白色細砂粒、多量の石英細粗砂粒・細礫 還元、軟質 灰白色	体部は丸みをもち、口縁部がやや外反する。口縁部内面には撫で調整の跡が残る。底部には同高台後の重ね焼成がみられる。底部は右回転糸切り後、周辺部は高台貼付時の回転痕。	
④	須恵器 環	埋土	13.1・4.4・6.0 1/3	僅かな長石・石英の粗砂粒 還元(軟質) 灰白色	体部は丸みをもち、口縁部は少し外反する。底部は糸切りだが、回転方向は不明。	

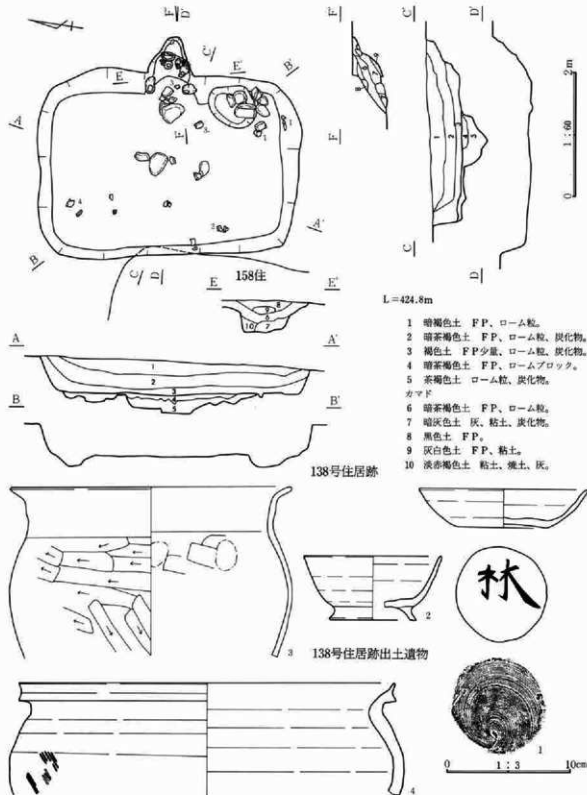
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑥	須置器 碗	3.5cm	17.8・ - ・ - 小片	白色細・粗砂粒。多量の石英の粗砂粒・細粒 酸化 橙色	体部はやや丸をもつ。口縁部は僅かに外反し、口唇部は外側に5mm程度の幅をもち、中央がやや凹む。体部内面には数条の沈線が通る。	
⑦	土師器 壺	10.0cm 10.5cm	20.9・ - ・ -	白色・石英の粗砂粒。僅かな赤褐色円粗砂粒 酸化 ぶい橙色	口縁部は緩やかに外反する。口縁部上位には指痕痕が残る。口唇部は一条の沈線が通る。	
⑧	須置器 羽釜	13.0cm 1.5cm	17.6・ - ・ - 胴部上位～口縁部 1/3	白色細砂粒、石英の粗・粗砂粒 還元、やや軟質 灰白色	蹄は比較的大きく、丁寧に回転調整されており正円形である。口縁部内外面、胴部内面は回転跡で、胴部外面は上方への彫削りだが上位は部分的に横方向に撫でられている。	
⑨	須置器 羽釜	1.5cm	21.2・ - ・ -	多量の白色・石英の粗粗砂粒・細粒、赤褐色円粗砂粒 還元(酸化気味) 暗褐色	蹄は比較的大きく、丁寧に付けられ正円形である。蹄の下面も丁寧に撫でられているが、胴部上方の彫削り時に荒が当たっている。内面は回転跡で、胴部内面は器壁が荒れている。	
9	須置器 羽釜	8.0cm 11.0cm	21.9・ - ・ - 胴部～口縁部1/4	白～灰色・石英細・粗砂粒 還元(酸化気味) 暗灰黄色	口縁部はやや内傾して外反する。口唇部は水平な平ら面をもつ。蹄は比較的大きく、丁寧に撫でられ正円形をなす。胴部外面は上方への彫削り、口縁部内外面回転跡で、内面胴部は斜め横方向の荒撫で。	
10	須置器 羽釜	6.5cm	19.9・ - ・ - 胴部上位～口縁部 1/4	白色細砂粒、石英細・粗砂粒、黒色円粗砂粒 還元、やや軟質 灰色	蹄は比較的大きく、丁寧に付けられている。蹄位置の内面には指痕圧痕がみられる。口縁部内外面胴部内面は回転跡で、胴部外面は、縦方向に撫でられており、その下に砂粒が横・縦方向に動いた痕跡がみられるが、単位は不明。	
⑩	鉄製品 刀子	7.0cm		基底は旧時、先端は調査時の欠損。全体に砥目割があり粗鍛造を思わせる。基と莖との間は区となる。残存長8.0+acm。重7.5g。		
⑪	鉄製品 釘か	15.0cm		図上方は調査時の欠損。先端部は鋭利尖る。全体に錆化はなほだしく粗鍛造である。断面形は方形を呈す。残存長48+acm。重1.6g。		
⑫	鉄製品 釘か	埋土		図上方は調査時の欠損。先端部に木質が付着するため釘か。全体に錆ぶくれがあり粗鍛造を思わせる。残存長3.0+acm。重3.8g。		
⑬	鉄製品 刀子	6.0cm		両端部は調査時の欠損で、図上方に目割穴と思われる小穴あり。棟側は厚く刀側は刃を獲しているため刀子ではないかも知れない。錆化腐蝕のため粗鍛造。残存長4.1+acm。重3.9g。		
⑭	石製品 磁石	床直		自然石(河原石)利用磁である。使用面は図表面側がわずかに研磨跡を受けているように見えるがはっきりしない。石材は粗粒安山岩。		

138号住居跡 (写真図版96頁、132頁)

位置 10C-18グリッド 方位 N-82.5°-E 形状 423×310cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、壁高は71cmを測る。床面 床はローム混じりの暗茶褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 南東コーナー付近に検出され、円形を呈し径67cm、深度18cmを測る。

カマド 東壁のほぼ中央に設けられ、袖には礫を配置し、カマド内、及び住居内より多量の礫が出土することから、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のライン上より内側に位置し、煙道部は壁より58cmと比較的長く、緩やかに立ち上がる。掘り方 住居中央部付近、及び

北壁寄りに径76~198cm、深度17~26cmの楕円形の床下土坑を2基検出する。重複 158号住居（古墳時代）と重複し、新旧関係は遺構確認時の埋土状況より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 出土する遺物の量は極めて少なく、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面より散乱し出土するが、床面直上よりの出土はない。特筆すべき遺物として、坏（№1）に「林」の墨書がある。



L=424.8m

- 1 暗褐色土 F.P.、ローム粒。
 - 2 暗茶褐色土 F.P.、ローム粒、炭化物。
 - 3 褐色土 F.P少量、ローム粒、炭化物。
 - 4 暗茶褐色土 F.P.、ロームブロック。
 - 5 茶褐色土 ローム粒、炭化物。
- カマド
- 6 暗茶褐色土 F.P.、ローム粒。
 - 7 暗灰色土 灰、粘土、炭化物。
 - 8 黒色土 F.P.
 - 9 灰白色土 F.P.、粘土。
 - 10 淡赤褐色土 粘土、燻土、灰。

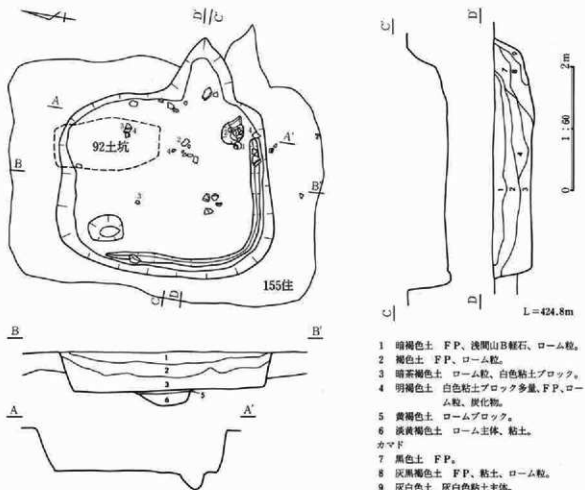
138号住居跡

138号住居跡出土遺物

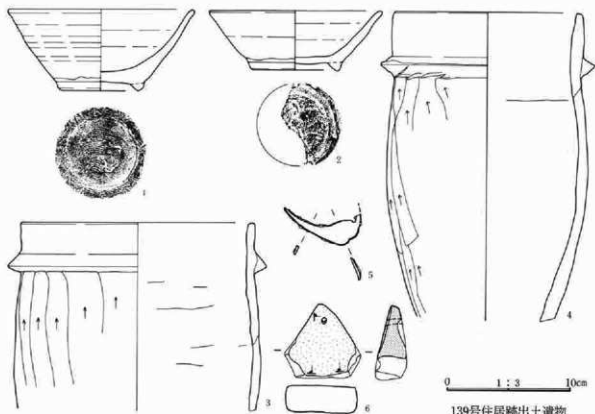
遺物番号	種別器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坪	7.5cm 40.0cm	13.3・3.0・7.1 体部～口縁部1/2	白色細・粗砂粒、黒色粗砂粒 還元 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。外面底部「林」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 椀	21.5cm	11.0・5.1・7.0 1/4	白色細砂粒、赤褐色円細砂粒 酸化焙煎味 赤褐色	体部は立ち上りに丸みをもち、口唇部まで直線的に開く。高台は外反し、接地面は平坦である。底部は回転糸切り未調整。	
③	土師器 壺	25cm 44.5cm	22.3・ - ・ - 胴上位～口縁部 1/3	白色細・粗砂粒 普通 赤褐色	口縁部は「コ」の字状を呈すが、やや崩れがみられる。	
④	須恵器 広口壺	30.0cm	30.0・ - ・ - 小片	少量の白色細砂粒・赤褐色円 粗砂粒、石英角粗砂粒 還元 (酸化焙煎味) 灰黄色	口縁部は短く外反し、口唇部は幅広く、中央がぼれ、上端がつまみ上げられる。ロクロ整形。胴部は平行向きがいくつかみられるが、横断でされている。	

139号住居跡 (写真図版97頁、133頁)

位置 7C-16グリッド 方位 N-88.0°-E 形状 350×277cmを測る隅丸方形のプランを呈し、壁高は72cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝は南西壁側に、幅14cm、深度6cmを測る溝がL字状に巡る。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には隙を用いず粘土のみで構築され、遺存状態は悪い。燃焼部は壁のライン上より若干外側に位置し、袖部



の張り出しは少なく、煙道部は壁より93cmと長い。掘り方 住居中央部付近に径68cm、深度20cmの円形の土坑を1基検出する。重複 155号住・92号土坑と重複し、新旧関係は遺構確認時の埋土、及び埋土断面より本遺構の方が新しい。遺物 住居全面より散乱し出土する。

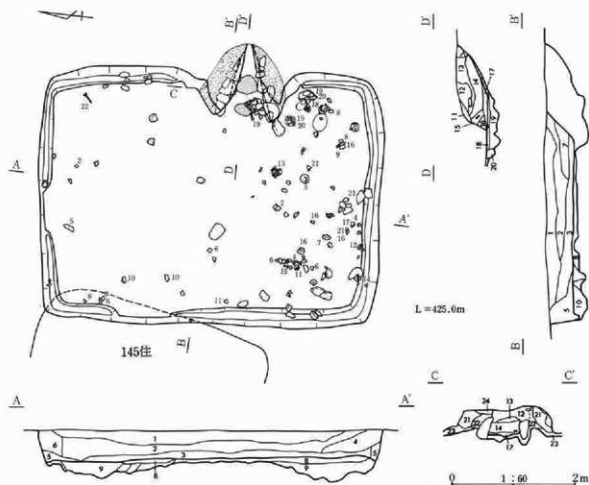


139号住居跡出土遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀	床直	15.0・6.4・7.0 1/2	白色細・粗砂粒、石英の円細礫 酸化 におい褐色	体部はほぼ直線的に開き、口唇部が僅かに外反する。底部は右回転糸切り、周辺部は高台粘付時の態で。	
②	須恵器 椀	18.0cm -9cm	14.0・4.7・7.0 1/4	白色細・粗砂粒・細礫、石英粗砂粒・細礫 還元（酸化焙気味） におい黄褐色	高台は断面三角形で、高台から口縁部まで直線的に開く。底部は凹凸しており切り離し方法不明。	
③	須恵器 羽釜	床直 16.5cm 49.0cm	18.8・-・- 胴部中位へ口縁部 1/2	白〜灰色細・粗砂粒・細礫 中礫、赤褐色細礫・中礫 酸化 におい黄褐色	胴部は僅かにふくらみを持ち、胴の貼付部分が括れ、口縁部は直立する。口縁部は横撫で、胴部外面は上方向への篋削り、内面は縦方向の撫で。	
④	須恵器 羽釜	7.5cm 23.5cm 35.0cm	15.0・-・- 1/5	白色細・粗砂粒・細礫 石英・長石粗砂粒・細礫 酸化 灰黄褐色	胴部中位がややふくらみ、胴の貼付部分が括れて、口縁部は外側によくらみをもって直立する。口縁部・胴横撫で、胴部は単位の大きい上方向への篋削り、胴部内面横撫で。	
⑤	鉄製品 利函	埋土		用途不明の鉄製品で部分的に欠損する。全体に錆ぶくれが少なく精緻造りに見える。欠損は調査時。残存長6.2+αcm、重6.2g。		
⑥	石製品 磁石	埋土		各面部に成形の屑痕がある。使用は煮潰と部分的に山形の御節に残る。頂部下に小穴があり下紙。不成形であるので自然石利用か。質は軟か目の名倉磁。石材は流紋岩（黒沢）。		

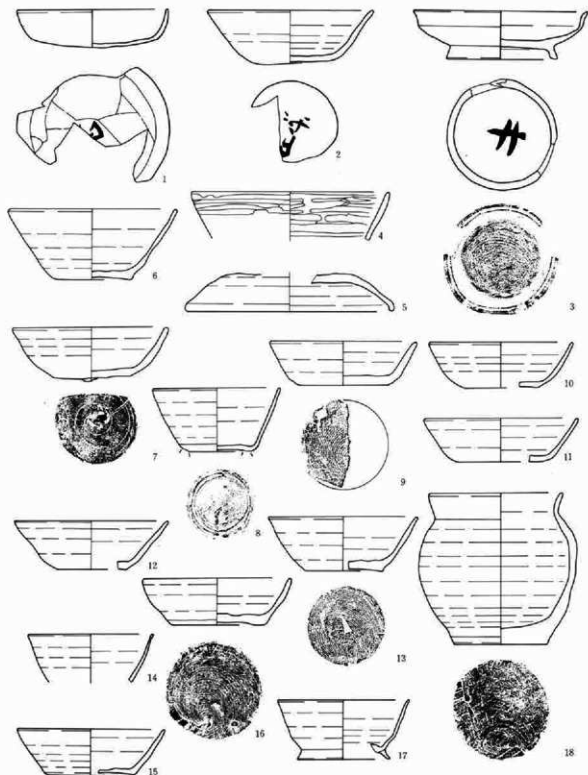
141号住居跡 (写真図版98~99頁、133~134頁)

位置 6C-12グリッド 方位 N-88.0°-W 形状 545×405cmを測る隅丸長方形のプランを呈し、各壁は直線的に廻り、壁高は63cmを測り、立ち上がりも直に近い。床面 床はローム混じりの暗茶褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はカマド前面を除き、深度6cmの溝がほぼ全周する。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を並べ礫を核に粘土を貼り構築されている。礫のうち袖石は小礫化しているため、使用時より露出していた可能性もある。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、床面より若干低い。袖部の張り出しは大きく、煙道部は壁より43cmと短く、緩やかに立ち上がる。掘り方 住居中央部を残し口の字状に掘りくぼめる。また、掘りくぼめた中に径27~130cm、深度13~58cmの円形の床下土坑を3基検出する。重複 145号住居(弥生時代)と重複し、新旧関係は遺構確認時の埋土より本遺構の方が新しいと判断される。遺物 遺構内より出土する遺物の



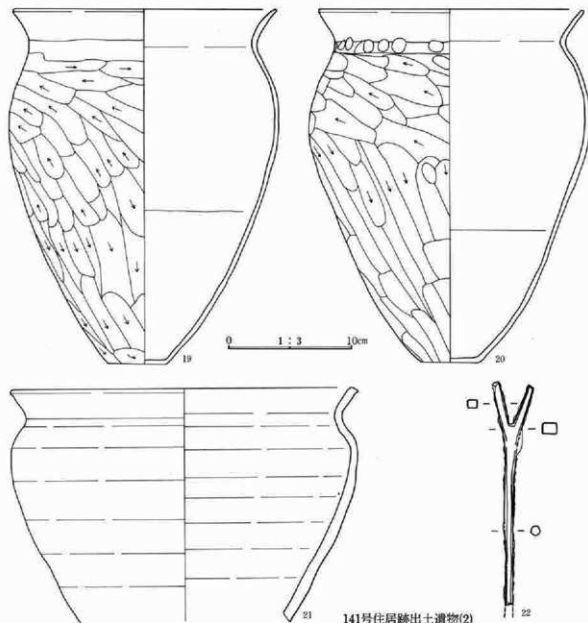
- | | | |
|------------------------|--------------------------|-----------------------|
| 1 暗褐色土 F P多量、ローム粒少量。 | 10 暗褐色土 ローム粒、パミス。 | 17 黄褐色土 ローム、灰。 |
| 2 暗茶褐色土 F P、ローム粒。 | カマド | 18 黄褐色土 ロームブロック、焼土粒。 |
| 3 黒褐色土 F P少量、ローム粒、炭化物。 | 11 暗茶褐色土 F P、炭化物、ローム粒少量。 | 19 黒色土 ロームブロック。 |
| 4 明茶褐色土 F P少量、ローム粒多量。 | 12 茶褐色土 F P少量、ローム粒。 | 20 黒色土 ローム粒少量。 |
| 5 黒色土 F P少量、ローム粒。 | 13 ロームブロック。 | 21 白黄色の粘土 強粘性。 |
| 6 茶褐色土 F P、ローム粒少量。 | 14 明茶褐色土 F P少量、ローム粒。 | 22 ロームに若干の焼土・粘土粒。 |
| 7 黄褐色土 F P、ローム粒、粘土、焼土。 | 15 黄褐色土 ロームブロック。 | 23 黒褐色土 ローム粒、粘土、炭化物。 |
| 8 貼り床 ロームブロック多量。 | 16 褐色土 ローム粒、黒灰。 | 24 暗黄褐色土 ローム粒、粘土、炭化物。 |
| 9 暗茶褐色土 ロームブロック。 | | |

量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居南側に散乱し出土する。出土遺物中、坏(No 2、13)・蓋(No 5)・鉄鏝(No 22)は床面付近よりの出土である。特筆すべき遺物として、器内が非常に薄い坏・碗類(No 6、11、14、16、17)の出土と、前記の鉄鏝(No 22)の床面直上よりの出土がある。



141号住居跡出土遺物(1)

0 1:3 10cm



141号住居跡出土遺物(2)

遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	土師器 坏	埋土	12.0 × 3.0 × 10.0 底部～口縁部1/2	白～灰色・石英細・粗砂粒 普通 褐色	底部は厚削りによって平底気味となっている。体部は浅く僅かに丸みをもつ。外面底部に墨書があるが、欠けているため判読不可。	墨書 胎土分析
②	須恵器 坏	床直 3.5cm 埋土 7.5cm	13.0 × 4.3 × 6.0 底部～口縁部1/2	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	底部は凹転未切り、周辺は撫でか、凍のように磨面が荒れており不明。外面底部に墨書あり。薄く判読不可。	墨書
③	須恵器 皿	18.5cm	13.8 × 3.8 × 8.8 高台の一部欠損	白～灰色細・粗砂粒 還元 灰色	高台は断面角形で端部に一糸の沈線が通る。底部は凹転未切り。外面底部に「」の墨書がある。	墨書
4	口使・ 酸 碗	11.5cm 16.0cm 23.5cm	16.0 × - × - 口縁から体部にか け1/4残	黄白色の細砂粒 酸化 外面一明赤褐色・灰褐色 内面一明赤褐色・赭灰色	体部は直線的に開く。外面は口縁部のみ横方向の置研磨が散見。内面は体部から口縁部に横方向の粗な置研磨。	胎土分析

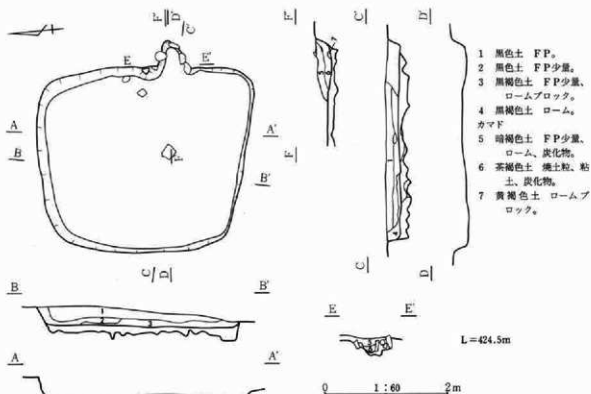
第3章 検出遺構・遺物

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・構成・色調	器形・整形の特徴	備考
⑥	須恵器 蓋	3.0cm	16.8・ - - - 1/3残	白色の角細礫・粗砂粒 黒色鉱物粒 還元、灰色	天井部は丸みをもち、体部は僅かに括れ 気味で、口縁部は折り曲げられるが、屈 曲部、肩部ともに丸みをもつ。	
⑦	須恵器 杯	7.0・11.0 21.0 27.0cm	13.5・5.6・6.2 2/3	少量の白色・黒色細砂粒 還元、灰色	底部は右回転糸切り未調整。体部上位が 僅かにふくらみをもつ。器内は非常に薄 手で、若干歪みがみられる。	
⑧	須恵器 杯	9.5cm	12.4・4.0・6.1 3/5	白色・灰色細・粗砂粒 中礫、還元 灰白色	右回転糸切り未調整。体部下位に丸みを もって開く。器内はやや厚手で均一であ る。	胎土分析
⑨	須恵器 碗	16・16.5 22.0cm 27.0cm	10.2・5.0・5.0 高台部・口縁部一 部欠損	少量の灰～黒色細砂粒 還元、灰白色	底部は右回転糸切り未調整。体部上位にやや ふくらみをもち、非常に器内は薄手で、若 干歪みがみられる。	
⑩	須恵器 杯	床直	11.8・3.5・7.2 1/3	白～灰色細砂粒 酸化 にぶい褐色	底部は右回転糸切り未調整。体部は直線 的で器内が薄い。	
⑪	須恵器 杯	8.0cm 10.5cm	11.5・3.6・5.8 1/3欠	少量の白色細砂粒・黒色鉱 物粒、還元 灰色	底部の残存している周縁部は回転撫で。 体部下位に丸みをもち、体部から口縁部 は直線的に開く。器内が非常に薄い。	
⑫	須恵器 杯	9.5cm 23.0cm	12.4・3.5・6.4 1/3	僅かに灰色の細砂粒を含む が、均質な粘土である。 還元、灰黄色・灰色	底部は糸切り未調整だが回転方向は不 明。体部は直線的に開き、器内は薄手。	胎土分析
12	須恵器 杯	26.5cm	12.4・3.8・5.6 1/3	少量の灰色細砂粒 還元、焼し焼成	体部は下位と中位にふくらみをもち、開 く。器内は薄手である。外一淡黄色、内 一黒色	
⑬	須恵器 杯	床直	12.0・4.2・6.4 4/5	灰白～灰色角細礫 少量の白色細砂粒 還元、灰白色	底部は右回転糸切り未調整。体部下位は 底部に向って若干彎まる。体部は直線的 で、口唇部が僅かに外反する。	胎土分析
14	須恵器 杯	39.0cm	10.2・ - - - 1/5	少量の灰～黒色細砂粒 還元、灰白色	器形は4と類似すると思われるが、僅か に口縁部が外反する。器内は非常に薄手 である。	胎土分析
⑭	須恵器 杯	12.0cm 23.0cm	11.8・3.7・7.0 1/4	少量の灰色細砂粒 還元 (焼し気味) 外一灰色、内一淡黄色	底部は回転糸切り後し未調整。体部は ほぼ直線的に開く。	
⑮	須恵器 杯	14.5～ 31.0cm	12.0・3.7・7.4 口縁一部欠損	白色細砂粒・少量の灰色細礫。 還元 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。体部下位は 窄まる形で、体部上位から口縁部にか けて丸みをもつ。	胎土分析
⑯	須恵器 碗	11.5cm	10.6・4.7・7.4	少量の灰色粗砂粒 還元 灰白色	体部下位に鋭い稜をもち、口唇部が僅か に外反する。器内は非常に薄手である。	
⑰	口使・ 盤 小型葉	床直	10.8・12.0・7.4 9/10残	微細な雲母、赤褐色鉱物粒 還元 外一明赤褐色、内一褐色	底部は右回転糸切り後、若干曲でいる。 ロクロ整形。	胎土分析
⑱	土師器 鉢	床直	21.0・28.2・4.8 胴部の一部欠損	白～黒色・石英細・粗砂粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は比較的短く外反する。口縁部横 撫で、胴上位横位寛削り、中位斜め上 方向、下位は縦位寛削り。底部一方向寛削 り。内面磨面。	胎土分析
⑲	土師器 鉢	床直	21.0・28.0・4.5 完形	白～黒色・石英細・粗砂粒 普通 にぶい赤褐色	口縁部は比較的短く外反する。胴上位が 膨らみ最大幅をもつ。19の裏と同じ形 態・整形・胎土である。	

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
㊦	口使・ 煎鑊	床直～ 24.5cm	18.0・ 1/4	褐色の細礫～中礫・黄白色細 砂粒、炭化 外面～にふい赤褐色 内面～明赤褐色	胴部は直線的に開き、肩部が張り、最大 幅をもつ。口縁部は外反し、口唇部は平 坦面をもって外傾する。ロク口整形。	胎土分析
㊧	鉄製品 類	床直				先端部が二又に分かれた棒状鉄器である。二又部の横断面は方形を呈し、棒状部は円形を呈す。全体に錆ぶくれば少なく精緻造を思わせる。棒状の端部は調査時欠損。残存長17.8cm、重62.2g。

154号住居跡 (写真図版100頁)

位置 9C-20グリッド 方位 N-87.0°-W 形状 335×269cmを測る隅丸方形形状のプランを呈し、壁高は48cmを測る。床面 床はローム混じりの黒褐色土を叩き貼り床とする。壁溝はなし。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部・煙道部には礫を並べた石組みのカマドである。礫の隙間には粘土を詰め固定する。検出時には袖部の礫は崩れ、カマド内に残っていたが、設置の痕跡が明瞭に残る。燃焼部は壁のラインより内側に位置し、煙道部も壁より42cmと短く、急峻に立ち上がる。掘り方 住居中央部付近を残し、ロの字状に浅く掘りくぼめる。重複 なし。遺物 出土する遺物の量は極めて少なく、羽釜・坏・椀等の破片を数個出土するのみである。

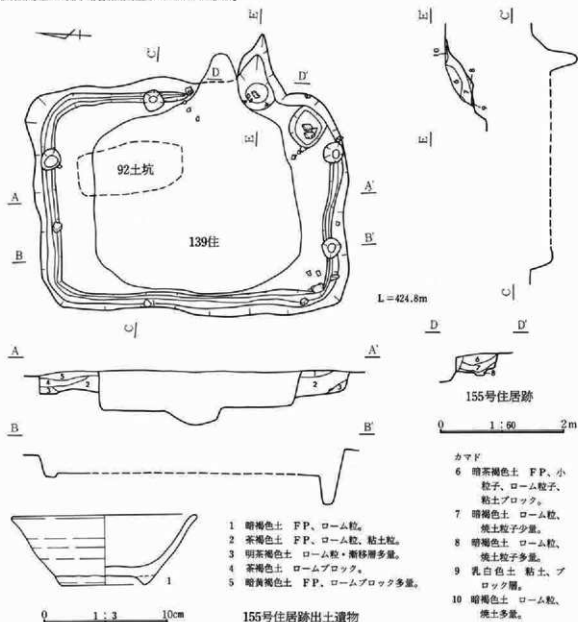


155号住居跡 (写真図版100頁、134頁)

位置 7C-16グリッド 方位 N-88.0°-W 形状 496×350cmを測る隅丸長方形形状のプランを呈し、壁高は43cmを測る。床面 床はローム地床。壁溝はカマド前面を除き、幅19cm、深度10cmの溝がほぼ全周する。柱穴 4穴検出されるがいずれも壁柱穴であり、南壁に2穴、東壁と北壁の北西コーナー

寄りに1穴づつ設けられ、径29~35cm、深度20~45cmを測る。貯蔵穴なし。カマド東壁の中央やや南寄りに設けられ、袖部には礫の設置が見られ、石組みのカマドであったと考えられる。燃焼部は壁のほぼライン上に位置し、袖部の張り出しは少なく煙道部は壁より75cmを測る。掘り方なし。

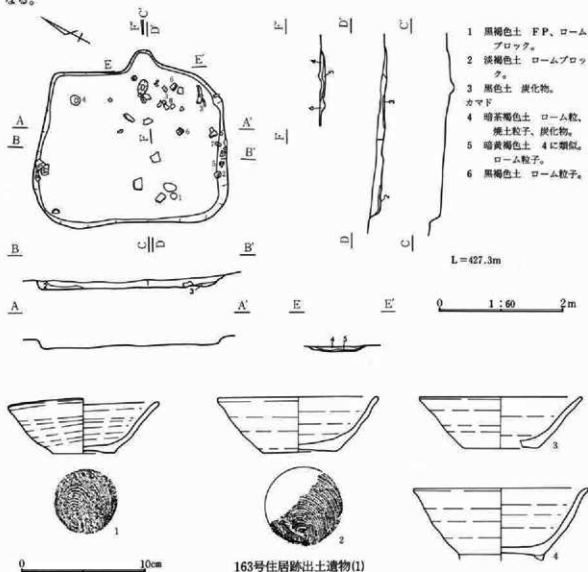
重複 139号住・92号土坑と重複し、新旧関係は埋土断面から139住より本遺構の方が古く、92号土坑より新しいと判断される。遺物 出土する遺物の量は重複遺構に切られるため極めて少なく、掲載のほか羽釜・灰軸陶器の破片を数個出土するのみである。

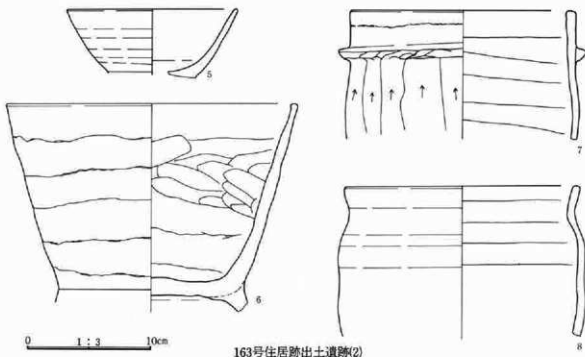


遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm)			胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
			口径	器高	底径			
①	須恵器 椀	22.0cm 埋土	14.9	5.5	6.5	白色細砂粒、石英・長石の粗・粗砂粒・粗礫 還元、軟質 暗灰黄色	体部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。高台は内傾し、断面は三角形を呈す。高台の付け方はやや歪んでいる。右回転糸切り後周辺部は高台貼付時の回転跡で。底部内面には同高台径の重ね焼痕がみられる。	

163号住居跡 (写真図版101頁、134頁)

位置 7F-19グリッド 本遺跡最東端の台地縁辺に位置し、本遺構より北東側は一段低くなり、現存の水田面となる。この台地の傾斜は地山や覆土の状態から、掘削等によるものではなく、自然地形を残すものと判断される。方位 N-65.5°-E 形状 312×237cmを測る隅丸方形のプランを呈し、遺構上面は削平のため、壁高は僅か9cmを測るのみである。床面 床はローム地床でしまりがあり、壁溝はない。柱穴 なし。貯蔵穴 なし。カマド 東壁のほぼ中央に設けられているが、遺存状態は悪く、燃焼面の範囲を残すに留まり、袖部等の構造は明らかではない。燃焼部はほぼ壁のライン上に位置する。掘り方 なし。重複 重複する遺構はない。遺物 遺構内より出土する遺物の量は比較的多いが、その大半が破片であり、完形品の遺存は少ない。遺物は住居全面に散乱し出土するが、床面直上よりの出土は見られない。特筆すべき遺物として椀 (No 5) の底部下面には粘土盤の剥落痕があり、剥落下に回転糸切痕を残す。備考 前記のとおり、本住居は大地東縁辺上に位置し、台地の傾斜は自然地形を残していると考えられることから、本住居をもって集落の東端と考える。本遺構の西側には現農道設置に伴う攪乱のために遺構の存在が明らかでない部分もあるが、集居の遺構の密度は、遺跡中央付近の微高地上に比べ稀薄となる。





163号住居跡出土遺跡(2)

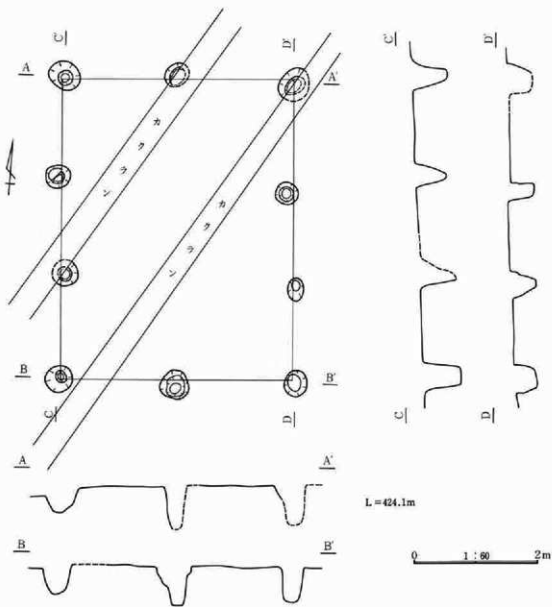
遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 環	6.0cm	12.0・4.3・5.0 口縁部一部欠損	白色細・粗砂粒、石英粗砂粒 酸化気味 外一帯灰色 内一帯い黄褐色	底径は口径の1/2以下と小さく、体部は丸みをもち、底部に向って窄まる。口縁部は外反する。底部は右回転未切り未調整。	
②	須恵器 環	4.0cm	13.0・4.4・6.0 1/2	多量の白色細・粗砂粒、石英の 細砂粒 焼し焼成 黒色、浅黄色	体部は直線的に開き、口縁部は外反、口唇部は丸みをもち肥厚する。底部は右回転未切り未調整。内面に底径6.0cmの重ね焼き痕あり。	
③	須恵器 環	2.0cm 13.5cm~ 15.5cm	13.0・4.1・6.0 1/4	白色細・粗砂粒、石英細礫 酸化 帯い黄褐色	体部は立ち上り部分から直線的に開き、内面の底部から体部は緩やかに立ち上る。底部は右回転未切り未調整。	
④	須恵器 椀	10.5cm	14.0・ - - - 口縁部1/3、高台欠損	白色細砂粒、多量の石英粗砂粒・ 細礫 酸化気味 帯い黄褐色	体部は僅かにふくらみをもって開き、口縁部は外反する。右回転未切り後、高台貼付時に周辺部は回転痕で。	
⑤	須恵器 椀	6~10cm 11cm	13.6・ - - - 2/3	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	体部はやや丸みをもち、器部は比較的薄手である。底部は削製してあり、削製面には回転未切り痕がうつっている。	
⑥	須恵器 台付鉢	7.5cm 12.0cm	23.2・ - ・14.8 底部~口縁部1/2 台部欠損	白~灰色細・粗砂粒・細礫 石英粗砂粒・細礫 酸化 帯い橙褐色	体部は直線的に開き、口唇部は水平な平坦面をもつ。外面は輪痕が残り、成形時の撫でのみ。口縁部内外面直線。内面中位は斜め横方向の直線。下位と底部は撫で、凹凸がある。台部内側は回転痕で。底部は整調整。	
⑦	須恵器 羽釜	6.0cm~ 10.0cm 12.0cm	18.0・ - - - 胴部上位~口縁部 1/3	白色細・粗砂粒、石英細礫 還元・軟質 灰白色	胴の部分で僅かに窄まり、口縁部が直立する。胴部は上方へ向うの単位大きな削り。胴の上面は横撫で、下面は指頭が残り、胴部の削りが回り凹凸がある。内面は横撫で。	胎土分析
8	須恵器 壺	12.0cm 13.5cm 15.5cm	18.8・ - - - 小片	白~灰細砂粒・細礫、石英粗 砂粒 還元、軟質 帯い黄褐色	胴内は口唇部まで均一、口唇部は水平な平坦面をもつ。ロク方整形。胴部中位には一部分削りが入っている。	

第2項 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (写真図版135頁)

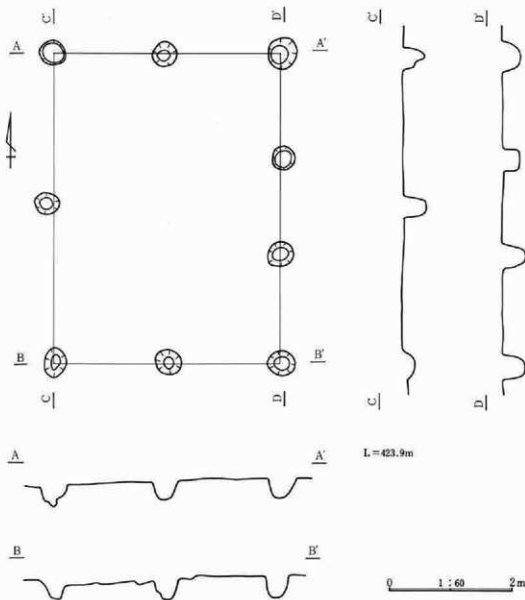
位置 21B-20グリッド 棟方位 N-3.0°-W 規模 3間(473cm)×2間(371cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に150~173cm、短軸方向に181~191cmを測る。建物は10本の柱穴より成り、柱穴径25~56cm、深度29~68cmを測る。 柱穴埋土 暗褐色土を主体としFPを含む。

重複 重複する遺構はないが、近世以降と思われる耕作溝によりピットの一部が切られる。 備考 本遺跡における掘立柱建物跡の時期判断の目安としては、柱穴埋土内部にFPが混入するか否かが鍵になるものと考えられる。竪穴住居跡の場合は、古墳時代前期の住居跡でも埋土上層にFPの混入が見られるが、これは遺構の埋没が冬季の積雪等の理由により遅いことに起因していると考えられ、掘立の柱穴においてはその埋没に竪穴住居ほど時間を要しないとの判断により、柱穴内にFPの混入するものを平安時代に限定した。



2号掘立柱建物跡 (写真図版135頁)

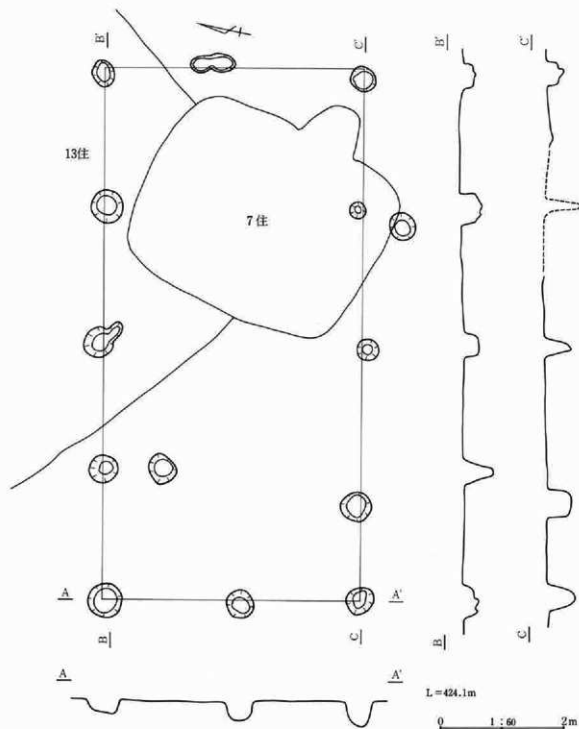
位置 16B-19グリッド 棟方位 N-0.0°-W 規模 3間(491cm)×2間(364cm)の規模をもつが、西辺側は1穴少なく2間であり、相対する2穴のピットのほぼ中央の位置に穿たれる。1間あたりの柱穴間は、長軸方向に150~250cm、短軸方向に173~182cmを測る。建物は9本の柱穴より成り、柱穴径35~52cm、深度23~39cmを測る。柱穴埋土 暗褐色~黒褐色土を基にローム粒子を含み、下層に至るまでFPを含む。重複 重複する遺構はない。備考 1号掘立の頃に記したように、柱穴埋土内にFPが混入することから、建物の時期は平安時代と考えられ、周辺の竪穴住居跡として4号・5号・6号住居跡と隣接するが、6号住居跡とは距離的に接近し過ぎており、同時期の存在の可能性は低い。4号・5号住居跡とは軸もほぼ同じくするため、いづれかの住居に付随する建物である可能性は高いものと考えられる。また、1号掘立とも軸をほぼ同じくする。



3号掘立柱建物跡 (写真図版135頁)

位置 19B-17グリッド 棟方位 N-76.0°-E 規模 4間(830cm)×2間(412cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に150~250cm、短軸方向に171~249cmを測る。建物は12本の柱穴より成り、柱穴径34~54cm、深度15~44cmを測る。柱穴埋土 暗褐色土を主とし、FPを含む。

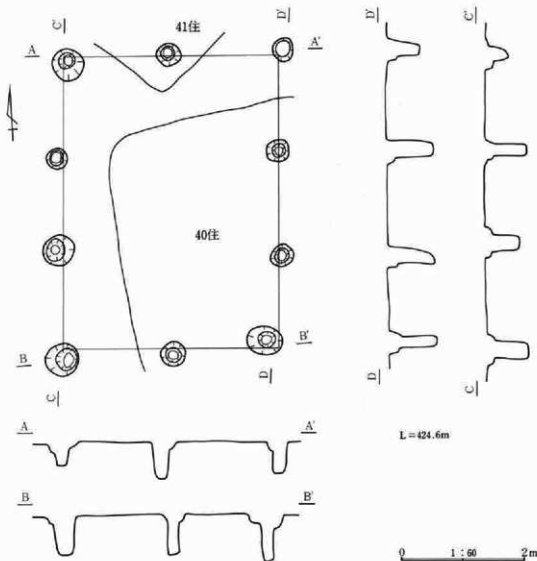
重複 7号住居跡(平安時代)と重複するが、新旧関係は明らかではない。また、13号住居跡と重複し、13号住居よりは新しい。備考 建物の時期については柱穴埋土より平安時代の建物と判断される。



4号掘立柱建物跡 (写真図版135頁)

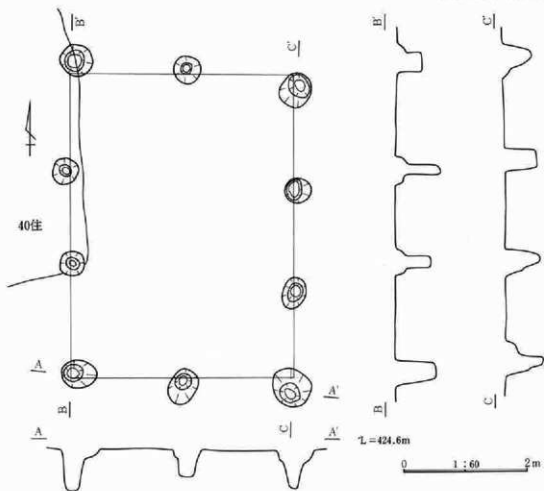
位置 3C-16グリッド 棟方位 N-2.0°-E 規模 3間(466cm)×2間(331cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に130~172cm、短軸方向に152~183cmを測る。建物は10本の柱穴より成り、柱穴径31~56cm、深度37~78cmを測る。柱穴埋土 暗褐色土を主とし、F Pを含む。

重複 40号・41号住居跡(古墳時代前期)と重複し、遺構確認時の埋土より本遺構の方が新しいと判断される。備考 建物の時期は柱穴埋土、及び重複関係より平安時代と考えられる。

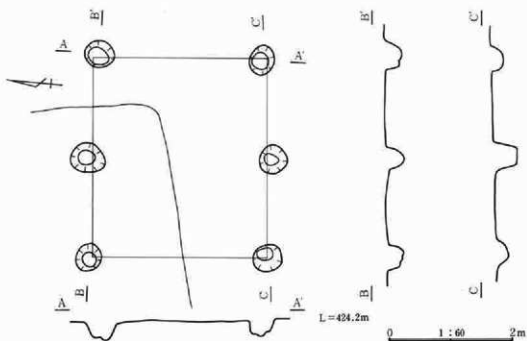


5号掘立柱建物跡 (写真図版135頁)

位置 5C-17グリッド 棟方位 N-0.0°-E 規模 3間(494cm)×2間(357cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に160~173cm、短軸方向に173~181cmを測る。建物は10本の柱穴より成り、柱穴径39~66cm、深度43~70cmを測る。柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。重複 40号住居跡(古墳時代前期)と重複し、遺構確認時の埋土より本遺構の方が新しいと判断される。備考 時期は柱穴埋土、及び重複関係より平安時代と考えられ、前記の4号掘立とは距離的にも近く、軸もほぼ同じくする。



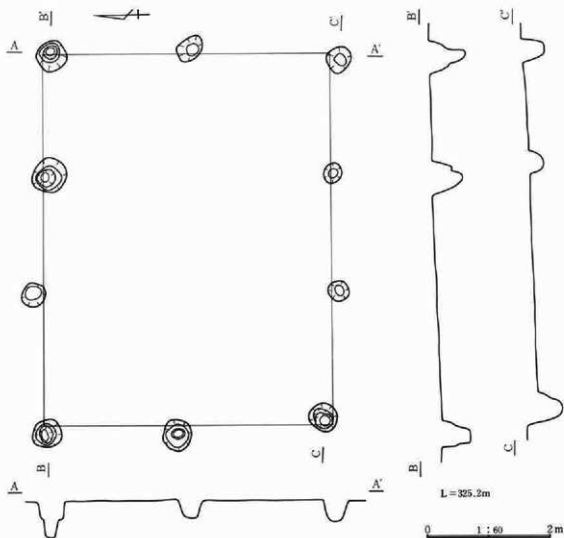
6号掘立柱建物跡 (写真図版136頁)



位置 24B-16グリッド 棟方位 N-85.0°-E 規模 2間(315cm)×1間(266cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に152~162cm、短軸方向に254~281cmを測る。建物は6本の柱穴より成り、柱穴径38~56cm、深度18~38cmを測る。柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。重複 14号住居跡(古墳時代前期)と重複し、遺構確認時の状況より本遺構の方が新しいと判断される。また、西側に9号住居跡(平安時代)が近接する。備考 本遺構も柱穴埋土より平安時代の建物と考えられる。

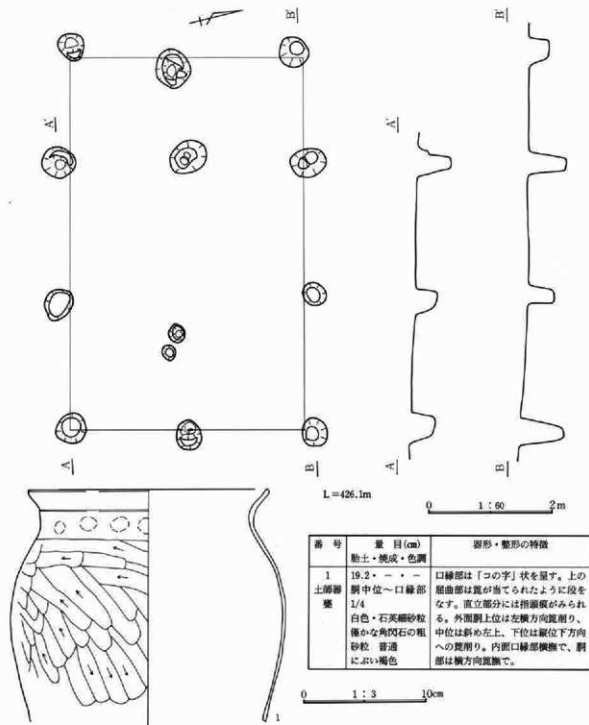
7号掘立柱建物跡 (写真図版136頁)

位置 0H-1グリッド 棟方位 N-88.0°-E 規模 3間(588cm)×2間(426cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に180~223cm、短軸方向に210~233cmを測る。建物は10本の柱穴より成り、柱穴径32~57cm、深度29~56cmを測る。柱穴埋土 F Pを含む黒色~暗褐色土。重複 重複する遺構はない。備考 本遺構は占地に特徴をもち、他の掘立柱が竪穴住居に隣接するのに対し、本遺構は竪穴住居群よりやや離れ、低い部分に立地する。建物の時期は柱穴埋土より平安時代と考えられる。



8号掘立柱建物跡 (写真図版136頁)

位置 7H-0グリッド 棟方位 N-78.0°-W 規模 3間(607cm)×2間(372cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に180~220cm、短軸方向に160~200cmを測る。建物は12本の柱穴より成る総柱の建物と考えられ、柱穴径34~63cm、深度32~72cmを測る。柱穴埋土 暗褐色土を主体とし、F Pを含む。重複 重複する遺構はない。備考 本遺構の時期については柱穴埋土より平安時代と考えられ、近接する45号住居跡と軸方位をほぼ同じくする。

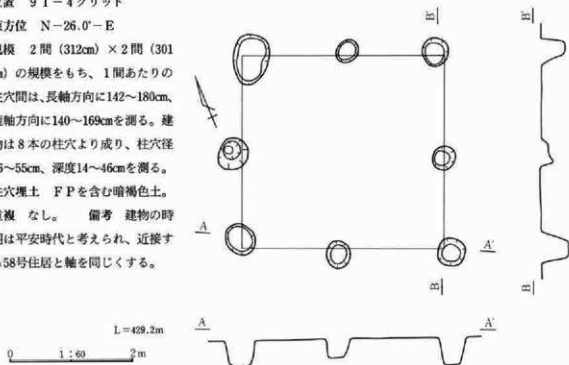


9号掘立柱建物跡 (写真図版137頁)

位置 9I-4グリッド

棟方位 N-26.0°-E

規模 2間(312cm)×2間(301cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に142~180cm、短軸方向に140~169cmを測る。建物は8本の柱穴より成り、柱穴径36~55cm、深度14~46cmを測る。柱穴埋土 FPを含む暗褐色土。重複 なし。備考 建物の時期は平安時代と考えられ、近接する58号住居と軸を同じくする。

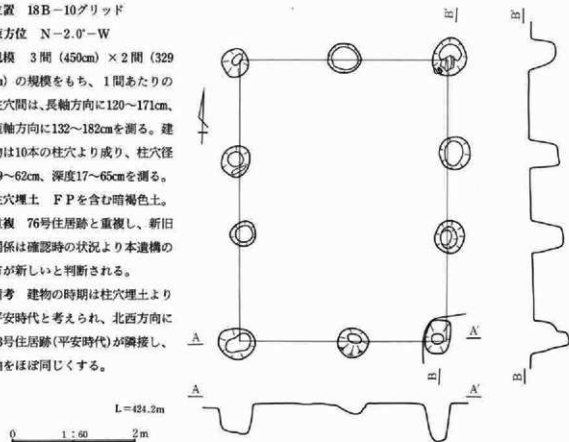


10号掘立柱建物跡 (写真図版137頁)

位置 18B-10グリッド

棟方位 N-2.0°-W

規模 3間(450cm)×2間(329cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に120~171cm、短軸方向に132~182cmを測る。建物は10本の柱穴より成り、柱穴径39~62cm、深度17~65cmを測る。柱穴埋土 FPを含む暗褐色土。重複 76号住居跡と重複し、新旧関係は確認時の状況より本遺構の方が新しいと判断される。備考 建物の時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、北西方向に63号住居跡(平安時代)が隣接し、軸をほぼ同じくする。

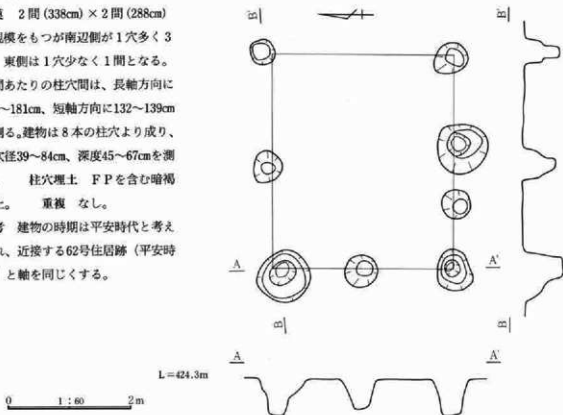


1 1号掘立柱建物跡 (写真図版137頁)

位置 18B-14グリッド

棟方位 N-88.0°-E

規模 2間(338cm)×2間(288cm)
 の規模をもつが南辺側が1穴多く3
 間、東側は1穴少なく1間となる。
 1間あたりの柱穴間は、長軸方向に
 100~181cm、短軸方向に132~139cm
 を測る。建物は8本の柱穴より成り、
 柱穴径39~84cm、深度45~67cmを測
 る。柱穴埋土 F Pを含む暗褐色
 色土。重複なし。
 備考 建物の時期は平安時代と考え
 られ、近接する62号住居跡(平安時
 代)と軸を同じくする。

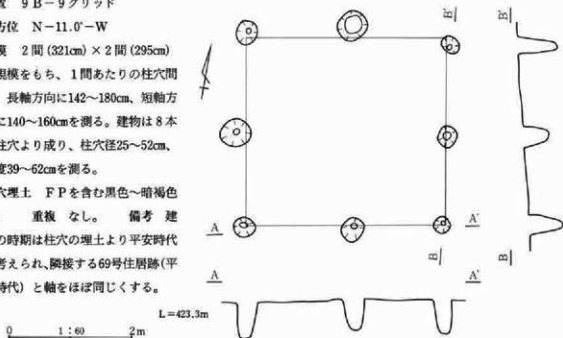


1 2号掘立柱建物跡 (写真図版138頁)

位置 9B-9グリッド

棟方位 N-11.0°-W

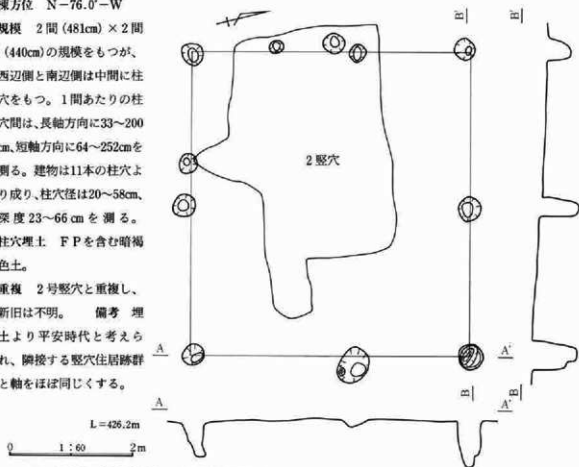
規模 2間(321cm)×2間(295cm)
 の規模をもち、1間あたりの柱穴間
 は、長軸方向に142~180cm、短軸方
 向に140~160cmを測る。建物は8本
 の柱穴より成り、柱穴径25~52cm、
 深度39~62cmを測る。
 柱穴埋土 F Pを含む黒色~暗褐色
 土。重複なし。備考 建
 物の時期は柱穴の埋土より平安時代
 と考えられ、隣接する69号住居跡(平
 安時代)と軸をほぼ同じくする。



13号掘立柱建物跡 (写真図版138頁)

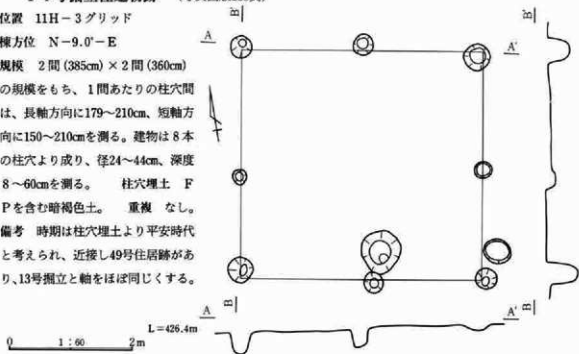
位置 9H-2グリッド
 棟方位 N-76.0°-W
 規模 2間(481cm)×2間(440cm)の規模をもつが、西辺側と南辺側は中間に柱穴をもつ。1間あたりの柱穴間は、長軸方向に33~200cm、短軸方向に64~252cmを測る。建物は11本の柱穴より成り、柱穴径は20~58cm、深度23~66cmを測る。柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。

重複 2号竪穴と重複し、新旧は不明。備考 埋土より平安時代と考えられ、隣接する竪穴住居跡群と軸をほぼ同じくする。



14号掘立柱建物跡 (写真図版138頁)

位置 11H-3グリッド
 棟方位 N-9.0°-E
 規模 2間(385cm)×2間(360cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に179~210cm、短軸方向に150~210cmを測る。建物は8本の柱穴より成り、径24~44cm、深度8~60cmを測る。柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。重複 なし。備考 時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、近接し49号住居跡があり、13号掘立と軸をほぼ同じくする。



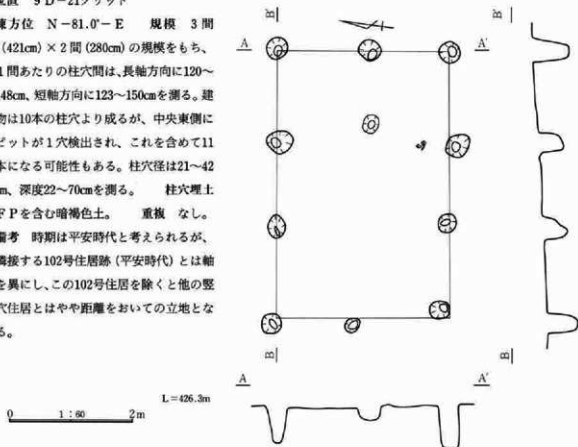
15号掘立柱建物跡 (写真図版139頁)

位置 9D-21グリッド

棟方位 N-81.0°-E 規模 3間

(421cm) × 2間 (280cm) の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に120~148cm、短軸方向に123~150cmを測る。建物は10本の柱穴より成るが、中央東側にピットが1穴検出され、これを含めて11本になる可能性もある。柱穴径は21~42cm、深度22~70cmを測る。柱穴埋土FPを含む暗褐色土。重複なし。

備考 時期は平安時代と考えられるが、隣接する102号住居跡(平安時代)とは軸を異にし、この102号住居を除くと他の竪穴住居とはやや距離をおいての立地となる。

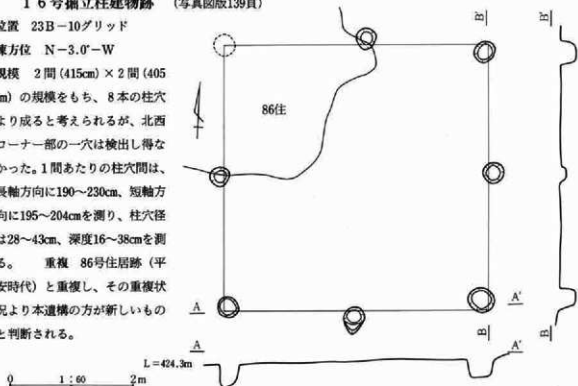


16号掘立柱建物跡 (写真図版139頁)

位置 23B-10グリッド

棟方位 N-3.0°-W

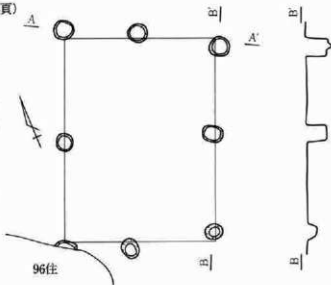
規模 2間 (415cm) × 2間 (405cm) の規模をもち、8本の柱穴より成ると考えられるが、北西コーナー部の一穴は検出し得なかった。1間あたりの柱穴間は、長軸方向に190~230cm、短軸方向に195~204cmを測り、柱穴径は28~43cm、深度16~38cmを測る。重複 86号住居跡(平安時代)と重複し、その重複状況より本遺構の方が新しいものと判断される。



17号掘立柱建物跡 (写真図版139頁)

位置 3E-24グリッド

棟方位 N-22.0°-E 規模 2間(321cm) × 2間(245cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に140~180cm、短軸方向に103~135cmを測る。建物は8本の柱穴より成り、柱穴径25~32cm、深度19~44cmを測る。柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。重複 96号住居跡と僅かに重複するが新旧関係は明らかではない。備考 時期は柱穴埋土より平安時代と考えられる。



0 1:60 2m

L=428.5m

18号掘立柱建物跡 (写真図版140頁)

位置 5B-8グリッド

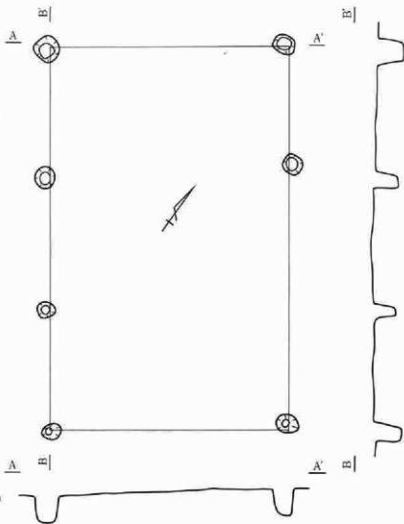
棟方位 N-37.0°-W

規模 3間(601cm) × 1間(381cm)の規模をもつが、東辺側は1穴検出し得なかった。1間あたりの柱穴間は、長軸方向に190~410cm、短軸方向に380~382cmを測る。建物は7~8本の柱穴より成り、柱穴径21~44cm、深度33~44cmを測る。

柱穴埋土 暗褐色土を主とし、F Pを含まない。

重複 重複する遺構はない。

備考 建物の時期は柱穴埋土より古墳時代前期と考えられ、隣接する竪穴住居としては、90号住居跡があり、軸をほぼ同じくする。また、7号溝とも軸を同じくし、7号溝の区画のほぼ中心軸上に位置する。

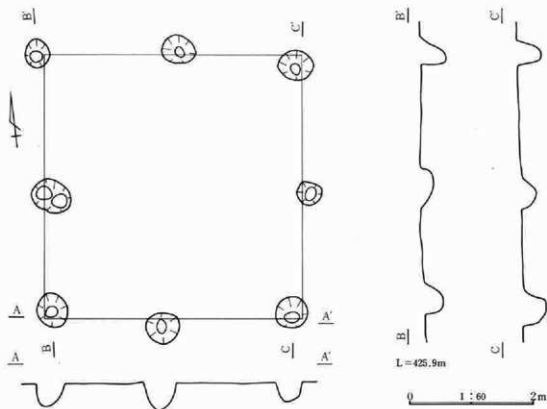


0 1:60 2m

L=423.3m

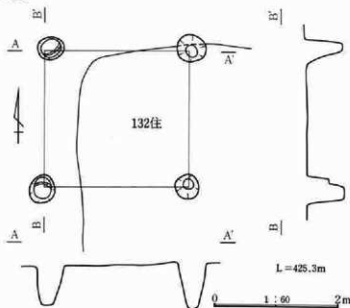
19号掘立柱建物跡 (写真図版140頁)

位置 2D-16グリッド 棟方位 N-6.0°-E 規模 2間(398cm)×2間(397cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に184~215cm、短軸方向に173~230cmを測る。建物は8本の柱穴より成り、柱穴径37~58cm、深度25~46cmを測る。柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。重複なし。備考 建物の時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、119号住と隣接し軸をほぼ同じくする。



20号掘立柱建物跡 (写真図版140頁)

位置 13C-13グリッド 棟方位 N-0.0°-E 規模 1間(231cm)×1間(221cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に229~233cm、短軸方向に212~230cmを測る。建物は4本の柱穴より成り、柱穴径36~48cm、深度25~46cmを測る。柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。重複 132号住居跡(古墳時代前期)と重複し、遺構確認時の状況より本遺構の方が新しいと判断される。備考 建物の時期は柱穴埋土、及び重複状態より平安時代と考えられる。

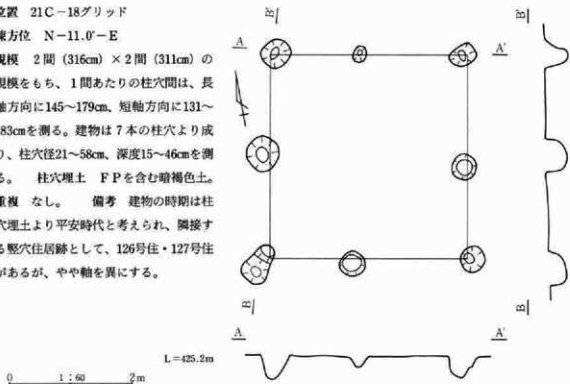


21号掘立柱建物跡 (写真図版141頁)

位置 21C-18グリッド

棟方位 N-11.0°-E

規模 2間(316cm)×2間(311cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に145~179cm、短軸方向に131~183cmを測る。建物は7本の柱穴より成り、柱穴径21~58cm、深度15~46cmを測る。柱穴埋土 FPを含む暗褐色土。重複 なし。備考 建物の時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、隣接する竪穴住居跡として、126号住・127号住があるが、やや軸を異にする。



22号掘立柱建物跡 (写真図版141頁)

位置 23C-15グリッド

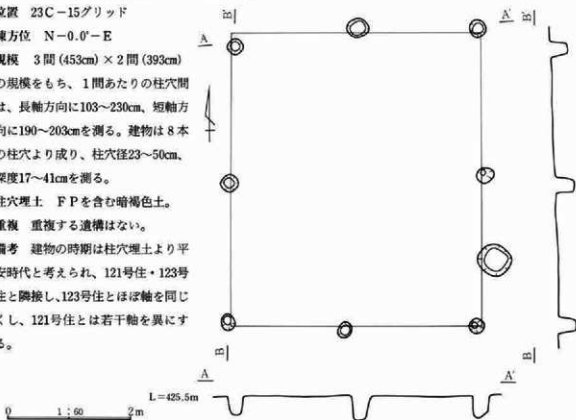
棟方位 N-0.0°-E

規模 3間(453cm)×2間(393cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に103~230cm、短軸方向に190~203cmを測る。建物は8本の柱穴より成り、柱穴径23~50cm、深度17~41cmを測る。

柱穴埋土 FPを含む暗褐色土。

重複 重複する遺構はない。

備考 建物の時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、121号住・123号住と隣接し、123号住とはほぼ軸を同じくし、121号住とは若干軸を異にする。



2 3号掘立柱建物跡 (写真図版141頁)

位置 20C-20グリッド

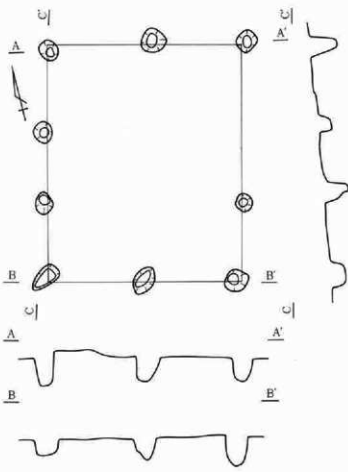
棟方位 N-15.0°-E

規模 3間(365cm)×2間(307cm)の規模をもつが、東辺側は1穴検出し得ず、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に106~254cm、短軸方向に152~164cmを測る。建物は8(9)本の柱穴より成り、柱穴径27~53cm、深度21~45cmを測る。

柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。

重複 重複する遺構はない。

備考 建物の時期は柱穴埋土より、平安時代と考えられる。隣接する竪穴住居跡としては126号住、127号住があるが、やや距離をおく。また、21号掘立柱とは距離的にも近く、軸をほぼ同じくする。本遺構は他の遺溝と異なり、微高地上ではなく、低地へと向う緩傾斜地上に立地する。



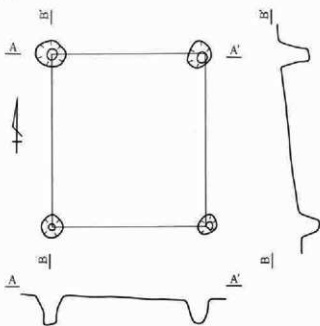
2 4号掘立柱建物跡 (写真図版142頁)

位置 20C-19グリッド

棟方位 N-0.0°-E 規模 1間(272cm)×1間(248cm)の規模をもつ。建物は4

本の柱穴より成り、柱穴径は28~50cm、深度31~46cmを測る。柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。重複 重複する遺構はない。

備考 建物の時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、23号掘立柱と近接するが軸を異にする。付近の竪穴住居跡としては126号・127号住があるが、若干距離をおいての立地である。



25号掘立柱建物跡 (写真図版142頁)

位置 18C-13グリッド

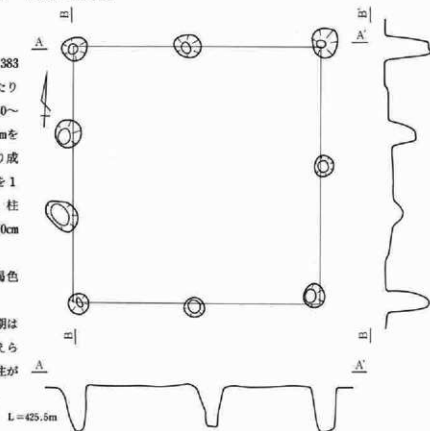
棟方位 N-0.0°-E

規模 3間(401cm)×2間(383cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に180~218cm、短軸方向に120~193cmを測る。建物は9本の柱穴より成り、東辺側は3間である所を1穴省き中央に1穴を設ける。柱穴径は32~58cm、深度36~70cmを測る。

柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。

重複 なし。備考 時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、隣接して122号・131号住があり、ほぼ軸を同じくする。

0 1:60 2m



26号掘立柱建物跡 (写真図版142頁)

位置 16C-15グリッド

棟方位 N-6.0°-W

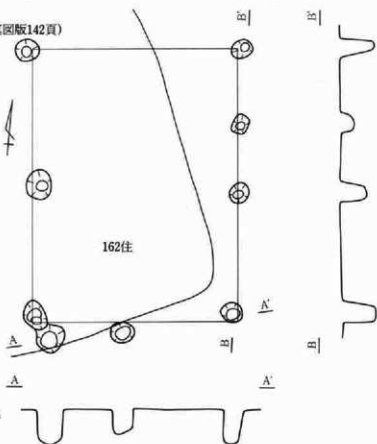
規模 3間(427cm)×2間(325cm)の規模をもち、北辺側は1間、西辺側は2間しかなく、8本の柱穴より成る。1間あたりの柱穴間は、長軸方向に180~240cm、短軸方向に320~350cmを測り、柱穴径27~48cm、深度22~56cmを測る。

柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。

重複 162号住居跡と重複し、確認時の状況より本遺構の方が新しいと判断される。備考 建物の時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、25号掘立とほぼ軸を同じくする。

0 1:60 2m

L=425.5m



27号掘立柱建物跡 (写真図版143頁)

位置 2J-1グリッド

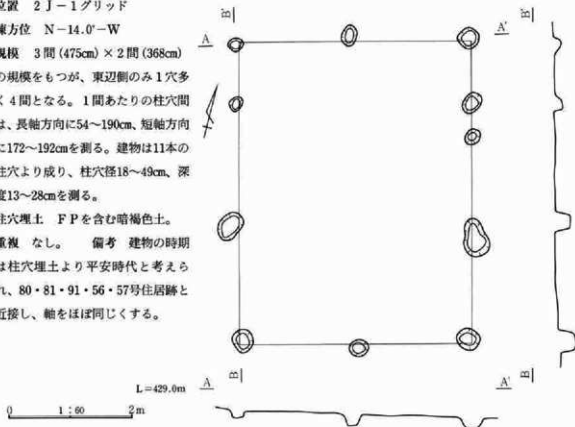
棟方位 N-14.0°-W

規模 3間(475cm)×2間(368cm)

の規模をもつが、東辺側のみ1穴多く
の規模となる。1間あたりの柱穴間
は、長軸方向に54~190cm、短軸方向
に172~192cmを測る。建物は11本の
柱穴より成り、柱穴径18~49cm、深
度13~28cmを測る。

柱穴埋土 F Pを含む暗褐色土。

重複 なし。備考 建物の時期
は柱穴埋土より平安時代と考えら
れ、80・81・91・56・57号住居跡と
近接し、軸をほぼ同じくする。



28号掘立柱建物跡 (写真図版143頁)

位置 19I-0グリッド

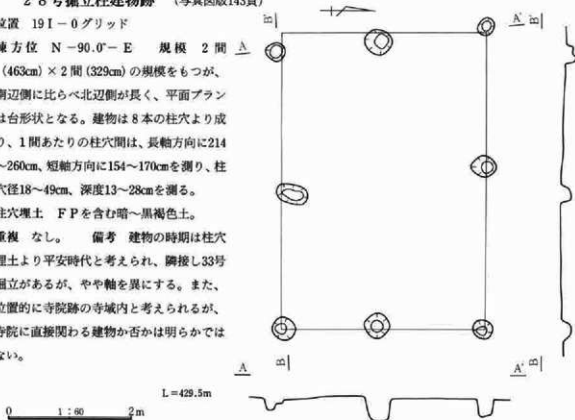
棟方位 N-90.0°-E

規模 2間(463cm)×2間(329cm)

の規模をもつが、
南辺側に比らべ北辺側が長く、平面プラン
は台形状となる。建物は8本の柱穴より成
り、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に214
~260cm、短軸方向に154~170cmを測り、柱
穴径18~49cm、深度13~28cmを測る。

柱穴埋土 F Pを含む暗~黒褐色土。

重複 なし。備考 建物の時期は柱穴
埋土より平安時代と考えられ、隣接し33号
掘立があるが、やや軸を異にする。また、
位置的に寺院跡の寺城内と考えられるが、
寺院に直接関わる建物が否かは明らかでは
ない。

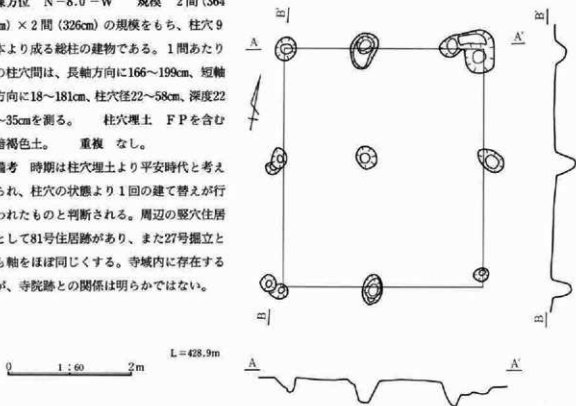


29号掘立柱建物跡 (写真図版143頁)

位置 24I-0グリッド

棟方位 N-8.0°-W 規模 2間(364cm) × 2間(326cm)の規模をもち、柱穴9本より成る総柱の建物である。1間あたりの柱穴間は、長軸方向に166~199cm、短軸方向に18~181cm、柱穴径22~58cm、深度22~35cmを測る。柱穴埋土 FPを含む暗褐色土。重複 なし。

備考 時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、柱穴の状態より1回の建て替えが行われたものと判断される。周辺の竪穴住居として81号住居跡があり、また27号掘立柱も軸をほぼ同じくする。寺院内に存在するが、寺院跡との関係は明らかではない。

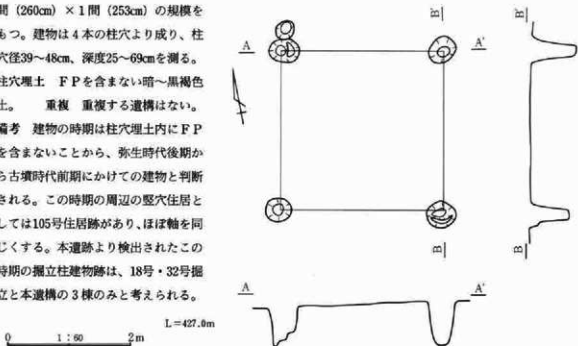


30号掘立柱建物跡 (写真図版144頁)

位置 16D-21グリッド

棟方位 N-10.0°-E 規模 1間(260cm) × 1間(253cm)の規模をもち、建物は4本の柱穴より成り、柱穴径39~48cm、深度25~69cmを測る。柱穴埋土 FPを含まない暗~黒褐色土。重複 重複する遺構はない。

備考 建物の時期は柱穴埋土内にFPを含まないことから、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての建物と判断される。この時期の周辺の竪穴住居としては105号住居跡があり、ほぼ軸を同じくする。本遺跡より検出されたこの時期の掘立柱建物跡は、18号・32号掘立柱と本遺構の3棟のみと考えられる。



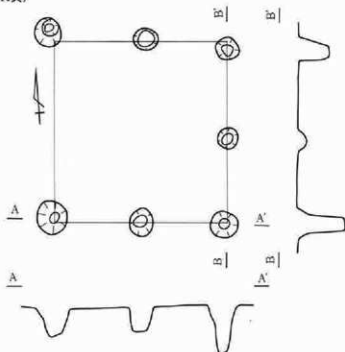
3 1号掘立柱建物跡 (写真図版144頁)

位置 10C-12グリッド

棟方位 N-2.0°-E 規模 2間

(288cm) × 2間 (278cm) の規模をもつが、西辺側は1間となり、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に134~300cm、短軸方向に130~156cmを測る。建物は7本の柱穴より成り、柱穴径33~53cm、深度14~76cmを測る。柱穴埋土 FPを含む暗褐色土。重複なし。

備考 建物の時期は柱穴埋土より平安時代と考えられる。



L=425.0m

0 1:60 2m

3 2号掘立柱建物跡 (写真図版144頁)

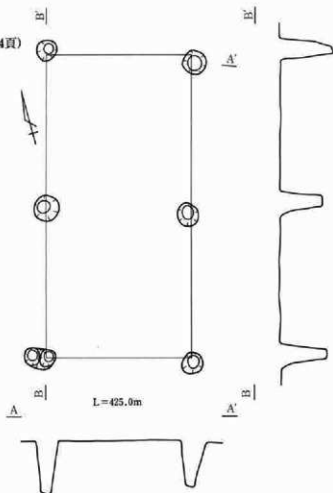
位置 8C-12グリッド

棟方位 N-15.0°-E

規模 2間 (482cm) × 1間 (233cm) の規模をもち、1間あたりの柱穴間は比較的長く、長軸方向に237~250cm、短軸方向に233cmを測る。建物は6本の柱穴より成り、柱穴径34~42cm、深度67~85cmを測る。柱穴埋土 調査時におけるデータ不足のため明らかではない。

重複 重複する遺構はない。

備考 建物の時期は柱穴埋土が明らかでないために断定はできないが、位置、及び軸方向より見て148号住居跡(弥生時代後期)の附近に位置し、軸をほぼ同じくするため、住居との関係を考えると、弥生時代後期から古墳時代前期の建物である可能性が高い。

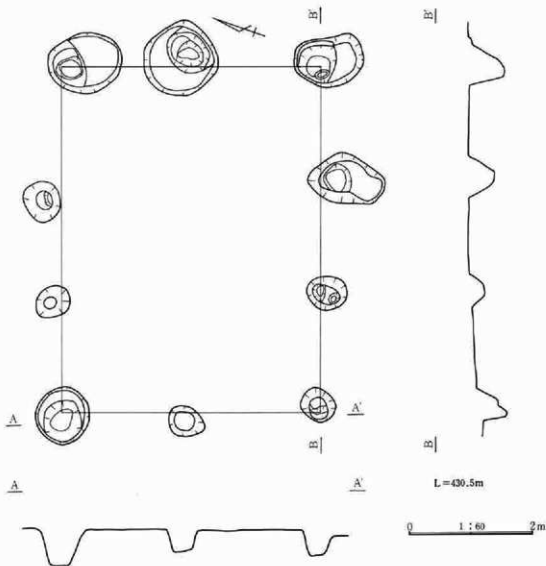


L=425.0m

0 1:60 2m

33号掘立柱建物跡

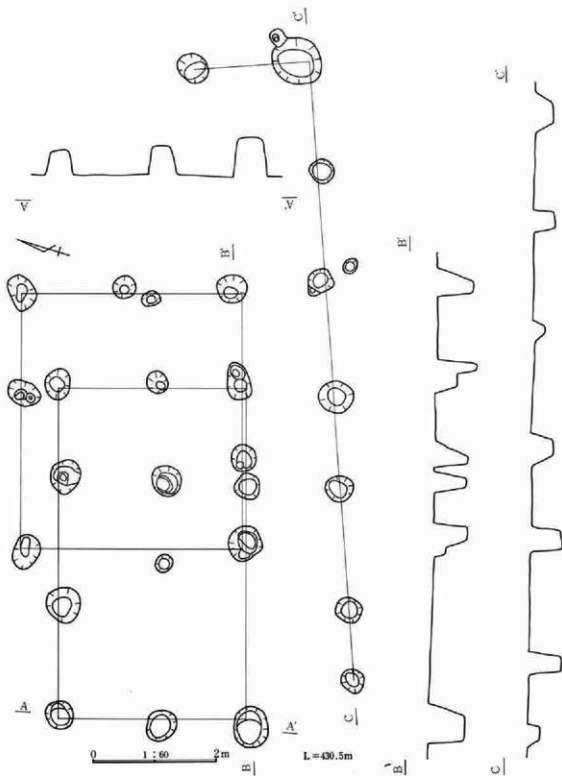
位置 16I-1グリッド 棟方位 N-72.0°-E 規模 3間(548cm)×2間(405cm)の規模をもち、1間あたりの柱穴間は、長軸方向に190~218cm、短軸方向に176~218cmを測る。建物は10本の柱穴より成り、柱穴径160~220cm、深度22~65cmを測る。柱穴埋土 FPを含む暗~黒褐色土。重複 重複する遺構はない。備考 建物の時期は柱穴埋土より平安時代と考えられ、寺院跡の寺域内に位置するが、寺院跡に伴う建物か否かは明らかではない。また、近接し28号掘立柱が並立するが、軸方位を若干異にする。附近の竪穴住居としては51・93号住居跡があるが、やはり軸を異にする。



34号掘立柱建物跡・1号柵列跡

位置 21I-5グリッド 棟方位 N-74.0°-E 規模 2間(400cm)×2間(330cm)の規模をもち、8本の柱穴より成る建物と、3間(550cm)×2間(280cm)の規模をもち、11本の柱穴より成る総柱の建物の2棟の重複に、6間+1間のL字状の柵列を伴う。2×2間の建物の1間あたりの柱穴間は、長軸方向に170~265cm、短軸方向に160~175cmを測り、3×2間の建物は長軸方向に170~340cm、短軸方向に125~160

cmを測る。また、柵列を含めた2棟の柱穴径は33~65cm、深度32~68cmを測る。柱穴埋土 柵列・掘立共にF Pを含む暗〜黒褐色土の埋土。備考 2棟の掘立柱建物は、柱穴埋土より平安時代の建物と考えられ、位置、及び軸をほぼ同じくすることから、立て替え（拡張等）による重複と考えられるが、その新旧関係は明らかではなく、附随する柵列もどちらかの建物に伴うものか、また両者に伴うものかも明らかではない。本遺構は寺院跡の寺域内に位置するが、寺院に伴う建物か否かは明らかではない。



第3項 寺院跡

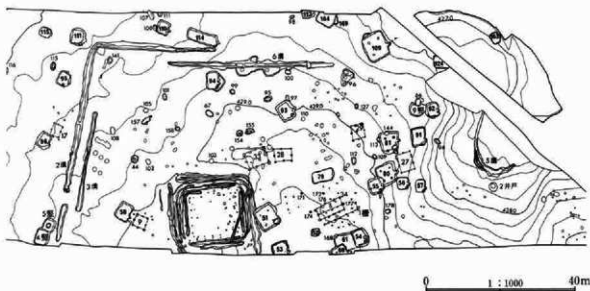
寺院跡（写真図版145頁、146頁）

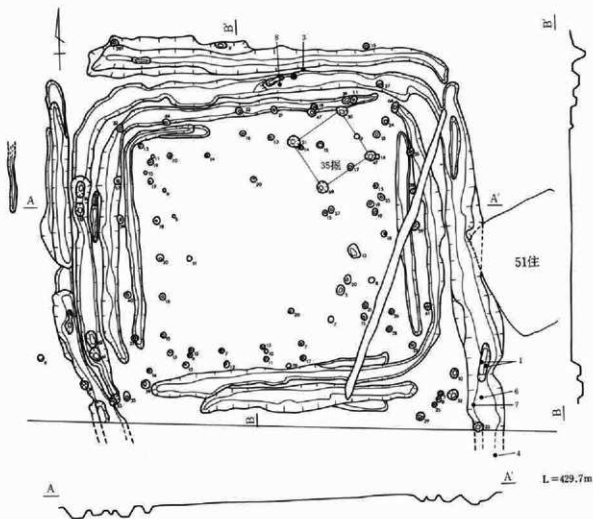
本遺構は、調査区南東側の13I-4グリッドを中心とする、やや高まった部分に位置し、巡る溝の外縁において24.7m×20.1m+αを測る方形を呈する遺構で、調査時においては方形溝遺構・方形区画遺構と称していたものである。溝は4条（部分的に3条）巡るが全周するものではなく、直線的な溝とL字、またはコの字状の組み合わせで、所々に切れる部分をもつ。溝幅は一律ではなく、50～220cmを測り、やや蛇行して巡る。溝の断面形状はコの字状（箱堀）もしくはU字状（竹堀）を呈し、深度は17.0～60.0cmを測る。この溝に囲まれた中央の部分は、方位はN-2.0°-E、13.5m×13.4mを測る方形を呈し、溝に近い外周部分にピット列をもつが、中央付近にはピットは検出されておらず、外周部分のピットも径12.0～32.0cm、深度5.0～64.0cmを測り、その大半が建物の支柱穴と成りうるほどの規模のものではなく、その位置と配列から縁、または庇のピット、もしくは建物の建造に伴う足場跡と考えられ、その配列から建て替えによる2時期の建物があったものと推察される。また、周囲の溝についてもピットに伴い、後掲の図に示すように2時期あるものと考えられるが、埋土が類似しており、重複よりの新旧の判断は困難である。

また、重複する遺構として、51号住居跡と35号掘立柱建物跡がある。51号住居跡については、溝と一部が重複するにすぎず、新旧関係は不明である。35号掘立柱建物跡は、方位N-61°-E、1間(315cm)×1間(293cm)、ピット径46.5～70.0cm、ピット深度30.0～68.0cmを測り、溝の内部に位置するものの、直接的に關係する遺構とは考えられず、重複する遺構としてとらえるが、新旧関係については明らかではない。

本遺構は建物跡と考えられるが、前述のとおり支柱穴と成りうるピットが検出されておらず、調査中において地元の旧土地所有者より桑園の耕作中に大きな石を除去したとの話しも聴取したことから、礎石をもつ建物で、溝の内部には基礎をもっていたものと推察され、また、出土遺物内に瓦が一点も含まれておらず、周辺よりも採取されていないことから、建物の上層には瓦を用いていないものと考えられる。

本遺構の性格については、溝内部より出土する墨書土器に記された文字の中に、「寺」の文字(寺院跡-4)があることから寺院の建物跡と推定され、遺跡内より出土する寺院関係の墨書土器を見ると、「寺」と内外面

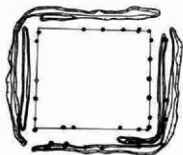




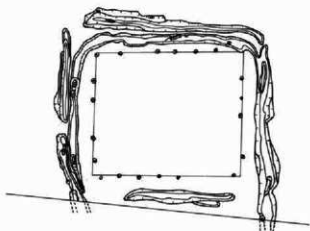
寺院跡
 ※ピット横の数値は掘削面よりの深度を示す。

0 1:200 10m

A期



B期



時期別 平面図

0 1:400 20m

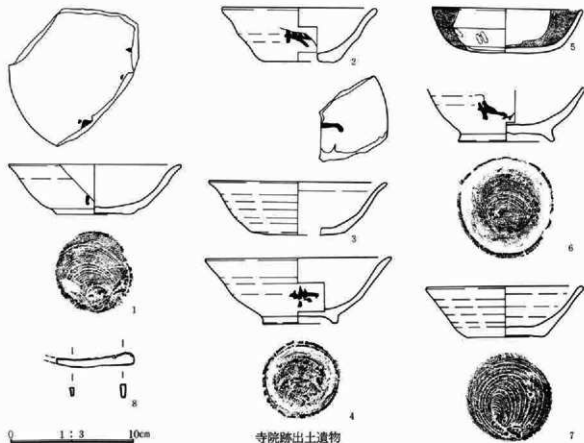
に記すものが2号溝より1点、同じく「寺」と記すものが114号住居より1点、「宮田寺」と内外面に記すものが47号住居より1点、「造佛」と記すものが114号住居より1点が出土している。これらの出土墨書土器の文字より、本遺構は、「宮田寺」と称された寺院であり、114号住居出土の「造佛」の墨書土器を年代の基準として用いるならば、「宮田寺」という寺院の初現は9世紀の第3四半期頃に比定され、その存続期間は他の寺院関係の墨書土器の年代より、10世紀初頭頃までは確実に存続していたものと考えられる。

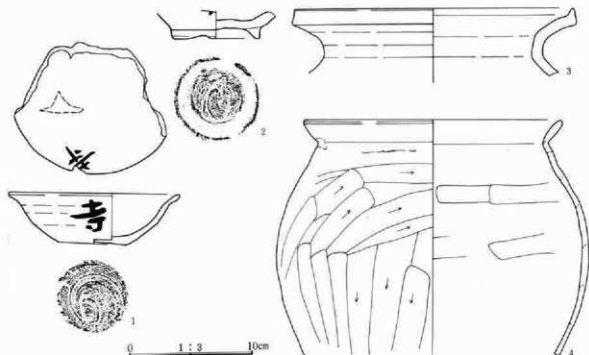
宮田寺の寺域としては、南側は調査区域外にかなり明らかではないが、西側・北側は2号・3号・6号溝が寺域を限るものと考えられ、東側については溝が検出されておらず、地形が谷地へ向かい傾斜していることから、地形変換点をもって寺域の境とし、寺域は約80mに及ぶものと考えられる。

この80m四方の寺域の中の調査区は約3分の2程を占めると考えられ、この範囲内に掘立柱建物跡が7棟と柵列が1条検出されているが、いづれも「宮田寺」に付随する遺構か否かは明らかではないが、114号住居跡は溝の外に位置するものの、出土する墨書土器の文字の多くが寺と密接に関係しており、宮田寺の造営に深く関与している遺構と考えられる。

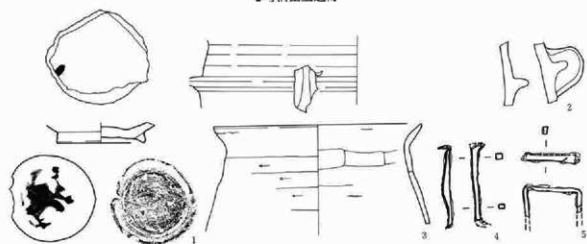
また、寺の正面については南側が未調査ではあるが、基壇部分を巡る溝の南側が開いていることから、南側を正面としていたと考えられる。

宮田寺の性格については推察の域を出ないが、その初現が集落に先行しないこと、屋根に瓦を用いていないこと、立地が必ずしも集落に優先せず、また集落の立地（配置）を左右しているとは考えられないことなどから、「官」（官寺）の様相は薄く、寺の造営の主体は「民」にある集落内寺院と考えられるが、造営の基盤が本遺跡を中心とする戸神の一集落のみであるか否かについては明らかでない。





2号溝出土遺物



6号溝出土遺物

寺院跡

遺物 番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏		13.8 × 3.9 × 6.0 底部～口縁部1/3	白色・石英細砂粒、赤褐色 粗砂粒 酸化気味 浅黄色	底部は右回転糸切り未調整。内面体部に 墨書の痕跡があるが、大半が欠けている。	墨書
②	須恵器 坏	寺跡確認部	12.4 × 4.2 × 5.6 小片	白色・石英粗砂粒 還元（酸 化気味） 濃い黄褐色	底部は右回転糸切り未調整。外面体部横 位で「有」の墨書がある。	墨書
3	須恵器 坏		14.2 × 4.2 × 7.0 小片	白色・石英細砂粒 還元、軟 質 灰色	内面底部に墨書があるが、大半が欠け ている。	墨書
④	須恵器 碗		14.8 × 5.2 × 5.4 高台～口縁部2/3	多量の白色・石英細・粗砂粒・ 細礫 還元、硝し気味	底部は右回転糸切り、外面体部横位で 「寺」の墨書あり。灰色、黄灰色。	墨書

第3章 検出遺構・遺物

遺物番号	種別	出土地	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
㊦	土師器 杯	寺跡確認面	12.0・3.5・ — 底部～口縁部1/4	少量の細砂粒、良好 にぶい褐色	平底、体部から口縁部は僅かに丸みをもつ。内外面に黒色の付着物が残る。	
㊧	須恵器 椀		—・—・7.4 口縁部欠損	多量の石英細・粗砂粒・細礫 還元 (酸化気味)	底部は右回転糸切り、外面体部横位「有」?の墨書あり。6の墨書と類似する。	墨書
㊨	須恵器 杯	寺跡確認面	12.4・4.0・6.6 口縁部2/3欠損	白色細・粗砂粒・細礫 石英・赤褐色粗砂粒 褐色	体部は直線的に開く。底部は右回転糸切り未調整。酸化気味。	
㊩	鉄製品 利器			片端は調査時の欠損。図上端部は丸みをおび、刃は付されていないがやや尖る。鍔は板目状となり、わずかに錆ぶくれがある。やや精緻造、残存長6.2+αcm、重3.4g。		

2号溝出土遺物観察表

遺物番号	種別	出土地	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 杯		12.6・4.0・5.3 底部～口縁部2/3	多量の白色・石英細砂粒・粗 砂粒・細礫 還元、軟質 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。体部は外面のみクロロ目が残り、口縁部が外反する。外面体部正位、内面体部斜位で「寺」の墨書あり。	墨書
②	須恵器 椀		—・—・6.6 高台～体部下位	石英の粗砂粒～細礫 還元 (酸化気味) にぶい黄色・	外面体部に墨書の痕跡があるが、大半が欠けている。	墨書
③	須恵器 葉	25.0cm	22.3・—・— 小片	白色細砂粒 焼し焼成 黒色	口縁部は一担立ち上り、上半が大きく開き、口唇部が直立する。	
④	土師器 葉	6.0・25.0・ 26.0・31.0	20.5・—・— 割部下位～口縁部 1/3	白～灰色細・粗砂粒、少量の 石英・角閃石の粗砂粒 酸化 にぶい赤褐色	胴部は大きく張り、口縁部は「コの字」状の崩れた形態であり、括れ部分に指頭痕を残す。	

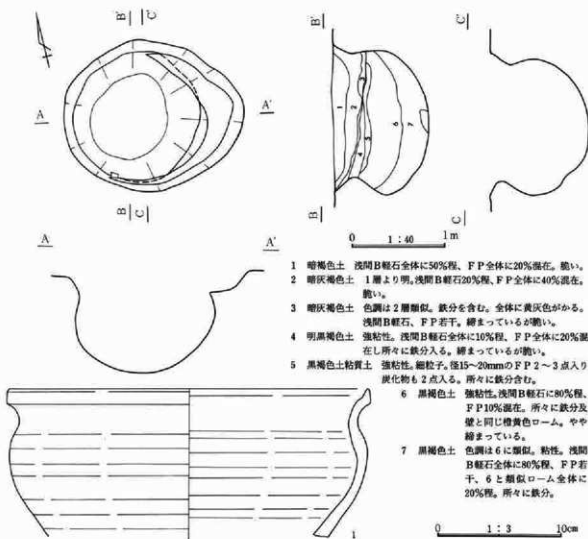
6号溝出土遺物観察表

遺物番号	種別	出土地	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 椀		—・—・7.0 高台～底部	白色・石英細・粗砂粒 還元 (酸化気味) 淡黄色	底部は右回転糸切り。外面底部に墨の痕跡がみられ、内面体部には墨書の痕跡があるが、大半が欠けている。	墨書
②	須恵器 羽釜	底面直上	—・—・— 小片	多量の白色細砂粒、石英粗 粒 還元 灰色	鈔の上に把手が付く、鈔の形態は端部が丸みをもち、他の羽釜とは異なる。鈔直下は撫で。	胎土分析
③	土師器 葉	15.0cm	16.6・—・— 小片	白色・石英・角閃石の粗砂粒 普通 褐色	口縁部は「コの字」状の崩れた形態である。	
④	鉄製品 釘	37.5cm		欠損は調査時。頭は素直へ折り曲。曲りは旧時である。鍔は径目割れが多く粗な鍛造。断面は方形を呈す。頭から曲りの先端まで6.3cmを測る。重8.0g。		
⑤	引手状 鉄製品	2.0cm		U字形の金具で門・引手金具と思われる。鍔は径目割れがやや多く、やや粗な鍛造。両端部は調査時の欠損。頭残存長5.1cm、重8.9g。		

第4項 井戸跡

1号井戸 (写真図版147頁)

位置 4B-16グリッド 規模 上径190~290cm、底径120~130cm、中径240cm、深度150cmを測る。平面上のプランは円~楕円形を呈し、断面形状は袋状を呈する。 所見 本遺構は井戸としては1.5mと極めて浅い深度ではあるが、遺跡南西の低地部分に位置し、地山VI層土にあたる濁乳白色ローム粘質土まで掘り込んでおり、この層は水の浸透性が悪く上面に含水層を形成する。このため、本井戸の湧水層は底面より約50cm程の所と考えられ、合わせて深度も浅いものと考えられる。また、本井戸は井戸枠等の痕跡も検出されず、使用時より素掘りの状態であったものと考えられ、井戸周辺よりピット等の上屋施設の痕跡も検出されていない。遺構形状において、東側部が多く狭れていることから、この方向よりの水の汲み上げが推察される。遺構の時期については、埋土より平安時代と考えられ、埋没には人為的埋戻しを示す様相はない。

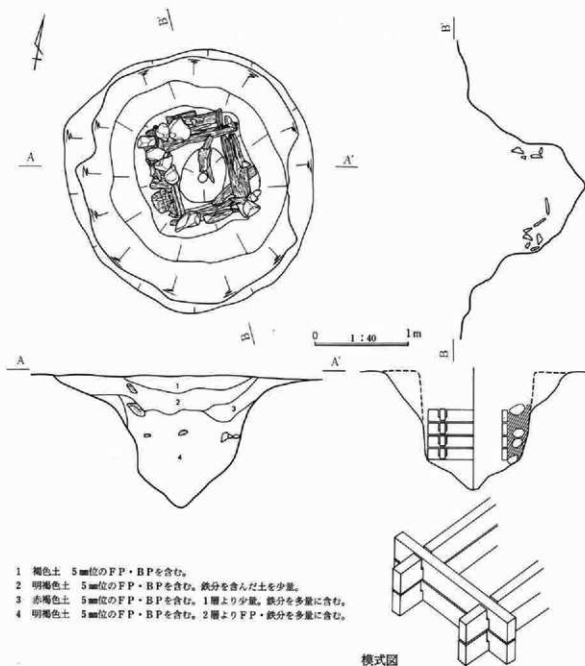


- 1 暗褐色土 洗間B軽石全体に50%程、F P全体に20%強在。脆い。
- 2 暗灰褐色土 1層より明。洗間B軽石20%程、F P全体に40%混在。脆い。
- 3 暗灰褐色土 色調は2層類似。鉄分を含む。全体に黄灰色がかる。洗間B軽石、F P若干。締まっているが脆い。
- 4 明黒褐色土 強粘性。洗間B軽石全体に10%程、F P全体に20%混在し所々に鉄分入る。締まっているが脆い。
- 5 黒褐色土粘質土 強粘性。細粒子。径15~20mmのF P 2~3点入り炭化物も2点入る。所々に鉄分含む。
- 6 黒褐色土 強粘性。洗間B軽石に80%程、F P 10%混在。所々に鉄分及礫と同じ橙黄色ローム。やや締まっている。
- 7 黒褐色土 色調は6に類似。粘性。洗間B軽石全体に80%程、F P若干。6と類似ローム全体に20%程。所々に鉄分。

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	須臾器 広口壺	埋土	29.0・ - ・ - 体部~口縁部/5	白色細・粗砂粒・細礫 還元 灰色	ロクロ整形。	

2号井戸・5号溝 (写真図版148頁、149頁)

位置 6J-3グリッド 規模 上径390~410cm、中径110~180cm、底径20~30cm、深度210cmを測り、平面上のプランは円形を呈し、断面形状は上部において摺り鉢状、下部において円筒形状、底面においては小さな摺り鉢状を呈する掘り方をもつ。 所見 本遺構は遺跡より検出された3基の井戸跡のうち、唯一井戸枠(井筒)を有する井戸であり、底面より約40cm程のところから約130cm程までの間に4段分の木枠組みが検出された。木枠材には栗材を用い、約10~15×140~150×5~6cm程の板状に加工し、端部(木口)より約20cm程の所に短辺の半分程までのくり込みを穿ち、くり込んだ部分どうしを上下に合わせる形で組み上げられていたものと考えられるが(下掲の模式図参照)、板状への加工は精巧なものではなく、自然木の凹凸を残し、くり込み部も同様に粗雑な成形であったと考えられる。本井戸の湧水層については、底面より約110cm

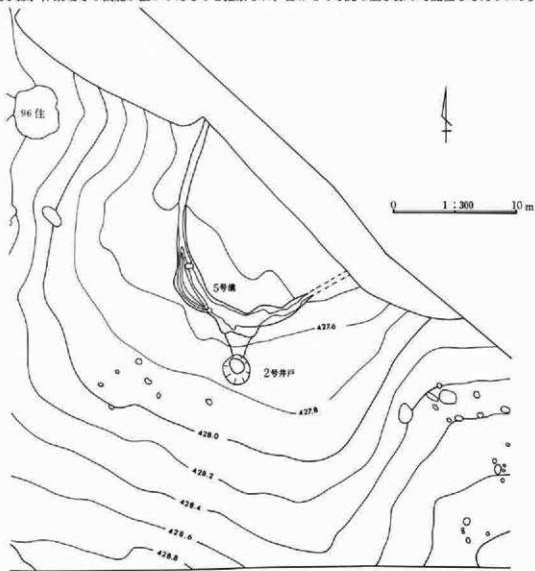


- 1 褐色土 5mm位のF・Pを含む。
- 2 明褐色土 5mm位のF・Pを含む。鉄分を含んだ土を少量。
- 3 赤褐色土 5mm位のF・Pを含む。1層より少量。鉄分を多量に含む。
- 4 明褐色土 5mm位のF・Pを含む。2層よりF・P・鉄分を多量に含む。

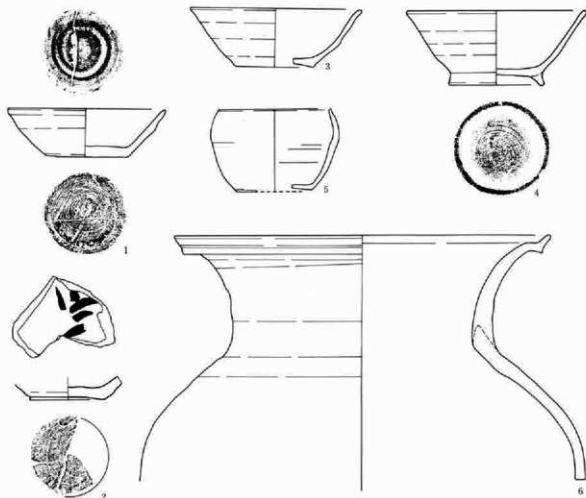
模式図

程のローム粘質土（地山VI層土）の上面と考えられ、残る4段の木枠組みの最上段付近よりの湧水となる。このローム粘質土の堆積状態は良好で、かたくりまりが強いため、崩落の心配は少ないように思え、検出された他の2基の井戸が同様の湧水層をもち、素掘りの状態での使用と判断されることから、本井戸の集落内での特殊性が窺われる。また、本井戸の埋没状況は、埋土土層断面に人為的な埋め戻しを示す様相はみられず、自然埋没によるもので、その時期は埋土より平安時代と判断される。

2号井戸に接し、その北側に上幅45～233cm、深度8～34cmを測り、平面プランが半円形状を呈し、断面形状はU字形状を呈する5号溝がある。井戸と溝とは遺跡東端の台地縁辺上に位置し、台地は北東方向へ向い緩やかに傾斜している。このため、5号溝は2号井戸と接する部分が一番高く、北方向と北東方向へ分岐し、緩やかに傾斜する。台地の北東は低地となり、現在も狭範囲ではあるが谷地水田が営まれている。これらのことから、5号溝は2号井戸の湧水を汲み上げ、水田へ通水するための溝であり、緩やかな傾斜と分岐する半円形のプランから、通水と同時に冷湧水を自然に温めながら水田へと導く機能を有すると推察されるが、本井戸のみが木枠組みを有する点、また、3基の井戸が集落内において等間隔に配されている点、本井戸が寺院跡の寺域内に位置する点などを考え合わせると、農業用水用としての機能のみならず、生活水としての協同水源、作業場等の機能が強かったものと推察され、合わせて寺院の聖水源の可能性も考えられる。



第3章 検出遺構・遺物



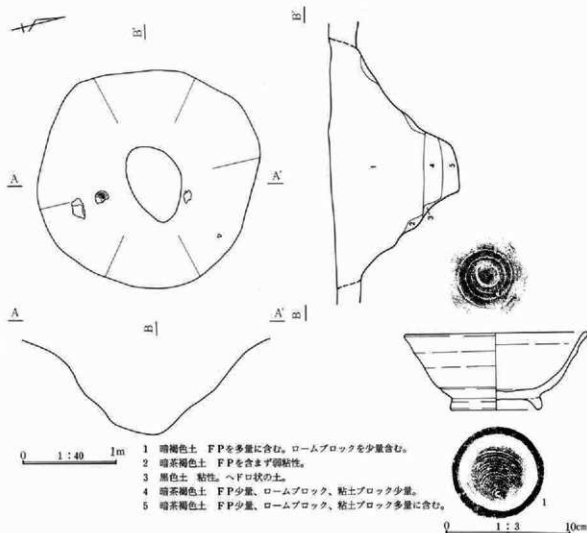
5号溝出土遺物

0 1:3 10cm

遺物番号	種別・器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 坏	2.0 9.0	12.6・3.8・6.7 口縁部一部欠損	白色・石英粗砂粒、赤褐色内 粗砂粒 焼し焼成 黒色	体部は直線的に開く。口縁部が若干括れ、上下に弱い稜をなす。内面の体・底部の境は明確である。内面底部は螺旋状の凹凸をもつ(左回転)。底部は右回転糸切、所々に稜の当りがみられる。	
②	須恵器 坏	埋土	-・-・5.7 底部～体下位2/3	石英粗砂粒・細礫 還元(酸 化気味) 淡黄色	底部は右回転糸切り未調整。内面底部に蓋書があるが薄く判読不能。	蓋書
③	須恵器 坏	7.0cm 埋土	13.6・4.7・6.3 1/3	白色細砂粒、石英細・粗砂粒 焼し焼成 黒色	体部は僅かに丸みをもち、口縁部は外反する。底部は右回転糸切り未調整。	
④	須恵器 椀	2.0 7.0 埋土	14.4・6.9・7.6 1/3	多量の白色細・粗砂粒、少量 の石英粗砂粒 還元、軟質 明褐色	体部は直線的に開き、器内も口縁部までほぼ均一である。内面底部は螺旋状の凹凸をもつ調整痕がみられる。底部は右回転糸切り。	
⑤	須恵器 椀	埋土	9.0・6.5・6.0 小片	白色細砂粒、黒色粗砂粒 還元 灰白色	ロクロ整形。底部は右回転糸切り未調整。	
⑥	須恵器 甕	12.0cm	29.8・-・- 胴部上位～口縁部 1/4	白色細・粗砂粒・細礫 還元 灰色	胴部から口縁部はロクロ整形。胴部外面は平行印き、内面は当て具の凹凸は残るが、伴に磨で消している。	

3号井戸 (写真図版147頁、147頁)

位置 0 D-21グリッド 規模 上径340~360cm、底径80~120cm、深度210cmを測る。平面上のプランは円形を呈し、断面形状は摺り鉢状を呈する。 所見 本井戸の湧水層は、底面より約1m程のローム粘質土(地山VI層土)の上面と考えられ、井戸枠等の痕跡は検出されず、素掘りの状態での使用された可能性が高い。また、井戸周辺より上屋施設の痕跡も検出されなかった。遺構の時期については埋土より平安時代と考えられ、埋没は自然堆積の様相を示す。本井戸は、遺跡のほぼ中央南側の低地部へさしかかる地点に位置し、1号井戸と2号井戸のほぼ中間地点にあたり、3基の井戸が同じ平安時代の遺構と考えられ、この時期の住居跡との関係を見ると、井戸は集落内において等間隔(約200m程)に設けられており、偶発的とは考えにくく、そこには集落内における協同利用水源としての井戸の計画的配置と同時存在性が窺える。



- 1 暗褐色土 F Pを多量に含む。ロームブロックを少量含む。
- 2 暗茶褐色土 F Pを含まず弱粘性。
- 3 黒色土 粘性。へドロ状の土。
- 4 暗茶褐色土 F P少量、ロームブロック、粘土ブロック少量。
- 5 暗茶褐色土 F P少量、ロームブロック、粘土ブロック多量に含む。

遺物番号	種別 器種	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 碗		14.5・6.1・7.2 口径部2/3欠損	多量の白色・石英細・粗砂粒 還元(酸化気味) にぶい黄褐色	体部は僅かに丸みをもち、口径部は外反する。底部は右回転糸切り、内面は縦線状の凹凸のある調整痕がみられる。	

第5項 土 坑 ・ 溝

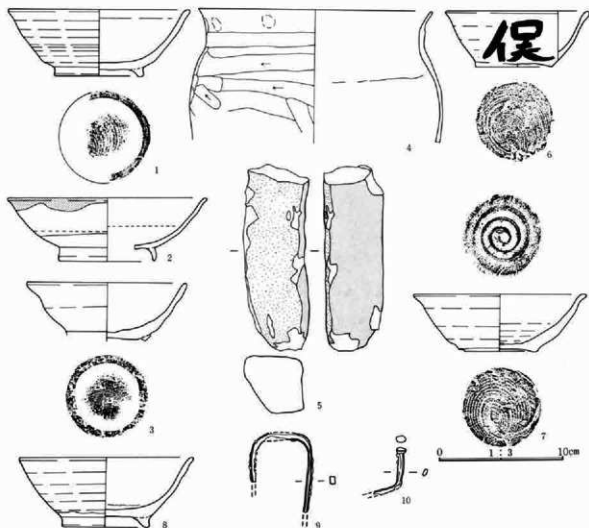
名称	位置	形状	計測値(cm) 長径・短径・深度	埋 土	時 期	備 考
土坑 1	21A-1.5	円 形	98× 89 × 23	F P 小粒子少量含	古墳前期以降	
2	21A-1.5	〃	94× 84 × 22	下層はF Pの混入なし	古墳前期?	
3	22A-1.5	〃	85× 80 × 18	F P 小粒子少量含	古墳前期以降	
4	6B-1.5	〃	98× 97 × 33	下層はF Pの混入なし	古墳前期?	
5	7B-1.5	楕円形	66× 45 × 28	〃 〃	〃	
6	7B-1.5	〃	80× 70 × 30	〃 〃	〃	
7	7B-1.8	円 形	73× 72 × 45	F P混入せず	古墳前期以前	
8	9B-1.7	楕円形	125× 93 × 18	〃	〃	
9	欠番					
10	9B-1.5	楕円形	80× 64 × 14	黒～暗褐色土、ローム	縄文時代	
11	欠番					
12	〃					
13	〃					
14	〃					
15	〃					
16	〃					
17	〃					
18	〃					
19	〃					
20	〃					
21	〃					
22	22B-1.2	楕円形	245×(185)× 69	暗～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット1穴。
23	欠番					
24	〃					
25	〃					
26	4C-1.3	円 形	114× 114 × 26	黒～黄褐色土、ローム	古墳前期以前	
27	2C-1.7	〃	76× 65 × 16	〃 〃	〃	
28	1C-1.8	〃	88× 75 × 19	〃 〃	〃	
29	0C-2.1	〃	131× 116 × 24	〃 〃	〃	
30	7B-1.8	楕円形	157× 152 × 27	〃 〃	〃	
31	8B-1.8	〃	199× 134 × 20	黒～暗褐色土、ローム	縄文時代	
32	8B-1.7	〃	125× 102 × 15	〃 〃	〃	
33	9B-1.7	〃	82× 66 × 16	〃 〃	〃	
34	10B-1.9	隅丸方形	76× 73 × 20	〃 〃	〃	
35	8B-1.5	楕円形	136× 82 × 20	暗褐色土、F Pを含む	古墳前期以降	
36	10B-1.6	円 形	92× 89 × 44	不明	不明	
37	13B-1.9	楕円形	162× 137 × 57	黒～暗褐色土、ローム	縄文時代	
38	14B-1.7	〃	212× 126 × 10	不明	不明	
39	13B-2.0	円 形	67× 64 × 22	〃	〃	
40	13B-2.0	〃	88× 77 × 32	〃	〃	
41	12B-1.9	楕円形	105× 84 × 18	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	
42	14B-2.0	方 形	65× 60 × 20	不明	不明	
43	14B-1.8	楕円形	103× 95 × 20	〃	〃	
44	13B-1.6	〃	177× 116 × 13	〃	〃	
45	13B-1.6	円 形	75× 72 × 5	〃	〃	
46	欠番					
47	15B-1.8	楕円形	70× 60 × 30	不明	不明	
48	18B-2.0	〃	97× 55 × -	〃	〃	
49	18B-1.5	円 形	151× 138 × 20	暗褐色土、F P含む	古墳前期以降	
50	22B-1.7	楕円形	193× 190 × 100	暗～明褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。
51	16B-1.8	円 形	91× 77 × 19	不明	不明	
52	3C-2.3	不明	189× - × 14	〃	〃	半分は調査区域外に。
53	3C-2.0	楕円形	195× 165 × 11	〃	〃	
54	3C-2.1	〃	221× 132 × 99	黒～明褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。
55	3C-2.0	〃	109× 90 × 24	暗～黄褐色土、ローム	〃	

注) 遺構番号については、可能な限り調査時の番号を踏襲したため、欠番が多数生じたことを了承願いたい。

名称	位置	形状	計測値(cm) 長径・短径・深度	埋土	時期	備考
56	2C-16	楕円形	240×132×90	黒～明褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。
57	22B-15	楕円形	287×131×54	黒	縄文時代	陥し穴。
58	12B-15	楕円形	162×123×-	不明	不明	
59	12B-15	楕円形	120×108×-	不明	平安時代以降	須恵環・壺破片出土。
60	8B-12	楕円形	156×105×77	暗～明褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。
61	23A-03	楕円形	244×126×105	黒	縄文時代	陥し穴。
62	22A-03	円形	122×110×63	黒褐色土主体、ローム	縄文時代	
63	21A-03	不明	-×86×76	褐～黄褐色土、ローム	縄文時代	
64	OB-03	楕円形	222×110×32	不明	不明	
65	OB-11	不整形	255×170×65	黒	縄文時代	71号住と重複
66	2F-2.3	楕円形	229×130×-	黒	平安時代以降	土師壺、羽釜破片出土。
67	13E-2.3	楕円形	216×153×105	暗褐色～暗黄白色土	縄文時代	陥し穴。
68		欠番				
69	21A-07	楕円形	122×77×28	赤褐色土、ローム	縄文時代?	
70	20A-07	楕円形	240×143×96	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。
71	21A-0.8	楕円形	116×96×64	黒	縄文時代	
72	21A-1.2	楕円形	100×53×-	不明	不明	
73	23A-1.1	楕円形	100×55×-	黒	縄文時代	
74	23A-1.1	楕円形	130×62×-	黒	縄文時代	
75	23A-1.2	楕円形	56×50×-	黒	縄文時代	
76	2B-0.4	不整形	153×99×-	黒	縄文時代	
77	2B-0.5	楕円形	130×100×-	黒～黒褐色土、ローム	縄文時代?	
78	3B-0.4	円形	50×50×-	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	
79	5B-0.9	楕円形	130×80×-	黒	縄文時代	
80	11B-0.7	楕円形	193×155×30	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	
81	8B-0.6	楕円形	205×143×80	黒	縄文時代	陥し穴。
82	7B-0.5	円形	123×113×85	黄褐色土、FP含	古墳前期以降	
83	7B-0.5	楕円形	178×130×84	黒	縄文時代	
84	7B-0.5	円形	90×95×44	黒～黄褐色土、FP含	古墳前期以降	
85	7B-0.4	不明	95×(55)×83	黒	縄文時代	北半分は調査区域外。
86	7B-0.6	楕円形	171×88×71	明茶褐色土、ローム	縄文時代	断面形状は筒状。
87		欠番				
88	14C-1.7	楕円形	180×(145)×18	不明	不明	134号住、91号土坑と重複。
89	7C-1.4	不整形	225×135×67	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代?	148号住と重複。
90		欠番				
91	15C-1.7	不整形	(270)×216×81	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	
92	6C-1.6	楕円形	170×90×90	黒～暗褐色土、ローム	縄文時代	
93	12C-1.4	楕円形	156×93×118	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	
94	3C-0.0	楕円形	172×100×85	黒	縄文時代	
95	17E-2.1	楕円形	210×144×100	黒	縄文時代	
96	22E-2.0	不整形	475×325×123	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	
97	18E-2.2	楕円形	200×91×109	黒～灰褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット2穴。
98	18E-1.6	楕円形	120×95×78	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。
99	14F-2.1	円形	150×128×79	暗～黒褐色土	縄文時代	断面形状は筒状。
100	18E-2.0	楕円形	148×108×40	暗～黄褐色土、ローム	縄文時代	石器1点出土。
101	10E-2.1	楕円形	170×98×112	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット2穴。
102	91-0.0	楕円形	130×100×-	不明	不明	
103	130-0.0	円形	110×110×-	黒	縄文時代	
104	9E-2.3	不整形	260×130×-	ローム、黒色土、粘土	縄文時代	風倒木痕
105	8E-2.2	楕円形	110×100×-	不明	不明	
106	9E-1.7	楕円形	179×110×92	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット3穴。
107	9E-1.6	楕円形	264×120×93	黒～黄白色土、ローム	縄文時代	陥し穴。
108	6E-2.3	楕円形	202×116×129	黒～灰褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。1穴。
109	241-0.1	楕円形	135×112×34	黒～黒褐色土、ローム	縄文時代	遺出土。(第1分層38頁参照)
110	241-0.0	楕円形	105×88×63	不明	不明	
111	10E-1.6	不明	-×129×64	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。
112	22E-0.1	楕円形	108×190×94	赤～黄褐色土、ローム	縄文時代	底部にビット2穴。
113	24E-2.4	楕円形	135×(106)×60	黒	縄文時代	81号住と重複。

名称	位置	形状	計測値(cm) 長さ・短径・深度	埋土	時期	備考
114	1J-00	楕円形	(125)×96×17	黒～褐色土、ローム	縄文時代	81号住と重複。
115	2E-19	円形	205×125×115	黒～灰褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット1穴。
116	24D-19	楕丸方形	180×122×110	黒～黄褐色土、ローム	#	# # #
117	22D-17	不整形	265×130×73	#	#	# # #
118	15D-22	#	160×90×-	黒色土、ローム、粘土	古墳時代以前	炭屑木炭。
119	19D-18	楕円形	163×100×103	黒～灰褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット1穴。
120	7D-15	#	196×170×120	黒～黄褐色土、ローム	#	# # # 1穴。
121	1D-14	#	214×120×83	#	#	# # # 5穴。
122	2D-14	#	216×128×113	黒～黄色土、ローム	#	# # # 1穴。
123	2D-16	#	188×113×88	黒～黄褐色土、ローム	#	# # # 5穴。
124	欠番					
125	6D-15	円形	170×157×19	黒～黄褐色土、F P 無	古墳時代以前	古式土師甕破片出土。
126	6D-16	不整形	182×126×30	黒～茶褐色土、F P 無	#	#
127	23E-22	楕円形	133×88×56	不明	平安時代以降	須恵坑・壘、土師壘、灰輪等出土。
128	3D-17	楕丸方形	415×233×54	黒～暗褐色土、ローム	縄文時代?	#
129	14D-16	楕円形	250×(148)×88	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット2穴。
130	5D-14	#	202×75×37	不明	#	#
131	20C-12	#	195×90×100	黒～灰白色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット1穴。
132	22C-14	#	293×133×112	黒～黄褐色土、ローム	#	# # #
133	22C-16	#	256×146×23	不明	#	#
134	18C-14	#	220×118×100	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット1穴。
135	22C-13	#	212×110×117	#	#	# # #
136	13C-13	円形	140×112×55	#	#	#
137	11C-15	楕円形	170×155×104	黒～茶褐色土、ローム	#	陥し穴。底部にビット1穴。
138	13C-15	#	235×150×120	黒～黄褐色土、ローム	#	#
139	16C-12	#	200×106×126	黒～黄褐色土、ローム	#	# # 底部にビット1穴。
140	10C-11	#	128×(80)×22	黒～褐色土、ローム	縄文時代?	147号住と重複。焼土、灰を検出。
141	6E-19	#	185×130×73	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。底部にビット1穴。
142	21C-20	#	275×130×20	黒～灰褐色土、粘土	古墳前期以前	#
143	欠番					
144	9F-24	円形	120×115×80	暗～明褐色土、ローム	縄文時代?	81号住と重複。
145	4B-08	長楕円形	183×78×99	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。90号住と重複。
146	8E-08	円形	220×210×38	不明	不明	#
147	0C-11	楕円形	157×101×34	明黒～褐色土、ローム	縄文時代	31号住と重複。
148	23B-15	#	208×158×38	不明	不明	#
149	9C-13	長楕円形	157×93×109	黒～茶褐色土、ローム	縄文時代	陥し穴。
150	4D-19	楕円形	280×189×30	不明	不明	#
151	9D-19	不整形	610×395×82	#	#	#
152	0D-16	楕円形	318×125×80	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代?	陥し穴?。157号住と重複。
153	3D-21	#	406×357×56	不明	不明	#
154	15E-24	円形	187×165×12	#	#	#
155	15E-24	不整形	248×150×22	#	#	#
156	2D-17	楕円形	206×170×14	#	#	#
157	8E-23	不整形	329×120×14	#	#	#
158	11E-23	楕円形	140×110×14	灰白～黒褐色土、F P	平安時代?	鉄屑を出土。
159	9H-00	円形	55×55×12	#	平安時代以降	須恵坑出土。
160	5D-24	円形	53×50×32	黒～黄褐色土、ローム	縄文時代	#
161	10H-03	円形	83×68×44	暗褐色土、F P 多含	平安時代以降	灰輪破片出土。
162	9H-02	楕円形	114×94×57	#	#	土師壘、羽釜破片出土。
163	10H-05	円形	31×28×28	不明	不明	#
164	4H-02	#	100×100×19	暗褐色土、F P 多含	平安時代以降	須恵坑、羽釜破片出土。
165	9D-24	楕円形	110×65×10	不明	不明	#
166	9H-02	#	93×63×18	暗褐色土、F P 多含	平安時代以降	須恵坑、土師壘、羽釜破片出土。
167	8H-00	円形	80×70×12	不明	不明	#
168	21H-05	不整形	134×87×24	暗褐色土、F P 多含	平安時代以降	須恵坑、埴破片出土。61住と重複。
169	17H-01	円形	124×113×29	黒～黒褐色土、F P 多含	古墳前期以降	焼土含。
170	8I-00	#	200×194×39	暗褐色土、F P 多含	平安時代以降	土師壘破片出土。
171	19I-03	#	50×49×20	#	#	須恵坑破片出土。

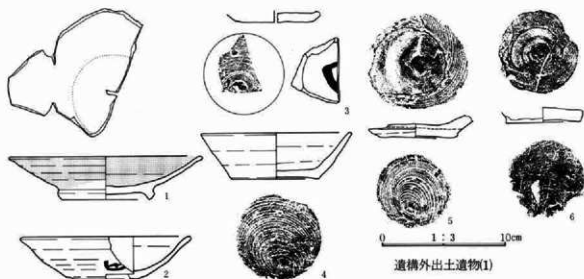
名称	位置	形状	計測値(cm) 長径・短径・深度	埋土	時期	備考
172	21I-03	円形	41×33×16	不明	不明	
173	20I-04	円形	48×45×38	不明	不明	
174	19I-04	円形	55×45×82	暗褐色土、F P多含	平安時代以降	土師製破片出土。
175	21I-04	円形	60×55×51	不明	不明	獨立柱穴心。
176	20I-04	円形	30×28×17	暗～明褐色土、F P含	平安時代以降	土師製破片出土。獨立柱穴心。
177	22I-04	円形	50×47×33	不明	不明	須恵製破片出土。
178	24I-04	楕円形	150×105×16	不明	不明	須恵環破片出土。
179	12B-14	円形	148×120×54	黒～明褐色土、F P含	不明	羽釜破片出土。皮化物を檢出。
180	17B-16	円形	143×143×57	不明	不明	須恵環破片出土。88号住と重複。
181	9B-13	円形	155×145×32	不明	不明	
182	5B-12	楕円形	222×120×-	不明	不明	
183	5B-12	円形	122×119×-	暗～黄褐色土、F P少	古墳時代?	
溝	1	13H-02	上幅141・底幅89・深度27	暗～黒褐色土、F P含	平安時代	地形等高線に沿った走向。境界心。
2	6E-19	上幅144・底幅65・深度45	不明	不明	不明	寺院(宮田寺)の寺院境界。
3	5H-03	上幅95・底幅58・深度21	不明	不明	不明	
4	穴蓋					
5	7J-03	上幅267・底幅235・深度10	暗～黒褐色土、F P含	平安時代	2号井戸に付随。灌漑用通水溝?	
6	21E-20	上幅91・底幅61・深度33	不明	不明	不明	寺院(宮田寺)の寺院境界。
7	2B-11	上幅53・底幅13・深度35	埋土内にF P混入せず	古墳時代前期	不明	一辺22mの方形に巡る。入口部有。



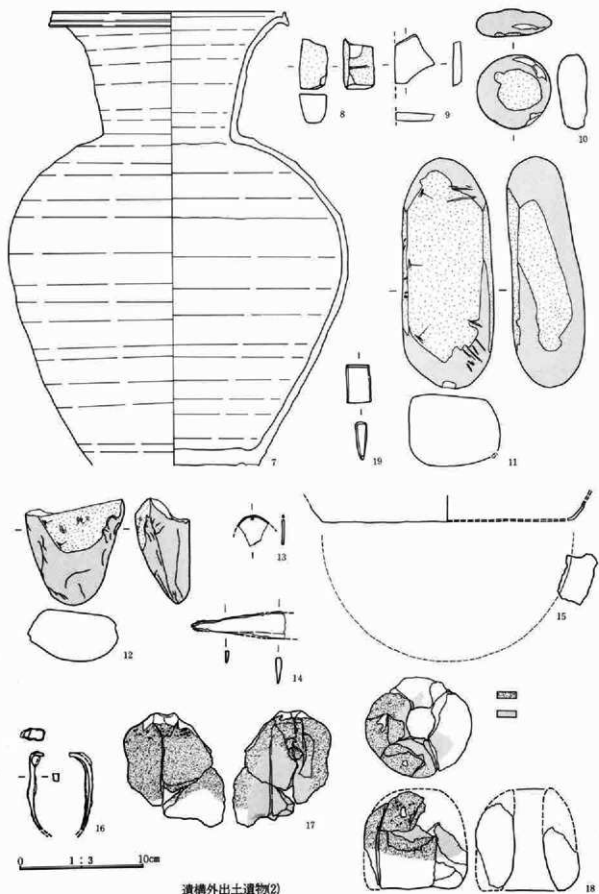
土坑・溝出土遺物

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
①	須恵器 碗	30土坑 5.0cm	14.4・5.2・7.0 1/4	白色細砂粒、石英粗砂粒・細 塵 還元、軟質 灰黄色	体部はほぼ直線的、口縁部は僅かに外反、 高台は底径よりも内側に貼付される。底 部は右回転糸切り後、周辺部は高台貼付 時に回転無。	
②	反輪陶 器 碗	34土坑 10.0cm	15.8・5.0・7.8	夾雑物はほとんどなく緻密 還元 灰白色	体部は緩やかに開き、口唇部が僅かに外 反するが丸みをもつ。体部下位は回転削 削りの後回転無、内面も丁寧に調整され ている。破損部分まで旋輪された痕跡が あるが、透明になっており不明。	
③	須恵器 碗	42土坑 埋土	12.8・ - ・ - 口縁部一部、底部 欠損	赤褐色・黒色円粗砂粒 少量の白色細砂粒 酸化 褐色	基本的に左側の形態と思われるが、焼き ひずみによって右側が立ち上っている。 底部は右回転糸切り、周辺は高台貼付時 の回転無で。	
④	土師器 羹	44土坑 埋土	18.6・ - ・ - 胴中心へ口縁2/3	細砂粒、雪母、赤褐色粗砂粒 普通 におい褐色	口縁部は「コ」の字状を呈するが、屈曲 はあまり強くない。	
⑤	石製品 砥石	53土坑	自然石（河原石）	利用砥である。使用は器表面側のみである。質は極めて硬質であるにもかかわらず石成 の凹凸にも耗があるので研磨主体は金属・石ではない。石材は細粒安山岩。		
⑥	須恵器 坏	54土坑 埋土	11.3・3.4・6.0 完形	白色・石英細・粗砂粒・細塵 還元、軟質 灰白色	底部は右回転糸切り未調整。外面体部正 位で「俣」の墨書あり。	墨書
⑦	須恵器 坏	54土坑 埋土	13.8・4.5・6.3 口縁部一部欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元（酸化気味） におい黄 褐色	体部は丸みをもち、口縁部は外反する。 内面は底部から体部下位まで縦線状の凹 凸をもつ調整痕がみられる。底部右回転 糸切り未調整。	
⑧	須恵器 碗	67土坑 埋土	13.3・5.5・6.9 体部一口縁部1/3 欠損	白色・石英細・粗砂粒 還元（酸化気味） 灰黄褐色	体部はやや丸みをもつ。内面底部には同 高台位の重ね焼き痕がみられる。底部は 高台貼付時に回転無で。	
⑨	引手状 鉄製品	1溝 床直	U字形の金具で門・引手金具と思われる。鍛は径目割れがやや多く、やや粗な鍛造。両端部は調査時の欠 損。残存長5.0cm、重10.6cm。			
⑩	鉄製品 釘	1溝 23.0cm	先端部は調査時の欠損。頭は素径へ折曲。鍛は径目割れがあり、やや粗な鍛造。曲は旧時である。重から 残存先端まで4.1cmを測る。重1.6g。			

第6項 遺構外出土遺物



遺構外出土遺物(1)



遺構外出土遺物(2)

第3章 検出遺構・遺物

遺物番号	種別	出土位置	量目 (cm) 口径・器高・底径	胎土・焼成・色調	器形・整形の特徴	備考
1	灰釉陶器 皿	0 C-10	15.4・3.4・7.0 高台へ口縁部1/4	微量の白色細砂粒 還元 (酸化気味) ぶい・黄褐色 軸は灰白色	口縁部は丸みをもって僅かに外反する。高台は、外面に強い線をもち三ヶ月高台、底部は凹転擲で、軸は研毛塗り。重ね焼きによる輪状の痕跡がある。内面底部は滑らか。	転用硯
2	須恵器 坏	40住 3 C-17	13.6・3.4・5.0 小片	白色・石英細・粗砂粒 還元 灰白色	外面体部に墨書があるが、判読不能。	墨書
3	須恵器 坏	134住 15 C-17	- - - - 小片	白色細・粗砂粒 還元 (酸化気味) ぶい・褐色	底部は左回転未切り未調整。外面底部に墨書あり。欠けているため判読不能。	墨書
④	須恵器 坏	20 B-20 確認面	12.0・3.65・7.0	白色細砂粒、少量の石英・長石の細・粗砂粒 焼成済 暗灰色	体部は直線的に開く。器内はやや厚手で口唇部に向かって薄くなる。底部は右回転未切り未調整。	
⑤	須恵器 椀	- - - - 底部のみ	- - - - 6.1	白色・石英細・粗砂粒 還元、軟質 灰・黒色	内面底部の剝離した部分に回転未切りの痕跡がみられる。底部は右回転未切り未調整。	
⑥	須恵器 坏	試掘 NT-7	- - - - 5.9 底部のみ	少量の白色・石英の細・粗砂粒 還元、軟質 灰白色	底部のみの破片であり、体部の剝がれた部分に回転未切り痕がみられる。	
⑦	須恵器 壺	0 C-11	19.2・ - ・13.3 底部へ口縁部7/8	白色細・粗砂粒 還元 灰色	高台部を欠く。把手が1つ付いたと思われる円形の剝離痕が見られる。ロコ口整形。	
⑧	石製品 砥石	表採		鳴滝紋に匹敵する良質粒砥。使用は割口を敷き全面使用されている。裏面に刃物傷あり。研磨主体は金属。質は軟か目の名倉砥。材質は流紋岩 (砥研石)。		
9	石製品 砥石	0 F-20		使用面は剝落のため一切残っていない。側部と奥の小口は当初からの面で石切りによって生じた錆痕が認められる。質は硬目である。材質は石材鑑定を待たないため不明である。		
⑩	石製品 砥石	表採 0 F-03		自然石の内蔵使用砥で図表面のみずか、金属・石を除く研磨主体の使用痕あり。質は極めて硬い。材質は細粒安山岩。		
⑪	石製品 砥石	表採		自然石 (河原石) 利用砥。使用は図表面と側部で裏面はなく裏砥である。表面側に刃物傷あり。研磨主体は金属。質は極めて硬い。材質は板灰岩質砂岩。		
⑫	石製品 砥石	表採		自然石 (河原石) 利用砥。使用は図表面側のみで、研磨主体は金属から軟質の物体を用いたらしく細かな刃傷と凹凸成りに疵がおよんでいる。やや軟質。材質は粗粒安山岩。		
⑬	板状鉄製品	表採		紡錘形を呈する板状金物の破片で、欠損は旧時である。上方に小穴がある。錆は錆ぶくれが少なく良質を思わせる。残存長2.3+cm、重1.4g。		
⑭	鉄製品 表採			板状の金物でやや曲りが付けられている。錆は錆ぶくれがわずかにある。両端は調査時の欠損。残存長6.2+cm、重6.5g。		
⑮	鉄製品 表採			板状の金物で全体に曲げられ、筒金物の破片かも知れない。錆は錆ぶくれが少なく良質を思わせる。残存長3.9+cm、重5.4g。		
⑯	鉄製品 釘	表採		先端部は素延べの押しつぶしてある。先端部をわずかに調査時欠損する。鍍は極目割が顕著で粗な鍛造である。頭の端部から曲りの先端まで6.1cmを測る。重5.3g。		
⑰	土製品 羽口	21 A-15		3分の1以下の破片で酸化・還元・還元部分に分かれる。還元部は胎土が飛出し、先端に藍澤が付く。藍澤は暗黒褐色で鉄が銅分の作用か不明。穴は特異丸長方形で長径2.6cm、推定直径9.0cm、羽口長7.5cm。		
⑱	土製品 羽口	11 E-24		部分欠損あり。酸化・還元・還元部分に分かれる。還元部の胎土の飛出しは少ない。先端に藍澤が付く。藍澤は暗黒褐色で、鉄が銅分不明。羽口穴は先廻りとなり最大径3.5cm、直径7.3cm、羽口長7.5cm。		
19	銅製品 組	表採		鍍は薄層。形は一重銅で平造り用。本例は銅の長さと巾が方形にならず長方形なので極めて古様。室町時代以前か。重9.1g。材質は素銅ではなく合金銅の錆色。刃側に磨材付あり。		

第4章 調査の成果

第1節 遺構

第1項 縄文時代の陥し穴について

本遺跡で検出した縄文時代に帰属すると考えられる土坑のうち、いわゆる陥し穴として認定できるものについて若干の私見を述べておきたい。

地形と分布状況 調査区内では東西方向において、なだらかな起伏が連続して見られるが、中央に南から入る浅い谷頭が見られる。全体的には西の小沢川に向かい次第に下って行く地形である。標高は420m～430mである。

陥し穴は調査区のほぼ全域で検出されているが、中央部にやや集中する傾向が見られる。本遺跡は西と東が河川で切られており、北に位置する戸神山からのびた裾野が南に広がり比較的平坦な地形に変換する部分であると言える。陥し穴は、おおそ東西に連なって配置され、明らかに猪が好むヌグと呼ばれるような湿地へと向かう所に、機能的かつ合理的に配されている。陥し穴は等高線に対して長軸が直交するもの、また平行するものがあるが、その数は直交（傾斜の方向）するものほうがはるかに多い。こうした傾向は他遺跡の調査例においても同様な所見が得られている。

平面形状及び断面形状 調査したものの内、平面の形状で多いのは長円、隅丸長方形である。規模は長軸が150～250cm、短軸が90～150cmの規模の中にほとんどが集中している。深さは100～120cmで壁はほぼ垂直で上部が開く漏斗状を呈するものが多いが、城平遺跡で見られたような、下部が極端に狭まるいわゆるTピット状の陥し穴は見られない。

底面のピットについて 陥し穴と認定した土坑については、いわゆる逆茂木を差し込んだ痕と考えられる小ピットを検出したものがある。ピットの数は0～5本までみられたが、4本のものは無かった。これを表にしてみると次のようである。

ピット	0本	1本	2本	3本	4本	5本
土坑数	16	15	4	2	0	2

陥し穴と考えられる土坑の総数は39基で、ピット数0ないし1本のものが全体のほぼ8割を占めている。このことは、逆茂木が陥し穴において、無くてはならないものではない事を示しており、さらには、複数のものの中には当然、本来1本であったものが、補修あるいは補充の結果2本、3本あるいはそれ以上の痕跡を残す結果になったものが含まれていることを考えると、逆茂木の効能は重要視されていなかったことが考えられる。なお、こうした陥し穴において底面ばかりでなく側面におけるピットの存在に注意を促す研究者もいる（註）が若干ではあるが本遺跡においても認められた、いずれも斜め上方へ向かって開口している。（94号土坑、101号土坑、123号土坑）

土坑調査時において、より詳細な断面観察を行うために埋土を断面スライス法により、調査を実施したものが、この観察結果について述べておきたい。

調査を実施したものは107号、108号、119号、129号、131号の5基で、底部ピットの存在が5基のすべてより断面により確認された。土坑の埋土はいずれも極めて類似した様相を呈しており、上部には少量のローム

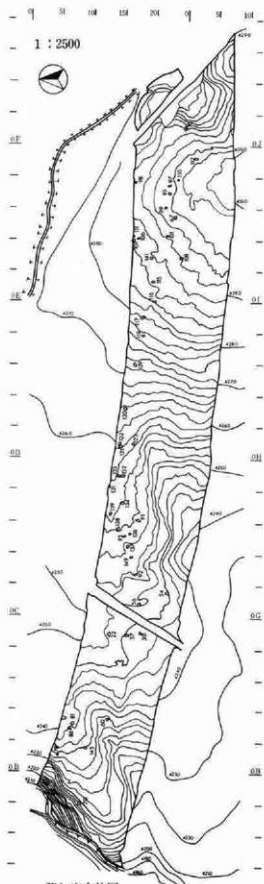
粒子を含む黒色土が見られ、下部、及び壁際にはブロック状のロームや灰白色の粘土ブロックを多く含む土で充填された自然埋没の状況が観察されている。ただし底面に近い場所では一部不自然な堆積状況が看取されたが具体的に何を意味するのかわかり、不明である。また底面ピットの在るものについては、いわゆる逆茂木の痕跡と判断された。この中で注意されたのは、断面でピットの両側に見られる厚さ数cmの灰褐色の地山層がピット部分で下に落ち込んで見られたことである。このことから逆茂木を底面に付設する際に穴を掘らずに打ち込んでおり、しかもその打ち込まれた先端部は尖っていないことが示している。このことは、逆茂木の上端部分は打ち込まれた時点では尖っていなかったと推定される。打ち込んだ後で削ったのか、それとも先端を尖らせた別の木を装着していたのであろうか疑問のあるところである。(註)

陥し穴の縄属時期に関しては、土坑中より出土土器が無いことから判断に苦しむ所であるが、埋土の状況などから縄文時代早期末から前期に考えられよう。

(註) 霧ヶ丘遺跡の調査例の中にも、土坑の底に杭を立てる時に明らかに打ち込んでいるものがあると報告されている。また逆茂木に関しても、上端部が尖っていない例も民俗例にあることが紹介されている。

参考文献

- 今村密爾 「霧ヶ丘遺跡の土壌群に関する考察」『霧ヶ丘 霧ヶ丘遺跡調査報告』1973
 岩崎泰一 「城平遺跡・諏訪遺跡」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
 水田松、石北直樹 「石墓遺跡」沼田市教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団 1985
 菊池寛 「十二原遺跡検出の陥し穴群について」『三後沢遺跡・十二原遺跡』群馬県教育委員会、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
 菊池寛、菊池誠一 「縄文時代の陥し穴調査二題」『群馬文化』第198号 群馬県地域文化研究協議会 1983



陥し穴全体図

第2項 奈良・平安時代の遺構

奈良時代と考えられる遺構としては住居跡5軒を検出し、平安時代の遺構は住居跡91軒、掘立柱建物跡32棟、寺院跡1、井戸跡3基、溝跡1条、土坑18基を検出している。調査区内には南北方向に3本の沢状低地が入り、西側の2本は南西（小沢川）方向に向かって傾斜し、東端部の沢状低地は、そのまま調査区域外の低地（現水田面）に続いている。この沢状低地を除いた微高地上に遺構が作られている。

住居跡の時期別の分布については、284～287頁に、各段階毎の全体図を掲載した。奈良時代に属するⅠ段階は1軒のみ、Ⅱ段階は4軒の検出である。共に中央を走る沢状低地の北側、調査区西側中央寄りにまとまりを持つ。Ⅲ段階も同様の占地であるが、住居跡数は8軒を数え、この段階から急激に増加していく感がある。Ⅳ段階は13軒となり、調査区の東側及び西側端まで全面的に展開していく。Ⅴ段階には11軒を数える。114号住からは「造佛」の墨書土器が出土しており、この段階に寺院が営まれたと考えられる。寺院は調査区域内の最も広い微高地上に占地している。北・西側を溝で区画し、東側は沢状低地が入り込み、自然地形に囲われている。南側は調査区域外になるが、さらに寺域が広がっていると思われる。Ⅵ段階は2軒と減少してしまうが、この段階には「宮田寺」の墨書土器が出土しており、集落が縮小するとは考え難い。しかし土器型式からはⅤ・Ⅵ段階の間に1段階設定できるため、占地が変わることに疑問を残すが、47号住の南側に展開していく可能性も考えたい。Ⅶ段階は、15軒と再び多くの住居跡を検出しており、29軒を検出したⅧ段階と共に、この集落でのピークをなす。Ⅸ段階には6軒と激減し、11世紀前後の遺構は検出されず、11世紀中頃と考えられる住居跡が1軒のみ検出されている。それ以後、中世以降の出土遺物も非常に少なく空間地となってしまうようである。また、住居跡の規模や占地、特に寺域周辺に占地するものなど、なんらかの特色があると考えられるが、そこまで考察が及ばなかったで以下のような分類に留めた。住居形態として、準正方形・横長長方形・縦長長方形とさらに規模により分け、段階別に一覧表を作成した。

形態	準正方形				横長長方形			縦長長方形			
	特大	大	中	小	大	中	小	特大	大	中	小
Ⅰ					135						
Ⅱ			5				6・123				
Ⅲ		10・23	123		18・141	121				112・131	
Ⅳ	51	86	92		93・118 119	126			44・62		
Ⅴ		80・136	117	7		58・63・138	130・133	114	9		
Ⅵ						47・94					
Ⅶ	109	81	102	98		17・46・96 137・155	95・101 125				
Ⅷ		2	54	45・56 70・128 129・139		9・27・48・54 55・66・68・71 84・91・97	45・57・59 70・82・163 128・129・139				83・115
Ⅸ					49・50	8・99・111	64				

準正方形—特大634～710×574～640cm 大490～570×450～540cm 中376～440×309～410cm
小313～400×254～330cm

第4章 調査成果

横長長方形—大510～581×370～450cm 中415～505×290～440cm 小312～388×233～320cm
縦長長方形—特大820×280cm 大485～538×400～413cm 中350～411×291～316cm 小275～305×245～260cm

掘立柱建物跡については、埋土にFPを含む(30・32掘立を除く)ことから、FP以降であり、さらに住居跡の時代が奈良時代後半から平安時代に限定されることから、同時代と想定されるのみで、それ以上の時期を求め細分することは難しい。住居跡と重複しているものとしては3・16・20掘立であり、3掘立は新旧関係不明、16掘立は86住(IV段階)より新しく、20掘立は132住(III段階)より新しい。また8掘立は柱穴からV段階相当の土師器壺が出土している。しかし、各段階の住居跡に対応する掘立柱建物跡がどれに当たるかは、方位や占地状態を考慮しても特定することは難しい。各段階の住居跡をみれば、散在するものではなく、数軒づつまとまる傾向が見られ、掘立柱建物跡も近接しているものが組み合わさると考えられる。

調査区域内に入る3本の沢状低地には、それぞれ井戸跡が検出されており、遺跡(集落)内において等間隔に配されている。東端部の沢状低地にある2号井戸は、ゆるめ状遺構と考えられる弧状の溝を併っている。この下に広がる東側から北側の低地は現在水田となっており、当時においても、この水田部分を生産域とすることに妥当性がある。今回の調査により当遺跡の奈良・平安時代においては、居住域とさらにこの集落が抱える寺院等、この遺跡を考える上での興味深い資料が得られたが、さらに寺院の南側、この平安時代集落の一部と考えられる部分の調査が、1989年度に予定されており、その成果に期待し併せて考察したい。

掘り方については、各住居跡の記述の中に掘り方の項目を設け、写真を載せることとし、個々の図面は紙数の制限もあり掲載しなかった。形態についてはいくつかのパターンに分けることが可能であるため、A～Fに分類し、それぞれの分類に、土器型式による各段階の住居を対応させて一覧表を作成した。

まず、Aは住居中央に1基の土坑を有するもので、Bは中央以外の場所から1基検出されるものである。Cは2基以上持つものであり、()内にはその土坑数を記した。Dは中央部分を残して周辺部を掘り下げるものであり、Eはコーナーや、中央部分などを部分的に掘り下げるものである。最後にローム面・掘り下げ面を直接床面としているものをFとした。掘り方は、土坑を数基持つものが圧倒的に多いが、時期による特徴はなく、占地場所による違いも見られない。各段階は、ほとんどのパターンが存在していると言える。

	A	B	C	D	E	F
I						135
II	5	123		5		
III	112	132	8(7)・23(2)・121(3)	10・141(3)		131
IV	110	127	51(15)・53(2)・62(5)・86(4)・92(2)・118(2)・119(2)・126(4)	44	93	67
V	58・133	117	7(3)・63(7)・69(3)・80(2)・114(6)・136(6)・138(2)	130		
VI			47(3)		94	
VII	96		101(2)・102(3)	81		17・46・95・98・109・124・125・137・155
VIII	9・66・82・91・97・129・139	55・56	27(3)・68(4)・71(6)・79(6)・84(5)	54・83	128	2・4・20・45・48・57・59・65・70・115・163
IX	111			8・50	49	64・99

第2節 遺物

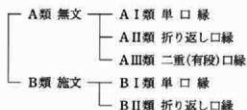
第1項 弥生時代後期～古墳時代前期の土器について

1. 土器分類

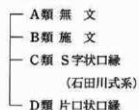
本遺跡より検出された弥生時代後期から古墳時代前期にかけての整穴住居跡は70軒を数えるが、後述のとおり、その出土遺物や組成には過渡期的な様相が窺われるため、ここでは、弥生時代と古墳時代とを分化せず資料分析を行うが、両時代ごとの研究上の分類方法や用語に若干の差異が認められ、これに統一を図ることで分類上で齟齬をきたす危険と、編年上区分の不明瞭化が危惧されるが、一地域における過渡期の特性を明らかにするため、一連性を重視した分類を行った。また、各器種ごとの分類に際し、器形を重視した分類が望ましかったが、前期の事情により一部施文の有無等をもとに分類を計った。

以下に器種分類と類系を図示し、後に分化の基準と委細を記す。

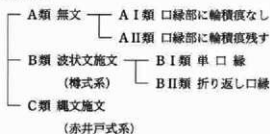
◎壺形土器



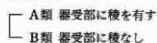
◎台付甕形土器



◎甕形土器



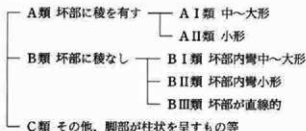
◎器台形土器



◎鉢・埴形土器



◎高坏形土器



◎甔形土器

◎手捏ね・ミニチュア形土器

壺形土器 外面の口縁部下～胴部に施される文様の有無により大別した。無文のものをA類とし、さらに口縁部の形状により、単口縁のものをA I類、折り返し口縁のものをA II類、二重(有段)口縁のものをA III類と3細分した。A類は全般的に胴部が球体を呈し、最大径は胴部中位にある。頸部のくびれは強く「く」

の字状を呈し、緩やかに外反する。器面の整形は内外面に丁寧な研磨を施すものと、内外面撫でもの、内外面刷毛目調整後に外面胴部上位や内面口縁部付近に研磨を施すものなどがあるが、類型別による差異や偏りは認められない。このA類に対し口縁部下～胴部にかけて施文されているものをB類とした。このB類は北関東西部地方の後期弥生土器として位置付けられた樽式系の土器であり、細分化はA類同様口縁部の形状により、単口縁のものをBⅠ類、折り返し口縁のものをBⅡ類と2細分した。BⅠ類は文様の構成からさらに、頸部～胴部上位に櫛描きの簾状文+波状文を施すものと、櫛描きのT字文を施すものがあり器形上にも若干の差異が認められるが、出土個体数も少ないため細分化は行わずに扱った。整形は外面頸部と胴部文様下位に丁寧な研磨を施す。BⅡ類は器形的にはBⅠ類と類似する。文様構成は頸部～胴部上位に櫛描きのT字文を施し、その下に櫛描きの波状文を施すもの(11住-27)と、T字文下にやや舌状の鋸歯文の中を平行沈線で充填し円盤状浮文を付加するもの(11住-28)の2種が認められるが、両者共に折り返し口縁部上への施文は見られない。整形は外面に丁寧な研磨を施す。B類全体の特徴として、中型から大型品が多く見られる。

甕形土器 外面の口縁部下～胴部に施される文様の有無とその種類により大別した。無文のものをA類とし、その細分化は口縁部～頸部に故意的に輪積の痕跡を残すものをAⅡ類とし、逆に残さないものをAⅠ類とした。このA類は遺跡出土の甕形土器のなかでも量的に最も多く、とりわけAⅡ類の出土が目立つ。AⅡは器形の上でもバラエティーに富み、最大径の位置や頸部の長さ、口縁部の立ち上がり、口唇部の形状(口唇部に平坦面をもつか否か)、輪積痕上に指頭圧痕を残すものと刷毛目調整するもの、整形面においても外面に刷毛目調整を残すもの、研磨を施すもの、内面全体を研磨するものと一部研磨するものなど、なお細分化が可能かと思われるが、最大の特徴として口縁部の輪積痕の有無があるものと考えられることから、本稿では細分化を行わず同一類型上に置いた。これに対しB類は外面口縁部～胴部に櫛描きの波状文と簾状文を施すもので、北関東西部地方の後期弥生土器として位置付けられた樽式系の土器である。細分化は口縁部の形状により、単口縁のものをBⅠ類、折り返し口縁のものをBⅡ類とした。また、文様構成は頸部から胴部上位に櫛描き簾状文を、その上下に櫛描き波状文を施すものを基とするが、簾状文や上下いづれかの波状文を欠くものも同一類型上に置いた。施文手法(施文順序)には簾状文を巡らした後に上下波状文を施すものと、波状文を巡らした後、それを切るように簾状文を施すものが見られ、簾状文の止め方も等間隔止め、2連止めのもの、また、止めずに横線と化したものも見られる。C類は外面口縁部～胴部に縄文を施すもので、本県赤城山南麓地帯を中心に分布する赤井戸式系の土器である。出土量は極めて少なく、また、破片での出土であるため器形等の委細は不明である。

台付甕形土器 外面胴部への施文の有無、口縁部の形状等により大別した。A類は無文の台付甕形土器であり、出土量は少ない。B類は広口で最大径を胴上部にもち、胴部は浅く、口縁部が短く外反し、頸部に文様帯をもつ器形を呈し、文様帯には櫛描きT字文を施文する。2点の出土がみられ、うち1点(11住-5)には文様帯部と脚部内面を除く全面に丁寧な研磨と赤色塗彩を施す。また、残る1点(156住-1)も丁寧な研磨が施されており、用途としては高環形土器に近いものと考えられる。C類はS字状口縁台付甕である。出土量は極めて少なく、31住-4・5、165住-1の2点の出土と他に数軒より破片の出土が見られるのみである。31住-4・5は胴部に横線を有し、口縁部はやや外反し立ち上がる。これに対し165住-1は胴部の横線を欠き、口縁部はあまり外反せず立ち上がる。D類は片口状口縁を有する台付甕であり、他の鉢・碗形の片口一括し片口形土器として扱う考えもあったが、台付のものを明確に分化する必要より台付甕に組み入れて分類した。出土点数は13住-2、75住-3の2点を数える。この2点は器形上では類似し、特に片口

部は口縁部の一部を引き出すというよりは粘土を貼ることで大きく造り出しているが、整形上は13住-2が外面を刷毛目調整後に雑ではあるが研磨しているのに対して、75住-3は全面に刷毛目を残す。

高環形土器 環部の稜の有無により、稜を有するものをA類、稜を有しないものをB類とし、その他、脚部が柱状を呈するものなどをC類とした。A類はさらに中〜大形で稜をもつものをAⅠ類、小形で稜をもつものをAⅡ類と2細分した。A類はⅠ・Ⅱ類共に完形品の出土は見られず、環部のみ残り脚部の形状は明らかではない。整形は環部の内外面に研磨を施すが、その方向は一律ではない。また、AⅠ類では90住-1、107住-1、142住-5が、AⅡ類では30住-1がそれぞれ赤色塗彩された高環である。B類は環部に稜を有しないもので、さらに環部が緩やかに内彎しながら立ち上がるものをBⅠ類、BⅡ類に類似する器形をもちながら小形のをBⅡ類、環部が直線的に開き立ち上がるものをBⅢ類とした。B類は全般に環部内外面と脚部外面に研磨を施すが、その方向はA類同様に一律ではない。C類は脚部が柱状を呈するもの(134住-3)と脚部が大きく外反し開き、上下2段にわたり10穴を有するもの(87住-10)が見られるが、脚部のみ出土であるため器形等の委細は不明である。

器台形土器 器受部の形状により、器受部が屈曲し稜を有するものをA類、器受部が直線的、ないし内彎して開き稜を有しないものをB類とした。出土した器台はA・B類共に小型のものが多く、A類の87住-8・9は屈曲部の前後は直線的であるのに対し、108住-2の脚部は欠損し明らかではないが、口縁部はS字状を呈す。また、74住-1は器受部内外面と脚部外面を赤色塗彩している。B類は15住-3のように器受部の浅いものや、161住-2のように深いものもある。また、161住-3のように器受部が極めて小さいものの出土があり、類似する器形のものが隣接の石墓遺跡のA区3号住居より出土している。

鉢・埴形土器 ここでは、いわゆる碗形土器、坏形土器、鉢形土器、埴形土器を一括して鉢・埴形土器として、細分する中で埴類、鉢類として分化した。まず、埴類をA類とし、いわゆる小型丸底土器のうち広口で口縁部と体部との境に稜をもち、その稜が器高の midpoint 以下にくるものをAⅠ類、AⅠ類同様に広口で稜をもつが、その稜が器高の midpoint より上にくるものをAⅡ類、胴部が球体を呈し、直線的に立ち上がる口縁部をもつものをAⅢ類と3細分した。AⅠ類は器形では比較的体部が大きく、口縁部と体部の境が器高のほぼ midpoint にくるもの(87住-5、144住-1)や、口縁部が体部に対して大きく、体部は半球状のもの(87住-4、88住-5他)と、体部がやや偏平なもの(87住-6・7、25住-1他)、口縁部と体部の境の稜が小さく、全体に偏平なもの(142住-2・3)などがあり、整形面では内外面に丁寧な研磨を施すものが多い。AⅠ類は小型丸底土器といっても87住-4、5、7などのように大形でアフォルムされた器形のものも見られ、底部についてもやや平底するものもある。また、口縁部がS字状を呈するもの(151住-1)の出土もある。AⅡ類はAⅠ類同様に最大径は口縁部にあるが、口縁部は短く、胴部も大きい。AⅢ類は胴部が球体を呈し、最大径は胴部 midpoint にある。口縁部は長いもの(87住-12)と、短いもの(103住-1他)とがある。B類はいわゆる碗形土器や坏形土器をも含めた鉢形土器で、体部が直線的に開くものをBⅠ類、体部が内彎して開くものをBⅡ類、その他のものをBⅢ類とした。BⅠ類は比較的大きく深いもの(77住-1、15住-1、148住-1)と小形のもの(11住-2、77住-136住-1)があり、整形は内外面に研磨を施す。BⅡ類は器高が浅いもの(16住-1・2・3)と器高が深いもの(87住-1・2、88住-1・2他)があり、前者の整形は無であるのに対して後者は研磨を施すものが多い。BⅢ類は上記以外のもので、AⅠ・Ⅱ類が口縁径に比べて底径が小さいのに対し、口径と底径の差が少ない。C類は鉢形状を呈する片口形土器である。11住-1、15住-4、31住-1は浅鉢状を呈するのに対し、87住-11は球体の碗形を呈する。このうち、31住-1は赤色塗彩されたものである。

甕形土器 出土の甕はすべて鉢状を呈するものであり、口縁部の形状も単口縁のものは見られず、折り返し口縁のもののみである。出土数は少なく、4点を数えるのみである。

手捏・ミニチュア形土器 器形は碗形を呈するもの（11住-3、143住-2）と壺形を呈するもの（88住-6、31住-9）がある。整形は碗形のものに輪積痕ないし手捏の上に指頭圧痕を残し、壺形のもの、撫で、研磨を施している。

2. 段階設定

前項での分類に基づき、出土遺物の本遺跡内での段階設定と組成の変化、出土遺物の形態的变化や各時期の特色について若干の私見を記したい。

本遺跡の弥生時代後期から古墳時代前期は出土遺物や遺構形態よりおよそ4期に分化され、便宜的に第Ⅰ～第Ⅳ段階として設定した。以下に各段階の特徴を記す。

第Ⅰ段階 北関東西部地方の後期弥生土器として位置付けられる樽式土器を出土する住居で、本県の赤城南麓を中心に分布する赤井戸式土器を少量であるが含む。32号住、11号住、77号住、148号住、156号住、158号住などがこの時期に該当する遺構と考えられる。遺物の組成は壺形土器のAⅠ類、BⅠ・Ⅱ類、甕形土器のBⅠ・Ⅱ類、台付甕形土器のA類、B類、D類、高坏形土器のBⅠ類、鉢・埴形土器のBⅠ類、C類、手捏・ミニチュア形土器であり、器台形土器については32号住より1点の出土がみられるが、器受部欠損のためその形状はあきらかではない。上記組成の特色として、在地的な弥生土器の色彩が強く、外来系の古式土器は見られない。出土遺物の形態上の特色は、長方形を呈し、その規模は長辺が488～1080cmと大形で、掘り込みも確認面より34～73cmと深く、炉は短辺側の柱穴間のほぼ中央に位置する。

第Ⅱ段階 15号住、76号住、13号住などがこの時期に該当すると考えられ、第Ⅰ段階において主たる出土遺物であった樽式土器を残しながらも、個々の遺物における施文・器形等に若干の変化が見られる。遺物の組成は壺形土器のBⅠ類、AⅠ類、甕形土器のAⅠ類、BⅠ類、台付甕形土器のA類、D類、高坏形土器のBⅠ類、AⅡ類、器台形土器のB類、鉢・埴形土器のAⅢ類、BⅠ・Ⅱ類、C類、甕形土器となり、組成においても若干の変化が見られ、遷渡（移行）期の様相を呈しているものと考えられる。出土遺物の形状の特色は、コーナー部がしっかりとした正方形を呈し、その規模は一辺が560～690cmと大形である。炉は住居中央部より壁とのほぼ中間に位置する。また、上記の弥生よりの流れとの関係は明らかではないが、31号住より肩部に横線を有するS字状口縁台付甕（31住-10）の出土が見られ、同住居内より上半部が欠損しているが単口縁台付甕と考えられるもの（31住-6）、丹塗碗形片口（31住-1）、縄文をもつ赤井戸式甕破片（31住-11・12）の出土があり、出土遺物より本段階に比定される。出土遺物の形態は正方形に近い隅丸長方形を呈し、炉は長軸側柱穴間の中央に位置する。

第Ⅲ段階 出土遺物の主体は古式土器へと移行し、客体的に弥生土器（樽式土器）を残す。75号住、87号住、88号住、90号住、161号住などがこの時期に該当すると考えられ、特に87号住の出土遺物は一括廃棄によるものと考えられることから、この時期の良好な資料であると言える。土器の組成を見ると、壺形土器のAⅠ・Ⅱ類、甕形土器のAⅠ・Ⅱ類、BⅠ・Ⅱ類、高坏形土器のAⅠ類、BⅡ類、器台形土器のA類、B類、台付甕形土器のD類、鉢・埴形土器のAⅠ・Ⅱ・Ⅲ類、BⅡ・Ⅲ類、甕形土器、ミニチュア形土器である。上記の組成の特色として、甕形土器の主体がAⅡ類の口縁部に輪積痕を有するとなることがあげられる。この甕は輪積痕を有することから赤井戸式の甕の系譜を引くものとも考えられるが、器形的には外来系の様相を呈し、また、本遺跡の第Ⅰ段階、第Ⅱ段階においては樽式土器が主体となり、赤井戸式土器の盛行は見ら

れないことから、前代の赤井戸式の系譜上にあるものとは必ずしも言い切れない。また、この輪積痕を有する甕は分類の項で触れたように、器形や整形方法にバラエティーがあり、これを細分化することによりこの種の甕の系譜など、その様相はより具体化するものと思われるが、ここでは本遺跡の甕形土器の主体はこの段階でAⅡ類の輪積痕を有するものになり、台付甕形土器等の他の煮沸具は主体にならないことのみを記すに留めよう。組成上のもうひとつの特色として、鉢・増形土器のA類(増)の出土があげられる。このA類(増)のAⅠ・Ⅱ・Ⅲ類は87号住居より一括出土しており、本遺跡においては時間幅が見られない。この組成上の変化と合わせて、87号住居出土の甕形土器(87住-16)のように樽式系には見られない器形に波状文を施すものの出現などから、第Ⅲ段階は前の第Ⅱ段階に続く過渡(移行)期と考えられ、末だ弥生文化の色を若干残しながらも、第Ⅱ段階に比べ、より古墳時代の色彩が強くなるように思われる。遺物の形態の特徴としては、隅丸形状を呈し、その規模は第Ⅱ段階に比べてやや小型化する。

第Ⅳ段階 本段階は前段階である第Ⅲ段階が僅かながら弥生時代の色を残しながら古式土器が土器組成の主体となるのに対して、弥生時代の残影(樽式土器)が見られなくなる時期として設定したが、遺物の器形や組成の面では前段階との大きな差異は認められず、然るに、前段階との時間幅もさしてないものと考えられる。また、151住-4や165住-1の肩部の横線を欠くS字状口縁台付甕の出土も、この段階に属するものと考えられる。この2点のS字状口縁台付甕は共伴する遺物が少ないため、他の古式土器との関係が明らかではないが、本遺跡において検出された弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡のなかでは最終段階に至る時期の遺物と考えられる。

3. まとめ

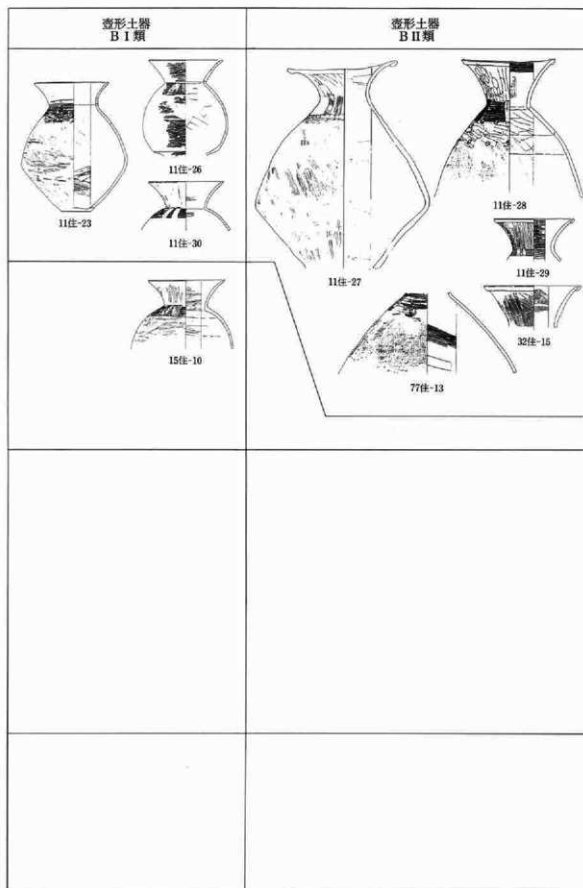
本稿では遺跡より出土する弥生後期から古墳前期の遺物を分類し、Ⅰ～Ⅳの段階設定を試みたが、これにより明らかになったことは、まず、本遺跡における弥生時代の集落は第Ⅰ段階に見られるように、北関東西地方の後期弥生土器として位置付けられる樽式土器を有する時期、それも土器の組成や個々の施文状態より見て終末に近い段階に営み始められ、その後、この集落を母体として継続的に営まれ、第Ⅲ段階の古墳時代初頭に至っては分類した鉢・増形土器のAⅠ類に見られるような外来系の古式土器を有するようになる。しかし、本遺跡の場合、87号住居の出土遺物の組成に見られるように、この時期において前段の弥生(樽式期)の集落が消滅し、外来系の土器を有する集団の集落が展開するのではなく、あくまでも前段の弥生の集落(樽式土器を有する集団)が母体となり集落が営み続けられ、過渡期を迎えたと考えられる。この時期が第Ⅱ～Ⅲ段階にあたり、第Ⅲ段階に至ってもなお土器の組成には前段の樽式土器の残影が残ることから、抽象的な言い方ではあるが、第Ⅰ段階から第Ⅲ段階までの時間幅はさほど長くはないものと考えられる。



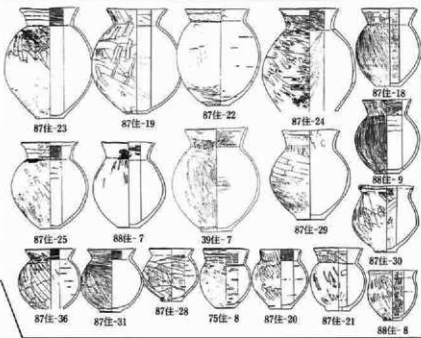
本稿をまとめるにあたり、この過渡期の集落を考える上で自らの浅学のため明らかに出来なかったことを述べ、今後の課題としたい。

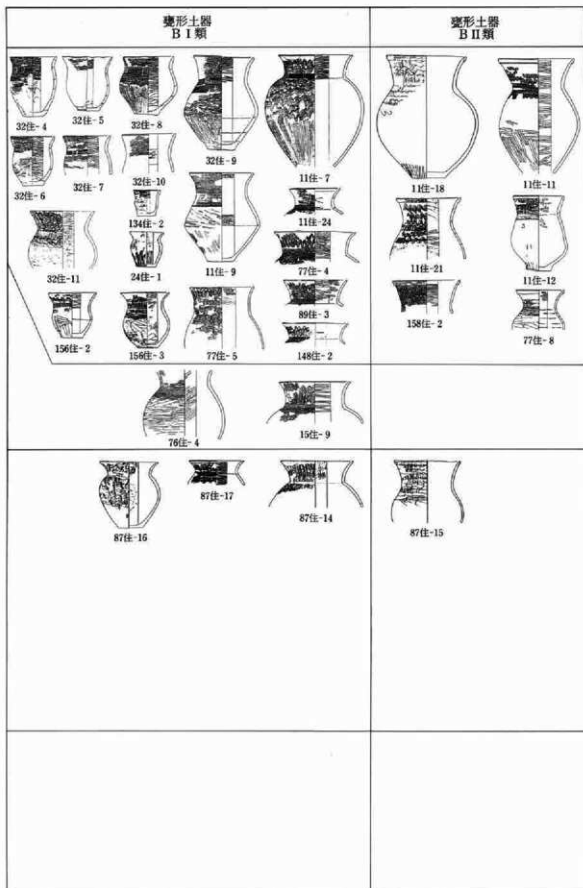
まず、過渡期の設定した第Ⅲ段階の年代の問題である。鉢・増形土器のAⅠ類に分類した大形の増類の偏年的位置がこの段階の年代を左右するものと思われる。











次に、甕形土器のAⅡ類に分類した口縁部に輪積み痕を残す土器の系譜の問題である。前述のとおり本果赤城山麓を中心に分布する赤井戸式土器にもその技法が見られるものの、本遺跡の前段において赤井戸式土器は主体的に出土しておらず、直接的に結びつけることは困難と考えられる。このAⅡ類に分類された甕形土器がBⅠ・Ⅱ類に分類した樽式土器の甕に代わり煮沸具の主体となるため、系譜や編年を考える上で、今後の出土例と研究の成果に期待したい。

















	壺形土器 A I類	壺形土器 A II類	壺形土器 A III類
第I段階	<p>壺・壺・台付壺 0 1 : 10 20cm</p> <p>高坏・器台・鉢他 0 1 : 8 20cm</p>		
第II段階			
第III段階			
第IV段階			




























































	甕形土器 A I類	甕形土器 A II類
第I段階		
第II段階		
第III段階		
第IV段階		

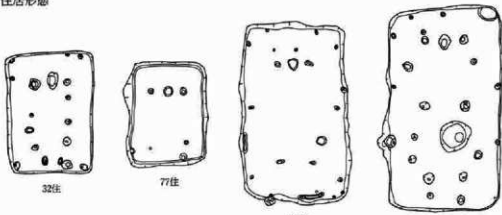
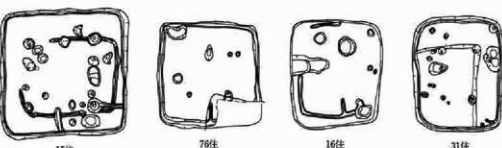
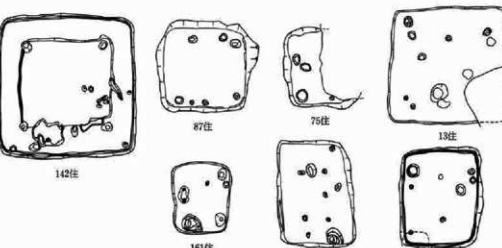



	甕形土器 C類	台付甕形土器 A類	台付甕形土器 B類	台付甕形土器 C類	台付甕形土器 D類
第Ⅰ段階	 11住-22	 11住-7  32住-16	 11住-5  156住-1  77住-11  11住-6  11住-8  77住-12		
第Ⅱ段階	 31住-11  31住-12	 76住-3		 31住-10	
第Ⅲ段階					 13住-2  75住-4
第Ⅳ段階				 165住-1	

高环形土器 A I類	高环形土器 A II類	高环形土器 B I類	高环形土器 B II類	高环形土器 B III類	高环形土器 C類
				 <p>11住-4</p>	
 <p>15住-7</p>		 <p>15住-6</p>  <p>14住-1</p>	 <p>143住-1</p>		
 <p>90住-1</p>  <p>25住-2</p>	 <p>39住-2</p>  <p>85住-1</p>  <p>107住-1</p>  <p>142住-5</p>		 <p>146住-3</p>  <p>161住-4</p>  <p>142住-4</p>	 <p>87住-10</p>  <p>134住-3</p>	

	器台形土器 A類	器台形土器 B類	鉢・埴形土器 A I類	鉢・埴形土器 A II類	鉢・埴形土器 A III類
第Ⅰ段階		 32住-3			
第Ⅱ段階		 15住-3		 33住-1	
第Ⅲ段階	 87住-9  87住-8	 22住-1  161住-1  161住-2  161住-3	 87住-4  87住-7  88住-5  146住-1  160住-2	 87住-5  87住-6  88住-3  144住-1  88住-4	 87住-3  88住-4  87住-12  100住-1  147住-1
第Ⅳ段階	 74住-1  108住-2		 142住-2  142住-3	 108住-1  151住-1	

鉢・埴形土器 B I類	鉢・埴形土器 B II類	鉢・埴形土器 B III類	針・埴形土器 C類	甔形土器 手提・ミニチュア
 11住-2  77住-3  77住-1  148住-1			 11住-1	 11住-3
 15住-1	 16住-1  16住-2  16住-3  78住-1	 15住-5  16住-4	 15住-4  31住-1	 31住-4  31住-9  100住-1
 39住-1	 87住-1  87住-2  88住-1  88住-2  162住-1		 87住-11	 75住-7  88住-6

<p>第Ⅰ段階</p>	<p>住居形態</p>  <p>32住 77住 148住 11住</p>
<p>第Ⅱ段階</p>	 <p>15住 76住 16住 31住</p>
<p>第Ⅲ段階</p>	 <p>142住 87住 75住 13住</p> <p>161住 134住 80住</p>
<p>第Ⅳ段階</p>	 <p>151住 105住 108住</p>

第2項 奈良・平安時代の土器

はじめに

当遺跡において検出された奈良・平安時代の遺構は、奈良時代の住居跡3軒、平安時代の住居跡93軒・掘立柱建物35棟・寺院跡1・井戸3基（溜井1を含む）・溝1条・土坑18基である。それに伴い多くの土器が出土している。平安時代の土器は、煮沸土器として土師器類がある他は、大半が須恵器でありそれも利根・吾妻郡に須恵器を供給していた月夜野窯跡群の製品と考えられる。時期的にも月夜野窯跡群の操業が軌道に乗り、最盛期となる9・10世紀の遺構が最多である。そこで本稿は月夜野窯跡群研究、利根郡の平安時代集落の既報告の成果を踏まえ、住居跡出土土器を中心とし、その土器様相を分析するものである。

1. 利根郡における平安時代土器研究の現状

利根・吾妻郡に須恵器を供給した一大窯跡群として月夜野窯跡群が存在する。月夜野窯跡群についての発掘調査の成果、成立の背景・開窯期・系譜などの研究の現状は『月夜野古窯跡群』^{註1}に集約されているので、ここでは平安時代を中心として解明されている土器の様相を把握しておきたい。

8世紀第2四半期には操業が開始されたと考えられている沢入A支群は、現状で最古の窯跡であり生産されている器種や、器形の特徴から東海地方の影響があるとされている。また、大西雅弘氏は須恵器環の底部調整の分析から、大釜遺跡出土の8世紀後半の須恵器環、沢入A支群の環ともに、底部調整を施すものは右回転、底部無調整のものは左回転であるという事実を確認し、月夜野窯跡群では、回転方向の異なったロクロを使用する工人が同一の窯体を使用していたことを指摘している。9世紀の月夜野窯跡群はその操業が軌道に乗り、展開していく時期で、洞A支群（8世紀末～9世紀前半）・藪田A支群（9世紀前半～10世紀前半）が確認されている。双方には器種・器形・技法などに類似点が認められることにより密接な関係にはあるが、それぞれ独自性を持っていることが言われている。洞A支群は前代の沢入A支群とは、窯の成形技法から別系統で成立したと考えられており、その一部に秋間窯跡群系の系譜が指摘されている。藪田A支群は環・碗類を主体とする燻し焼成技法を特色としている。また、胴部に叩き目を持ち、須恵器の胎土で酸化焰焼成される長胴甕が作られており、形態・技法の特徴から東北地方との関連が考えられている。洞A・藪田A支群とも9世紀代のものについては、ロクロの回転方向は両回転の混在が確認されている。10世紀以降になると洞A支群4号窯・藪田A・深沢B・深沢C・須磨野A・真沢A・水沼A支群の7支群が操業され、最盛期となる。これらの支群もそれぞれ特色を持っているようであり、深沢B・C支群は、10世紀前半を中心として「月夜野型羽釜」を大量に焼成し、真沢A・須磨野A支群はともに脚付羽釜を生産している。また、窯跡の見られない10世紀後半以降の羽釜・環・碗などの製品も、村主遺跡・糸井宮前遺跡から出土しており、この時期の窯跡が検出される可能性もある。このように月夜野窯跡群の製品には、秋間窯跡群などの在地系のもの、東海地方、東北地方の影響が認められており、ロクロの回転方向や製作技法から工人移動による直接的な伝播が考えられている。今後これらの源となった窯業集団を特定できる可能性も持っており、さらに他地域の窯跡との比較が必要とされている。

2. 資料の一括性について

住居跡出土の土器をどのように取り扱うかは、議論のあるところである。当遺跡では、出土遺物の同時性について一つの証明となり得る状況が幾つか考えられるため、その一括性について検討したい。この時期の県内平野部の住居跡は壁高が低く、遺物の出土量も少ない傾向にある。しかし、当遺跡の住居は比較的深く、平均で50cmを測り、出土状態についても良好なものが得られた。中でも壁面に密着した状態で検出されたこ

とである。これは、あたかも壁上の施設から転がり落ちたような状態で壁の途中で止まらるもの、壁直下に落ちていたものもあり、まだ住居に埋土のほとんど入っていない時点で起きた現象を示しているといえる。もちろんこの現象は、住居の廃棄方法について何も物語ってはくれないが、廃棄時により近い時期であると言える。46・47・49・95・97・114・127・131・135・141住にこのような状態が見られる。(図版22・23・25・57・58・60・72・85・89・92頁参照) さらにこれらの土器は一住居内から出土したものには、罌形・胎土から同型式といえるものが大半を占め、一括して入手したことを思わせる土器群である。また、114住のごときは同型式の坏に、同一文字の墨書が多く見られ、一括性をさらに高めていると言える。

このように、壁密着・壁直下の床面密着出土の土器群は、その住居に伴う可能性が最も高いものの一つであり、土器の様相がそれぞれ非常に類似している点も、これらの土器の一括性を補強している。また、出土状態としては、床面よりやや浮いた状態のものを含んでいても、10・51・54・55・81住などは罌形・胎土を同じくするものが多く出土しており、埋土中出土のものでも時期的にはかなり近いと思われる。

3. 分類と段階設定

当遺跡で検出された土器の器種は、土師器環・甕・小形甕、須恵器蓋・坏・椀・皿・鉢・壺・甕・小形甕・羽釜、ロクロ使用酸化焰焼成の甕・鍋・広口甕・小形甕・坏、灰釉陶器椀・皿・輪花皿・小瓶・長頸壺である。一括性の確実な前述の住居跡出土のものを対象とし、最も出土量の多い須恵器種類別の型式分類を試みた。分類し得たものは、罌形・技法・胎土の特徴から一目でそれとわかるもので、時期的にも特定できるものである。しかし、分類した中で型式組別となり得るものはほとんどない。その他の出土量の少ない器種については、器種別に若干の考察をするに留めた。

利根郡において、奈良・平安時代の煮沸土器として見られる土師器甕は、平野部で普遍的に見られるものである。時期的にも、僅かに相伴する土師器坏や須恵器坏の形態・技法から、並行関係にあることは確認できる。当遺跡では、奈良時代に属すると考えられる135住の土師器甕から10世紀前半のものまで型式組別が認められ、途中から羽釜が相伴し、これもその変化が確実に迎えられる。そこで135住の土師器甕を始めとして、I～IXまでの段階を設定した。これら各段階の土師器甕・羽釜とよく伴う土器を、一括性の高い住居跡出土のものを中心として抽出したものが図6～8である。

4. 各器種について

(1) 土師器

環：利根・沼田地域では、8世紀代には村主遺跡^{註5}・大釜遺跡^{註6}・石墨遺跡^{註7}に見られるように普遍的に存在するが、9世紀に入るとほとんど出土しなくなり、供膳用の土器は須恵器のみになる。当遺跡も例外なく、土師器坏を出土したのはI段階の135住、III段階の141住と寺院跡のみである。I段階のものは器内が薄く、丸底を呈し、体部のやや内彎するもの、III段階の坏は既に平底を意識して削っており、体部は浅くやや丸をもつ。寺院跡のものは完全な平底であり、体部も深めになっている。135・141住の坏は伴出する土師器の甕との関係は平野部と比較しても矛盾のないものである。

甕：前述のように、当遺跡でも羽釜が出現するまでは主体的な煮沸土器である。この甕は県内全域で主体をなし、形態の変遷もまったく同じである。変遷については、各段階の様相でも触れるので、ここでは省略したい。今後、出現期の様相を把握した上で、7世紀から10世紀に及ぶ土師器甕の型式組別を完成したいと考えている。胎土については、数種類認識しているが、地域によって顕著な傾向があるとは言えない。

(2) 須恵器

環：この分類は、ある程度出土量があり、一つの段階に集中する傾向がみられ特徴的なものに限られ、分類

名称を与えたものである。(巻頭カラー参照)



131住-4

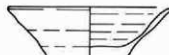
A類—この類は、B・Cほど胎土に一貫性のあるものではないが、最大の特徴は体部の立ち上がりに丸みをもつもので、外面体部の糸切り径に比べて内面の底径が大きいくところにある。底部は右回転糸切り未調整である。焼成は還元で灰色か灰白色を呈す。Ⅲ段階に特徴的に出土する。明確な法量分化はないが、口径は11.4～13.5cmと幅がある。

B類—非常に特徴のある坏で、器内が全体的に厚く、体部は直線的である。内面底部から口唇部までの高さが2.5cm程度と低く、他の坏に比べて容量が小さく感じられるものである。底部は右回転糸切り未調整。口径は11.6～12.0cmとまとまりがある。胎土はすべて同じもの、焼成は慣しがかかるが全面が黒色のものはなく、黒色から灰白色、黄灰褐色のものである。藪田の製品と考えられ、51・92・93・118住に見られるようにⅢ段階の壺と共伴する。



51住-3

C類—体部は直線的に開くが、やや体部下半が絞込まれるような形で、体部の器内は比較的薄手である。内面は、底部と体部の変換点が明瞭で、底部調整は螺旋状の撫でか、同心円状に凹凸を持つものもある。底部は左回転糸切り未調整。焼成は慣しがあり、黒色から黄橙色を呈す。胎土は他と比べて、比較的粘質な感じがし、藪田の製品と考えられる。63・80・117・133住にみられるように、V段階の壺と共伴する。



114住-21

D類—体部は丸みを持ち、口縁部は強く外反するものである。外面にはロクロ目が見られるが、内面は凹凸がまったくなく、底・体部の変換点は不明瞭でなだらかである。底部は右回転糸切り未調整。胎土は黄白色粗砂粒・石英細砂粒を多く含む。焼成は基本的に還元と考えられるが軟質であり、色調は褐色の系統である。



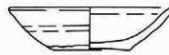
47住-2

E類—体部はやや丸みを持って開き、ロクロ目が顕著である。内面はD類同様なだらかである。底部は右回転糸切り未調整。胎土・焼成ともD類に類似している。



95住-4

F類—体部はやや丸みを持って開く。E類よりも体部は浅く、内面底部から体部の境がなく、なだらかに立ち上がる。底部は右回転糸切り未調整。D・E・F類は基本的に形態は類似しており、共伴土器はあまり多くないのだが、D→Fへ器高が低くなる、内面がよりなだらかになるという流れが感じられる。



97住-8

G類—器高が高く、体部は直線的に開くものである。内面は底部から体部の変換点がなく、なだらかである。底部は右回転糸切り未調整。法量は大中小があり、8・49・111住などⅨ段階の坏はほとんどこの類である。前段階まではD～F類のような器高の低いタイプが主体であるが、G類



8住-2

図1 坏の分類

のようなタイプも散見しており、両タイプは常に共存していると考えられる。

椀：I～V段階までは椀の出土量は少なく、坏と比べて一割にも充たないが、VII段階以降は逆転し、椀が五割以上を占めるようになる。(275頁グラフ参照) I～V段階の椀は、6・10・18・67・114・122・123・127・128・138・141住だけであり、出土量が少なく、出土状態も良好ではなく共伴土器も少ないので、各段階に特徴的なものは抽出できなかった。藪田遺跡の椀の分類にもあるように、かなりバラエティーはあるようだが全体的には平野部の椀と形態的には類似しており、時期的な変化としては、体部の高さが低くなっていくことはいえる。VI段階は土器の出土量が少ないが、47・98住にみられる椀はV段階までの椀とは胎土・形態とも大きく異なっている。VII～IX段階の椀もかなりバラエティーがあるが、全体的には器高が低くなり、小形化する傾向が窺われる。

坏・椀類ともに、I～V、VI～IX段階とは大きな相異がある。まず、器形としては、内面の調整が前者は底部と体部の変換点が明瞭でしっかり立ち上がるが、後者は低・体部の境がなく、なだらかなのである。また、前者は内底面の調整が螺旋状に5・6回転撫でられるのに対し、後者はコテを当てたように、滑らかなものである。胎土については、前者は夾雑物が少なく、後者は砂粒・石英粒が多い傾向があり、焼成も前者は還元を主としている。後者は還元とはいえず軟質で、焼き締まらない胎土である。そして、このような傾向は平野部においても窺われる。また、切り離し技法についても、前者は両回転が混在しているが、後者は観察し得た限りでは右回転のみであった。

羽釜：当遺跡で検出された羽釜はすべて「月夜野型羽釜」と呼ばれているものである。この呼称は中沢悟氏^{註8}が提唱したもので、その後同氏は村主遺跡の考察の中で、「月夜野型羽釜」の内容を発展させ、器形や調整方法の変化から4段階に分けている。その概要を以下に記す。第1段階を羽釜出現段階とし鐔の付く地点を大きな変換点として、口縁部が立ち上がっていくという器形の特徴と鐔より下の整形が、底部付近から口縁部の鐔に向かって直線的に寛削りされる点をあげている。第2段階では鐔の位置を器形の変換点とせず、全体的に内彎しつつ直立気味に立ち上がること、寛削りの単位が細く短く、鐔まで到着するのに3～6回以上の削りを行うのを特色としている。第3段階は、第1段階に近い器形の特徴をもつが、器高が低く、鐔下の胴部が大きく彎曲して張り出す点が異なり、削りは胴部の上半部までは削るが、鐔下の胴部上端は左横方向の寛削りか指頭による調整が行われるとしている。第4段階は、実態は不明であるが、大原遺跡2号住居跡出土の1点が、11世紀以降の製品であろうとしている。筆者はこれらの特色以外に鐔の形態(巻頭カラー参照)に着目したのだが、当遺跡では2段階以降の羽釜はなく、1・2段階の間にくと考えられるものが出土しており、中沢氏の4段階と筆者の段階の対応関係を図にした上で各段階の説明を行うことにする。

まず、VI段階の47・98住に羽釜がみられ2住居に共伴する土器器壺は、「コ」の字状口縁部の崩れた状態のものである。同様の土器器壺と共伴するものに、糸井宮前遺跡27住、石墨遺跡D区12住(小形壺)^{註9}がある。後者は鐔付羽釜である。羽釜の形態は数種類みられ、47住-6は胴部上位に大きくふくらみを持ってから内傾し、98住-4は胴部は直線的で、そのまま口縁部に至る。双方とも鐔は大きく厚みを持ち、上下両面とも丁寧な回転撫でて正円形を呈し、端正である。胴部は、後段階のもののような削り面どうしの段差がなく、器

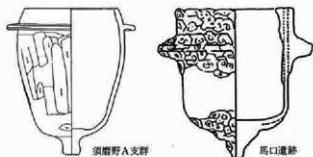


図2 羽釜と鉄釜の比較

面が平滑である。この段階が羽釜の出現期と考えられる。どのような背景で羽釜が生産されるようになったか考えなければならない問題だが、出現期の様相について、ここでは確認できるだけの資料を検討しておきたい。羽釜の源流としては、5世紀後半に朝鮮半島から伝来した甕具の甕戸（土師器釜）に求めるのが妥当と思われるが、畿内において、この炊飯祭祀に使用されていた甕・甕に組み合う土師器釜が、日常煮沸具に転化していくのは11世紀以降のことである。²¹⁰上野国では10世紀を前後する頃には日常煮沸具として使用されていたことになる。それには、この甕具がどのように意識されていたかが問題であるが、東日本での甕具の出土例は僅かで、県内では8例ほどである。²¹¹この炊飯祭祀があまり普及しなかったのか、その意識の薄さから日常用品に転化し易かった可能性もある。この土師器釜が変化していったものなのか、またどのように形態変化していったのか現状では不明だが、群馬県の羽釜は鈎が萎小化している点で他地域の羽釜と大きく異なり、また土師器釜との差も大きい。しかし月夜野窯跡群の脚付羽釜は比較的鈎がしっかりしており、他の羽釜とは違う様相を持ち、長野・山梨県などの鈎のしっかりした羽釜と関連していく可能性がある。そして、長野県更埴市馬口遺跡では溝跡出土で詳細は不明であるが、脚付羽釜の形態と非常に良く似た鉄釜が出土しており、この二者をすぐに結び付けるのは短絡的に過ぎるかも知れないが、脚付羽釜は共伴関係から古い方に位置付けられ、羽釜生産開始の模索の中から生まれたものの一つとは考えられないだろうか。そして、脚付羽釜の出土状況であるが、47住には、破片だが胴部から口縁部（削りの方向で脚付羽釜と推定される）が出土しており、また94住（V～VI段階相当）には埋土中だが脚・底部片が、石墨遺跡には完形品が出土している。集落からの出土量が少なく、あまり量産されたものではないのではないだろうか。VII段階の羽釜は46住に多くみられ、「コ」の字状口縁の崩れて厚手な土師器甕が共伴している。胴部から口縁部まで直線的で形態は98住-4に類似

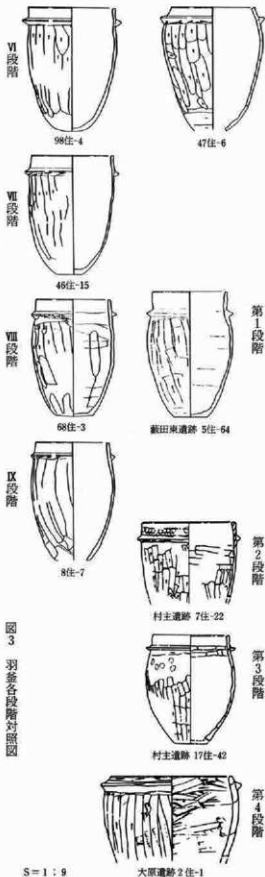


図3 羽釜各段階対照図

第1段階

第2段階

第3段階

第4段階

S=1:9

している。鈿の両面とも丁寧に撫でられるが、若干小さくなっており、胴部の寛削りがそのまま鈿に当たる痕跡が目立つようになる。底部はVI・VII段階とも径7cm程度の平底で撫である。VIII段階は中沢氏の第2段階に相当し、前段階までと形態が異なり底部が比較的大きく、全体的に細めになる。鈿は前段階よりさらに小さくなり、上面は回転撫でだが鈿の端部はやや凹凸がみられるようになり、下面は胴部との貼付部分に所々隙間があり、当たる痕跡も多くなる。また、胴部の寛削り面どうしの段差が目立つようになる。底部はこの段階だけ大きくなり径9cm程度のもので、この段階かと考えられる125住に、底部のみの破片であるが丸底のものがあり、調整は共に撫である。IX段階の羽釜は中沢氏の第1と第2段階の間にくるものである。形態は、鈿の部分を変換点にするものと、胴部から口縁部まで直線的なものとみられ、双方とも鈿はさらに小さくなり貧弱になる。一応回転撫であるが、上下面とも胴部への貼付部分に隙間があくものや、指頭による凹凸があり、端部も若干被打っている。胴部の削りは、当遺跡では第2段階のような細かなものは出土しておらず、3cm程度の幅をもって長く削るものである。

「月夜野型羽釜」の供給範囲は東北にあるが、僅かに平野部でも北原遺跡^{註13}99住、大久保A遺跡^{註14}I区106住・II区122住などで出土している。もちろん供給されたと考えより、なんらかの理由で持ち込まれたと考えるほうが自然であるが、平野部の土器との並行関係をみるには良い資料である。大久保A遺跡I区106住の「月夜野型羽釜」はVIII段階の特徴を持ち、羽釜・椀・皿と共存している。平野部では古相の羽釜であり、当遺跡VII段階の土師器甕より新しい形態の土師器甕と良く共存しており、並行関係に矛盾はない。平野部の羽釜はVIII段階の土師器甕との共存は僅かにみられるが、VI段階の土師器甕に伴う例はなく、「月夜野型羽釜」の方が出現が早かったと考えられる。また、新潟県魚沼郡六日町の金風遺跡^{註15}で「月夜野型羽釜」に類似した形態のものが出土している。実見したところ、鈿の形態・胴部の削りなどからは同類と思われるが、胎土は異なり現状では「月夜野型羽釜」の中では見られないものである。

鑿：図8のVIII段階-16の甕は、同住居の羽釜と胎土・整形が良く似ているもので煮沸用と考えられるが、羽釜主体のこの時期の中でも数例みられる。平野部で見られるいわゆる土釜について検討したときに、その11世紀に盛行する土釜の前段階のものとして羽釜と類似するロクロ整形の甕を想定したが、この甕もそれと同じような関係にある可能性もある。

(3) ロクロ使用、酸化焰焼成の土器

文字通りロクロで整形され、酸化を意識して焼成された一群であり、時期的には9世紀前半に集中している。図7-6・7は、藪田遺跡にみられる叩きめのある甕と同様のものであり、図4の土器群は前者とは異なる系統のものと考えられる。141住にまとまって出土しており、広口壺・小形壺・坏がある。また、23・62

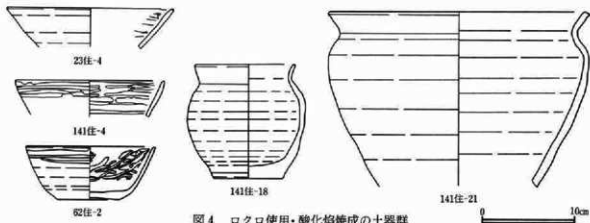


図4 ロクロ使用・酸化焰焼成の土器群

住に坏が出土している。にぶい赤褐色を呈し、胎土は赤褐色円粒を含み、還元焰にしても焼き締まらない感じの土である。前者の92住-7甕、127住-8 甕が須恵器に近いものとなれば、これらの土器はより土師器に近い胎土である。坏は、外面口縁部に横方向の寛研磨で、両面とも間隔は粗く、内面に吸炭させる意識はなかったと思われる。近年、ロクロ使用酸化焰焼成の甕・小形甕については注目されてきており、北陸地方・^{RE16}東北地方・山梨県・長野県・関東北東部に分布がみられ、それぞれ地域差がみられることが指摘されている。当遺跡の92・127住、141住双方のものも系譜は異なるだろうが、これら各地方のものと比較検討すべき資料である。県内でも、小形甕については出土例が増えて来ており、他の器種も含めて今後検討すべき課題と考えている。

(4) 灰釉陶器

出土した灰釉陶器は、光ヶ丘1号窯式の新しい様相のものから、大原2号窯式の中に納まるものである。器種は椀・皿・輪花皿・小瓶・長頸壺がみられる。出土したもののうち大半を実測しており31点である。出土状態は破片で埋土中のものが多く、住居に伴うと考えられるものは、46住の周溝の立ち上がり際出土の小瓶、56住貯蔵穴出土の椀(3/4個体)、68住床面直上出土の椀(1/2個体)、70住の完形に近く床面直上・壁際出土の皿・輪花皿の5点である。他にもう1点、黒笹14号窯式と思われる皿が、小片ではあるが51住(IV段階)の床面に近い状態で出土しており注目される。これら灰釉陶器との共存関係では器種が異なるので単純に比較はできないが、46住は良好なセット関係であり、光ヶ丘1号窯式と思われる小瓶に形態のよく揃った椀・羽釜が伴い、大原2号窯式の椀・皿がある。68・70住は共に羽釜が出土しており、形態は類似している。46住の羽釜は68・70住の羽釜より先行するものであり、灰釉陶器の窯式の前後関係とも矛盾しない。

埋土中出土の灰釉陶器については、住居から切り離し総体で観察したが、当遺跡のものには胎土が5種類認められた。胎土A-色調は灰黄褐色を呈し、僅かな白色細砂粒と0.5mm程度の黒色円粒を若干含む。素地は細かいが胎土Bよりは粗い。釉の発色は灰白色だが、釉の溜まった厚みのある部分はオリーブ灰色である。胎土B-色調はより白に近い灰白色である。夾雑物はほとんど含まず、僅かに微細な黒色粒を含む。素地は非常に緻密で欠け口は、平滑で艶がある。釉は透明で艶があるものが多く、発色しているものは白色からオリーブ灰色である。胎土C-色調は灰白色だが胎土Bよりは灰色に近い。夾雑物は少なく、僅かな白色細砂粒と0.5mm以下の黒色円粒を含む。素地は胎土Aと同じくらいの細かさである。釉は透明・白色のものは艶が全くなく、薄いオリーブ灰色に発色しているものには艶がある。胎土D-色調は灰白色を呈し、僅かな白色の微細な砂粒を含む。素地はA・Cより粗くガサガサしている。釉は透明から白色のものが多く、艶がない。発色しているものはオリーブ灰色である。胎土E-48住1点のみの出土であり色調はにぶい黄褐色を呈し、夾雑物は少なく、僅かに微細な白色砂粒を含む。素地は、A・Cと同じ位の細かさである。釉は比較的たつぷりと掛けられており、発色は明緑灰色を帯びる。この分類からは、光ヶ丘1号窯式の特徴により近いものは、胎土Aの中にすべて納まっているという傾向がみられたが、その他胎土別による器形の特徴があるかは、各胎土に同時期・同器種で比較できるものがなかったため検討できなかった。これらの胎土の分類は、参考として各灰釉陶器の観察表備考欄に記入した。

5. 成形・調整技法について

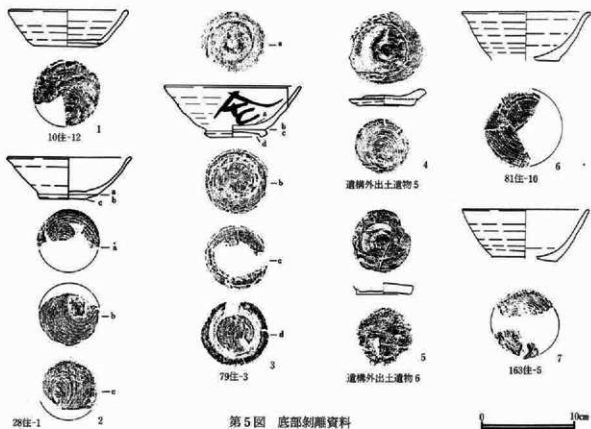
当遺跡でも、藪田遺跡で見られた底部内側に回転糸切り痕のある須恵器が出土している。図5-1は9世紀前半の資料(拓本は取れなかったが、所々底部の剝離面に糸切り痕が見られる。)だが、他は10世紀代のものである。6・7は剝離した痕跡を持つもの、つまり糸切り痕が転写した方と思われる。このような痕跡から「底部円柱造り」が想定されている。「底部円柱造り」とした場合一つ疑問点がある。つまり柔らかい円柱

上で坏部を成形する時に底部内側を粘土が覆うわけだが、撫で付けることによって余切り痕は消されてしまうのではないだろうか、また体部は横に張り出さず直線的に立ち上がるのだから、底部に粘土が張られる必要はなく、そのまま余切り痕を撫で消してしまえばよいのではないだろうか。当遺跡の刺彫資料の余切り痕は明瞭であり潰れていない。これは底部になる粘土が若干乾いた状態だからではないだろうか。例えば、円板状のものを、先に多量に作っておくことが考えられる。ロクロに固定するには、柔らかい粘土で二・三ヶ所止めれば充分回転に耐えられるであろう。また、この技法とは異なる技法で作られたと考えられるものに、92住-3、79住-2など底部に補修した痕跡を持つものがある。これは、例えば底部に大きな罅があったものを、取り除いて小さな粘土塊を指先で詰めたような痕跡で、指頭痕が付き凸凹している。さらに内面底部から外面底部まで罅が貫通しているものもあり、これは底部が二重ではなかった証拠ではないだろうか。これらは十分に検証したわけではないので、成形技法を提唱しているわけではないが、月夜野窯跡群の成形技法を考えていく上での参考となると考えている。調整技法については、須恵器の坏・椀類の中でも記したが、VI段階を境にして内面底部の調整痕が大きく異なっている。前者は水平で螺旋状の回転撫でで体部の立ち上がりは明瞭であるが、後者は水平な面を持たずなだらかな彎曲を示し、器面は凹凸が少なく平滑である。

6. 各段階の様相

I 段階 この段階に属するものは135住のみである。土師器壺は口縁部が厚手で、大きく直線的に開くものである。内面黒色処理の土師器が一点出土しているが、これは村主遺跡でも出土しているような古墳時代からの系譜をひくものである。須恵器坏(図6-5~8)の底部調整は、右回転寛切り後複雑な撫でである。

II 段階 この段階に属するものは5・6・123住である。土師器壺は次段階のものよりも、口縁部の厚いものである。須恵器坏は、右回転余切り周辺部寛切り、左右の回転余切り未調整がある。胎土はIII段階以降



第5図 底部刺彫資料

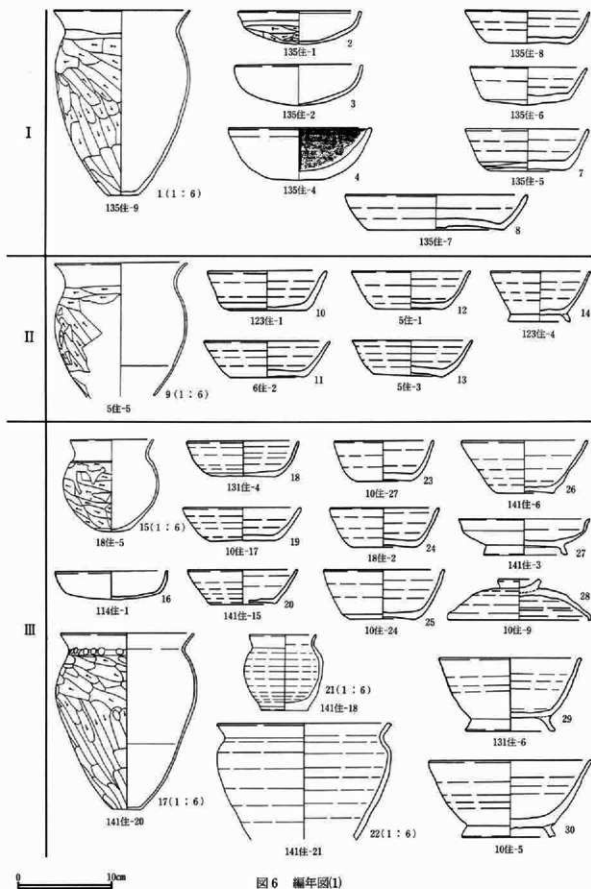
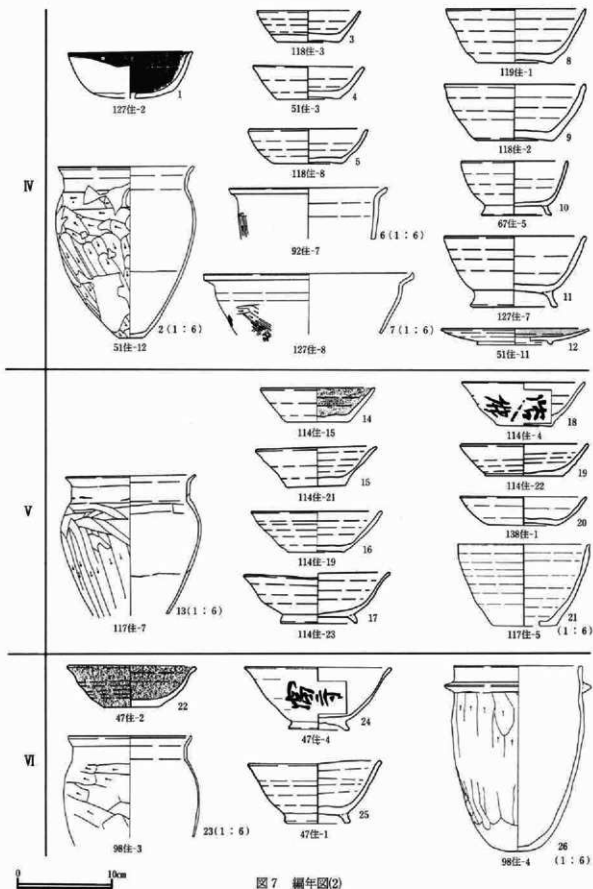


圖6 編年圖(1)



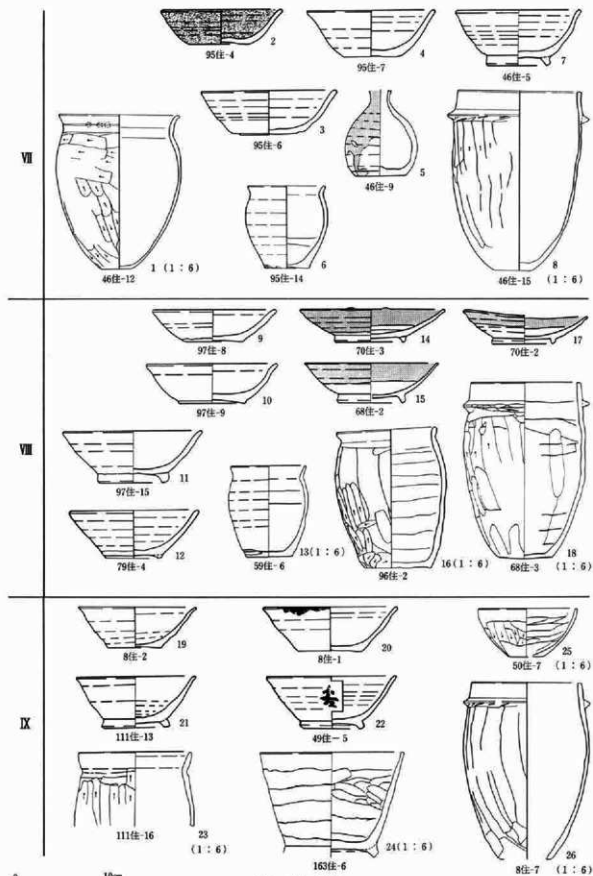


图8 编年图(3)

のものよりも硬質な感じのものが多い。6のような器高の高い椀の大小が、この頃には作られていると考えられるが、良好な出土例がなく形態や法量など不明な点が多い。

Ⅲ段階 この段階に属する代表的な住居は10・18・131・141住である。土師器壺は、口縁部も含めて全体的に薄手になっている。須恵器環は、ほとんど底部回転糸切り未調整であり、左右の回転がある。分類のAが主であり、内面底部の広いものが目立つ。図6-23・25は右回転糸切り後周辺部・体部下端回転寛削りである。形態は、体部の直線的なもの、立ち上がりに丸みを持つもの、23~26のように体部があまり開かず、器高の高いものもある。焼成は還元焰によるものが大半を占めるが、10住-16、131住-2のように煙しがるものも若干出土している。この胎土はⅣ・Ⅴ段階に多くみられる藪田の製品と思われるものよりも緻密な感じがする。器内は全体的に薄手のものが多く、141住-6・8・10・11・12・14・17は非常に薄手で緻密な胎土である。

Ⅳ段階 この段階に属する代表的な住居は51・67・92・118・119・127住である。土師器壺の口縁部は上位が外反し、「コ」の字状に近いものである。須恵器環は、分類のBが圧倒的に多く、その他のものもⅢ段階のような堅緻な還元のものは見られない。A類のような内底径が大きく糸切り径から張り出す体部のものはなく、底部から直に立ち上がるものが多い。図7-8・9のような体部の深い大形の坏もあり、それぞれの段階にもこのような器高の高いタイプはあるが、各段階の特徴を持つ。この段階のものは器肉が比較的厚手であり、底部は左右の回転糸切りが混在する。

Ⅴ段階 この段階に属する代表的な住居は、7・114・117住である。土師器壺の口縁部は「コ」の字状を呈す。須恵器環は分類のCが、特徴的に出土する。他の坏も体部の直線的なものが大半を占め、大形のもの(117住-2・3)もたよな形態であり、体部の器肉は前段階と異なり比較的薄手だが体部は厚手である。焼成は煙し気味のものが多い。図7-20のような坏の形態は平野部でもよく見るタイプである。

Ⅵ段階 この段階に属する住居は47・98住である。土師器壺の口縁部は、「コ」の字状の崩れた形を呈す。この段階には羽釜が出土するようになり、須恵器も椀が増えてくる。前述したが、須恵器環・椀の内面調整や胎土が大きく変化する段階である。椀は口径が大きく、器高の高いものである。

Ⅶ段階 この段階に属する代表的な住居は、46・95住である。土師器壺は、崩れた「コ」の字状口縁を呈し、全体的に厚手のものである。羽釜と胎土は似ているが、ロクロ整形される小形壺が出土しており次段階にはかなり多く見られるものである。椀は図8-7のタイプの出土例が多く、若干前段階より器高が低くなっている傾向がある。

Ⅷ段階 この段階に属する代表的な住居は、59・68・79・97住である。羽釜の分類からこの段階を設定した。灰釉陶器は大原2号窯式の中でも古い様相を持つものが伴う。環は前段階よりも内面の立ち上がりがよくなるからである。椀については胎土や形態・法量が段階毎に確実に変化していくという傾向などは個体差が大きくて捉えきれなかったのだが、全体的には器高が低くなる、内面がよくなることと言える。

Ⅸ段階 この段階に属する代表的な住居は、8・49・111住である。特に、49住は埋没の最終段階に浅間B軽石の堆積が見られ、当遺跡の中で最も新しい段階であることを示唆している。坏類はF類までのような器高の低いタイプはほとんどなく、器高の高い体部の直線的なものが大半を占める。図8-23の壺は、Ⅷ段階の16の壺とは口縁部の形態が異なり、同じ系列のものとは思えないが整形は同様である。大形の台付鉢があり、どの段階から出現するのか現状では不明であるが、平野部でも出土例が増えて来ている。

実年代を知り得る資料は、当遺跡においても出土していない。しかし土師器壺については平野部と並行関係にあり、その他の土器についても様相は概ね似ている。そこで、坂口・三浦(1986年)^{註18}に従い、Ⅰ~Ⅵ段

階はそれぞれ中尾V～X段階に相当させ、8世紀第3四半期から9世紀末の年代が与えてある。VII・VIII段階は、中尾XI段階（10世紀前半）を細分した。中尾XI段階にあたる平野部の土器も土師器壺の形態変化、須恵器碗の量産変化、灰釉陶器の共存関係からも細分できるものである。IX段階の次に、村主遺跡17住のように虎浜山1号窯式の灰釉陶器を伴出する住居が続くものと思われるが、土器の様相は大きく異なっている。また、11世紀に属すると考えられる住居跡が1軒検出されているが、出土遺物は小形の皿、碗の高台の破片のみであった。

7. まとめ

以上のように、各段階によって器形の変化に連続性がなく組列として捉られない点や、胎土など土器の様相がかなり異なることが取られた。また、底部の切り離しの回転方向・調整は従来の月夜野窯跡群の研究成果と同様の結果が得られた。これらのことは、当遺跡に供給された土器群に、月夜野窯跡群の生産の展開がある程度反映していると考えられるので、時期を追ってまとめてみたい。まず、8世紀後半の土器は9世紀代のもので胎土は異なっている。しかし、沢入A支群の製品かは、比較する資料があまりなかったので確認していないが、胎土分析の節に掲載してある沢入の資料とは、当遺跡の土器の方が白色砂粒が少ない点において、やや異なる胎土である。9世紀第1四半期に属する資料は、前後のものと同胎土が異なる一群があり、胎土分析も行ったが分析結果が集中し、既報告の村主遺跡や大釜遺跡出土土器の分析結果と同じ範囲にあり、村主遺跡の8世紀前半の土器同様未発見の支群による製品の可能性が考えられる。9世紀第2・3四半期には、藪田の製品の供給が圧倒的であり、この時期、月夜野窯跡群の中でも主産を占めるような支群であったのだろう。9世紀末には、また胎土が大きく転換し、他の支群の製品の供給に替わっていったと考えられる。このように月夜野窯跡群の中で、時期的に各支群へ移り替わって行った操業の在り方が、当遺跡の土器様相に反映されていると言える。また、この土器様相から当遺跡の奈良・平安時代の集落は、8世紀後半から10世紀中頃まで増減はあったが連続していたと考えられる。

- 注1 『月夜野古窯跡群』群馬県利根郡月夜野町教育委員会 1985年
 注2 『大釜遺跡・金山古墳群』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983年
 注3 『群馬県利根郡月夜野町古窯跡群発掘調査報告』群馬県利根郡月夜野町教育委員会 1973年
 注4 『藪田東遺跡』1982年 『藪田遺跡』1985年 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 注5 『大原II遺跡・村主遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年
 注6 註2に同じ
 注7 『石巻遺跡』群馬県沼田市教育委員会 1985年
 注8 『月夜野羽形釜について』『埋文月報』№40 1984年3月号
 注9 『赤井宮前遺跡I』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985年
 注10 菅原正明「畿内における土器の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 1983年
 注11 神谷佳明「東国出土の甕形土器についての検討」『群馬の考古学』1988年
 注12 『長野県史』考古資料編 全一巻(二) 主要遺跡北・東信 1982年
 注13 『北原遺跡』群馬県群馬町教育委員会 1986年
 注14 『大久保A遺跡・七日市遺跡・滝沢古墳・女塚遺跡』群馬県吉岡村教育委員会 1986年
 注15 『金屋遺跡』群馬県教育委員会 1985年
 注16 保坂康夫「山梨県下における古代前半のロクロ製土師器をめぐって」『山梨県考古学協会誌』第2号 1988年
 注17 飯沼敬史・堀田雄司「南多摩郡城群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号 1979年
 注18 坂口一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』第24号 群馬県史編さん委員会 1986年

第3項 戸神諏訪遺跡出土の文字資料について

1. 「神人」姓の連名刻字羽釜

本遺跡のほぼ中央北寄りの位置にある128号住居跡より出土した羽釜片（128住-16）の口縁部下跨上の部分には、「神人子真丘^{註1}（丘）神人□□」の文字が記されている。文字は土器の焼成前の段階において、先端が鋭利な篋状の工具により、横位縦書き（口縁部を左側に寝かせて縦書き）に刻まれており、刻字時の粘土の盛り上がり等の痕跡より、焼成前の段階でも、粘土乾燥前の軟らかい時点で刻まれたものと考えられる。本遺物は口縁部から胴部中位にかけての破片であり、完形品を想定した場合の残存率は、口縁部において2分の1周弱、全体において約5分の1程の割合を占めるものと思われる。文字は、約2分の1周残る口縁の中程より書き始められていることから、「神人子真丘」が起筆であり、その前には最低でも4分の1周程度の余白を残す。「神人子真丘」に続く「神人」は、「丘」の文字と間隔を開けずに書き続けられ、最後の「人」の文字の次にも文字の痕跡の一部残す。記された文字は全体に楷書体に近い書体で書かれ、筆順は後掲の図3に示すものと考えられ、併せて刻字に用いられた工具の先端形状は、文字に太い部分と細い部分があることから、後掲の図2に示すような篋状のものであろうと推察される。また、起筆時における文字間隔に比べ、筆が運ばれるにつれて文字間隔が詰まって行くことから、起筆の「神人」以降、土器を手で送らず、一気に書き上げられているものと考えられる。

刻字されている羽釜は、本県北部の利根郡月夜野町に位置する月夜野古窯跡群^{註2}において生産された、いわゆる月夜野型羽釜と称されるもので、胴より下の整形が底部から口縁部に向かっての直線的な篋削りによる等の特色をもち、年代的には10世紀前半に比定される。また、生産地である月夜野古窯跡群と本遺跡との位置関係は、直線距離にして約7～8kmを測り、比較的近い位置関係にあると言える。

ここに記された「神人子真丘」は人物名と考えられ、「神人」姓の用例については「事象遺文」・「平安遺文」・「万葉集」・「三代実録」・「新撰姓氏録」・平城宮出土木簡などにもその記載があり、出雲・遠江・越前・丹後・備中・信濃・武蔵・近江・陸奥・佐渡・播磨・周防・御野（美濃）など全国的にその存在が窺える。また、本県における「神人」姓の類例として、文献上では「三代実録」貞観三十年十月二十八日の条に神人継道なる人物が上野国に居住していたことを窺わせる記載が残る。また、出土遺物の例として、群馬郡群馬町に所在する上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡の井戸内より「羊（辛）神人宿子種盛^{註4}」とへら書きされた瓦が出土しており、瓦は9世紀末から10世紀前半の吉井産男瓦である。

このように、本県においても「神人」姓をもつ人間が多く居住していた可能性は高く、本遺物に刻まれた「神人子真丘」なる人物もその一人であろうと推察され、かつ、その刻字が土器の焼成前に行われていることから、月夜野古窯跡群における羽釜の製作工人の一人であるとも考えられるが、他の出土する月夜野型羽釜において、このような刻字の類例がないことから、恒常的に刻まれたものではなく、本遺物単体、若しくは限定的に記されたものである可能性が高く、製作工人の手による刻字であるとしても、人物名は、受注・特注生産による製作工人以外の人物名である可能性も考えられる。しかし、記された遺物としての羽釜は、他の月夜野型羽釜と比較し

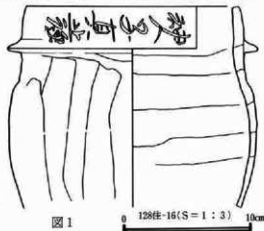


図1

ても相違点は見られず、出土した遺構にも他との大きな差異が認められないことから、仮に本遺物が限定・受注生産品であったとしても、使用者の社会的地位等を左右するものではないと考えられる。

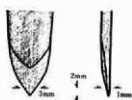


図2 推定刻字工具

(寸法は、土器乾燥～焼成時の収縮を考慮せず推定)

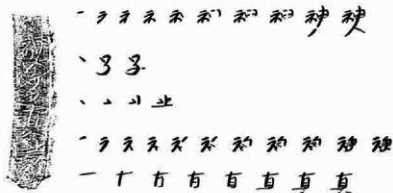


図3 刻字筆順

2. 線刻紡錘車

本遺跡出土の紡錘車は、石製紡錘車紡輪6点、鉄製紡錘車紡輪1点・軸部4点の計11点であり、遺物の年代は出土の遺構や共伴遺物よりみて、平安時代に限定されるものと思われ、検出された弥生時代後期から古墳時代前期の遺構よりの出土はない。また、紡錘車への線刻は、石製紡錘車6点中のうち129住-5、52住-2、136住-17の3点より検出された。この3点の線刻のうち、129住-5には上面に孔を中心とする放射状の線刻を施し、側面部に正位横書きでほぼ全周にわたり文字を刻むが、磨滅が著しく削痕も多いため、文字の判読は不可能である。また、52住-2・136住-17には、それぞれ下面と側面の一部に「十」の文字が線刻されており、この2点の紡錘車が石材・形態・法量において酷似していることから、製作地は明らかではないものの同一地・同一工人による製品と考えられ、記された「十」の文字についても数量や年号、若しくは何等かの略など様々な用例が考えられ、一概に断定でき得るものではないが、後記の墨書土器の118住-1の内面底部と外面体部に「十」の墨書をもち、外面底部には焼成後の線刻による「十」が記されていることから、2点の紡錘車に記された「十」の文字との関連があるやもしれず、併せて紡錘車への線刻が集落内で行われた可能性も高いものと考えられる。



図4 線刻紡錘車

3. 墨書土器

本遺跡より出土する墨書土器の総点数は、破片をも含めると143個体を数える。また、墨書土器を出土する遺構は竪穴住居跡が主体であり、検出された奈良・平安時代の竪穴住居跡97軒中44軒より墨書土器を出土しており、本遺跡の墨書土器の出土量、及び出土頻度は、群馬県内においても極めて高いものであると言えよう。

以下に、いくつかの観点からの個体数・比率等の数値データを掲げた上で考察を行いたい。

総点数 …………… 143個体

出土遺構数 …………… 97軒中44軒 45.4%

墨書文字種 …………… 30種類

器種別個体数

器種	個体数	割合
坏類	90個体	63%
碗類	40個体	28%
坏か碗	10個体	7%
その他	3個体	2%

墨書文字数

単一文字（1文字）	17個体
複数文字（熟語）	11個体
不明	115個体

墨書部位

部位	内面	外面	
体部	正位	4個体	19個体
	横位	2個体	14個体
	倒位	1個体	3個体
	斜位	1個体	1個体
	不明	14個体	41個体
底部	26個体	29個体	

※数ヶ所への重複を含む。

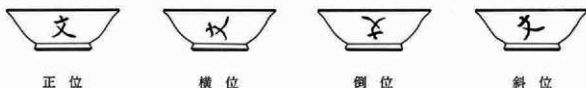
1個体1ヶ所	11個体
1個体数ヶ所	20個体

※完形品に近いもののみを対象。

まず、本遺跡における墨書土器の器種別個体数の割合から分析を行いたい、これについて考える前に触れておきたい問題がある。本来であれば、器種別以前に種別、則ち土師器・須恵器等の分類別に墨書個体数とその割合を算出すべきなのであろうが、本遺跡の場合、出土遺物中に見られる土師器坏・碗類の割合が極めて少なく、墨書土器に至っては、僅か141号住居出土の1点（後掲表No132）を数えるのみであり、種別個体数を算出しても、数値に極端な偏りが出、それが墨書土器の問題以前の検出遺構（集落）の年代的な部分に起因していることが明らかであり、須恵器・土師器の両者同数量の中から選択され墨書された上での数値の偏りではなく、今後、墨書土器の研究を進める上で、多くの出土遺跡のデータと比較してゆく際に同一レベルで対比し得るデータとは考えられないために、あえて須恵器・土師器の種別個体数とその割合を算出することを控えた。

器種別の個体数とその割合についてであるが、上記表では坏類への墨書が63%と半数以上を締めている。この割合についても前述の種別と同様に、出土遺物全体の比率と年代的増減を考慮しなければならないと考えられないため、図6を作成した。このグラフの中で、墨書土器の年代的な増減については後で述べること

墨書方向凡例



正位

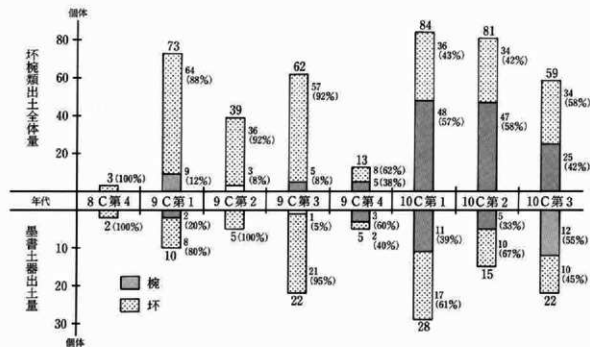
横位

倒位

斜位

とし、出土遺物総体の中での坏類と椀類の比率と墨書土器の中での坏類と椀類の比率を比較してみたい。まず、遺物総体の中での坏類と椀類の比率を見ると、8世紀第4四半期より9世紀第3四半期頃までは坏類の比率がかなり高いが、9世紀第4四半期頃を境にして、それ以降は椀類が多く見えはじめ、比率も高くなっていく。次に墨書土器の坏類と椀類の比率を見ると、出土遺物総体に見られる年代的增加や比率とほぼ同じような傾向を示している。このことは、前掲の表の器種別個体数に見る坏類や椀類の比率は、検出遺構の年代による出土遺物の器種組成に起因しており、墨書時における器種選択による比率ではないものと考えられる。また、同グラフが示す本遺跡における墨書土器の年代的な増減を見ると、9世紀第2四半期頃までは出土坏・椀類総体に対する墨書土器の比率が約13%程と低いものの、9世紀第3四半期頃を境に墨書土器は坏・椀類全体の約30%に及ぶ程まで増加する。このことより、本遺跡における墨書土器の盛行期は9世紀第4四半期以降であると考えられる。次に、墨書部位について述べたい。前掲の表に見られるように内面48個体、外面107個体と外面への墨書が多いように思えるが、墨書土器の一つの容器として考えれば、内外面の問題は内容物が有る時点で（内容物が透明な液体でない限り）文字が見えるか否かの問題であり、外面にあっても底部への墨書は見ることができない。従って、内容物が入っている状態で文字が見える位置にあるか否かという視点で見ると、見える位置78個体、見えない位置77個体とほぼ同じ量となる。1個体あたり2ヶ所以上墨書されているものも多く含まれるため、この数値のみでは明らかに出来ないが、必ずしも内容物がある時点で判読でき得る位置に記すとは限らないものと考えられ、余談ではあるが墨書部位の分析は今後、何の目的で土器に墨書するかという問題を解く鍵になるものと思われる。

出土墨書土器の数値データよりの分析は上記までとして、次に異住居間における同一文字出土の問題について述べたい。本遺跡における墨書土器の位置（平面）的な分布は後掲の全体図に見るように、ほぼ全域にわたって分布し、分布上の極端な集中傾向は見られない。この中において、同一の文字や同意文字（関連文字）を墨書する土器が多遺構にわたって出土している。この同一の文字や同意文字の分布の裏には、出土する遺構間の有機的な関連が推測される。図7は、この異住居間における同一文字・同意文字の関係を図示したものである。91号住、97号住、17号住、49号住からは「直」の文字が出土しており、これらの住居の平面



的な位置関係は、91号住居と17号住居の間が最も離れ、直線距離にして約300mを測る位置にあり、出土遺物より両者は时期的にも近い遺構であると判断されるため、住居間の有機的な結び付きを示唆しているものと考えられ、位置的には遺跡調査区の両端に近い位置にあっても、同一集落内に存在していた可能性が高いものと考えられる。また、时期的には前者より若干新しくなるものと思われるが、同じ「直」の文字を出土する49号住居と97号住居に関しても同様のことが考えられる。

次に、114号住居についてであるが、多量の「午」の文字と共に、「午」の裏側に「寺」の文字を記すもの（後掲表No.100）、「造佛」の文字を記し内面に黒色付着物が付着するもの（後掲表No.102）などの出土があり、「寺」及び「造佛」については直接的に寺院跡と結び付く文字と考えられ、多量の「午」の文字についても裏面に「寺」の文字を記すものがあること、54号住居出土の「有午」（後掲表No.35）の文字を介して寺院跡出土の「有」の文字に間接的に結び付くのではないかと考えられ、114号住居は、寺院の造営に深い拘わりを持つものと推察される。

一般的に墨書の文字と刻書（線刻）の文字とは次元が異なるように思われるが、刻書の中でも土器の焼成前に行われるいわゆるヘラ書き・ヘラ記号は別としても、焼成後に鋭利な工具等で書かれる文字については、墨書と同等に扱われるべきであろうと考える。その良好な資料として、118号住居出土の須恵器坏（後掲表No.113）には、外面体部と内面底部に墨書で「十」と記し、外面底部には鋭利な工具による焼成後の線刻で「十」と記されている。「十」の線刻が単独で記されている場合は「十」であるか「×」であるかの判別が難しいと思われるが、本遺跡においては前者の事例より、焼成前のヘラ記号の「×」は別として、墨書と土器焼成後の線刻、訪鍾車の線刻文字を「十」と判断し、図7に掲載したように114号住居、118号住居、58号住居、136号住居の住居間の関連性が推察される。

この他に、本遺跡において「吉」・「永」・「名」・「岡」などの文字が遺構を越えて出土しており、それぞれの遺構間での有機的な関連性を示していると考えられるが、本遺跡の西側に小河川（小沢川）を挟み隣接して立地する石墨遺跡^{註6}より出土している墨書文字と本遺跡出土の墨書文字とを比較してみると、石墨遺跡で複数点の出土が見られる「岳（岳）」の文字や「上」の文字は本遺跡においては見られず、逆に本遺跡において複数点出土している「午」・「吉」・「直」等の文字の一切は石墨遺跡に見られない。両遺跡に共通して出土する文字は僅かに「林」の文字一字のみであり、この文字は両遺跡共に1点づつの出土である。このように、両遺跡間における出土文字の共通性は薄く、集落という単位を用いるならば、両遺跡は出土文字から察する限り、有機的な関連性は薄く、別集落であった可能性が高いものと推察される。

本遺跡出土の墨書土器は冒頭で述べたように、その数量と出土頻度の高さは県内においても極めて高く、恐らく利根・沼田地域において最大量の出土であると思われる。しかし、本遺跡内においては前述のとおり、その出土遺構の大半は竅穴住居跡であり、官衙等を想定させる遺構の検出はない。また、墨書土器そのものに対しても、その出土状況より他の遺物に比べて特別な扱いを受け使用されていた様相はなく、通常の什器の一部として使用され、計算上では住居ごとの什器のおよそ3～4個体に1個の割合で墨書土器が存在していたものと考えられる。つまり、使用者側には特別な意識がないものの、結果的に他の集落に比べ墨書が流行するといった様相が窺える。では、何故に本集落において墨書が流行したのであろうか。やはり、一番の要因として考えられるのは、寺院の存在であろう。寺院は検出された方形の溝をもつ遺構（遺構名称は寺院跡とした）がそれに当たり、47号住居跡より出土した「宮田寺」の墨書（後掲表No.23）が検出された寺院跡の名称であろうと考えられる。この宮田寺の初現については、前述の114号住居跡出土の「造佛」の墨書土器^{註7}を年代の基準として用いるならば、9世紀の第3四半期（第V段階）頃に比定され、その存続については前

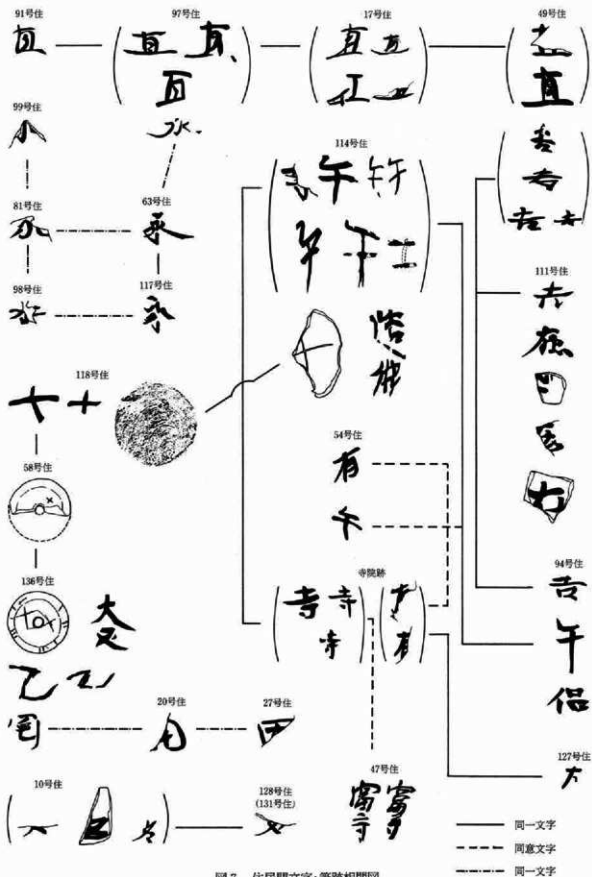


図7 住居間文字・筆跡相関図

記の「宮田寺」の墨書土器や他の「寺」と墨書された土器の年代より推定するならば、10世紀初頭頃までは確実にその存続が窺える。この9世紀第3四半期から10世紀代にかけての時期は、前述の墨書土器の年代的増減でも見られたとおり、本遺跡における墨書の盛行期でもあることから、やはり寺院（宮田寺）の存在が本遺跡での墨書盛行の大きな要因であろうと考えられる。

4. 転用硯

本遺跡出土の転用硯の分析に入る前に、本稿で取り上げる転用硯についての概念について記しておきたい。硯とは「広辞苑」（第三版）によると、「(墨研の転)石または瓦などで作り、墨を水で磨りおろすのに用いる具。」と記されている。当然のことながら、固形の墨を磨りおろすことで液状にするわけであるが、硯には液状となった墨を一時的に溜めておく機能をも有している。しかし、硯とするからには「墨を磨る(磨る)」という行為が伴う。出土遺物中、硯として製作されたものは、仮りに未使用の状態であっても硯であるが、土器や瓦の完形品、若しくは破片等を硯として転用したと認定するにあたっては、墨を磨った際の摩滅痕・円形、及至螺旋状に残る墨痕等の有無が決め手となろうが、これは、転用した遺物の硬度、硯としての使用期間や頻度等に大きく左右される。仮りに、硬い遺物を一度だけ硯として転用し廃棄したとしたら、摩滅と墨痕は顕著に残らないであろうが、硯として用いられたことは事実であろうからこの遺物は転用硯として認定すべきであるとする。確かに若干の摩滅を転用前によるものか、転用後によるものかを判断することは難しいが、本遺跡において出土遺跡中より転用硯を抽出する際には、こうした僅かな摩滅と墨痕が残るものも含めて転用硯として認定した。

本遺跡より出土する転用硯の数量は13個体を数える。完形品の転用は少なく、僅かに131号住出土(表№126)の1点のみであり、他は破損後の転用と考えられるが、その中でも111住-6(表№95)、111住-7(表№96)などは明らかに転用の際に底部のみを残すように不要部を打ち欠いているものと思われる。

転用硯の種別と器種を見ると、灰軸碗5個体、灰軸皿1個体、須恵器坏3個体、須恵器碗1個体、須恵器皿1個体、須恵器壺片2個体であり、坏碗類の内面底部の使用が11個体と最も多い。また、年代的に見ると9世紀第3四半期(第V段階)から10世紀第3四半期(第IX段階)にかけて多くみられ、転用硯が破損後の土器の再利用ということから、土器そのものの年代観(製作時点)と転用化した時点の年代観は若干の差異があることは考慮しなければならないが、拾得品や伝世品の転用ではなく、所持品の転用と見れば年代上の大きな差異はないものと考えられる。また、この転用硯の多くみられる時期は墨書土器の多い時期とほぼ一致するが、これをもって転用硯は墨書土器への文字記入に用いられたものであるとは言えず、他の物(紙・木簡)への墨書も考えなければならない。転用硯の存在のみではその使用目的を明らかにすることはできないが、墨と筆と硯を用いて文字を記すことが集落内において高い頻度で行われていたことは確かであると言える。また、93号住-1(表№62)は須恵器碗の底部片の内面を使用している転用硯であるが、内面底部端から割れ口、高台外面にかけて筆の墨をさばいた(整筆)痕跡が数ヶ所にわたってみられ、その痕跡が高台部下端にまで至っていることから、使用時には机上に置いて使用されたものとは考えられず、手持ちの状態で使用されたものと推察される。この遺物のみをもって転用硯すべての使用方法を語ることはできないが、全体的に転用硯は大きさと墨を磨る面積が小さいこと、墨を磨る部分は比較的平坦で深度がないことなどを含めて考えると、転用硯は一度筆が吸うとなくなる位の量の墨を磨り、記す文字数も長文ではなく少ないものに、手持ちで使用されたのではないかと考えられる。

- 註1 「土」は「丘」の異体字。中国の荀岳墓誌、魚峽碑、孔廟禮碑、甘肅相殿碑等に用例があり、人物名としての「真丘」の用例は、『続日本後記』嘉祥二年正月の条に、從五位下紀朝臣眞丘の用例がある。(国立歴史民俗博物館 平川南助教授の御教示による。)
- 註2 『月夜野古家跡群』群馬県教育委員会・月夜野町教育委員会刊 1985
- 註3 中沢 悟 「月夜野彫刻の様相と月夜野古家跡群」『埋文月報40号』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団刊 1984
中沢 悟 「月夜野彫刻の様相と月夜野古家跡群」『大原II遺跡・村主遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団刊 1986
- 註4 調査・整理担当である本津博明氏の御教示による。
- 註5 土器内面に付着する漆状付着物については、第4章第3節第2項の「出土土器の黒色・赤色付着物について」(319頁)を参照
- 註6 『石塚遺跡』沼田市教育委員会・群馬県教育委員会刊 1985
- 註7・8 出土遺物の年代的段階設定については、第4章第2節第2項の「奈良・平安時代の土器」(259頁)を参照。

本稿の執筆に伴い、国立歴史民俗博物館 平川南助教授には、墨書・刻書文字の判読から整理、分析方法に至るまで御指導・御助言を賜った。記して感謝の意を表したい。

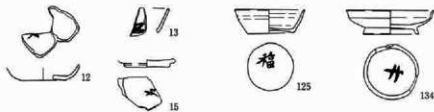
II

(8 C 第4)



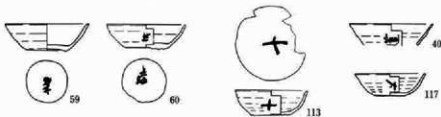
III

(9 C 第1)



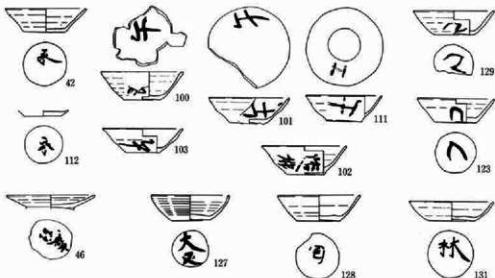
IV

(9 C 第2)



V

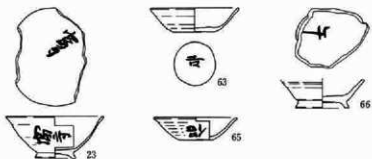
(9 C 第3)



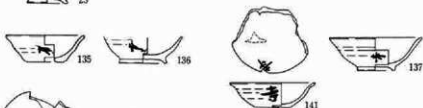
墨書集成図(1)

(S=1:6) 20cm

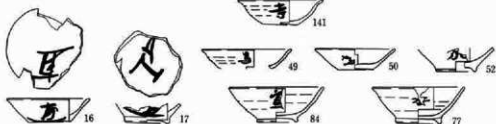
VI
(9C第4)



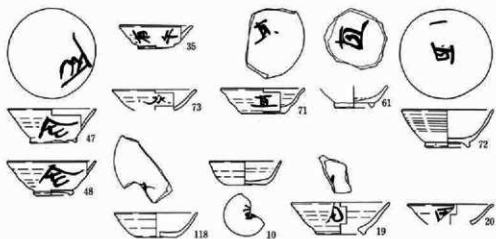
(10C前後)



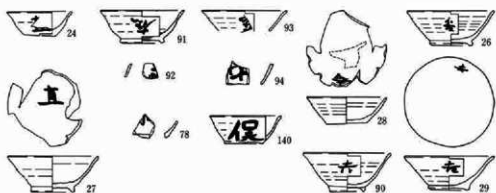
VII
(10C第1)



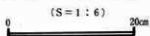
VIII
(10C第2)



IX
(10C第3)



墨書集成図(2)



No	出土遺構・番号	器種	文字位置・方向	時期	備考 (判断文字等)
1	2号住居-1	須恵 坏	外面体部	10C第2	判断不可
2	# -2	# # #	内面体部	#	欠損のため判断不可
		# # #	外面体部	#	欠損のため判断不可
3	4号住居-1	# 坏	# # #	8C第4	磨滅のため判断不可 住居の時期は10C前半と思われる。
4	# -3	# 耳皿	内面底部	10C第2	判断不可
5	5号住居-1	# 坏	外面底部	8C第4	「宮井」は「宮」に比べて「井」ははっきり書かれている。
6	# -2	# # #	外面体部	#	欠損のため判断不可
7	# -3	# # #	外面底部	#	焼成前へつ記号「X」
8	6号住居-1	# # #	# # #	9C第1	焼成前へつ記号「X」
9	7号住居-5	# 椀	# # #	9C第3	焼成前へつ記号「X」カ 残欠
10	9号住居-1	# 坏	墨書 # #	10C第2	「祖」 住居の時期は10C前半と思われる。
11	10号住居-3	# # #	外面体部 横位	9C第1	磨滅のため判断不可
12	# -4	# # #	内面底部	#	「名」カ 残欠 №15と同一筆跡、又№118とも類似
13	# -2	# # #	内面体部	#	「名」カ 残欠
14	# -5	# 椀	外面底部	#	磨滅のため判断不可
15	# -6	# 坏	# # #	#	「名」 №12と同一筆跡、又№118とも類似
16	17号住居-1	# # #	内面底部	10C第1	「直」 №47・48・61の筆跡に類似
17	# -2	# 椀	外面体部 正位	#	「直」
		# # #	内面底部	#	「直」 同上
		# # #	外面体部 正位	#	「直」
18	18号住居-4	# # #	外面底部	9C第1	磨滅により判断不可
19	20号住居-1	# # #	内面体部	10C第2	欠損のため判断不可
		# # #	外面体部	#	「四」、「毛」を磨ったものか。
20	27号住居-1	# 坏	# # #	#	「四」
21	46号住居-1	# 椀	内面底部	10C第1	欠損のため判断不可 №146と類似
22	# -2	# 坏	# # #	#	欠損のため判断不可
23	47号住居-4	# 椀	内面底部 横位	9C第4	「宮田寺」 「宮田寺」
24	49号住居-1	# 坏	# # # 正位	10C第3	「直」 №27・71・72の筆跡に類似
25	# -2	# # #	# # #	#	欠損のため判断不可
26	# -5	# 椀	# # # 正位	#	「吉」、この文字群は同一筆跡カ
27	# -7	# # #	内面底部	#	「直」№24・71・72の筆跡に類似
28	# -3	# 坏	内面体部 正位	#	「吉」
29	# -6	# 椀	# # #	#	「吉」
		# # #	外面体部	#	「吉」
30	# -10	# # #	# # #	#	磨滅のため判断不可
31	# -4	# 坏	# # #	#	磨滅のため判断不可
32	# -9	灰軸 椀	内面底部	#	転用碗
33	50号住居-1	# 皿	# # #	10C第3	転用碗、磨耗が著しい。 #
34	54号住居-1	須恵 椀	内面底部	10C第2	欠損のため判断不可
35	# -2	# 坏	外面体部 横位	#	「有 午」 有と午に間隔がある。
36	55号住居-1	# # #	# # #	#	欠損のため判断不可
37	58号住居-1	須恵 椀	内面底部	9C第3	転用碗、内面底部横軸目の磨耗が大きい。
38	# -2	紡錘車 刮削	下面	#	「十」 鋭利な工具にて刻削
39	59号住居-1	須恵 坏	内面体部	10C第2	欠損のため判断不可
40	62号住居-1	# # #	外面体部 横位	9C第2	「管」
41	63号住居-1	# # #	内面底部	9C第3	転用碗
42	# -2	# # #	外面底部	#	「永」 №112と同一筆跡
43	64号住居-6	# 壺	内面体部	10C第2	転用碗
44	67号住居-1	# 坏	外面底部	9C第2	欠損のため判断不可
45	69号住居-2	# # #	外面体部	9C第3	欠損のため判断不可
46	# -1	# 皿	内面底部	#	転用碗
		# # #	外面底部	#	「大」 №127・131の筆跡に類似カ
47	79号住居-2	# 椀	外面体部 正位	10C第2	「全」カ、№16・17・48・61の筆跡に類似
		# # #	内面体部	#	「全」カ
48	# -3	# # #	外面体部	#	「全」カ、№16・17・47・61の筆跡に類似
49	81号住居-2	# 坏	# # #	10C第1	「真」=輪 №50と同一筆跡
50	# -1	# # #	# # #	#	「真」カ、残欠 №49と同一筆跡
51	# -6	# 椀	# # #	#	磨滅により判断不可
52	81号住居-7	須恵 椀	外面体部 正位	#	「永」カ 残欠

第4章 調査成果

No.	出土遺構番号	器種	文字位置・方向	時期	備考 (判断文字等)
53	81号住居-3	酒恵 椀	墨書 外面体部	10C第2	欠損のため判読不可、筆先の乱れが見られる。
54	〃 -4	〃 坏	〃 〃 内面体部	〃	欠損のため判読不可
55	〃 -5	〃 〃	〃 〃 外面体部	〃	欠損のため判読不可
56	82号住居-1	〃 〃	〃 〃	10C第2	欠損のため判読不可
57	〃 -2	〃 〃	〃 〃	〃	欠損のため判読不可
58	83号住居-1	灰釉 椀	墨痕 外面底部	10C第2	転用磁
59	86号住居-1	酒恵 坏	墨書 〃 〃	9C第2	「野井」 下記と同一筆跡
60	〃 -2	〃 〃	〃 〃 外面体部	〃	「野井」 「野井」カ 残欠
61	91号住居-6	〃 椀	〃 〃 内面底部	10C第2	「直」 №16・17・47・48と類似筆跡
62	93号住居-1	〃 〃	墨痕 〃 〃	9C第2	転用磁 破壊後の碗を磁器に使用
63	94号住居-1	〃 坏	墨書 外面底部	9C第4	「吉」
64	〃 -3	〃 椀	〃 〃 外面体部 正位	〃	内面底部に赤色顔料付着
65	〃 -2	〃 坏	〃 〃 〃 側位	〃	「翌」
66	〃 -4	〃 椀	〃 〃 内面底部	〃	「午」、他の「午」より線が硬い。
67	95号住居-3	〃 〃	〃 〃 〃 外面体部	10C第1	磨滅のため判読不可
68	〃 -1	〃 坏	〃 〃 〃 〃	〃	欠損のため判読不可
69	〃 -2	〃 〃	〃 〃 〃 〃	〃	欠損のため判読不可
70	97号住居-2	〃 椀	〃 〃 内面底部	10C第2	欠損のため判読不可
71	〃 -1	〃 坏	〃 〃 〃 〃	〃	「直」、№24・27・72と類似筆跡
72	〃 -3	〃 椀	〃 〃 外面体部 正位	〃	「直」
73	〃 -5	〃 坏	〃 〃 内面底部	〃	「直」、№24・27・71と類似筆跡
74	〃 -4	〃 〃	〃 〃 外面体部 正位	〃	「水」カ
75	〃 -6	〃 〃	〃 〃 〃 〃	〃	欠損のため判読不可
76	〃 -7	〃 〃	〃 〃 〃 〃	〃	欠損のため判読不可
77	98号住居-1	〃 椀	〃 〃 〃 正位	10C第1	「水」カ 残欠
78	99号住居-1	〃 〃	〃 〃 内面体部	10C第3	「水」カ 残欠
79	102号住居-1	〃 〃	〃 〃 外面体部	10C第1	磨滅のため判読不可
80	〃 -3	〃 坏	〃 〃 〃 正位	〃	№82と同一文字の可能性有、欠損のため判読不可
81	〃 -2	〃 〃	〃 〃 内面底部	〃	欠損のため判読不可
82	〃 -4	〃 〃	〃 〃 外面体部	〃	磨滅のため判読不可
83	109号住居-5	〃 椀	〃 〃 外面底部	10C第1	磨滅のため判読不可
84	〃 -6	〃 〃	〃 〃 外面体部 正位	〃	「宜」カ
85	〃 -1	〃 坏	〃 〃 〃 〃	〃	欠損のため判読不可
86	〃 -2	〃 〃	〃 〃 内面体部	〃	欠損のため判読不可
87	〃 -4	〃 〃	〃 〃 内面底部	〃	欠損のため判読不可
88	〃 -3	〃 〃	〃 〃 外面体部	〃	欠損のため判読不可
89	〃 -7	〃 〃	〃 〃 内面体部	〃	欠損のため判読不可
90	111号住居-1	〃 椀	〃 〃 外面体部 正位	10C第3	「吉」
91	〃 -2	〃 〃	〃 〃 〃 側位	〃	「在」 №93・94と同一筆跡
92	〃 -5	〃 〃	〃 〃 〃 〃	〃	「在」 残欠
93	〃 -3	〃 〃	〃 〃 〃 側位	〃	「在」 残欠 №91・94と同一筆跡
94	〃 -4	〃 〃	〃 〃 内面体部	〃	「在」 残欠 №91・93と同一筆跡
95	〃 -6	灰釉 椀	墨痕 内面底部	〃	転用磁
96	〃 -7	〃 〃	墨痕 外面底部	〃	転用磁
97	〃 -8	酒恵 坏	墨痕 内面	〃	転用磁 赤色顔料付着
98	114号住居-3	〃 〃	墨書 外面体部	9C第3	欠損のため判読不可
99	〃 -2	〃 〃	〃 〃 〃 〃	〃	「水」カ
100	〃 -9	〃 〃	〃 〃 内面底部	〃	「午」
101	〃 -5	〃 〃	〃 〃 外面体部 斜位	〃	「寺」カ、残欠
102	〃 -4	〃 〃	〃 〃 内面体部 横位	〃	「午」
103	〃 -1	〃 〃	〃 〃 外面体部	〃	「午」
103	〃 -1	〃 〃	〃 〃 〃 〃	〃	「造佛」、内面に漆付着 「午」と同一の書き手 「午」、勢いのある行書

No	出土遺構・番号	器種	文字位置・方向	時期	備考 (判断文字等)
104	114号住居-10	須恵 椀	墨書 内面底部	9 C第3	欠損のため判読不可
105	〃 - 8	〃 坏	〃 外面底部	〃	欠損のため判読不可
106	〃 - 7	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	欠損のため判読不可
		〃 〃 〃	刻書 内面底部	〃	構成後刻字「十」 残欠
107	〃 - 14	〃 〃 〃	墨書 外面底部	〃	欠損のため判読不可
108	〃 - 12	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	欠損のため判読不可
109	〃 - 11	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	磨滅のため判読不可
110	〃 - 13	〃 〃 〃	内面底部	〃	欠損のため判読不可
111	〃 - 6	〃 〃 〃	外面底部 横位	〃	「午」、筆先の乱れが目立つ 墨色が鮮やかに残る
		〃 〃 〃	内面底部 横位	〃	「午」
112	117号住居-1	〃 〃 〃	外面底部	〃	「永」, No42と同一筆跡
113	118号住居-1	〃 〃 〃	外面底部 正位	9 C第2	「十」
		〃 〃 〃	内面底部	〃	「十」
		〃 〃 〃	刻書 外面底部	〃	構成後刻字「十」
114	125号住居-2	〃 羽釜	墨書 外面胴部	10C第1	欠損のため判読不可
115	〃 - 1	〃 坏	内面底部	〃	欠損のため判読不可
116	〃 - 3	〃 椀	内面底部	〃	欠損のため判読不可
117	127号住居-1	〃 坏	外面底部 横位	9 C第2	「有」、他住居出土のものと同様
118	128号住居-1	〃 〃 〃	内面底部 正位	10C第2	「名」カ
119	〃 - 2	〃 〃 〃	外面底部	〃	欠損のため判読不可
120	〃 - 2	〃 椀	〃 〃 〃	〃	欠損のため判読不可
121	〃 - 16	〃 羽釜	刻書 外面口縁部横位	〃	構成後刻字「神人子真丘 神人」
122	129号住居-5	紡錘車	〃 上面・側面	10C第2	判読不可、上面には放射状刻線
123	130号住居-1	須恵 坏	墨書 外面底部	9 C第3	「八」カ
		〃 〃 〃	外面底部	〃	黒色の部分に墨書「八」カ
124	〃 - 3	〃 甕	墨痕 内面底部	〃	転用瓶
125	131号住居-1	〃 坏	墨書 外面底部	9 C第1	「福」
126	〃 - 2	〃 〃 〃	墨痕 内面底部	〃	転用瓶、鮮明な墨痕を広い範囲に残す
127	136号住居-3	〃 〃 〃	墨書 外面底部	9 C第3	「大又」カ「丈又」 No46・131の筆跡と同様カ
128	〃 - 1	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	「同」カ
129	〃 - 2	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	「」カ
		〃 〃 〃	外面底部 横位	〃	「」カ
130	〃 - 17	紡錘車	刻字 側面・下面	〃	「十」 刻字（6ヶ所以上）
131	138号住居-1	須恵 坏	墨書 外面底部	〃	「林」, No46・127の筆跡と同様カ
132	141号住居-1	土師 坏	〃 〃 〃	9 C第1	欠損のため判読不可
133	〃 - 2	須恵 坏	〃 〃 〃	〃	磨滅のため判読不可
134	〃 - 3	〃 甕	〃 〃 〃	〃	「什」カ「井」カ薄くもう一本横線があるようにも見える。
135	寺院跡-2	坏	外面底部 横位	10C前後	「有」 No35と「有午」と類似カ 残欠
136	寺院跡-6	椀	〃 〃 〃	〃	「有」
137	寺院跡-4	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃	「寺」
138	寺院跡-3	坏	内面底部	〃	欠損のため判読不可
139	寺院跡-1	〃 〃 〃	外面底部	〃	欠損のため判読不可
		〃 〃 〃	内面底部 斜位	〃	欠損のため判読不可
140	6 (S4土坑)	須恵 坏	外面底部 正位	〃	「俣」 太字で筆面いっぱい書いている。
141	2号溝-1	坏	〃 〃 〃	〃	「寺」 寺院関係の溝
		〃 〃 〃	内面底部 斜位	〃	「寺」
142	5号溝-2	須恵 坏	墨書 内面底部	〃	欠損のため判読不可
143	6号溝-1	〃 椀	墨痕 外面底部	〃	欠損のため判読不可 寺院関係の溝
144	遺構外出土1	灰輪 椀	墨痕 内面底部	〃	転用瓶
145	遺構外出土2	須恵 坏	墨書 外面底部	〃	欠損のため判読不可
146	遺構外出土4	〃 〃 〃	外面底部	〃	欠損のため判読不可

A区2住-3 C区12住-3

D区7住-4

D区13住-1

D区1住-4

B区12住-1

C区5住-4

C区16住-8

D区20住-6

D区1住-8

C区表土-229

D区20住-11

B区8住-2

C区15住-4

参考 石墨遺跡出土墨書文字

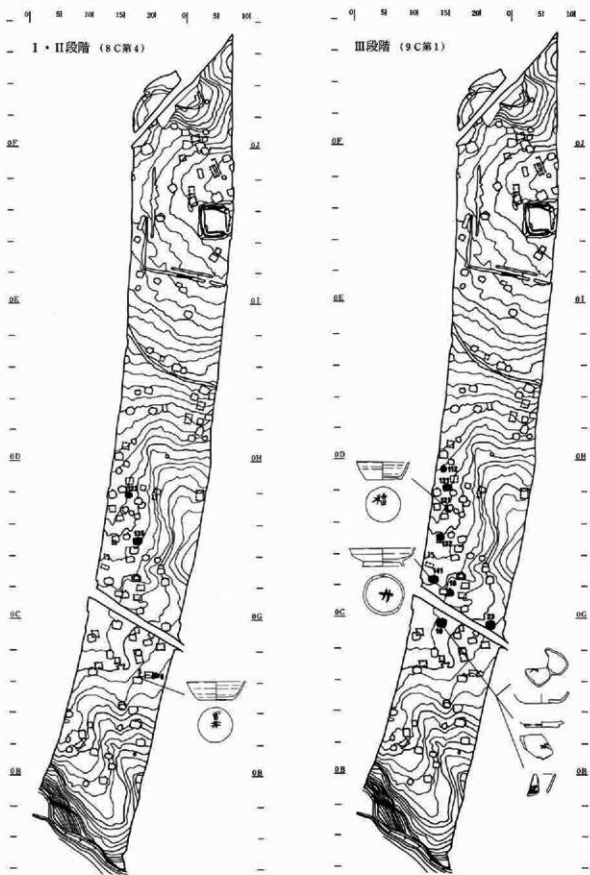


图1 時期別全体図・墨書分布図

1 : 2500

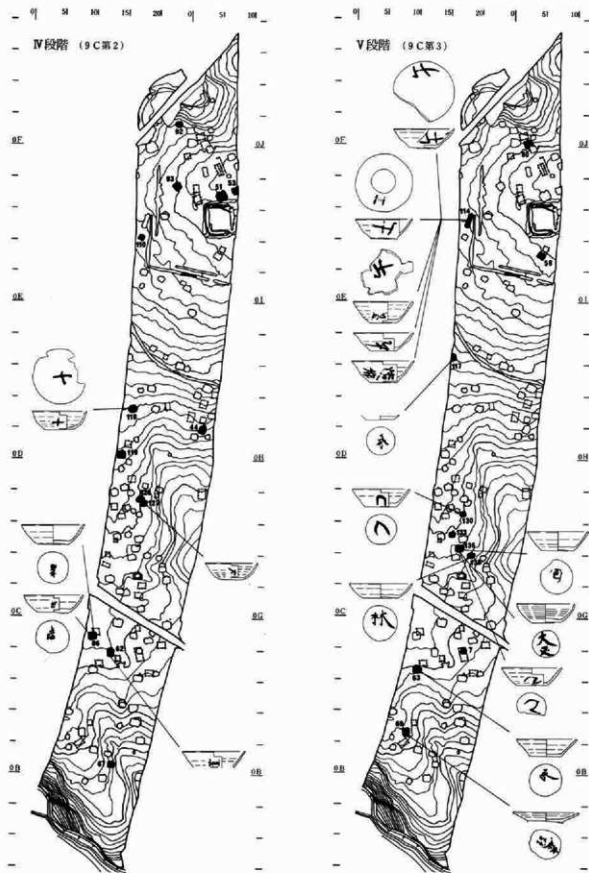


图2 时期别全体图・墨書分布图

1 : 2500

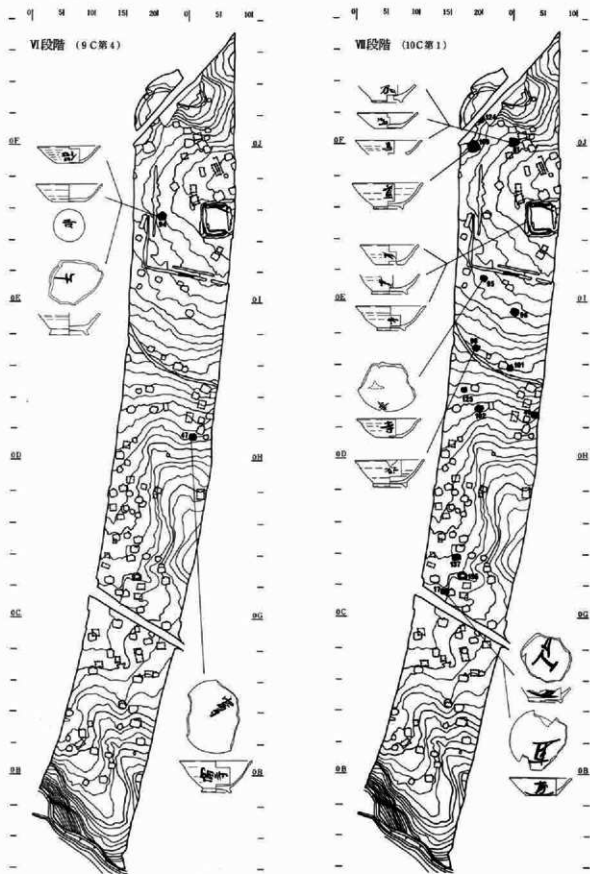


图3 時期別全体図・墨書分布図

1 : 2500

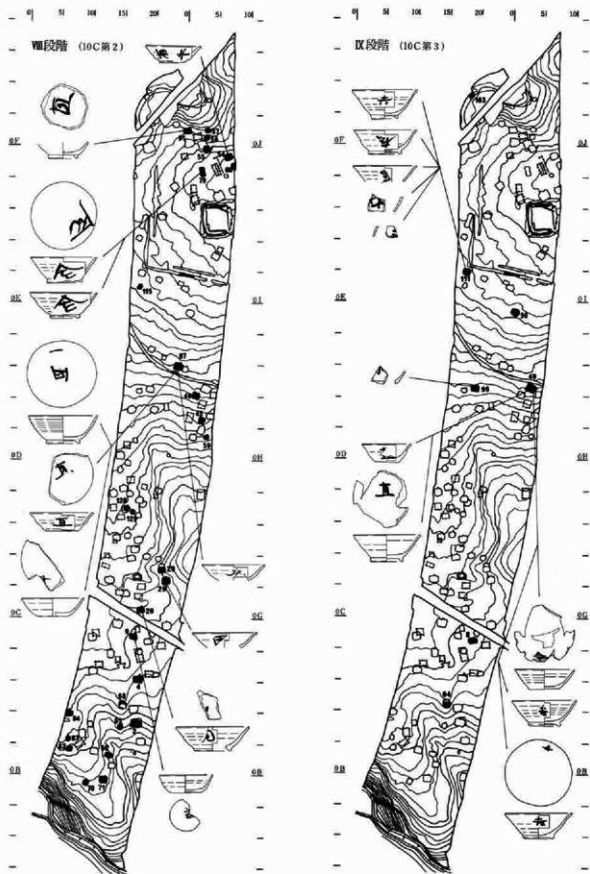


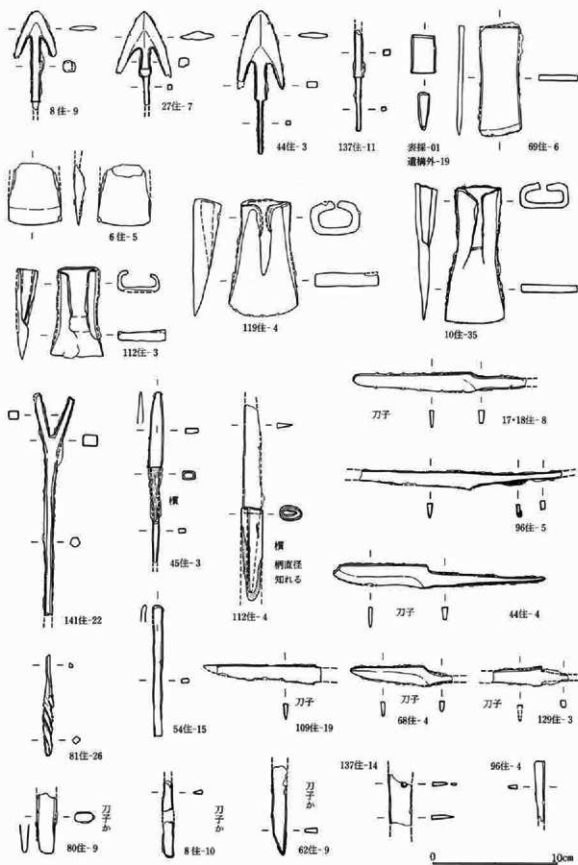
图4 時期別全体図・墨書分布図

1 : 2500

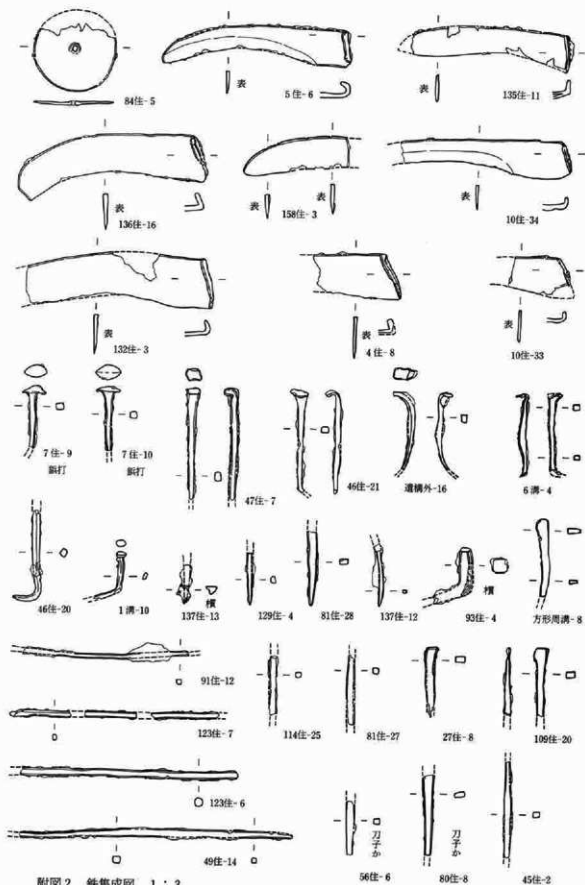
第4項 鉄製遺物（金属器）

整理体制を補う目的で本稿を作成した。附図1～3は古墳時代以降から近世まで含まれているが、附図1（26点）では表録9が中世、附図2（34点）では遺構外16が時期不詳、158住が弥生～古墳時代初頭、附図3（10点）では遺構外13・15の2点が時期不詳であることを除くと66点が古代の所産であった。古墳時代を除き、奈良・平安時代の住居跡から出土した鉄器は60点（出土住居跡37跡、1住居跡当り1.62個体）で1住居跡当り0.63個体を数え、極端に多量ではなかったが多い傾向が認められた。その数値は調査時の見出しが多分に影響するため、調査担当から調査時の状況を聞き取りしたところ、調査の過程は順調で追込まれた状況は少なく、また金属製品の出土については注意していたとのことであるので、そのため出土個体量はある程度信頼でき、算出条件もある程度満たされていると判断された。

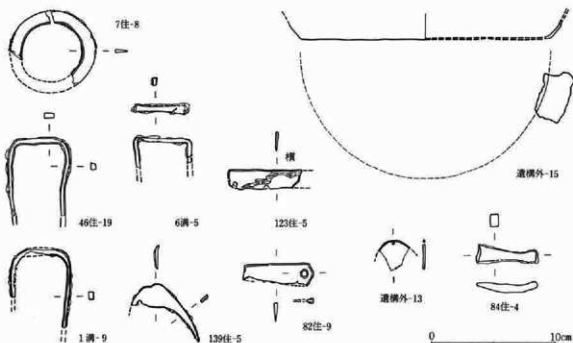
鉄器の検討に入る前に鉄器の存在理由と年代観について少し触れたい。まず鉄器の出土状態は、どの遺跡であっても床面に伴う例は極めて少なく、当遺跡でも60点中5点（8.3%）に過ぎず、大半は床から離れた状態で出土している。それをもって自然現象に主因ありとするには1,000年強の年代では考え難く、別の理由を必要とし、第一に鉄器の保管を考える必要がある。鉄器の保管は現在でも湿度の少ない通気の良い場所に置くのが常であり、仮りに錆が生じれば砥石減以上に鉄身が消耗してしまう。錆化を防ごうとする基本的な扱いは古代でも同様か、それ以上のはずであり、住居内に置く場合、土間や湿気を多く含んだ敷物上に長期間置くような形は想像し難く、棚上であるとか、垂木裏に挟むとか、収納庫に入れるとか通気の良い箇所への納置が考えられるので、むしろ床面から出土しないことの方が自然である。第二に鉄器の価値観を考える必要がある。生産価格を現在の和鉄の製作例から見ると（古代鉄の化学分析結果は、多くが半島招来の鉄原料と考えられている）、最も効率の良い小形炉¹¹を用いたとして（古代炉の熱効率¹²は良くないとされている）、2kgの玉鋼をとるには60kg以上の松炭と35kgの砂鉄（砂鉄の産出地域によって鉄質量は異なる）を必要とし、そこからおよそ12kgの鋳¹³が得られ、内約10kgが鉄鉄、2kgが玉鋼である。この工程までに要した炉材と労力¹⁴を加えると、総計は約10万円（昭和55年当時）で、それに製品化に向けての鍛造工程を入れると、さらに鉄質量の目減と木炭の多量消費、製作工程¹⁵が加り、結果的に1点当りの単価は数万～10万円以上に達してしまうのである。したがって折返し回数が多いと見られる10住34の弁などは高価で、現在であっても数万円以上の製作費を見積ることができ、そうした生産価格を思うと古代の価値観と現代の価値観が同等であった筈はないが、廃棄予定の住居内に鉄器を置忘れり、安易に鉄器を遺留したとも思えないのである。その意味において鉄器の廃棄理由を第三に考える必要がある。廃棄の理由は前述のとおり、多くの場合、故意による意味深い遺留と考えられるが、実証しうる側面は床面から出土する例が少ない点から、一般的な廃棄形態と異なることある程度察し得るが、それは情況であって実証性に乏しい。当遺跡の場合、鐵の出土事例を見ると、製作量の少ないはずの大根鐵¹⁶が3点存在し、量的に多いはずの小振の鐵を見ない。それは明らかに大根鐵を選択¹⁷して故意に意留させ、そこには何んらかの形で住居廃棄に伴うか住居廃棄後の廃棄に関連した儀礼行為¹⁸が考えられる。そのため釘・棒状鉄など消耗材の特定は困難としても、工具・農具・利器など製作労力の高かった製品の大半はその可能性が高い。第四に廃棄の年代がある。前述のとおり、鉄器は故意に納置した可能性が高いので、各住居跡出土の鉄器は各住居跡の廃棄の年代に近いものとして考えたい。しかし、埋没過程にある住居跡の凹みを別目的の祭祀に用いた場合や、不特定な理由により、鉄器が置かれた時についてはこの限りではないので、今後、資料の検討に蓄積を深め、不特定原因を考え、住居平面上における出土位置を中心に検討¹⁹の蓄積を計るつもりである。なお住居跡の廃棄年代に関しては、本部第2項「奈良・平安時代



附図1 鉄遺物集成図(鉈のみ銅製関連) 1 : 3



附圖2 鉄集成圖 1:3



附図3 鉄実測図 1:3

滑点止めで、穿孔に用いたり、江戸時代まで廻りうるかは疑問であるという。

刀子 刀子として確実な例は7点あり、佩用と見られる優美な形態の例はなく、全て工具用の雑用刀子である。茎片のみで刀子と考られる例に8住10、56住6、62住9、80住8・9、96住4がある。形態の知れる7点のうち112住4には柄部の木質遺存があり、さらに区と茎との間に短い筒金が木柄中に喰込んで装着されている。本来、鑑用に装着されていた筒金が柄側に深く喰込んだとは刀子の元幅から想像した鑑の大きさより筒金の方が小さいため、その鑑椀筒金の機能は明確でなく、特異例となる。刀子の切先形態の変形が67・18住8、44住4にあり、棟側を冠落以上^{カサノケ}に鋭角に取り、刺先状を呈する。68住4も前2例ほどではないが、先が刃側に附く。区形態は刃・棟区^{ノボリ}の両区例が17・18住8、112住4、129住3、190住19があり、刃区のみが96住5、棟区のみが44住4にある。研磨はいずれも上手で17・18住8、44住4、68住4に研磨による筋筋^{スジ}がわずかながら見られるが、斜に棟側に達するほどの顕著な例はない。棟側に達するほどの研磨は、強度が失なわれることに通じ、近世の日本刀副小刀（小柄の穂先）を見ても古身^{コノミ}（廻る時代に製作され、伝存期間が長いため、使用頻度が多くなり、刃側が消耗して身幅が狭くなった副小刀）は刃側の消耗が顕著で副小刀を利器に用いた際の研磨法^{ハヤシ}が理解でき、棟側も薄くさせることは下手に通ずる。筋筋の3例も棟側を損じないよう刃側に研磨意識を置いたようで、そのため物打側に内反の心が^{ウラ}見られ、筋筋が立っていない点と合せば、研磨はおだやかなペースで丁寧に仕上げられていると考えられる。

紡錘車 84住5のみで軸を欠く

用途不明刃物 123住5が摘鎌^{ツミカサ}と称される利器に似るが片側欠損し、小形のため他の2点とともに機能は不明瞭である。82住9、123住5、137住14のうち123住5が両刃で他2例が片刃である。作込は極めて薄作りでありながら、いずれも精鍛造を思わせる錆化である。片側には小孔がある。孔の大きさ（X線撮影像照合済）とその位置は三様である。そのうち123住5には木質が棟側を覆うようにして斜に付着し、着装状態が示唆される。

鎌 8点の出土がある。刃の付け方は平面図側に片刃が設けられ、全て右利用の鎌である。元身巾があり

大形を思わせる3点と、元身巾の狭い小形を思わせる4点とがある。耳際の研出し位置または成形時の区と折り返しの耳との幅から柄部の直径がある程度、示唆され、56住6で2.8cm以下、136住16で3.7cm以下、10住34で4.5cm以下、132住3で3.1cm以下である。研磨は研磨による鑄筋が刃側から棟側に達した例はなく、5住6、10住34にしても刃部と平行して浅い鑄筋が入り、鎌研磨に対し、ある程度の丁寧さが窺える。それは刀子の場合と同様、棟側を維持し、強度を保つ意識の現われであろう。そのほか、135住11、136住16、158住3、132住3についても極端な鑄筋が入らないので、ある程度、丁寧な研磨がなされたようである。

釘 釘の頭に化粧のある鋳製の飾釘¹⁰が7住から2点出土している。一般的な釘として46住21、47住7、81住27、93住4、137住12・13、1溝10、6溝4、遺構16がそれである。鍛えは鋳釘が良く、後者は柁方向の錆割が多い。鋳釘の2点は部分的に曲り、他も素性のよい47住7を除き、多・少の曲りや撥れが認められ、使用の形跡がある程度残される。

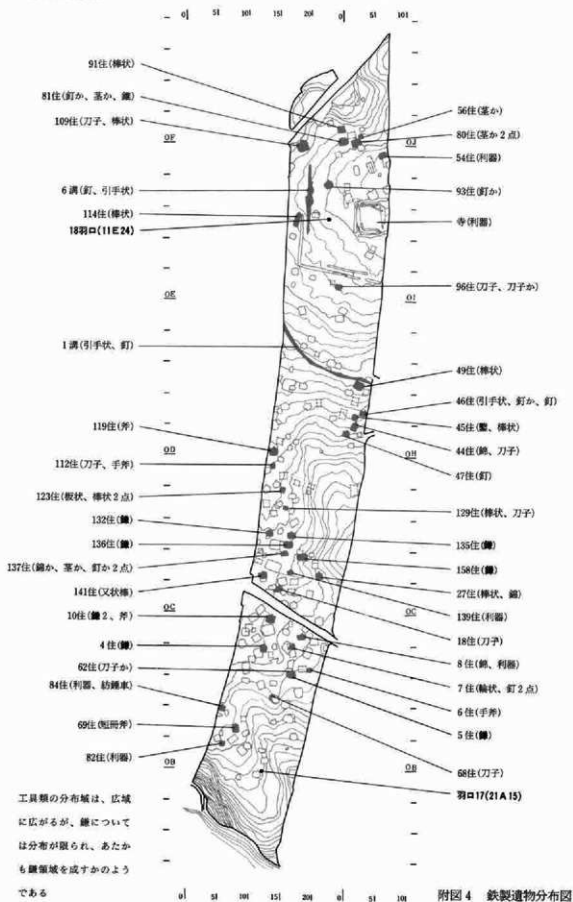
用途不明とほか 多量の金属製品を扱うと用途不明が必ず存在する。それらは、出土状態や伴した別の鉄製遺物との組合せ関係を推して機能を明らかにしたり、さらに複製例をもって一層確実な推定にしてみなければならぬであろう。そうした意味において同一住居内から複数の鉄製遺物をもって出土した例に7住8の輪状鉄製品と7住9・10の鋳製の飾釘がある。同種の因果は結果的にははっきりしないが、8との類形は、しばしば諸遺跡から出土している。8の特徴は周縁端部が刃先のように鋭利になるところにある。46住から19の引手状金具と21の釘が出土している。19との類形は諸遺跡の平安時代住居跡から出土し、その場合、釘も出土例があり、引手状の金具も2点の例が多いので機能時には一対であったのかもしれない。用途不明のうち、単独の存在に141住22の二又状鉄器がある。棒柄状部分は六角形に作られているが、整然としない。54住15は図上方がやや尖り、工具を思わせる。遺構外15は鋳鉄銅片で体部立上りの角度は近世以降を用ゐる。遺構外19は銅を主体とする金属の鋸で、長さより幅の方が長いので、中世の所産と考えられる。

2. 各段階の器種論とその傾向

奈良・平安時代の住居推移は、それらを分別した三浦によれば、96棟中、平安時代のいつであるのか不明確な未分11(11%)、8世紀代5(5%)、9世紀代34(35%)、10世紀代47(49%)であった。さらに10世紀代は中頃以降において堅穴住居跡数は急速に減少し、終末には見られなくなるとのことであった。各時期の出土の割合(未分中に金属器出土の住居跡はない)は8世紀代は4棟から6点が出土し、1棟当り1.5個体分で鉄器出土住居跡37のうち4棟は11%に相当し、奈良・平安時代の住居跡出土鉄器総数60点のうち6点は10%を占める。9世紀代は15棟から22点が出土し、1棟当り1.5個体分、鉄器出土住居跡37のうち15棟は41%に相当し、奈良・平安時代の住居跡出土鉄器総数60点のうち22点は37%を占める。10世紀代は18棟から32点が出土し、1棟当り1.8個体分、鉄器出土住居跡37のうち18棟は49%に相当し、奈良・平安時代の住居跡出土鉄器総数60点のうち32点は53%を占める。以下、各世紀ごとに器種論とその傾向を見た。

8世紀代 種は鎌が5住6、135住11に、手斧が6住5に、用途不明の刃物が123住5に、棒状の鉄が123住6・7に存在した。分布域で注意されるのは鎌の出土で、調査区15C-15Gラインから10Bライン間に農具借与者または農耕主体者の存在とその居住区域が示唆される。手斧の出土からは木材加工用具借与者または木材加工主体者の存在とその居住区域が示唆される。

9世紀代 種は鎌が10住33・34、132住3、136住16に、大形斧が10住35に、斧が119住4に、ちびり手斧が112住3に、小形短冊状斧が69住6に、大根鎌が44住3に、雑用刀子が62住9、18住8、112住4、44住4に3工具を思わせる二又の鉄器が141住22に、輪状金具が7住8に、鋳製の飾釘が7住9・10から出土している。



附図4 鉄製遺物分布図

戸神諏訪遺跡出土鉄器集計表

住居跡 略称・ 個別遺 跡名称	出土土 器の年 代観	武器 類	農具 類	工 具					生活 類	そ の 他	
				斧 類	手 斧	刀 類	鋸 類	紡 錘 車			釘 類
158住	弥~古		1								
135住	8 C 3		1								
5住	8 C 4		1								
6住	＃			1							
123住	＃										3
10住	9 C 1		2	1							
18住	＃					1					
112住	＃			1		1					
132住	＃		1								
141住	＃										1
44住	9 C 2	1				1					
62住	＃					1					
93住	＃								1		
119住	＃			1							
7住	9 C 3								2		1
69住	＃			1							
80住	＃										2
114住	＃										1
131住	＃		1								
47住	9 C 4							1			
46住	10 C 1							2			1
81住	＃					1		1			1
107住	＃					1					1
137住	＃	1							2		1
4住	10 C 2		1								
27住	＃	1									1
45住	＃				1						1
54住	＃										1
56住	＃					1					1
68住	＃										1
82住	＃										1
84住	＃							1			1
91住	＃										1
96住	＃					2					1
129住	＃					1					1
139住	＃										1
8住	10 C 3	1									1
49住	＃										1
寺院	9-10C										1
S D 1									1		1
S D 6									1		1
表 探									1		4

3. 全体傾向について

今回と同じ視点で検討を行なった遺跡例に利根郡月夜野町所在の村主遺跡例¹⁴⁾がある。村主遺跡における奈良・平安時代の住居跡数は32棟で、住居跡出土鉄器総数は34点あり、1棟当り1.06個体を数え、当遺跡を

鎌4点の分布域は10C-10Dラインから20Bライン間にあり、それは前代とほぼ共通する区域で、引続きその内部に農耕主体者または農具借与者がいたことが示唆される。この段階から木材加工の様相が顕著となり、手斧、斧の存在が目立ち、112住では斧と刀子とが存在している。斧・手斧の分布域は5D-5Hラインから5Bライン間にあり農具借与者または農耕主体者の存在したと見られる区域と部分的に重なり、ほぼ同じ集団が農事作業と木材加工または木材に関連した作業を行なった可能性が窺える。さらにそうした工具とともに47住7の推定約10cmを越える、やや大振の釘や鋤釘の存在を考え合わせると、9世紀代のある時点から造寺関連の活動が始まったことが想定される。

10世紀代 種は紡錘車が84住5に、鋸が45住3に、鋸が81住26に、雑用刀子が68住4、96住5、109住19に、工具を思わせる棒状の鉄が54住15に、尖根、細根を思わせる鋸片が137住11に、大根鋸が8住9、27住7に、鋸が4住8に、用途不明刃物が54住15、82住9に、釘が137住12・13、46住20から出土している。鋸の出土は9、10世紀代の分布域とほぼ同じ区域にあり、前代からの継続をある程度認めることができる。10世紀代も9世紀代と同様に工具類の出土が目立つが、斧など質量のある大形工具類は減少し、少形工具類が多い傾向にある。

集落の終末期の状況（10世紀中頃以降）は大根鋸が8住9に、刀子片と見られる個体が8住10に、棒状の鉄製品が49住14から出土している。この段階の住居跡数は6棟であり、当遺跡の奈良・平安時代の1棟当りの鉄製造遺物の出土率が0.63個体であるので3個体の出土は必ずしも少なくはなく、前代からの保有状態は、ある程度続いていたものと考えられる。

大幅に上回り、目下、北毛（利根・吾妻郡）地域での最多遺跡例となっている。村主遺跡で住居跡の時期を特定できなかったのは18号住居跡のみ（全体の3%）で、8世紀代は16棟（全体の50%）中11棟（8世紀代住居跡のうち68%）の住居跡から24点（全体の71%、8世紀代の1棟当たり2.2個体）、9世紀代は1棟（全体の3%）のみで鉄器の出土は皆無であった。10世紀代は13棟（全体の41%）中、6棟（10世紀代の住居跡のうち46%）から9点（全体の26%、10世紀代の1棟当たり1.5個体）、11世紀代は2棟（全体の6%）で出土鉄器は0であった。8世紀代の住居跡から出土した割合と、1棟当りの出土率は極めて高く、種に小刀^{コボ}、佩用、雑用刀子、鎌、大形鋤、釘などがあり、遺跡個々の現象か一般現象か明瞭ではなかったが鋤の出土が7点と多く、さらに筥蓋の短い特徴から狩猟関連で半弓の使用が推測された。大形鋤の存在からは農耕が示唆された。また小刀や大形鋤の出土した住居跡は大形で、鉄器の保有者かその管理者に特権階層が推定された。9世紀代は資料を欠き、10世紀代は、種に鎌、雑用刀子、紡錘車、手斧、釘などがあり、工具の占める割合が高い傾向にあった。鉄器の出土率は、時代が後出するにしたがい、わずかながらも減少し、背景に再生に伴う回収を考えた。そのほか平安時代の遺構から火打金、鎌の出土があった。砥石との関係については、集落内において砥石の出土が無い点から、集落外に水場と研場の存在を推定した。

村主遺跡と比較した場合、農具鎌の存在率は比例的に当遺跡が多く、物、心伴に依存頻度を思わせるものがある。工具中の斧や手斧の割合は村主遺跡例が32棟中1点であるのに対し、当遺跡は96棟中5点と高い。村主遺跡例が当遺跡例をしのぐのは鎌と雑用刀子で、実数にして鎌は12：4、刀子は8＋2（茎片で不確定余地）：9＋2を数える。そうした状況を分析するについて、今後も蓄積を計らなければならないが、かつて触れたとおり、種の大きな片寄り、古代の人々が頻度の高い鉄器種や、特に思い入れの深い道具を信仰上の理由により、住居廃棄の際にその直後に住居中に納置したため、その結果、得られた出土現象、出土率、出土量は各遺跡の保有量の一端を示唆するとともに生産活動の反映であると考えられる。その場合、鉄器の廃棄は中ば放棄であるので、放棄がどのくらいの規制の中で可能であったか否かについては、各集落単位が、地域における中核村落であるのか、計画村落か、やがて富豪農民の存在する村落へと発展していったかなど集落的発展形態と深く関わると考えられ、村主遺跡は中核村落、当遺跡は中核村落から派生した村落がやがて富豪農民の存在する村落へと発展したものと種々の現象から捉えることができるので、鉄器そのもの規制は両遺跡ともゆるやかであったと見なされる。種の片寄りは村主遺跡の鎌の場合、実根、細根鎌が多いことからそれを機能本位のあり様を捉えれば狩猟関連（一般の狩猟活動は罾であるので追込み狩猟か止め用）が、刀子の多きは、木など種々の加工の中でやや細まやかな成形～整形を施す生産活動が、当遺跡の場合は、鎌からは農業生産が、斧・手斧の多きからは村主遺跡よりも大がかりな木材加工生産があったと推定される。

時期別の種揃からは、10世紀頃に工具類が比較的多く認められた点は両遺跡ともに共通し、その傾向の始まりについて9世紀代が薄い村主遺跡例では何んとも言えなかったが、当遺跡では造寺の直前である9世紀の初頭段階に、既に2点の斧・手斧があるので9世紀の初頭頃に工具類を多用する集落内活動が示唆された。

住居規模と出土鉄器との関係は、村主遺跡例によると小刀・手斧・紡錘車など大形・質量のある鉄製品は大形住居跡より出土する傾向を認めたが、当遺跡での住居規模を三浦の分類に従たがって、その出土傾向を見ると、区分し得た82棟中、奈良・平安時代の特大形類の合計は3棟で、鉄器出土住居跡2棟（3÷2＝存在率67%）、大形類の合計は18棟で、鉄器出土住居数12棟（67%）18点、中形類の合計は34棟で鉄器出土住居数11棟（32%）20点、小形類の合計は27棟で鉄器出土住居数8棟（30%）14点を算出でき、傾向としては大形類の住居跡に存在率が高く、小形類に低い結果が得られ、大根鎌・鎌、斧・手斧、二又状鉄器などやや質

量の多い鉄器は、附表を基にすると大形類に6例(棟)、中形類に4例、小形類に1例、刀子・鑿・錐・紡錘車など質量は少ないものの種として重要な鉄器は、特大類に1例、大形類に4例、中形類に4例、小形類に2例、釘またはその他扱った類は、特大類に1例、大形類に5例、中形類に9例、小形類に6例であり、器種そのものでも小形住居跡には釘などの小形鉄器が、大形住居跡には質量のある製品の出土する率が高い傾向を認めることができた。なお、この比較を行なうについて住居規模の特大・大・中・小形を平均的に4区分し、さらに時期別に、それを行えば、より顕著な結果が得られ、現状では中形数が優位に、大・小形数が劣位になった点を注意されたい。

研磨状況の観察からは、各時期を通じて、特に強度を失なわせない配慮を認めることができ、村主遺跡例よりも上手である。それは道具の扱いに対し強い意識が働いた結果と考えられ、集落内における農・工の生産技術の形が深化していたことを窺わせている。

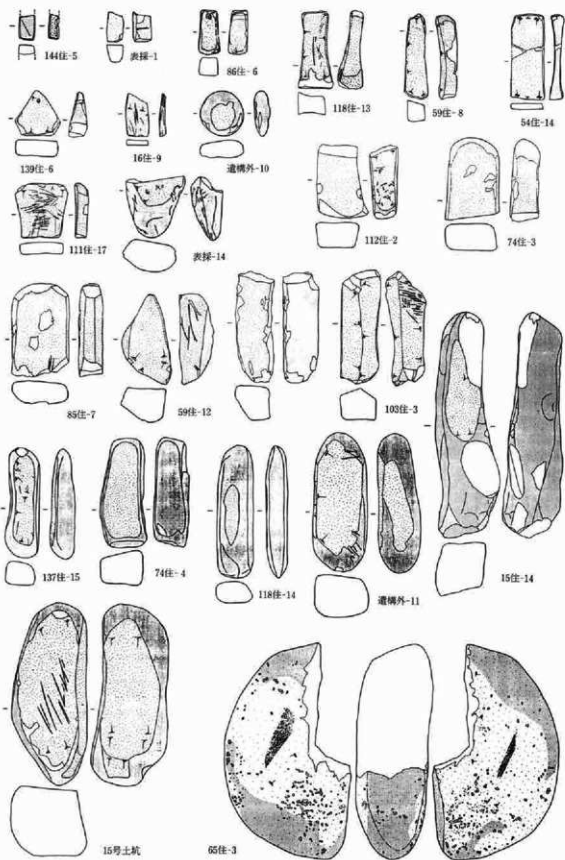
- (1) 現在、美濃刀工・鍛冶匠の中で中から鉄鍔を磨練しておられる工匠は極めて少なく、本例は愛知春日市井市に在る鍛冶匠木一彦氏から教示いただいた。近世以降の刀匠ほかが用いた小形製鉄炉と、古代の製鉄全般とは、根本的に比較はできないが、ここでは価値感を問題にしている。
- (2) 大江正行「上野国における古代弓具の一側面」『群馬文化』204(群馬県地域文化研究協議会)1986に詳しい。
- (3) 住居平面上における出土位置を中心にして検討の審視を計るつもりである。たとえば大形鉄器は住居跡の周壁沿いから住居跡中央部から出土する傾向が強い。また器種別出土位置傾向の抽出も必要と考えている。
- (4) 伝存の鉄製品は室町時代以前であれば、社寺の奉納品や、高い製作努力あるいは名工の作を大名が認めた名物や記念物がわずかに残されたに過ぎない。一般諸道具の大半は機能の停止後、または廃棄後に再生用の鉄素材・原料となったと考えられるのが一般的である。一般諸道具と再生については松村貞次郎『大工道具の歴史』(光文社)1973に詳しい。近世諸道具の中で良作ほど目録の欄裏まで用いられた点については秋岡芳夫氏の一連の著作があり『日本の手道具』(創元社)1977ほかに詳しい。刃物や鉄製道具における個々の伝世の可能性は個々の良し、悪しにもよるが、それは另こぼれせず、適度な軟らかさ、硬さを備えていることで、そうした道具を製作するためには、焼入れ処理の際に軟・硬自在な感覚の良い良質の鉄材と精鍛造が要求される。逆に良材と精鍛と、さらに上手の工匠によって製作された製品であることを知らなくとも、その道具を使用し、砥ぎを行なつてみれば、刃先に適度な軟らかさがありながら良く切れ、しかも磨づらぬ道具は精練、上上の作であるのが、そうした実感からも分るのである。したがって道具をちびるまで使っ込んだ112住3の新は、良道具であり、それだけ伝世の時間帯は長かった可能性がもたれる。
- (5) 『軍防令』に、一人単位の所持として弓一張、弓矢袋一口、新杖二束、征箭五十隻、胡餅一具とありが鉄一具内五十隻の征箭圖を窺うことができる。この場合は櫛入の単位を問題とする『律令 日本思想大系』(岩波書店)1976
- (6) 金工や螺鈿細工を見ると、鋳造を行なったと思われる後に鑄削の跡が見える例がある。ドリルが未発達な理由は、そこにあるのかもしれない。また秋岡芳夫の近代資料と見える中に近似の製品がある。氏は付属のドリル柄を含め四穴用伸縮自在鋸と呼んでおられ、用語例と伴に本例の用途が示唆される。その時代はいつ頃で、どんな職種の取人が用いたのであろうか。前期(4)、P. 21最下段とP. 222左欄。
- (7) 得能一男『小刀の基礎知識』『選し舞・小刀作り』(光芸出版)1980の中で得能一男氏は小刀の使用減りについて、幕末の刀匠水心子正淳が著した『創工秘伝志』を用いておられ、正淳の図によれば、古身は、刀剣をいちじくして消耗した例をさし古身とし、副小刀の研磨の一般が、標準を保持しながらなされていることがわかる。
- (8) 研磨により、刃部の中ほどが、周辺にくらべ、身側に鈍ったことを、内反の心という。
- (9) 鑄削の機械と用途については山口直樹『関東地方土師時代後・晩1・晩2期における農具について』『戦国史学』第45号(戦国史学)1978にまとめられている。
- (10) 釘と銅釘とは、使用された際に頭部が外面に見え、そこに化粧があるか否かによるであろう。銅と銅釘との差は留めの木材等により深く入るのが釘、浅く入るのが銅釘であると考えられている。
- (11) 大江正行「村主遺跡出土、奈良・平安時代鉄製遺物の検討」『大原II遺跡・村主遺跡』(84群馬県地域文化財調査事業団)1986

第5項 砥石

(1) 資料の選択について

本項で扱う数量は24点であるが、一遺跡出土の砥石を扱うと、砥石と言いつける類のほかに器物を磨るために用いた磨石類や両者の中間的例まで存在し、結構のところ類別上、整然とした砥石類のみの抽出が困難であることがわかる。今回もそうした過去の所感を生かして資料選択を行なったが砥石類単独の抽出はできなかったため、発掘調査の際に取り上げられた石の中から磨る行為の結果生じたと思われる石製遺物類を

第4章 調査成果



附图1 礫石集成図 1 : 5

抽出し、敲く行為の認められる石類を除いた。そのため砥石項目としては砥石に類された遺物は漏れなく収録されていると考えて差しつかえない。一方で気掛かりなのは発掘調査の際の石類の出土の有様である。調査での石類の出土は、相当多く、川原石の搬入は、薄根川が近接するため困難な条件下ではなかったようである。調査の石の取り上げは各遺構の埋土下方に存在したものを対象とし、上方は石器（歴史時代を含めて広儀）とする遺物のみを取り上げたそうである。そのことは、定形状を成していない砥石は漏らした可能性がある。また埋土下方出土で取り上げられた石類は整理用平箱にして3箱、100点弱である。

(2) 観察について

観察については一率、均等な意識で観察を行なう意図に基づいて観察表中の記入を行なった。観察表は、各遺構単位に組込まれており、そこから抽出して附図1～3の集成図ができています。観察がどこにあるのか捜す場合は、集成図の中から遺構番号を求めて検索していただきたい。種の項目は自然石利用・定形・長身形・変形・木葉砥石の5種に分けた。定形は砥石として一般的な長方形を呈したもののほか、自然石の中で附図1、59住8のように側部・表・裏の四面の面成りが生じている場合も定形に含めた。定形の本来は、各産出地の砥山から山おろす際にある寸法にそろえた規格定形を指し、それを捉えるのが正しい用法であると考えられるが、古代においては、そうした行為は特別にあったかもしれないが、むしろ手頃な大きさが定形であることの感が強いので、ここで言う定形とは、そうした正確な意味あいではない。長身形は附図1、103住3などのように細長い砥石をさしている。変形砥石は特異な形態の砥石をさし、たとえば附図1、59住12などでは、一般の砥面が凹状または平らに近い状態であるにも係わらず（刀砥石は、鋸歯に仕立てるために凸状をわざわざ作出す）平面・右側部は凸状を呈しており、極めて少ない例である。木葉砥石は本来の形以下の単位の大きさ、およびもとの砥石を分割して生じた砥石、消耗して小形になった砥石をさしている（附図1、16住9）。量目は、大きさ（cm）と重量（g）を測定した。特徴の項目は自然面、面寄せ、使用面、刃ならし傷の有無などを内容とした。備考欄には砥石の岩石名称を飯島静男氏の鑑定に基づき記入した。それと、砥石の質を現代流通している砥石に置き替えた場合の一般名称¹⁹⁾を記入した。その中で名倉級とは名倉砥のことであるが、実際にはそれより荒い伊予砥と名倉砥との間の性質に相当すると考えていただきたい。区分の中で伊予砥は用いなかったが区分が困難なためである。大村級は大村砥に起因するが、目目がそれに相当している。大村砥と言ってもある程度の幅の広さがあり、それに含まれると考えられるものをさしている。

実測図は、整理班によるが、加えてトーン貼と研磨による傾斜面方向を加えたのと、別に出土分布図を一般理解のために作成してもらった。トーン貼は2つの文様を用い、荒い網点は面取りなどの加工を施しながらも未使用に近い状態の面、細かい網点は、原石面か、原石採集時に存在していたと考えられる面、手描きの点描部は使用面を、無地は割れか剥落をあらわし、割れの場合は新、古を問わず、剥落の場合は、調査時以降と思われる場合は破線部分と係わる割れ口を除いて表現せず、旧態を推して表現してある。そのため剥落の場合の無地は、旧時の剥落を示す。研磨による傾斜方向は、マークのヒゲを砥面の傾斜に対して直角方向に記入してある。おおむね、右利なら、置砥、手持砥であっても左上り右下り方向に砥面は成る。

(3) 観察¹⁹⁾の結果について

① 中世～近世

中世の資料は13世紀頃の中国龍泉窯系青磁蓮弁文碗片1片、軟質陶器内耳鍋片（P. 303）が出土したほか、当遺跡における中世全体の生活遺物は極めて希薄であった。中世遺構に伴って出土する砥石には時折り整

形に用いた副1cmほどで研様の削目が残っている例があり、今回の資料中には、それが一点もなく、中世砥石の存在は一点もないが、あったとしても極めて少ないと思われる。

近世以降の砥石の場合は整形の研工具の先に鋸歯状の刻みがあったり、さらに定形化や顕著である中世砥石より特徴がより一層顕著である。そうした例は1例もない。研磨減りして特徴が無くなる場合でも、古代より中世を、中世よりも近世、近世よりも近代と、研磨を行なう速度が次第に早くなる傾向があり、砥面相互の間で生じた砥石の角立ちを見れば、ある程度の時代的な推測がつけられるが、急速度で研磨を行なった砥石例は集成途中に1点もない。

② 奈良～平安時代

1. 該当は86住6、118住14、59住8、54住14、139住6、111住17、112住3、137住14、118住13、165住3がある。住居跡の床面または床下から出土した例は111住17が床下、59住8が1.5m床から離れて出土している。奈良・平安時代の砥石の異内出土例の多くは金属器などと同様に床から離れている場合が多く、当遺跡でもその傾向があると認められる。

2. 砥石の種類と材質は、86住6、139住6が流紋岩の下砥、手持砥である。定形砥のうち59住8は砥面の曲率から手持砥として用いられたことが多かったと考えられるほか、流紋岩製の118住3、54住14、111住17は手持の場合もあったかもしれないが置砥として用いることがなかったと考えられる。その点は砥面全体の曲率が低（減りグセが弱い）いためひんぱんに砥面の合せを行なっていたと推測される。粗粒または極めて硬質の砥石は112住2、137住14、118住13が粗粒安山岩であり、各個体とも使用しづらかったためか使用の頻度は極めて浅い。その2点は金属器の使用面のほかに木、角など別の研磨主体^④の使用が考えられ、わずかではあるが、微細な凹面の中に磨耗痕がある。金属器の使用では考え難いことである。そうした類を認めると砥石の領域は拡大してしまい、冒頭で触れたとおりである。

ひんぱんに用いた砥石が流紋岩製であって、下仁田砥^⑤と思われる点は、ここ北毛地域においても既に下仁田砥が砥石として不動の地位を築きつつあったことの左証と捉えらえる。

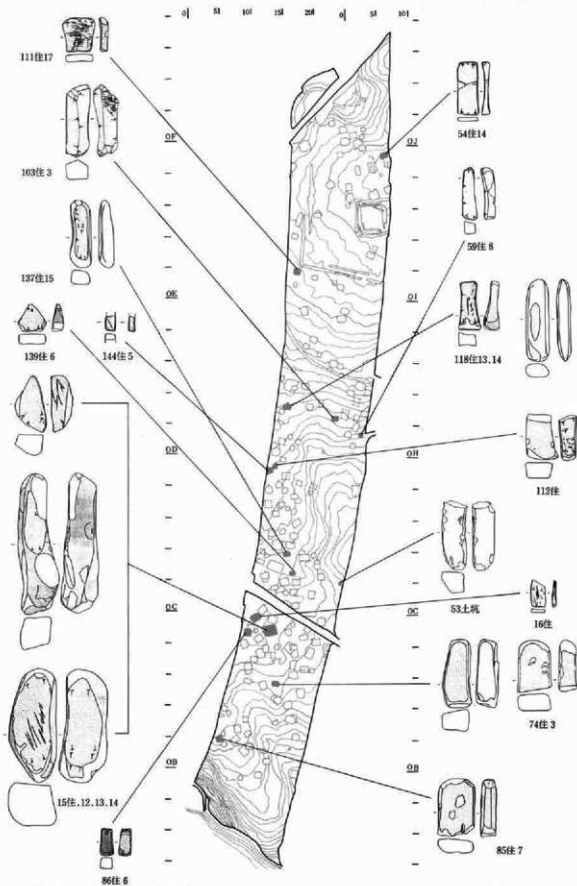
3. 奈良・平安時代の金属出土住居跡との関連からは、137住から鉄鎌、釘など4点が、112住から手斧・刀子2点、54住から棒状工具1点があるが思いのほか少ない。137住14の石材は細粒安山岩で、極めて硬質であり、懸命に砥糞（砥石の研磨屑物）の出る所作（合せを行なうとか）を施さなければ、金属側の受けは弱いはずで、金属と思われる使い込みの浅い理由はそこにあるのかもしれない。一般的に考えても刃付を行なう砥石としては不向である。112住例も細粒安山岩で金属器と思われる使い込みは前例と同様に極めて浅い。54住例は流紋岩で古代においては一般的で性質は砥当りも良く、現在の中砥である。

4. 鉄製遺物を観察した結果、奈良・平安時代の研磨が上手であったとの所見は、砥石を見るとより明確で特に54住14は、砥面の曲率が低く、砥石の合せをへていなければ、それだけの低い曲率でおさまるとは考え難いので砥石の合せは、ひんぱんに行なっていたと考えられる。117住17も砥石の曲率から同様のことが言え、しかも半欠品となっても使用され、割れ口にも砥面の一部がおよんでいる。この2点は砥石そのものを扱うのにも習れ、研磨主体の扱いも丁寧であったことを物語る。

5. 下砥は86住6と139住6との2点があり、いずれも流紋岩製であり、砥面は各面とも平らで、扱いに丁寧さを感じられる。附図4の分布図を見ると鉄製鎌の出土領域とも言える農耕に従事したと考えられる領域の一角から出土しており、両者の関係を考えるうえで重要である。

③ 古墳時代

1. 該当は、144住5、16住9、85住7、15住12、103住6、74住2・3、15住13・14がある。住居跡の床面



附圖2 磁石出土地分布圖

1 : 2500

から出土した例は74住3、15住12・2があり、奈良・平安時代より床面に伴う傾向がより高い。ここでいう古墳時代の主体は、弥生時代色を伴う初頭の段階から、幅広いの折り返しに縁を有する前期末葉を思わせる段階までの間の住居跡から出土した例、9点がそれである。

2. 砥石の種類と材質は、木葉砥が16住9に、変形が15住12、103住6に、自然石利用が74住2・3、85住7、15住14にある。材質は、16住9が頁岩で砥当りは硬いと思われるが、精研磨が可能である。103住6も大差のない頁岩製で同様の研磨が可能である。15住12・14は同じ住居から出土しているが14が10cmほど床から離れている。ともに凝灰岩質泥岩で、性質は極めて軟らかいが、き目は細かく精仕上げが可能であるが研磨主体の消耗は遅いと推測されるので能率の悪い砥石である。流紋岩製は85住7に唯一の例があるが、下仁田砥に通常に見られる質感と比較すると気泡が多いのと、夾雑物質からの大きな差異がある。性質は中砥であるが夾雑物が浮き出しており使用しづらかったと思われる。金属を用いた研磨痕があるが各面が角ばるほど顕著でない。中砥に近い性質と見られる。15住13のアイサイト質凝灰岩製がある。図裏面を除き良く使用されている。金属を砥ぐには極めて硬く、砥ぎづらいと思われる例に72住2の文象斑岩製、74住3の粗粒安山岩製の例がある。
3. 下仁田砥との関連は、85住7が流紋岩であるが2で触れたとおり疑問視される。
4. 研磨主体は103住3が、やや大き目の金属器を砥いだと思われ、各砥面の角立ちがしっかりしている。角立ちがしっかりする理由は、速さにも大きく関係するが、金属器全体の大きさが両手で保持しながらか片手であるのかによって強く影響を受け、103住3の場合は両手で保持したと推測され、片手で保持した場合角立ちが甘く、丸みをおびる。
5. 県内における弥生時代の住居跡から出土した砥石は極めて少なく、多用段階は埋土中心ではあるが9例の出土例をもって古墳時代の初頭から前期にあることが有力視できる。

(4) 問題点

砥石の多くは鉄利器の普及に対応して存在していたはずであるが、鉄は再生され、次期に受け継がれる場合が多く、それに対して砥石は腐蝕することなく、旧時の鉄の普及状況を反映しているのである。この意味から出土砥石との係わりは大きいとしなければならないであろう。特に主要な問題点とすれば、産出地と流通の初頭の段階に関してであろう。今回、数種の石材が認められたが、そのうち注視される2種について次に触れたい。

1. 凝灰岩質泥岩製に15住14、59住12がある。乳灰色を呈し、き目の細かい特徴は北毛地域の遺跡に既出例があり、たとえば、利根郡月夜野町後田遺跡¹⁰⁾の砥石通番10・12などがそれであり、今後、北毛産出砥石であるか否か追証してゆかなければならないであろう。なお平野部の遺跡ではあまり見かけないので北毛産の可能性が、わずかながら持たれる。
2. 流紋岩製の下仁田砥と目される砥石は、奈良・平安時代には、確実に上野地域で使用される中砥として流布、存在している。しかし上限については、平野部では6世紀代まで遡りうるが、4・5世紀代まで一般流通の交易物として存在していたかは不明で、今後課題となるところである。
下仁田砥については問題点が別あり、若干触れておきたい。下仁田砥は多野郡南牧村砥沢から産出した砥石で近年まで採掘されており、発掘現場でまだ使用しているところもある(当団も)。下仁田砥は村松貞次郎氏の指摘や岡部温古館の砥石展で示され¹⁰⁾、商標沼田砥で、実態は砥沢砥(下仁田砥)という。それは沼田の切出し業者が催物の一部を得たからという理由だけでは割り切れないものが残る。推論から先に言えば中

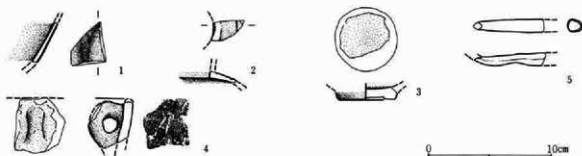
世末期まで沼田産出の砥石が市場に出回っており、人々の間でそれは知られており、その知られた名称を用いて下仁田砥を沼田砥としたのではないだろうか和机上で考えている。江戸幕府はその当初、各地の砥山産地の多くを戦時に備えて天領、新藩領とし、それだけ砥石産出地は重要な位置を占めていた訳である。

- (1) 松村貞治郎「砥石」【大工道具の歴史】(岩波新書)、大村邦太郎「日本刀の鑑定と研磨」(雄山閣)1979などに詳しい。
- (2) 同様の観察は徳橋「砥石」【八幡原A・B、上流、元島名A】(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1981、「砥石」【下東西遺跡】(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1988、解説は加えなかったが「特殊遺物」【後田遺跡II】(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1988に100点余りの観察を行なった。
- (3) 前掲「砥石」【八幡原A・B(上流、元島名A)】(群馬県埋蔵文化財調査事業団)1988の中で造語した。研磨される物体をさす。
- (4) 村松貞治郎「砥石」【大工道具の歴史】(岩波新書)1973、江戸時代の沼田砥と砥沢(下仁田砥)とは同一との理由を説明されておられる。下仁田砥については岩橋承成「幕末期の上州砥石産業史」【まほそ No.3】1986に詳しく、同年に同館で砥石展が開催された。更見。

第6項 中・近陶・磁器とそのほかの遺物

中・近世陶・磁器の出土は多くなく、全体で約30片ほどである。その中で17世紀以前の個体を3点と軟質陶器1点、そのほかに煙管を選んで掲げた。いずれも表採遺物である。

1. 青磁蓮弁文碗1体部片で、色調は暗褐色よりやや緑色に傾き、釉は厚くはない。断面図中の細線がそれを意味し、点描が釉部をあらわす。胎土は淡灰色を呈し、やや軟質に見える。蓮弁は鑄手であり、器肉はやや薄い。製作は、13世紀頃の中国龍泉窯系と考えられる。
2. 青色釉袋部の頸部片で、胎土は淡灰色で陶質。色調は淡い青磁釉調を呈するが、釉は薄く内外に施釉される。外面に施文が一条ある。器肉調整は薄作りであるが、船載か国産か不明で、製作時期も不明である。
3. 船釉陶器碗、底部片で高台部内面を除き施釉される。胎土はやや粗質で灰色を呈し、瀬戸、美濃焼を思わせる。
4. 軟質陶器内耳縁 口縁部片である。15・16世紀頃の耳の形態である。耳部は擦痕があり、吊手の存在を思わせる。トーンは擦痕部である。胎土は一般的な状態で暗褐色を呈し、内外面に燻あり。
5. 煙管 皿部を欠損しているが、皿部の付根が細く古様である。側面に錐着の痕跡があるが、材質は明瞭でない。材質は銅を主材としているが、銅は赤銅、山銅、四分^{しちご}など種類が多く、外観で特定は無理。



附図1 中・近世陶・磁器とそのほかの遺物 1 : 3

第3節 化学分析

第1項 平安時代の出土土器胎土分析

群馬県工業試験場 花岡 紘一
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 三浦京子

はじめに

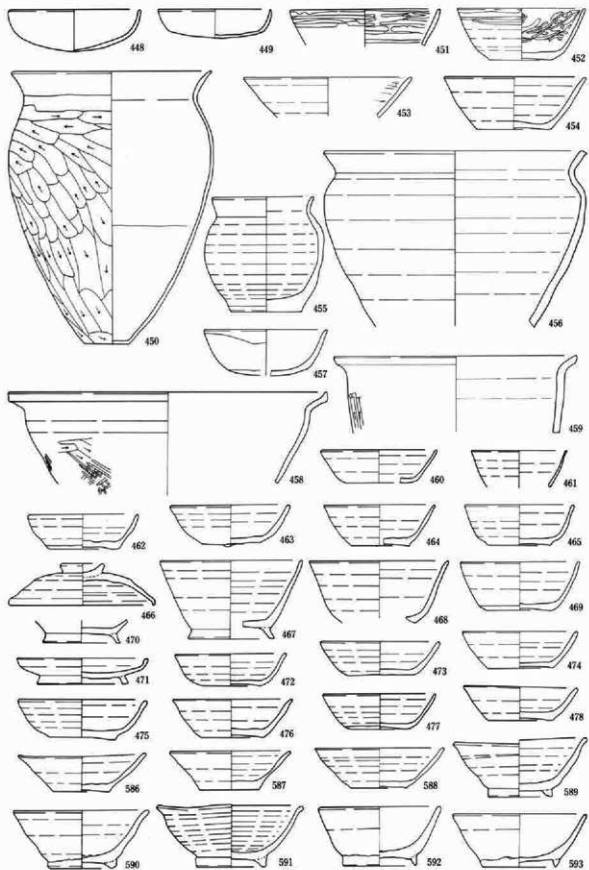
利根郡において、9・10世紀の集落に供給された須恵器は大半が月夜野窯跡群製といえ、当遺跡でも例外ではない。既分析の月夜野窯跡群・集落出土土器に、今回の試料を加えて117点となっている。月夜野窯跡群の^{註1}藪田A・洞A・沢入A・深沢B・深沢C・須磨野A支群は出土土器の胎土分析が行われ、試料の絶対数の不足は否めないが、一応の傾向は捉えられている。当遺跡の出土土器がこれらの領域にどのように対応しているかを検討したい。

1. 分析目的と試料の選択

月夜野窯跡群では、窯跡の立地基盤層により2種類の胎土傾向が^{註2・3・4}確認されている。まず胎土傾向Aとしては、石英安山岩を基盤とし、1mm以下の白色粒子を多量に含み、1～2mmの石英粒子を多く含むことを特徴としており、深沢B・深沢C・須磨野Aの各支群及び、8世紀前後の未発見の窯がこれに当たるとしている。胎土傾向Bとしては、緑色凝灰岩を基盤とし、1mm以下の白色粒子を多量に含み、1～2mmの石英粒子はほとんど含まず、僅かに1mm以下の石英粒子を含むもので沢入A・藪田A・洞Aの各支群と8世紀前後の未発見の窯があり、両者の大きな差は石英粒の大きさと含有量にある。肉眼でも識別し易いこの特徴に加えて、前述のように各支群の胎土分析結果による傾向がおおよそつかめるようになっており、当遺跡で出土した須恵器は、既分析の成果の中にどのように位置づけられるかを見たい。分析試料数は61点であり、試料の選択は次のような視点から行った。まず、当遺跡の須恵器は8世紀代に入るものは非常に少なく、9世紀代になると急増する感がある。その後多少の増減はあるものの、10世紀前半までは連続して供給されている。今回は8世紀代の須恵器は分析せず、9・10世紀を主とした。この間、肉眼観察によっても、段階毎に須恵器の形態・胎土・焼成などがそれぞれ異なっている様相が窺われるため(第4章 第2節 第2項参照)、一つには各段階に特徴的な須恵器を数多く分析するよう心がけた。また、ロクロ使用・酸化焰焼成の土器も大きく分けて2種類のものが出土したため、従来の土師器も含めて比較のため分析を行った。以下に分析の意図を試料別に箇条書とした。

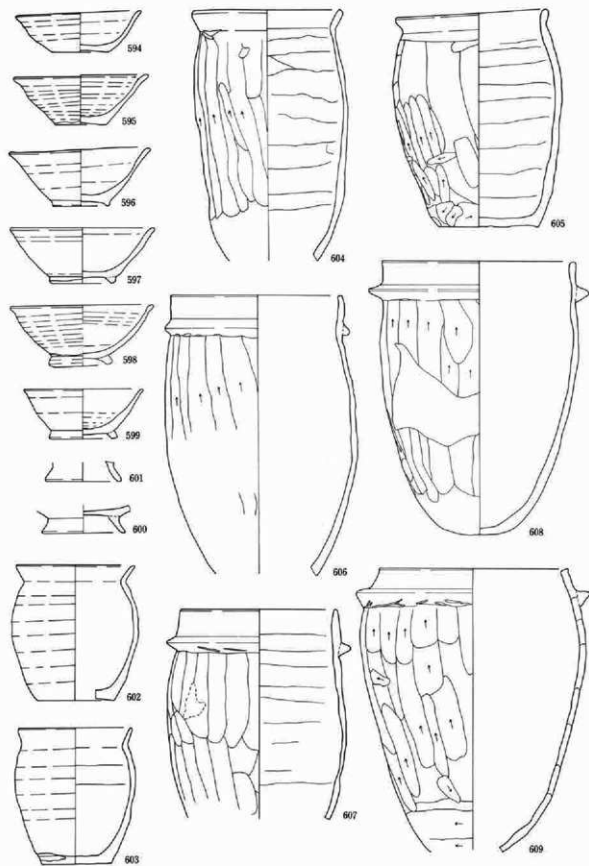
- (1) 448～450は、平野部で一般的に見られる土師器と良く似た胎土である。土師器の生産がどのくらいの供給圏を持つ規模で行われていたかは不明だが、土師器製の胎土も肉眼で数種類識別できる。しかし、まだグルーピングするまでに至っていないので、既分析の下東西遺跡の土師器^{註5}坏、藪田・藪田東遺跡の土師器^{註6}と比較してみたい。
- (2) 457は、内面黒色処理の坏であり、ロクロは使用していないのだが、古墳時代からの系譜上にあるものとは考えられない。胎土は緻密で重みもあり、須恵器の胎土に近く丁寧な作りである。他の土師器とも比較してみたい。
- (3) 451～456は、ロクロ使用・酸化焰焼成の土器であるが、458・459とは異なるものと考えられ、後者と分かれてまとまる傾向があるか確認したい。

- (4) 458・459は、藪田A支群で生産されたと考えられる、体部に叩き目を持ち、東北地方の影響を受けているという壺と同類と思われる。459は上位の破片で叩き目はみられず、篋削りだが形態は類似している。既分析の藪田・藪田東遺跡の試料と比較したい。
- (5) 460~478、586~588の蓋・坏・椀類は9世紀代に属し、胎土傾向A・B双方ともみられるが、試料以外の総ての土器を観察しても、胎土傾向Bのものが圧倒的に多い。また、各段階毎に特色のある土器もみられるので、次のグループ別の傾向をみたい。
- ① まず、460・461は、非常に胎土が緻密で薄手の土器であり他に例をみないが、477の燻し焼成されている土器に質感が似ている。燻し焼成は藪田A支群の特徴とされているが、この土器は、後段階の藪田産と考えられる586~588(須恵器坏分類C)よりも胎土がきめ細かい。だがC類の中にも胎土のより密なものはあるので、藪田の範囲に入るかを調べたい。
 - ② 9世紀前半の試料である462・463・472と464・465は素地にあまり差はないようだが、前者は白色粗砂粒・細粒を多く含み、後者は黒色の細粒を多量に含んでいる。双方とも石英はほとんどみられない。含有物の差で違いが出るか確認したい。
 - ③ 466~471は、還元堅緻で素地は細かく、白色粗砂粒、黒色鉱物を少量含んでいる。肉眼観察ではよく似ており、まとまりを示すかどうかみたい。
 - ④ 473~476は、比較的石英の粗砂粒・細粒を多く含んでおり胎土傾向Aである。どの領域に入るか。
 - ⑤ 478・586~588は、燻し焼成であり、器形からも藪田産の可能性が高いので、藪田の領域に入るかを確認したい。
- (6) 589~599の坏・椀類は10世紀代に属し、全体的な胎土傾向としては、石英を多量に含むものが増えていえる。特に羽釜においては、大半が石英を多量に含んでいる。類似する胎土・器形のものが数個体出土しているものを選んだ。
- ① 589~591の器形・胎土のものは、比較的住居を越えても多く出土している。石英はほとんど含まず、夾雑物の少ない細かい胎土である。
 - ② 592~593は、他に例がなく、回転力をあまり使用していないと思われるもので、底部は調整痕がみられず凸凹している。胎土は赤褐色の円粒を含み、石英は少ない。見た目通り、他の土器と異なる傾向がでるかどうか。
 - ③ 594~596の胎土のものは81住のみにまとまって出土している。薄手で、夾雑物がほとんどなく、摩滅し易そうな軟質な胎土である。まとまる傾向があるかどうか。
 - ④ 597~599は石英を多量に含む一群である。傾向の知られている支群のどれに当てはまるだろうか。
 - ⑤ 600・601は他の椀の高台と重なる細く高いタイプであり、いわゆる土師質土器と考えられるが、600はIX段階の111住の埋土であり、601は小形の浅い皿が伴^{注7}伴し11世紀代と思われる。土師質土器については、村主遺跡の分析試料が1点あるので比較したい。
- (7) 602~614は、壺・羽釜の試料である。羽釜の胎土はほとんどのものに石英粒が含まれているが、特に多いのは607・610~613である。また、羽釜については、その形態変化で段階設定をしており(263頁参照)、VI段階は608・609、VII段階に610、VIII段階に607・611、IX段階には606・613・614が相当し、时期的に胎土が替わる傾向があるか、また形態による違い、鈎下の胴部に最大幅がありそのまま口縁部の内傾する609、胴部から口縁部まで直線的な608・610・614、鈎の部分に形態の変換点がある606・607・611・613などによって胎土傾向があるかを検討したい。



胎土分析試料(1)

0 1 : 4 10cm



胎土分析試料(2)

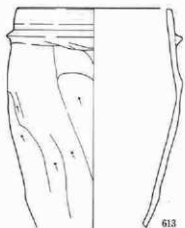
0 10cm



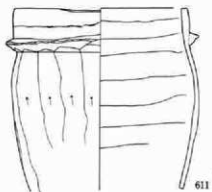
610



612



613



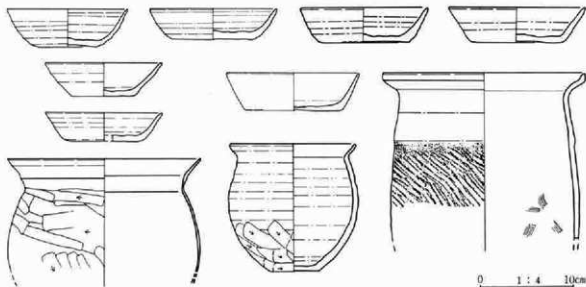
611

0 1:4 10cm



614

胎土分析試料(3)



0 1:4 10cm

藪田遺跡・沢入胎土分析試料

表1 分析試料の内眼観察表

試料No	遺物番号 推定年代	種別	胎土の内眼観察	備考
448	135住-2 8世紀第3	土師器 杯	細砂粒、少量の角閃石と思われる黒色の小片を含む。色調は内面におい褐色、外面は緑が付着し黒色。	平野部の土師器と胎土類似
449	141住-1 9世紀第1	土師器 杯	白色細砂粒、少量の石英の円錐體、角閃石と思われる黒色の小片を含む。色調は明褐色。	同上
450	141住-19 9世紀第1	土師器 壺	細砂粒、少量の角閃石と思われる黒色の小片を含む。色調は明褐色。	同上
451	141住-4 9世紀第1	ロクロ使用土師器 杯	白色の細砂粒を多量に、石英の角粗砂粒、凝灰岩の岩片を僅かに含む。素地は細かい。色調は明赤褐色、口縁部は暗赤褐色。酸化焙焼成。	
452	62住-2 9世紀第2	ロクロ使用土師器 杯	黄白色の細砂粒、0.5~2mmの褐色の円粒、石英の角粗砂粒を含む。素地は細かい。色調は明赤褐色。酸化焙焼成。	
453	23住-4 9世紀第1	ロクロ使用土師器 杯	白色細砂粒と少量の褐色円錐體、黒色角粗砂粒を含む。素地は細かい、外面はにおい褐色、内面は浅黄褐色。酸化焙焼成。	
454	37住-1	ロクロ使用土師器 杯	石英の角粗砂粒を僅かに、細砂粒、0.5~2mmの褐色の円粒を多く含む。素地は細かい。色調は灰黄褐色。酸化焙焼成、やや粉っぽい感じ。37住は9世紀前半と考えられるが、この土器は重複する28住(10世紀第2)のものと考えられ、451~453のものとは異なるようだが、10世紀代の杯にも類似するものはちられない。	
455	141住-18 9世紀第1	ロクロ使用土師器 小型壺	細砂粒、褐色鉱物粒。素地は細かく、451・456に近似している。色調は外面明赤褐色、内面褐色。酸化焙焼成。	
456	141住-21 9世紀第1	ロクロ使用土師器 広口壺	黄白色細砂粒、褐色・黒色細塵を含む。質感は451・455と類似しており、肌理豊かな素地である。色調は明褐色。酸化焙焼成。	
457	127住-2 9世紀第2	黒色土器 A 杯	0.5mm程の褐色円粒、黒色の長方形の小片を少し含む。夾雑物は少く、素地は細かい。色調は外面浅黄褐色、内面は吸炭により黒色。	
458	127住-8 9世紀第2	須恵器 鉢	白色細・粗砂粒、長石・石英の細塵、0.5~2mmの褐色円粒を多く含む。素地は細かい。色調は明黄褐色。酸化焙焼成。	
459	92住-8 9世紀第2	須恵器 壺	灰色粗砂粒、石英の角粗塵、0.5~5mmの褐色円粒を多く含む。素地は細かい。色調はにおい褐色。酸化焙焼成。	
460	141住-14 9世紀第1	須恵器 椀	少量の細砂粒を含む。素地は緻密である。非常に薄手に作られている。色調は内外面灰白色、断面浅黄褐色。還元焙焼成。	
461	141住-11 9世紀第1	須恵器 杯	少量の灰色角粗塵を含むが、夾雑物は少く、素地は光拓が感じられる程緻密である。色調は内外面灰白色から灰色、断面は浅黄褐色。還元焙焼成。胎土は460と類似する。	
462	141住-16 9世紀第1		白色細砂粒、長石の角粗砂粒、少量の凝灰岩3~4mmの岩片を含む。素地は細かい。色調は灰白色。還元焙焼成。	
463	141住-7 9世紀第1	須恵器 杯	白色細・粗砂粒・細塵、少量の石英・長石の粗砂粒、灰色の中塵を含む。色調は灰白色。還元焙焼成。	
464	141住-13 9世紀第1	須恵器 杯	白色粗砂粒、灰色細塵・中塵、黒色1~4mmの円粒を多く含む。素地は細かい。色調は外面暗灰色、内面灰白色。還元焙焼成。	

第4章 調査成果

試料No	遺物番号 推定年代	種別	胎土の肉眼観察	備考
465	10住-25 9世紀第1	須恵器 坏	白色の細・粗砂粒、灰色細礫・中礫を多く含む。色調は灰色。還元焙焼成。464に胎土は類似している。	
466	10住-9 9世紀第1	須恵器 蓋	白色細・粗砂粒を多く含む。細かい黒色鉱物粒がみられる。素地は緻密。色調は灰色。還元焙焼成。	
467	123住-3 8世紀第4	須・志 高台付筒	少量の白色細砂粒、細かい黒色鉱物粒、3～5mmの灰白色の薄片を僅かに含む。素地は緻密。色調は暗青灰色。466と胎土は類似している。	
468	62住-4 9世紀第2	須恵器 坏	少量の白色細砂粒と灰色の角細礫を僅かに含む。素地は緻密である。色調は灰白色。還元焙焼成。堅緻。	
469	10住-24 9世紀第1	須恵器 坏	少量の白色細粗砂粒と僅かな細礫を含むが、素地は緻密である。色調は灰色。還元焙焼成。堅緻。	
470	23住-3 9世紀第1	須恵器 高台付坏	白色細・粗砂粒を含む。夾雑物は少く、素地は細かい。色調は灰色。還元焙焼成。	
471	10住-30 9世紀第1	須恵器 皿	白色細砂粒、少量の白色中礫、灰色円細礫を含む。素地は細かい。色調は灰色。還元焙焼成468～471は胎土が類似している。	
472	131住-5 9世紀第1	須恵器 坏	白色細砂粒を多量に、白色の細礫、半透明な鉱物の細礫を僅かに含む。素地は細かい。色調は灰色。還元焙焼成。	
473	10住-17 9世紀第1	須恵器 坏	白色細砂粒を多く、半透明から透明の石英の角細礫、1～3mmのやや軟らかい黒色鉱物粒を僅かに含む。素地は細かい。色調は外面灰白色、内面灰色。還元焙焼成。	
474	10住-13 9世紀第1	須恵器 坏	白色細砂粒を多く、灰色から半透明の角粗砂粒を僅かに含む。素地は細かい。色調は外側が灰色、内側にはよい黄褐色を呈す。還元焙焼成。472・473の胎土と類似する。	
475	10住-18 9世紀第1	須恵器 坏	白色細砂粒、石英の細砂粒を多量に含み、素地が粗くザラザラしている。色調は灰白色から灰色。還元焙焼成。	
476	119住-2 9世紀第2	須恵器 坏	多量の白色細砂粒、僅かに黒色の1～3mmの円粒、長石・石英の角粗砂粒を含む。素地はやや粗い。色調は外面灰色、内面灰白色。還元焙焼成。475に胎土は類似している。	
477	10住-16 9世紀第1	須恵器 坏	僅かに白色細砂粒を含むが、ほとんど夾雑物はなく、素地は緻密である。色調は外面黒色、内面黒色・黄褐色。焼し焼成。	数田産か
478	51住-3 9世紀第2	須恵器 坏	少量の白色細砂粒、黒色の1～3mmの円粒、僅かに石英・長石の角粗砂粒、岩片を含む。色調は上半部黒色、下半部灰白色。焼し焼成。	数田産か
586	114号住-18 9世紀第3	須恵器 坏	白色細砂粒と石英の粗砂粒を比較的多く含むが、素地は細かい。色調は黒色、内側にはよい褐色。焼し焼成。586～588は形態・整形とも類似し、底部も左回転水切りである。	数田産か？
587	114号住-21 9世紀第3	須恵器 坏	白色と石英の細・粗砂粒を比較的多く含むが、素地は細かい。色調は黒色、一部暗灰黄色、内側は暗灰黄色。焼し焼成。	数田産か？
588	114号住-19 9世紀第3	須恵器 坏	白色と石英の細・粗砂粒を比較的多く、白色細礫を僅かに含むが、素地は細かい。色調は黒色・灰白色・よい黄褐色、内側は淡黄色。焼し焼成。	数田産か？
589	46号住-8 10世紀第1	須恵器 椀	白色・長石・石英の細・粗砂粒を含むが、素地は粗く粉っぽい。色調は淡黄色。底部から体部の一部は黒色・灰色。還元、酸化気味。	
590	46号住-4 10世紀第1	須恵器 椀	白色細砂粒を多く、石英の細砂粒を僅かに含み、素地は細かい。色調は黒色・灰色・黄灰色。還元、酸化気味。	

試料№	遺物番号 推定年代	種別	胎土の内服観察	備考
591	95号住-10 10世紀第1	須恵器 椀	白色と石英の細・粗砂粒を含むが、素地は細かい。色調は底部黒色、体部は黄灰色、内側は灰色。還元、酸化気味。	
592	54号住-8 10世紀第2	須恵器 椀	白色細・粗砂粒・軟質な繊維を多く、赤褐色円粗砂粒を少量含む、素地は細かい。色調はよい黄褐色。	
593	54号住-6 10世紀第2	須恵器 椀	白色細・粗砂粒・繊維を多く、赤褐色円粗砂粒を少量含む、素地は細かい。色調はよい黄褐色。胎土・形態・整形とも592に類似している。	
594	81号住-14 10世紀第1	須恵器 坏	僅かな石英細砂粒、夾雑物はほとんど目立たない。素地は細く、粉っぽい。色調は灰白色、外面底部から体部の一部が黒色。還元、軟質。594~596は胎土・整形とも類似している。	
595	81号住-9 10世紀第1	須恵器 椀	僅かな細砂粒、ほとんど夾雑物は目立たない。素地は細かく、粉っぽい。色調は黒色。横し焼成。	
596	81号住-17 10世紀第1	須恵器 椀	僅かな細砂粒、ほとんど夾雑物は目立たない。素地は細かく、粉っぽい。色調は灰白色、内面体部の一部黒色。還元、軟質。	
597	28号住-3 10世紀第2	須恵器 椀	多量の白色・石英の細・粗砂粒・繊維を含み、ガサガサしている。素地はやや粗く、層状に剥離している。色調は灰色・還元。598と形態は異なるが、胎土は類似している。	
598	128号住-11 10世紀第2	須恵器 椀	多量の白色・石英の細・粗砂粒・繊維を含み、ガサガサしている。素地はやや粗く、層状に剥離している。色調は灰色。還元。	
599	111号住-13 10世紀第3	須恵器 椀	多量の白色・石英の細・粗砂粒・繊維を含み、ガサガサしている。素地はやや粗く、層状に剥離している。色調は浅黄色。還元。597・598と形態は異なるが、胎土は類似している。	
600	111号住 10世紀第3	足高台 椀	少量の白色細砂粒。素地は細く、粉っぽい。軟質である。色調はよい黄褐色。還元、酸化気味。胎土は594~596の一群に類似しているが器形は異なる。	
601	1号住-3 11世紀前半	足高台 皿・椀	白色細・粗砂粒、赤褐色円粗砂粒を多く、石英粗砂粒、灰色中織を僅かに含む。素地は細かい。色調は橙色。酸化。	
602	82号住-6 10世紀第2	須恵器 小形 葉	白色細・粗砂粒を含み、素地はやや粗い。色調はよい黄褐色。還元、酸化気味。	
603	59号住-6 10世紀第2	須恵器 小形 葉	白色細・粗砂粒を多量に、石英粗砂粒を少量含む。素地はやや粗い。色調は褐色・よい褐色。還元、酸化気味。	
604	50号住-9 10世紀第3	須恵器 葉	白色細・粗砂粒、少量の石英細・粗砂粒を含み、素地はやや粗い。色調はよい黄褐色。還元、酸化気味。	
605	96号住-2 10世紀第1	須恵器 葉	白色と石英の細・粗砂粒を多く含む、素地はやや粗い。色調は灰黄褐色。還元、酸化気味。	
606	50号住-12 10世紀第3	須恵器 皿	白色細・粗砂粒、少量の石英細・粗砂粒を含み、素地はやや粗い。色調はよい黄褐色。604と形態は異なるが胎土・整形は類似する。還元、酸化気味。	
607	96号住-3 10世紀第1	須恵器 羽 皿	白色と石英の細・粗砂粒を多く含む、素地はやや粗い。色調は灰黄褐色。605と形態は異なるが、胎土・整形は類似する。還元、軟質。	
608	98号住-4 10世紀第1	須恵器 羽 皿	白色と石英の細・粗砂粒を含み、素地はやや粗い。色調は灰黄色。還元、軟質。	
609	47号住-6 8世紀第4	須恵器 羽 皿	白色と石英の細・粗砂粒を含み、素地はやや細かいが軟質。色調はよい橙色。還元、軟質。	

試料№	遺物番号 推定年代	種別	胎土の肉眼観察	備考
610	46号住-13 10世紀第1	須恵器 羽釜	石英の粗砂粒を多く含む。素地はやや細かいが軟質。色調はよい黄褐色。還元軟質。	
611	99号住-14 10世紀第3	須恵器 羽釜	多量の白色細・粗砂粒、石英の細・粗砂粒を含み、素地はやや細かいが軟質。色調は灰白色。還元、軟質。	
612	6号溝-2 10世紀前半	須恵器 羽釜	多量の白色細・粗砂粒、石英の細・粗砂粒・細礫を含む。素地はやや粗い。色調は灰色。還元、軟質。	
613	99号住-12 10世紀第3	須恵器 灰白色	白色と石英の細・粗砂粒を多量に含む。素地はやや細かいが軟質。色調は灰黄褐色・灰白色。還元、軟質。	
614	163号住-7 10世紀第3	須恵器 羽釜	白色と石英の細・粗砂粒を多量に含む。素地はやや粗い。色調は灰白色。還元、軟質。	
615	戸神原防置 跡採取粘土		白色・灰色の粗砂粒、赤褐色粗砂粒を含む。素地は細かい。石英はみられない。	ガラスに て焼成

(8) 当遺跡の基本土層VI層より調査時に採取した粘土であり、比較のため分析した。

(9) 図4-1～8は藪田遺跡の試料、9・10は沢入A支群灰原出土の試料である。分析結果は未発表であるので、比較のため掲載した。

2. 分析方法及び測定条件

蛍光X線分析 分析用試料は各試料を10 μ m以下に粉砕し、5～10gを径4cmの円板に成型して使用した。測定条件は次の通りである。

蛍光X線分析装置：理学電機製KG-4型

X線管球：銀対陰極 50KV、20mA

分光結晶：Fe、Sr、RbにはLiF (2d=4.028Å)

Ca、K、Ti、Si、AlにはEDDT (2d=8.808Å)

MgにはADP (2d=10.648Å)

検出器：LiFを使用したとき、S.C. EDDT、ADPを使用したとき、P.C

時定数：1

計数法：Fe、Ca、K、Ti、Sr、Rbはチャートにより、Si、Al、Mgは定時計数法によった。

なおチャートは4°/minとした。

波高分析機：積分方式

測定線：FeK β 、CaK α 、KK α 、TiK α 、AlK α 、MgK α 、SrK α 、RbK α の各1次線を使用した。

X線照射面積：20mm ϕ

標準試料：群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器6点(295、310、366、345、360、380)を化学分析し標準試料とした。

3. 分析結果と考察

分析結果のグラフは図1に土師器をまとめ、下東西遺跡の土師器杯336～338を加えた。図2はロクロ使用酸化焰焼成の土器であり、藪田・藪田東遺跡の同種の土器も加えた。図3は参考として月夜野窯跡群試料のグラフを村主遺跡^{註8}から転載したが、沢入A支群灰原出土試料2点(9・10)を加えた。須恵器は肉眼観察によっても差がみられたため、図4には9世紀の杯・椀類、図5には10世紀の杯・椀類、図6は壺・羽釜類と

分けて掲載した。

- (1) 448・449の土師器環は、下東西遺跡土師器環の分析値の近くにある程度まとまりをもつ傾向がみられる。土師器壺は、450と藪田及び藪田東遺跡の分析試料が各1点あり、それぞれかなり離れる結果となった。450と藪田東遺跡出土の壺とは比較的土師器環の近くに分布するが、藪田遺跡の試料は藪田の領域内にある。しかし、実見した限りではあまり450と差は感じられない。今後もっと土師器についても、肉眼観察による胎土のグルーピングをしていく必要があると考えている。
- (2) 457は土師器環と離れ、藪田領域に入る結果となった。
- (3) 451～453・455・456は肉眼観察では似ており、452がやや離れる結果となったが、ある程度まとまりはあると思われる。454は試料選択の段階では、451～453と同じタイプと思われたが、その後の検討では重複する28住（10世紀前半）の遺物と考えられ、分析値も離れる結果を得た。
- (4) 458は藪田領域に納まったが、459はやや離れ、洞A支群の試料かもしくは466～471が位置するような未発見の支群の値に近い。
- (5) ① 460・461は肉眼観察では特異なものだが、結果は462～464・472・477・478とともに小さくまとまる傾向を得た。これは図3の月夜野窯跡群試料の中では、藪田領域の中でもSr/Rbの値が低いものか、洞A支群の2試料の間に位置するものであり、洞A支群の試料の増加が待たれるところである。
- ② すべて洞A支群の2試料の間に位置している。
- ③ 466～471はかなりのまとまりをみせ、既報告の月夜野窯跡群にはない領域である。既分析のものでこの領域に入るのは、大釜8住-1、14住-15、3住-22、村主遺跡6住-21で8世紀代の試料である。既に指摘されているように、未発見の支群の可能性があり、この試料のまとまりからみても充分一支群をなすと思われる。
- ④ 473～476は、475以外は小さくまとまり、須磨野A・深沢B支群の領域に含まれる。しかし、475を含めたとしても、深沢B支群の領域には入る。
- ⑤ 586～588は、藪田産と考えられ、既分析で同種の藪田東遺跡の試料12～14とともに藪田領域に含まれる結果を得た。
- (6) ① 589～591は、589を除いて藪田領域よりもSr/Rbの値が高い傾向にあるが、Ca/Kの値は0.5以下である。月夜野窯跡群の試料の中には現在見当たらない値である。
- ② 592・593は、Sr/Rbが村主遺跡の土師質土器より高い値を示している。
- ③ 594～596は沢入A支群と時期的には隔たるが、その領域内にまとまりを持つ傾向を得た。新たに加えた沢入A支群灰原出土試料は、肉眼観察ではほとんど同じにみえたが、10は領域内に入り、9は洞A支群の領域に近い結果となった。
- ④ 597～599は小さくまとまり、深沢B支群の領域に入っている。
- ⑤ 600は藪田の領域に入り、601はSr/Rbの値は深沢C支群に近いが、Ca/Kの値が大きく異なっている。ともに村主遺跡の土師質土器とは異なる結果となった。
- (7) 小形壺602は、Sr/Rbの値が高く、592・593や村主遺跡の土師質土器の近くに位置した他は、ほとんど既分析の月夜野窯跡群の領域内に入る結果となった。段階別の観察では一応それぞれ近いところに位置する結果を得たが、さらに分析試料を増やさければ時期的に支群の移り変わりがあるか、また各支群によって形態の特徴があるかなど実態は捉えられないだろう。しかし、当遺跡の羽釜試料はすべて月夜野窯跡群試料に重なる状態で分布していることは確認できた。

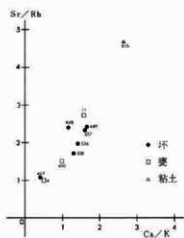


図1 土師器

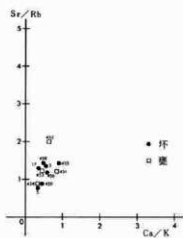


図2 ロック使用・酸化焰焼成土器

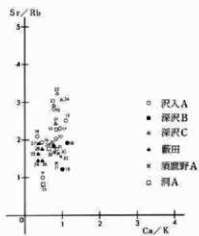


図3 月夜野窯跡群試料

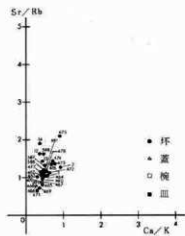


図4 9世紀代の須恵器

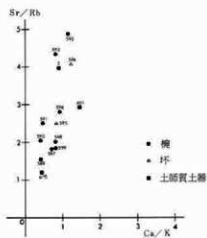


図5 10世紀代の須恵器

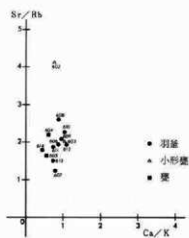


図6 須恵器壺・羽釜

(8) 粘土は図1に載せたが、土師器・須恵器にも共に大きく離れる結果となった。

4. まとめ

今回分析した試料は、大きく三つに分けて捉えることができる。まず、一つは月夜野窯跡群試料にオーバーラップするものがあり、肉眼観察による胎土のグルーピングが、それぞれ胎土分析によってもまとまりを持つ傾向を得ることができ、月夜野窯跡群の各支群のまとまりと対応する傾向もみられ、従来の月夜野窯跡群の試料による支群のまとまりを支持する結果となった。次に、図3・4を比較すると月夜野窯跡群試料の分布が薄いSr/Rbが0.7~1.13、Ca/Kが0.26~0.57の幅の中に集中する一群があることがわかり、未発見の支群の存在を強調する密度の濃い分布を確認した。さらにSr/Rbの値が大きく、4~5の辺りに分布するものが見られたが、これについては村主遺跡の土師質土器と戸神諏訪遺跡の特異な碗のみであり、今後この分析値に相当するものの増加を待ちたい。

注1 藪田・藪田東遺跡は一連の遺跡であり、窯跡の検出はないが隣接地に焼土、須恵器の散布が見られることなどから周辺に窯体の存在が確認されており、それをもって藪田A支群と呼称している。

注2 「月夜野古窯跡群」群馬県刊根郷月夜野町教育委員会 1985年

注3 「VI 化学分析」『藪田東遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982年

注4 「第三節 化学分析」『大原II遺跡・村主遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986年

注5 「第三節 胎土分析」『下東西遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987年

注6 注3と同じ

注7 注4と同じ

注8 注4と同じ

第2表 試料分析値一覧表

戸神諏訪遺跡

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K	Sr/Rb
4 4 8	56.6	19.4	8.68	1.28	1.77	2.60	1.77	1.17	2.44
4 4 9	57.2	17.6	8.30	1.01	1.91	2.21	1.43	1.66	2.40
4 5 0	58.9	18.2	8.50	1.09	1.59	2.37	2.04	0.98	1.51
4 5 1	61.9	18.7	7.15	0.71	0.79	0.98	1.14	0.83	1.21
4 5 2	61.3	18.7	7.20	0.71	0.52	0.79	1.04	0.61	2.00
4 5 3	66.0	16.9	6.30	0.87	0.52	0.91	1.52	0.42	1.25
4 5 4	68.7	17.4	5.25	0.92	0.45	1.79	1.82	0.32	0.90
4 5 5	62.2	18.9	6.60	0.87	0.88	1.06	1.27	0.86	1.41
4 5 6	67.7	16.4	6.20	0.73	0.72	1.09	1.53	0.58	1.17
4 5 7	68.8	13.7	4.25	0.98	0.56	0.66	1.67	0.41	1.06
4 5 8	70.6	16.5	6.20	0.77	0.55	0.91	1.44	0.47	1.44
4 5 9	69.1	16.2	5.80	0.75	0.70	0.80	1.95	0.45	0.89
4 6 0	62.8	26.8	4.20	1.04	0.45	0.83	1.17	0.46	1.01
4 6 1	62.8	26.9	4.10	1.07	0.42	0.66	1.47	0.46	1.11
4 6 2	71.7	18.2	4.45	0.80	0.54	0.80	1.64	0.41	1.07
4 6 3	68.6	19.7	5.35	1.01	0.40	0.98	1.62	0.30	1.00
4 6 4	68.6	19.0	6.20	0.90	0.51	0.85	1.44	0.44	1.06
4 6 5	72.6	16.3	6.35	0.80	0.57	1.01	1.64	0.43	0.84
4 6 6	70.2	19.0	5.15	1.03	0.40	0.88	1.71	0.28	0.78
4 6 7	66.8	20.3	5.00	0.91	0.51	0.92	1.41	0.43	0.90
4 6 8	74.2	17.4	3.15	1.02	0.39	0.77	1.86	0.26	0.88
4 6 9	69.9	20.8	4.10	1.05	0.45	0.86	1.60	0.34	0.73
4 7 0	75.9	16.8	3.25	1.01	0.47	0.85	1.99	0.29	0.88
4 7 1	70.0	20.2	4.11	1.07	0.41	0.84	1.64	0.30	0.70
4 7 2	67.1	22.5	4.31	0.94	0.66	0.79	1.41	0.57	1.13
4 7 3	66.0	22.1	5.30	0.84	0.81	0.83	1.48	0.75	1.37
4 7 4	66.7	21.3	5.05	1.01	0.70	0.97	1.21	0.71	1.45
4 7 5	71.8	19.8	3.75	0.79	1.23	0.60	1.27	0.92	2.10

第4章 調査成果

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K	Sr/Rb
476	65.9	20.7	5.85	0.76	0.82	0.84	1.55	0.66	1.35
477	63.9	22.0	3.70	1.06	0.43	0.60	1.17	0.44	1.11
478	70.0	18.9	5.12	0.82	0.54	0.89	1.36	0.49	1.11
586	61.5	22.0	5.07	0.81	0.64	0.86	1.76	1.15	0.48
587	63.4	20.7	5.00	0.73	0.60	0.91	1.68	1.31	0.47
588	64.0	21.9	4.66	0.87	0.56	0.65	1.53	1.64	0.47
589	70.9	18.6	4.14	0.76	0.52	0.63	1.67	1.55	0.41
590	70.1	17.7	4.07	0.75	0.54	0.58	1.73	2.04	0.41
591	69.9	19.3	2.85	0.74	0.65	0.73	1.82	2.50	0.47
592	67.7	16.3	5.66	0.84	1.03	0.90	1.18	4.87	1.15
593	68.9	16.1	5.94	0.87	0.88	0.58	1.43	4.33	0.81
594	60.8	23.7	5.00	0.78	0.85	1.41	0.91	4.08	1.21
595	59.4	26.9	4.70	0.82	0.60	1.48	0.93	2.50	0.84
596	60.0	26.7	4.93	0.81	0.64	1.47	0.91	2.80	0.91
597	69.5	21.8	3.35	0.75	0.90	0.69	1.64	1.82	0.75
598	70.5	21.8	3.58	0.78	0.94	0.45	1.50	2.00	0.83
599	69.0	20.5	3.82	0.79	0.98	0.46	1.71	1.85	0.77
600	65.3	19.9	4.82	0.74	0.90	2.30	2.68	1.24	0.45
601	63.7	20.7	5.86	0.85	1.32	0.88	1.19	2.92	1.47
602	68.5	18.2	5.00	0.78	0.99	1.02	1.77	4.14	0.75
603	64.1	22.4	4.10	0.58	1.24	0.52	1.64	2.00	1.62
604	66.8	21.1	3.70	0.85	0.86	0.65	1.98	2.16	0.58
605	68.5	19.4	3.96	0.73	0.71	0.46	1.72	1.62	0.55
606	61.3	22.8	3.71	0.62	1.20	0.84	1.91	1.93	0.85
607	69.8	18.6	3.92	0.66	0.84	0.34	1.45	1.22	0.76
608	68.0	22.5	2.56	0.66	1.20	0.77	1.88	2.58	0.86
609	65.6	20.5	4.59	0.68	1.00	0.36	1.40	2.09	0.95
610	71.1	19.3	2.45	0.65	1.26	0.56	1.63	2.25	1.03
611	66.5	21.9	3.64	0.81	0.90	0.71	1.69	1.85	0.71
612	68.2	23.5	3.17	0.77	1.16	0.67	1.45	1.93	1.07
613	66.8	20.6	3.42	0.81	0.99	0.60	1.80	1.50	0.74
614	65.7	23.7	3.78	0.80	0.75	1.13	2.19	1.78	0.45
615	62.2	18.3	6.83	1.05	1.87	1.70	0.93	4.66	2.65

飯田東濃群・沢入A支群

成分 試料	SiO ₂ (%)	Al ₂ O ₃ (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	TiO ₂ (%)	CaO (%)	MgO (%)	K ₂ O (%)	Ca/K	Sr/Rb
1	65.1	19.5	7.36	0.66	0.39	0.49	1.15	0.46	1.08
2	65.0	23.2	3.77	0.81	0.60	0.50	0.86	0.91	1.28
3	63.4	21.9	8.20	0.76	0.39	0.45	1.04	0.51	
4	62.7	23.0	5.80	0.81	0.65	0.58	1.86	0.47	1.03
5	64.7	20.2	5.26	0.74	0.45	0.55	1.76	0.34	0.78
6	63.5	22.0	6.04	0.77	0.38	0.60	1.84	0.28	0.79
7	65.3	20.2	6.36	0.76	0.44	0.45	1.15	0.52	1.38
8	66.0	18.5	4.00	0.80	0.91	0.64	1.40	0.89	2.16
9	65.8	21.4	4.14	0.75	0.45	0.57	1.33	0.47	1.00
10	66.2	18.0	4.15	0.73	0.80	0.61	1.36	0.82	2.02





第2項 出土土器の黒色・赤色付着物について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部 永嶋正春

1. はじめに

沼田市の戸神諏訪遺跡出土遺物整理中に、担当者によって検出された黒色あるいは赤色付着物のある須恵器について、その付着物を調査した。黒色物のみ付着したものと2点、赤色物のみ付着したものと2点、両方とも付着したものと2点の合わせて6点についてである。この6点は、いずれも9～10世紀代に所属する。

黒色物の付着した4点は、同一の住居跡からの出土であるが、概ね透明皿に転用使用した時の油煙が付着したような外観を示している。内2点に微量付着している赤色顔料は、その表面に黒色付着物が認められる箇所もある所から、透明皿(?)に転用される以前の使用状況を示すと考えてよい。赤色物のみ付着した2点は、赤色物がその内底部の全面に薄くべったりと付着残存しており、またその部分の器表も若干摩滅しているようにも見えるところから、恐らく朱墨の様な赤色顔料素材から赤色顔料を摺り下ろす為に用いた、いわゆる転用硯とみてよいであろう。

これらの資料に対する以上の見方については、更に付着物の内容に立ち入って確認あるいは検討する必要がある。ここでは、それぞれの付着物について微小の試料を採取し、その断面試料を複製して検討した結果について報告すると共に、蛍光X線分析により確認した赤色顔料の種類についても触れることにする。なお須恵器の転用使用の実態に合わせて、最初に赤色付着物、次に黒色付着物の順にそれぞれ報告する。

2. 赤色付着物

114住-17 赤色付着物は、内底面の器表にある微小な凹み即ち極く小さな傷、小さなクラック、微小な石を噛んだ凹みなどに極く僅かに残存している(図版1-1)。採取できた僅かな試料を用いての蛍光X線分析では、水銀(Hg)が検出されており、鉄(Fe)は確認できなかった。付着物が良好な赤色を呈することを考慮すれば、朱(HgS 赤色硫化水銀)と判断できる。その断面(図版1-2)によれば、朱粒は密集し濃密に存在する。粒径には大変幅があり、大きなものでは15ミクロンにも達するもの、小さなものでは1ミクロンにも満たない。絵の具を解くためか朱墨を下ろすために使用した痕跡と考えられる。

114住-4 赤色物は、内面の凹みに僅かに付着残存する(図版1-3)。採取した微量の試料による蛍光X線分析の結果では、鉄が検出されている。なお、水銀は検出されない。その断面(図版1-4)によれば、赤色顔料粒子は非常に小さく(粒径は0.数ミクロン以下)、べんがら(Fe_2O_3 赤色酸化鉄)と判断できる。なお、その中には多量の荒い石英粒子が混入しており、べんがら墨(墨状に加工されたべんがら)と考えられるにはやや難があるであろう。

94住-3 赤色物は図版1-5に見るように、内底面全面に加え円周方向の体部割れ断面にも付着している。その付着状況からは転用硯とみるのが最もふさわしい。蛍光X線分析によれば、赤色物はべんがらと判断できる。その断面(図版1-6)で見ると、個々のべんがら粒子の形状ははっきりとはせず、コロイド状に連続しているが、粒状性を有する異物の混入は認められない。光学顕微鏡では識別できないほど極微で優良なべんがら粒子を使用しているのであろうか。

111住-8 一部の断片が残存しているだけであるが、内底面にべったりと赤色物が付着している状況からは、転用硯が想起される(図版2-1)。蛍光X線分析の結果からは、この赤色物をべんがらと認めてよい。

その層断面(図版2-2)では、若干の石英粒子を含むものの極微のべんがら粒子を観察することができる。なおその層中には、極めて僅かではあるが朱と思われるやや大きめの赤色粒子も混入している。

3. 黒色付着物

114住-16 口縁部内面の所々に黒色物が付着している。その外観的様相は様々で、黒光りがしてやや厚みを感じられるもの、半光沢を有する塗膜状のもの、艶が無くても厚みの感じられないもの、下層に白褐色のがさがさした部分を従えるもの、ある程度の面的広がりを持つもの、非常に局部的なものなど、あるいはそれらの入り混じったものなどきわめて多彩である。一般的には外観的色調や塗膜の性状だけからでは、肉眼的には漆と区別のできにくいものも多い(図版2-3)。しかしながら本資料については、黒色付着物の全体的状況及びそれらの付着物が二硫化炭素による溶出成分を有することなどから、透明皿の油煙が付着したものと判断する。念のため付着物を採取し層断面薄片試料を作製したが、その内容はこれらの付着物が油に起因するものとみて矛盾なく解釈できる。例えば、図版2-4は図版2-3の黒光りのする部分の断面であるが、器表を厚さが30ミクロンにも達する暗赤褐色透明の単一で均質な層が覆っている。均質でこれだけの厚みを有する層は、漆の場合には考え難い。恐らくこれは、油が熱変質して褐変した層であり、その表面は更なる加熱のため黒色化し光沢を強めたものであろう。図版2-5は口縁部に斑点状にいたややがさがさした黒色部の断面であるが、中央部には油を思わせる熱変色の少ない白褐色部を残すものの、外側に行くほど褐色を深め、最表面では更に濃色を強めると共に、固化に伴う収縮割れが生じている。

114住-15、17 両者とも114住-16ほぼ同様の付着状況を示しており、それらから採取した付着物の層断面についても同資料の場合に類似する。

114住-4 前三者とは付着の状況がやや異なる。図版2-6、1-3に見られるように、黒色物は内面全面に付着しており、円周方向にそれを掻きとった痕跡も認められる。付着物は薄い塗膜状をなし、縮みじわに近い様子を示すなどある種の漆塗膜と極めて紛らわしい。しかしながら、付着物を層断面でみると(図版2-7)、厚さが厚い割には質的には均質であること、層の中央部はやや白色味があること、不定の位置に空隙やクラックが存在することなど、漆と認めるには難しい点が多い。二硫化炭素による成分溶出はほとんど認められないが、熱変質が進んだと推定し、ここではこの付着物を油煙と判断する。前三者に準じ、一応透明皿としての利用を推定する。

4. おわりに

本遺跡出土の須恵器に付着していた赤色物は、いずれも赤色顔料で、4点中1点は朱、残りはべんがらであった。また黒色物は4点とも油煙であり、透明皿として使用したための結果と判断した。

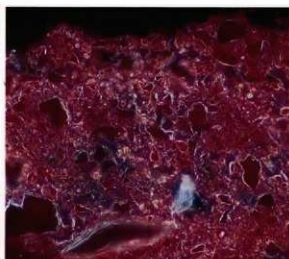
同一の住居跡から4点の透明皿が出土したこと、その内の2点はそれ以前に赤色顔料の解き皿として使用された形跡があること、しかもべんがらばかりでは無く、朱も使用されていたこと、他の住居跡からもべんがらの解き皿が出土していること、これらの事実は当該住居や遺跡の性格を考える上で重要である。

高価で入手し難い赤色顔料である朱が使用されていたことから、この遺跡において何らかの彩色的作業が行われていたとみるのが自然であろう。114住-4の外面には「造佛」の墨書があること、他の遺構から「寺」、「宮田寺」の墨書土器が出土していること、更にはここで検討した須恵器が、寺跡かと考えられる方形遺構の周辺に住居跡から出土していることなどを考慮すれば、本論で扱った遺物は、造寺、造仏に関わる諸作業に伴うものとみても間違いではあるまい。

図版 1



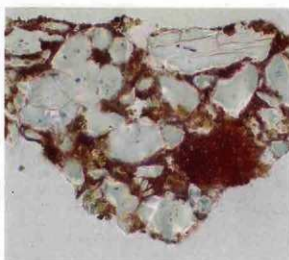
1. 須恵器114住-17 内面付着赤色物 3×



2. 同左の断面 750×



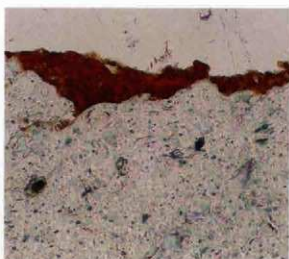
3. 須恵器114住-4 内面付着赤色物・黒色物 3×



4. 同左 赤色物の断面 750×



5. 須恵器94住-3

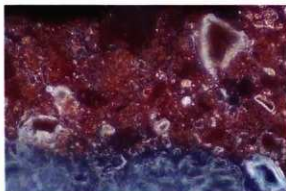


6. 同左 内面付着赤色物の層断面 750×

図版 2



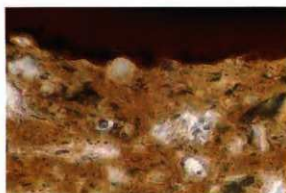
1. 須恵器111住-8 内面付着赤色物 3×



2. 同左の断面 750×



3. 須恵器114住-16 内面付着黒色物 3×



4. 同左 (114住-16) 黒色物の層断面 750×



5. 同左 (114住-16) 黒色物の層断面 750×



6. 須恵器114住-4



7. 同左 (114住-4) 内面黒色物の層断面 750×

第4節 まとめ

ここでは、周辺地形等の遺跡の立地と発掘調査によって得られた資料より、時代を追って若干の私見を述べることで、本報告書のまとめに代えたい。

まず、旧石器時代については、遺跡調査区の西端、小沢川の左岸であるローム台地縁辺部の傾斜地より遺物が検出された。本遺跡は武尊山(標高2,158m)に源を発する薄根川により形成された河岸段丘右岸(北側)の最上位面に位置し、北側には標高765mの急峻な戸神山を背にして南へと緩やかに傾斜すると共に、西側は小沢川に向かい、東側は細い谷地にむかって緩やかに傾斜する地形を呈している。この西側に向かう台地の傾斜は、旧石器の調査に伴って調べられた地層の状態によると、ローム下の暗色帯、さらには下層の礫層に至るまで小沢川に向かい傾斜している。このことより、戸神山に源を発する小沢川は、小河川でありながら河川の形成時期は古く、以降、本遺跡西端部については流路の大きな改変はないものと考えられる。従って、本遺跡の旧石器の分布は小範囲ではあったが、この小沢川流域のローム台地縁辺部については、今後旧石器の存在を留意する必要があるものとする。

縄文時代の遺構は、前期の竪穴住居跡2軒と、低地へ向かう地形変換点に陥し穴と考えられる土坑群を検出したに過ぎず、縄文時代の集落を捉えるには至らなかった。しかし、2軒の住居跡の分布位置が、調査区の南西端部と北東部であり、共に前述の小沢川に面する部分に位置することから、旧石器同様小沢川流域に集落が展開する可能性も考えられる。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構としては、竪穴住居跡7軒、獨立建物跡3棟などよりなる遺構群を検出し、集落の存在が確認された。集落の範囲については、調査区内の遺構分布が市道町田戸神線付近の比較的高い部分に遺構の密集がみられ、ここを中心に東西に広がりを見せることから、西側は小沢川に向かい台地が傾斜する変換地点、東側は低地(谷)に向かい同じく台地が傾斜する変換地点、南側は調査区南端部、北側については調査区外ではあるが低地(現在の水田面)に向かい台地が傾斜する地点までが集落の範囲であろうと推察される。また、この集落は前の項で記したように弥生時代から古墳時代にかけての過渡期の様相を呈する集落であり、弥生時代後期末頃に集落が営み始められ、過渡期に住居軒数を最も多くし、古墳時代前期の内にその姿を消しており、全体を通しての集落存続期間は比較的短いように思われる。そこで、集落が姿を消した要因について推測するならば、集落の基盤となる農業生産、つまりは水田にその要因があるものと考えられる。本遺跡の調査区内よりは水田跡の遺構は検出されていないが、水田耕作が可能と考えられる地については周辺に数箇所見られる。遺跡周辺は調査時点において、大規模なほ場整備事業等の手は入っておらず、また、平野部とは異なり山に囲まれた地形故に耕作地の拡大は容易ではないことから、旧地形、及び旧地目をよく遺しているといえる。遺跡周辺の水田面積は地図上(『旧石器～古墳時代編』9頁図参照)でも判るように現在もおおむね範囲であり、仮にこの狭範囲の水田のなかで遺跡の北側から東側にかけての低地部分(現水田面)に当時の水田を想定したとすれば、地形上最大規模を見積もったとしても現水田面積以上には考えられず、当時の集落において耕作地の拡大が望まれたとすれば、当然他地域への集落移転よりほかに方法がなく、古墳時代前～中期にかけての時点で、大きな指導力の下により広域な耕作地を求めて他の地へと集落を移した可能性が推察される。

前述の古墳時代前期より後、奈良時代に至るまでの間の遺構は検出されておらず、奈良時代に至って、再びこの地に集落が営み始められたものと考えられる。奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居跡97軒、獨立建物跡33棟、溝跡5条、井戸跡3基、その他、溝に囲まれた寺院跡などが検出された。このうち、奈良

時代(8世紀後半)に属する住居跡は5軒と少なく、同時存在の遺構は2～3軒程度と考えられる。しかし、9世紀代に入ると急激に住居軒数は増加する観があり、この頃には安定した集落となり、10世紀前半には検出遺構数も最も多いことから、10世紀代において最大規模の集落となったものと考えられる。その後の遺構数は減少し、10世紀末から11世紀代の遺構は殆どみられず、僅かに11世紀中頃と考えられる住居を1軒検出するのみである。集落は、検出された遺構の分布から、弥生～古墳時代の集落と同様に調査区を縦断する市道付近の比較的高い部分を中心に、調査区南側の低地部分を避けて展開しており、地形に沿っての立地と考えられる。調査区外を含めた集落の範囲としては、西側は小沢川を、東は谷地を限りとし、主に調査区より北側に展開してゆくものと推察され、今回の調査において集落のほぼ中央部南寄り部分を明らかにしたものと考えられる。集落は地形を優先に営まれているものの、検出された3基の井戸がほぼ当間隔に配置されていることを考えると、地形を優先しながらも規格性をもつ配置と考えられる。検出された寺院跡は、「寺」・「造佛」・「宮田寺」等の寺関係の文字をもつ墨書土器の時期などから、9世紀の第3四半期頃に建立されたもので、「宮田寺」と称されており、室内には仏像を安置し、10世紀の前半頃まで存続した約1丁四方の寺域をもつ寺院と考えられる。この寺院は、その出現が集落に先行しないこと、立地が必ずしも集落に優先しないこと、屋根に瓦を用いていないことなどから、集落に属する集落内寺院であり、その経営基盤は「官」ではなく、あくまでも「民」(集落)にあるものと考えられるが、寺域が占める面積が集落全体のおよそ1割以上を占めるであろうと推察され、近隣の集落跡よりの類例が見られないことなどから、この戸神の集落が単独で建立、維持でき得たものか否かは明らかではない。また、寺院の入り口、及び堂の正面は南側に位置すると考えられることから、寺域南限の溝の南側には東南方向に走る「道」の存在をも想定できよう。

また、奈良・平安時代の集落の生産基盤である水田については、前述の古墳時代前期と同様に周辺より耕作可能地を見出さずならば、遺跡調査区の北側の低地部分と東側の低地(谷地)に求められると考えられ、調査区東の台地縁部において検出された2号井戸とそれに付随する5号溝が東側の低地部分への通水の機能をも有していると考えられることから、やはり、遺跡東側の谷地部分は当時より水田として利用されていたものと考えられる。この周辺の水田耕作地は、地形上の制約により広大な面積を確保するには至らないものの、水立面においては背後の山々より流れ出る豊富な水に恵まれており、水の温度が低いという条件さえ克服できれば、狭面積ではありながらもその収穫量は豊かであり、かつ、平準化されたものであったと推察される。古墳時代以降は集落としての土地利用がなされ得なかったところから、奈良時代以降に再開の手が加わることとなった要因として、やはり、狭範囲ではあるが水利に恵まれたこの谷地水田を恵田し、耕作面積を拡大しようとする目的をもった人々の移住が推察される。また、この地は山裾に位置し木々にめぐまれ、木工に適したであろうことから、生産のひとつとして木工をも想定でき、このことは出土する鉄製品のなかに鉾が多く含まれ、また鎌(ドリル状)などの木材加工用具が含まれることなどが裏付けていると考えられる。

続く平安時代以降の遺構は検出されておらず、また、採取された遺物数も少ないことから、中世に至っての当地の土地利用は居住域としてではなく畑耕作地、あるいは字名に残る土塔原、即ち中世墳墓の土塔が立ち並ぶ墓域として利用され、集落は現在の集落と同様にやや山寄りの地へ移ったものと推察される。

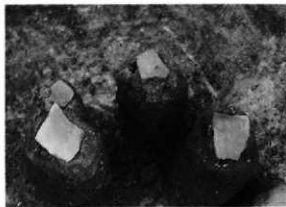
写 真 图 版



全景 西より



ホマ下



遺物出土状態



遺物出土状態(No.3)



掘り方

1号住居跡



カマド振り方

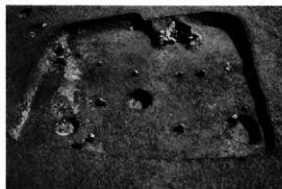
2号住居跡



全景 西より



カマド



遺物出土状態



全景 西より



カマド(石組状態)



遺物出土状態



カマド掘り方



3号住居跡

4号住居跡



全景 西より

5号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態

4号住居跡



カマド



遺物出土状態

5号住居跡



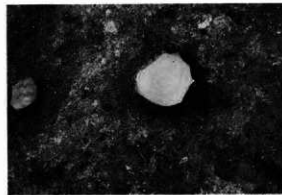
カマド(石組状態)



カマド



鉄鏝出土状態(№6)



遺物出土状態



掘り方(工具痕)



掘り方

6号住居跡



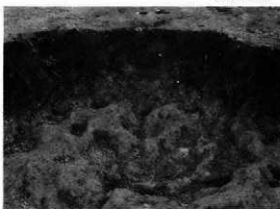
全景 西より



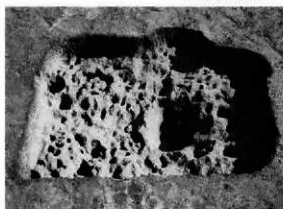
遺物出土状態



遺物出土状態(No.4)



カマド掘り方



掘り方



全景（高より）及び遺物出土状態



カマド



遺物出土状態 (No. 2)



鉄釘(ピット左側)出土状態 (No. 9, 10)



掘り方

8号住居跡



全景 西より



カマド



カマド掘り方



遺物出土状態



鉄器出土状態(No.9)



全景（西より）及び遺物出土状態



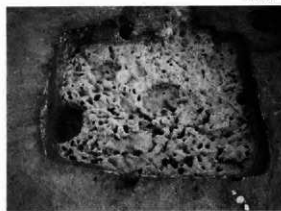
カマド



貯蔵穴



遺物出土状態(№4)



掘り方

10号住居跡



全景 西より



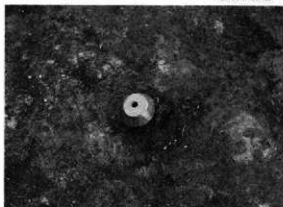
カマド



遺物出土状態



遺物出土状態 (No.5)



遺物出土状態 (No.32)

10号住居跡



遺物出土状態 (No.19)



遺物出土状態 (No.18)



遺物出土状態 (No.15)



遺物出土状態 (No.35)



遺物出土状態



柱穴



柱穴



掘り方

17・18号住居跡



17(左)・18(右)号住全景(西より)及び遺物出土状態



18号住カマド



18号住カマド(右側状態)

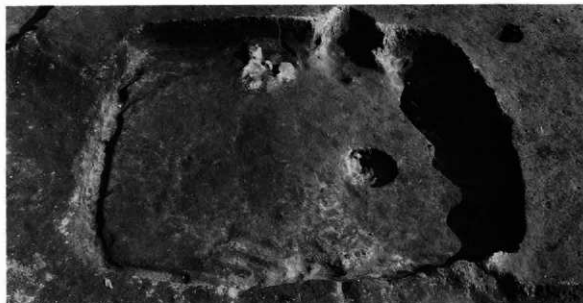


18号住掘り方



17号住カマド掘り方

20号住居跡



全景 西より

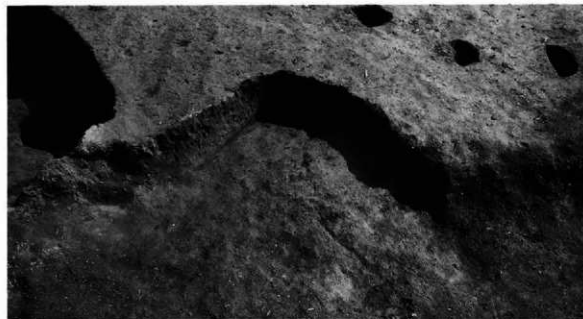


カマド遺物出土状態(中央羽釜No.3)



遺物出土状態

21号住居跡



全景 西より

23号住居跡



全景 西より



カマド遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態 (No.2)



掘り方



全景 西より



カマド遺物出土状態



遺物出土状態



カマド付岩及びピット内遺物



遺物出土状態

27号住居跡



竈出土状態(カマド横)



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



カマド遺物出土状態



カマド遺物出土状態



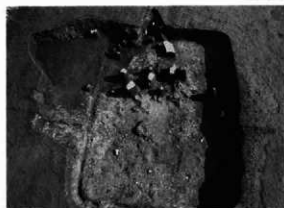
鉄鏝出土状態



掘り方



28・37号住居跡 西より



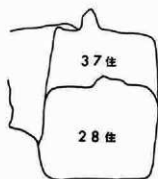
28・37号住居跡出土状態



28号住居跡方



37号住居跡方



重複状態図

43号住居跡



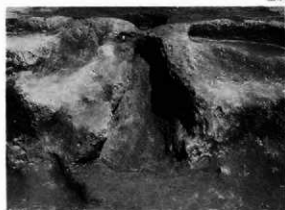
全景 西より



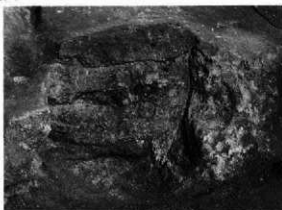
43号住居周辺



全景 西より



カマド



カマド土層断面



遺物出土状態



遺物出土状態

45号住居跡



全景 北より



カマド遺物出土状態



カマド掘り方



遺物出土状態



貯蔵穴遺物出土状態



全景 西より



カマド



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態

46号住居跡



遺物出土状態



遺物出土状態(上からNo.5、3)



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態(上からNo.8、7、4)



遺物出土状態(No.6)



遺物出土状態(No.19)



遺物出土状態(No.9)



全景 西より



カマド



遺物出土状態

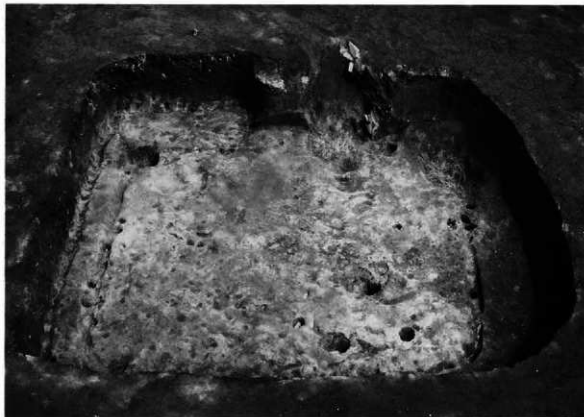


遺物出土状態(上から№4、2、1、3)



遺物出土状態

48号住居跡



全景 西より



土層断面



カマド



カマド土層断面



遺物出土状態



全景 西より



カマド



遺物出土状態



遺物出土状態(№11,14)



遺物出土状態

50号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態



土層断面



土層断面



カマド



遺物出土状態(カマド付近)



全景 西より



土層断面



カマド(石組状態)



遺物出土状態



遺物出土状態

52号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態

53号住居跡



全景 西より



全景 西より



カマド



遺物出土状態



54・60・61号住の重複状態



54号住周辺

55号住居跡



全景 西より

56号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態

56号住居跡



カマド



遺物出土状態 (No.2)



遺物出土状態 (OF No.1)



掘り方

57号住居跡



全景 西より



カマド



掘り方

58号住居跡



全景（北西より）及び遺物出土状態



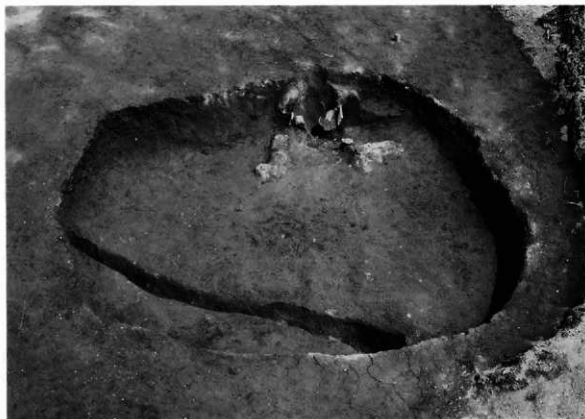
カマド



東り方



58号住居周辺



全貌 西より



オマド



遺物出土状態



59号住居周辺

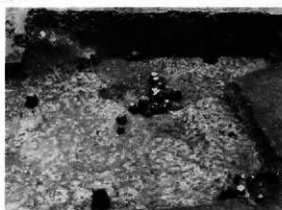
60号住居跡



全景 北西より



カマド



遺物出土状態



60号住居周辺



全景 西より



土層断面



カメラ



遺物出土状態



振り方

63号住居跡



全景 西より



西より



遺物出土状態



遺物出土状態



掘り方



全景（西より）及び遺物出土状態



カメラ

65号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態



カマ下



全景（西より）及び遺物出土状態



土層断面

67号住居跡



全景 西より



カマド



遺物出土状態



7号溝との重複状態



67号住居周辺



全景 西より



土層断面



石マサ



遺物出土状態(羽釜No.3)



遺物出土状態(No.2)

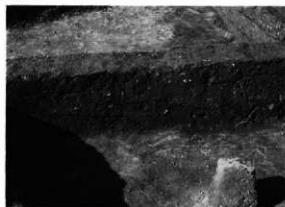
69号住居跡



全景 西より



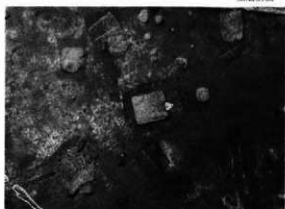
土層断面



土層断面



遺物出土状態



69号住居周辺



全景 西より



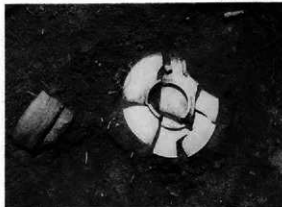
カマド



遺物出土状態



遺物出土状態(No.3)



遺物出土状態(No.2)

71号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態



71号住居跡



全貌 西より



カマド及び遺物出土状態(No.4)



遺物出土状態



79号住居周辺

80号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態



土層断面



土層断面



カマド



掘り方



全景 西より



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



掘り方

82号住居跡



全景 西より



カマド



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態(№ 8、6)



全景 西より



遺物出土状態



遺物出土状態



83号住居周辺

84号住居跡



全貌（西より）及び遺物出土状態



掘り方



全景 西より



土層断面



穴マド

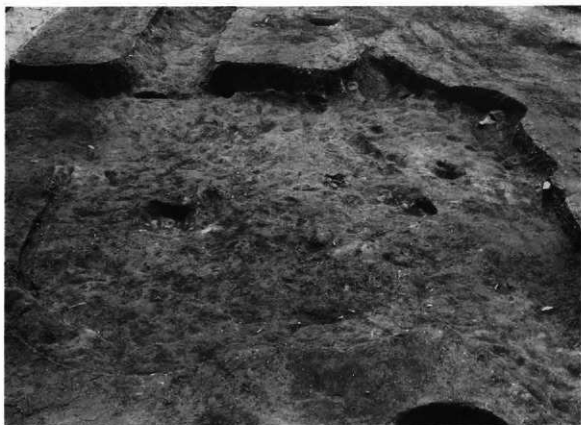


遺物出土状態



掘り方

89号住居跡



全景 西より



掘り方



全景 北より



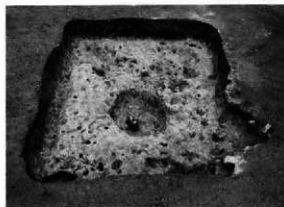
遺物出土状態



遺物出土状態

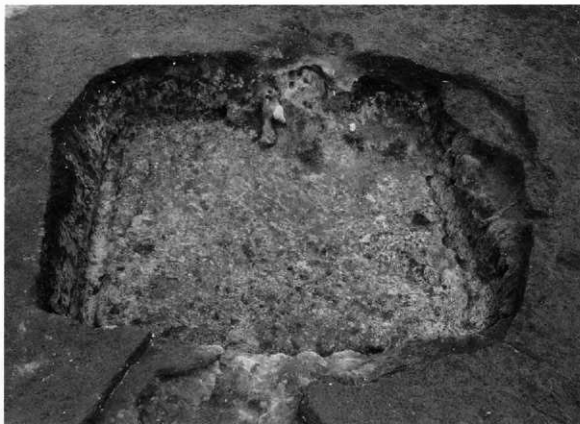


遺物出土状態(左からNo 7、2)



掘り方

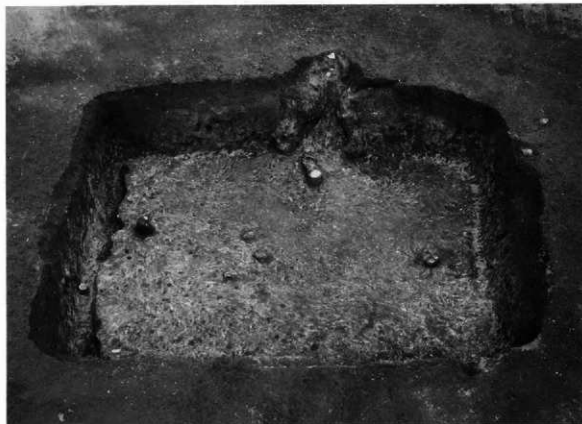
92号住居跡



全景 西より



遺物出土状態

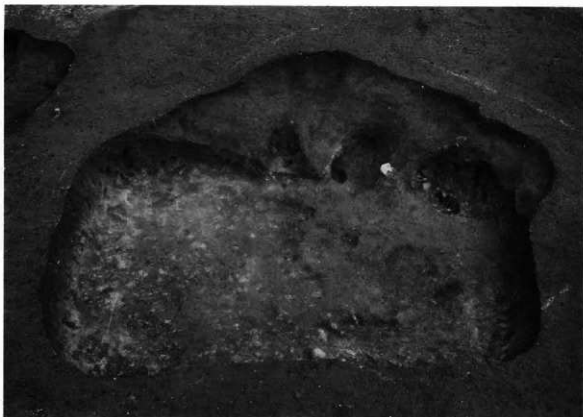


全景（南西より）及び遺物出土状態

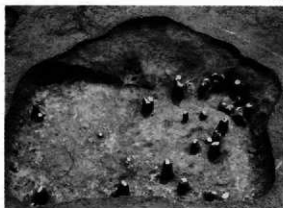


カマド

94号住居跡



全景 西より



遺物出土状態



貯蔵穴遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



全景 北西より



カマド



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態(左から№7、10、13、4)南壁上から撮影

95号住居跡



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態

96号住居跡



遺物出土状態 (No 3)



遺物出土状態 (No 5)



全景 北より



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態

97号住居跡



全景 西より



カマ下



遺物出土状態

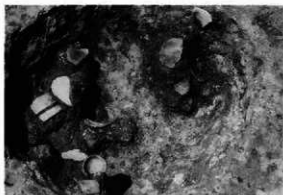


遺物出土状態(左から№15,14,13)



遺物出土状態(右№8)

97号住居跡

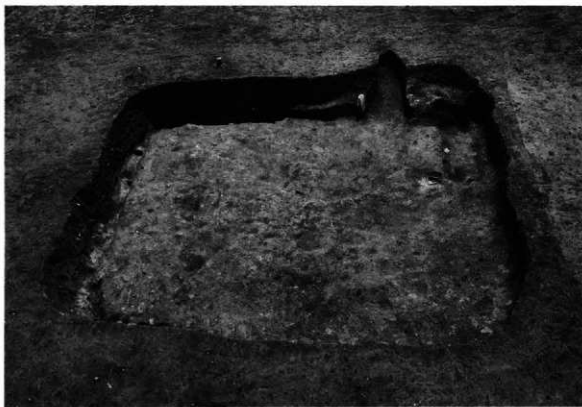


遺物出土状態

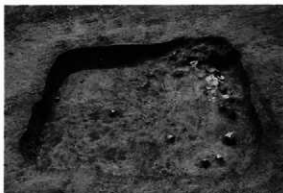


掘り方

98号住居跡



全景 北西より



遺物出土状態



遺物出土状態(No.3、4)

99号住居跡



全景 西より



カマド



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



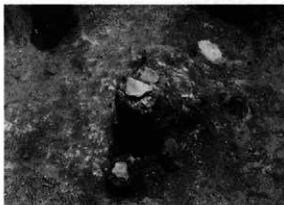
遺物出土状態



遺物出土状態 (No.20)



遺物出土状態



遺物出土状態



99号住居跡

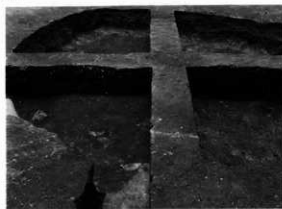
101号住居跡



全景 西より



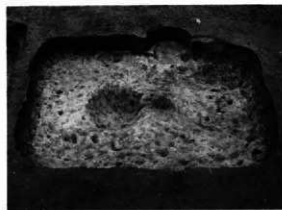
土層断面



土層断面



遺物出土状態



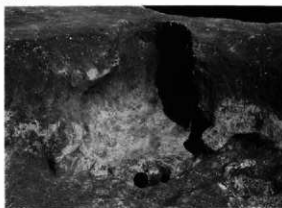
掘り方



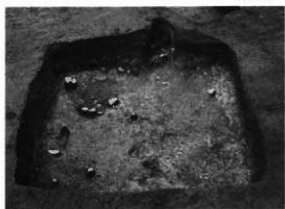
全景 北西より



土層断面



カマド



遺物出土状況



掘り方

109号住居跡



全景 南西より



土層断面



カマド土層断面



カマド



遺物出土状態



全景 北西より



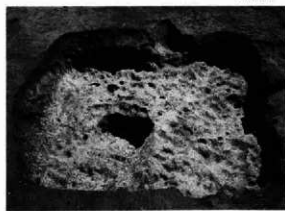
土層断面



土層断面



遺物出土状態

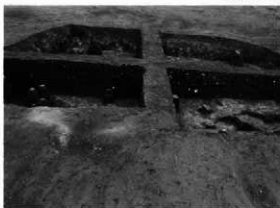


掃り方

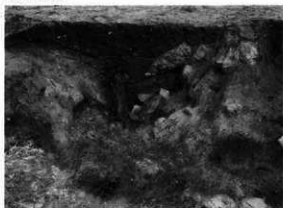
111号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態



土層断面



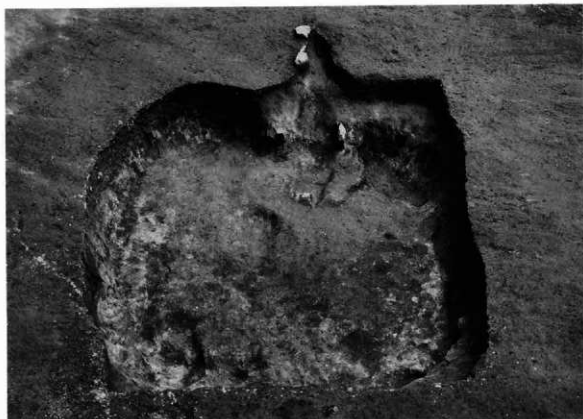
カマド土層断面



カマド



漆土器出土状態(Na 2)



全景 西より



土層断面



遺物出土状態



遺物出土状態

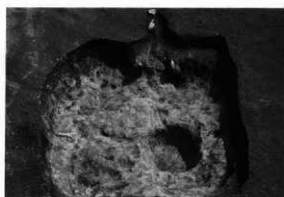


遺物出土状態(No 3)

112号住居跡



遺物出土状態



掘り方

113号住居



全景 西より



土層断面



遺物出土状態



全景 西より



掘り方



カマド



カマド隣遺物出土状態(№18,15)

114号住居跡



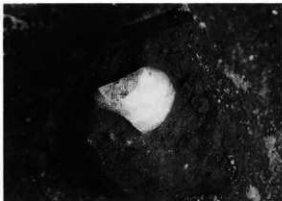
土層断面



土層断面



遺物出土状態 (No.3)



遺物出土状態



遺物出土状態(上からNo20,16,4)



遺物出土状態



遺物出土状態 (No.22)



遺物出土状態 (No.23)



全景 西より



遺物出土状態

117号住居跡



全景 西より



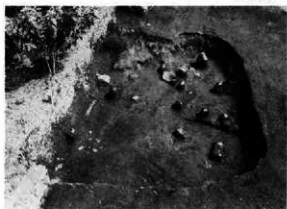
土層断面



土層断面



カマド



遺物出土状態



全景 西より



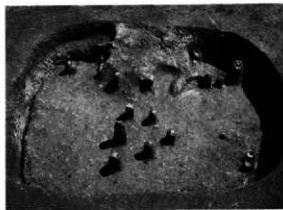
土層断面



土層断面



カマド



遺物出土状態

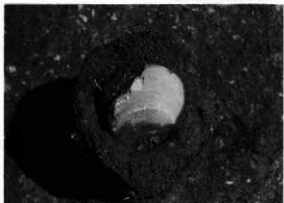
118号住居跡



遺物出土状態 (No. 4, 3)



遺物出土状態 (No. 10, 7)



遺物出土状態



遺物出土状態 (中央踏跡車No. 12)



遺物出土状態



遺物出土状態 (No. 2, 8)



遺物出土状態



掘り方



全景 西より



土層断面



遺物出土状態



遺物出土状態(No.3)



張り方

120号住居跡



全景 西より



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態(No 1)



全景（西より）第二次床面



土層断面



全景（第一次床面）

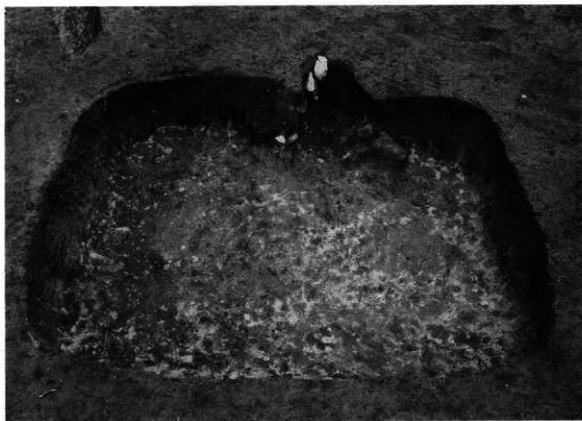


※マフ



掘り方

122号住居跡



全景 西より



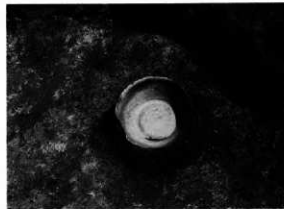
土層断面



カマド



遺物出土状態



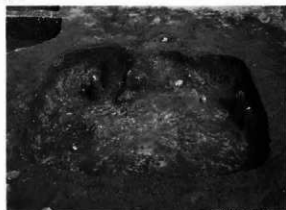
遺物出土状態 (No. 1)



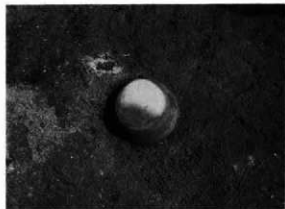
全景 西より



左マド



遺物出土状態



遺物出土状態 (No 1)



遺物出土状態 (No 4、6、7)

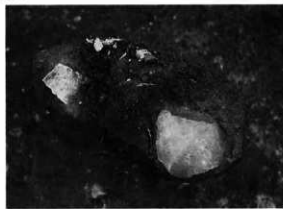
124号住居跡



全景 西より



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



全景（西より）及び遺物出土状態



カマド及び遺物出土状態(№4、5)

126号住居跡



全景 西より



土層断面



土層断面



遺物出土状態



掘り方



全景 西より



ホマド (No. 8)



遺物出土状態



遺物出土状態 (No. 6)



遺物出土状態 (左からNo. 2、4)

128号住居跡



全景 西より



土壁断面



遺物出土状態



遺物出土状態

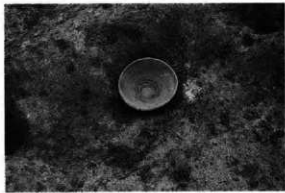


遺物出土状態

128号住居跡



遺物出土状態



遺物出土状態 (No.6)

129号住居跡



全景 西より



土層断面



遺物出土状態

130号住居跡



全景 西より



遺物出土状況



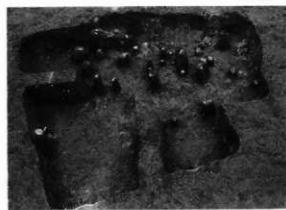
全景 西より



土層断面



土層断面



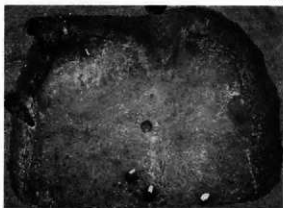
遺物出土状態



遺物出土状態(上から№2、4、3)



全景 西より



遺物出土状態



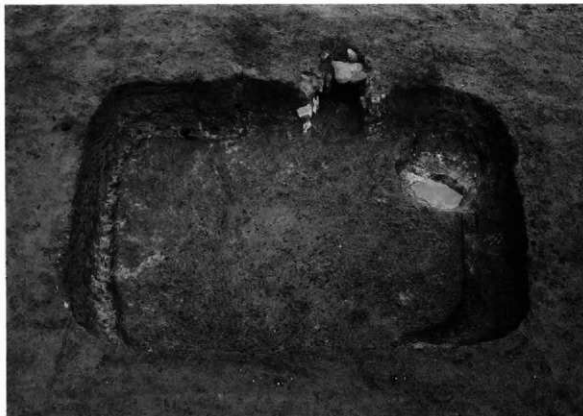
遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態(No 3)



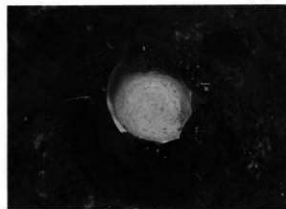
全景 西より



カマド



遺物出土状態

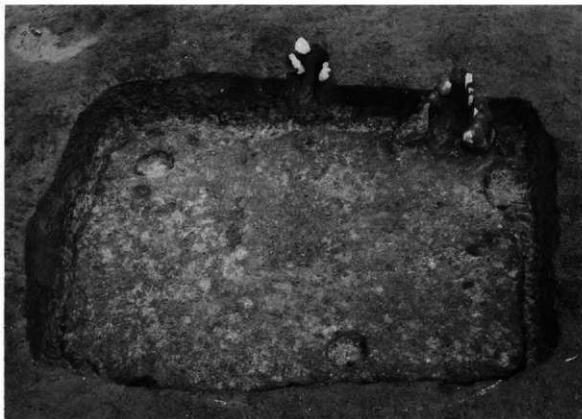


遺物出土状態(No.3)



掘り方

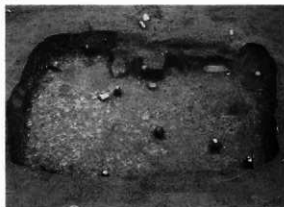
135号住居跡



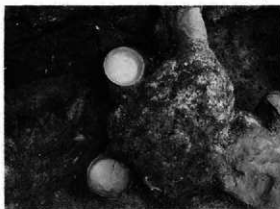
全景 西より



カマド



遺物出土状態



遺物出土状態 (No.6-1)



遺物出土状態 (No.9)



全景 西より



土層断面



土層断面



遺物出土状態



掘り方

137号住居跡



全貌 西より



土層断面



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



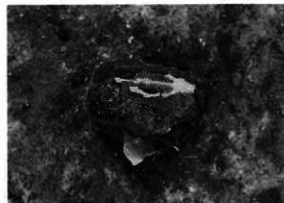
遺物出土状態



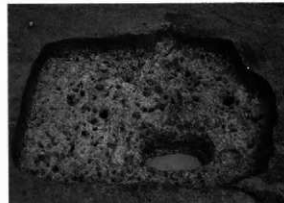
遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



掘り方



137号住居跡

138号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態



掘り方



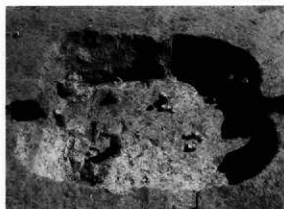
全景 西より



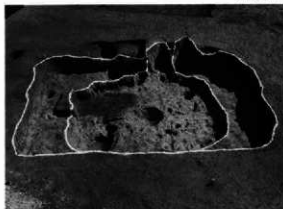
土層断面



土層断面



遺物出土状態

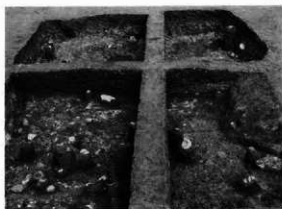


掘り方

141号住居跡



全景 西より



土層断面



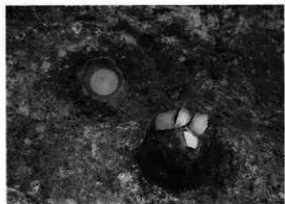
カマド



カマド土層断面



遺物出土状況



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



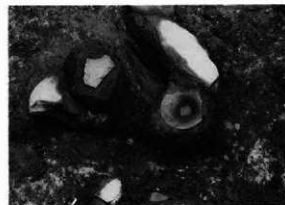
遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態



遺物出土状態

154号住居跡

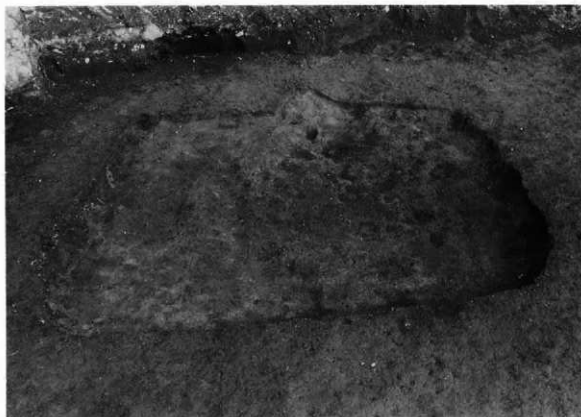


全景 西より

155号住居跡



全景（西より）及び遺物出土状態



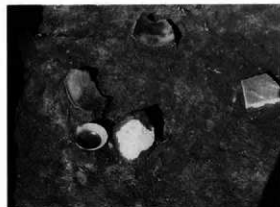
全景 南西より



遺物出土状態



遺物出土状態

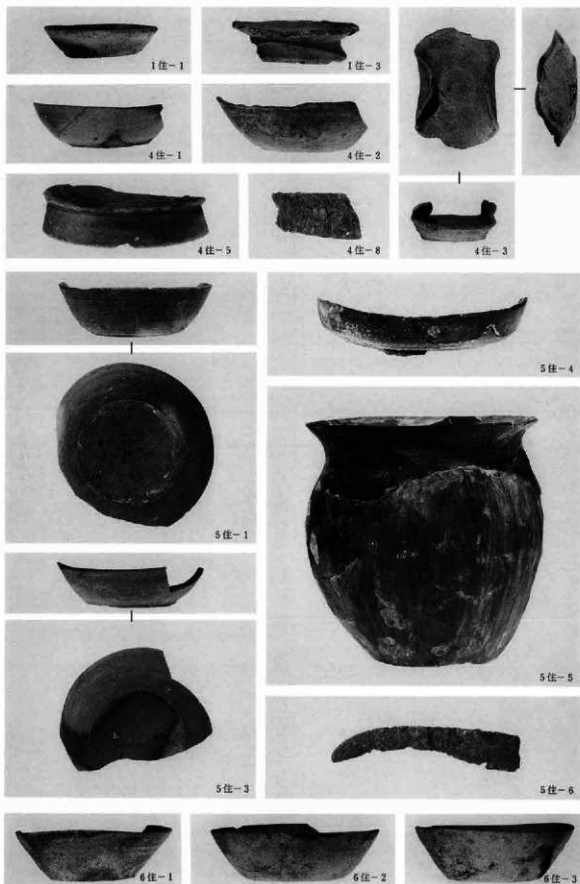


遺物出土状態

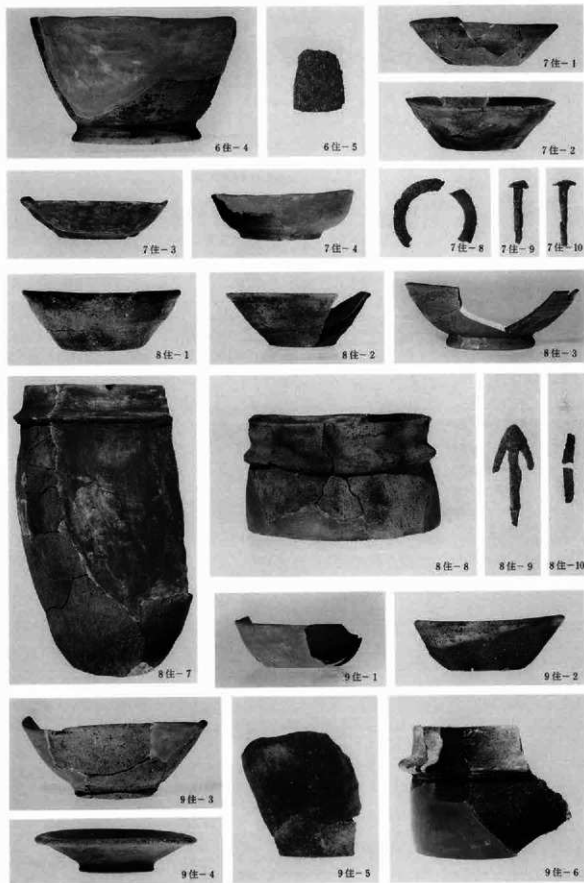


遺物出土状態

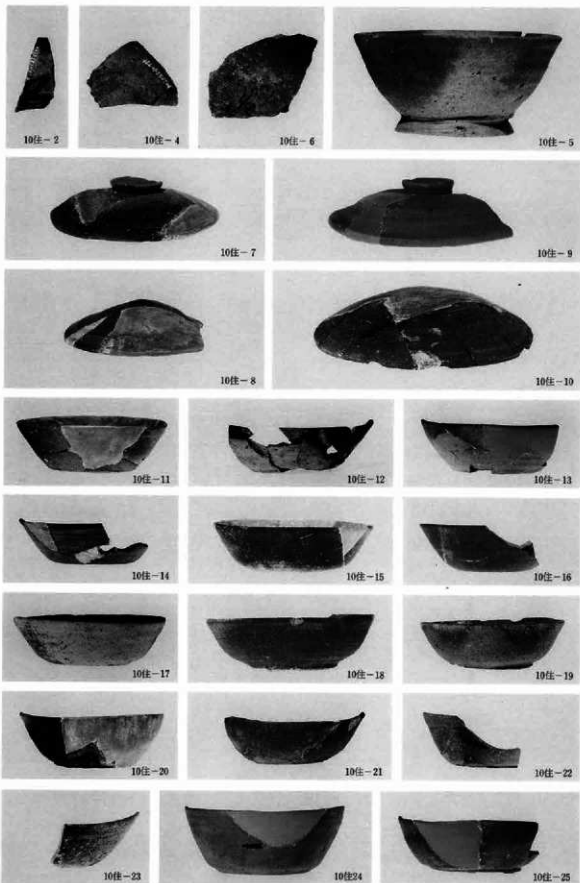
1・4・5・6号住居跡出土遺物 (約1:3)



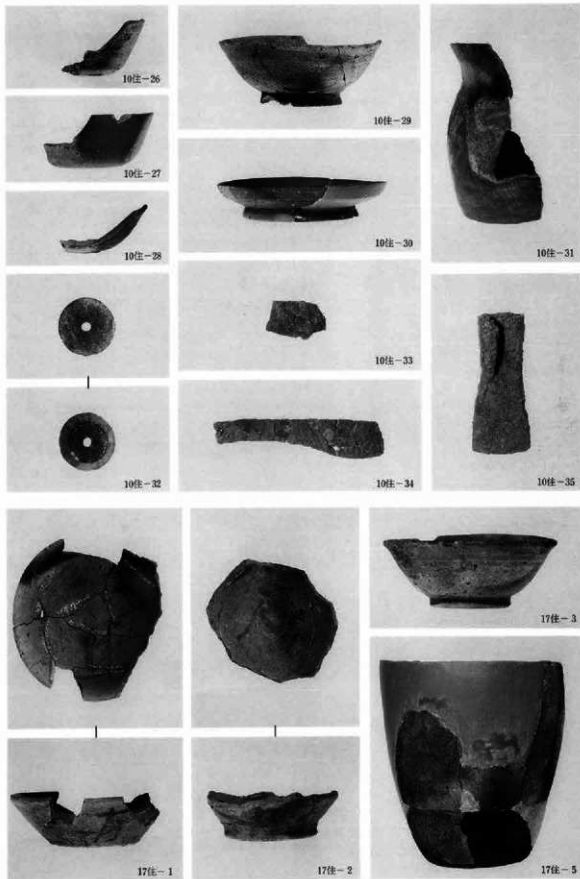
6・7・8・9号住居跡出土遺物 (約1:3)



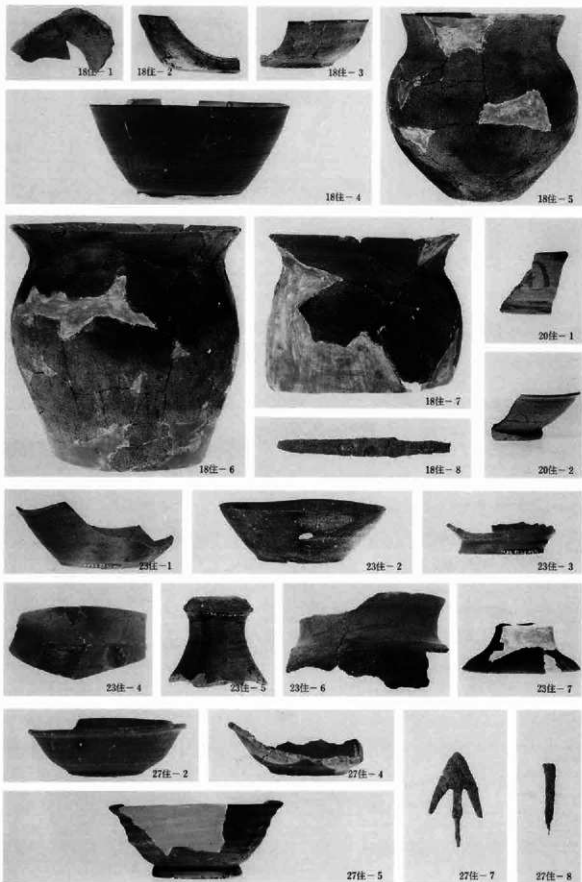
10号住居跡出土遺物 (約1:3)



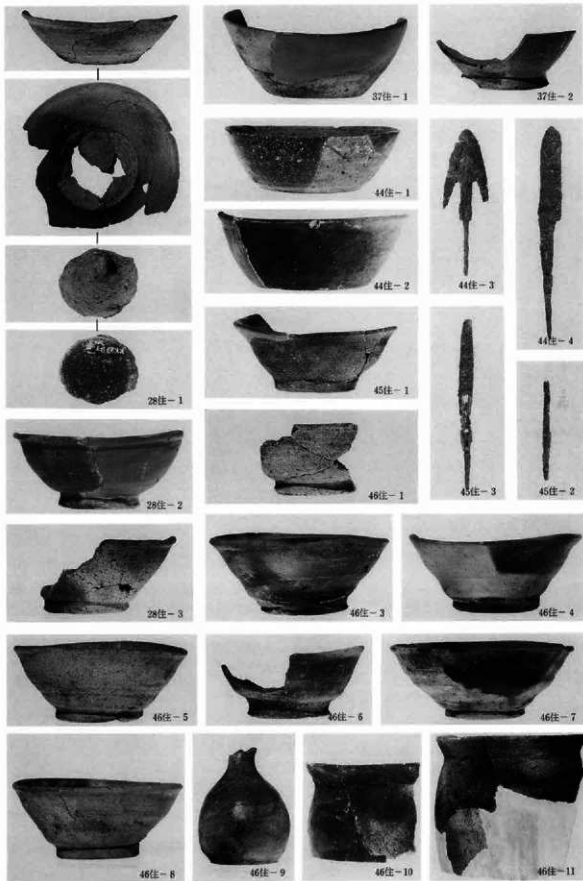
10・17号住居跡出土遺物 (約1:3)



18・20・23号住居跡出土遺物 (約1:3)



28・37・44・45・46号住居跡出土遺物 (約1:3)



46号住居跡出土遺物 (約1:3)



46住-12



46住-13



46住-15



46住-14



46住-18



46住-16



46住-19

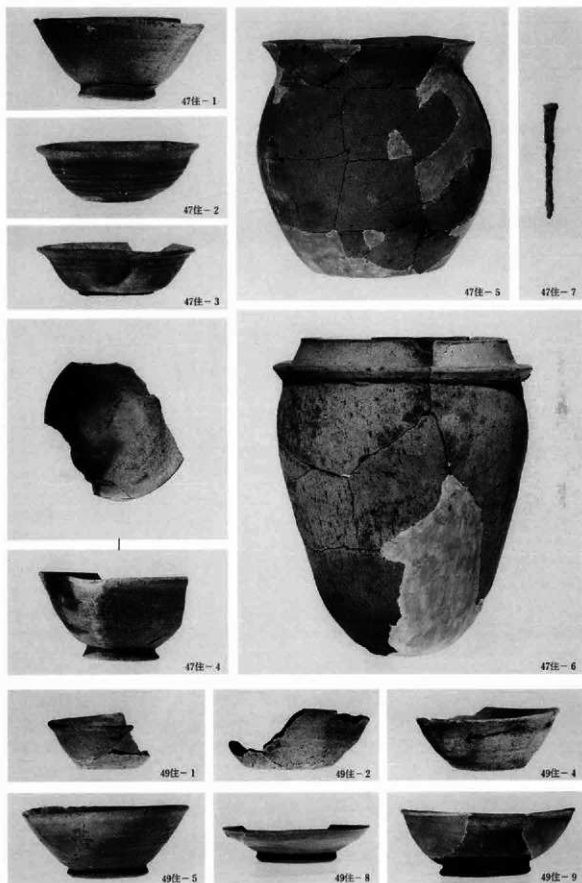


46住-20

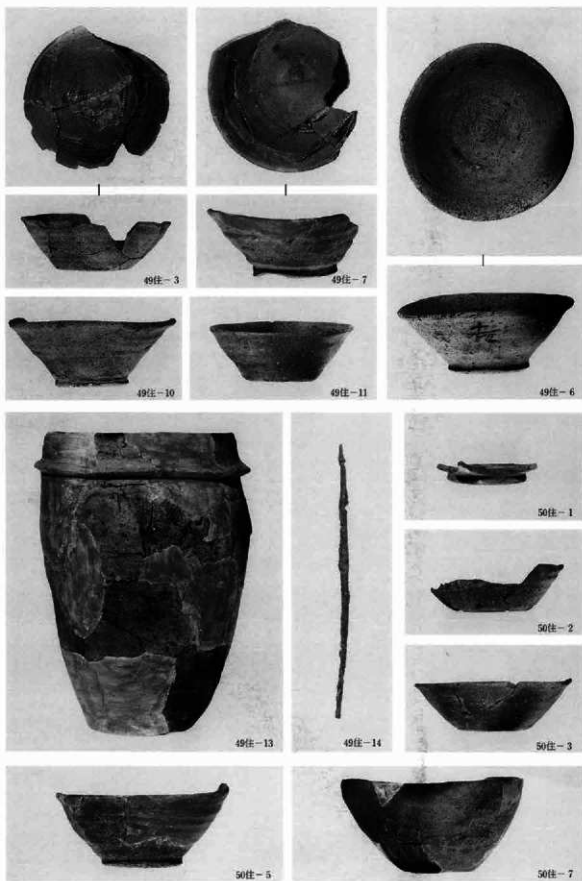


46住-21

47・49号住居跡出土遺物 (約1:3)



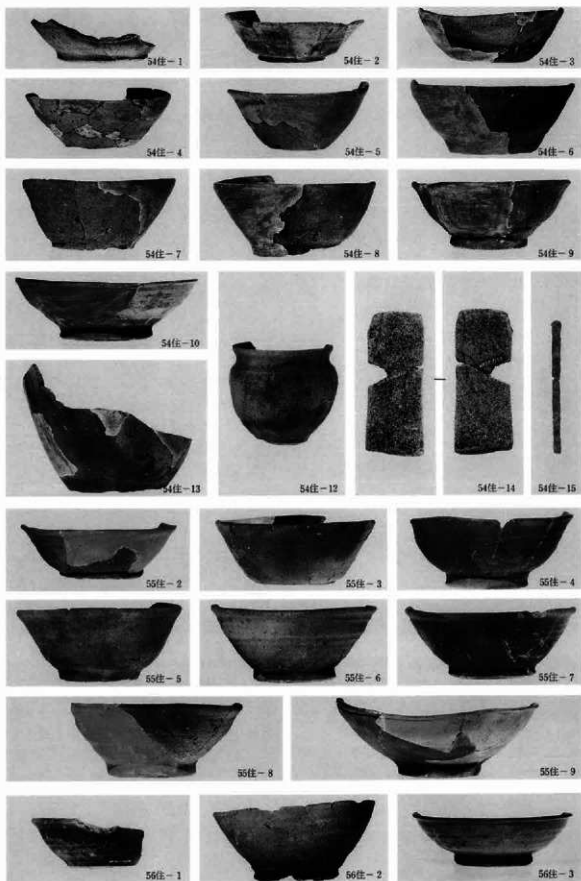
49・50号住居跡出土遺物 (約1:3)



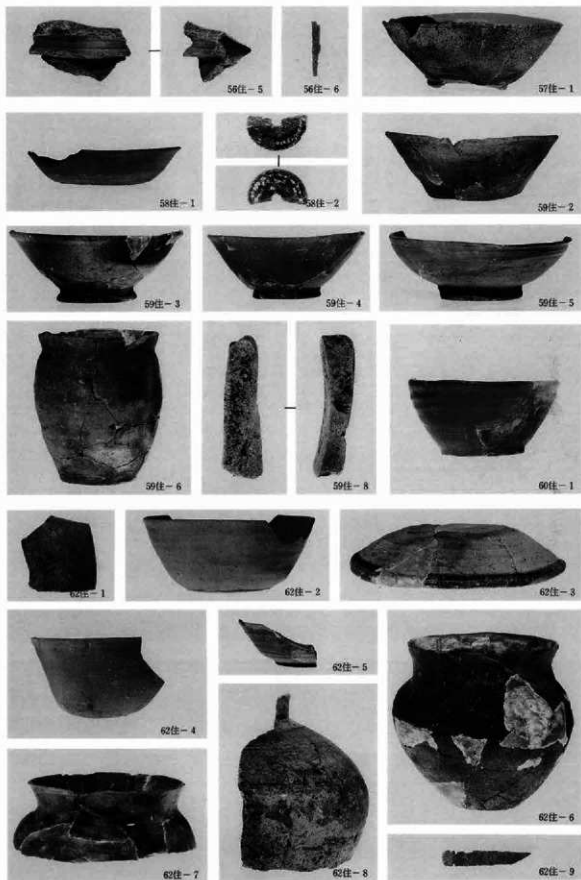
50・51・53号住居跡出土遺物 (約1:3)



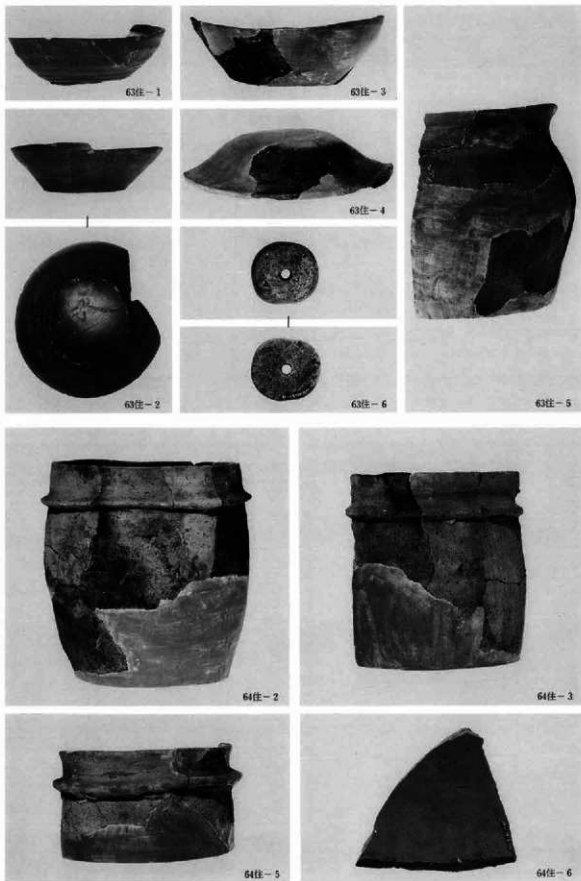
54・55・56号住居跡出土遺物 (約1:3)



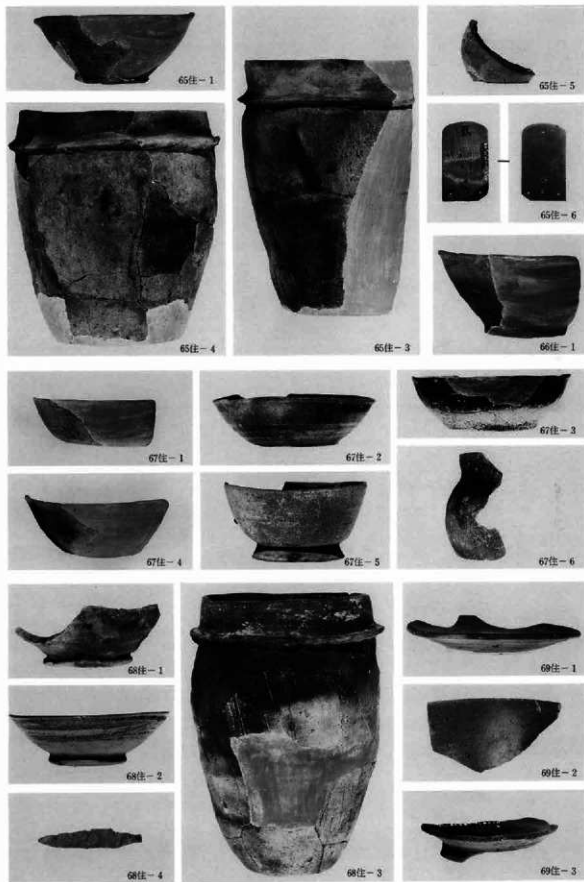
56・57・58・59・60・62号住居跡出土遺物 (約1:3)



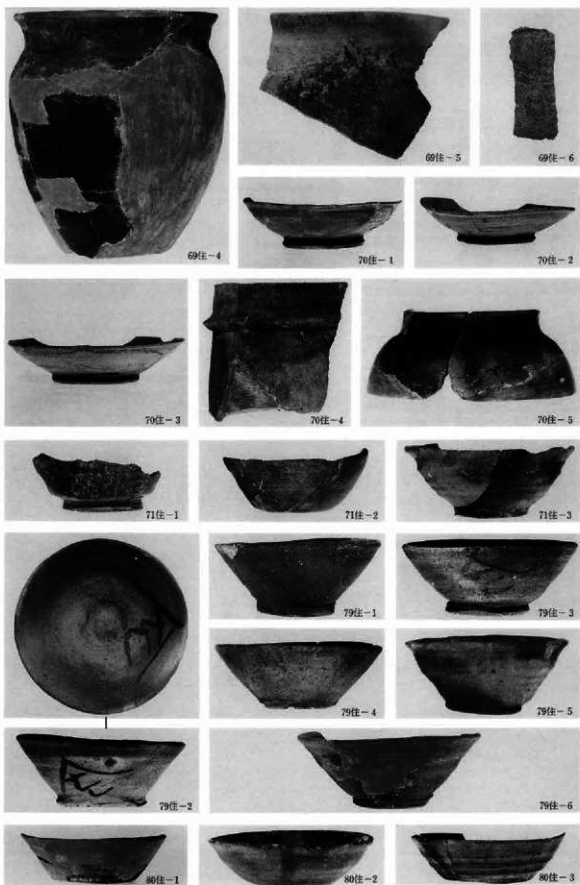
63・64号住居跡出土遺物 (約1:3)



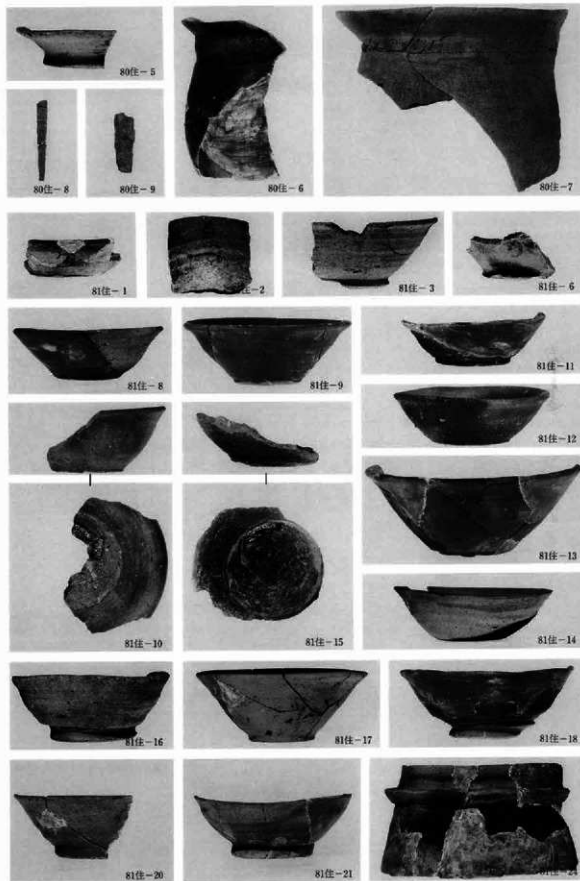
65・66・67・68・69号住居跡出土遺物 (約1:3)



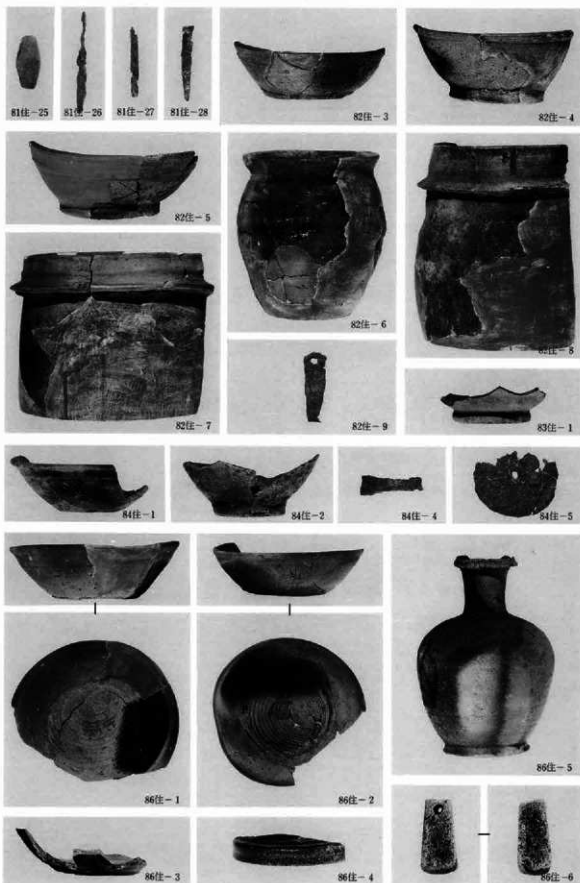
69・70・71・79・80号住居跡出土遺物 (約1:3)



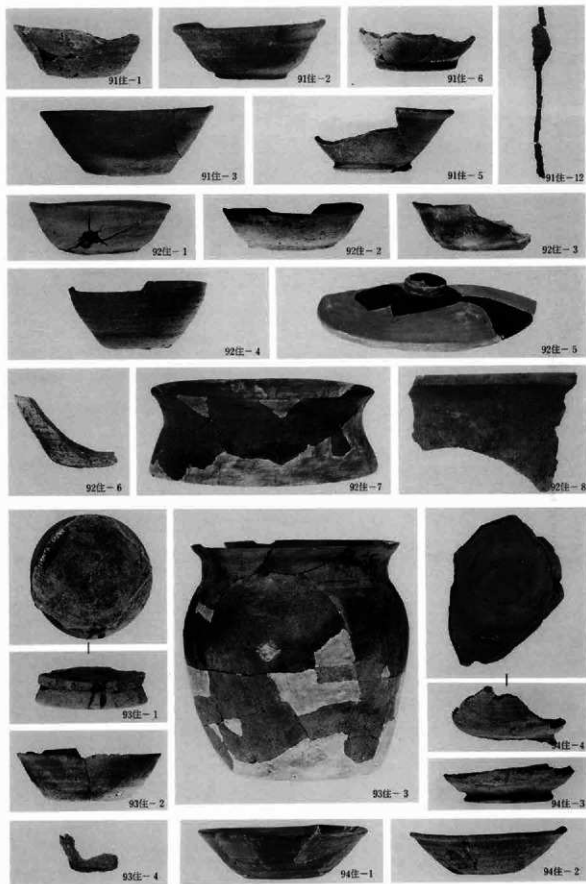
80-81号住居跡出土遺物 (約1:3)



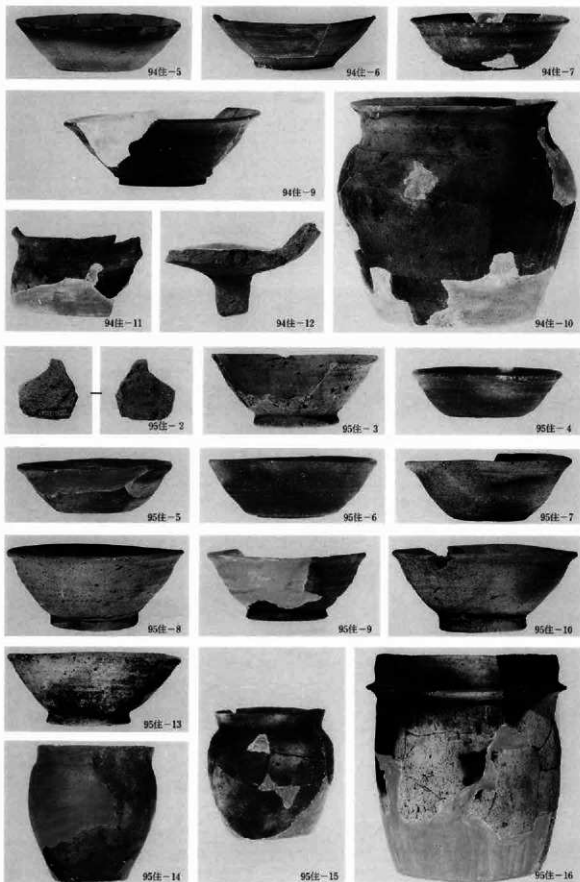
81・82・83・84・86号住居跡出土遺物 (約1:3)



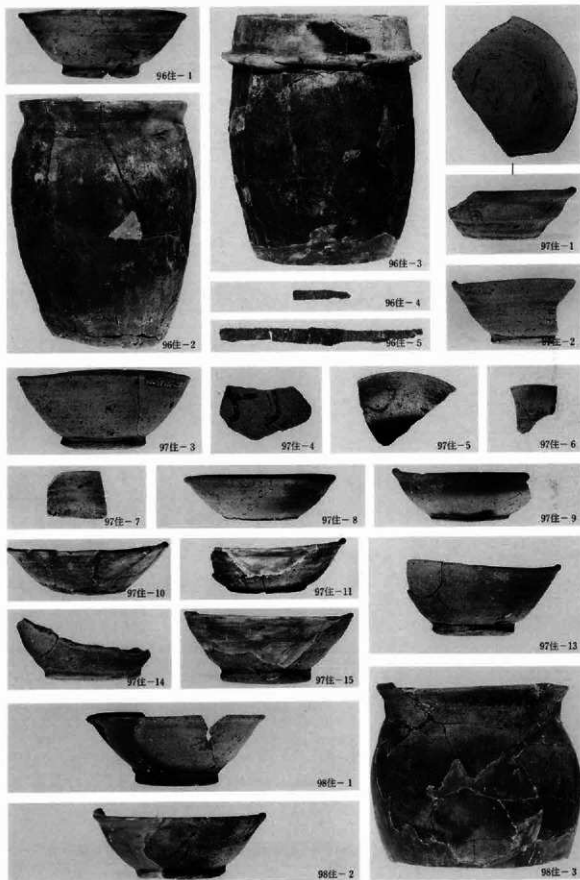
91・92・93・94号住居跡出土遺物 (約1:3)



94・95号住居跡出土遺物 (約1:3)



96・97・98号住居跡出土遺物 (約1:3)



98・99号住居跡出土遺物 (約1:3)



98住-4



99住-14



99住-12



99住-15



99住-13

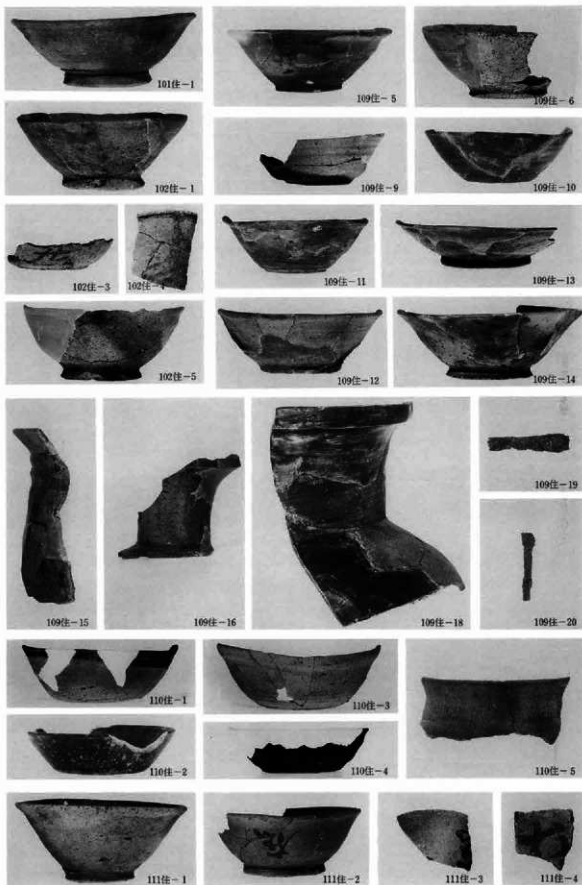


99住-16

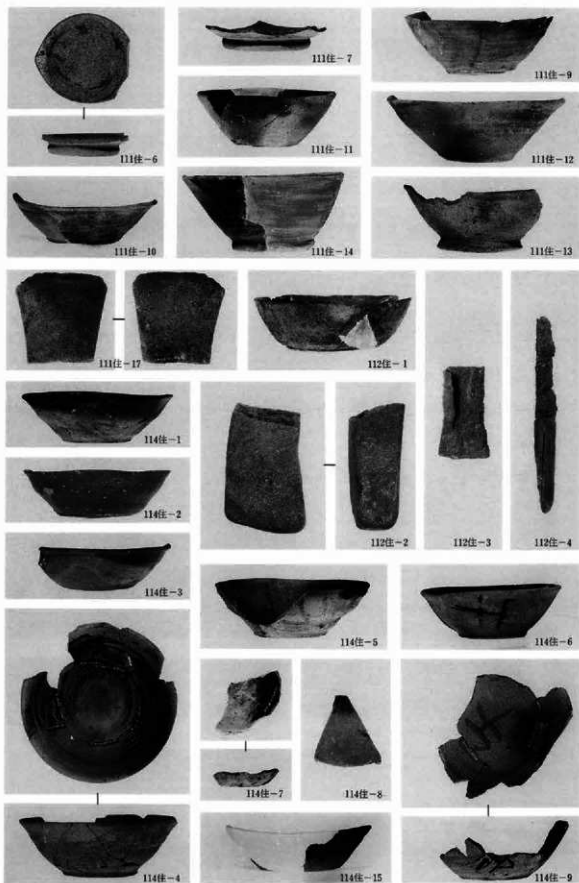


99住-20

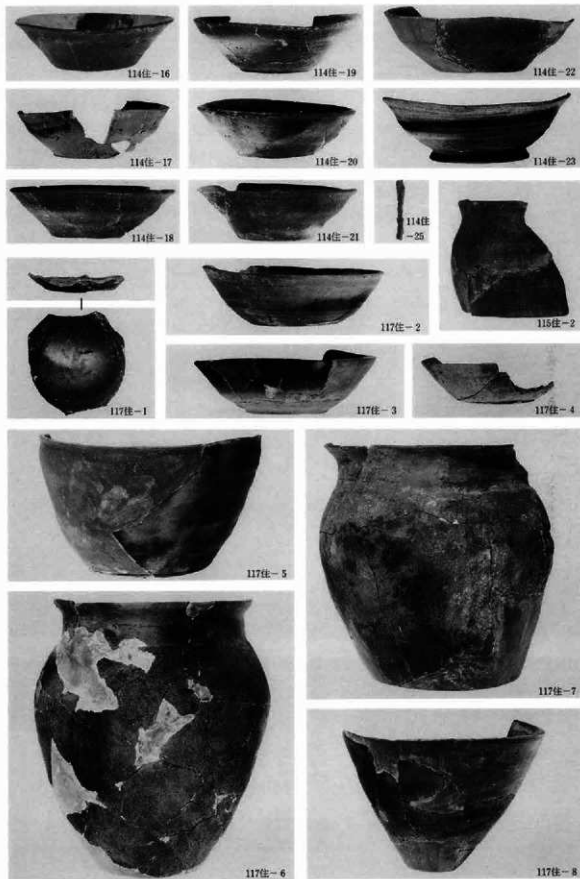
101・102・109・110・111号住居跡出土遺物 (約1:3)



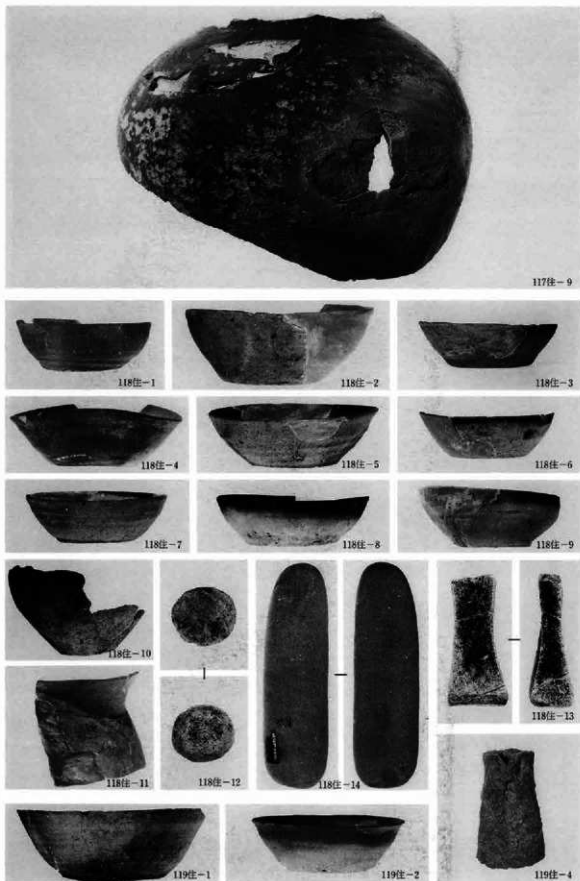
111・112・114号住居跡出土遺物 (約1:3)



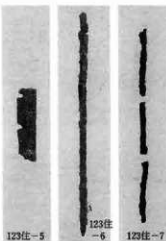
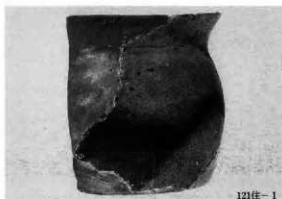
114・115・117号住居跡出土遺物 (約1:3)



117・118・119号住居跡出土遺物 (約1:3)



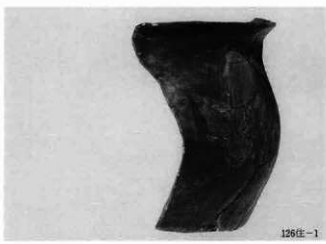
119・120・121・123・124・125号住居跡出土遺物 (約1:3)



125・126・127号住居跡出土遺物 (約1:3)



125住-9



126住-1



125住-10



126住-2



127住-1



127住-2



127住-3



127住-4



127住-5



127住-6



127住-7



127住-8

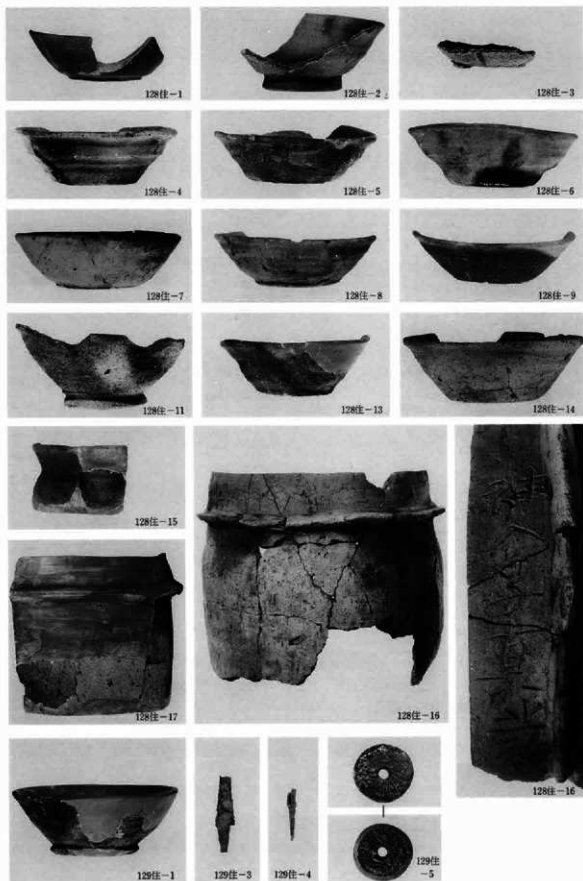


127住-9

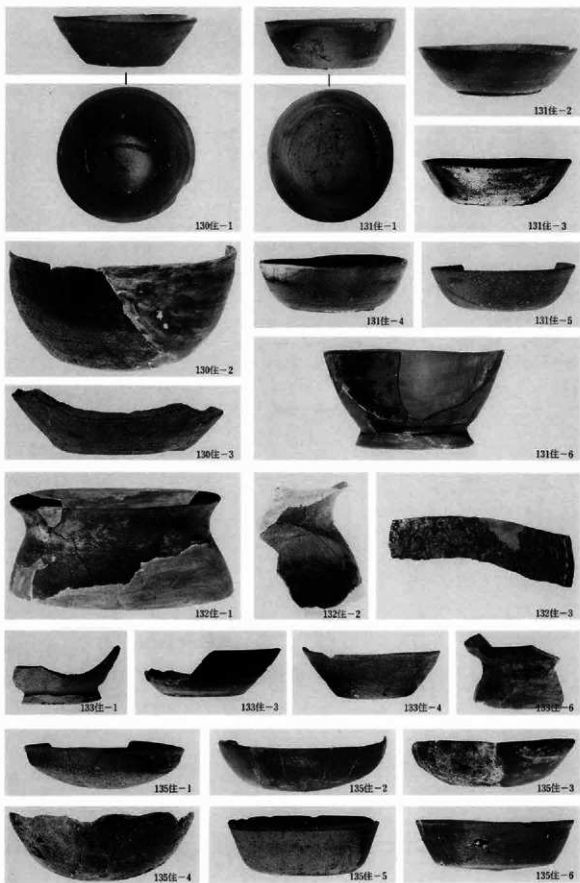


127住-10

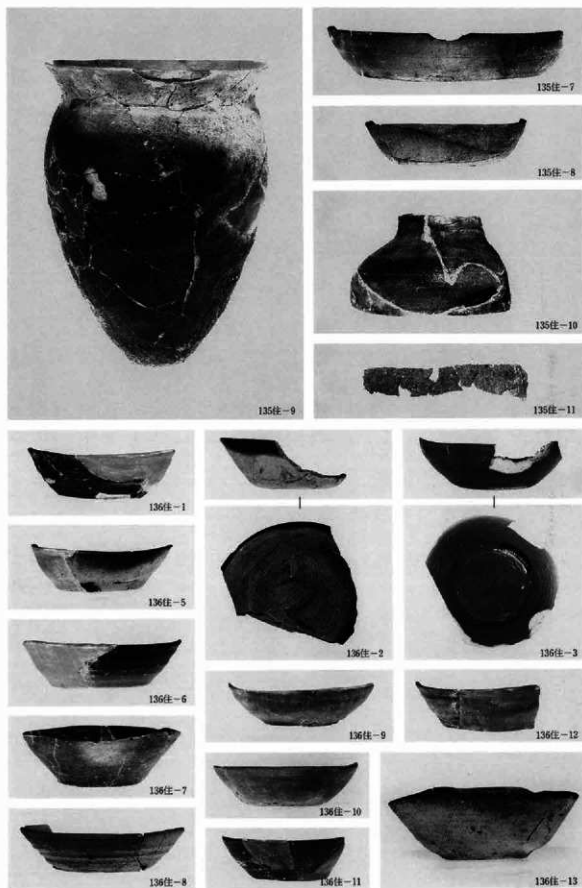
128・129号住居跡出土遺物 (約1:3)



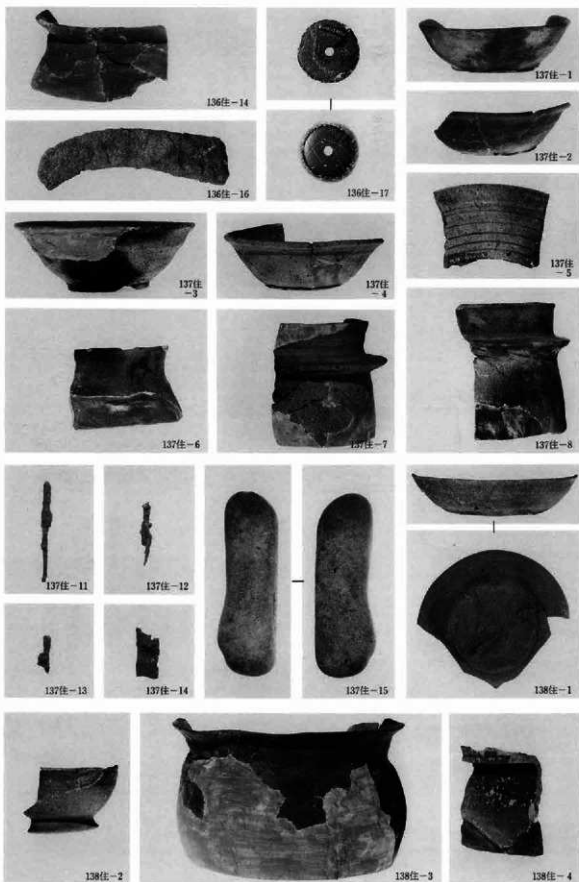
130・131・132・133・135号住居跡出土遺物 (約1:3)



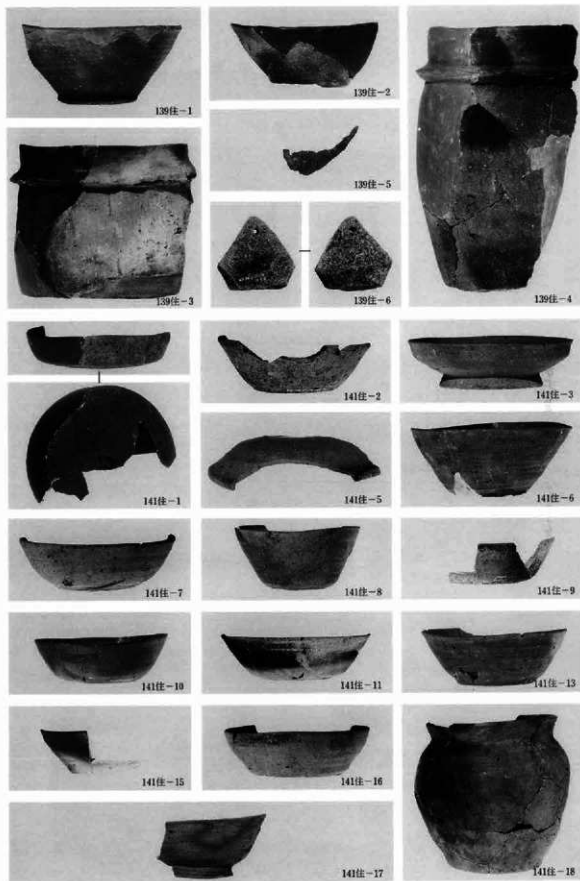
135-136号住居跡出土遺物 (約1:3)



136・137・138号住居跡出土遺物 (約1:3)



139・141号住居跡出土遺物 (約1:3)



141・155・163号住居跡出土遺物 (約1:3)



141住-19



141住-20



141住-21



141住-22



155住-1



163住-1



163住-2



163住-3



163住-4



163住-5

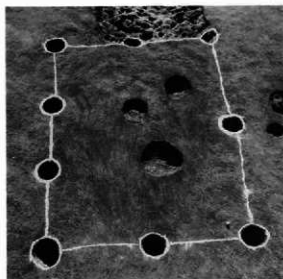


163住-6

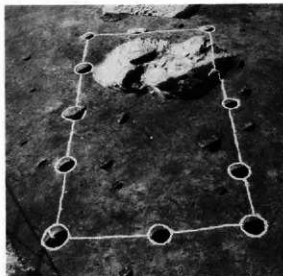


163住-7

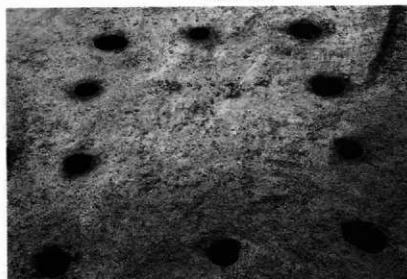
掘立柱建物跡



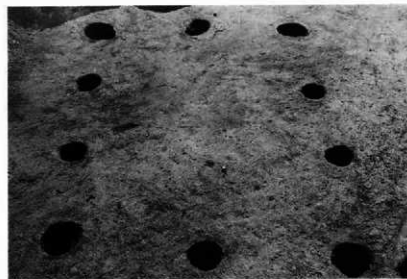
2号掘立 北より



3号掘立 南西より



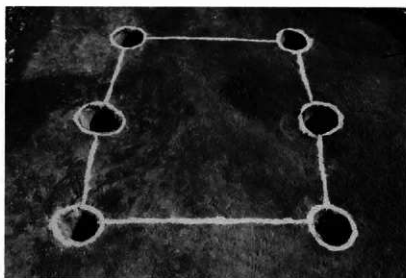
4号掘立 南より



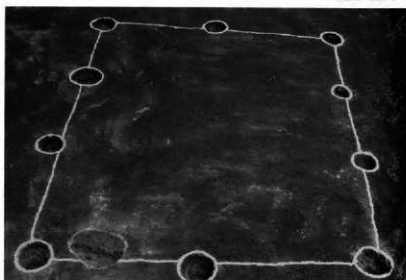
5号掘立 南より



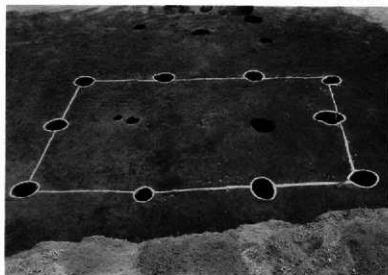
掘立柱建物跡



6号掘立 西より



7号掘立 西より

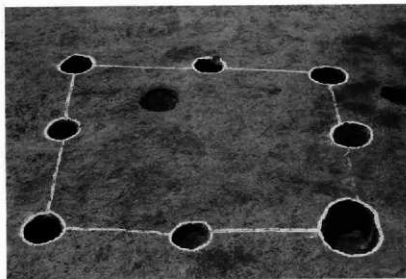


8号掘立 北より

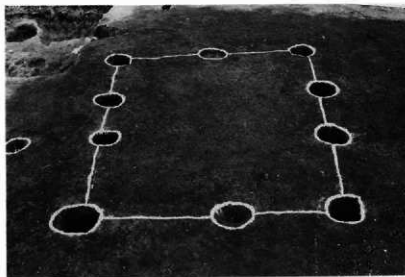


8号掘立出土遺物

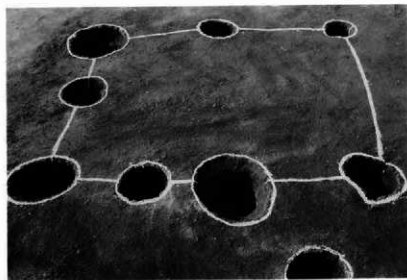
掘立柱建物跡



9号掘立 北より



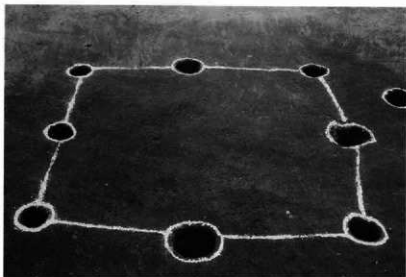
10号掘立 南より



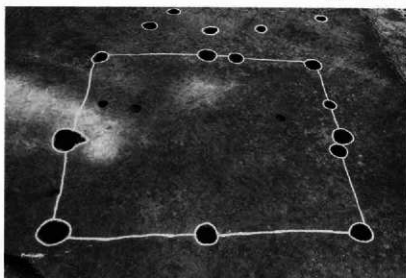
11号掘立 南より



掘立柱建物跡



12号掘立 南より

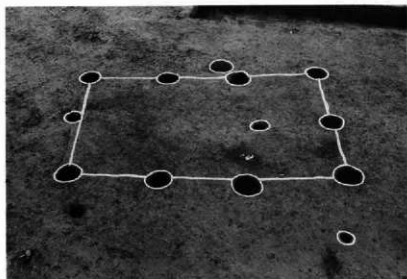


13号掘立 北より

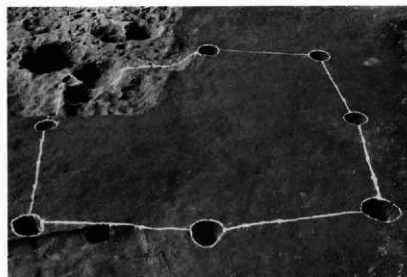


14号掘立 北より

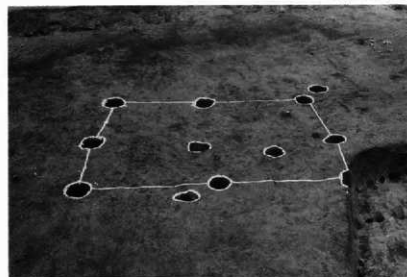




15号掘立 南より



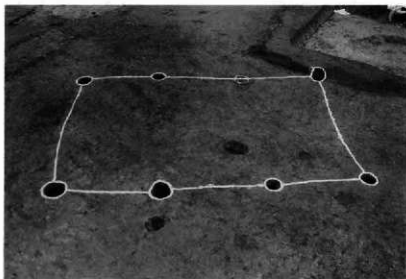
16号掘立 南より



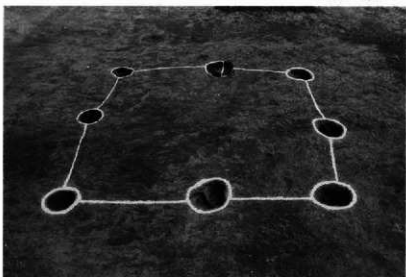
17号掘立 西より



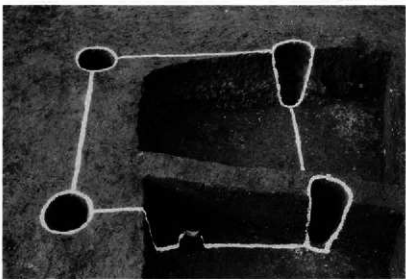
獨立柱建物跡



18号獨立 南西より



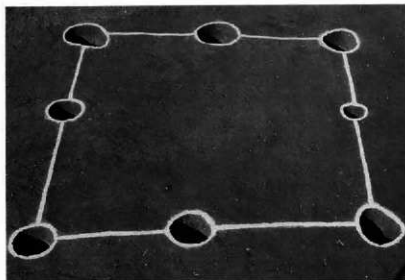
19号獨立 西より



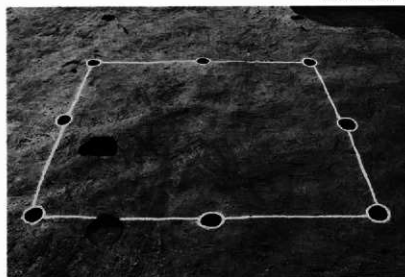
20号獨立 南より



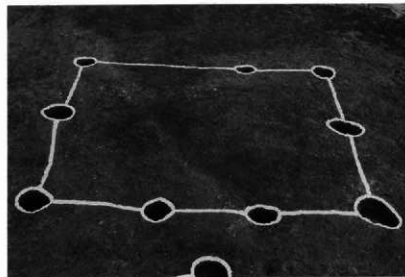
掘立柱建物跡



21号掘立 東より



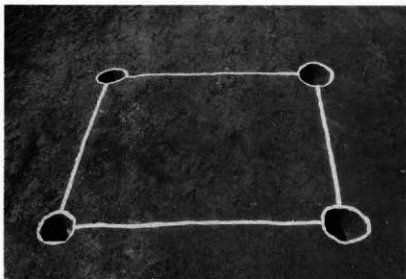
22号掘立 東より



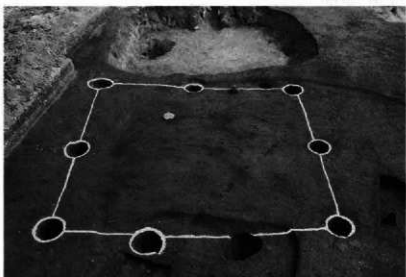
23号掘立 西より



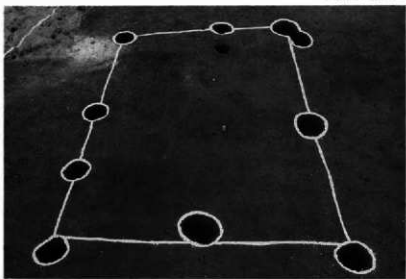
掘立柱建物跡



24号掘立 南より



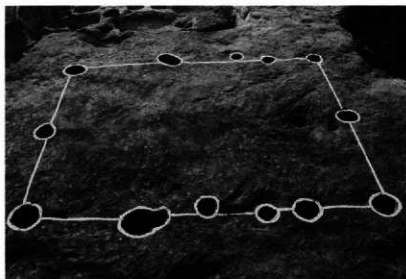
25号掘立 西より



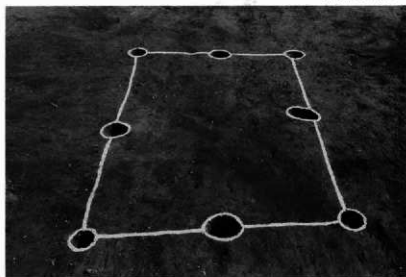
26号掘立 北より



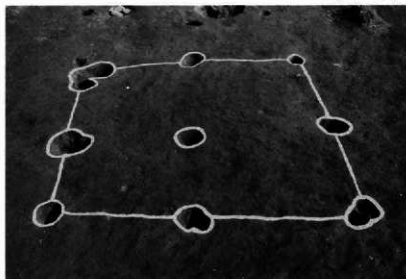
掘立柱建物跡



27号掘立 東より



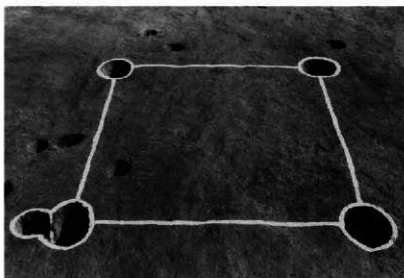
28号掘立 西より



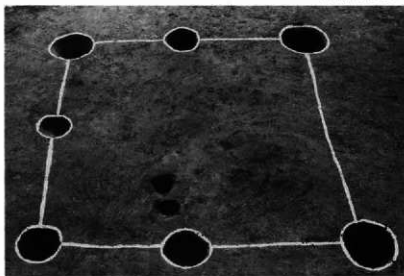
29号掘立 西より



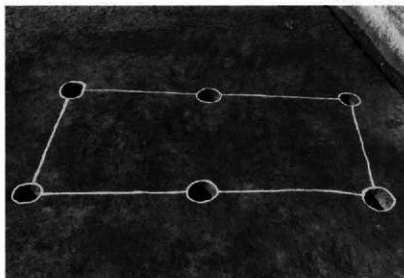
掘立柱建物跡



30号掘立 西より



31号掘立 北より



32号掘立 東より

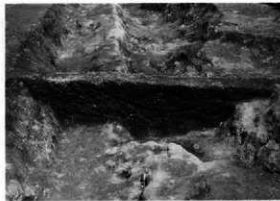




全貌 北より



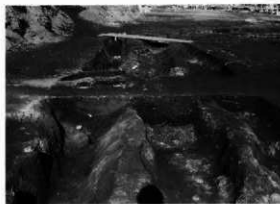
土層断面 A



土層断面 B

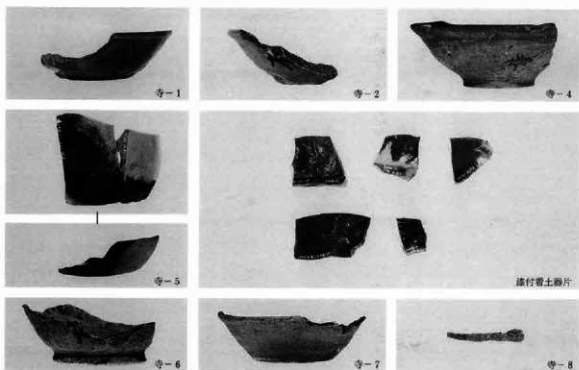


土層断面 C

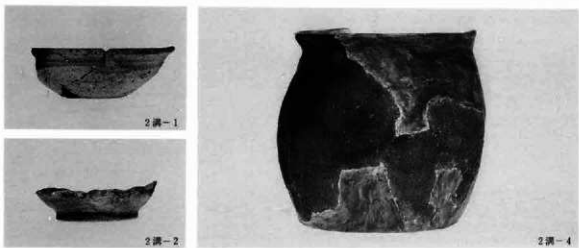


土層断面 D

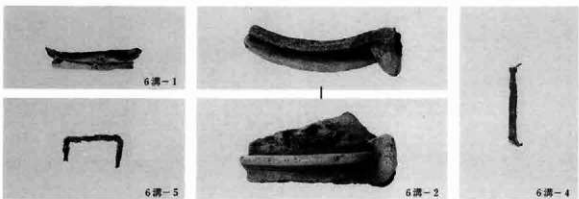
寺院跡出土遺物 (約1:3)



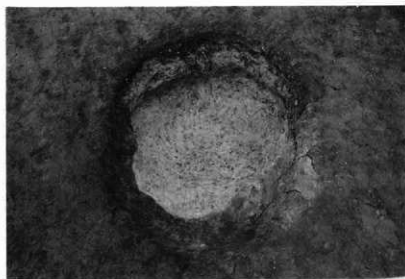
2号溝出土遺物 (約1:3)



6号溝出土遺物 (約1:3)



井戸



1号井戸 東より



1号井戸 土層断面



3号井戸 北より



3号井戸出土遺物

2号井戸



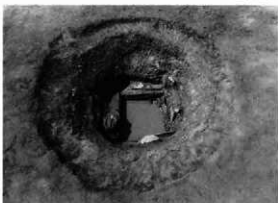
2号井戸・5号溝遺跡 南西より



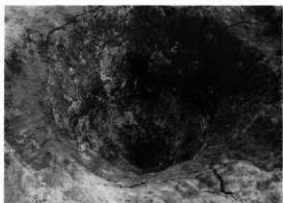
土層断面



木枠組み

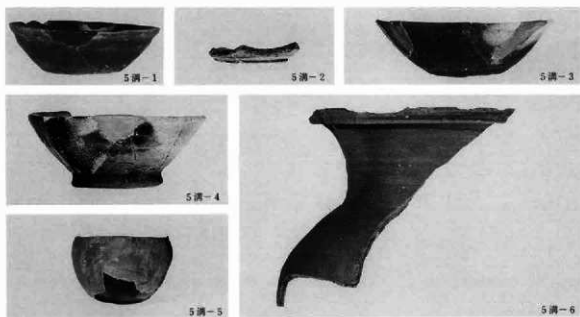


全景

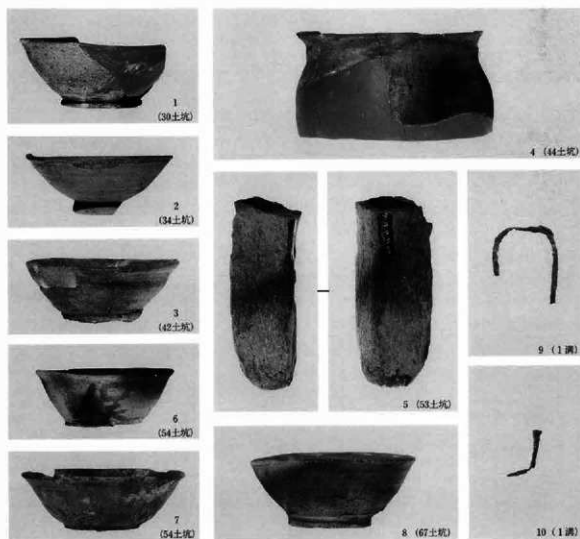


掘り方

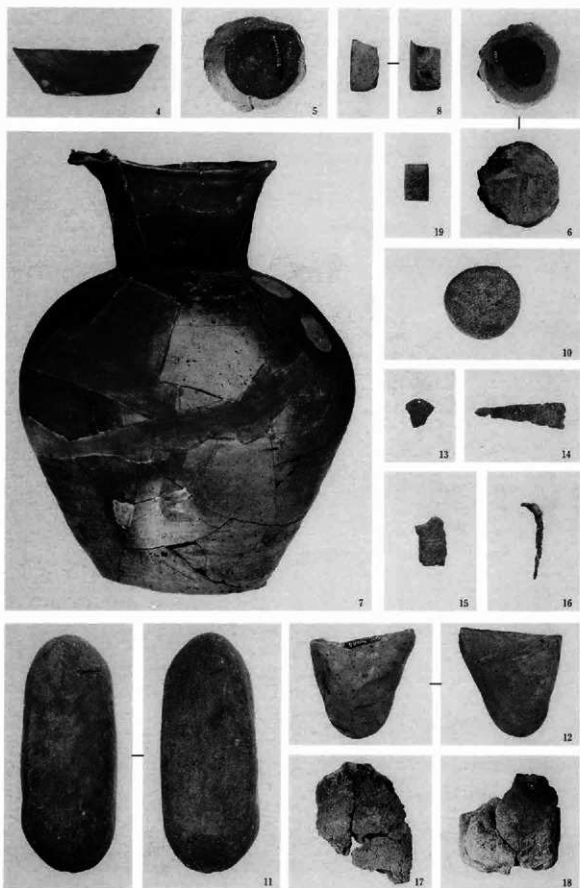
5号溝出土遺物 (約1:3)



土坑・溝出土遺物 (約1:3)

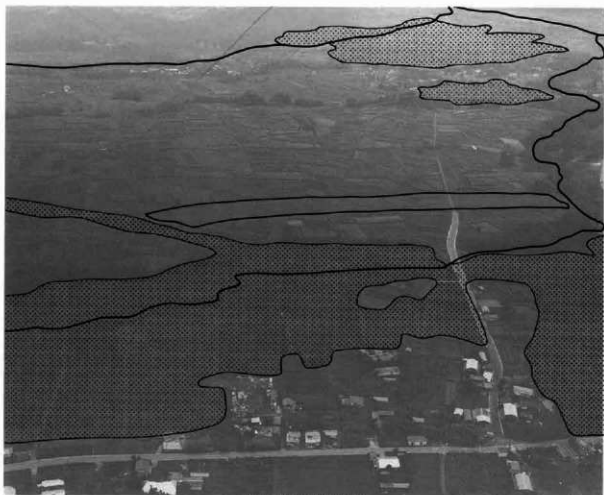


遺構外出土遺物 (約1:3)

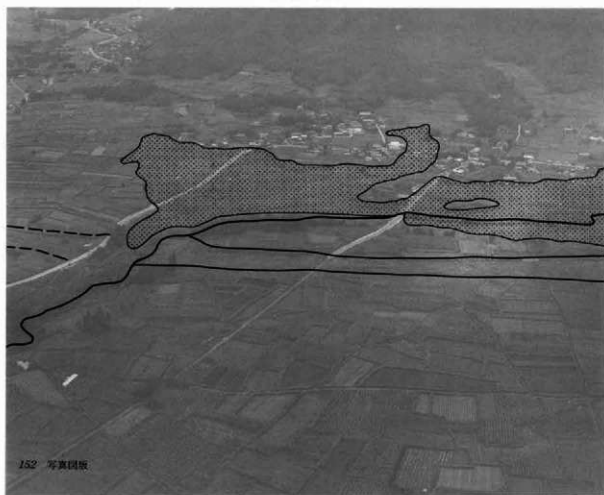




調査前航空写真（東上党より）



調査前航空写真（北上空より）



調査前航空写真（南上空より）

戸神諏訪遺跡

〈奈良・平安時代編〉

—関越自動車道(新潟線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第30集—

平成2年2月20日 印刷

平成2年2月28日 発行

発行／群馬県教育委員会

前橋市大手町1丁目1番1号

電話 (0272) 23-1111

群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北碓村下箱田784番地の2

電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／上毎印刷工業株式会社